難波宮址の研究

第十一

――前期難波宮内裏西方官衙地域の調査――



2000.3

財団法人　大阪市文化財協会

難波宮址の研究

第十一

——前期難波宮内裏西方官衙地域の調査——



2000.3

財団法人 大阪市文化財協会

『難波宮址の研究』第十一　正誤表

ページ	個所	誤	正
凡例	5行目	石山本願時期	石山本願寺期
目次p.ii	21行目	1)、2)が欠落	1)試料と方法…… 207 2)結果…… 208
〃	32行目	兵藤・金子	兵頭・金子
目次p.iii	1行目	1)、2)が欠落	1)試料と方法…… 245 2)結果…… 245
原色図版目次	左8行目	下：同上 蓋石除去後	下：同右蓋石除去後
本文p.8	6行目	[南1992]	[南1992A]
本文p.28	26行目	甕79～88	甕79・80・84～88
本文p.34	Fig.35キャプション	第8a層出土遺物	第8a層出土土器
本文p.44	Fig.45 左下図		SD301蓋石下の断面
本文p.58	14行目	甕283～289	甕283～285・287～289・羽釜286
本文p.63	8行目	堤瓶458	提瓶458
本文p.71	20行目	年□□	年□□[国カ]
本文p.115	Fig.109キャプション	石列1・2に使用された石製品	石列1・2に使用された石製品－1
本文p.169	8行目	1711についての記述が欠落	1711は備前焼小壺
本文p.254	11行目	[南1992]	[南1992B]
本文p.255	Tab.26	6世紀	6世紀前葉～中葉
英文p.iii	38行目	maximum 1 t in weight.	maximum 1.8 t in weight.



調査地から大阪城、ＯＢＰを望む

難波宮址の研究

第十一

――前期難波宮内裏西方官衙地域の調査――



2000.3

財団法人　大阪市文化財協会

序　　文

難波宮跡は大阪市中央区法円坂を中心に広がる宮殿跡です。今を去る46年前、山根徳太郎博士はこの失われた都を求めて最初の鍬を入れられました。その情熱はやがてさまざまな人々に受け継がれ、飛鳥時代・奈良時代の前後二時期にわたる宮殿のすがたが次第に明らかになりつつあります。その成果はこれまで10冊の報告書にまとめられて、絶え間ない調査・研究の道程を伝えていますが、今ここにまた新たな調査報告書を加えることができました。

1961年の後期難波宮大極殿の発見から始まって、近年では、1988年の前期難波宮内裏西方官衙、1993年の前期「朱雀門」と、難波宮では数年ごとに重要な発掘成果が得られています。本書で報告する前期の水利施設の発見もまた、難波宮の謎を解明する大きな手がかりのひとつです。

調査が行われた旧大阪市中央体育館敷地内では、現在、大阪市の新しい博物館施設とＮＨＫ大阪放送会館の新館の建設が急ピッチで進んでいます。地下に難波宮の遺構を守りつつ、現代の大阪における人・文化・情報の大きな舞台をつくろうとするこの試みは、来る2001年に完成し、大阪の誇る歴史遺産である難波宮は新たな世紀を迎えることとなります。本書の刊行はそれに先立つ第一歩として重要な意義をもつでしょう。

今般の発掘調査から報告書の作成・刊行にいたるまで多大なるご理解とご協力をいただきました、日本放送協会（ＮＨＫ）および関係各位に深く感謝の意を表する次第です。

2000年３月

財団法人 大阪市文化財協会

例　　言

一、本書は財団法人大阪市文化財協会が1991年度および96・97年度に大阪市中央区大手前４丁目において実施した、難波宮跡発掘調査(NW91−5次・96−3次・96−29次・97−3次)の報告書である。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、日本放送協会大阪放送局および大阪市教育委員会の負担による。

一、発掘調査は、NW91−5次調査は財団法人大阪市文化財協会企画課長八木久栄(当時)の指揮のもと、森毅(現企画課長代理)・南秀雄(現調査部主幹)が担当した。NW96−3次調査は調査課長永島暉臣慎(現調査部長)の指揮のもと、佐藤隆・古市晃が、NW96−29次調査は森が担当した。NW97−3次調査は調査課長京嶋覚の指揮のもと、佐藤・李陽浩が担当し、小倉徹也がこれを助けた。各調査の面積・期間などは、第Ⅰ章第２節に記した。

一、本書の作成は報告書作成室長代行田中清美の指揮のもと、1999年４月１日～2000年３月31日にかけて行った。執筆は佐藤・京嶋・南・森・小倉・辻美紀・平井和・池田研・伊藤幸司・鳥居信子が分担し、それ以外は下記のように執筆を依頼した。編集は佐藤が行った。木製品の保存処理・金属製品の整理などは伊藤・鳥居が行った。巻末の英文要旨の作成はRobert Condon氏が行い、宮本康治がこれを助けた。

一、第Ⅳ章第１節の石材同定は大阪市立自然史博物館 川端清司氏に(小倉と共同)、第２節のうち脊椎動物遺体の同定は同 樽野博幸氏に、第３節の年輪年代測定は奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏に、第６節の古地磁気年代測定は神戸大学 兵頭政幸・金子雅一両氏にそれぞれ依頼し、併せて報文の執筆をお願いした。第Ⅳ章第４・５節の同定・分析は委託先を本文に明記した。また、付章第１節については大阪市教育委員会 植木久氏に執筆を依頼した。

一、基準点測量とクレーンによる空中写真測量は、NW91−5次調査は朝日航洋株式会社、NW96−3・NW97−3次調査はアジア航測株式会社に委託した。

一、遺構写真は主として担当調査員が撮影し、一部の撮影を徳永圀治氏に委託した。遺物写真の撮影は内田真紀子氏と一部を徳永圀治氏に委託した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡　　例

1．遺構名の表記は、木枠１～４以外について、塀・柵(SA)、竪穴住居・掘立柱建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、柱穴(SP)、泉施設(SG)、その他(SX)の分類記号の後に、本書の通し番号を付した。ただし、『難波宮址の研究』第九(前報告)と同様に、難波宮造営前(６世紀～７世紀前半)の遺構は200番台、前期難波宮は300番台、後期難波宮は400番台、室町時代(石山本願時期)～豊臣期は500～600番台、江戸時代(徳川氏大坂城期)は700番台とし、前報告の遺構と一連のものには同じ番号、新たに検出したものには重複しない番号を付した。

2．水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mと記した。また、挿図中の方位は座標北にはＧＮを入れて示した。座標値の記載のあるものは国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。

3．本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。古墳時代の須恵器(TK209型式まで)：[田辺昭三1966]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会1992]

本 文 目 次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… (京嶋) … 1
　第2節　調査の経過 …… (佐藤) … 3
　　1）NW91－5次調査 …… 3
　　2）NW96－3次調査 …… 3
　　3）NW96－29次調査 …… 4
　　4）NW97－3次調査 …… 4

第Ⅱ章　既往の調査 …… (南) … 7
　　1）5世紀から後期難波宮 …… 7
　　2）石山本願寺期から江戸時代 …… 10

第Ⅲ章　調査の結果 …… 13
　第1節　調査区と層序の概要 …… 13
　　1）調査区の設定 …… (佐藤) … 13
　　2）層序の概要 …… (佐藤・小倉) … 13
　第2節　難波宮造営前の遺構と遺物 …… 20
　　1）遺構 …… (佐藤) … 20
　　2）遺物 …… (佐藤・辻・平井) … 24
　第3節　難波宮期の遺構と遺物 …… (佐藤) … 37
　　1）前期難波宮期の遺構 …… 37
　　2）前期難波宮期の遺物 …… 52
　　3）後期難波宮期の遺物 …… 85

第４節　室町時代の遺構と遺物 ……（佐藤）… 92
１）遺構 …… 92
２）遺物 …… 93
第５節　豊臣期の遺構と遺物 ……（佐藤）… 97
１）遺構 …… 97
２）遺物 …… 103
第６節　江戸時代の遺構と遺物 …… 118
１）遺構 ……（森・佐藤）… 118
２）遺物 ……（佐藤・平井）… 121

第Ⅳ章　出土資料の分析と検討 …… 185
第１節　石組み遺構の石材同定 ……（川端・小倉）… 185
１）調査方法 …… 185
２）観察結果 …… 185
３）それぞれの石材の分布地域 …… 190
４）石材の産地推定 …… 193
５）まとめ …… 195
第２節　動物遺体 …… 196
１）貝類 ……（池田）… 196
２）脊椎動物 ……（樽野）… 199
第３節　前期難波宮水利施設出土木材の年輪年代測定 ……（光谷）… 207
第４節　前期難波宮水利施設出土木材の樹種同定 ……（古代の森研究舎）… 209
１）試料 …… 209
２）方法 …… 209
３）結果 …… 209
第５節　前期難波宮水利施設に係わる古環境分析 ……（古代の森研究舎）… 217
１）弥生時代から前期難波宮の花粉化石群 …… 217
２）珪藻分析 …… 224
３）大型植物化石 …… 228
４）寄生虫卵化石 …… 239
５）「泥炭層」の放射性炭素年代測定結果 …… 241
６）総括：調査地周辺の環境変遷史と生業 …… 242
第６節　前期難波宮水利施設における古地磁気年代測定 ……（兵藤・金子）… 245

第Ⅴ章　遺構と遺物の検討 …… (佐藤)‥247
第１節　前期難波宮の水利施設と内裏西方倉庫群 …… 247
１）水利施設の造営過程 …… 247
２）内裏西方倉庫群との関係 …… 248
３）水利施設の機能 …… 250
第２節　古代難波地域の土器様相とその史的背景 …… 253
１）これまでの編年研究 …… 253
２）土器編年と年代 …… 255
３）土器からみた難波地域の動向 …… 263
４）まとめにかえて …… 265
第３節　調査のまとめ …… 266
１）後期難波宮の遺物２例 …… 266
２）江戸時代の陶磁器・土器 …… 267
３）総括 …… 268

付章　遺構・遺物の保存と活用 ……269
第１節　検出遺構の保存と公開について …… (植木)‥269
１）難波宮跡と大坂城跡の連続一体化構想について …… 270
２）遺構の保存方法について …… 271
３）遺構の公開について …… 271
４）保存遺構と史跡整備個所および博物館内展示との一体化 …… 272
第２節　木製遺物の保存処理 …… (伊藤・鳥居)‥273
１）はじめに …… 273
２）経過と結果 …… 273
３）まとめ …… 274

引用・参考文献 ……276

あとがき・索引

英文目次・要旨

原色図版目次

1　前期難波宮の遺構
　谷と水利施設全景(東から)
2　前期難波宮の遺構
　上：水利施設(東から)
　下：水利施設(南から)
3　前期難波宮の遺構
　上：石組み溝SD301(南東から)
　下：同上 蓋石除去後
4　前期難波宮の遺構
　上：泉施設SG301検出状況(北東から)
　下：泉施設SG301検出状況(北から)
5　層序
　上：4E区北壁断面
　下：4E区南北アゼNo.2東壁断面(北東から)
6　水利施設の地層
　上：石組み溝SD301と谷の横断面(南東から)
　下：泉施設SG301断面(南東から)
7　難波宮造営前～前期難波宮の遺構
　上：2E・3E区検出遺構(西から)
　下：2E・3E区検出遺構(東から)
8　難波宮造営前の土器
9　前期難波宮造営期の土器
10　前期難波宮期の遺物
　上：木簡
　下：祭祀具
11　前期難波宮期の遺物
　上：漆容器
　下：鞴羽口
12　豊臣後期の陶磁器・土器
13　豊臣期の遺物
　上：中国製磁器
　下：金箔押飾瓦
14　江戸時代中期の陶磁器・土器
15　江戸時代の遺物
　上：江戸時代末期の陶磁器・土器
　下：土製玩具

図　版　目　次

1　調査地遠景・旧体育館基礎部分検出遺構
　上：調査地遠景(南から)
　下左：4C・4D区旧体育館基礎部分検出遺構(南から)
　下右：3E・4E区旧体育館基礎部分検出遺構(東から)
2　層序
　上：4E区北壁(南から)
　下：4E区北壁下部(南から)
3　層序
　上：4E区南北アゼNo.2東壁南部(北東から)
　下：4E区南北アゼNo.2東壁北部(東から)
4　層序
　上：谷埋土北東肩部(南東から)
　下：4E区南北アゼNo.1東壁(南東から)
5　地山面検出遺構
　上：1C・1D区調査区全景(上空から)
　下：同調査区北半部(南から)
6　地山面検出遺構
　上：1D・1E区調査区全景(南から)
　下：同調査区北半部(南から)
7　地山面検出遺構
　上：2D区地山面検出遺構(西から)
　下：2C区地山面検出遺構(西から)
8　難波宮造営前の遺構
　上：SB281(南東から)
　中：SB280(南東から)
　下：SB285(北西から)
9　難波宮造営前の遺構
　上：SB287柱穴断面(北東から)
　中：第8b層土器出土状況(南東から)
　下：SD203土器出土状況(東から)
10　前期難波宮の遺構　SD301
　上：SD301検出時(南東から)
　下：SD301(南東から)
11　前期難波宮の遺構　SD301
　上：断割りNo.2断面(東から)
　下：断割りNo.2断面(南から)
12　前期難波宮の遺構　SD301
　上：掘形北東側(東から)
　下：断割りNo.1断面(南から)
13　前期難波宮の遺構　SD301
　上：掘形南西側(南から)
　下：断割りNo.1断面(東から)
14　前期難波宮の遺構　SD301
　上：開口部堆積状況(南東から)
　下：開渠部堆積状況(南東から)

15　前期難波宮の遺構　SD301
上：蓋石撤去前(北西から)
下：蓋石撤去後(北西から)
16　前期難波宮の遺構　SD301
上：蓋石撤去後(北西から)
下：蓋石撤去後　奥(北西から)
17　前期難波宮の遺構　SD301
上：蓋石下堆積状況(南から)
下：蓋石下堆積状況(南西から)
18　前期難波宮の遺構　SG301
上：西外断割り(北から)
中左：北東肩断割り(西から)
中右：南西肩断割り(北から)
下：堆積状況(北西から)
19　前期難波宮の遺構　SG301
上：木枠１掘削時(北西から)
中：木枠１(北から)
下：木枠２(北から)
20　前期難波宮の遺構　SG301周辺
上：木枠３検出時(北から)
中：木枠３(北から)
下：木枠３最下段(東から)
21　前期難波宮の遺構　SG301周辺
上：木枠４(北西から)
中左：SD302(南東から)
中右：SD303(南東から)
下：SX301(南から)
22　前期難波宮の遺構　SB310
上：柱抜取穴検出状況(東から)
下左：柱穴11断面
下右：柱穴４断面
23　前期難波宮の遺構　SB310
上：柱穴５断面
中：柱穴７断面
下：柱穴８断面
24　前期難波宮の遺構　SB301・SA301
上：SB301東端部(東から)
下：SA301(南から)
25　前期難波宮の遺構　SA303
上：SA303(南西から)
下：SA303(南から)
26　前期難波宮の遺構　SB301・SA303
上：SB301(南東隅柱穴断面)
中：SA303(柱穴５断面)
下：SA303(柱穴８断面)
27　前期難波宮の遺構　SA303
上：SA303(柱穴９断面)
中：SA303(柱穴10断面)
下：SA303(柱穴14断面)
28　室町時代～豊臣期の遺構
上：SD530(南から)
下：石列１・２とSF501・502(南東から)
29　豊臣期の遺構　屋敷地の区画
上：石列１とSF501(東から)
下：石列２とSF502(北から)
30　豊臣期の遺構
上：SD540(西から)
下：SA521とSD541(南から)
31　豊臣期の遺構
上：石列１・SF501断面(東から)
中：４Ｄ・４Ｅ区南北アゼ(東から)
下：SD542(南から)
32　豊臣期の遺構
上：SE541(北から)
中：SP501(南から)
下：SK569(北から)
33　江戸時代の遺構
上：１Ｄ・１Ｅ区調査区全景(南から)
下：１Ｃ・１Ｄ区調査区南半部第１面(南から)
34　江戸時代の遺構
上：SD730A(南から)
中：SK732(南西から)
下：SK797断面(西から)
35　江戸時代の遺構
上：SK801断面(東から)
中：SK804断面(北から)
下：SK790(南東から)
36　難波宮造営前の土器　SD203・第8b層他
37　難波宮造営前の土器・石製品　第8b層
38　難波宮造営前の土器　第8b層
39　難波宮造営前の土器　第8b層
40　難波宮造営前の土器　第8b層
41　難波宮造営前の土器　第8a層
42　難波宮造営前の瓦
43　土錘
44　前期難波宮期の土器　第7c層
45　前期難波宮期の土器　第7c層
46　前期難波宮期の土器　第7c層
47　前期難波宮期の土器　第7b層他
48　前期難波宮期の土器　第7a層
49　前期難波宮期の土器　第7a層
50　前期難波宮期の土器　第7a層
51　難波宮造営前～前期難波宮期の土製品・石製品・金属製品
52　前期難波宮期の木製品　木簡・祭祀具他
53　前期難波宮期の木製品　祭祀具他
54　前期難波宮期の木製品　履物・容器他
55　前期難波宮期の木製品　杭・部材
56　前期難波宮期の木製品　部材
57　前期難波宮期の木製品　部材
58　前期難波宮期の木製品　部材
59　後期難波宮期の軒瓦
60　後期難波宮期の軒瓦・鴟尾
61　後期難波宮期の瓦・塼・金属製品

62　室町時代の陶磁器・土器　SD530
63　室町時代の陶磁器・土器・瓦・木製品
64　豊臣期の陶磁器・土器　SK569
65　豊臣期の陶磁器・土器　SK569
66　豊臣期の軒丸瓦・鳥衾瓦
67　豊臣期の軒丸瓦
68　豊臣期の軒平瓦
69　豊臣期の軒平瓦・棟込瓦・飾瓦・鯱瓦
70　室町時代～豊臣期の銭貨・石製品
71　室町時代～豊臣期の石製品
72　江戸時代の陶磁器・土器　SK797
73　江戸時代の陶磁器・土器　SK797
74　江戸時代の陶磁器・土器　SK797
75　江戸時代の陶磁器・土器　SK794
76　江戸時代の陶磁器・土器　SK799
77　江戸時代の陶磁器・土器　SK802
78　江戸時代の陶磁器・土器　SK798
79　江戸時代の陶磁器・土器　SK798
80　江戸時代の陶磁器・土器　SK801
81　江戸時代の陶磁器・土器　SK801
82　江戸時代の陶磁器・土器　SK801
83　江戸時代の陶磁器・土器　SK801
84　江戸時代の陶磁器・土器　SK801
85　江戸時代の陶磁器・土器　SK809
86　江戸時代の陶磁器・土器　SK790
87　江戸時代の陶磁器・土器　SK790
88　江戸時代の陶磁器・土器　SK790
89　江戸時代の陶磁器・土器　SK790
90　江戸時代の土製玩具
91　江戸時代の土製玩具
92　江戸時代の瓦
93　江戸時代の木製品・骨製品・石製品
94　江戸時代の金属製品・鋳造関係遺物
95　動物遺体　貝
96　動物遺体　脊椎動物
97　木材の顕微鏡写真
98　木材の顕微鏡写真
99　木材の顕微鏡写真
100　木材の顕微鏡写真
101　木材の顕微鏡写真
102　花粉化石
103　花粉化石・寄生虫化石
104　珪藻化石
105　珪藻化石
106　大型植物化石
107　大型植物化石
108　大型植物化石

挿　図　・　写　真　目　次

Fig.1　調査地の位置 …… 1
Fig.2　調査区の配置 …… 2
Fig.3　調査風景 …… 3
Fig.4　暗渠蓋石の撤去 …… 5
Fig.5　調査の最終段階 …… 6
Fig.6　復元された5世紀の倉庫 …… 7
Fig.7　古代の遺構配置 …… 8
Fig.8　「並び倉」SB301検出状況 …… 9
Fig.9　「並び倉」想像図 …… 9
Fig.10　豊臣期の遺構配置 …… 11
Fig.11　豊臣期の遺構検出状況 …… 12
Fig.12　墨書木製品 …… 12
Fig.13　地層断面の模式図 …… 15
Fig.14　3E・4E区北壁断面図 …… 17
Fig.15　1D区東西アゼ南壁断面図 …… 18
Fig.16　4D・4E区南北アゼ東壁断面図 …… 18
Fig.17　SB280・281平面図 …… 21
Fig.18　SB282・SD203平面図 …… 21
Fig.19　SB246・283～285平面図 …… 22
Fig.20　SB286・287平面図 …… 23
Fig.21　SB288平面図 …… 23
Fig.22　SD203断面図 …… 24
Fig.23　弥生時代の土器 …… 24
Fig.24　縄文～弥生時代の石器 …… 25
Fig.25　縄文～弥生時代の石器 …… 25
Fig.26　石器の計測 …… 25
Fig.27　掘立柱建物出土土器 …… 26
Fig.28　SK221・SD203出土土器 …… 27
Fig.29　SK250出土土器 …… 28
Fig.30　第8b層出土土器－1 …… 28
Fig.31　第8b層出土土器－2 …… 29
Fig.32　第8b層出土土器－3 …… 31
Fig.33　第8b層出土土器－4 …… 32
Fig.34　第8b層出土石製垂飾 …… 33
Fig.35　第8a層出土土器 …… 34
Fig.36　新羅陶質土器 …… 35
Fig.37　ミニチュア壺 …… 35
Fig.38　難波宮造営前の瓦 …… 36
Fig.39　3E・4E区の谷と水利施設 …… 38
Fig.40　谷とSD301断面図 …… 39
Fig.41　SD301・SG301石組み平・立面図(蓋石除去前) …… 40
Fig.42　SD301・SG301石組み平・立面図(蓋石除去後) …… 41

Fig.43 SG301肩部の杭 …… 42
Fig.44 木枠1・2立面図 …… 43
Fig.45 SD301・SG301断面図 …… 44
Fig.46 SG301断面図 …… 45
Fig.47 SB310断面図 …… 46
Fig.48 SB301平・断面図 …… 48
Fig.49 SA301・302平面図 …… 49
Fig.50 SA303平面図 …… 50
Fig.51 SA303断面図 …… 51
Fig.52 第7c層出土土器－1 …… 53
Fig.53 第7c層出土土器－2 …… 54
Fig.54 第7c層出土土器－3 …… 55
Fig.55 第7c層出土土器－4 …… 56
Fig.56 第7c層出土土器－5 …… 57
Fig.57 第7b層出土土器－1 …… 59
Fig.58 第7b層出土土器－2 …… 60
Fig.59 第7a層出土土器－1 …… 61
Fig.60 第7a層出土土器－2 …… 62
Fig.61 第7a層出土土器－3 …… 64
Fig.62 第7a層出土土器－4 …… 65
Fig.63 第7a層出土土器－5 …… 66
Fig.64 第6層出土土器 …… 67
Fig.65 第6・7層出土漆容器 …… 68
Fig.66 SA303出土土器 …… 68
Fig.67 土製品 …… 69
Fig.68 木簡 …… 72
Fig.69 木製祭祀具 …… 73
Fig.70 木製祭祀具(斎串) …… 75
Fig.71 木製道具類 …… 76
Fig.72 木製道具類・容器 …… 77
Fig.73 木製容器 …… 78
Fig.74 部材－1 …… 79
Fig.75 部材－2 …… 80
Fig.76 部材－3 …… 81
Fig.77 部材－4 …… 82
Fig.78 部材－5 …… 83
Fig.79 石製品 …… 84
Fig.80 鉄製釣針 …… 85
Fig.81 第5c・5b層など出土土器 …… 86
Fig.82 SP401土器出土状況 …… 87
Fig.83 SP401出土土器 …… 87
Fig.84 後期難波宮の瓦・塼－1 …… 89
Fig.85 後期難波宮の瓦・塼－2 …… 90
Fig.86 銅製饅頭金物 …… 91
Fig.87 SD530平・断面図 …… 92
Fig.88 SD530出土陶磁器・土器 …… 94
Fig.89 室町時代の軒瓦 …… 95
Fig.90 SD530出土木製品 …… 96
Fig.91 石列1・SF501断面図 …… 98
Fig.92 SD542断面図 …… 98
Fig.93 2E・3E・4D・4E豊臣期遺構平面図 …… 99
Fig.94 4D・4E区平面図 …… 100
Fig.95 1C～1E区平面図 …… 101
Fig.96 SE541断面図 …… 102
Fig.97 SP501断面図 …… 103
Fig.98 SK569出土陶磁器・土器－1 …… 104
Fig.99 SK569出土陶磁器・土器－2 …… 105
Fig.100 SK569出土陶磁器・土器－3 …… 106
Fig.101 SE540出土陶磁器・土器 …… 107
Fig.102 SK653出土陶磁器・土器 …… 108
Fig.103 軒丸瓦－1 …… 110
Fig.104 軒丸瓦－2 …… 111
Fig.105 軒平瓦－1 …… 112
Fig.106 軒平瓦－2 …… 113
Fig.107 飾瓦・棟込瓦 …… 114
Fig.108 豊臣期の硯・砥石 …… 114
Fig.109 石列1・2に使用された石製品－1 …… 115
Fig.110 石列1・2に使用された石製品－2 …… 117
Fig.111 1C～1E区平面図(江戸時代) …… 119
Fig.112 1D区調査区北壁断面図 …… 120
Fig.113 SK809平面図 …… 121
Fig.114 SK797出土陶磁器・土器－1 …… 122
Fig.115 SK797出土陶磁器・土器－2 …… 123
Fig.116 SK797出土陶磁器・土器－3 …… 124
Fig.117 SK797出土陶磁器・土器－4 …… 125
Fig.118 SK797出土陶磁器・土器－5 …… 126
Fig.119 SK794出土陶磁器・土器－1 …… 127
Fig.120 SK794出土陶磁器・土器－2 …… 128
Fig.121 SK799出土陶磁器・土器－1 …… 129
Fig.122 SK799出土陶磁器・土器－2 …… 130
Fig.123 SK802出土陶磁器・土器－1 …… 132
Fig.124 SK802出土陶磁器・土器－2 …… 133
Fig.125 SK802出土陶磁器・土器－3 …… 134
Fig.126 SK798出土陶磁器・土器－1 …… 135
Fig.127 SK798出土陶磁器・土器－2 …… 136
Fig.128 SK798出土陶磁器・土器－3 …… 137
Fig.129 SK798出土陶磁器・土器－4 …… 138
Fig.130 SK798出土陶磁器・土器－5 …… 139
Fig.131 SK798出土陶磁器・土器－6 …… 140
Fig.132 SK801出土陶磁器・土器－1 …… 141
Fig.133 SK801出土陶磁器・土器－2 …… 143
Fig.134 SK801出土陶磁器・土器－3 …… 144
Fig.135 SK801出土陶磁器・土器－4 …… 145
Fig.136 SK801出土陶磁器・土器－5 …… 146
Fig.137 SK801出土陶磁器・土器－6 …… 147
Fig.138 SK801出土陶磁器・土器－7 …… 148
Fig.139 SK801出土陶磁器・土器－8 …… 149
Fig.140 SK801出土陶磁器・土器－9 …… 150
Fig.141 SK801出土陶磁器・土器－10 …… 151
Fig.142 SK801出土陶磁器・土器－11 …… 152
Fig.143 SK801出土陶磁器・土器－12 …… 153
Fig.144 SK801出土陶磁器・土器－13 …… 154
Fig.145 SK809出土陶磁器・土器－1 …… 156

Fig.146 SK809出土陶磁器・土器－2 …… 157
Fig.147 SK809出土陶磁器・土器－3 …… 158
Fig.148 SK790出土陶磁器・土器－1 …… 160
Fig.149 SK790出土陶磁器・土器－2 …… 161
Fig.150 SK790出土陶磁器・土器－3 …… 162
Fig.151 SK790出土陶磁器・土器－4 …… 163
Fig.152 SK790出土陶磁器・土器－5 …… 164
Fig.153 SK790出土陶磁器・土器－6 …… 165
Fig.154 SK790出土陶磁器・土器－7 …… 166
Fig.155 SK790出土陶磁器・土器－8 …… 167
Fig.156 SK790出土陶磁器・土器－9 …… 168
Fig.157 計測値凡例 …… 170
Fig.158 江戸時代の瓦 …… 181
Fig.159 木製品(下駄) …… 182
Fig.160 江戸時代の石製品 …… 183
Fig.161 水利施設の石組み …… 186
Fig.162 SD301とSG301の岩石の構成 …… 189
Fig.163 近畿地方内帯の白亜紀～古第三期の火成岩類の分布と放射年代 …… 190
Fig.164 近畿地方領家帯の地質図および変成分帯図 … 191
Fig.165 近畿地方の地質構造区分 …… 191
Fig.166 ４Ｅ区谷南北アゼNo.２東壁断面図 …… 197
Fig.167 No.１の断面 …… 207
Fig.168 暦年標準パターングラフ(下)とNo.１・２の年輪パターングラフ …… 207
Fig.169 各遺構における微化石分析層準の灼熱減量と泥含有量 …… 217
Fig.170 各遺構における主要花粉変遷図 …… 219
Fig.171 各遺構における花粉量、炭片量および炭片量比率 …… 221
Fig.172 産出した珪藻化石 …… 227
Fig.173 泉施設SG301の主要な大型植物化石変遷図 …… 234
Fig.174 地磁気永年変化による年代変化 …… 246
Fig.175 水利施設の造営過程 …… 247
Fig.176 SG301に溜った湧き水 …… 248
Fig.177 太倉の倉庫群 …… 249
Fig.178 水利施設と周辺の調査結果 …… 250
Fig.179 古代難波地域の土器編年 …… 256・257
Fig.180 太平寺廃寺出土鴟尾復元図 …… 266
Fig.181 難波宮跡出土鴟尾片 …… 266
Fig.182 難波宮跡とＮＨＫ・新博物館 …… 269
Fig.183 アトリウム下部保存遺構のギャラリー … 271
Fig.184 新博物館から難波宮跡を望む …… 272
Fig.185 含浸処理 …… 274
Fig.186 取上げ・洗浄 …… 274
Fig.187 固化 …… 274
Fig.188 乾燥 …… 274
Fig.189 前期難波宮の遺構配置 …… 275

表 目 次

Tab.1 調査地の層序 …… 15
Tab.2 石器計測表 …… 25
Tab.3 土錘計測表 …… 70
Tab.4 軒瓦の出土点数 …… 109
Tab.5 土製玩具属性表(軟質施釉) …… 170
Tab.6 土製玩具属性表(軟質施釉以外) … 172・173
Tab.7 調査地出土の土製玩具の種類と形態 …… 178
Tab.8 土人形の形態と縁起 …… 179
Tab.9 出土石材一覧 …… 187・188
Tab.10 出土貝類一覧 …… 196
Tab.11 第7c層出土貝類 …… 197
Tab.12 第7c層・上津島遺跡出土セタシジミの計測値 …… 197
Tab.13 江戸時代遺構出土貝類種名および個体数 … 198
Tab.14 和名と学名との対応 …… 200
Tab.15 出土木材の樹種 …… 214
Tab.16 出土炭化材の樹種 …… 215
Tab.17 出土木材の種類構成 …… 215
Tab.18 花粉化石の組成表 …… 218・219
Tab.19 環境指標種群と生育環境の特徴 …… 225
Tab.20 産出した珪藻化石 …… 226
Tab.21 大型植物化石 …… 230～233
Tab.22 江戸時代後半の大型植物化石 …… 236
Tab.23 寄生虫卵化石 …… 240
Tab.24 AMS法による放射性炭素年代測定結果 … 241
Tab.25 難波宮跡SG301堆積物の平均古地磁気方位 …… 245
Tab.26 時期区分と標識資料 …… 255
Tab.27 土器編年と年代の定点 …… 262

付 図 目 次

付図 本調査地における古代の遺構

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

旧大阪市中央体育館敷地内では、1975年の難波宮跡(NW)69次調査以来、５回にわたり小規模の発掘調査がさまざまな契機のもとに実施されてきた。その後、1985年３月に大阪城公園と難波宮跡公園の連続一体化構想が発表されたのを契機に、大阪市中央体育館建替整備とＮＨＫ大阪放送会館移転整備の計画が立案され、上町筋沿いの緑地部分を除く新体育館および新放送会館建設予定地部分の約20,000㎡について発掘調査が必要であると判断された。この発掘調査は、大阪市教育委員会とＮＨＫを委託者として1987年７月から開始され、1989年度までの３ヶ年にわたって実施された。その結果、５世紀の大型倉庫群や前期難波宮の「並び倉」をはじめとする倉庫群などが発掘され、1992年６月にこれらの発掘調査の成果を『難波宮址の研究 第九』にまとめて刊行した。

一方、発掘調査終了後の1991年２月、大阪市は、中央体育館の当地での建替えを断念するとともに、ＮＨＫ新放送会館を敷地北側に高層複合ビルを建設して移転すること、５世紀の大型建物群や前期難波宮「並び倉」の完全保存と他の遺構の一部をピロティー方式で保存し、これらの遺構を歴史的遺産として活用するための(仮称)考古資料センターを同じビル内に設置することを発表した。しかし、1994年９月には、高層複合ビルの計画を見直し、ＮＨＫ新放送会館ビルに隣接して(仮称)考古資料センターと新博物館が同居する別のビルを建設するという現在の計画に変更されることになった。

こうした事業計画の変更に伴い、建設する建物の規模・構造や位置も変更されたため、敷地北半部に残っていた未調査地についても新たに発掘調査を要することとなり、1991年度(NW91−5次)と1996年度(NW96−3次)に敷地東側にある緑地部分の北半部を対象とする発掘調査を実施した。また、1996年度には体育館の上屋



Fig.1　調査地の位置

が解体され、引き続き基礎撤去工事に伴う発掘調査(NW96−29次)を実施した。

つづく1997年度には、ＮＨＫ新放送会館および(仮称)大阪市立新博物館・考古資料センターの建設工事が着工されたが、これに先立ち、体育館が解体されるまで着手できなかった敷地北辺部と体育館周辺に残っていた若干の未調査部分について最後の発掘調査を実施することとなった。また、すでに発掘調査を終了している部分においても、破壊を余儀なくされる遺構に対する補足的な記録作業を要することから、必要な範囲の再発掘を併せて行うとともに、1996年度の体育館基礎部の調査では調査範囲と期間に制約されて充分に調査できなかった北西部の谷状の落込みについても、改めて調査する必要があると判断された(NW97−3次)。

こうして1997年度の発掘調査は総面積で3,800㎡あまりを対象とすることになったが、このうち新規に発掘調査を行う部分は約1,700㎡ほどであった。また、この調査では体育館北西部の谷状の落込み下から前期難波宮に伴うとみられる泉施設や石組み溝という予期せぬ重要遺構の発見があり、慎重な掘削と多くの記録作業を要すると判断されたため、現場調査の期限を当初の10月末から１月末まで延期する旨の契約変更を行った。

現場調査期間の延長に伴い、出土遺物や記録などの整理作業に要する期間が年度内では充分にとれないことになったため、ＮＨＫ・大阪市教育委員会・大阪市文化財協会で協議の上、1998年６月から11月にかけて整理作業を実施し、その後1999年度に発掘調査報告書の作成を行うこととなった。

(京嶋)

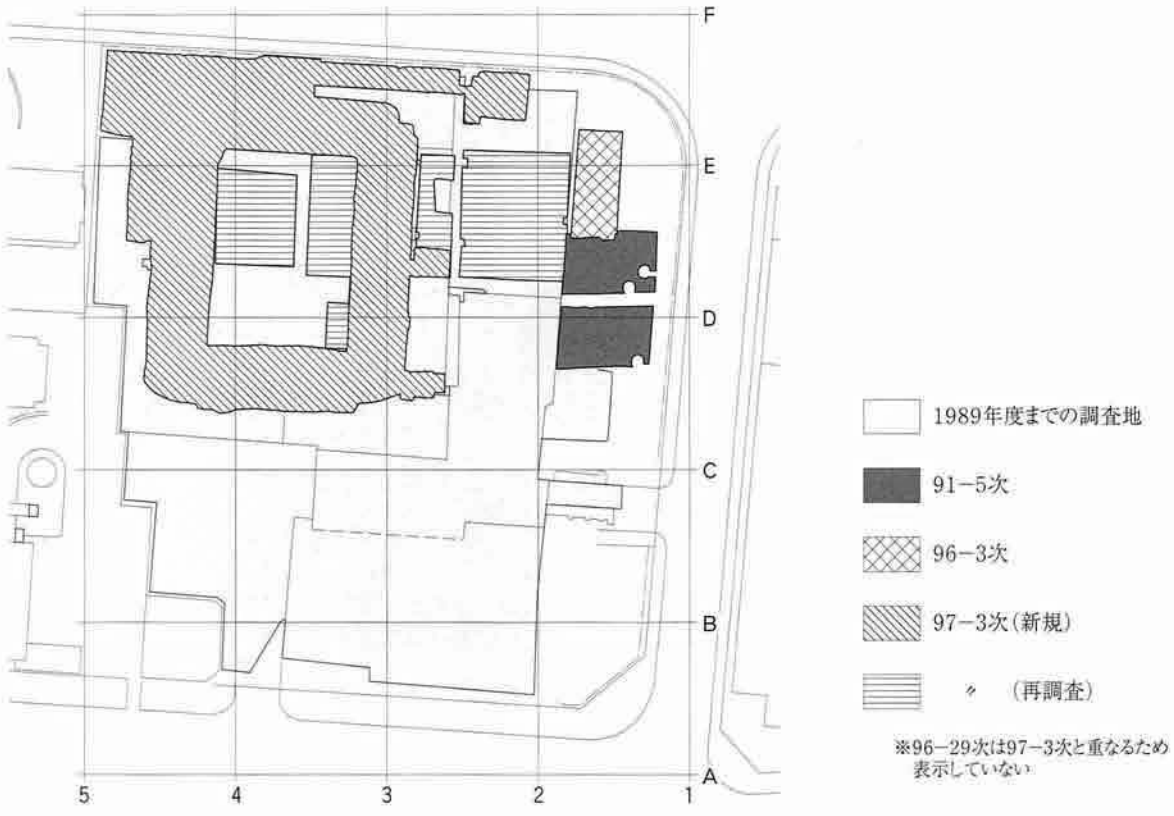


Fig. 2　調査区の配置

第２節　調査の経過

１）NW91−5次調査(Fig.3)

調査区は旧大阪市中央体育館敷地(註１)の北東部、緑地帯として未調査で残っていた部分に当り、西は既調査部分(NW88−1次調査区)に接し、東は上町筋に面している(１Ｃ・１Ｄ区、Fig.２)。調査面積は約700㎡である。調査範囲は幅５ｍの未調査部分を残して北と南に分かれていたため、北区・南区と呼んで記述する。

調査は1991年６月１日に開始し、近現代の客土を重機により掘削した。北区・南区とも東半部は地下げによって急激に東へ落ち込んでおり、南区は西半部にも江戸時代の大きな土取り穴が存在した。遺構検出と掘削はまずそれらの埋め土の上面で行い、調査区の範囲内で江戸時代前期以降に段差のある３面の屋敷地が形成されていることが確認された。適宜、実測・写真撮影を行いながら遺構を掘上げた後、地下げ部分・土取り穴の埋土を掘削してその下面の遺構を調査した。土量が多く出る遺構掘削については一部重機を使用した。北区では西半部の地山が高く残った部分で難波宮造営前の掘立柱建物や土壙、豊臣後期の土壙が検出された。

北区の西半部は地山面、東半部は江戸時代の客土層の上面で、また南区は地山面という状況で、８月５日に全景写真を撮影して８日には空中写真測量を行った。明けて９・10日にはこれらの成果を公表するため、現地公開を催した。その後、北区東半部を地山面まで掘削し、遺構の調査を行った。現場作業は22日に終了した。



Fig.３　調査風景

２）NW96−3次調査

調査区は旧大阪市中央体育館敷地の北東部の１Ｄ・１Ｅ区に位置する。NW88−1次調査区の東、NW91−5次調査区の北にそれぞれ隣接する約370㎡の範囲である。本調査区では、全面で難波宮造営前の掘立柱建物などの遺構が検出されることが予想され、北端では前期難波宮の「並び倉」の第４倉が存在することがわかっていた。その南に西の列と同様に倉庫群が南北に並ぶかどうかを確認すること、また豊臣期や江戸時代の遺構についても周辺の調査成果に連続して分布状況を知ることも今回の調査の主たる目的であった。

調査は1996年５月７日に開始した。まず重機により現代の客土層およびNW111次調査の埋戻し土を掘削した。

調査区西半部では地表下0.4～0.5mで中世～豊臣期と考えられる遺物包含層(調査地北西部の第3～5層に対応する)が検出され、東半部では同様のレベルで文久3(1863)年のものと考えられる焼土層(第2a層)が見つかった。この面では旧日本軍のものと思われる石を敷いた建物基礎など近現代の遺構が見られた。

5月24日からは再び重機を用いて文久3年の焼土と考えられる地層を掘削し(一部は資料採取用に手掘り)、続いて人力によって、西半部では遺物包含層(第3～5層)の上面で検出された江戸時代の遺構の掘削を行った。調査区の北東部から東半部は近世段階での地下げのために急激に深くなっており、その高低差は2.5mほどである。掘削の途中には遺構面が1～2面確認できたが、多くの部分がNW111次調査によってすでに失われており、いくつかの廃棄土壙や性格不明の石列、瓦敷きがあるのみであった。この部分の掘削による土量は多く、また梅雨の天候にも泣かされ、江戸時代の遺構掘削を終えて全景写真が撮影できたのは6月20日であった。

その後、西半部は遺物包含層(第3～5層)を掘削し、東半部は落込み底部の江戸時代盛土層を掘削して地山面を検出する作業に入った。当然ながら古代の遺構面が残っているのは西半部のみという状況であった。残っていた地山面では当初の推定どおり、前期難波宮の「並び倉」の柱穴の続きと多くの難波宮造営前の柱穴が検出された。7月11日にはこれらの遺構の全景写真の撮影とクレーンによる空中写真測量を行った。13日には調査成果を公表するために現地説明会を行い、200名以上の参加者があった。15日からは難波宮造営前の柱穴の断割りおよび全掘を行い、それらを終えたのち、17日から埋戻しを行い、23日の事務所建物撤去をもって、すべての現場作業を終了した。

3）NW96－29次調査

NW96－3次調査ののち、旧大阪市中央体育館建物および基礎の撤去工事が行われた。本調査では1997年2月28日から、基礎を撤去した部分について遺構の残存状況を確認することを目的として開始した。調査面積は約2,950㎡であった。地山面は建物基礎によって深く削平されており、古代の遺構は南西隅の難波宮造営前と考えられる柱穴と北西部の谷を除いて失われていた(図版1－下)。他には近世の井戸が数基残っているばかりであった。北西の谷は、地層の確認のために若干の掘削を行ったが、旧建物の基礎杭が林立しており、谷の中心部では地山まで到達しなかった。谷の肩部付近では7世紀の土器が良好な状態で出土した。調査は3月31日に終了した。埋戻しは次年度の本格的な調査に備えて行わなかった。

4）NW97－3次調査(Fig.4・5)

これまでの調査では諸般の事情からその合間に若干の未調査個所が残っており、その部分の遺構の状況を明らかにし、記録する必要があった。すでに調査が行われた部分においても、古代の柱穴の大半が断割り・全掘をされないままに、いったん現状保存されていたが、この敷地におけるＮＨＫの新放送会館と大阪市の新博物館施設の建設計画が具体化するにあたって、保存が困難な個所の追加調査が必要となった。また、NW96－29次調査では旧体育館基礎部分の遺構の有無を確認したが、写真・

実測などの記録は充分ではなく、北西部で見つかった谷の掘削もまだかなりの部分を残していた。

以上のような状況を受けて、旧大阪市中央体育館敷地内における最後の発掘調査を行うこととなった。総面積は再調査部分を合せて約4,000㎡であった。

調査は５月６日に開始し、排土の置場などの関係から、調査区を分割して掘削と記録を行い、順次埋戻しを行った。調査区北縁部には植栽が残っており、北西部の谷は、当初は可能な限り地山まで掘削してから埋戻し、その後植栽の移設を行う予定であったが、旧建物の基礎杭が林立しており、また植栽の部分が崩壊する危険もあったため、ひとまず谷を埋戻し、基礎杭の撤去と植栽の移設を行ったのち、あらためて調査範囲を敷地の端まで拡げて掘削することにした。それ以外の旧建物基礎の部分はこれらの作業の必要から写真撮影・実測を行ったのち、ただちに埋戻した。北縁部で基礎杭撤去・植栽移設の作業が行われていた６月中旬から７月下旬までの間は、既調査部分の柱穴調査および２Ｃ・２Ｄ区の新規個所の調査をおもに行った。新たに調査した部分ではこれまでと同様に空中からの写真測量を行った。写真測量は後述する谷の石組み遺構を含めて４回行った。

７月24日からあらためて北縁部の調査を再開し、表土の重機掘削を開始した。敷地北辺のほぼ中央にあった本町通に降りるための階段もこのときに撤去した。重機掘削は江戸時代の地層までとし、豊臣期と考えられる遺構面から調査に入った。続いて調査地の西端４Ｄ・４Ｅ区の調査にかかったのは８月27日からである。その結果、調査地の北西隅には豊臣期の屋敷地を区画する石列がＬ字形に存在することがわかった。これらの記録を終えたのち、中世の遺物包含層(作土層・客土層)を掘削し、３Ｅ区の地山面で前期難波宮の南北塀SA301の北延長の柱穴を２個検出した。わずか２個の柱穴ではあるが、これまでＬ字状に交わると考えられていたSA301とSA302がＴ字状に交わることがわかり、官衙域が北にさらに拡がることが確実となった。また、この塀から西へ約24mの距離にある４Ｃ・４Ｄ区東辺部の南北塀SA303については現状保存ができないため、柱穴の断割りと全掘を行った。その南半部分は東は江戸時代の土取り穴、西は旧体育館の基礎によって攪乱されており、一見地層観察用のアゼのように遺構が残るのみであったが、柱痕跡の確認は大半の柱穴で可能であった。



Fig.４　暗渠蓋石の撤去

SA303の記録作業にほぼ併行して、最後に残っていた調査地北西部の谷の掘削に入ったのは、期間も余すところおよそ半月となった10月13日であった。当初は上部の埋土から平安～鎌倉時代の瓦器片が出土し、遺物の量もそれほど多くはなかったため、底に近いレベルまでを重機によって掘削していたが、翌日には谷の南斜面寄りで自然石が列をなして積まれているとこ

ろが見つかった。そこで急遽人力での掘削に切替えて周囲を掘下げるとともに、さらに層序や積み石の構造を確認する目的で谷を南北に横断するトレンチを設けたところ、直径２mほどの大きな石も用いられていることがわかった。

周囲の掘削が進むにしたがって、積まれた石の構造が明らかになってきた。初めに見つかった石列は本書で「泉施設」と呼称している人工の窪みの周りを巡るが、一部のみであること、そこから北西方向には石組みの溝が延びており、途中から蓋石をもつ暗渠となっていることが確認された。

この遺構の年代は周囲の埋土から出土した土器によると前期難波宮の時期である可能性が高く、同時期に南東に展開する倉庫群との係わりも注目された。遺物についても、木簡や祭祀具などをはじめとする多量の木製品が出土したことも宮域での調査成果としては初めてのことであった。

以上の予想外の発見により、期間内に調査を終了させることが困難となったため、協議の結果、さらに期間を延長してその部分の掘削と記録を行うことになった。また先述した柱穴の発見も含めて、調査成果を広く一般に公開するため、1997年10月18日の難波宮フェスティバルの際には現地公開を行い、同年11月８日と年明けの1998年１月15日には現地説明会を開催した。

２月以降は敷地内での建設工事が本格的に始まった。そのため、工事の進展に合せて調査区を縮小させていくという苦しい状況下で、残っていた断割りや断面観察などの補足的な作業を行った。現状保存されることが決まった石組み溝と泉施設の一部の周りには記録作業が終わり次第、保護用の矢板が打込まれた(Fig.５)。谷の埋土は完掘はできなかったが、人力および重機によって必要な部分の断割りを行い、できるかぎり層位的な遺物採取に努めた。調査は３月17日に現場を撤収し、終了した。　　(佐藤)

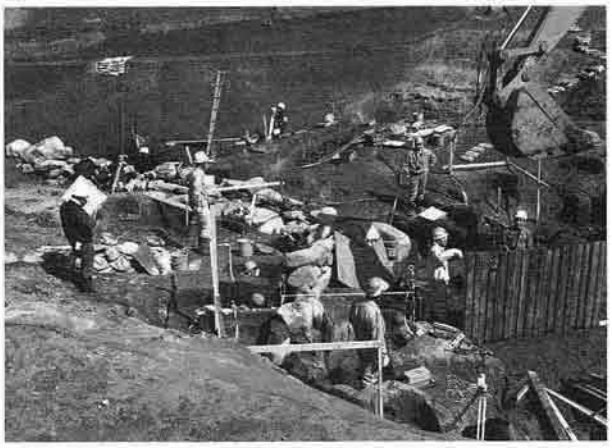


Fig.５　調査の最終段階

註)

(１)この調査が行われていた時点では体育館はまだ使用されていた。大阪市中央体育館が舞洲の新しい施設に移ったのは1996年５月である。

第Ⅱ章　既往の調査

旧大阪市中央体育館敷地内では、1976年の難波宮跡(NW)87次、1977年のNW111次、1984年のNW84−40次などでトレンチ調査が行われていたが、遺構の全体像が判明したのは、大阪城公園・難波宮跡公園連続一体構想に伴って1987年より1990年の間に３期(NW87−20次・NW88−1次・NW89−1次の各調査)、14,100㎡にわたって行った調査による[大阪市文化財協会1992]。以下、その成果の概要を５世紀から後期難波宮までと、石山本願寺期から江戸時代に分けて述べる。

１）５世紀から後期難波宮(Fig.６～９)

本地域が最初に開発されるのは、５世紀の大規模な掘立柱建物群の建設による。それらは敷地南部を横切るように東西２列に並んで、西群10棟と東群６棟の計16棟(SB101～116)からなる。これを難波宮下層遺跡とは区別して「法円坂遺跡」と呼称する場合もある。16棟はすべてほぼ同じ規模と構造をもつと推定され、桁行５間(9.93～10.37m)、梁行５間(8.25～9.43m)の総柱建物で、床面積は90㎡前後(82～98㎡)となる。時期については遺構の重複関係と柱穴から出土した土器により、廃絶はTK208～TK23型式の時期、上限はTK208型式よりさかのぼる可能性もあり、基本的に建替えはなく比較的短期間にその役割を終えたと推定される。構造は通常の総柱建物と異なって側柱と束柱以外に６本の柱があるが、東西の中軸線上に側柱から１間内側にある柱は棟持柱となる。他の４本は隅柱から桁行・梁行それぞれ１間内側に入った束柱の内側にそれと接するように立てられており、建築史学の立場から、この柱(「内部通し柱」と呼称)は棟木から隅柱に下ろした隅木を支える柱、あるいは母屋の桁をのせる身舎柱とされ、屋根は東西棟の入母屋造りと推定された[植木1992]。柱の太さや建物の平面形態、全体の配置などからこれらは高床倉庫と考えられている。「内部通し柱」と類似した柱を有する構造の高床倉庫にはTK73型式の時期の和歌山市鳴滝遺跡[和歌山県教育委員会1983]が知られていたが、報告後、大阪湾岸の豊中市蛍池東遺跡において、「内部通し柱」はないが内部に棟持柱を有する５間×５間で、かつ平面形態や規模が本調査地の建物群ときわめて類似した建物２棟が見つかった[大阪文化財センター1994]。蛍池東遺跡の建物はTK216～TK208型



Fig.６　復元された５世紀の倉庫

式の時期とされるが、鳴滝遺跡や本遺跡の建物構造は、古墳時代中期における高床倉庫の拡大化に伴う建築技術の試行錯誤のバリエーションの中で理解できるようである[植木1992]。本建物群の第一の特徴は、まず規模の大きさにある。古墳時代の高床倉庫の中では１棟の大きさもさることながら、16棟集合した総収容量は群を抜いている。さらに周辺の地形や配置計画などを勘案すると、調査地を越えて東へも建物は続いている可能性が強く、その規模はさらに大きかったことが予測される。第二の特徴として、きわめて整然とした配置計画の元に施工されている点を挙げうる[南1992]。群全体は正



Fig. 7　古代の遺構配置[大阪市文化財協会1992]

方位に合せることを意図されており、特に西群南列は真東西から5′程度の誤差に収まり、正確な方位測量が行われたと考えられる。東群は全体に東で北に2°程度振るが、これは西から東へという順の施工過程で生じたずれと考えられる。個々の建物は、基準線を設け、ある基準長とその$\sqrt{2}/2$の長さなどによって割り付けられ、1尺24cm前後かそれよりやや長い基準尺の使用が想定できる[積山1990]。本倉庫群は莫大な物資の集中管理を目指したものであり、画一的な構成や高度な配置計画などの特徴をみるとき、後の時代との比較でも地方官衙の倉庫群より宮殿付属の倉庫群と共通する部分が多く、その造営主体は倭王権に他ならないと考えられる。また上町台地の北端という選地には、北約800mにある、「難波の堀江」に比定される大川との関係が深かったと思われる。倉庫群の廃絶後は、当地域は一転して竪穴住居が散在する集落にかわる。見つかった竪穴住居3棟はTK23～TK47型式の時期で、ここから前期難波宮造営までの期間に69棟の掘立柱建物が復元でき、本来はさらに多数の建物があったことは間違いない。掘立柱建物は大きなものでも桁行5～6間、梁行2～3間で、上町台地中央部(難波宮朝堂院下層)にあるような桁行の長い建物などは含まれず、上町台地北部に広く分布する難波宮下層の建物としては標準的な規模である。また建物は前代とは異なり、地形変化に則して西に振っている。建物数や規模からすると、当地域の集落が発展するのは6世紀でも終り以降、7世紀に入ってからと推定される。

次の前期難波宮の段階では、内裏の西方に当ることから当地域の建物群を「内裏西方官衙」と呼んでいる。内裏西方官衙は北と西を塀(SA301・302)に囲まれた倉庫を主とする施設で、広い空き地を有している。まず北側のSA302に沿って敷地北側には、4間×3間の総柱の部分3個所とそれらの間をつなぐ柱列が検出され、これらは4間×3間の高床倉庫を間の柱列でつないで1棟につくった長大な倉庫SB301に復元される[植木1992]。これを「並び倉」と呼称したが、検出された3棟分のさらに西へ1棟想定すると(この部分は体育館の基礎で消失)、その端が南北列の倉庫群SB303～307の西側柱の延長と一致することから、4つの倉で構成されていた可能性を考えた(Fig.9)。その場合、4倉一体の並び倉の桁行総長は67～68mとなり、また全体が残って

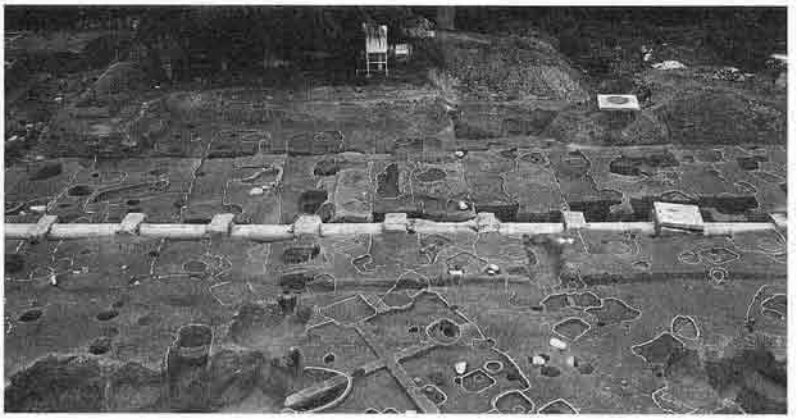


Fig.8 「並び倉」SB301検出状況

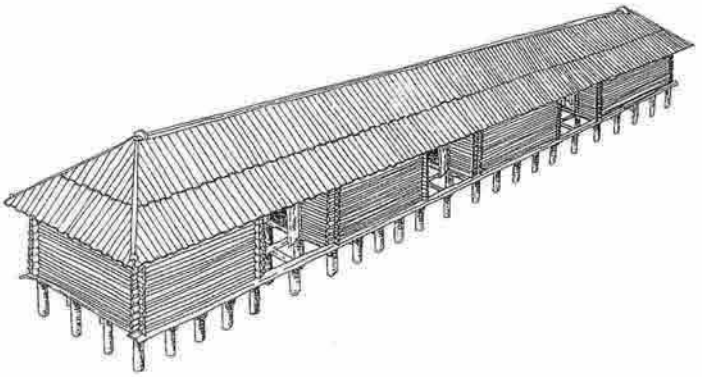


Fig.9 「並び倉」想像図

いる西から３棟目は桁行10.90m、梁行8.30mである。SB301の掘形は、すべて４本の柱を一緒に立てた布掘りである。SB301からは、用途不明の小型金製品が出土した。また西側のSA301に沿って４間×３間の総柱建物SB303～307(SB304とSB305の間は体育館の基礎で消失)が並んでいるが、北から４番目のSB305の東52mにも同規模・同構造の建物がある。これらは桁行長9.90～10.40m、梁行長7.05～7.20mで、直径50～60㎝の柱をもつ頑丈な高床倉庫である。また北・西・東の倉庫群の中間には８間×３間の建物があり、倉庫群に対する管理棟的な機能を有する建物と考えた。SA301の西23.7mにはSA303があるが、難波宮中軸線からの距離はSA303で306.7mとなり、SA301とSA303の二等分線が、１尺29.5㎝としたときの1,000尺に当る。塀と並び倉を除く建物は、柱抜取り穴に大きな焼け土が入り、他の地域と同様に天武朝朱鳥元年(686)の火災痕跡と考えられる。

以上のような構造の内裏西方官衙は、平城京・平安宮の大蔵省にSB301のような長大な倉あるいは広場が存在すること、平安宮「宮城図」や唐の長安城の太倉の位置との共通性、『日本書紀』持統６年(694)の「難波大蔵」で有位者に緑を賜うという記事が、焼土を出土しない、つまり焼け残ったと推定される倉が存在するという発掘の事実と符合すること、などをはじめとする諸点から、天武朝末年までに成立していたという「大蔵(官)」に属し、日本書紀に残る「難波大蔵」であると考えた[積山1989・1992]。また別の角度から大蔵とする見方として、呂大防「長安城図」の太倉城の絵と内裏西方官衙の建物構成の類似[中尾1995]、また、季禄的給与などの「庭に物を積み上げて賜う」賜与儀礼は大蔵省と関係が深く、この儀礼には大きな広場が必要であることが内裏西方官衙の遺構に適合する[古市1998]、などがあり、また一方、この倉庫群には複数の官衙に付属する倉庫が含まれる可能性も考える余地があるという指摘もある[山中1991]。

次の後期難波宮の遺構としては、敷地南にある東西溝SD401とそれより北に延びるSD402があり、宮内を区画する施設に関係する溝かもしれない。中央から北部にかけて土壙・溝・小規模な掘立柱建物やコの字形の柵などがあり、瓦もかなり出土しているので、この付近に瓦葺建物があったと考えられる。後期難波宮の遺構は多くは見られないが、あるいは後世に削平されてしまった可能性も残しておかなければならない。また、南東部から平城宮土器Ⅴ併行の薬壺形須恵器を骨蔵器とした火葬墓が単独で出土した。

２）石山本願寺期から江戸時代(Fig.10～12)

調査地北西部に北西へ延びる谷があり、この中に今回報告する前期難波宮の水利施設が築かれている。1989～1990年には旧体育館の床を外してこの谷の南端を発掘し、石山本願寺期以降の地層を層位的に調査した。ここでは何時期かの畑や溝を検出したが、本願寺が焼亡するころには谷はほぼ埋められ平坦になる。当該期の遺構はこの谷以外のところでも見つかっているが、散発的で多くはない。当地域の豊臣期以前の景観は、北西隅に向かって緩やかに傾斜する丘陵上に畑や小規模な建物があり、本願寺の寺内町の町屋や山根徳太郎氏が想定した法安寺の敷地の痕跡は認められない。

次の豊臣氏大坂城期(1580～1615年)には、旧体育館以西で豊臣氏大坂城期前半(以下、豊臣前期と略称する。後半も同様)の客土層と大坂夏の陣の焼土層が分布しているが、他では豊臣前期と後期は

層位的に区別できない。豊臣氏大坂城での当地域の位置は、慶長３・４年(1597・1598)に建設された三ノ丸に当る。まず、豊臣前期には敷地を南北に貫く塀SA501と南西部のＬ字形の薬研堀SD512・513(深さ３ｍ強)があり、これによってSA501以東(敷地Ａ)・SA501以西でSD513以北(敷地Ｂ)・SA501以西でSD513以南(敷地Ｃ)の２つに分割された屋敷地が存在した。またSA501は西へわずかにずらしたSA502とそれと連続してSD513に沿って西に折れるSA503へ改変される。この造り替えと、北西部で２時期の遺構面が存在すること、多量の金箔押瓦が廃棄されていることから、豊臣前期

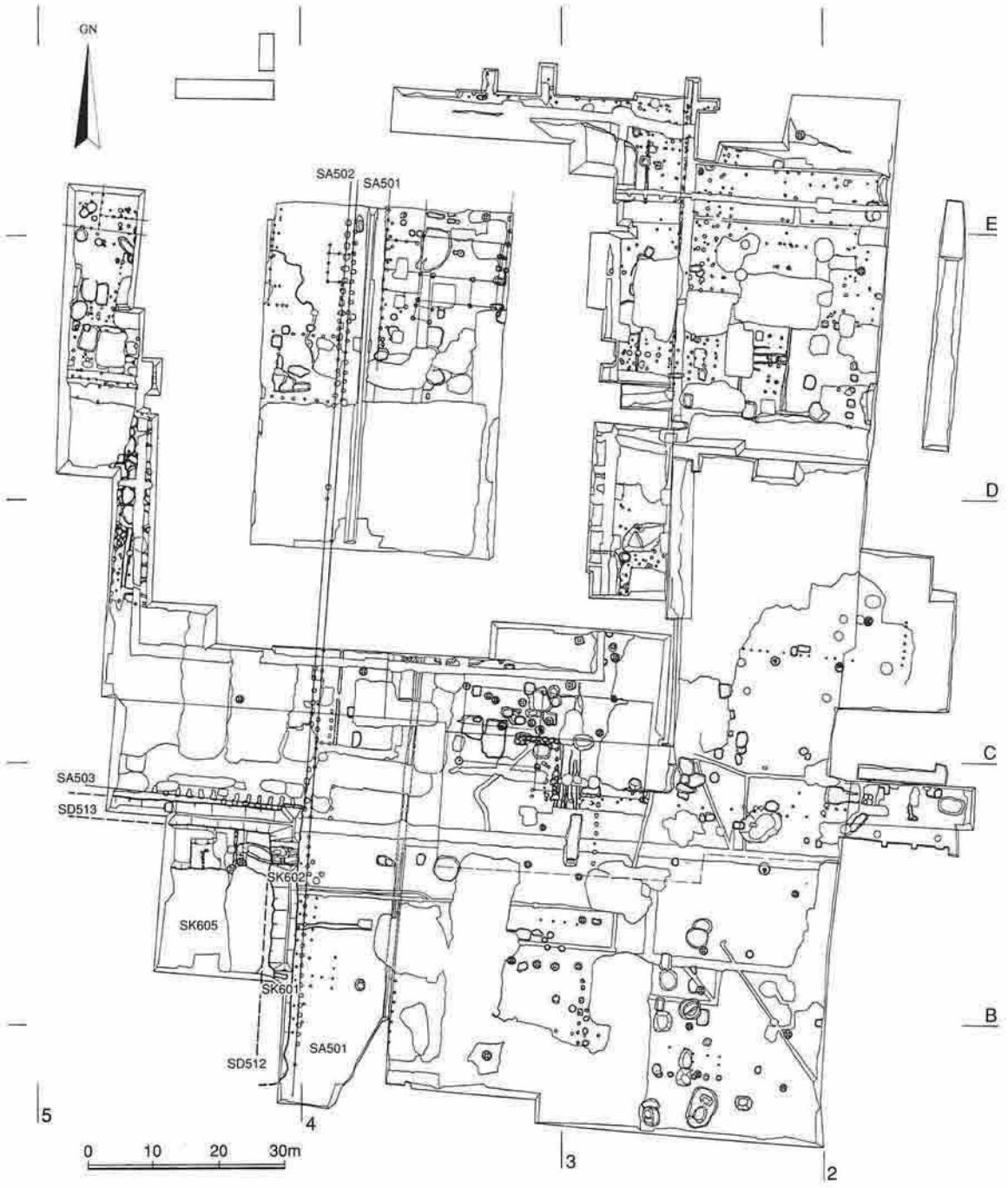


Fig.10　豊臣期の遺構配置[大阪市文化財協会1992]

の間に屋敷地内を一新するような規模の改変が行われた可能性が強い。豊臣後期には堀は埋められ、敷地を画する塀もなくなる。後期にも前期の３分割の屋敷割りが踏襲されたかは明瞭でないが、江戸時代の屋敷区画が豊臣期の屋敷割りと一致する部分があることなどからすれば、豊臣後期にも同様の屋敷割りが存在したであろうと考えた。屋敷の広さについては、江戸時代の町割りを示した絵図との対比などから、敷地Ａで上町筋(東)・SA501他(西)・本町通り(北)・農人橋へ通じる通り(南)で囲まれた南北約240m、東西約120m、約8,700坪の規模となる。想定される屋敷の広さや、屋敷の位置、多量の金箔押瓦の存在から敷地Ａは秀吉側近の大名屋敷であったと考えられ、沢瀉文の金箔押瓦との関連から関白秀次の名を挙げる説もある[中村1989]。また他の２つの屋敷(Ｂ・Ｃ)も、同様の理由から大名クラスの屋敷と考えた。屋敷内の建物構成などは、遺構面が残っている部分が少ないためあまり判然としないが、大きな根石と礎石を併用した建物、一敷地内を画した小規模な塀や柵、総数40基を越えたと推定される井戸、埋甕・瓦溜・穴蔵あるいは貯蔵穴かと推定される土壙など、多数の遺構が見つかっている。これらの土壙・井戸などからは多量の陶磁器が出土し、当該期の陶磁器編年を補強する上で非常に良好な資料となった[森1992]。

江戸時代には、当地は上町筋沿いが町屋、南端が京橋与力、それを除く大半が大坂城代の家臣の屋敷(「五軒屋敷」とも呼ばれる)となる。敷地南側では、東西の道路遺構SF701が見つかり、これと絵図や検出遺構との対比から、五軒屋敷の屋敷割りの大略が復元できた。また敷地北西部では、徳川氏大坂城期を層位的に発掘し、文久３年(1863)と推定される火災で焼失した建物群を調査した。また、五軒屋敷中の土壙からは城代として赴任した三河国吉田藩家中の一家臣の名を記した遺物(Fig.12)が出土し、城代家臣屋敷における住人の生活について具体的なイメージを広げうる資料となった[豆谷1992]。　(南)



Fig.11　豊臣期の遺構検出状況



Fig.12　墨書木製品

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　調査区と層序の概要

１）調査区の設定(Fig.２)

NW91−5次・NW96−3次調査は調査区がそれぞれ１個所に限定されているが、NW96−29次・NW97−3次調査は調査区が広範囲に及び、かつそれらが重複していること、特にNW97−3次調査は調査区が敷地北半の全域にわたって散在し、既に報告した調査区の再調査が含まれているなどの事情から、調査次数によって調査区を記述することはかなり複雑で混乱をきたすおそれがあった。このため、本書では前報告[大阪市文化財協会1992]の地区設定を踏襲して調査区や遺構の位置を記述することとする。すなわち、40mごとに設定した東西方向のラインを南からＡ～Ｆ、同じく南北方向のラインを東から１～５とし、地区名はそのラインの南東の交差点とする。調査次数については必要に応じて補足的に触れるにとどめたい。

以上をまとめると、NW91−5次調査は１Ｃ・１Ｄ区、NW96−3次調査は１Ｄ・１Ｅ区に当り、NW96−29次調査は２Ｃ～Ｅ・３Ｃ～Ｅ・４Ｃ～Ｅ区で、NW97−3次調査はそれに２Ｄ・３Ｄ区などが加わる。新規に調査を行った部分と再調査の部分との区別はFig.２を参照されたい。　　(佐藤)

２）層序の概要(Fig.13～16、Tab.１)

前報告では残りのよい３地点の柱状図を示すことで本調査地における基本層序を記述している。今回の調査区でも、地山が高く残っているところから北西部の谷の部分まで、多様な堆積が確認されているが、特に谷の中～底部の地層は今回初めて確認された。本調査地の基本的な層序は、谷が存在する調査地北西部の３Ｅ・４Ｅ区を除けば地山が高く、上から現代客土(註１)、近世後半の客土(後述する第2b層)、地山(第11層)の順である。部分的に中世～近世や古代の遺物包含層が地山層の上位に薄く堆積する。西部の４Ｄ・４Ｅ区では大坂夏の陣の焼土層や幕末の焼土層が見られる。北西部の谷は古代から中世にかけて客土が行われ、豊臣期には周辺の地山面とほとんど変わらない高さになる。以下、谷および水利施設周辺の層序を用いて本調査地における層序を述べていく。今回提示する層序は、前報告で示されたものと細部では異なるところがあるが、それは調査位置の違いに起因する。また、この層序は本調査地という限定された範囲の中でのものであり、これが南東の内裏・朝堂院地域や北方の他の谷筋(財団法人大阪府文化財調査研究センターがおもに調査)においても無条件に適用できるものではないことは留意しておく必要がある。

第０層：現代の客土である。第二次大戦後、大阪市中央体育館が建設されたころのものである。

第１層：にぶい黄橙色の砂礫(粘土偽礫を含む)や、暗褐色の礫混り砂質シルト(焼土を含む)などか

らなる客土層で、近代のものである。本層の上面で旧日本軍の建物基礎が検出される。調査地全域に分布する。

第２層：ａ～ｃの３層に細分される。

第2a層は褐色の砂礫混り細粒砂で、焼土や火を受けた瓦を多く含む。文久３年(1863)の五幸町の大火によるものと推定される。調査地北西部(４Ｅ区)や北東部(１Ｄ・１Ｅ区)で見られる。前報告の第2a層と同じ地層である。第2b層はにぶい黄褐色の礫混り中～細粒砂や、暗灰黄色の礫混り(少)砂質シルト、黄褐色の(シルト質)砂礫などからなる客土層で、江戸時代の後半ごろと考えられる。調査区のほぼ全域に分布する。第2c層は４Ｅ区の北壁沿いにおいて豊臣期の遺構面の直上に堆積する黄褐～明黄褐色の礫混り極細粒砂～粗粒砂や、１Ｃ・１Ｄ区で江戸時代初期の土取り穴を埋立て、屋敷地の客土層となっている明黄褐～褐色の細粒砂混りシルトからなり、江戸時代前半期に属する。西部の４Ｄ・４Ｅ区で見られる下位の第3a層の焼土が再堆積したものを含む。前報告の第３層はこれにほぼ対応する。

第３層：ａ・ｂの２層に細分されるところもあるが、地山のレベルが比較的高いところでは薄い遺物包含層として第３～５層が一層に収斂して存在する。その場合はにぶい黄橙色のシルト混り砂礫～礫混り粗粒砂などである。

第3a層は褐色の粗粒砂で、焼土・炭・瓦を多く含む。慶長20年(1615)の大坂夏の陣によるものと推定される。前報告の第4a層である。第3b層は明黄褐～にぶい黄褐色の細～中粒砂や粘土質シルト～粘土の偽礫などからなる豊臣期の客土層である。４Ｄ・４Ｅ区のSF501・502の版築層やその下位の溝SD540・541の埋土なども本層に含まれる。基底面では石山本願寺期の堀SD530が検出された。前報告では４Ｃ・４Ｄ区において本層がさらに細分されているが、今回の調査では確認できなかった。

第４層：本層以下は本調査地では北西部の谷にのみ分布する。層相からａ・ｂの２層に細分される。

第4a層は褐～暗黄灰色の礫混り細～中粒砂や明褐色の細粒砂～シルトの偽礫からなる客土層で、石山本願寺期の遺物を含む。本層を切って堀SD530がつくられる。調査地北西隅のみに存在する。第4b層は上部が明黄褐～黄褐色の中粒砂混りシルト質極細粒砂や礫・粗粒砂混り細～中粒砂の作土層で、下部がシルト～粗粒砂の偽礫からなる客土層である。やはり石山本願寺期の遺物を含む。前報告の第７層に当る。第4a層と第4b層との重なり合いは間にSD530が存在するため確認できないが、前者の中に後者の偽礫が含まれていることから前者が新しいものと判断できる。また、第4a層の直下にはオリーブ褐～黒褐色の礫混り極細～粗粒砂からなる層厚10㎝ほどの作土層が存在するが、谷の南斜面ではこの地層が第4b層の直上で見られる。谷の延びていく北西方向に向って段差をもちながら低くなっていく耕作地が営まれていたのであろう。

第５層：下位の前期難波宮期の水利施設を覆う地層で、ａ～ｃの３層に細分される。

第５ａ層は下位の第5b・c層を耕起した黄褐～オリーブ褐色の中・粗粒砂混り細粒砂やシルト混り細粒砂～極細粒砂からなる作土層で、古代末～中世前期の瓦器を含む。下位層との境界が明瞭でない個所もある。第5b層はオリーブ褐色の細粒砂混り粘土質シルトで、泉施設SG301の上位に堆積する水成の粘土層である。ラミナは明瞭ではないが、水漬き状態であったことを示している。８世紀後葉

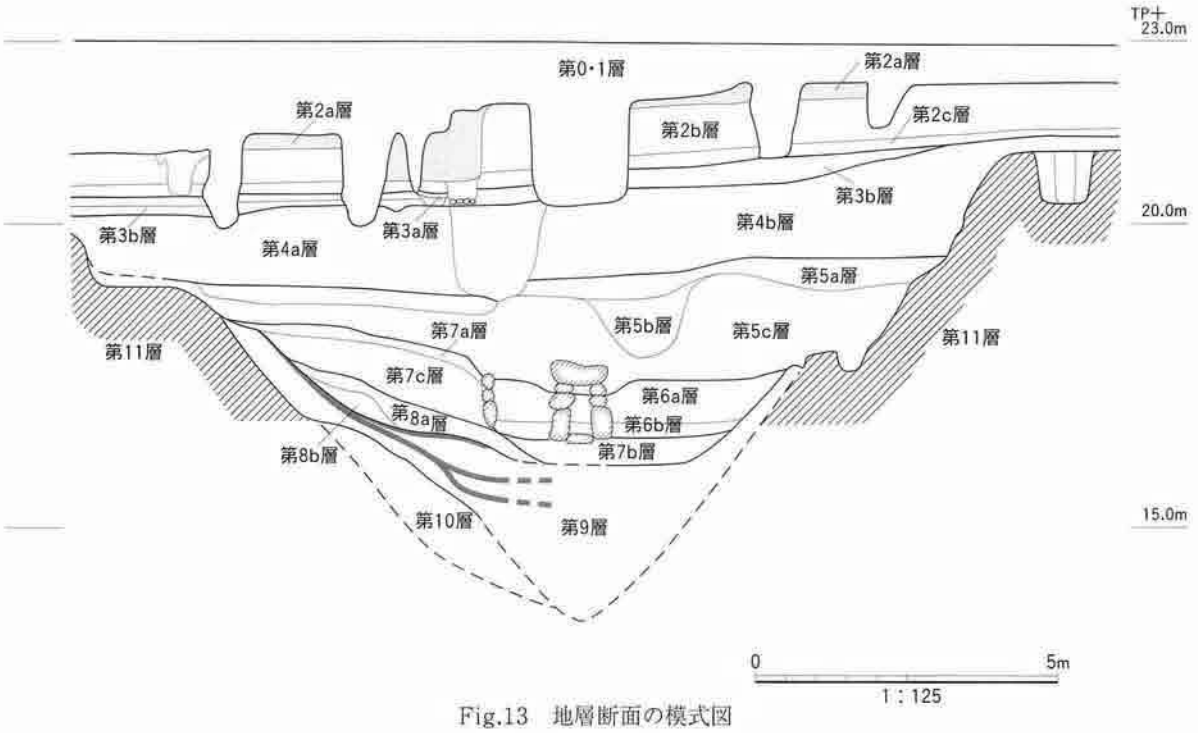


Fig.13　地層断面の模式図

Tab.1　調査地の層序

層　序	細分	地層の特徴	おもな遺構・遺物	時　　期	備　　考
第0層		客土層	←旧日本軍の建物基礎	第二次大戦後、大阪市中央体育館	
第1層		客土層		近代	
第2層	a	焼土層	火を受けた瓦・陶磁器 ←屋敷地	文久3年(1863)の五幸町の大火	
	b	客土層	←屋敷地	江戸時代後半	
	c	客土層・焼土再堆積層		江戸時代前半	
第3層	a	焼土層	焼土・炭・瓦 ←石列1・2・SF501・502	慶長20年(1615)の大坂夏の陣	地山のレベルが比較的高いところでは薄い遺物包含層として第3～5層が一層に収斂する。
	b	客土層	下面でSD540・541 基底面でSD530	豊臣期	
第4層	a	客土層		石山本願寺期	
	b	上部:作土層 下部:客土層		石山本願寺期	
第5層	a	作土層	瓦器	古代末～中世前期	
	b	水成層		8世紀後葉～末	
	c	客土層		8世紀中葉	
第6層	a	水成層		7世紀後葉～8世紀初頭	
	b	水成層	木屑	7世紀中葉	
第7層	a	客土層	←SD301	7世紀中葉	地山の高い個所に存在する黄褐色の砂混り粘土質シルトなどの遺物包含層は、本層および下位の第8層に対応する地層である。
	b	水成層	←SG301	7世紀中葉	
	c	客土層		7世紀中葉	
第8層	a	水成層(シルト質細粒砂など)		6世紀後葉～7世紀中葉	
	b	水成層?		6世紀	
第9層		泥炭層 崖錐堆積物		弥生時代(1830±40BP) 〃　(2250±40BP)	Beta−132280 Beta−132279
第10層		崖錐堆積物		縄文時代か?	
第11層		地山(中位段丘構成層)	サンドパイプ		

～末ごろの遺物を含む。第5c層は黄褐～にぶい黄褐色の粗粒砂混りシルトや細粒砂の偽礫からなる客土層である。地山上部を主体とする客土層で、厚いところでは層厚140㎝ほどである。前期難波宮期の水利施設を埋立て、一部はSD301の暗渠部分の中にも入り込んでいる。８世紀中葉ごろの土器・瓦などの遺物を含み、この客土が後期難波宮期に行われたことがわかる。この客土により谷はある程度埋立てられたが、泉施設SG301の部分はやや窪んだままで水が溜まっていたのであろう。ただし、第5a層と第5b層との関係についてはこの部分に適切な地層観察用のアゼを残していなかったため、詳しくは検討できなかった。

第６層：石組み溝SD301・泉施設SG301の内部に堆積した水成層である。層相や遺物からａ・ｂの２層に細分される。

第6a層は上下２層に分かれ、上層は褐色砂礫で、下層は黄褐～暗灰黄色のシルト・細～中粒砂の互層である。すでに水利施設としての機能は停止していたと思われるが、上層には直径３㎝前後の小石が多く含まれることから、大雨などによって土砂が一気に堆積し、復旧不可能な状態になったものと考えられる。７世紀後葉～８世紀初頭の遺物が含まれている。第6b層は上部が黄灰～黒褐色の粘土質シルト～粘土で、下部が灰オリーブ色の粘土質シルト・細粒砂が互層をなしたものである。前者は多量の木屑を含んでいる。この施設が清らかな水を供給するためのものならば、機能時にこのような木屑が捨てられることはなかろうから、機能停止直後の堆積と考えられる。後者は石組み溝SD301の内部にのみ堆積しており、施設が機能していた段階の堆積物であろう。いずれも出土した遺物は７世紀中葉のもので、下で述べる造営時のものと大きな差がないことから、この施設が機能していた期間はさほど長くはないと推定される。

第７層：水利施設造営時の客土層や堆積層である。ａ・ｂ・ｃの３層に細分される。なお、地山の高いところに存在する黄褐色の砂混り粘土質シルトなどの遺物包含層は、本層および下位の第８層に対応する地層である。

第７ａ層は黄褐～オリーブ褐色の砂混りシルトの偽礫層や小礫混りシルト～極細粒砂などで、SD301の石材が据えられたのち、その裏込めや蓋石を覆うために客土された地層である。裏込めの部分では直径20㎝前後の偽礫も見られ、特に石の隙間にはシルトや粘土が詰められて水漏れを防いでいた。第7b層は水成層で、灰～暗黄灰色の極細～粗粒砂に部分的にシルトの薄層が挟まれる。ラミナの乱れている部分がある。SG301の最下層に堆積する。造営の途中で湧水あるいは雨水によって土砂が溜ったものと考えられる。第7c層はオリーブ灰・オリーブ黒・緑灰色シルト～粗粒砂の偽礫からなる客土層で、水利施設を造営するための第１次客土である。これにより谷は約半分の深さまで埋立てられる。土砂は地山や谷の深部から供給されている。本層の客土によってSG301の形が整えられる。また、上面からはSD301を築くための掘形が掘込まれる。これらの地層からは７世紀中葉の遺物が多量に出土した。また、４Ｅ区中央部の谷の南斜面では貝を多く含む黒色シルト～粗粒砂の偽礫からなる客土層が見られた(Fig.166、原色図版５－下)。水成層ではなく、この場所に投棄されたものとは考えられず、難波宮造営前において谷内部にすでに堆積していた地層(後述する第８層)が客土として再堆積したものである可能性が高く、次章ではこの層から出土した資料(試料)を古墳時代後期～飛鳥時代のも

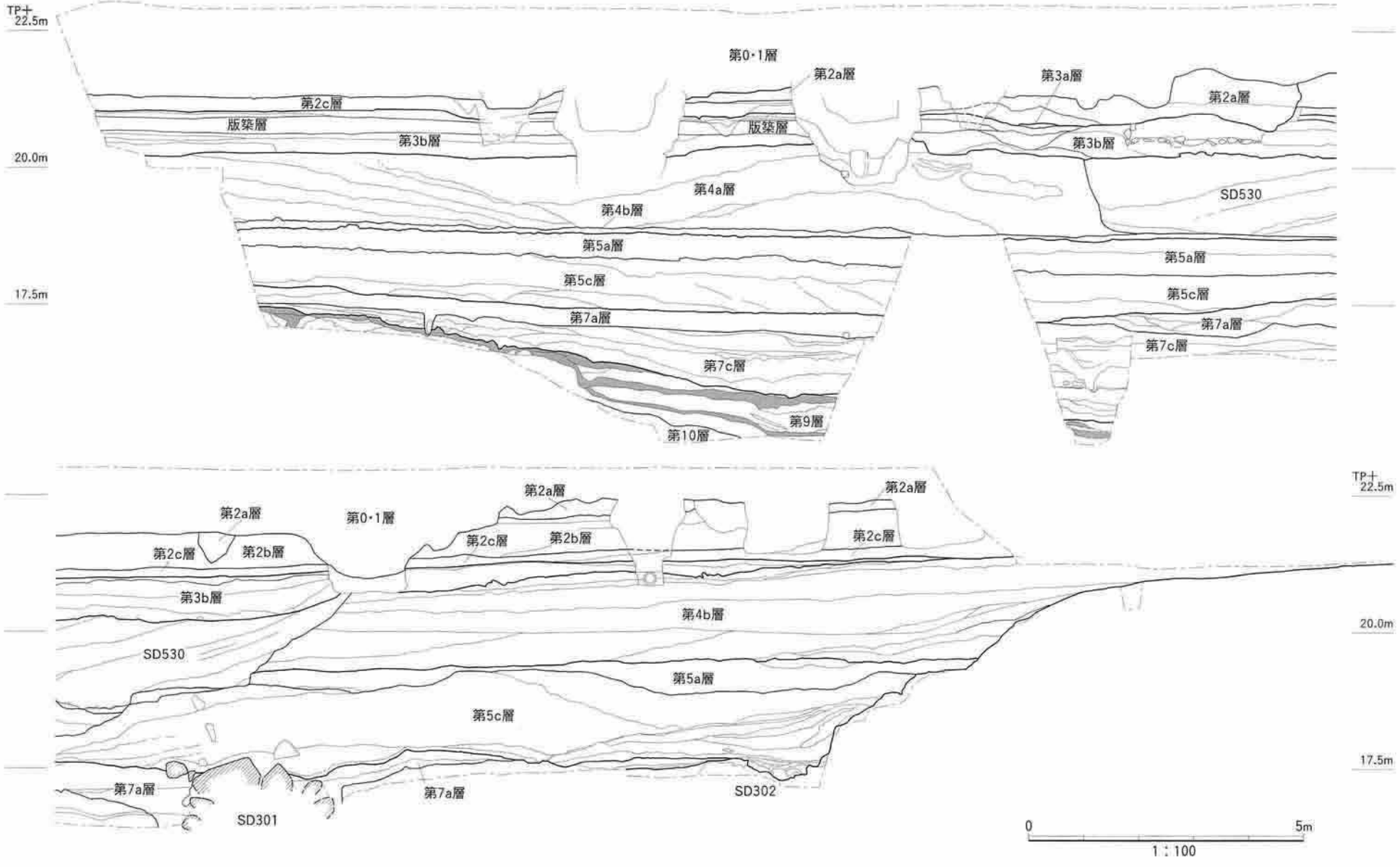


Fig.14　3E・4E区北壁断面図



Fig.15　1D区東西アゼ南壁断面図



Fig.16　4D・4E区南北アゼ東壁断面図

のとして同定・分析を行っている。

第８層：谷の中に水利施設が造営されるまでの地層である。ａ・ｂの２層に細分される。

第8a層はオリーブ灰～オリーブ黒色の細粒砂混り粘土質シルトやシルト質細粒砂で、第7c層の下位に堆積する。６世紀～７世紀中葉の遺物を含む。ラミナは確認できないが、客土ではなく基本的には自然に堆積した地層であると考えられる。第8b層は灰色の粗粒砂質シルトやシルト質細～極細粒砂で、谷の南斜面の中程でのみ見られた。６世紀代の遺物が集中して出土した。

第９層：本層以下は無遺物層である。おもに谷の深部において第８層の下位に堆積する。灰～黒色のシルト混り細～中粒砂や中粒砂混りシルトからなる泥炭層と、オリーブ灰～緑灰色の細～粗粒砂(一部砂礫を含む)からなる崖錐堆積物とが上下で一組をなす。調査地北西隅の北壁ではこの組合せが３層確認された。第Ⅳ章第５節で報告されているように、この泥炭層の年代は放射性炭素年代測定によればほぼ弥生時代におさまる。

第10層：灰色のシルト質粘土と細粒砂の薄層が互層をなす。崖錐堆積物である。谷に水が溜っている状態で堆積したもので、水がひいたのちは上位に第９層が堆積する。

第11層：地山層(中位段丘構成層)である。上部は黄褐色粘土質細粒砂などで、前報告の第10層である。下部は明黄褐色細～極細粒砂などからなる。　　(佐藤・小倉)

註)

(１)「客土」の語は、「外から人為的に運ばれてきたと判断される土砂の総称、およびその行為」[趙哲済他1992]という意味で用いる。

第２節　難波宮造営前の遺構と遺物

１）遺構

今回の調査では５世紀代にさかのぼる遺構は検出されなかった。すべて前報告においてⅡ期とした６世紀～７世紀前半のものである。

ｉ）掘立柱建物(Fig.17～21、図版５～９)

ここでは主として新規に調査を行った部分で検出された建物について述べる。前報告にあるもので、今回続きが確認されたものは従前の遺構番号を用いた。また、既調査部分の柱穴のうち、平面的な検出でとどめてあったものは断割りを行い、柱痕跡の位置を確認した。一々は断面図を示さないが、前報告から柱穴の位置を変更すべきものは付図にその結果を示しているので参照されたい。

SB280　３Ｅ区で検出された桁行３間以上×梁間２間の掘立柱建物である。北西隅の柱穴の深さが0.2m弱と浅く、ここから西にかけては地山が徐々に低くなっていることから、柱穴は北西へあと１～２間あったが失われたと考えられる。柱間は桁行が1.5m、梁間が1.7mで、柱痕跡の直径は10～15㎝である。

SB281　３Ｅ区にある掘立柱建物で、北西の妻側に１間の庇が付くと考えると、身舎部分は桁行４間×梁間２間である。柱間は桁行が1.5m、梁間が1.6～1.7mで、柱痕跡の直径は15～22㎝である。

SB282　２Ｅ区にある桁行３間以上×梁間２間の掘立柱建物である。柱間は桁行が2.0～2.1m、梁間が1.6～1.7mで、柱痕跡の直径は10～20㎝である。

SB283　１Ｄ区から１Ｅ区にかけて検出された桁行３間以上×梁間２間の掘立柱建物である。柱間は桁行が1.4m、梁間が1.8mで、柱痕跡の直径は16～23㎝である。この他にも１Ｄ・１Ｅ区では比較的多くの柱穴が見つかったが、建物として復元できなかった。

SB284　１Ｄ区にある掘立柱建物である。北西－南東方向を桁行と考えると、桁行２間以上×梁間２間で、柱間は桁行が1.5m、梁間が1.3mで、柱痕跡の直径は20～24㎝である。

SB246　１Ｄ区にある掘立柱建物で、NW88－1次調査で北西隅がすでに見つかっていた。桁行４間×梁間３間に復元することができるが、柱間はばらつきが大きい。平均をとれば、桁行は1.6m、梁間は1.9mである。柱痕跡の直径は16～25㎝である。南西約１mでSB245の南東隅が見つかっている。

SB285　１Ｄ区にある桁行３間×梁間２間の掘立柱建物である。柱間は桁行のばらつきが大きいが、平均すると1.7～1.8m、梁間が1.3mで、柱痕跡の直径は15～20㎝である。

SB286　２Ｄ区にある桁行３間以上×梁間２間の掘立柱建物である。SB287とほぼ重複して建てられているが、方位がやや異なる。SB287に切られている。北東隅の柱穴は後期難波宮の柵SA401に壊されている。柱間は桁行が1.7m、梁間が1.7mで、柱痕跡の直径は12～17㎝である。

SB287　２Ｄ区にある桁行２間以上×梁間２間以上の掘立柱建物である。柱間は桁行が1.9m、梁間が1.8mである。柱穴の一辺が１mを越えるものがあり、比較的規模の大きな建物であろう。柱痕

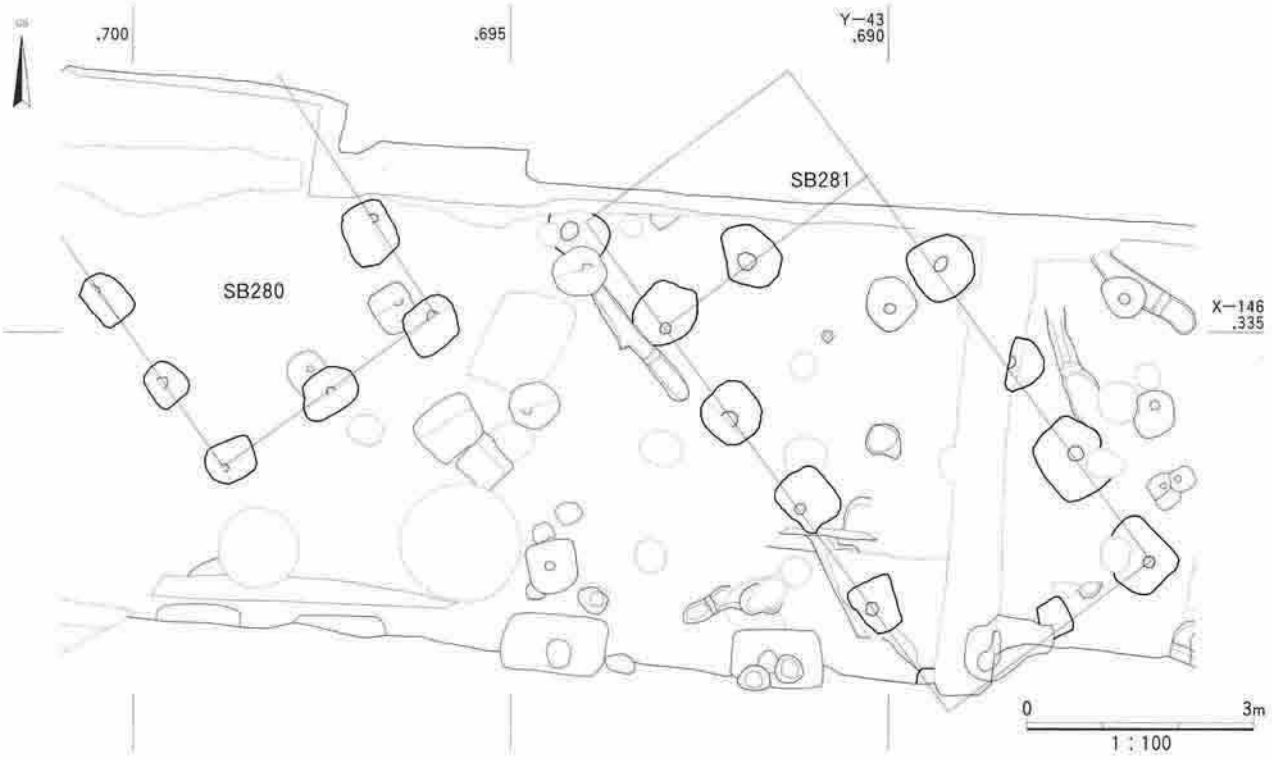


Fig.17　SB280・281平面図

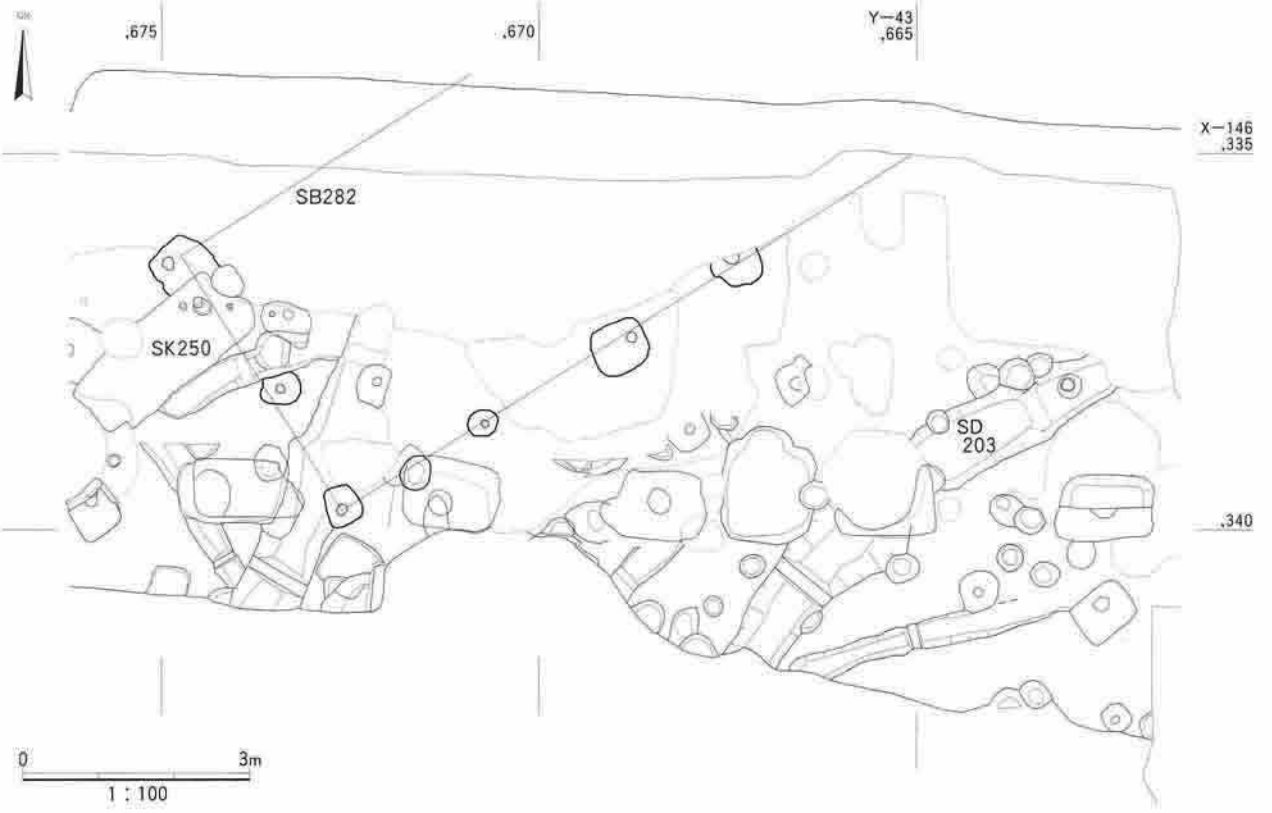


Fig.18　SB282・SD203平面図

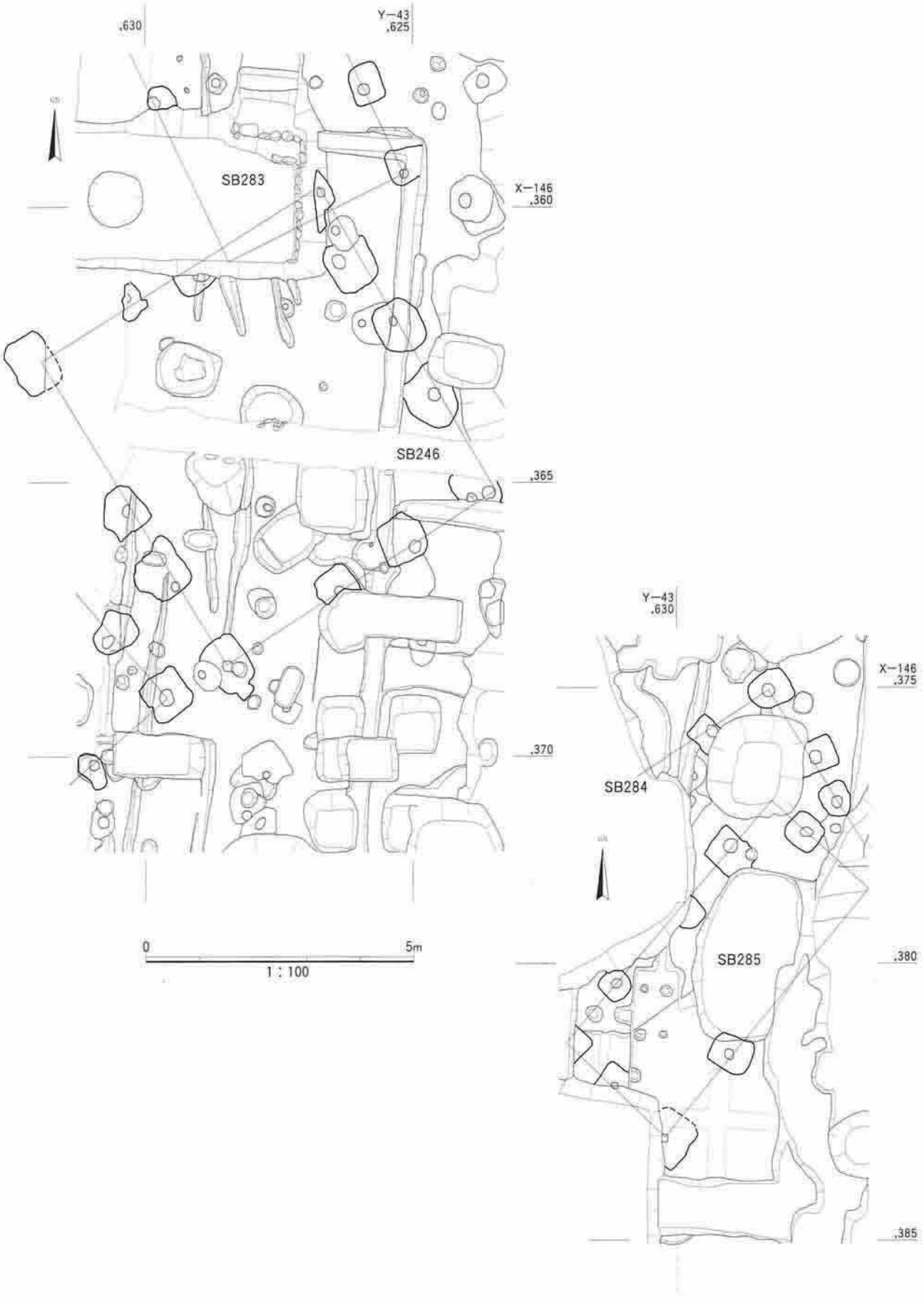


Fig.19　SB246・283～285平面図

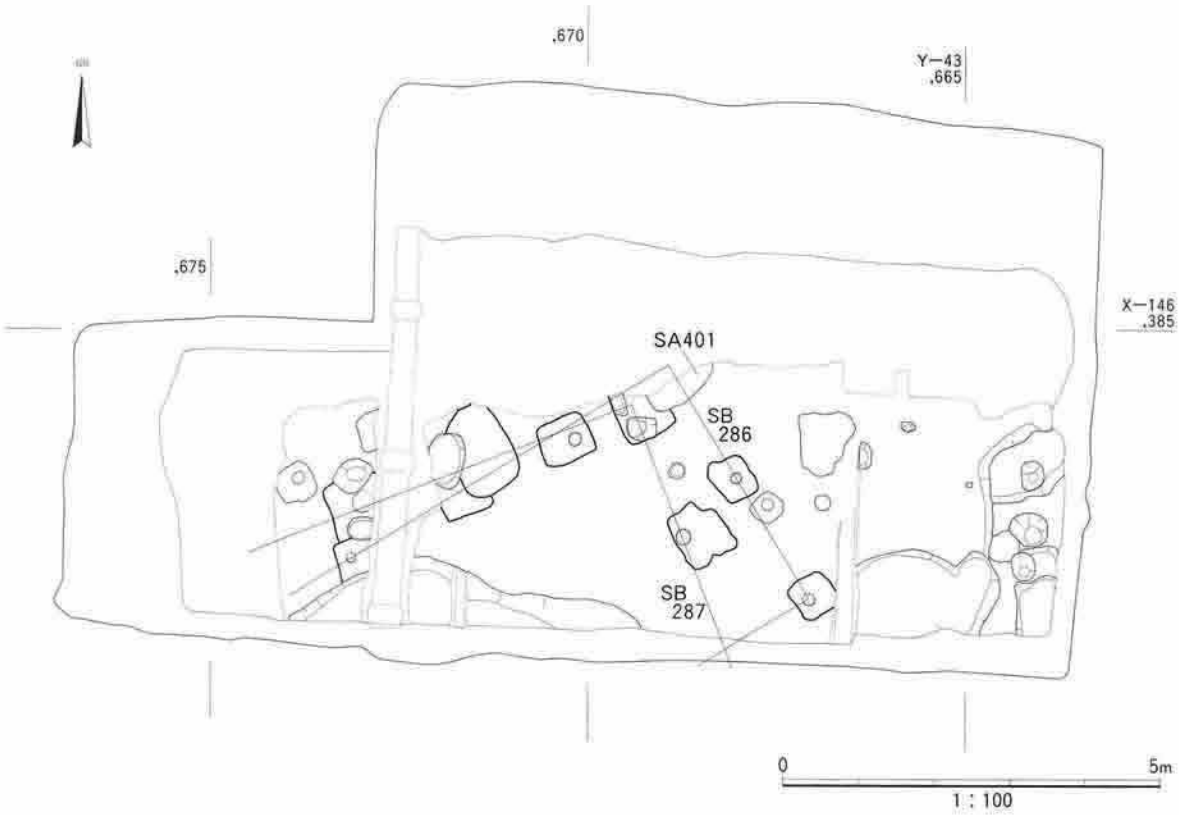


Fig.20　SB286・287平面図

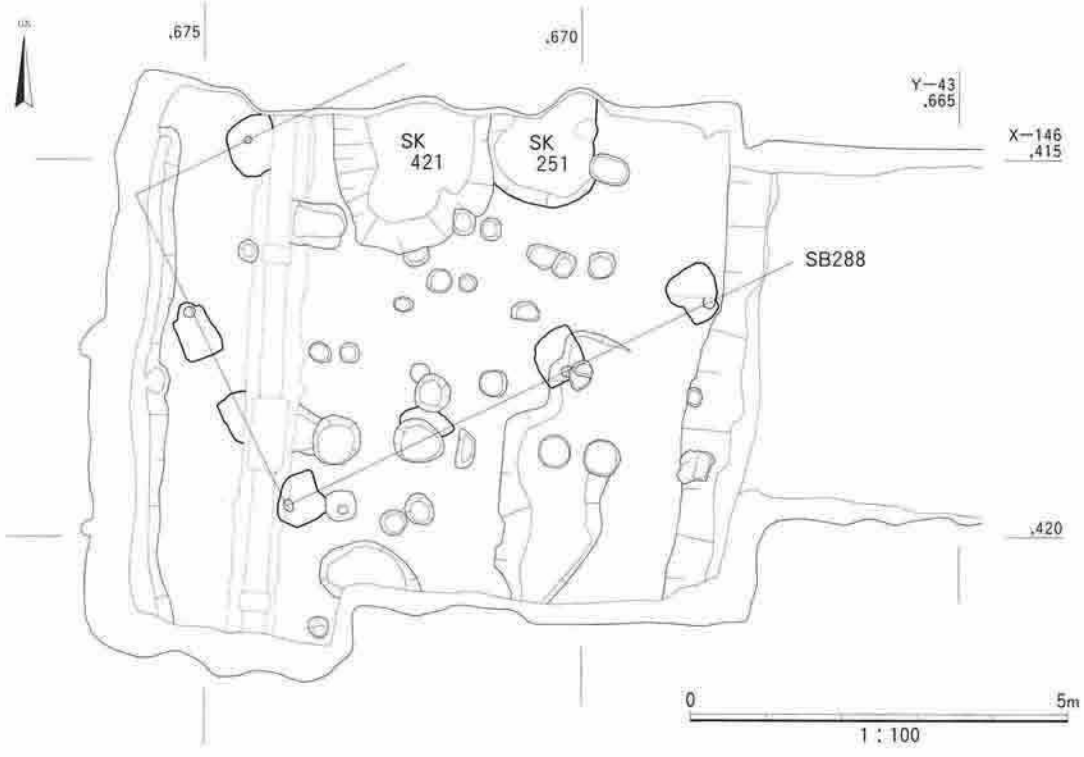


Fig.21　SB288平面図

跡の直径は20～28cmである。

SB288　２Ｃ区で検出された桁行４間以上×梁間３間の掘立柱建物である。柱間は桁行が2.1m、梁間が1.5mで、柱痕跡の直径は13～15cmである。

ii）溝(Fig.22、図版９)

SD203　２Ｅ区にある北東－南西方向の溝で、前調査区ではやや南に曲がる。幅は0.9mで、深さは0.5m前後である。須恵器の甕が据えられていた。出土した土器の様相は前調査と変わらず、難波Ⅱ新段階(時期区分は第Ⅴ章第２節を参照)である。

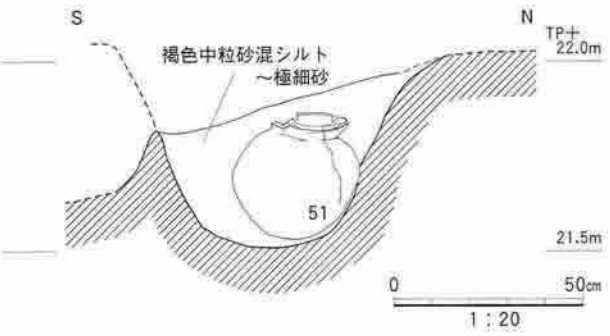


Fig.22　SD203断面図

SD211　２Ｅ区の東端から３Ｅ区の西端にかけて検出された溝である。SD210と平行して掘られている。今回の調査で北半が確認された。幅は0.4mで、深さは0.1～0.2mである。土器は細片のみであったが、おおむね難波Ⅲ中段階、７世紀中葉ごろと思われる。

iii）土壙

SK250　２Ｅ区にある2.5m×1.0mの隅丸長方形の土壙である。深さは0.1m前後で浅いが、比較的遺存状態の良好な土器が出土した。時期は難波Ⅲ中段階で前期難波宮の造営直前、７世紀中葉である。

SK251　２Ｃ区で検出された東西1.4m×南北1.6m以上の不整円形の土壙である。深さは0.2mである。西隣の後期難波宮期の土壙SK421に切られている。難波Ⅱ新段階、６世紀後葉～７世紀前葉の土師器・須恵器が出土した。　(佐藤)

２）遺物

ｉ）弥生時代以前の遺物(Fig.23～26、Tab.２)

すべて遊離資料であるが、弥生土器３点と縄文～弥生時代の石器(石鏃・石鏃未成品・クサビ形石器・剥片)９点が出土した。

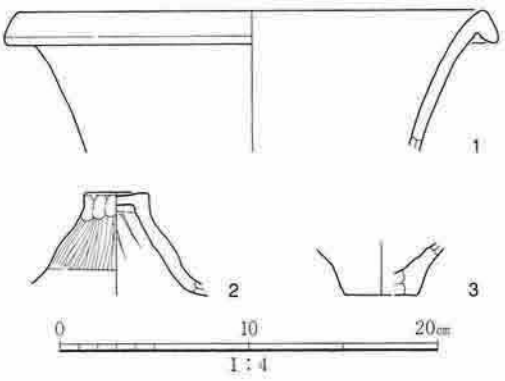


Fig.23　弥生時代の土器

弥生土器1は口縁部がラッパ形に開く壺で、口縁端部を斜め下方に折返す。茶褐色を呈し、生駒山西麓産の胎土である。2は口縁部を欠く蓋で、体部外面はヘラミガキ、内面はナデで調整する。3は甕の底部である。器表は風化が著しいがタタキは見られない。これらの土器は弥生時代中期のものである。

石鏃4～7・石鏃未成品8・クサビ形石器11・剥片9・10・12はすべて安山岩製である。計測値や調整などの詳細はTab.２に示した。

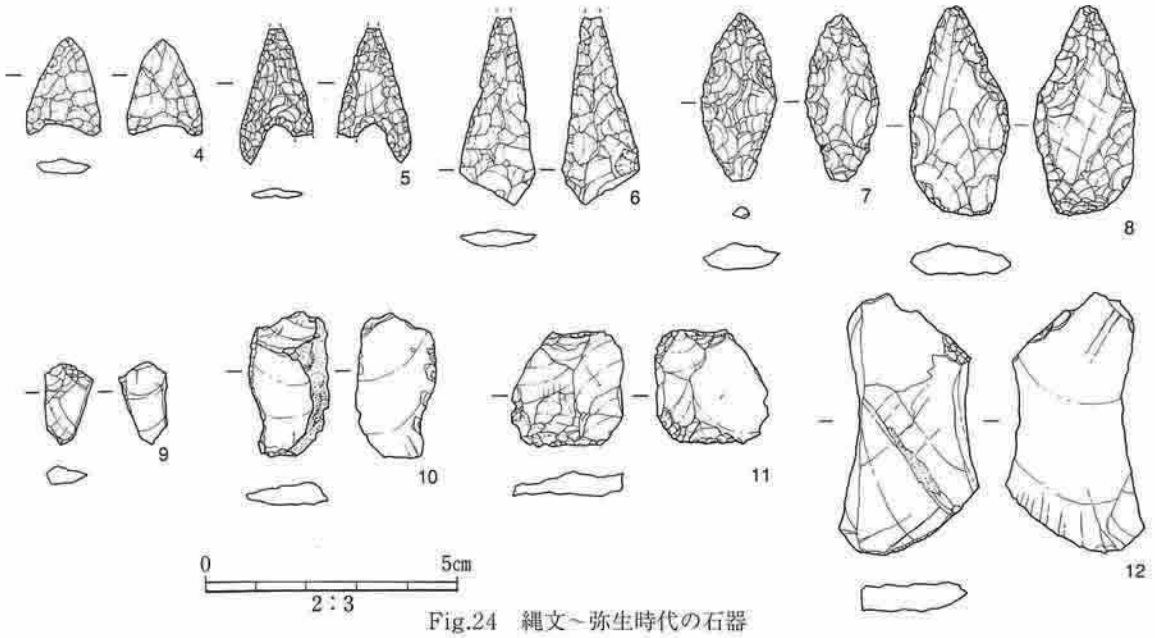


Fig.24　縄文～弥生時代の石器

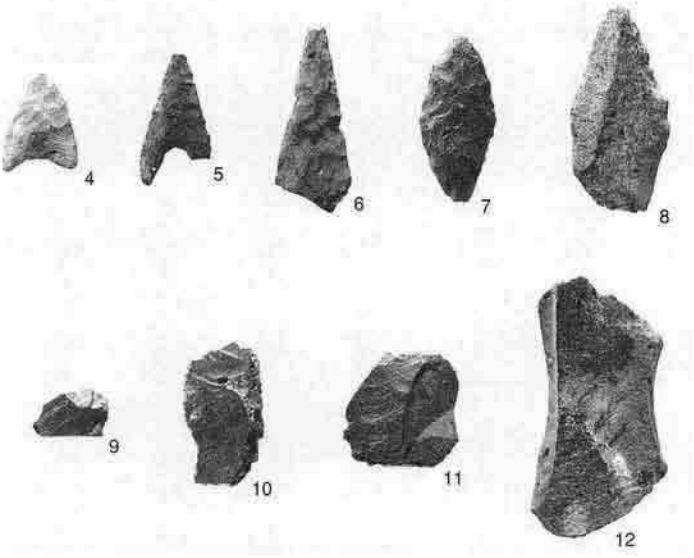


Fig.25　縄文～弥生時代の石器

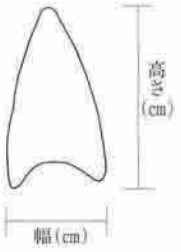


Fig.26　石器の計測

Tab.2　石器計測表

No.	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	特　徴
4	石鏃(凹基式)	2.0	1.5	0.3	0.8	安山岩	表面、裏面ともに平坦剥離が施されている。風化が著しい。
5	石鏃(凹基式)	2.7	1.4	0.2	0.7	安山岩	裏面の周辺と、表面全体に平坦剥離が施されている。先端と脚部は欠損している。
6	石鏃(凹基式?)	3.7	1.5	0.3	2.0	安山岩	表面と裏面に平坦加工が施されている。先端と基部は欠損している。
7	石鏃(凸基式)	3.4	1.6	0.6	3.2	安山岩	裏面側に周辺加工が施された後、表面全体に平坦加工が施されている。右側縁基部には急角度の調整加工が認められる。
8	石鏃未成品	4.2	2.0	0.7	5.6	安山岩	打点を斜めにとった剥片を素材とし、裏面側の縁辺と表面両側縁部に調整加工が施されている。
9	調整剥片	1.6	1.0	0.4	0.5	安山岩	石核調整あるいは、剥片調整に伴って剥離された細部調整剥片である。
10	細部調整のある剥片	2.9	1.6	0.5	2.2	安山岩	左側縁部に細かな調整加工が施されている。
11	クサビ形石器	2.3	2.3	0.5	3.0	安山岩	上下両端部には双方からの加圧による刃つぶれが認められる。
12	使用痕のある剥片	5.2	2.8	0.6	9.7	安山岩	両側縁部は折れ面で構成され、素材の縁辺部には微細な使用痕が認められる。

本調査地では以前の調査でも石鏃が出土している[大阪市文化財協会1992]。遺構には当該時期のものはなく、集落の存在を示すような資料は得られていないが、この地で人間が活動していたことを物語っている。

ii）遺構からの遺物

掘立柱建物(Fig.27)

13～35は前期難波宮造営前の掘立柱建物の柱穴から出土した土器である。土師器には甕あるいは甑・鍋の把手28・35、須恵器には杯H蓋13・20・21・30～32、杯H14～19・22～24・29・34、高杯25・26、鼈27、短頸壺33がある。13～15はSB266から、16～19はSB236、29はSB232から出土し、難波Ⅱ新段階のものである。20～28はSB246から、30～35はSB243から出土した。同Ⅲ古段階に当ると思われる。また、SB241・248・265からも土器が出土しているが、細片のため図化できなかった。時期は概ねSB241が難波Ⅲ新段階、SB248が難波Ⅱ新段階～Ⅲ古段階、SB265が難波Ⅱ新段階である。

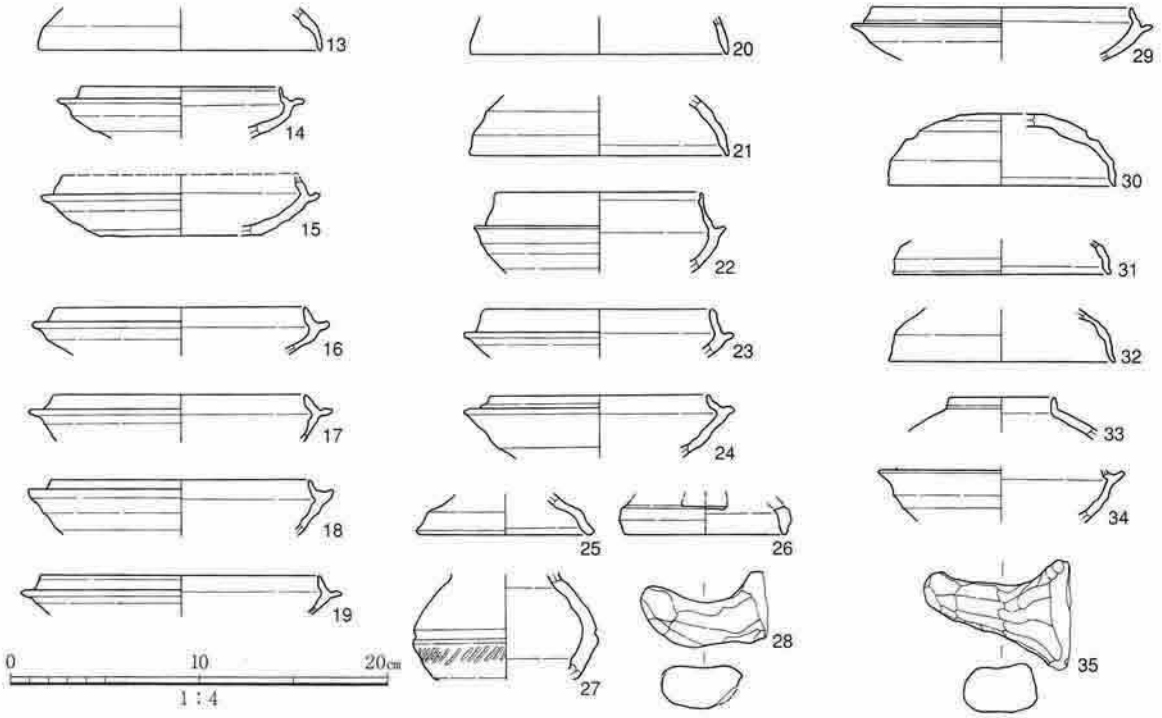


Fig.27　掘立柱建物出土土器
SB266(13～15)　SB236(16～19)　SB246(20～28)　SB232(29)　SB243(30～35)

SD203(Fig.28、図版36)

須恵器37～51、土師器52～57が出土した。37～39は杯H蓋で、口縁部径が12.6～12.9cmである。口縁端部は丸く、稜は形骸化しわずかに残るにすぎない。杯H40～42はいずれも破片で、受部径が15.4～16.6cmである。口縁部は短く内傾し、端部が上へつまみあげられた形状をとる。43・44は有蓋高杯の蓋で、つまみの上部が前者は丸く、後者はやや凹む。高杯は脚部が長脚のもの45と低脚のもの47がある。45は3方に透し孔があり、裾部の2個所に2条1組の凹線を巡らす。47の透し孔は2方向で、端部を丸くおさめる。46は直口壺の口縁部で、外面にはカキメを施す。甕には口縁端部が外側へ丸く肥厚する49・50と、46に似た口縁端部をもつ48・51がある。52・53は高杯の脚部である。脚柱部の

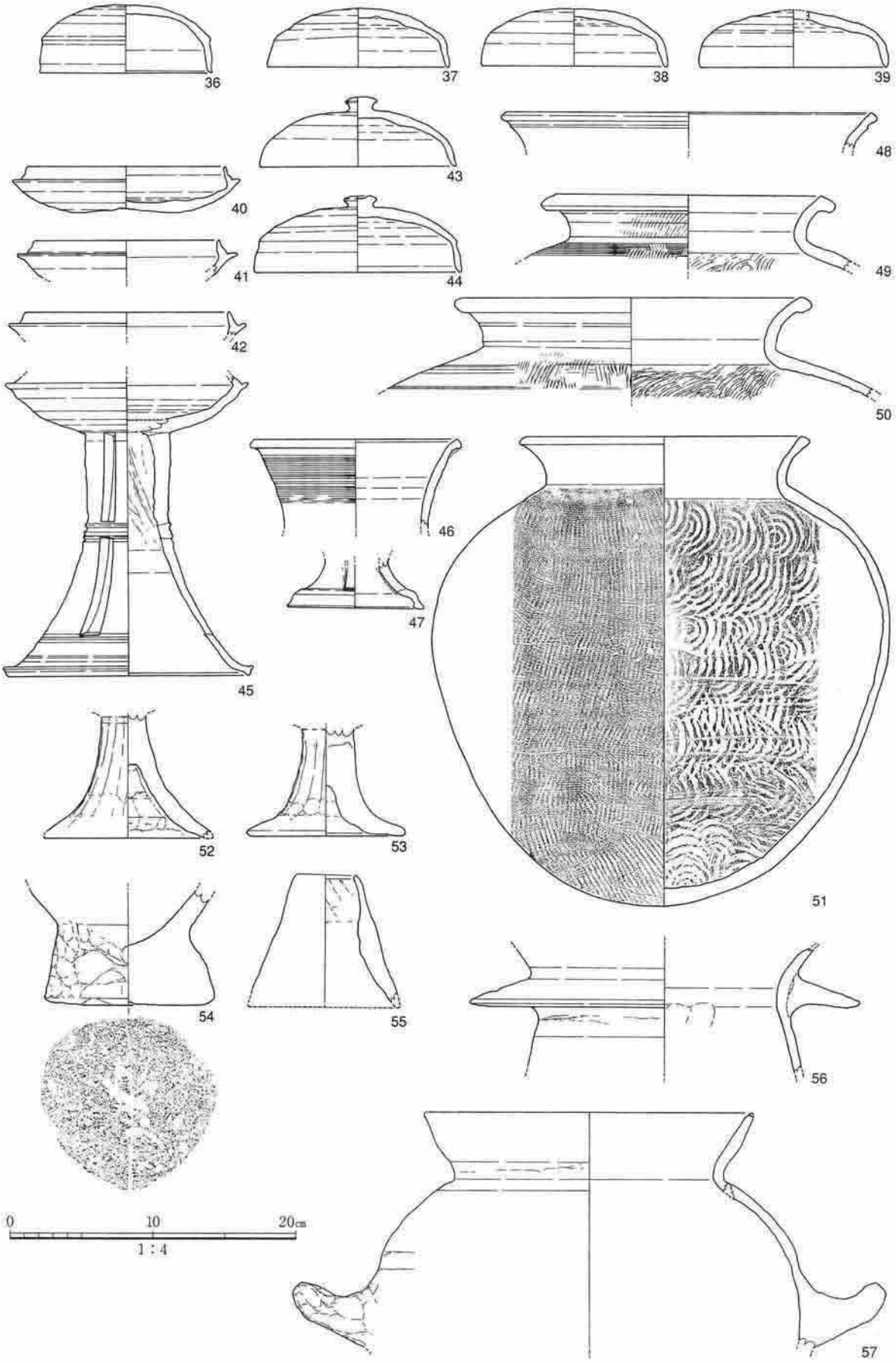


Fig.28　SK221・SD203出土土器
SK221(36)　SD203(37～57)

外面はヘラで面取りをし、裾部との境にはユビオサエの痕が残る。内面のヘラケズリは下部にのみ行われ、上部は中実のままである。煮沸具には羽釜56と把手付甕57があり、いずれも調整は内外面ともナデである。54は台付鉢である。底部の裏面には木の葉の圧痕を残す。55は脚部と考えられるが、器形は不明である。須恵器はTK43型式に類似し、土師器は「難波型」(註１)と呼称されるものに当る。難波Ⅱ新段階に属し、６世紀後葉～末の年代が与えられる。

SK221(Fig.28)

36は須恵器の杯H蓋である(註２)。天井部が丸く、上位約1／3にヘラケズリを施す。また、稜は鋭く、口縁端部はやや内傾することなどから、MT15型式に併行すると考えられ、難波Ⅱ中段階のものである。

SK250(Fig.29、図版36)

土師器高杯61・鍋62、須恵器杯H58・59・𤭯60がある。62の体部外面は風化しているが、ハケメがまったく見られず、ナデ・ユビオサエによると考えられる。58・59の底部外面はヘラ切りの後不調整である。60は脚をもつ特異なタイプである。胎土・焼成は他の須恵器と大差がなく、生産地が異なるものではなかろう。時期は須恵器杯Hの特徴から難波Ⅲ新段階のものと考えられる。

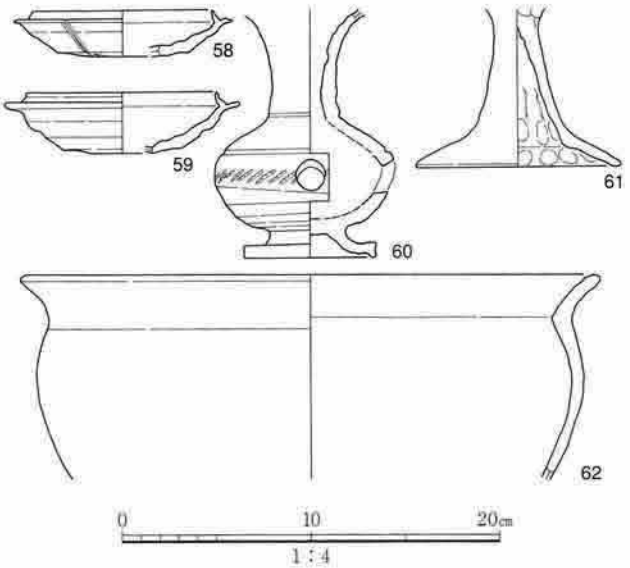


Fig.29　SK250出土土器

iii) 地層からの遺物

当該期の地層から出土した遺物のうち、まず土器を中心に報告する。瓦については後世の遺構・地層から出土したものもあり、次目でまとめて述べる。

第8b層(Fig.30～34、図版36～40)

谷の肩部に堆積した第8b層から以下のような６世紀代の土器がまとまって出土した。

土師器には杯63～68、高杯70～74、鉢69、台付鉢75～78、壺81～83、甕79～88、羽釜89・90が

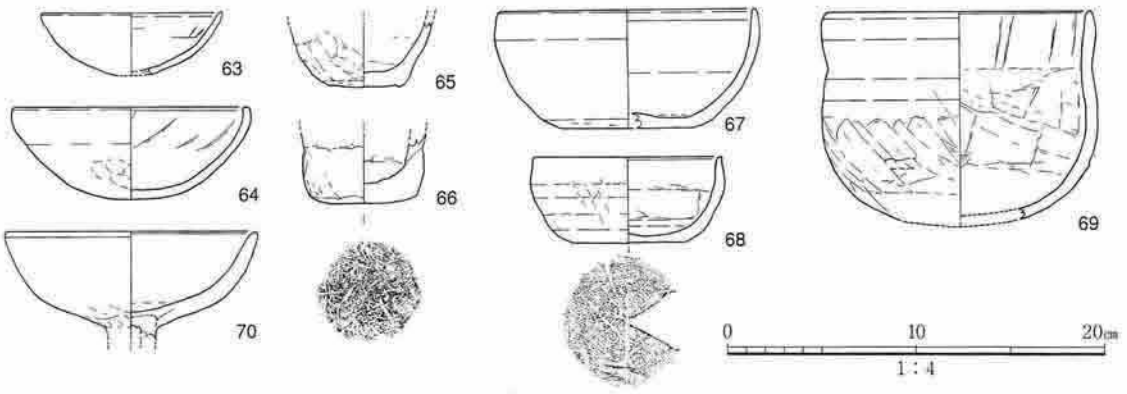


Fig.30　第8b層出土土器－１

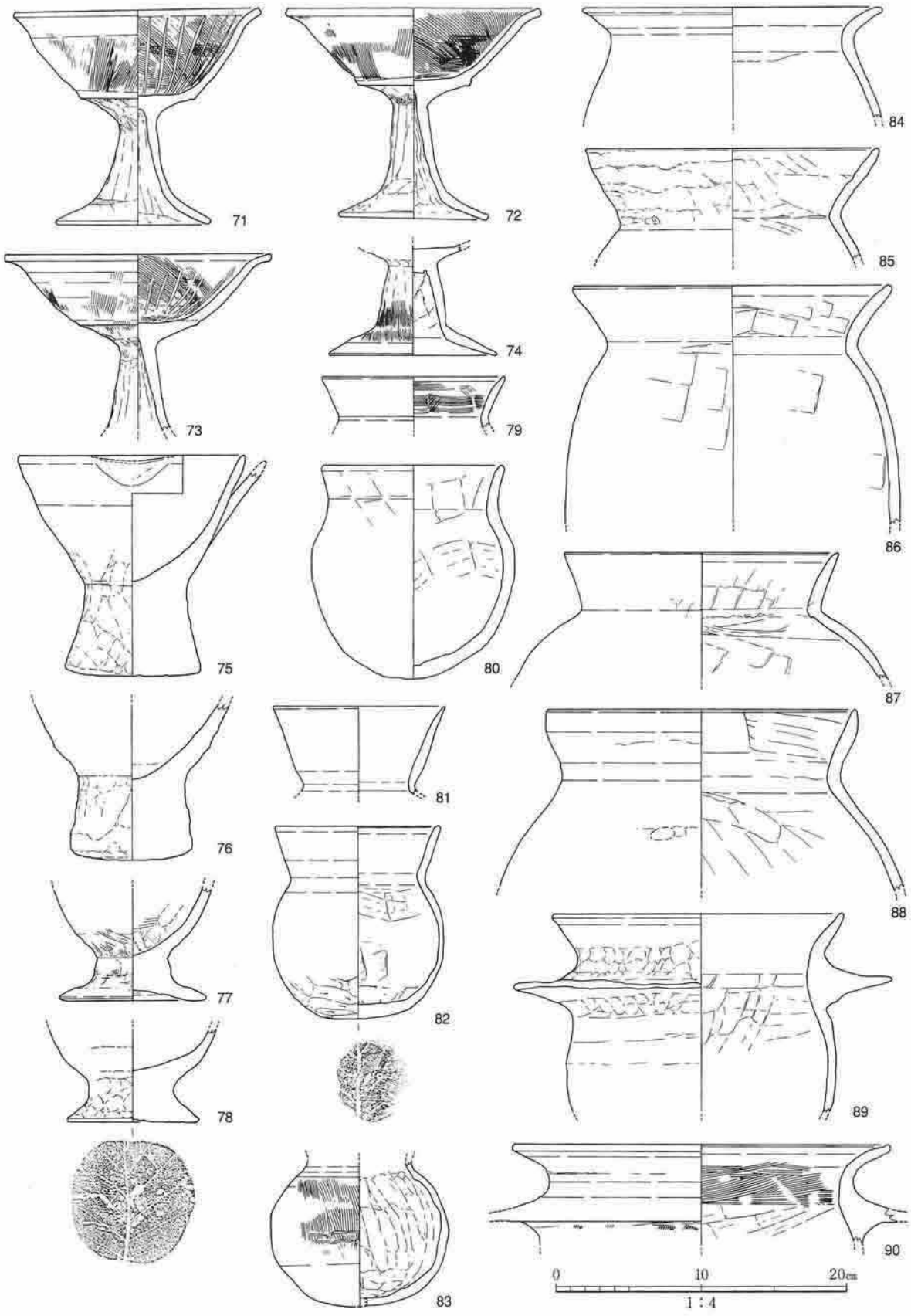


Fig.31　第8b層出土土器－2

ある。63・64は口縁部が内湾する浅めの丸底鉢である。いずれも内面に工具のあたりが見られる。65・66は手づくねで作られた杯の底部で、前者は外面にケズリ痕が、後者は裏面に木の葉痕が残る。67・68は平底の杯で、67は径高指数が46で、68は径高指数が45である。底部外面を前者は手持ちヘラケズリで調整し、後者には裏面に木の葉痕が残る。高杯には口縁部が斜め上方にのびる70と、外反する71～73がある。調整は前者がナデ、後者はハケを主体にし、ヘラによる放射状暗文も併用される。74は高杯の脚部である。71・72が脚部外面をヘラで面取りし、内面にシボリ目や指圧痕を残すのに対し、74の調整は外面がタテハケ、内面はヘラケズリである。69は頸部のくびれがわずかで、全体に煤が付着することから煮沸に使用されている。台付鉢は台の形状で大きく二分でき、台がやや裾広がりで6cmほどの厚みをもつ75・76と、裾が外側へ大きく広がり、底部中央がやや浅く凹んだ77・78がある。75には口縁に片口がつき、75・78の底部裏面には木の葉痕が残る。また、76の外面には煤が付着する。81～83はいずれも直口壺である。81の調整はナデで、口縁部と肩部の境に稜をなす。82は口頸部の外面をナデで、底部の外面を手持ちヘラケズリで調整し、底部には木の葉痕が残る。83は体部の外面をタテ方向のハケで調整した後、下部にヨコ方向の暗文を施す。79・80は小型の甕で、79は調整にハケを使用するが、80は内外面とも板ナデを多用する。84～88は大型の長胴甕の上部である。調整は器面が摩耗する84はわからないが、残りは板や指によるナデである。羽釜は調整と鍔の付け方で2つに大別できる。89はナデで調整を行い、鍔を水平につけるもので、鍔の上下にユビオサエの痕が顕著に残る。90は調整にハケを併用しており、鍔はやや下向きである。

須恵器には杯H蓋91～104、杯H105～129、高杯131～133・同蓋130、壺134・135、提瓶136、甕137～144、壺145がある。杯蓋は大きさ、口縁端部や稜の形状などから数種類に分類できる。91・92は口縁部径が13cm前後で、口縁部と天井部との境にはっきりとした稜をもつ。93～96は口縁部径が約15cmで天井部が丸い。また、稜が明瞭で口縁端部は内傾する。97～102は口縁部径が約14.5cmで器高は4cmに満たず、稜は鈍い。103・104は口縁部径が15cm前後で稜が形骸化し、口縁端部も丸くおさまる。杯Hも杯蓋同様、数種類に分けることが可能である。105～114は受部径が14.0～14.5cmのものと16.0cm前後のものがあり、体部は丸く、器高は5.5～6.0cm程度である。内傾する口縁端部が明瞭な稜をなす。115～117は受部径が14.5cm前後で、底の平坦な部分が広く器高は5cm程度である。口縁端部内面の稜は不鮮明である。118～129は受部径が14.5cm前後のものと16.0cm前後のものがあるが、いずれも器高が約4.5cmで前掲したものより低く、短く内傾した口縁部の端部は丸く稜をなさない。なお114・117・122の内面には当て具痕が残る。130は高杯の蓋で丸いボタン状のつまみをもち、天井部外面はヘラケズリの後、ヨコナデで調整する。131は長脚1段の高杯で完形である。3方に透し孔をあけ、器面全体に自然釉がかかる。132は長脚高杯の杯部で、外面には焼けムラが斑点状に残る。133は長脚高杯の脚部であるが、透し孔が2方向であることからやや時代が下る可能性が高い。134はほぼ完形の短頸壺で、肩部にヘラ記号がある。135は台付長頸壺で、底には脚部がとれた痕があり、肩部には部分的に粘土紐の継ぎ目が見られる。136は肩部に小さな鈎状の把手を有し、口縁部の外面には「×」状のヘラ記号がある。甕はいずれもタタキで整形をしたのち、上部にナデやカキメを施すもので、口縁部径は15.6～22.6cmに及ぶ。口縁端部の形状で丸くおさまるもの137～139・

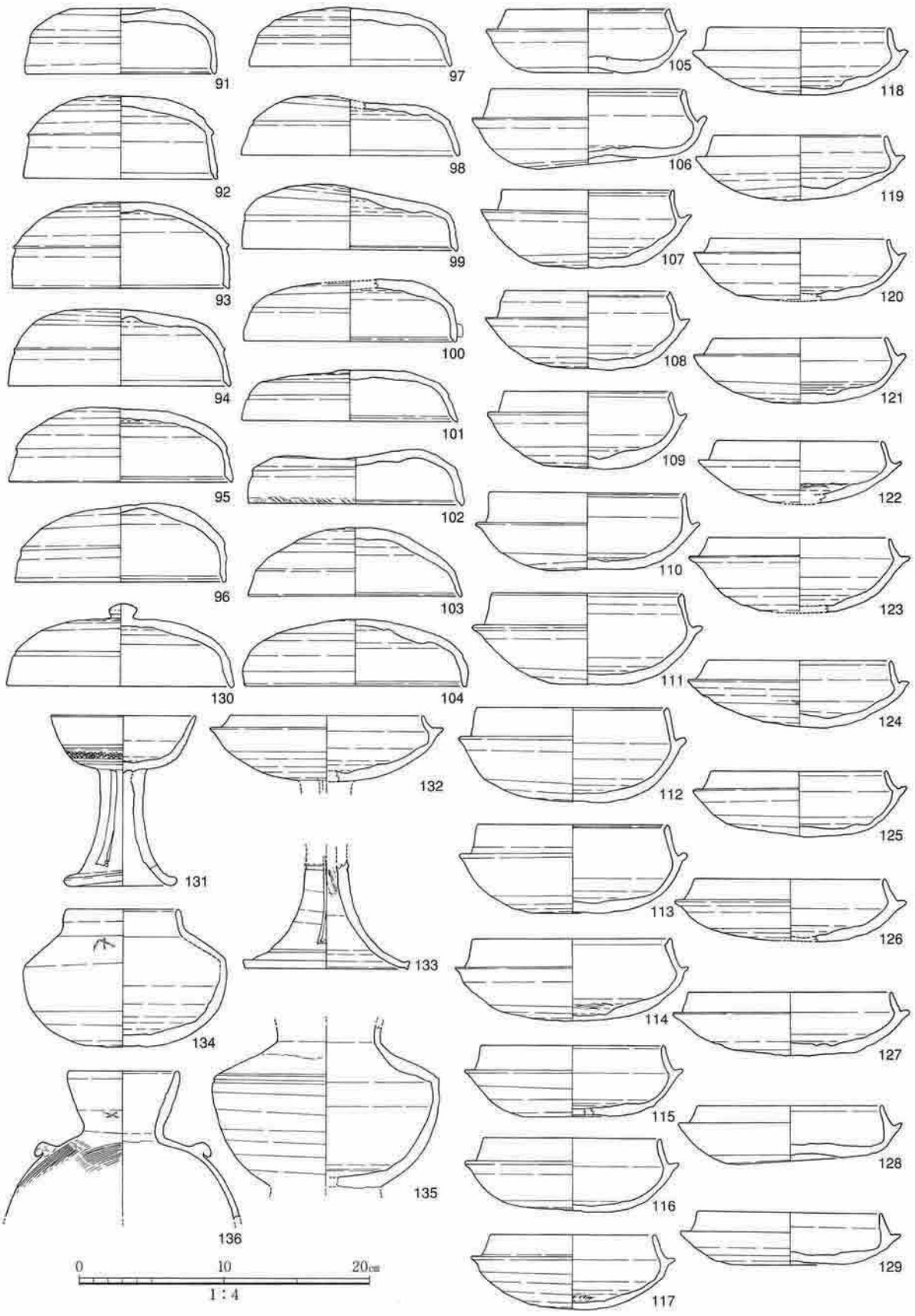


Fig.32　第8b層出土土器－3

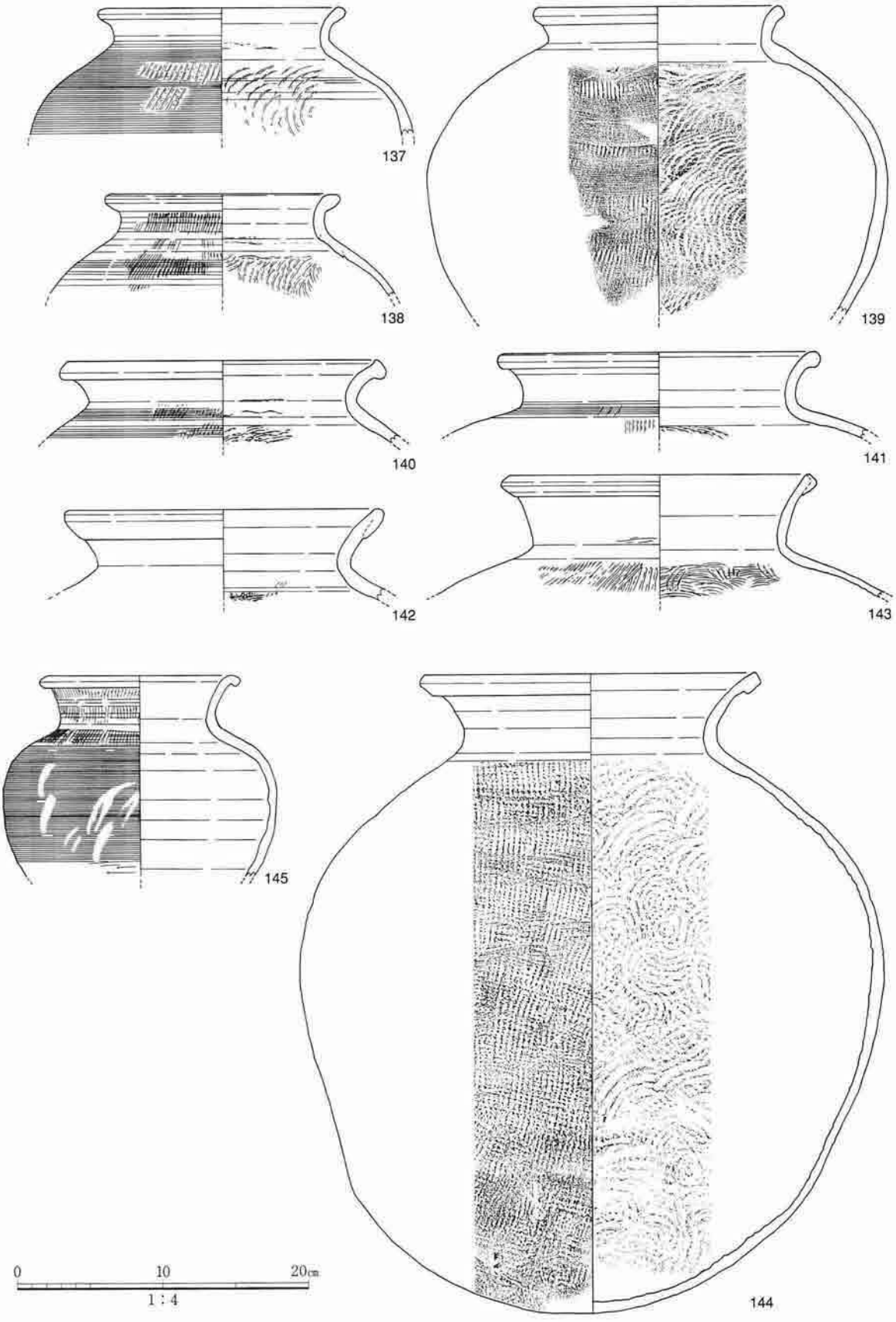


Fig.33　第8b層出土土器－4

141、やや上方につまみ上げるもの140、外側に肥厚するもの142～144の3種類に大別することができる。145は底部を欠く壺である。体部外面の調整はカキメで部分的にユビナデで消えている。

第8b層に含まれる土器については、土師器は「難波型」の範疇におさまるものが大半を占めるが、船橋O－Ⅳ・Ⅴ段階[原口 他1962]の資料に類似する71～74・81や、調整にヘラミガキを施す83など、やや異なる特徴をもつ土器もある。須恵器についてもそのほとんどはMT15・TK10・MT85・TK43型式に属するものであるが、TK209型式に類似する131・133や142～144のように6世紀末まで下ると考えられる甕も少量含まれる。難波地域における編年ではこれらは難波Ⅱ中～新段階に当る。以上のことから、土器の年代はほぼ6世紀全般にわたる、といえるであろう。

また、本層からはこれらの土器に伴って石製垂飾146が1点出土している(Fig.34、図版37)。長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ3㎜である。上半部に2対の孔があり、下端は外側に曲がって終わる。中央部には数条の沈線が両面に施される。滑石製である。亀井正道氏の分類によれば、大きくは琴柱形石製品に含まれ、その中の「本村型」と呼ばれる型式に相当するようである[亀井1972]。ただ、他の琴柱形石製品と異なり、同型式は懸垂用の小孔2個をもったペンダント状であると記述されている。年代は、標識資料である埼玉県本村遺跡出土例は6世紀前半とされている。他の例では4世紀にさかのぼるものもあるが、今回報告する146は土器の集中していた個所から出土しており、その年代観からすると、本村遺跡例にもっとも近いと考えられる。出土遺跡の別でみると、古墳出土例はなく集落跡からの出土が多いとのことで、その点では今回の146も同様である。また、これまでの集成[群馬県埋蔵文化財調査事業団1986]でも出土は東日本に傾っており、管見によれば西日本では本例が唯一である。

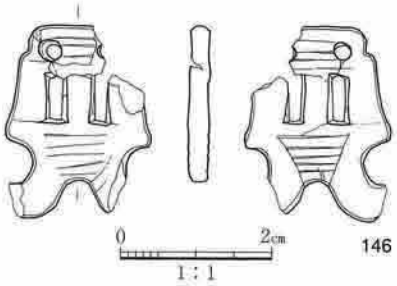


Fig.34　第8b層出土石製垂飾

第8a層(Fig.35・36、図版36・41)

前期難波宮水利施設の造営前の堆積層である本層には、先に報告した6世紀代の遺物から後述する7世紀中葉の遺物までが含まれていた。

土師器には杯147～150・高杯153～156・台付鉢151・152・甕157～159・羽釜160がある。杯には器壁の厚い粗製のもの149や、粗製ではあるが薄くつくられ、精製の杯Cと形態のあまり変わらないもの147・148、精製の杯C150がある。150は内面に暗文が施されていない。杯Cは他にも出土しているが、あまり多くはない。高杯154～156の脚部も器壁が厚くて粗いつくりである。杯部の外面はすべてユビオサエとナデによって仕上げられるのみで、暗文は施されない。図化しなかったものの中には暗文をもつ精製のタイプがあるが、極めて少ない。台付鉢151・152の底部の裏面には木の葉の圧痕が残っている。甕には外面をナデ・ユビオサエのみで仕上げるもの157・159と、ハケメを施すもの158とがあり、前者の方が多い。羽釜は在地の胎土でつくられ、やはりナデ・ユビオサエ調整である。

須恵器には杯H163～166・同蓋161・162・杯G169・170・同蓋167・168・高杯171・172・177・同蓋176・𤭯173～175・甕178・横瓶179などがある。杯Hの受部径は10.8～14.6cm、同蓋の口縁部

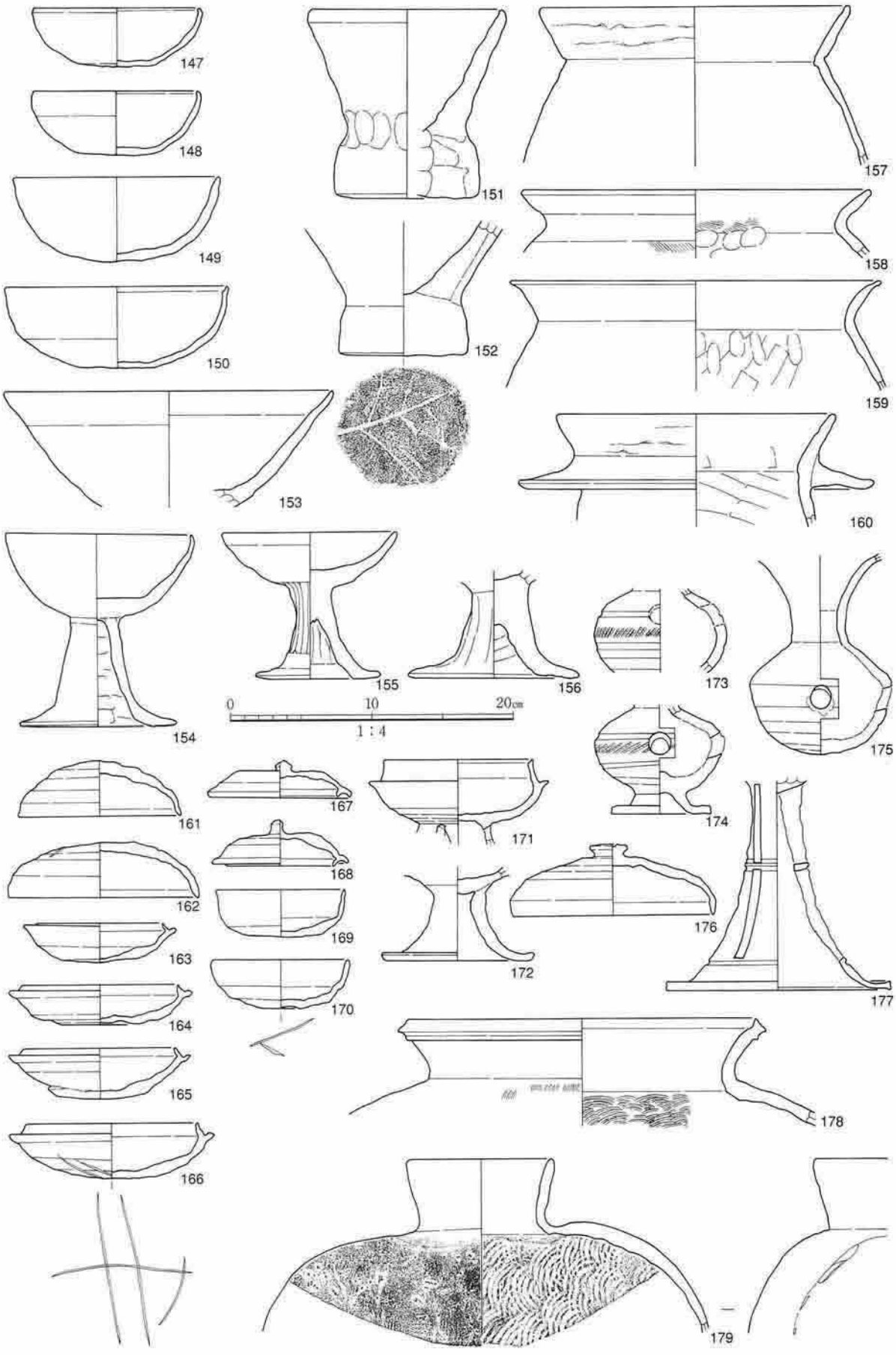


Fig.35　第8a層出土遺物

径は11.6・13.5cmで、162・164・166は底部(蓋は天井部)にヘラケズリを施す。165は164と受部径がほぼ同じだがヘラケズリは施されていない。もっとも小さい163は次節で報告する前期難波宮期のものと大差がなく、底部・天井部はヘラ切りのまま不調整である。杯G・同蓋も後者の杯Hと同時期のものである。高杯には低脚の古いタイプのもの171や長脚の2段透しのもの177、低脚で透し孔のない後出的なもの172がある。高杯蓋176は177のタイプに伴うものであろう。甕は図化した173～175以外にも多く見られた。173・174は体部の中程に櫛先の刺突を連続させた文様帯が巡るが、175には文様はない。174は脚をもつ。脚部内面から体部外面の下半にかけて自然釉が付着していることから、口縁部を伏せた状態で焼成したことがわかる。甕178・横瓶179の外面には自然釉が付着している。

以上の土器のうち、土師器は、杯・高杯・台付鉢・甕・羽釜といった各種の器形において外面調整がユビオサエ・ナデによる粗製のタイプが存在し、大部分を占めている。京嶋覚による「難波型」の土器である[京嶋1989a]。これらのあり方は先述した第8b層出土土器と似通っているが、同層で主体を占めた難波Ⅱ中段階(6世紀前葉～中葉)のものがほとんどなく、かつ難波Ⅲ(7世紀前葉～中葉)に下るものが見られることは後出的な要素である。この第8a層は第8b層の堆積後から前期難波宮の造営直前まで谷の内部に堆積した地層であり、その状況は土器の年代からも矛盾しない。

その他の土器として新羅土器が2点出土している。180は口縁部が短く、頸部から肩部にかけて水平に近い角度で広がる形の短頸壺である。三角形の中を斜線で埋めた文様帯の外に円形に刻みを入れた文様を並べる。前者は手描きで、後者はスタンプである。181は長頸壺の肩部と思われる。内側から三角形・水滴形・円形の文様をそれぞれ連続して施文する。180・181はどちらも三角形とその中の斜線をスタンプではなく線刻しており、古い特徴をもつ。181はSG301周辺の第8a層から出土した。180は後世の地層のものであるが、上のような施文の特徴から7世紀中葉まで下るものではないと考えられるため、ここで報告した。

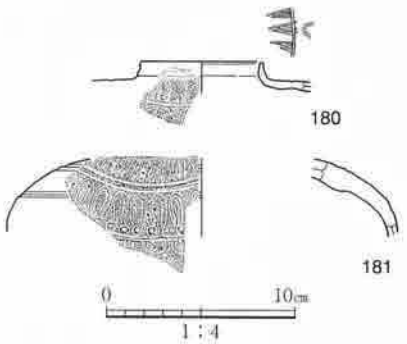


Fig.36　新羅陶質土器

土製品(Fig.37、Tab.3、図版43・51)

ミニチュア壺182、土錘(漁網錘)2007がある。182は第8a層から出土した。ナデ調整である。祭祀に用いられたものかもしれない。土錘は今回の調査で出土した102点のうち、出土状況から確実に難波宮造営前であるといえるものは5点のみであった。各々の出土遺構・地層や計測値は前期難波宮期の項で一括して報告するが、形態や大きさの違いはあまり顕著ではない。



Fig.37　ミニチュア壺

ｖ) 瓦(Fig.38、図版42)

古代の瓦のうち、7世紀前半に属するものを報告する。これらの中には前期難波宮以後の遺構・地層から出土したものが多いが、年代がさかのぼることが明らかなものはここに含めている。軒丸瓦183・184・186、軒平瓦185、鴟尾2001、丸瓦187、平瓦188がある。

軒丸瓦のうち、183・184は四天王寺の創建に用いられた軒丸瓦と同笵である。瓦当裏面が回転ナ

デによって調整されている点や胎土・焼成が酷似している点から、四天王寺所用瓦と同様に楠葉平野山窯の製品[八幡市教育委員会1985・1992など]であると考えてまちがいない。185は丸瓦部のみが残存するが、釘孔をもつことから軒丸瓦である。丸瓦187とともに玉縁をもつ形式である。玉縁の内面には布目がない。円筒形の型木を用いて筒部をつくったのち、強いヨコナデで調整した玉縁を接合させる。その特徴から飛鳥寺における「星組」の技法[花谷1997]によってつくられていることがわかる。

186は通有の平瓦より厚く、広端面がていねいに調整されている。四天王寺においては183・184の同笵軒丸瓦に組合って無文の軒平瓦が用いられている。この186もそれらの軒平瓦と類似するため、軒平瓦と考える。

鴟尾2001は鰭の基部と考えられる残存長10.1㎝の破片である。焼成は良好で燻されておらず、軒丸瓦・軒平瓦と共通している。

平瓦188は凸面・凹面ともていねいなナデ調整である。

以上の四天王寺同笵軒丸瓦以外の瓦も、楠葉平野山窯の製品である可能性が高い。これらの四天王寺所用瓦の難波宮下層遺跡における出土状況についてはかつて検討したことがあり[佐藤1999]、本書でいうところの難波Ⅲ以後に出土例は限られている。　（佐藤・辻・平井）

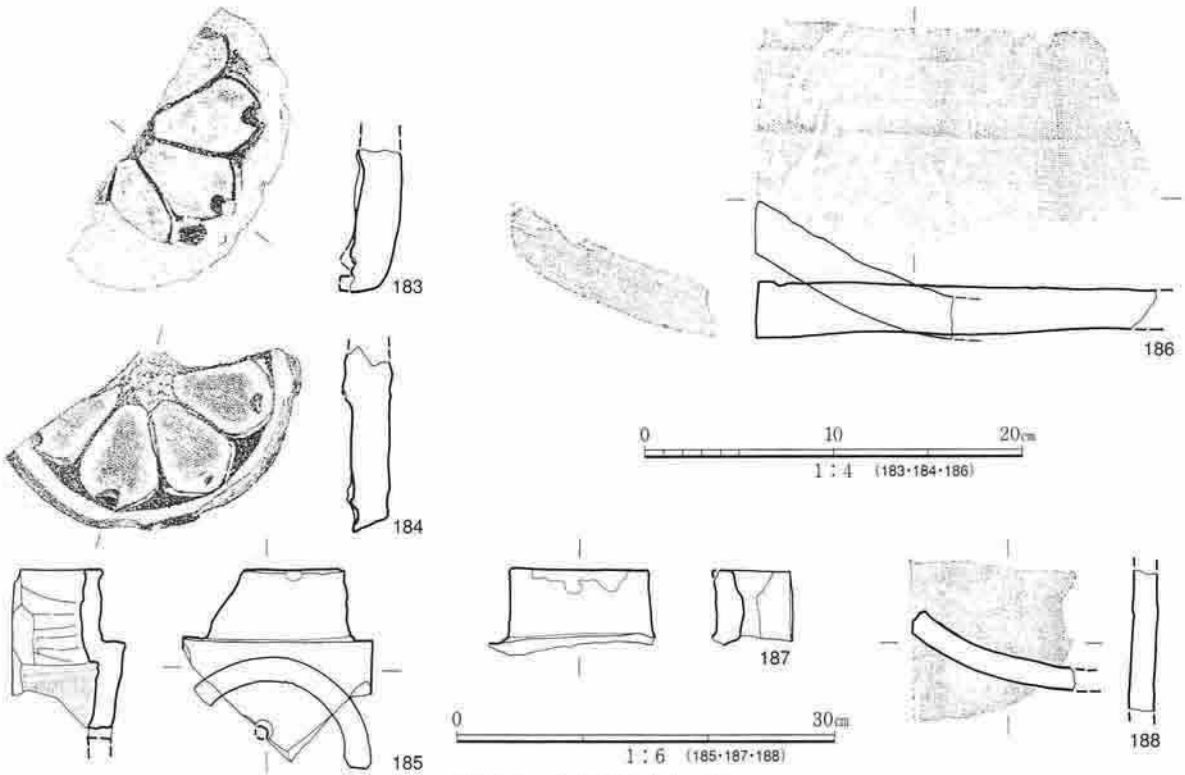


Fig.38　難波宮造営前の瓦
第7c層(183・187・188)　第7a層(184・185)　SK421(186)

註)

(1)「難波型」土師器とは、難波宮周辺においてMT15型式期に成立する、ナデを多用し、独自の形態をもつ土師器の様式をさす[京嶋1989A]。

(2)前報告では、SK221はTK217型式の土器が出土したSK218と同時に埋められている、と記述されている。

第３節　難波宮期の遺構と遺物

今回の調査で確認した遺構は前期難波宮期のものがほとんどで、後期難波宮期のものは２Ｃ区のSK421と既調査の２Ｄ区SP401のみであった。以下、まず前期難波宮の遺構・遺物から述べていく。

１）前期難波宮の遺構

ｉ）水利施設関連遺構

宮域の北西部に当る３Ｅ・４Ｅ区において、前報告で落込みSX501・502とされていたものが北西に開く谷であることを確認し、その中につくられた石組み溝SD301と泉施設SG301およびその周辺施設を検出した。この谷は、一本柱塀SA301・302で区画された中に倉庫を整然と配置した内裏西方官衙の西外にある。

SD301（Fig.39～42・45、図版10～17、原色図版１～３・６）

花崗岩の自然石を用いた溝である。側面は基底部に長径１ｍ前後のやや大きめの石を据え、その上に0.5ｍ前後の石を２～３段積み上げる。底にも石が敷かれている。幅は内法で約0.5ｍ、深さは約１ｍである。谷頭につくられたSG301からほぼ谷筋の方向に延び、途中の５ｍのところから蓋石をもつ暗渠となる。蓋石は最大のもので長径1.5ｍ以上、重さ約1.8ｔあり、平均しても重さ1.2ｔもの巨石が用いられていた。谷を埋立てた第7c層を掘込んで掘形をつくり、石を積んでから第7a層によって裏込めや蓋石の封土などが客土される。特に裏込めにはきめの細かい粘土が用いられ、外側から石の目地にていねいに詰めて、水が漏れるのを防いでいる。SG301と結合する部分では第7b層が堆積したのちに石が積まれていったことが確認された。SG301から湧き出た水を北西へ流す機能をもっていたと推定される。

埋土は大きく３層に分かれ、底近くには溝の機能時、あるいは機能を停止した直後のころの水成層である第6b層、その上には大量の第6a層の土砂が堆積し、半ば以上が埋まっていた。最後に第5c層による人為的な埋立てが行われる。暗渠部分の開口部ではこの層から後期難波宮の軒丸瓦がほぼ完形の状態で出土した（Fig.45、図版14－上）。埋立ての際に偶然に混入したとは考えにくいので、人の手によって差込まれたものであろう。暗渠部分をさらに奥へ進むと、この第5c層による埋戻し土が及んでおらず、埋戻し土を起源とする水成の堆積層で最上部が埋まっていた。

溝の内部から出土した遺物はあまり多くはないが、第6b層から難波Ⅲ中段階（７世紀中葉）の土器が、第6a層からは難波Ⅲ新段階～Ⅳ古段階（７世紀後葉～末）の土器が見られた（Fig.64）。その上位の第5c層には難波Ⅴ古段階（８世紀前葉～中葉）の土器や後期難波宮の瓦が含まれていた。また、周囲の谷の埋土である第7a・7c層からは難波Ⅲ中段階の土器が多量に出土した（Fig.52～56・59～63）。

SG301（Fig.39・41～46、図版18～21、原色図版１・２・４・６）

谷頭につくられた約８ｍ×５ｍの隅丸長方形をした窪みで、深さは１ｍほどである。調査時には「池」あるいは「水溜め」と呼称していたが、その機能は雨水を排除して湧水のみを利用したもので、むしろ

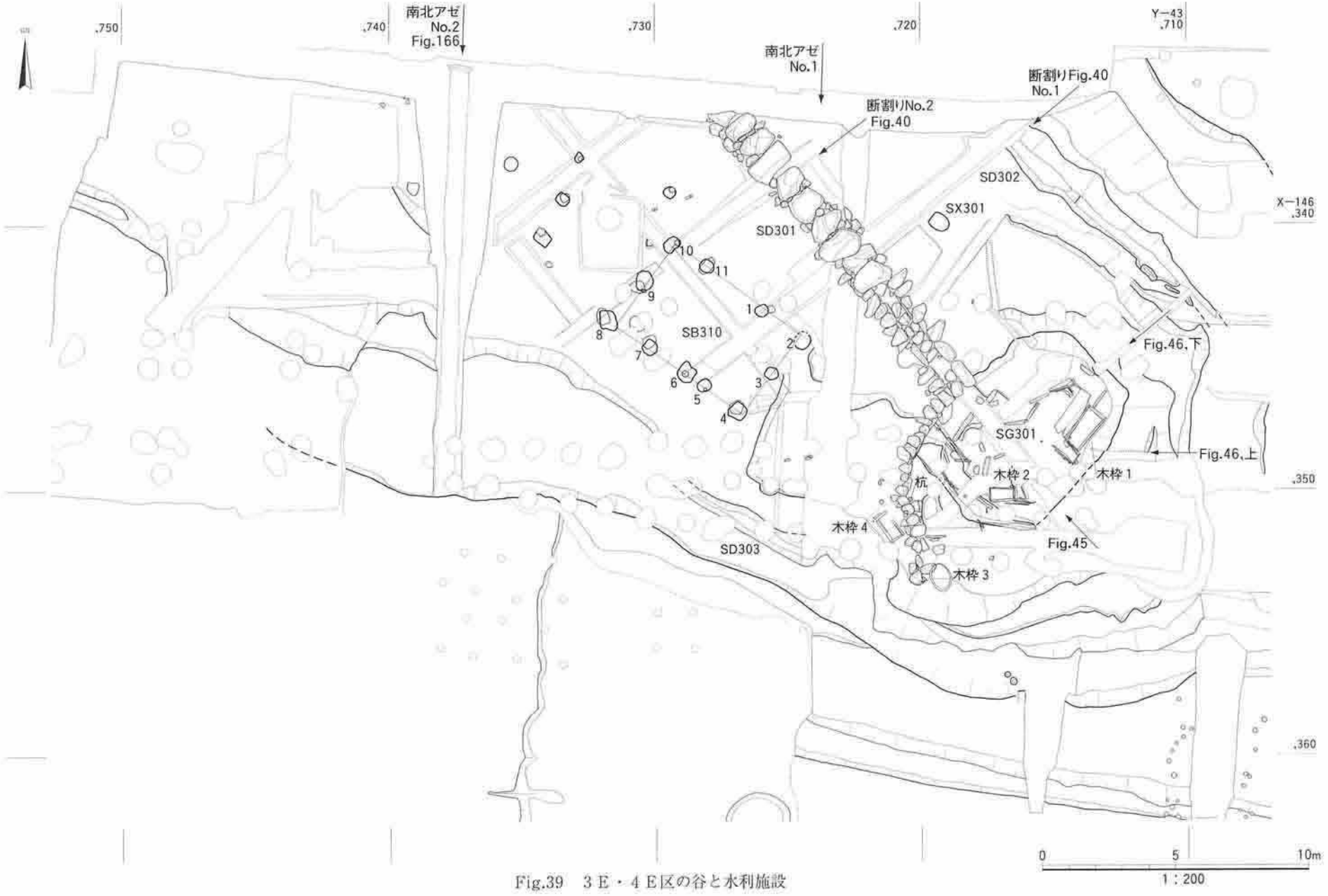


Fig.39　3E・4E区の谷と水利施設

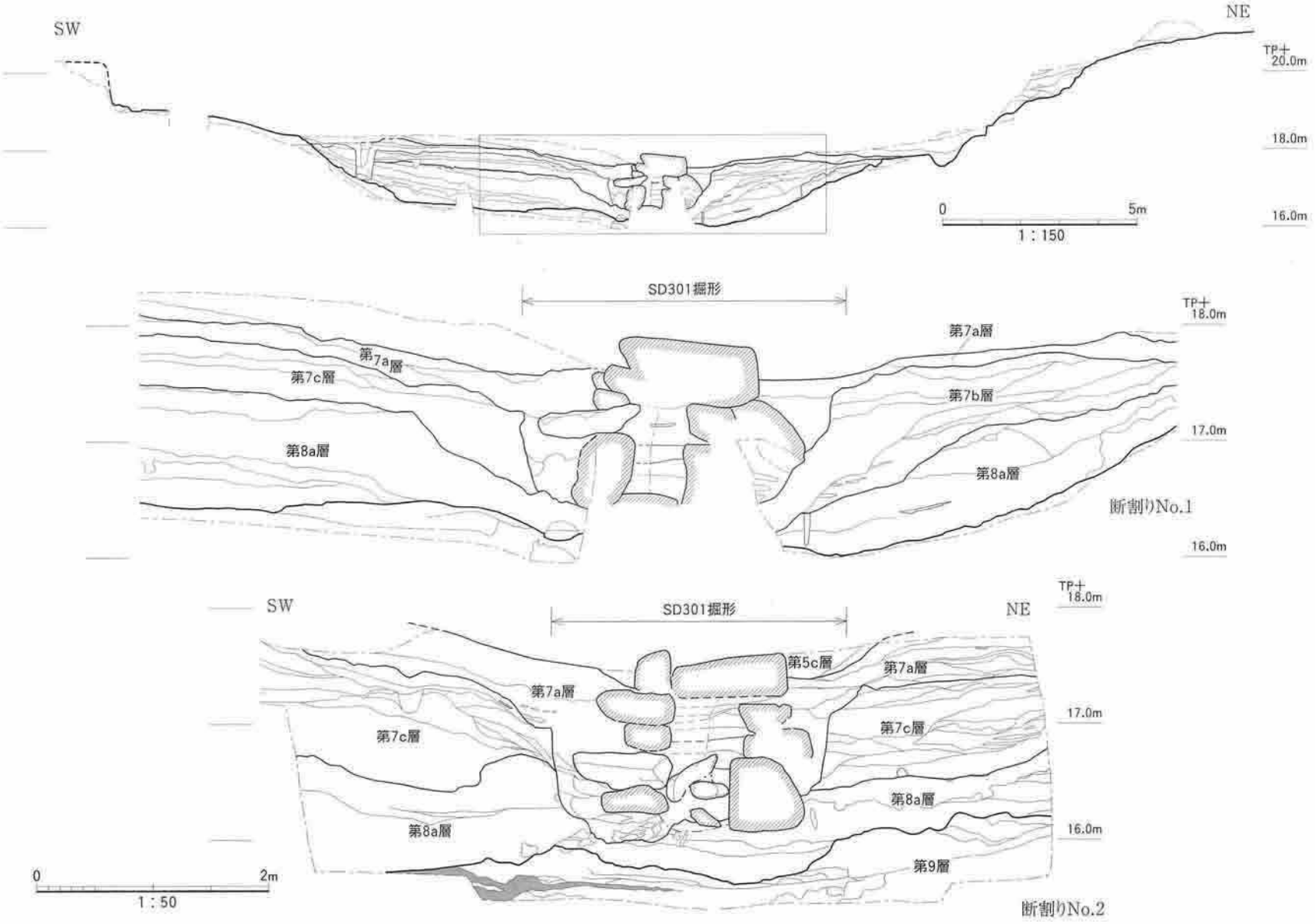


Fig.40　谷とSD301断面図

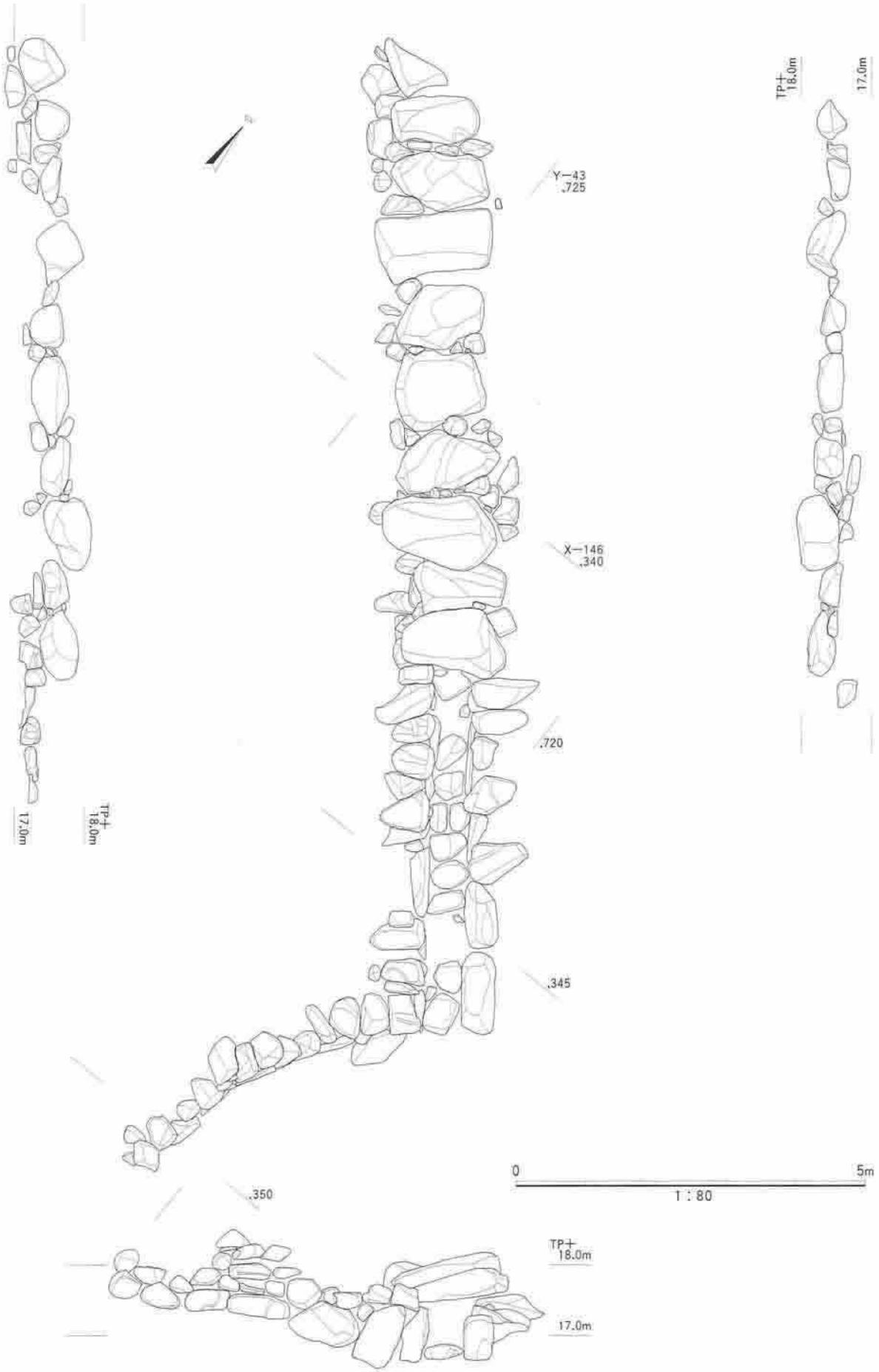


Fig.41　SD301・SG301石組み平・立面図(蓋石除去前)

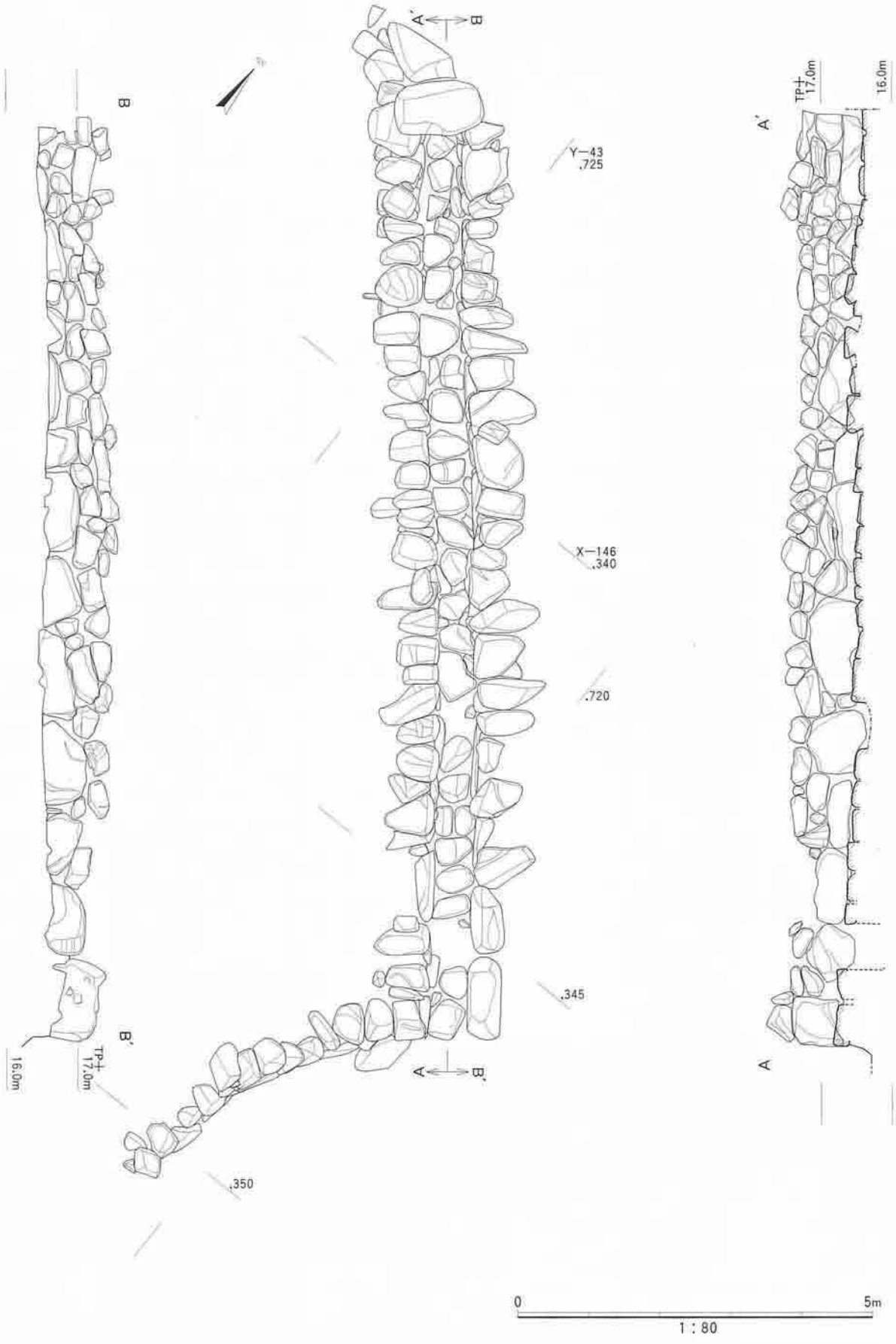


Fig.42　SD301・SG301石組み平・立面図(蓋石除去後)

井戸に近いものということができ、「泉」と理解するのが妥当である。したがって本書では「泉施設」として報告する。

肩部には部分的にSD301と同種の花崗岩を積むが、大部分は粘土を盛って固められていた。SD301につながる部分では、南西側には石組みが見られたが、北東側では石が検出されなかった。後世に抜取られた可能性を検討するために肩部の精査や断割りなどを行ったが、本来石が据えられていたかどうかについては結論を出せなかった。ただし、この部分は南東側などに比べて中の堆積層と肩部の盛土の識別がやや困難で、表面が損なわれていたように思われたので、北東脇２ｍほどの部分については石が据えられていた可能性はあると考えている。また、南西側の石積みでは、途中から積み方が乱れており、盛土の上に載せられたような状態で存在する。これらの一部は後述する木枠3を覆っており、後世（第5c層の客土の段階か？）に積まれたものと考えられる。

肩部の盛土は第7c層に相当し、石組み溝SD301よりも早い段階でつくられていたらしい。その後、第7b層の土砂が中に堆積したのちSD301が築造されるが、それほどの時期差は見積もる必要はないであろう。第7b層からは難波Ⅲ中段階の土器がまとまって出土した他、木簡２点と木簡を転用した人形１点などの木製品や多量の木材も見られた（Fig.68～78）。

南西部の石積みの脇に直径18㎝の丸太杭が打込まれていた。長さが4.8ｍもある長い杭で、発掘当初は現代のものかとも思われたが、旧日本軍の建物に用いられた杭などとは異なっており、検出されたのが石積みと同じレベルであることからSG301に伴うものと考えている。SG301を巡る石の内側にあることから、肩部の崩壊を防ぐ目的があったのではないかと思われる。

SG301の中には東寄りに木枠1、南寄りに木枠2が設けられていた。どちらも材を平面長方形に組んだもので、木枠1は長辺1.6ｍ、短辺0.8ｍで、木枠2は長辺1.0ｍ、短辺0.6ｍである。どちらも枠の上から底までは0.7ｍほどであったと考えられる。特別にしつらえた材ではなく転用材を用いて組まれていた。木枠1の材の中には柱材を半截して板材の代りにしているものも見られた。また、船材の転用かと思われるものもある。底には直径数㎝の川原石が敷かれていた。これらはSG301の底面から組まれているが、木枠1の検出中に石を周囲に並べて据えてある面があり、また、第7b層を掘込んだ掘形を検出したので、第7b層が堆積したのち、それを掘込んで材を組んでいったと考えられる。これらがつくられた時期、あるいは木枠1と木枠2とが同時に存在していたのかどうかについては、まず時期はこれらが第5b層に覆われていたため、泉施設が機能していた段階であることは確実で、おそらくSG301内に湧いた水を効率的に汲み上げる目的で当初から設け


Fig.43　SG301肩部の杭

られたものと考えられる。併存していたかどうかについては、たとえば片方が埋ってしまったためにもう片方を設けたと考えるよりは、両方を同時に使っていた可能性が高い。

上記の木枠以外にも、SG301の周辺にはあと２個所木枠が存在する。

木枠3はSG301の２ｍ南で検出された。谷の裾部に位置し、崖錐堆積物である第９層をわずかに掘込んでつくられている。第９層からの湧水を得ることを目的としている。下段は板材を六角形に組み、その上には検出時には分かれてしまっていたが、本来は直径２ｍ前後の丸太材を刳貫いたものを据えていた。SG301や木枠1・2との併行関係については層序からは明確ではなく、遺物も少ないので手がかりが少ないが、設置された位置や状況からみてSG301がすでにほぼ埋った状態、つまり第６層が堆積する段階に当ることは間違いないであろう。

木枠4はSG301の南西肩部において盛土確認用の断割りを行っていた際に検出した。やはり谷裾部の第９層をやや掘込み、材を方形に組んだもので、一辺0.6ｍである。底には他の木枠と同様の川原石が敷かれていた。SG301をつくる盛土(第7c層)で埋込まれていたことから、４個所の木枠の中ではもっとも先行するものである。つくられた時期の下限は第7c層の７世紀中葉で、上限は内部に水成堆積物がほとんどなかったことから、SG301の造営開始からさほどさかのぼらないころではないかと考えられる。

SD302・SD303(Fig.39、図版21)

これらは泉施設SG301の周囲を巡る素掘りの溝である。北東の溝をSD302、南西の溝をSD303とする。

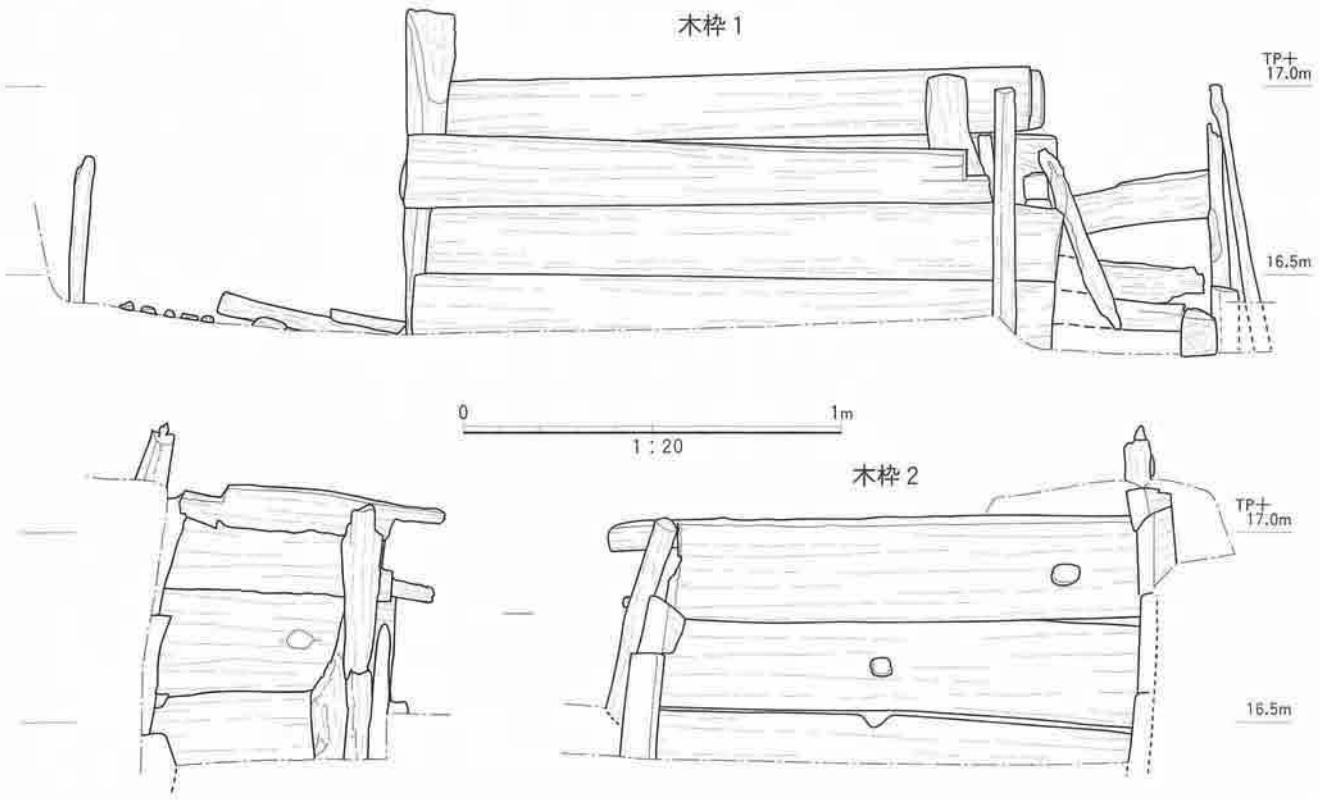


Fig.44　木枠１・２立面図

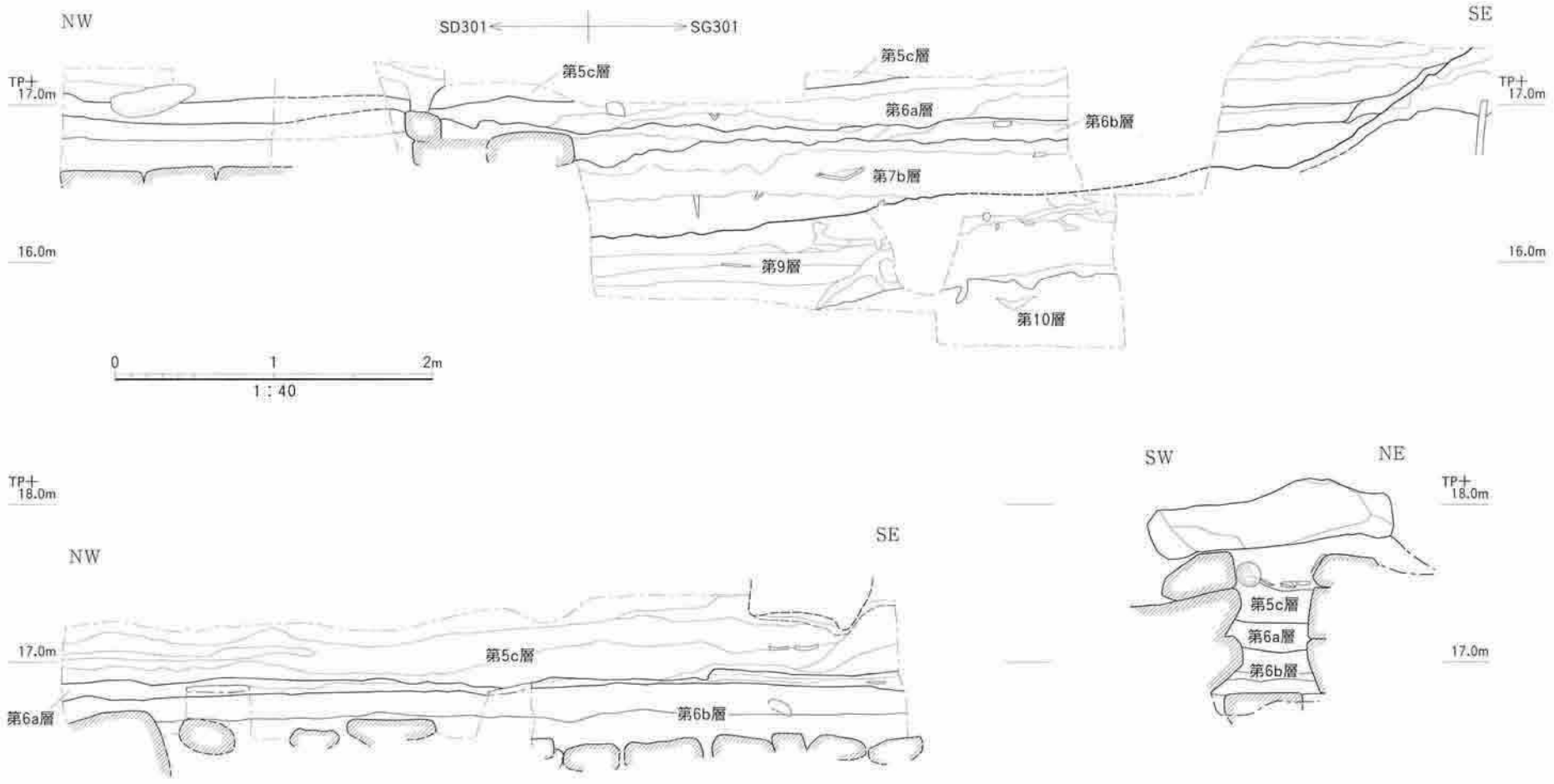
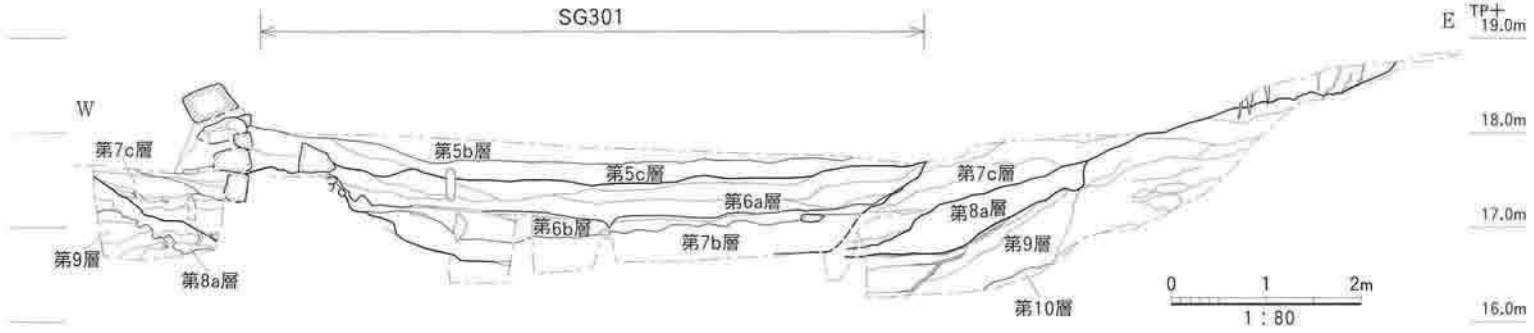


Fig.45　SD301・SG301断面図



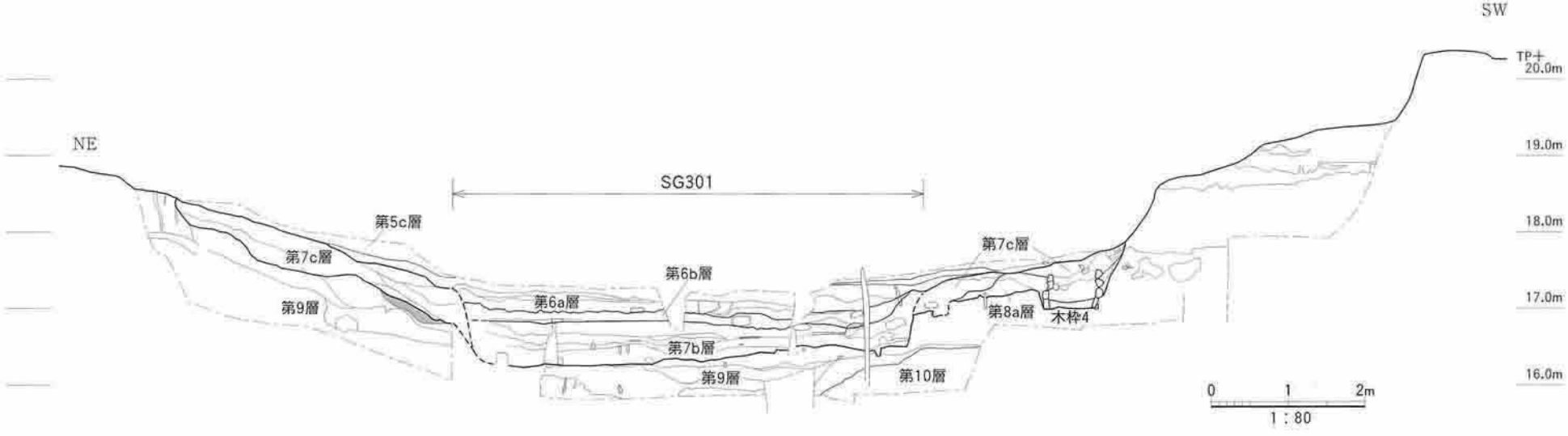


Fig.46　SG301断面図

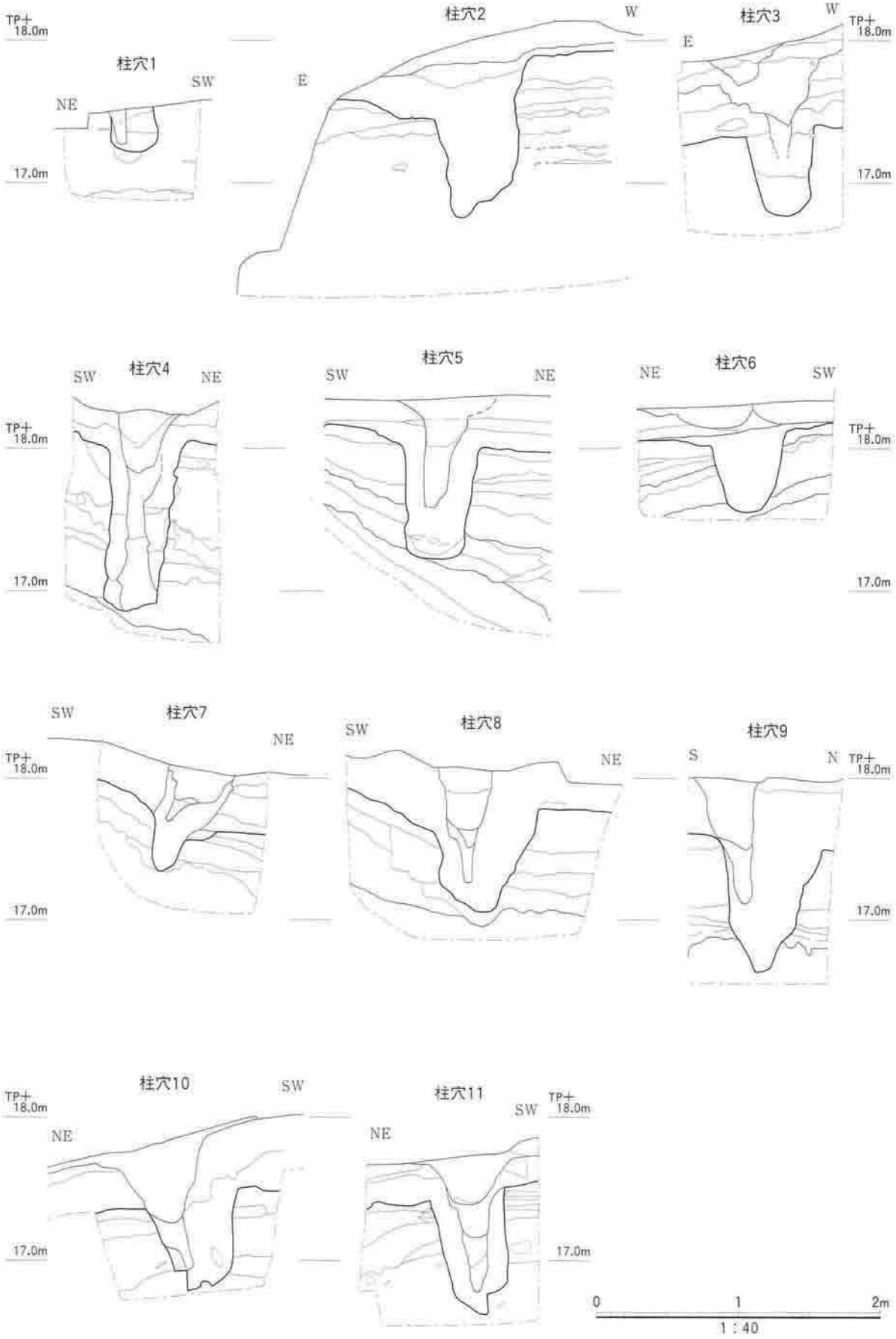


Fig.47　SB310断面図

SD302は幅最大1.6m、深さ0.4mである。埋土は黄褐色の粗粒砂混り細粒砂質シルト(第5c層)で、炭を含む。SG301の東では地山が削られていたため次第に細く浅くなり途切れていた。

SD303は幅最大0.9m、深さ0.4mで、埋土は黄褐色の粗粒砂混りシルト(第5c層)で、炭・焼土を含む。SG301の南西で、長さ5.0mが残っていたが、前後は失われている。

上のように谷頭に当るSG301の東～南東では溝の存在を確認することができなかったが、おそらくこの２条の溝はつながっており、SG301への雨水の流入を防ぎ、谷の下流へと流すといった機能を果たしていたと考えられる。これらの溝の存在はSG301の性格を考える上で重要である。

SB310(Fig.39・47、図版22・23)

第7c層の上面で精査を行った際に、SD301の南西において黄灰色のシルトで埋った直径0.3m前後の円形の窪みが並んで見つかった(図版22－上)。その面では掘形の輪郭が見えなかったため、断割って断面を確認したところ、これらは第7c層による客土・整地の途中の作業面から掘込まれた柱穴で、上面で見えていたのは柱の抜取り痕跡であったことがわかった。

このような柱穴から掘立柱建物SB310が復元できた(Fig.39)。平面形は少し歪んでおり平行四辺形をなす。SD301に平行した北西－南東方向が桁行で4.7mである。梁間は3.0mである。桁行は南東側が４間であったのに対して北東側は３間で、柱穴が１個少ない。柱穴は不整円形で、直径は0.6～0.8mである。柱痕跡から推定される柱の直径は15～20cm前後と細く、かつ、脆弱な地盤にもかかわらず礎板がまったく用いられていないことから、規模の大きな建物は想定できない。整地の作業途中で建てられ、その後も整地が続けられていることから、この水利施設の造営にあたっての仮設的な建物とも考えられるが、その後の祭祀行為などに伴うものの可能性も残っている。

SX301(Fig.39、図版21)

SD301の北東２mで検出された炉跡と考えられる穴である。平面は不整楕円形で、3.7m×3.0mで、深さ0.2m強である。内面は火を受けて焼け締まっているが、長期間使用されたようではない。中には炭が最下層に薄く溜っていたのみで、埋土からはその性格を示すような遺物は出土しなかったが、SG301など、周辺から羽口や燃料の木炭などが出土しており、鍛冶に伴うものであろう。

以上報告した石組み溝SD301・泉施設SG301をはじめとする諸遺構は、谷の内部に存在すること、巨石を利用していること、これまで難波宮の中心部では見つかっていなかった水を供給する施設であることなどの点で、建物跡しかわかっていなかった難波宮に新たなイメージを与える成果である。これらの遺構の性格や、周辺施設との関係は第Ⅴ章であらためて検討したい。

ii) 内裏西方官衙

SB301(Fig.48、図版24・26)

これまでの調査で、調査地北東部の１E区東部から２E区にかけて見つかっている大型の倉庫である。桁行４間×梁間３間の総柱建物が３間の柱列を挟んで並ぶ特異な形式で、現存する東大寺正倉院宝庫や法隆寺綱封蔵に代表される双倉の例から、それらが大屋根でつながった一連の倉庫であると考え、「並び倉」と呼んでいる。

今回の調査では未調査部分であった西の第１倉の部分と東の第４倉の部分などが調査範囲に含まれ

ていた。残念ながら第１倉に当る部分の遺構面は旧体育館の基礎によって完全に破壊されていた(図版１－下)。第１倉が想定どおり存在したかどうかについてはこの結果から永久に検証不可能となったが、他の施設で新たに得られた成果などからみたとき、第１倉は存在しなかった可能性が高くなったと考えている(第Ⅴ章第１節参照)。

第４倉の部分も大半が近世以後の攪乱や地下げによって失われていたが、南側の１列のみがかろうじて残っていた。この部分で検出されたのは３個の柱穴で、第４倉の東端が確認できた。これから東は遺構面が残っていないため不確実ではあるが、近世に行われた地下げが土地の元来の高低差を利用したものと仮定すれば、建物はここで終わっていた可能性が高い。柱痕跡の直径は52～70cm前後である。南東隅の柱穴の断面を見ると、柱を据える部分の穴は布掘りの部分から掘り拡げるのではなく、布掘りの外に別に掘られている。この他に、第２倉と第３倉の間の一本柱列のうち、北端の柱穴を新たに確認した。

SA301(Fig.49、図版24)

倉庫群の西を区画する一本柱塀である。北で東西方向の塀SA302とつながってＬ字形の区画施設を構成すると考えられていたが、今回の調査ではSA302との接合点からさらに北へ延びる２個の柱穴を検出した。ここから西におよそ３ｍで谷の落ちが始まっているが、柱穴を検出したレベルは他の柱穴と同様にTP+21.5m前後である。柱穴の大きさは、よく残っている南側のもので１辺が1.4m、柱痕跡の直径は24cmで、柱間寸法は3.0mである。

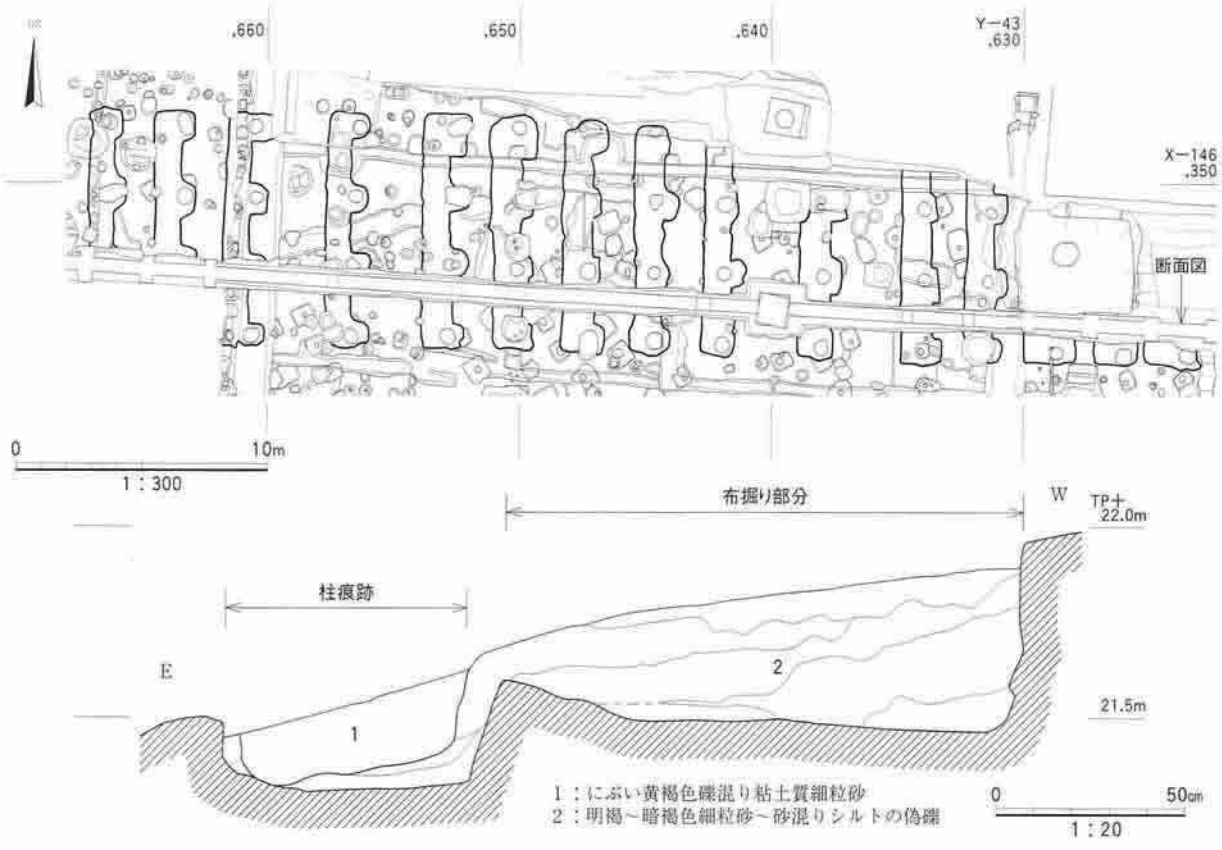


Fig.48　SB301平・断面図

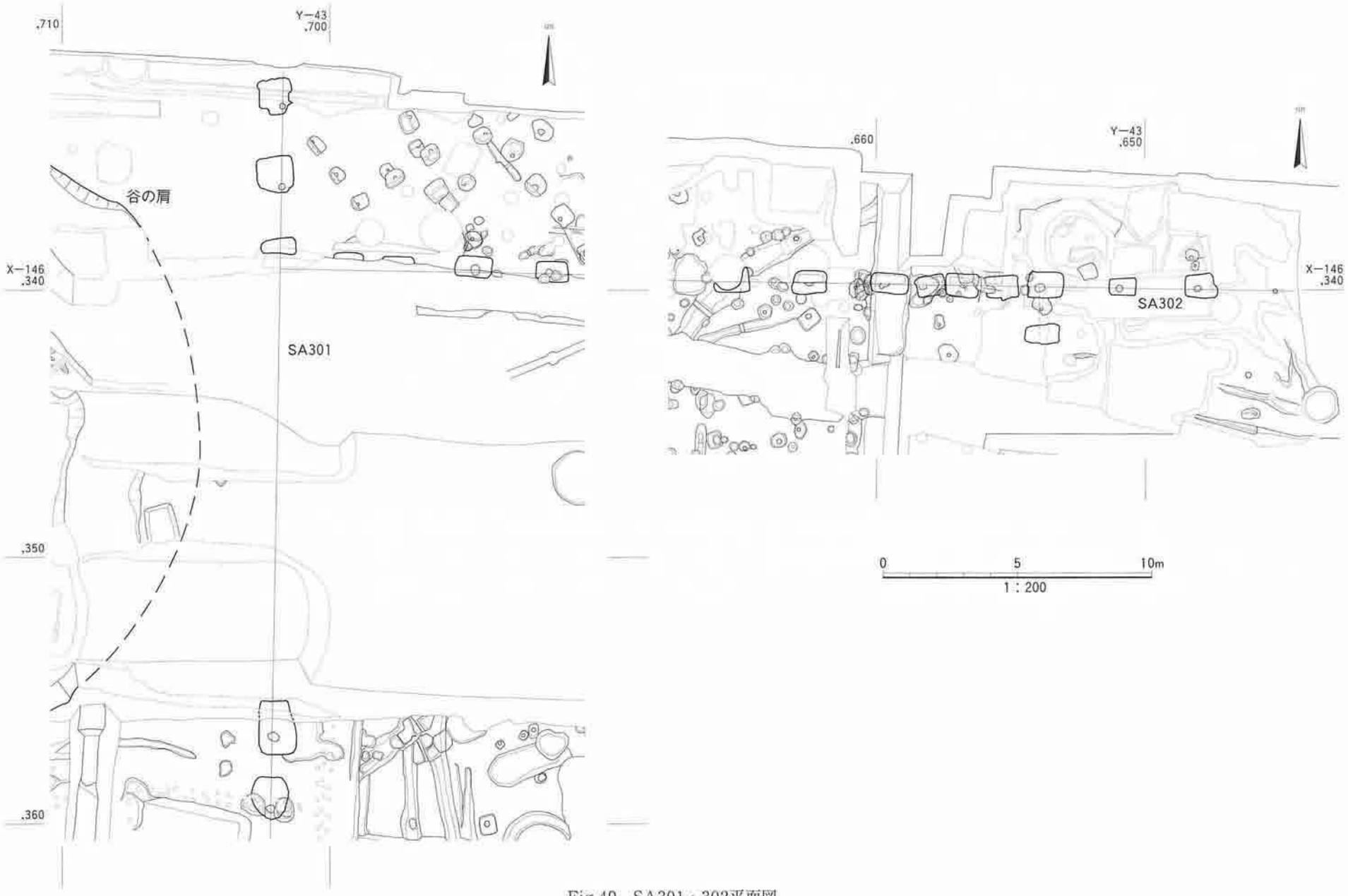


Fig.49　SA301・302平面図

北に柱穴が見つかったことによってこの塀はSA302とT字形に交わることになり、さらに北へ延びることがわかった。このことは、何らかの区画が倉庫群の北に存在することを意味し、宮殿の北限を推定する上で重要である。さらにどこまで延びていたかについては、本調査地から北の本町通を挟んだ敷地内で財団法人大阪府文化財調査研究センターが調査を行ったが、後世に地山が大きく削られていて確認できなかったとのことである(註1)。

SA302(Fig.49、原色図版7)

倉庫群の北を区画する一本柱塀である。今回新たに検出したのは東に延びる4個で、さらに1個分東には、埋土は残っていなかったが、直径20cmの大きさで地山が白く変色した個所が見られた。柱の据えられていた部分が還元された状態で残っていた可能性がある。

前報告までの段階で、東端の柱穴が3個近接した状態で検出されていたが、今回の調査でさらに2個の柱穴が同様の間隔で見つかり、合せて5個が近接することがわかった。柱穴どうしの切合い関係は掘形では確認できなかったが、東から2個目の柱穴の柱抜取り穴が3個目の柱穴の掘形を切っており、前者の柱が抜かれる段階には少なくとも後者の柱は立てられていたことがわかる。前報告ではSB301で想定される東西の二等分線との関係が指摘されていたが、1個目、3個目、5個目の間隔は他の柱穴と同様であることから、2個目と4個目の柱穴は棟門程度の施設の付加に関係する可能性がもっとも高いと考えられる。

また、東から3個目の柱穴の南で1個柱穴を検出した。柱痕跡は見出せなかったが、柱間寸法は1mほどであり短い。その先には柱穴は延びない。上で想定したような門などの施設に係わるものか、塀の倒壊防止用の支柱とも考えられるが、周辺には他に同様の柱穴がないため性格は不明である。

SA303(Fig.50、図版25～27)

SA301の西約24mを南北に延びる一本柱塀である。前調査では体育館観客席の下のぎりぎりの位置で検出したため、調査条件が限られていたが、今回は全面を調査することができ、柱痕跡は断割りによって確認することができた。このことから前報告とは柱位置や柱間寸法が少し異なっている。

今回の調査では北でさらに2個の柱穴を検出したが、谷の内部

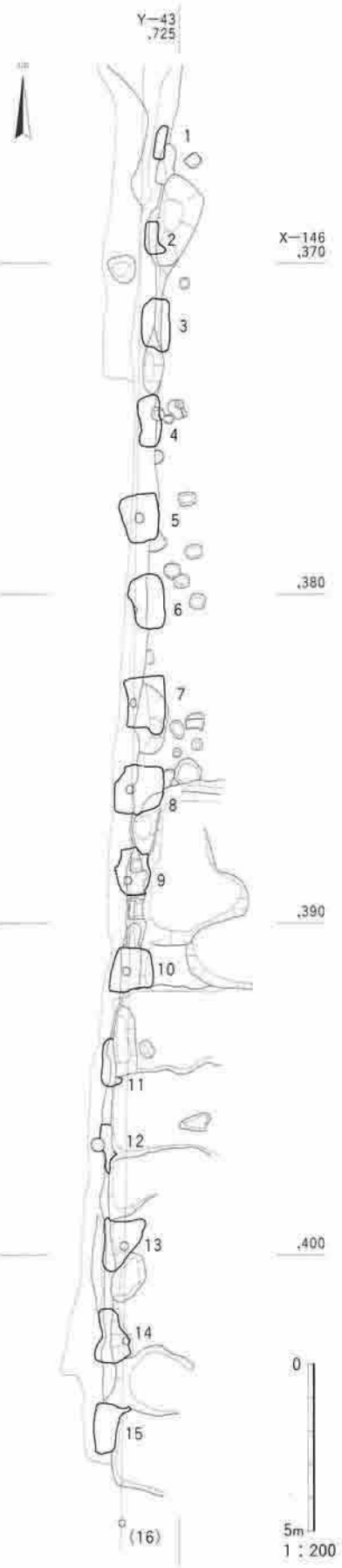


Fig.50　SA303平面図

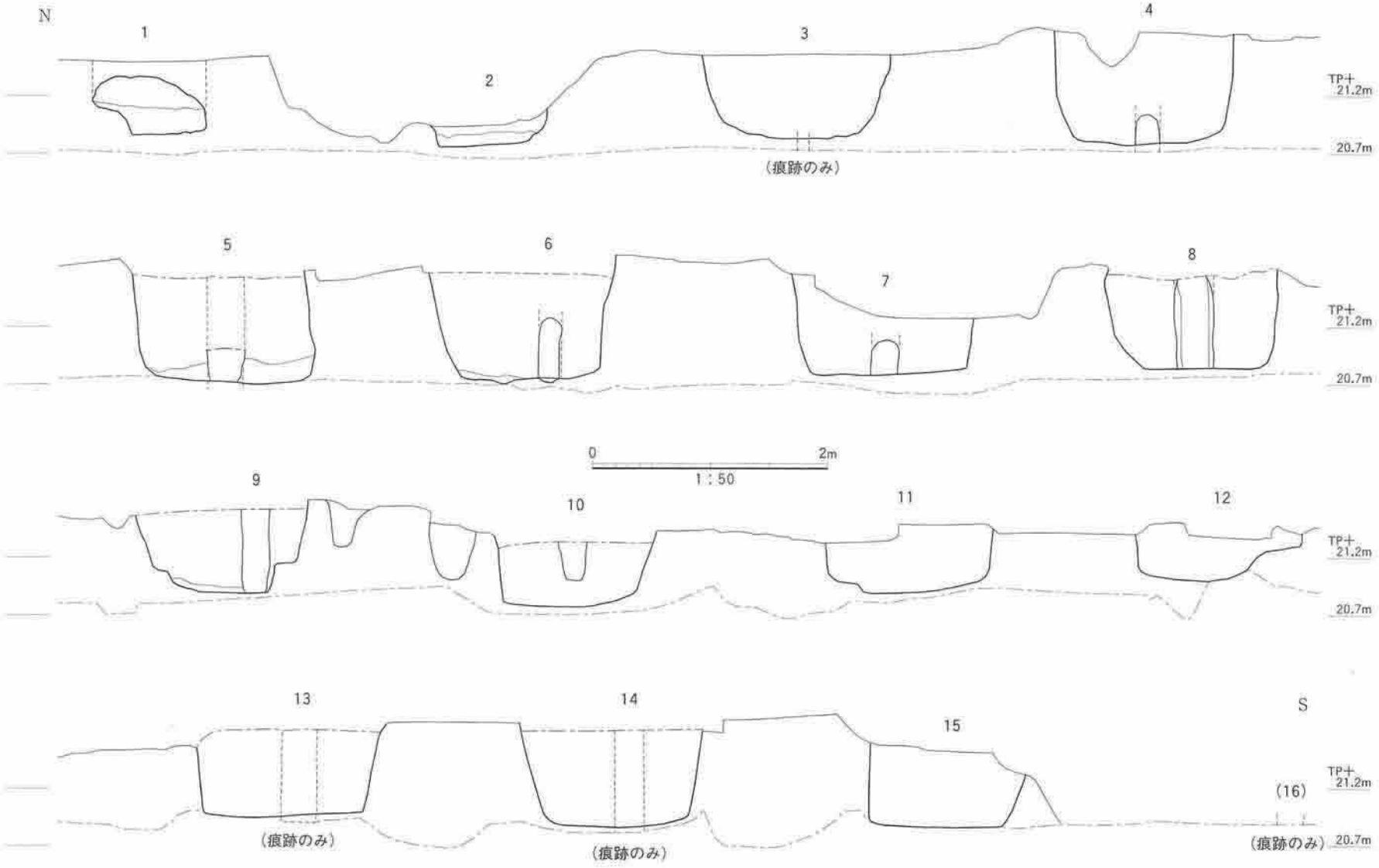


Fig.51　SA303断面図

までは及んでいないことがわかった。ただ、谷の南肩部に近い個所は旧体育館の基礎で破壊されていたため、谷の手前付近がどのような形で終わっているのかは確認できなかった。また、このSA303の延長線もSA301と同様に地山の削平によって確認できていない。

柱痕跡の直径は20～32cmである。柱間寸法は平均して2.8mで、9.5尺(1尺＝29.2cm)ある。柱痕跡内には炭・焼土は含まれていなかった。前報告では中軸線に対する振れが指摘されていたが、上の結果を受けて再検討した結果、振れはほとんどないことがわかった。

埋土(掘形・柱痕跡)からは土師器・須恵器・土錘が多くは細片に近い状態で出土した(Fig.66)。図化できなかったものを含めて難波Ⅲ中段階(7世紀中葉)を下る遺物は出土していない。

以上、内裏西方官衙についての新しい知見を報告した。それぞれ、単なる延長部分の確認に終わらず、宮殿施設内、あるいは外郭の構造を復元する上で重要な成果が得られた。

2）前期難波宮期の遺物

i）土器

今回の調査では前期難波宮の水利施設に関連した遺構・地層から遺物整理箱にして約200箱に及ぶ多量の土器が出土した。これらはその量もさることながら、多くが完形かあるいはそれに近い状態で出土し、まさにその場所に投棄されたような状況を示していた。これらは台地部での既調査において不足していた前期難波宮期の基準資料として重要な土器群である。

まず、谷を埋立てて水利施設を築いた段階の第7層のもの、次に水利施設の機能時以後に堆積した第6層からのものという順に記述を行う。そののち水利施設のものに続いて、SA303の柱穴から出土した土器について述べることとする。

第7c層(Fig.52～56、図版44～46)

水利施設の造営に先立つ谷の埋立て土からは土師器189～229および須恵器230～270が出土した。

土師器には杯C189～200・高杯202～211・台付杯201・206・皿212・213・鉢214・直口壺215・甕216～222・226・甑223・224・羽釜225・竈227～229がある。

杯Cは口縁部径9.4～21.5cmのものがある。径高指数はすべて一様ではなく、器高の低めのもの191・194・195が存在する。198の内面には暗文が施されていない。それ以外は放射状暗文をもつ。体部外面はヨコナデで調整されるが、そのあとにヘラミガキを施すもの194・195・199・200がある。高杯には精製のもの202～208と粗製のもの209～211がある。精製タイプのうち、202の内面には暗文はない。細かいハケメが残るものがある。粗製タイプのうち、209は器壁が厚く、端部のナデもていねいではない。先述した第8a・8b層に見られたものと同種である。210は器壁は薄いが、胎土に砂粒を多く含む。器表面が荒れているので調整はほとんどわからない。211は小型の高杯である。口縁部は仕上げられておらず、脚部も円筒形のままである。高杯の小型模造品の可能性もある。台付杯201・206は低くて径の大きい脚台が付くもので、206は後述する第7a層の352～354と同種のものであるが、いずれも杯部の形態がわからない。浅い皿形に近いものと思われる。杯部の内面には暗文が施される。皿212・213は口縁部径もほぼ同じで形態にも大きな差はないが、212は外面にヘラミガキ、内面に暗



Fig.52　第7c層出土土器－1

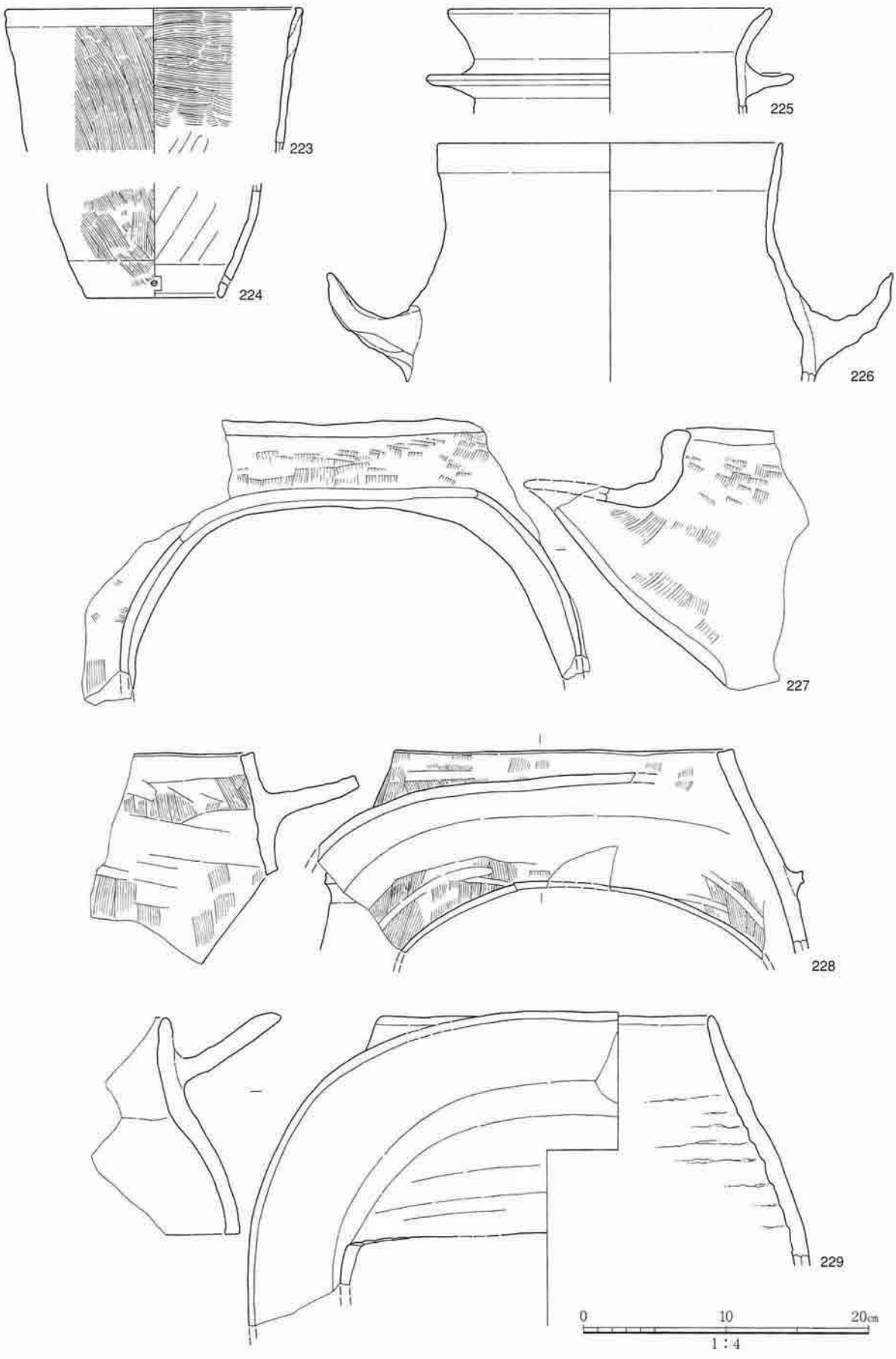


Fig.53　第7c層出土土器－2

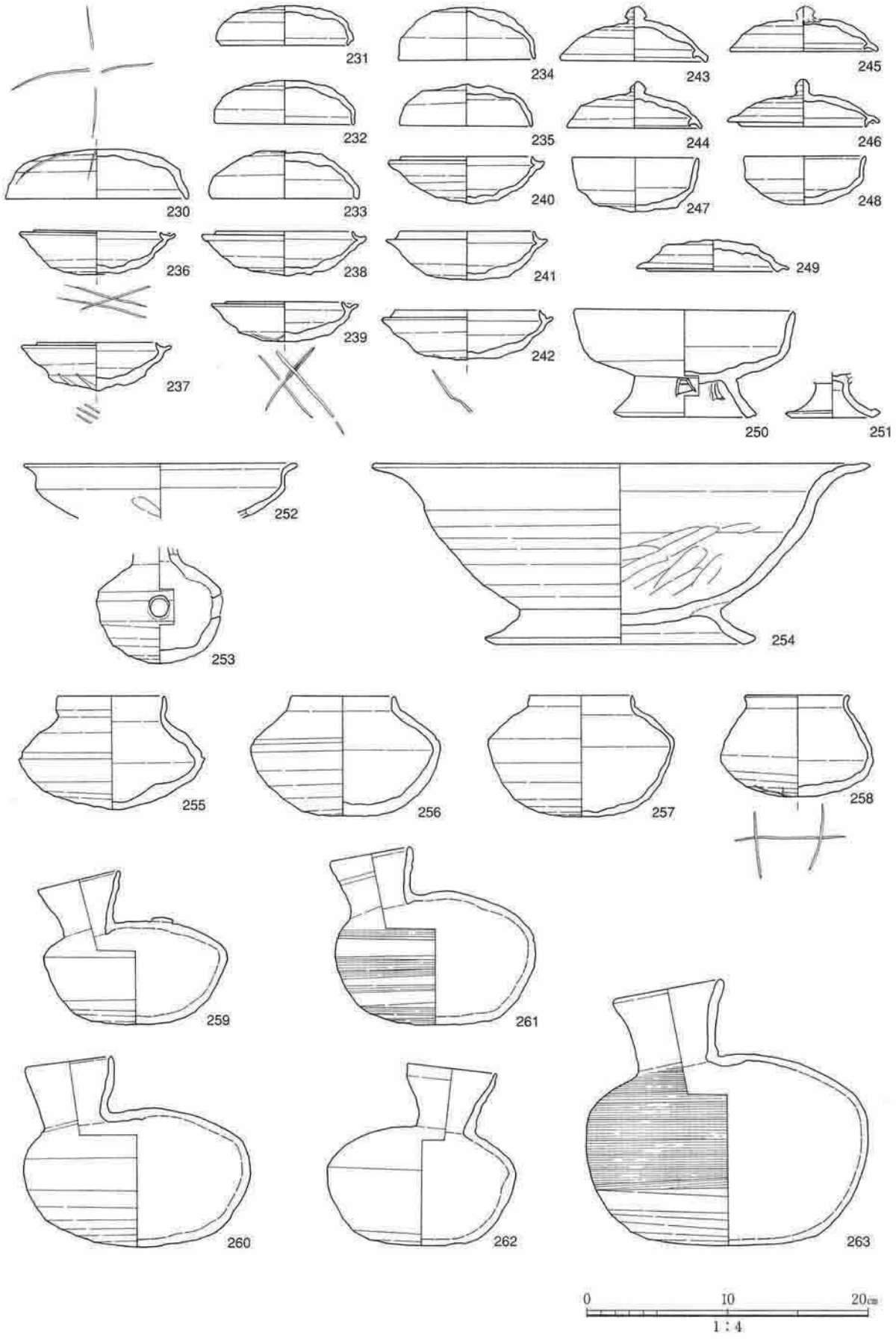


Fig.54　第7c層出土土器－3

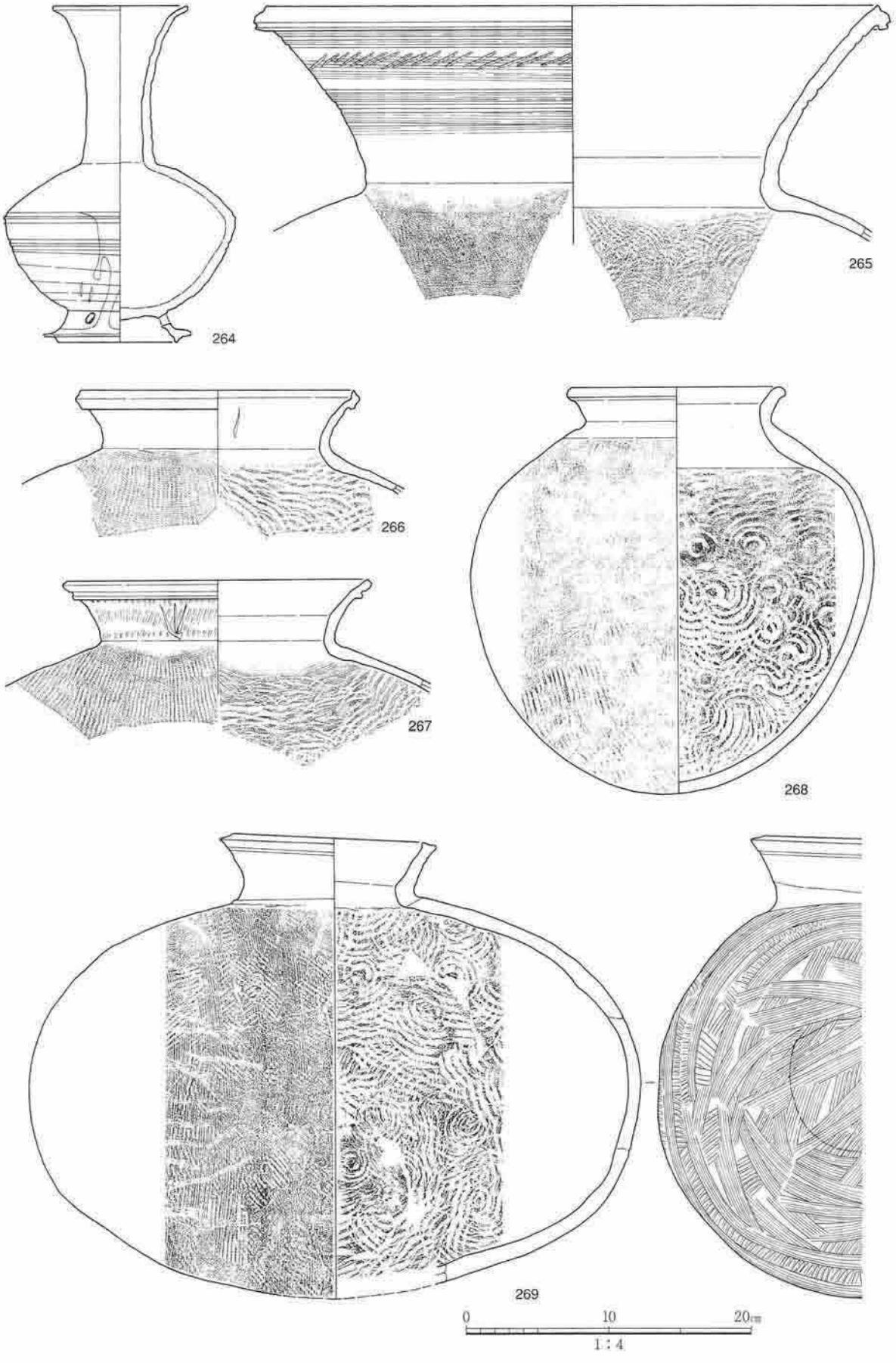


Fig.55　第7c層出土土器－4

文を施す。213は暗文をもたない。鉢214は器表面の残りが悪いが、内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリであることがわかる。直口壺215は口縁部の破片のみで外面はヘラミガキである。甕は体部外面ハケ調整のもの216～222が大半で、外面をナデ・ユビオサエで調整するいわゆる「難波型」はごくわずかである。甑223は内外面をハケ調整する。224は底部の破片で、端部近くに孔があけられている。底部に棒を差込んで使用したものである。羽釜225の胎土は生駒西麓産である。竈は曲げ庇のタイプ227と付け庇のタイプ228・229がある。227は生駒西麓産の胎土である。228はハケ調整で、焚口の上部はアーチ形であるが、229はハケを用いないナデ調整で焚口の上部は水平に切られている。

須恵器には杯H236～242・同蓋230～235・杯G247・248・同蓋243～246・壺蓋？249・台付杯250・高杯251・台付鉢252・254・鴟253・短頸壺255～258・平瓶259～263・長頸壺264・甕265～268・270・横瓶269がある。

杯Hは受部径10.6～12.1cmで、ややばらつきがある。杯H蓋の口縁部径は、大きな230を除けば9.1～9.8cmにおさまる。杯Gは口縁部径9.6～9.8cmで、蓋の受部径は9.4～10.6cmである。蓋249はつまみをもたないが、口縁部の形態や天井部に自然釉が掛かっていることから蓋とした。壺に伴うものであろう。250は大型の杯に壺などに付けるような脚台を付ける。従前の高杯とは区別して台付杯とした。251は低脚の高杯である。252・254は口縁部が大きく外反する鉢で、252は底部を欠くが、254と同様に脚台をもつと考えられる。鴟253は体部に文様をもたない。短頸壺のうち、258は肩の張ら

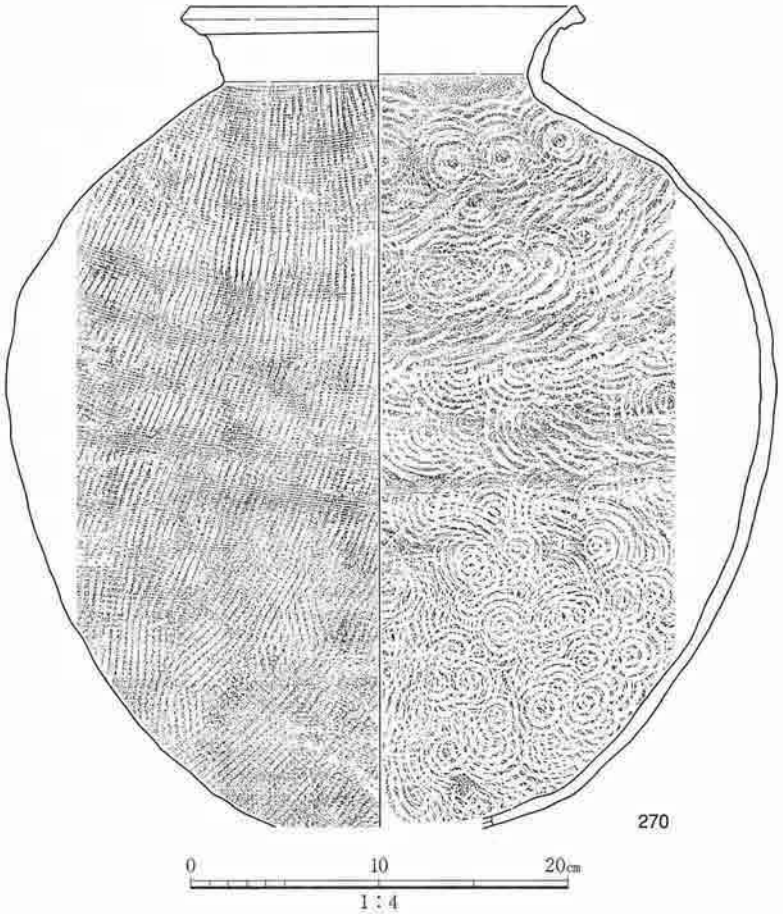


Fig.56　第7c層出土土器－5

ないやや特異な形態である。底部にヘラ記号がある。平瓶はいずれも完形か、またはそれに近い状態で出土した。259・260・262は体部上半を回転ナデ、下半をヘラケズリで調整する。261・263は体部をカキメ調整する。長頸壺264の脚部は3方に円形の透し孔をもつ。甕268は据えられた状態で完形のまま出土した。270も底部を欠く他はほぼ完形に復元できた。横瓶269も270と同地点で出土した。図の右側で粘土円板を充填し、不定方向のハケ調整を施す。左側はカキメ調整である。

以上に示した土器の年代は、大半が難波Ⅲ中段階に属するもので、7世紀中葉である。前期難波宮の造営期のものと考えられる。ただし、宮殿造営前の谷内堆積層である第8a層に比べると少ないが、まだ造営前に属する土師器の粗製の杯や甕、須恵器では受部径・口縁部径の大きな杯H・同蓋が一定量見られる。造営にともなう客土という性格上、すでに地上あるいは谷内に存在していた土器が混入した可能性は高く、それは次章第2節における動物遺体の分析とも符合する。

第7b層(Fig.57・58、図版47)

泉施設SG301がつくられたのち、石組み溝SD301の築造が始まるまでに堆積した本層からは土師器271～280・282～289・須恵器290～312および製塩土器と考えられる281が出土した。

土師器には杯C271～274・高杯275～277・皿278・279・直口壺280・鉢282・甕283～289がある。

杯Cの径高指数は30～31である。高杯276は器壁が厚く粗製のタイプである。皿278は内面に暗文をもつ。279は器表面がやや荒れており暗文は見えない。おそらく施されていないと思われる。鉢282は内外面ともヨコナデ調整で、ヘラミガキ・暗文はない。直口壺280は口縁部に縦方向のヘラミガキがある。甕284は口縁部が外反し、体部上半にハケメが及ばない。赤褐色を呈しており、胎土の特徴からみて南河内地域の製品であろう。285はハケメを用いないタイプで、粘土紐の継ぎ目が残る。羽釜286の胎土は生駒西麓産である。

須恵器には杯H292～298・同蓋290・291・杯G299・300・高杯301・302・鉢303・304・短頸壺306・長頸壺307・鴟308・甕305・309～312がある。

杯Hは受部径13.6cmの295を除けば、10.0～11.4cmである。同蓋の口縁部径は290が11.8cm、291が14.8cmで、292～298に伴うものは少ない。杯Gは口縁部径8.6cmの299と10.0cmの300がある。同蓋は図化できる破片がなかった。高杯は低脚の301と長脚の302がある。どちらも透し孔はない。鉢には体部が内湾する303と口縁部が外反する304がある。長頸壺307の脚部には菱形の透し孔が3方にある。鴟308の体部には文様がない。甕のうち、309は口縁部が短い。

以上の土器も291・295など年代のさかのぼるものはあるものの、おおむねまとまった様相を示す。難波Ⅲ中段階、7世紀中葉の資料である。石組み溝SD301の造営時期の上限を示す。

第7a層(Fig.59～63、図版48～50)

本層はSD301の裏込め土や蓋石を覆う最終的な客土である。もっとも多くの土器が出土した。これらの中にはNW96－29次調査で出土したものが含まれている。調査の時点では調査範囲が限られていたこともあって、本書で述べるような層序との対応の中で採取された資料ではないが、NW97－3次調査の際に地層の対応関係を再検討した結果、第7a層のものと判断された。完形品を多く含む点、両

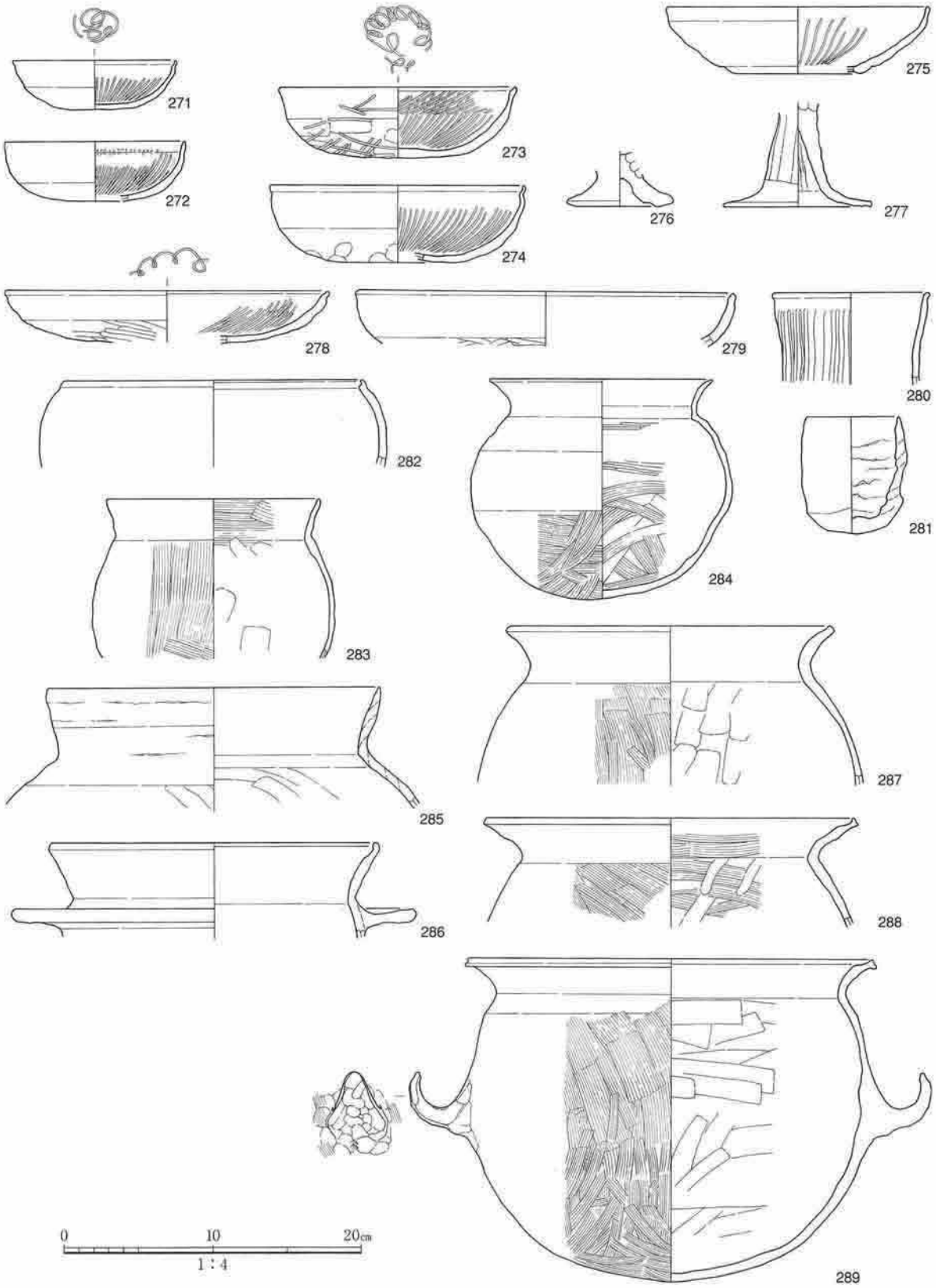


Fig.57　第7b層出土土器－1

調査の土器間で接合関係が見られる点の他、上位に堆積する第5c層出土土器のあり方と遺存状態が異なり、かつ新しい時期の土器をまったく含まない点などから、一括して扱ってもよい資料であると考えられる。

土師器313～367および須恵器368～477がある。

土師器には杯C313～316・320～336・杯317～319・皿337・338・343・高杯346～351・台付杯352～354・鉢339～342・直口壺344・平瓶345・甕355～364・甑365・竈366・367がある。

杯Cは口縁部径9.0～21.6cmで、6段階以上の法量分化が見られる。第7c層と同様に浅めのもの327・329・330・334がある。338はやや深めであるが皿に分類した。343の内面に暗文があったかどうかは残りが悪いためわからない。315は胎土やつくりがやや粗い。317～319は法量は杯Cによく似ているが、製作技法に差異がある。317は底部外面がヘラケズリで、体部から口縁部が直立ぎみに立上る

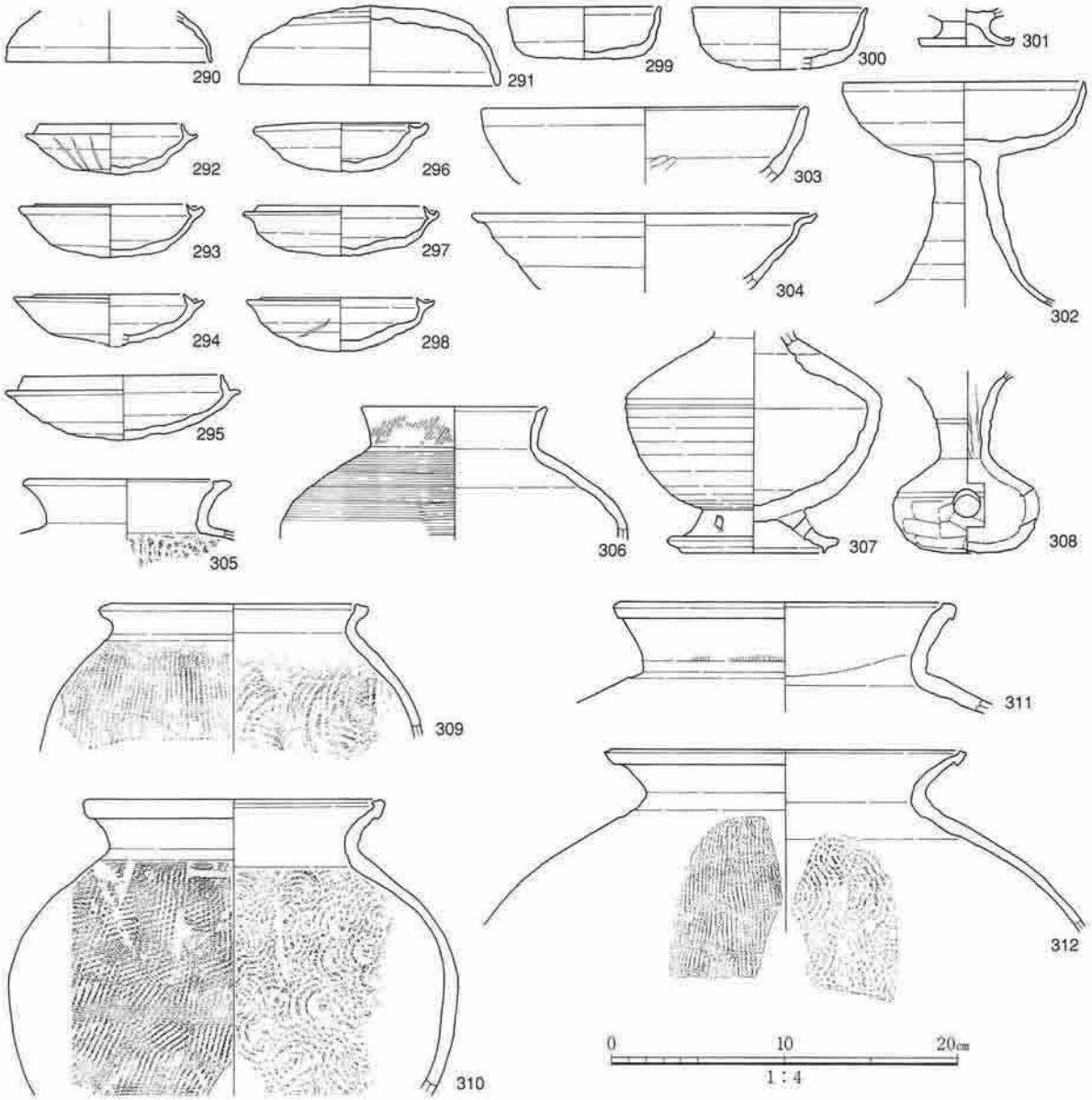


Fig.58　第7b層出土土器－2

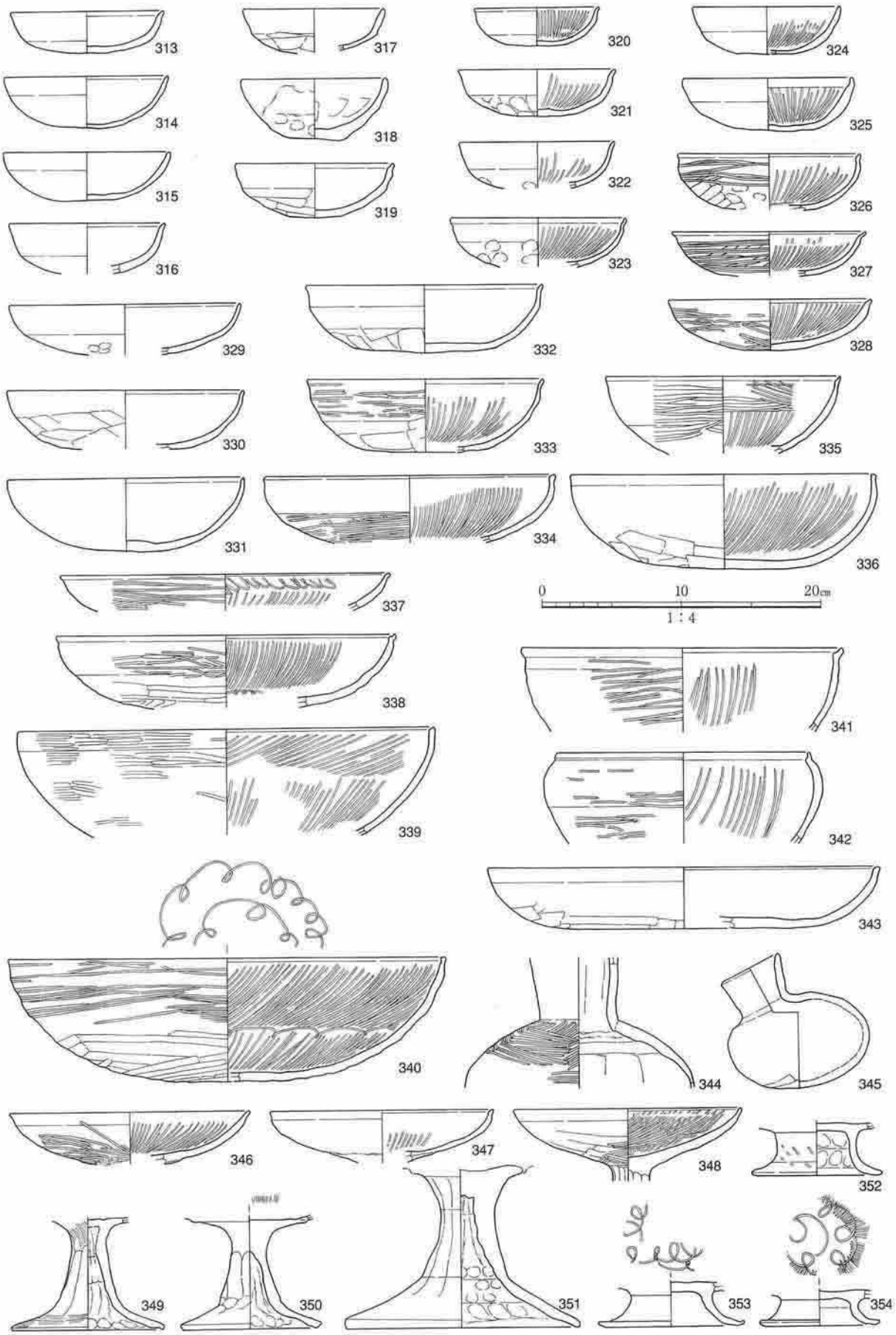


Fig.59　第7a層出土土器－1

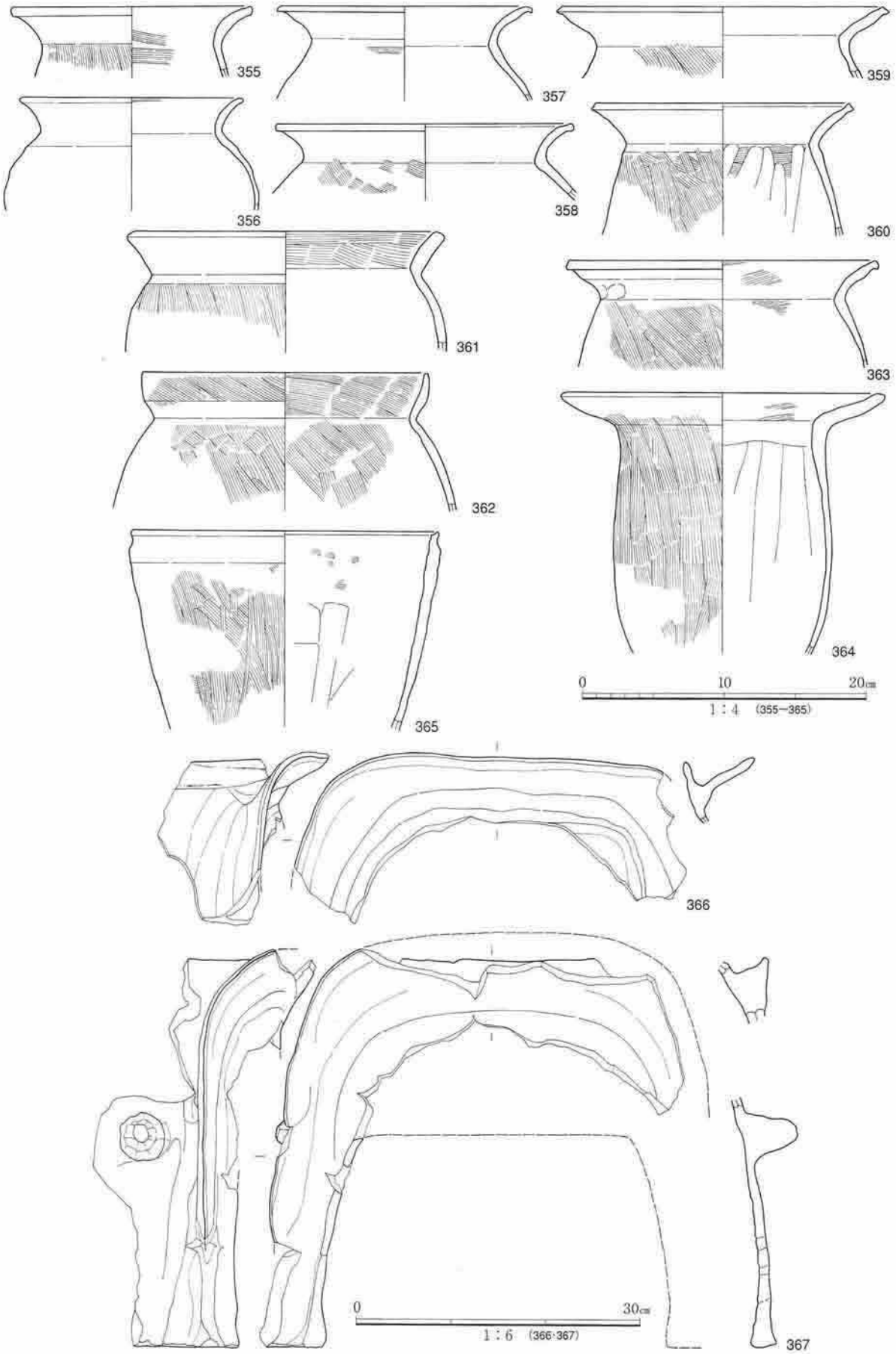


Fig.60 第7a層出土土器－2

タイプで、大和の飛鳥地域に類例がある。胎土に赤色粒を含むのが特徴で、搬入された可能性がある。318・319は粗製のタイプである。高杯には粗製のタイプは見られない。348の暗文は２段である。台付杯は杯部の形態が不明である。杯Ｂが成立する直前の段階として考えられないか。甕は356を除いて体部外面はハケ調整である。ユビオサエ・ナデによる「難波型」は含まれていない。356は南河内地域のものであろう。362は口縁部が内湾し、いわゆる受口状口縁である。灰白色を呈しており、近江・山背地域の製品の可能性がある。364は体部が砲弾形をなす甕である。竈366・367はナデ調整である。

須恵器には杯Ｈ395～436・同蓋368～378、杯Ｇ437～449・同蓋379～393、杯Ｂ蓋394、椀450、高杯451～454・皿460・同蓋459・硯455・小壺456・鳶457・堤瓶458・短頸壺461・462・長頸壺463・464・鉢465・平瓶466～468・横瓶469・甕470～477がある。

杯Ｈの受部径・同蓋の口縁部径は372や415など少数を除いてばらつきが少ない。前者は10.4～12.2cm、後者は9.8～10.6cmである。杯Ｇは437～448のように口縁部径8.6～9.6cmのものと449のように10.8cmのものに法量分化する。同蓋にも同様の関係が見られ、379～387・389～391のように受部径9.6～10.6cmのものと388・392・393のように11.0～11.4cmのものに分かれる。このような杯Ｇにおける法量分化の現象についてはすでに難波宮造営前の資料であるSK10043やSK223などの段階で確認できている[佐藤1994]。394は受部径15.4cmと杯Ｇ蓋よりひとまわり大きめの蓋で、杯Ｂの蓋かと思われるが、第7c層を含めて杯Ｂの破片は１点も認められなかったため、250のような台付杯か、450のような椀に伴うものの可能性もある。椀450はあまり類例のないタイプで、内面には自然釉が掛かる。底部には焼成時の付着物がある。高杯はすべて低脚のもので、452・454には円形の透し孔が３方にある。硯455は脚部を欠く類例から低脚高杯に似た形態と考えられる[杉本1987]。鳶457の体部には文様はない。459は径の大きな蓋で、つまみを欠くがとれた跡が認められる。460のような皿に伴うものと考える。465は口縁部に歪みがあり、片口と考えられる。平瓶466～468はすべて体部は完存するが、口縁部を欠いている。467はカキメ調整である。469は通有の横瓶とは成形技法や形態が異なる。外面はカキメ調整である。完形で出土した。甕は口縁部が外反する470～472・474～477と直立に近い473がある。前者は口縁端部が丸く終わるもの470・472・474と外側に肥厚するもの471・475～477がある。477は接合しないが同一個体の底部と思われる破片がある。

以上の土器群はこれまでの土器群と同様に難波Ⅲ中段階、７世紀中葉の資料である。型式のばらつきが小さいこと、完形に近いものが多く含まれることからみて、この資料は遺構からの一括出土ではないものの、石組み溝造営時のきわめて短期間のうちに投棄されたものと考えられる。質的にも数量的にも前期難波宮造営期の良好な基準資料となりうる。

第６層(Fig.64)

石組み溝SD301および泉施設SG301内に堆積した水成層である第6a・6b層から少量ではあるが土師器や須恵器が出土している。

第6b層からは土師器杯Ｃ478と須恵器杯Ｈ479が出土した。これまで報告した第７層の資料と差のないものと考えられる。

第6a層からは土師器480～487・須恵器488～497が出土した。

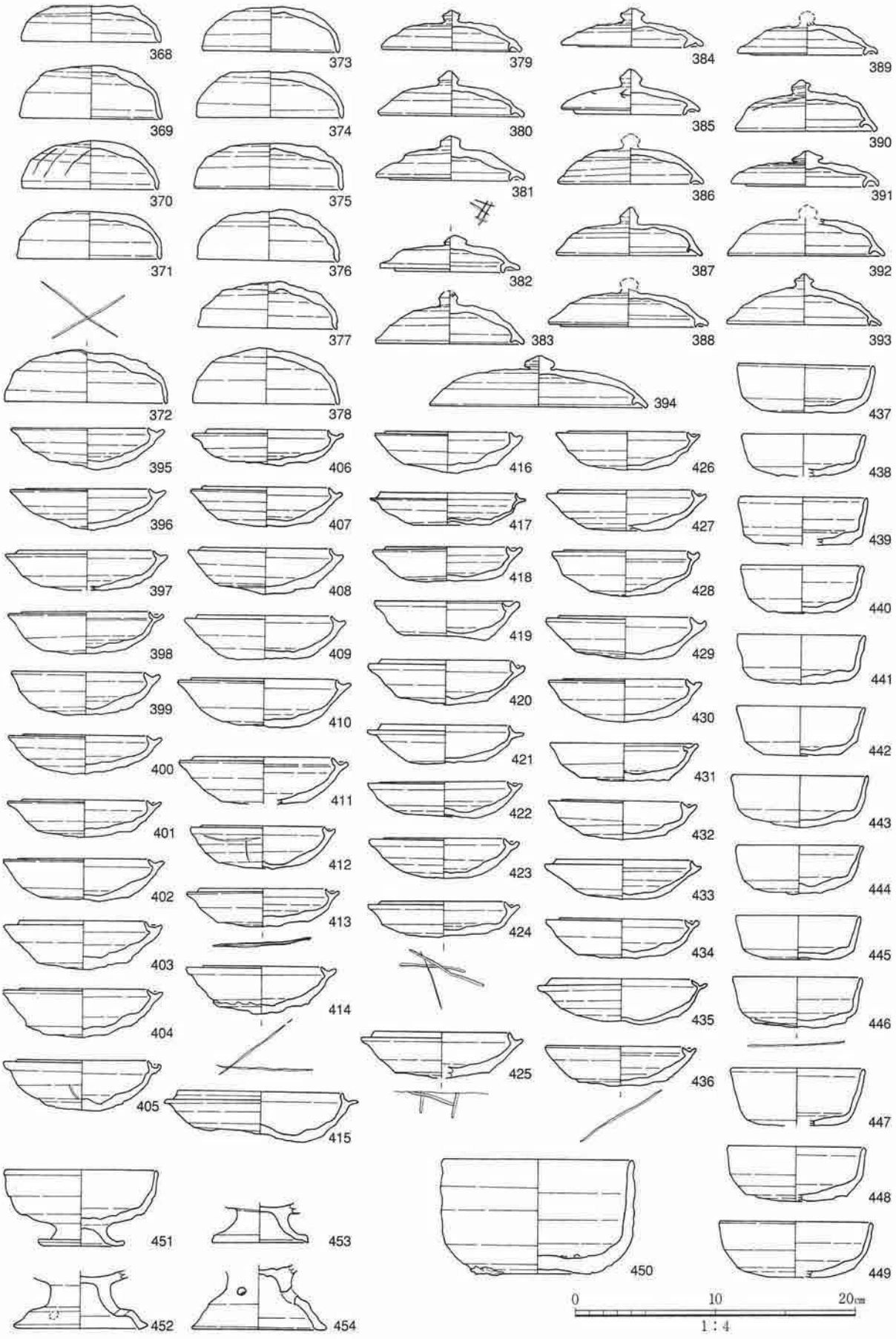


Fig.61　第7a層出土土器－3

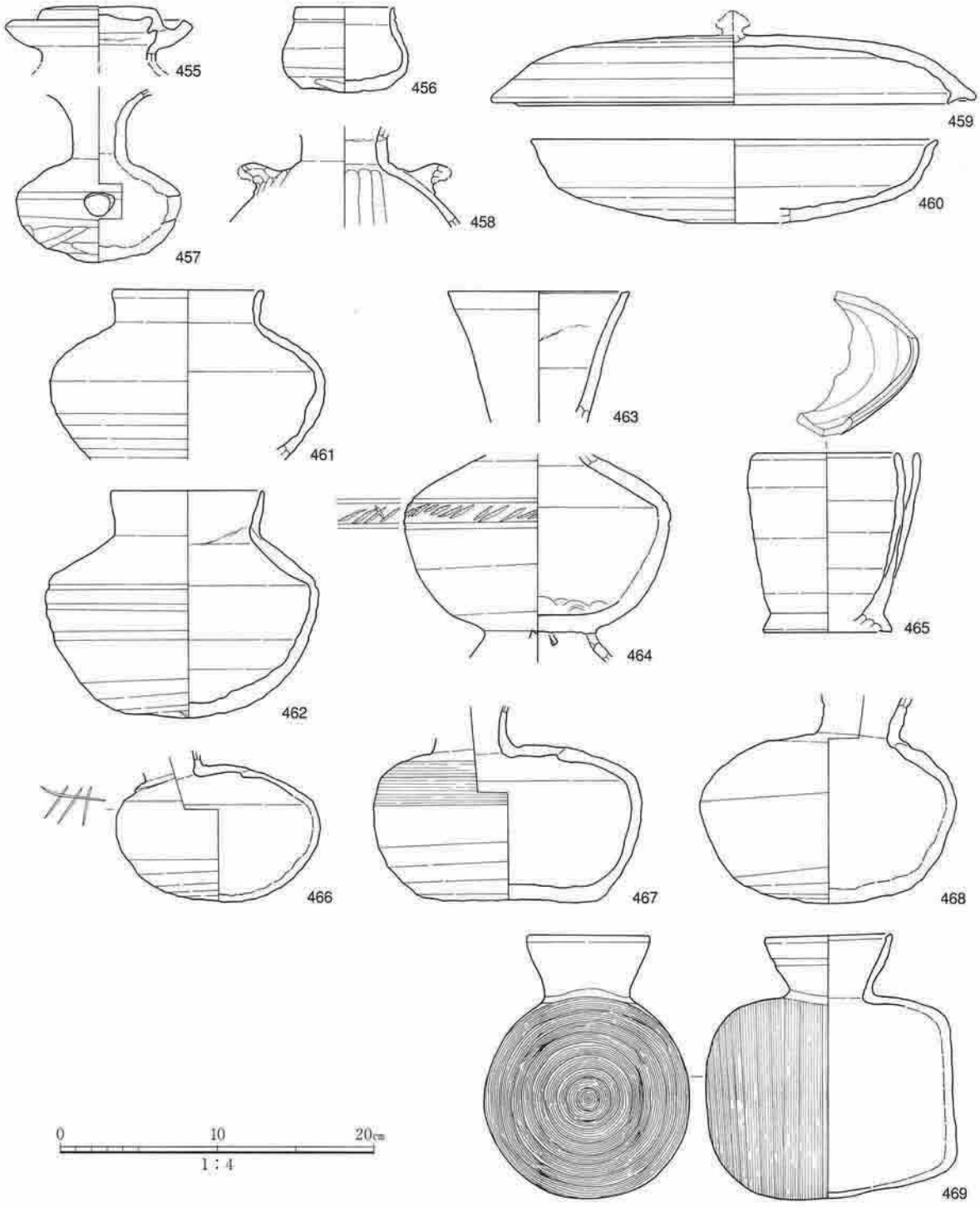


Fig.62　第7a層出土土器－4

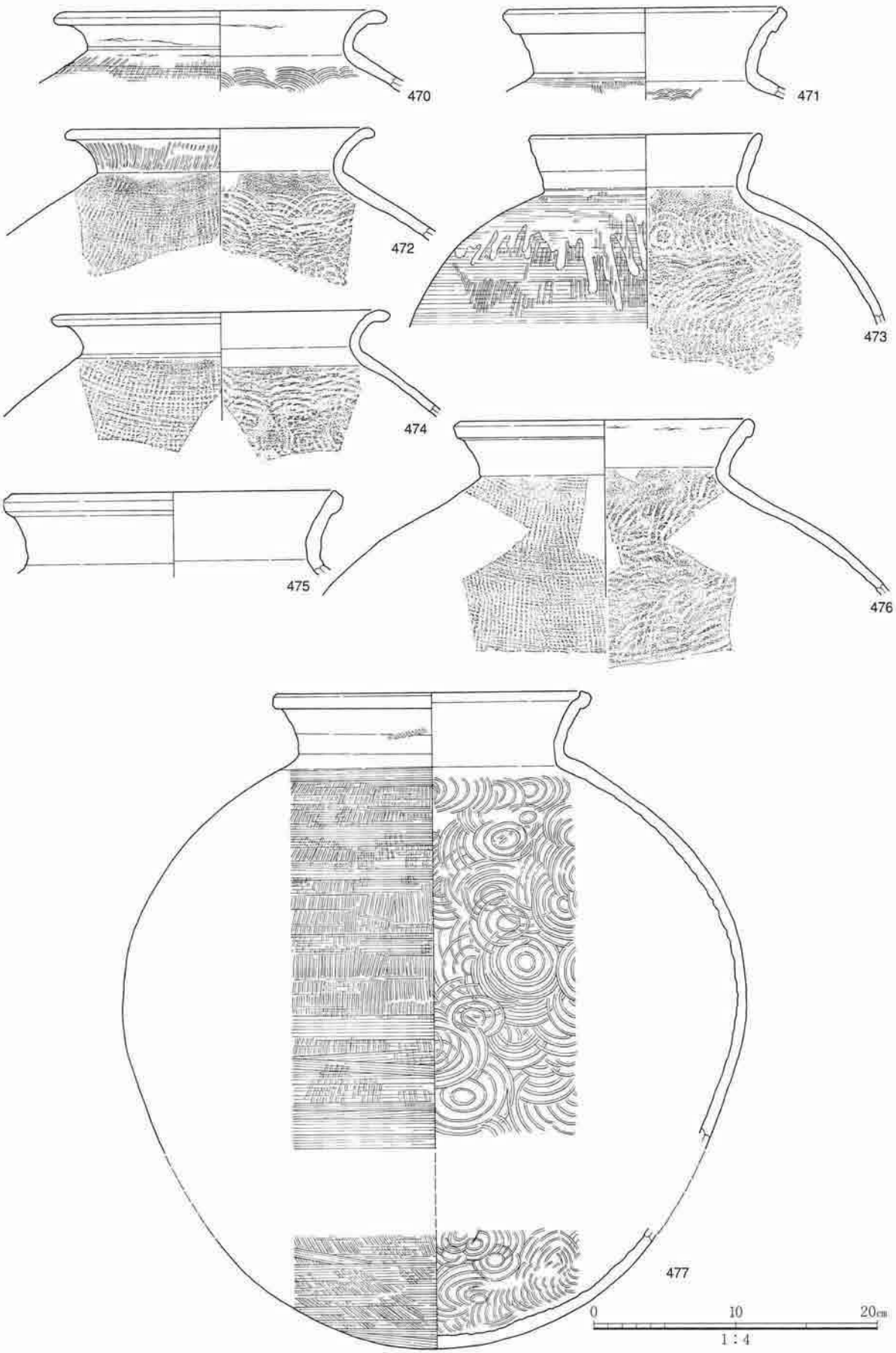


Fig.63　第7a層出土土器－5

土師器には杯Ｃ480～483・杯Ａ484・皿485・高杯486・甕487がある。杯Ｃの径高指数は22～23で、第7a～7c層のものより減小している。482・483は内面に暗文がない。杯Ａ484は２段の斜放射状暗文を施す。皿は器高が低いものである。高杯は藤原宮期以後盛行するタイプのもので、暗文は斜放射１段である。

須恵器には杯Ｇ488・同蓋489・杯Ａ492・杯Ｂ493～495・同蓋490・491・鉢496・甕497がある。杯Ｇ蓋489もかえりが短くなっている。

以上の土器は、土師器でいえば杯Ｃの径高指数が減じていること、定型化した杯Ａや別タイプの高杯が見られること、須恵器ではやはり杯Ａや杯Ｂがあることなど、第7a～7c層や第6b層の土器群に比べて明らかに新しい要素が認められる。これらはSD301やSG301の機能した期間の下限を示す資料として重要である。年代は森の宮遺跡SD701[大阪市文化財協会1995]の資料に類似し、難波Ⅳ古段階、７世紀後葉～末のものと考えられる。

漆容器(Fig.65、図版47、原色図版11)

SG301を中心に漆を入れた容器498～509が出土している(註２)。形態が特殊である上に用途が限定できるため、ここでまとめて述べる。すべて須恵器で、瓶の体部に近い形態のもの498・499・503・504・506と、丸底の壺500～502・505・507～509がある。ただ、504を除いては前者のタイプにも瓶にあるべき孔がなく、他の破片を見ても同様であった。このことから、前者のタイプも瓶には似ているが後者と同様に丸底の壺であったと考えられる。

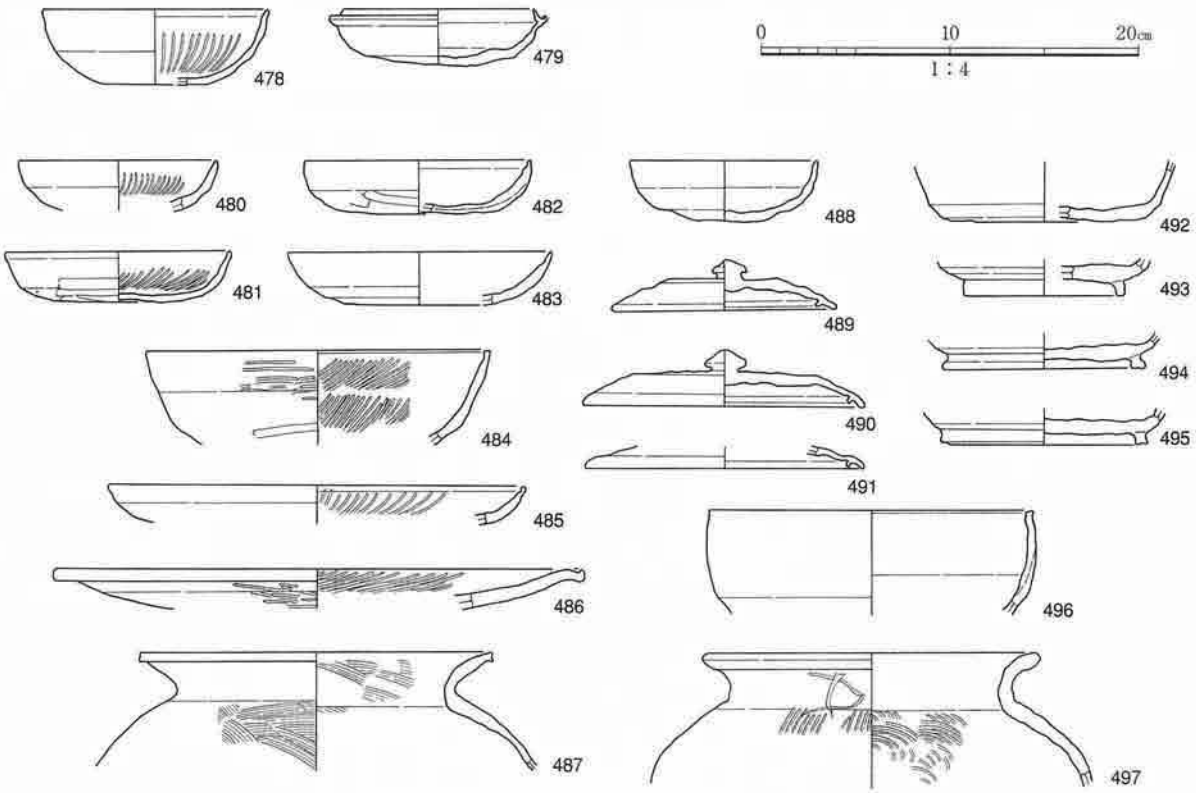


Fig.64　第６層出土土器
第6b層(478・479)　第6a層(480～497)

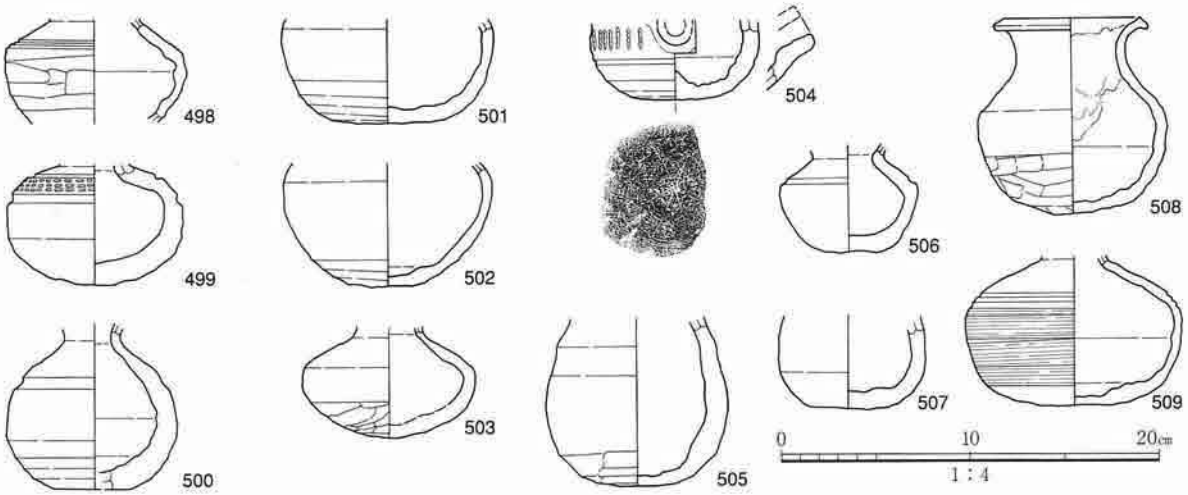


Fig.65　第６・７層出土漆容器
第7c層(498・499)　第7b層(501・504)　第6b層(502・509)　第6a層(505・506・508)　第5c層(500・503・507)

498・499は第7c層、501・504は第7b層、502・509は第6b層、505・506・508は第6a層、500・503・507は第5c層から出土した。水利施設造営段階から漆容器がこの地に持ち込まれていたことは明らかだが、多くなるのはむしろ第6b層以降の施設が機能を停止したころからである。また、層位的に古いものに趨に近いタイプが多いことは、これらが趨の製作技法を利用しながら専用の容器として生産された可能性を示している。

墨書土器(図版47)

SG301の南にある**木枠3**から須恵器甕体部片に墨書があるもの2019が出土した。墨書は体部片の外面全体にあるが、墨の残りがわるいため内容ははっきりとはわからない。字のように見えるところはほとんどないので、習書ではないようである。何かの絵のようでもあり、祭祀に係わる可能性もあるが、決め手に欠く。

以上の水利施設に関連する土器の他に、全掘したSA303から出土したものについて述べる。

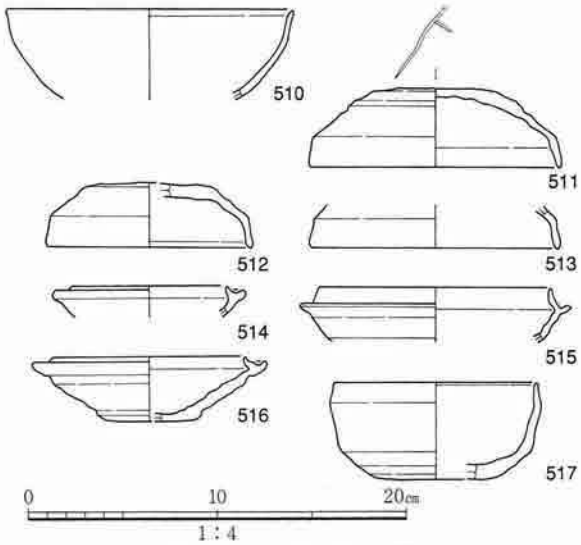


Fig.66　SA303出土土器

SA303(Fig.66)

遺物整理箱にして１箱弱の遺物が出土したが、細片が多く、図化できたものは以下の８点に限られた。土師器杯C510、須恵器杯H514～516・同蓋511～513・杯G517がある。510は精製品であるが器表の残りが悪く、調整が確認できなかった。これらはすべて掘形部分から出土し、この塀の造営時期を考える上で重要である。

ii) 土製品(Fig.67、Tab.３、図版43・51)

土馬　第7a層から土馬が出土している。518は左の前脚・後脚を欠くのみで、ほぼ全容のわかるものである。全長21.6cm、高さ11.2cm、胴部径4.8cm

である。目・鼻・口や鞍の表現もされており、写実的であるが、森の宮遺跡例[佐藤1994]のように手綱や革紐までは表現されていない。胴部が本例では中実である点も異なっている。焼成は比較的硬質で、外面は燻されたように黒色化している。この他に同様の脚部の破片が１点あり、518には接合しないため、個体数としては２点あったことになる。

紡錘車　第7a層から孔をもつ短い円筒形の土製品519が出土した。直径は3.5㎝、1.9㎝で、孔の直径が0.6㎝である。土師質の焼成で、土錘の可能性もあるが、似た形態のものが紡錘車として集成されている[國下1988]。

土錘　当該期の土錘(漁網錘)は95点ある。代表的なものを選んで図化・写真撮影を行った。他の土錘についてはTab.３に計測値を記したので参照されたい。

管状のもの(Ⅰ類)と棒状のものに大別でき、後者は両端沿いに長軸に直交した孔をもつもの(Ⅱ類、瀬戸内型土錘)ともたないもの(Ⅱ'類)とに細分されるが、今回はⅡ'類の良好な資料はない。

Ⅰ類には紡錘形のものと太さの変わらない土管型のものとがある。大きさ・形態ともにばらつきがあり、点数も多くない。細長い紡錘形のもの2002は第4a層から出土し、中世に下ると考えられるため、類例とともに次節で触れる。

Ⅱ類の分類は以前の報告[大阪市文化財協会1992]に準じて、端面に溝がないものをⅡａ類、片側の端面にのみ溝があるものをⅡｂ類、両端面に溝があるものをⅡｃ類とする。片側しか残存しないものについては、溝のないものはⅡａ類かあるいはⅡｂ類であり、Tab.３では「Ⅱａorｂ」、溝があるものは同様に「Ⅱｂorｃ」と表記した。両側が残るものではⅡｂ類がもっとも多いことから、「Ⅱａorｂ」類・「Ⅱｂorｃ」類も本来は多くがⅡｂ類であったと考えられる。それらを含めると、Ⅱｂ類が圧倒的に多いことがわかる。

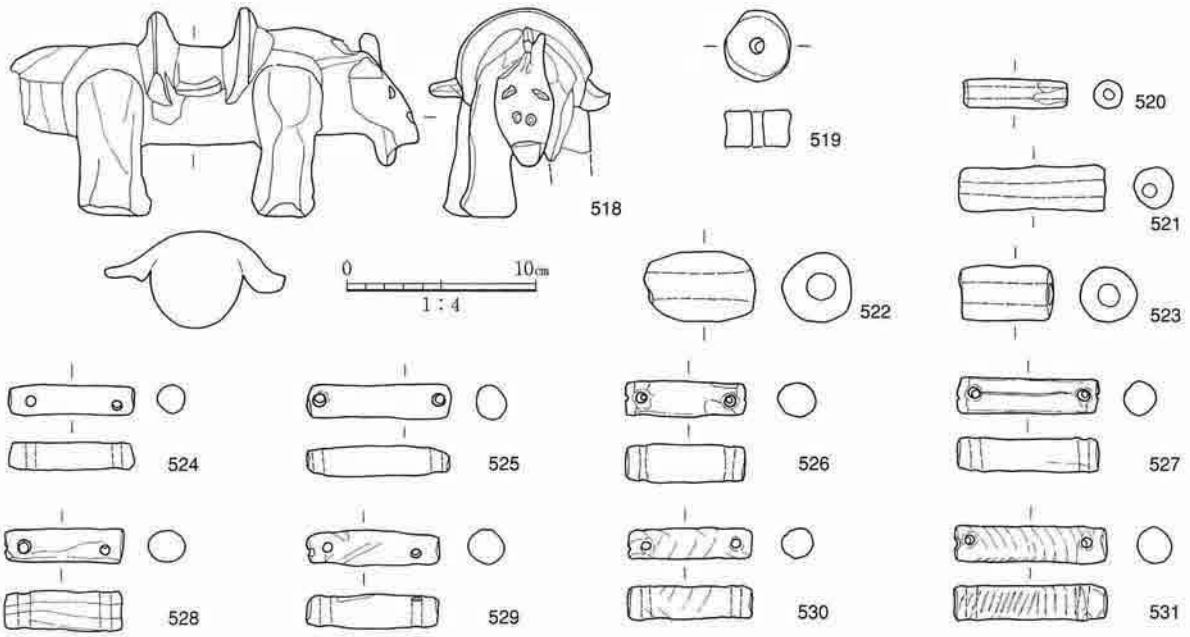


Fig.67　土製品

SA303(526・530)　第7c層(531)　第7b層(520・529)　第7a層(518・519・523・525・528)　第6a層(521・524・527)　第5c層(522)

Tab.3　土錘計測表

No	遺　構	形　態	遺存状態	長さ (cm)	直径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)
	第8b層	Ⅱa or b	一端欠40%	(4.0)	1.7	0.35	(12.9)
	第8b層	Ⅱb or c	一端欠70%	(4.5)	1.8	0.5	(17.6)
2016	第8a層	Ⅱb	完形	7.3	1.9	0.45	32.3
	SB242	Ⅱa or b	一端欠90%	(5.1)	1.9	0.35	(14.4)
2008	SB243	Ⅱb	ほぼ完形	7.3	2.1	0.40	33.9
	SK250	Ⅱb or c	一端欠60%	(4.2)	1.85	0.5	(16.1)
2007	土壙	Ⅱb	ほぼ完形	6.6	2.2	0.30	34.4
526	SA303	Ⅱc	完形	6.35	1.85	0.4	31
530	SA303	Ⅱb	完形	6.6	1.7	0.30	25.2
	SA303	Ⅱb or c	一端欠20%	(2.2)	1.6	0.4	(5.2)
	SA303	不明	両端欠50%	(4.1)	2.25	?	(18.0)
531	第7c層	Ⅱb	完形	8.1	2.0	0.30	41.4
2005	第7c層	Ⅱc	両端欠80%	(5.0)	1.35	0.3	(11.9)
2006	第7c層	Ⅱb	ほぼ完形	5.9	2.3	0.60	30.1
2009	第7c層	Ⅱb	完形	7.5	2.2	0.40	43.3
2010	第7c層	Ⅱb	ほぼ完形	7.5	2.5	0.45	46.8
2012	第7c層	Ⅱb	完形	5.2	1.4	0.40	14.3
2018	第7c層	Ⅱb	ほぼ完形	8.2	2.1	0.50	43.0
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠90%	(6.9)	1.9	0.40	(24.8)
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠60%	(4.2)	2.0	0.55	(18.7)
	第7c層	Ⅱb or c	一端欠70%	(4.8)	2.15	0.6	(25.0)
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠30%	(3.0)	2.1	0.55	(14.7)
	第7c層	不明	両端欠30%	(2.4)	1.2	0.45	(3.9)
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠20%	(2.3)	1.8	0.60	(5.4)
	第7c層	Ⅱb or c	一端欠70%	(4.7)	2	0.3	(21.1)
	第7c層	Ⅱab	一端欠70%	(5.6)	1.75	0.65	(17.7)
	第7c層	Ⅱb or c	一端欠70%	(5.1)	2.1	0.5	(27.6)
	第7c層	Ⅱb or c	一端欠70%	(4.2)	2.25	0.4	(22.4)
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠70%	(5.0)	1.7	0.60	(15.9)
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠50%	(3.9)	1.8	0.45	(13.3)
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠60%	(4.5)	1.8	0.90	(12.3)
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠30%	(3.4)	1.7	0.50	(9.9)
	第7c層	Ⅱa or b	一端欠60%	(4.6)	1.9	0.50	(16.7)
	第7c層	不明	両端欠60%	(5.4)	1.8	0.6	(17.6)
	第7c層	不明	両端欠60%	(4.7)	1.8	0.4	(15.5)
529	SG301第7b層	Ⅱb	完形	7	2.0	0.50	30.8
	SG301第7b層	Ⅱb or c	一端欠60%	(4.1)	2.15	0.4	(22.0)
	SG301第7b層	Ⅱa or b	一端欠20%	(1.7)	1.7	0.60	(4.0)
	SG301第7b層	Ⅱb or c	一端欠50%	(3.5)	1.9	0.4	(14.6)
	SG301第7b層	不明	両端欠20%	(3.7)	1.6	0.45	(6.8)
	SG301第7b層	Ⅱb or c	一端欠80%	(5.4)	2.3	0.6	(30.9)
520	SG301第7b層	Ⅰ	ほぼ完形	5.5	1.6	0.6	15.7
	SG301第7b層	Ⅱa or b	一端欠50%	(3.9)	1.9	0.60	(15.2)
	SG301第7b層	Ⅱb or c	一端欠95%	(6.8)	1.7	0.5	(23.0)
	SG301第7b層	Ⅱb or c	一端欠60%	(4.2)	1.9	0.45	(20.4)
523	第7a層	Ⅰ	ほぼ完形	5	2.95	1.1	49.1
525	第7a層	Ⅱa	完形	7.6	1.9	0.5	26.9
528	第7a層	Ⅱb	完形	6.3	1.8	0.45	31.2
2004	第7a層	Ⅱa	ほぼ完形	6.8	1.65	0.4	23.4
2011	第7a層	Ⅱb	ほぼ完形	8.2	2.0	0.30	41.4
2015	第7a層	Ⅱb	完形	7.2	2.1	0.50	38.1
2017	第7a層	Ⅱb	ほぼ完形	8.1	1.9	0.45	30.9
	第7a層	Ⅱb	完形	7.25	1.9	0.6	31.7
	第7a層	Ⅱb or c	一端欠80%	(5.0)	1.75	0.4	(17.5)
	第7a層	Ⅱb or c	一端欠60%	(3.6)	1.9	0.5	(15.0)
	第7a層	Ⅱa	完形	6.7	2	0.4	28.7
	第7a層	Ⅱb	一端欠90%	(6.7)	1.7	0.4	(27.8)
	第7a層	Ⅱa	完形	7.6	2.05	0.4	31.6
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠80%	(3.5)	1.3	0.3	(5.9)
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠90%	(6.5)	1.9	0.55	(28.7)
	第7a層	不明	両端欠	(2.5)	1.95	0.4	(9.6)
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠50%	(3.8)	2.15	0.55	(18.0)
	第7a層	Ⅱb or c	一端欠80%	(4.9)	1.8	0.6	(17.0)
	第7a層	Ⅱa	完形	7	2.3	0.55	40.6
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠95%	(6.6)	1.8	0.4	(23.5)
	第7a層	Ⅰ	ほぼ完形	5.9	1.1	0.35	5.1
	第7a層	Ⅱb or c	一端欠90%	(4.9)	2.2	0.5	(28.9)
	第7a層	Ⅱab	一端欠50%	(3.2)	1.9	0.65	(7.3)
	第7a層	不明	両端欠60%	(4.2)	1.55	?	(12.1)
	第7a層	Ⅱb or c	一端欠90%	(6.5)	2.1	0.5	(32.4)
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠80%	(5.5)	2.3	0.45	(31.3)
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠80%	(5.0)	2.0	0.65	(21.1)
	第7a層	Ⅱb or c	一端欠50%	(3.4)	1.95	0.3	(14.3)
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠50%	(4.3)	2.1	0.35	(24.6)
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠40%	(3.3)	1.6	0.40	(8.8)
	第7a層	Ⅱb or c	一端欠70%	(5.3)	1.85	0.4	(22.8)
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠40%	(3.4)	1.8	0.40	(12.9)
	第7a層	不明	一端欠90%	(4.6)	1.5	0.4	(11.9)
	第7a層	不明	一端欠50%	(3.5)	2.5	0.5	(15.9)
	第7a層	Ⅱb	完形	6.3	1.9	0.4	27.3
	第7a層	Ⅱb or c	一端欠95%	(5.2)	1.9	0.45	(25.6)
	第7a層	Ⅱa or b	一端欠90%	(5.9)	2.45	0.55	(34.8)
521	SG301第6a層	Ⅰ	完形	7.6	2.55	0.75	51.5
524	SG301第6a層	Ⅱa	完形	6.7	1.7	0.5	24.2
527	SG301第6a層	Ⅱc	完形	7.5	1.95	0.5	33.7
	SG301第6a層	Ⅱa or b	一端欠50%	(4.0)	2.3	0.30	(18.8)
	SG301第6a層	Ⅱa or b	一端欠80%	(4.5)	2.0	0.45	(17.4)
	SG301第6a層	Ⅱa or b	一端欠90%	(5.7)	1.8	0.50	(18.8)
	SD301第5c層	Ⅱb or c	一端欠60%	(4.0)	2.1	0.3	(19.3)
	SG301第5c層	Ⅱa or b	一端欠50%	(3.3)	1.45	0.45	(6.4)
522	第5c層	Ⅰ	ほぼ完形	5.7	3.6	1.5	67.8
	第5c層	Ⅱa or b	一端欠90%	(5.2)	1.8	0.50	(15.6)
	第5c層	不明	両端欠50%	(3.1)	1.8	?	(11.1)
2014	SG301第5b層	Ⅱb	完形	5.9	1.7	0.40	21.0
	SG301第5b層	Ⅱb or c	一端欠75%	(4.5)	1.9	0.45	(16.9)
	SG301第5b層	Ⅱb or c	一端欠90%	(5.8)	1.85	0.5	(20.8)
	SG301第5b層	Ⅱa or b	一端欠50%	(3.6)	1.7	0.40	(10.6)
2013	SB401	Ⅱb	ほぼ完形	5.6	1.6	0.30	17.8
2003	第5a層	Ⅱa	ほぼ完形	5.55	1.45	0.4	14.1
2002	第4a層	Ⅰ(中世)	完形	3.3	0.95	0.3	2.2
	SD530	Ⅰ(中世)	ほぼ完形	2.9	0.8	0.3	1.3
	近世土壙	Ⅱb or c	一端欠80%	(5.8)	2	0.5	(24.5)

iii）木製品(Fig.68～78、図版52～58、原色図版10)

木簡　SG301から木簡が3点出土した。すべて第7b層からのものである。

532は、もとは両面に2行以上にわたって文字が記された木簡で、再加工して人形代に転用されているため、本来の形や大きさはわからない。字の向きは人形代の上下と反対で、人の首の部分では字が加工によって切られているのが観察できる。頭の部分は木簡の下端部に近いところであろう。側面が本来のものか再加工によるものかは不明である。遺存状態は良好で、ほとんどの文字は判読できたが、全体の文意についてはまだ検討が必要である。先述した転用の状況からみても、まじないとは直接係わらない内容であると考えられる。人形としての記述は祭祀具の項であらためて行う。

533は「謹啓」の書きだしで始まる木簡である。上端は残っており方形で切込みなどはない。下部は失われている。両面に字があるが、「謹啓」と書かれた面は墨がはっきりと残っているのに比べて裏面は墨の残りが悪い。「謹啓」の用例は奈良県飛鳥池遺跡出土木簡にもあるが、伴出遺物から年代は本例の方が古い。

534は上下端は失われているが、残存する部分の上半部に「山丁王」のみが記され、その上下や裏面には文字はない。他には字は書かれていなかったと考えられる。「丁」は「部」なので、「山部王」という人名である。古代において「山部王」の名は『日本書紀』天武元年条や『万葉集』に見られ、桓武天皇の諱としても知られている。伴出遺物の年代からみて、この木簡に記された人物は天武元年、壬申の乱において没した「山部王」の可能性がある。

以上の木簡の釈文は以下のとおりである。

532　・×奴我罷間盗以此□在　(□は「住」か「往」)
　　×□言在也自午年□□
　　・×於是本奴主有□□□
　　×□丁君之狂此事□口言□
　　[知ヵ]

533　・「謹啓
　　・「□然而
　　[初ヵ]

534　「山丁王」

以上3点の木簡の釈文は、奈良国立文化財研究所において東野治之・栄原永遠男両氏、同研究所史料調査室の諸氏、および当協会古市晃・鳥居信子によって検討された成果による。

これまでにも難波宮跡周辺で出土した木簡はいくらか報告されているが、年代が造営前に遡るか、同時期でも宮域からはずれたところにおけるものであった。前期難波宮の中枢部付近から木簡が出土したのは今回が初めてであり、貴重な資料ということができる。また今年度、財団法人大阪府文化財調査研究センターが本調査地の北で発掘調査を行い、本調査地の谷の北に存在する別の谷の埋土から33点(墨書はないが、形態から木簡の可能性のあるものを含む)の木簡が出土した。永らく良好な木簡

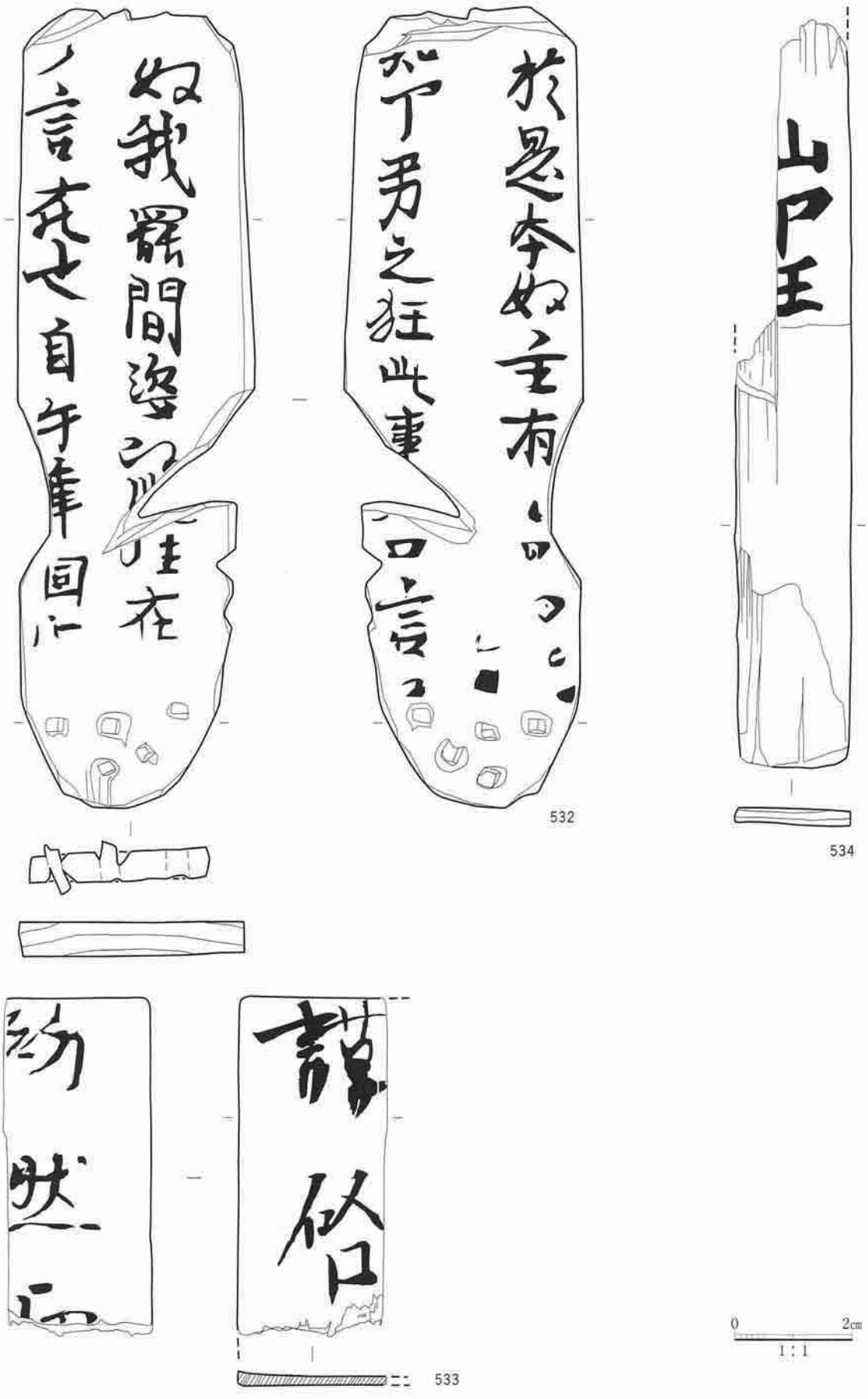


Fig.68　木簡
第7b層(532～534)

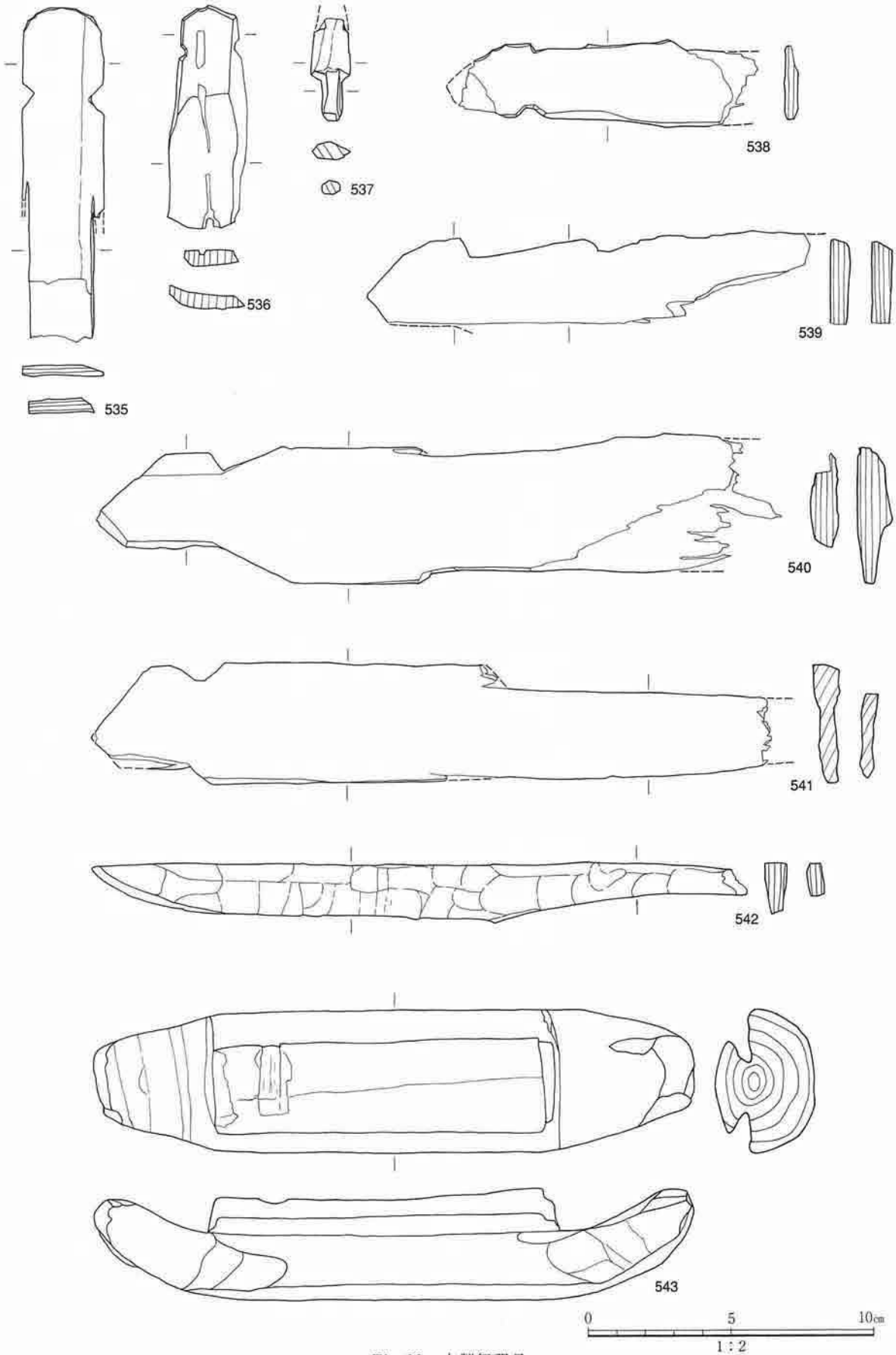


Fig.69　木製祭祀具
第6b層(535～543)

資料が得られなかった難波宮跡であるが、谷の中など、遺存条件に恵まれたところでは出土することがわかった。今後、これらの資料の分析を進める必要があるが、新たな資料の増加も期待される。

祭祀具　人形532・535・同未成品？536・木鎌537・馬形538～541・刀形542・船形543・斎串544～566がある。

人形には先述した木簡を転用してつくった横向きのもの532と正面からのもの535がある。532は字が書かれていた方向とは逆につくられ、片側を緩く、もう片側を大きく切込むことで人物の首を表現している。顔の部分も鼻や口をわずかに凹ませることで表す。頭には木釘を５個所に打込んでいる。何らかのまじないに係わるものであろう。下端は折取ったようになっており、人形としてはここで終わっていたと思われる。先に触れた北方の谷の調査では、木簡と共伴して手足の部品を組合わせるマリオネットのような横向きの人形が出土しているが、本例には手を取付ける孔は開けられていない。535は両側から切込みを入れて首と腕の部分を表現する。下端は欠損している。536は同様の切込みがあることから人形の未成品の可能性があるが、斎串や付札にするためのものかもしれない。厚さが一定でなく凸凹である。535・536はSG301の埋土である第6b層から多量の木屑とともに出土した。

木鎌537は先端を欠いている。538～541は切込みによって頭と胴体の部分を表現している。図では左側を頭部としたが、右側の端部はすべて欠損している。形態から馬形あるいは鳥形の可能性がある。比較的小さなもの538・539と大きなもの540・541に分けられる。刀形542は切先の刃や茎の部分も表現されている。船形543は船本体の上に削出しによって上屋の部分をつくる。両端は同様の形状で、前後の区別はなかったようである。これらはいずれも第6b層から出土した。

斎串544～566は完存するものは出土していない。幅が２cm前後、厚さが２～４㎜の薄い短冊状をなすもので、下端が片切りのもの544・545・553・559～561と、両側からカットされて剣先状をなすもの546～552・554～558・562～566を斎串に分類した。図化・写真撮影は片切りあるいは剣先状の方を下にしているが、他遺跡における木簡の出土例の中には上端が山形のものもあり、角度の緩い546・565などは山形の方が上かもしれない。551の上端は斜めに折取られている。561は扁平ではなく凸凹で、未成品と考えられる。住友銅吹所下層SD801出土例[大阪市文化財協会1998]のように上端近くに切込みをもつものは見られない。第7c層から出土した547以外はいずれも第6b層からのものである。

木製道具類　杭・部材以外の木製品をFig.71～73に掲載した。用途が明確なものとしては、木釘567・琴柱573・紡織具574・火鑽り棒575～579・曲物582・585・木錘583・盤584・砧587・履物588・木槽589・590がある。

木釘567は長さ16.9cmで釘としては大きい部類である。類例はNW100次調査SK10043で出土している[大阪市文化財協会1981A]。１点のみであり、実用品かどうかは不明であるが、似た例が近年の奈良県飛鳥池遺跡の発掘調査で出土しており、金属製品の製作見本である様(ためし)として報告されている[奈良国立文化財研究所1999]。SG301の最下層である第7b層から出土した。574は紡織具を途中で切って加工している。下端の切込みがどのような目的によるものかは不明である。573・574はSD301の第6b層から出土した。575～579は断面が円に近い多角形に仕上げられた棒である。先端が

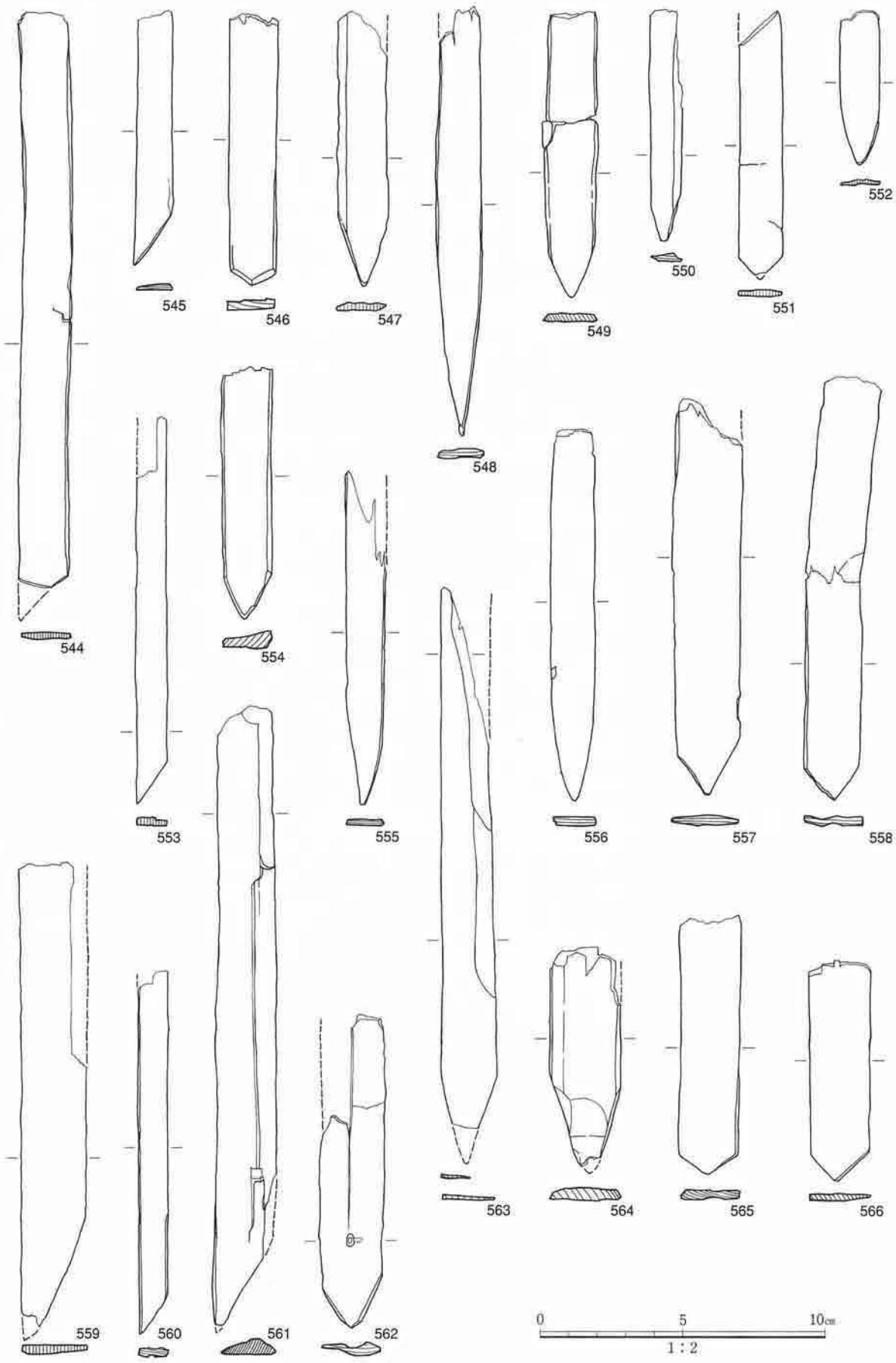


Fig.70　木製祭祀具(斎串)

第7c層(547)　第6b層(544～546・548～566)

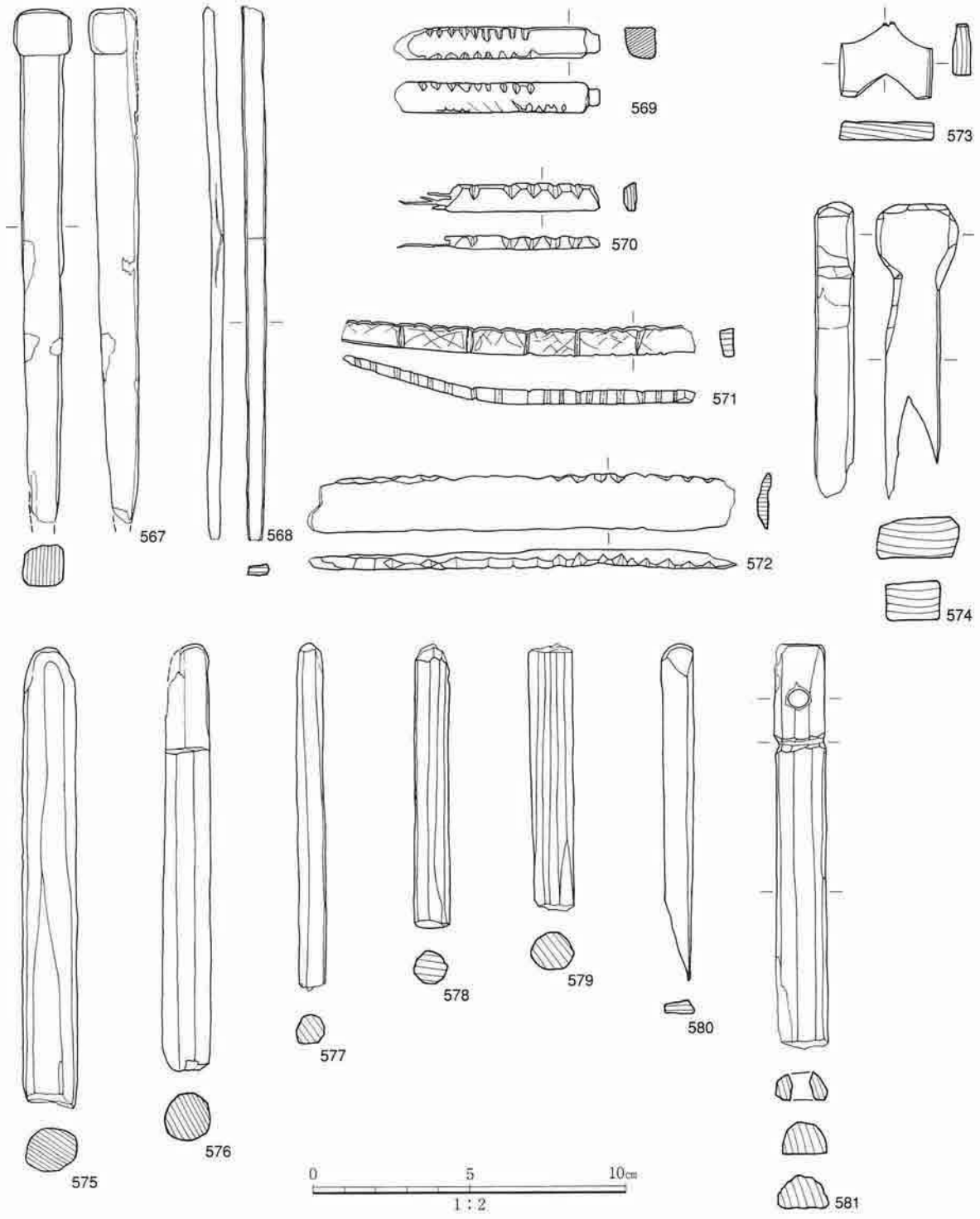


Fig.71　木製道具類

第7c層(575・569～571)　第7b層(567・577・581)　第6b層(568・576・572～574・578～580)

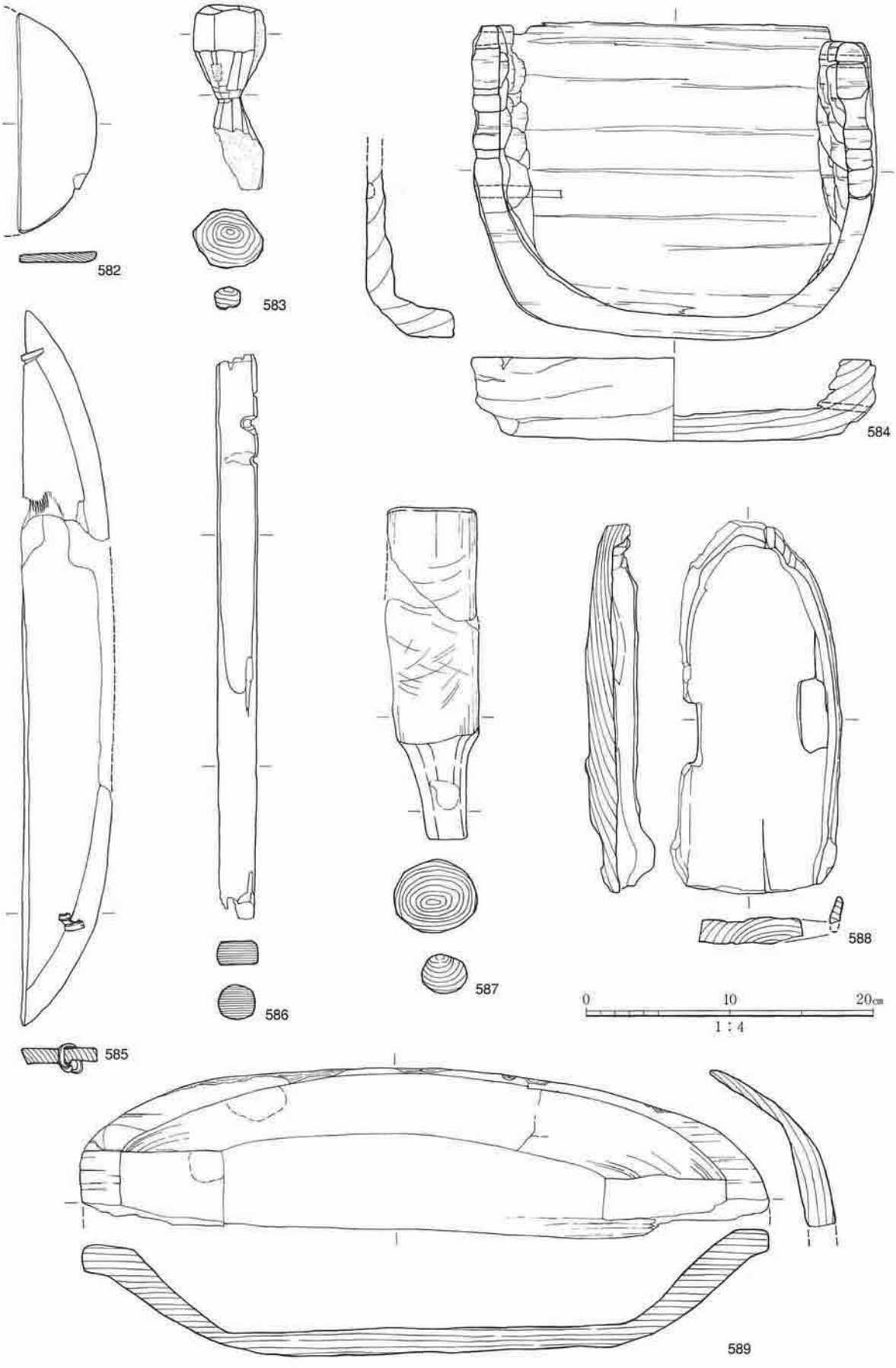


Fig.72　木製道具類・容器

第7c層(583・584)　第7b層(585～587・589)　第7a層(588)　第6a層(582)

やや尖りぎみで黒く焦げているため、火鑽り棒として用いられたと考えられる。580は材木の加工途中に出た木っ端であるが、先端に焦げた跡があり、何かに火を付ける際に用いられたと考えられる。この種の破片は他にも多数見られた。575は第7c層、576・578～580は第6b層、577は第7b層から出土した。

木錘583は中央のくびれたところに紐をかける。蓆編みなどに用いられるものである。587は円筒形の部分に細くすぼまった短い柄が付く。竪杵かあるいは砧と考えられる。583は第7c層、587は第7b層から出土した。

履物588は底部から側面が1.6cmほど立上る。底部の２個所に長方形の孔が開けられている。これまで知られている下駄や沓とは形態がまったく異なる。第7a層から出土した。平野区長原遺跡に７世紀前半の土器と共伴する類例がある[大阪市文化財協会2000]。

木製の容器のうち、582は側板と接合した痕跡がないため、曲物の蓋であろう。585は樹皮で側板を留めた部分が残っており、曲物の底板である。平面形は一辺30cm弱の隅丸方形に復元できる。盤584は底板から側板までを一木から削り出す。平面隅丸方形である。木槽は大小あり、589は本体の長さ48.0cmで、590が117.0cmである。590は端部に棒状の把手２対が付く。589は残っている部分では把手の有無はわからないが、あれば１対である。584は第7c層、585・589・590は第7b層、582は第6a層から出土した。

用途不明の木製品のうち、568は細長い棒状で箸の可能性がある。569～572は棒あるいは細長い板に刻み目を付けたものである。571には文様らしき線刻がある。581は片側に長軸と直交する孔をもつ棒である。586は両端を欠いている。図の上半部の断面が隅丸長方形で、下半部は断面円形である。船の櫂のような道具が想定できる。上半部にある穴は火鑽り板として転用した際のものかもしれない。

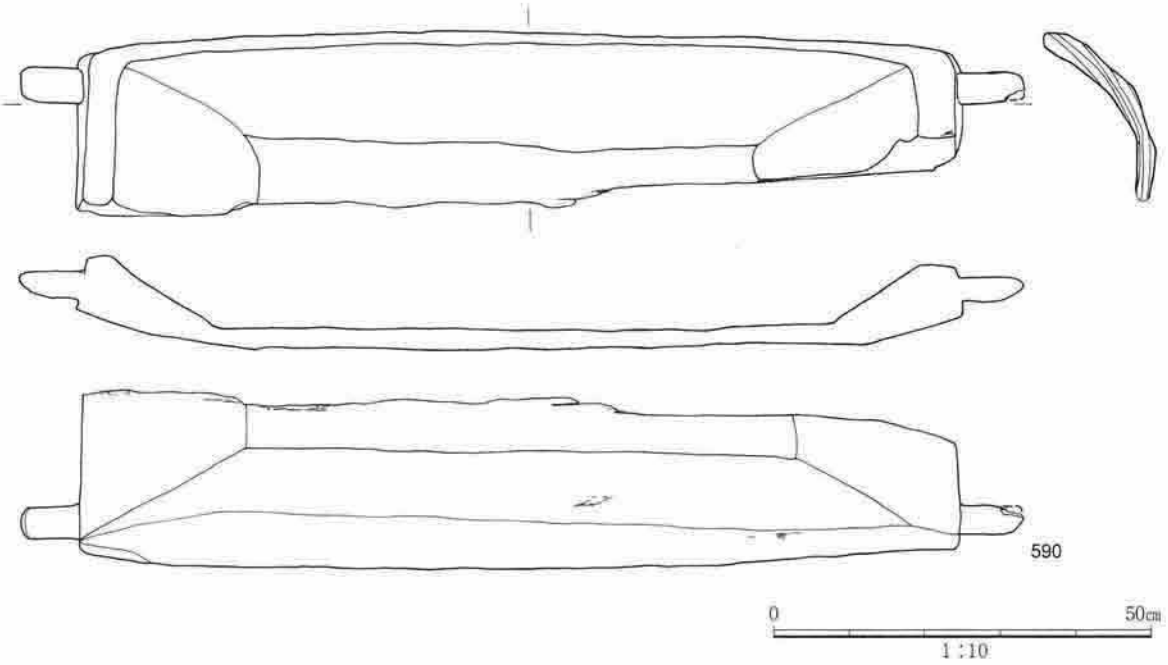


Fig.73　木製容器
第7b層(590)

568・572は第6b層から、569～571は第7c層、581・586は第7b層から出土した。

杭　594～597である。594は先端に近いところにくびれをつくる。杭としたが、特異な形態であり、他の用途が考えられるかもしれない。595は細い丸太を表皮を残したまま杭に加工している。596・597は杭の用途とは関係しない枘穴が数個所に見られるため、建築部材を転用したものと考えられる。596はさらに木枠3の下部の木組として使用されていた。

部材　部材は591～593・598～618である。多くは建築部材と考えられる。SG301内や周辺の木枠1・2・4の構成材として転用されていたり、あるいはSG301の埋土である第7b層・第6b層から出土したものである。大小合せて100点ほどあるが、その中から特徴的なものを選んで図化・写真撮影を行った。それ以外のものも含めて保存処理は完了しており(付章第2節参照)、当協会で保管している。これまで難波宮跡では遺存条件の悪さから良好な建築部材が出土したことはなく、今回多くの部材が得られたことは、今後当該期の建物などを復元的に研究していく上で重要である。また、それぞれの樹種については次章第4節に同定結果を報告しているので参照されたい。

591は横断面の中央と両端がややふくらんでおり、屋根板の一部の可能性がある。592は片側がす

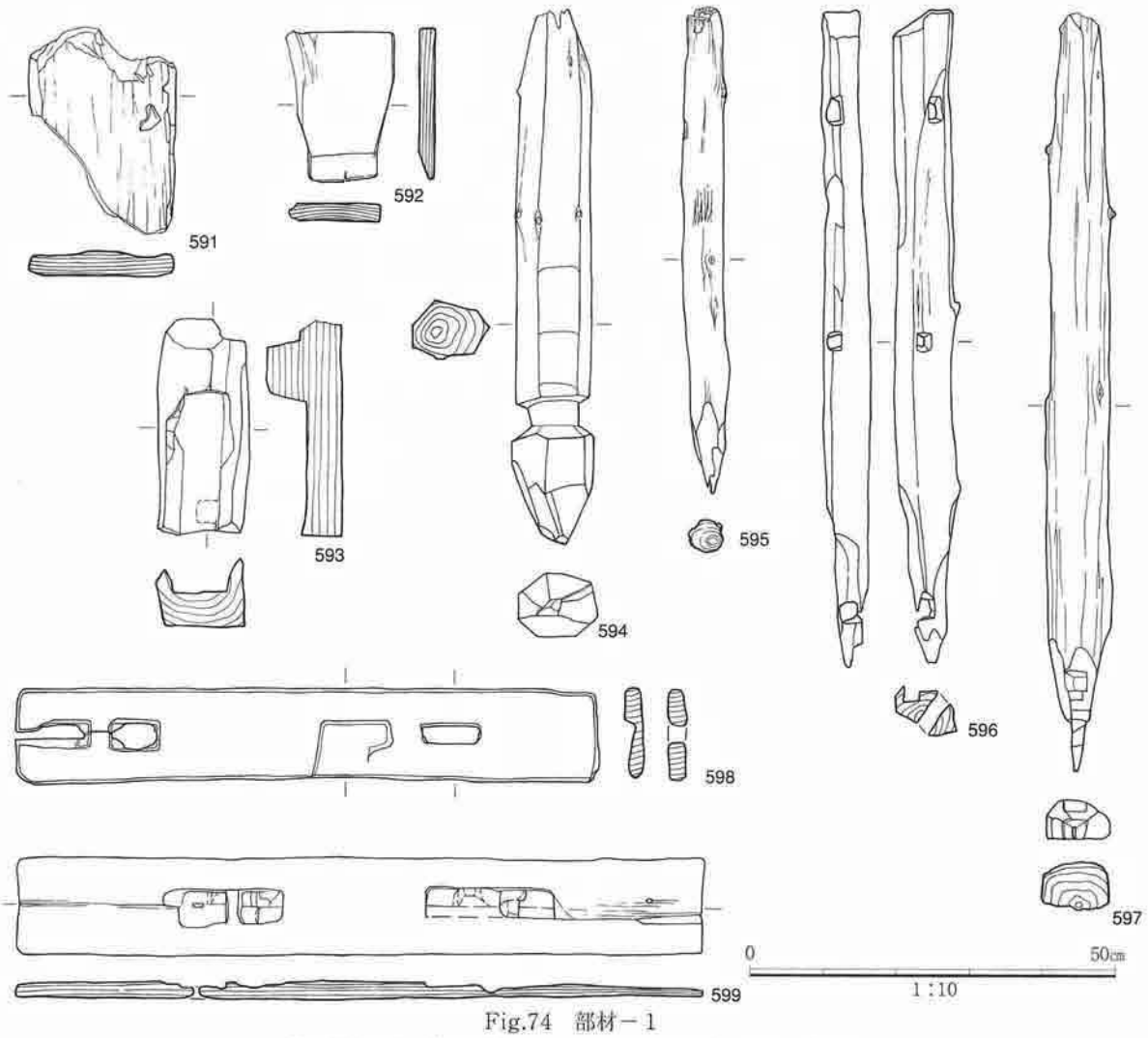


Fig.74　部材－1
第7c層(591)　第7b層(592～595・597～599)　木枠3(596)

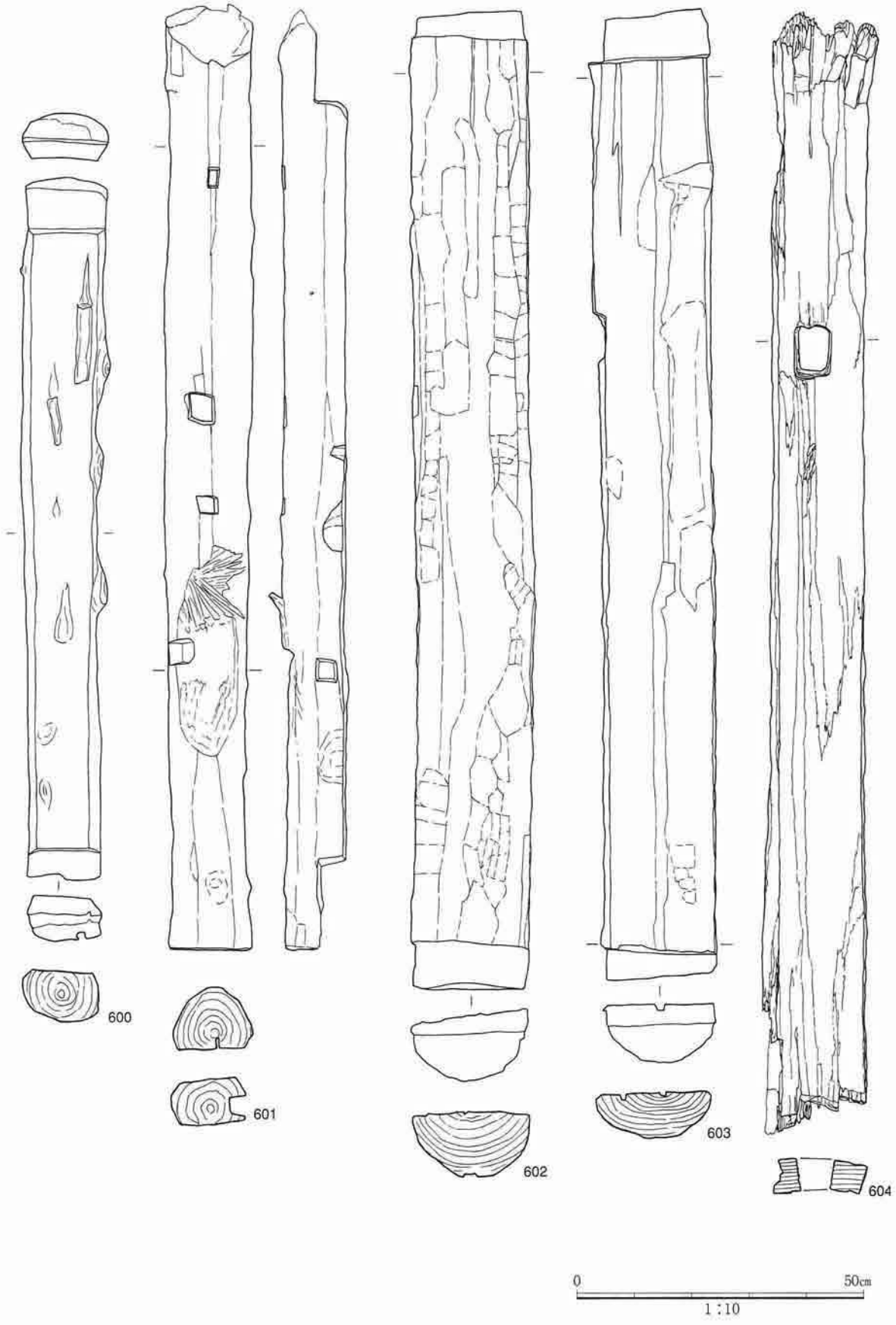


Fig.75　部材－2
第7b層(604)　木枠1(602・603)　木枠2(601)　木枠4(600)

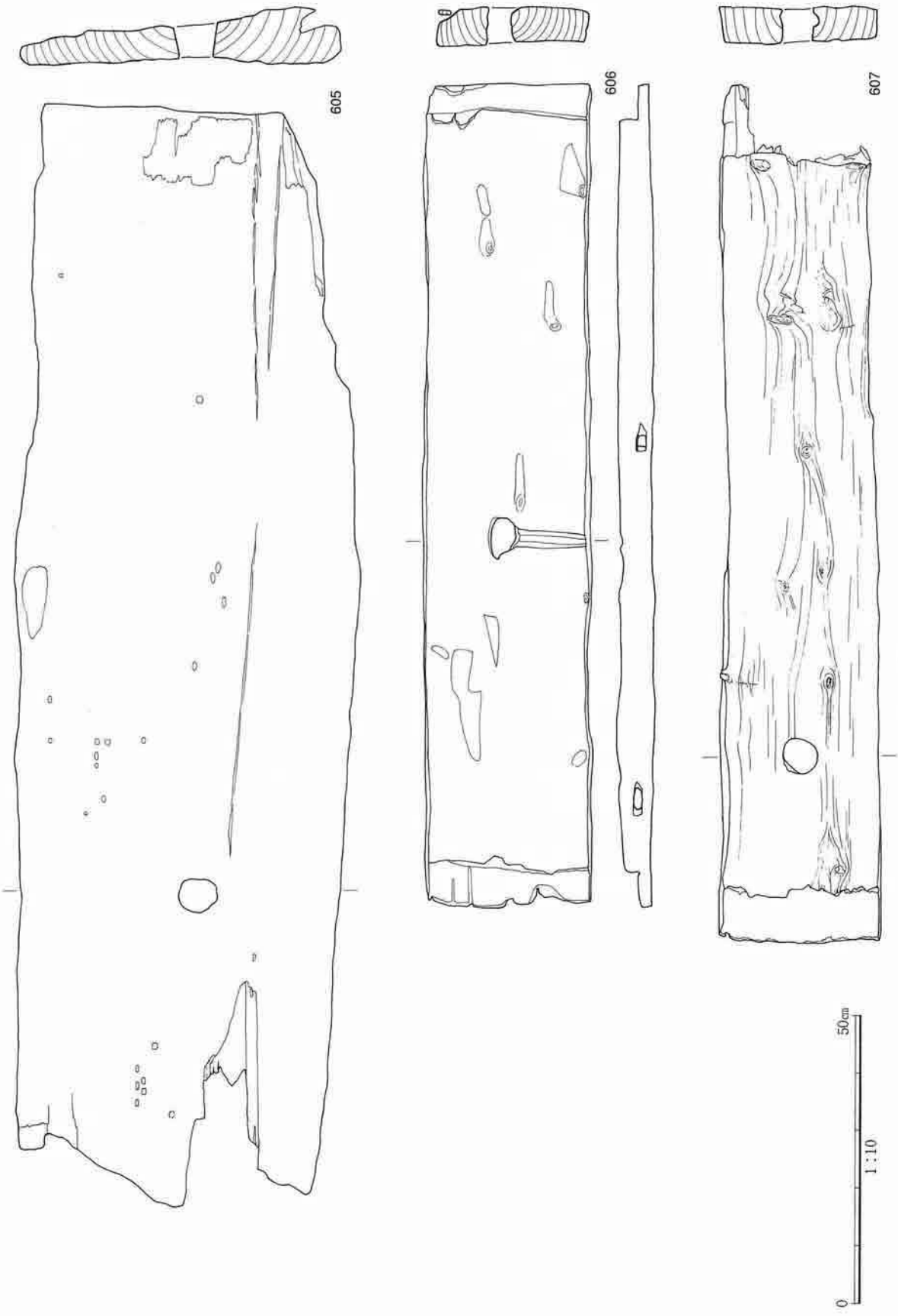


Fig.76　部材－3
第7b層(605)　木枠2(606・607)

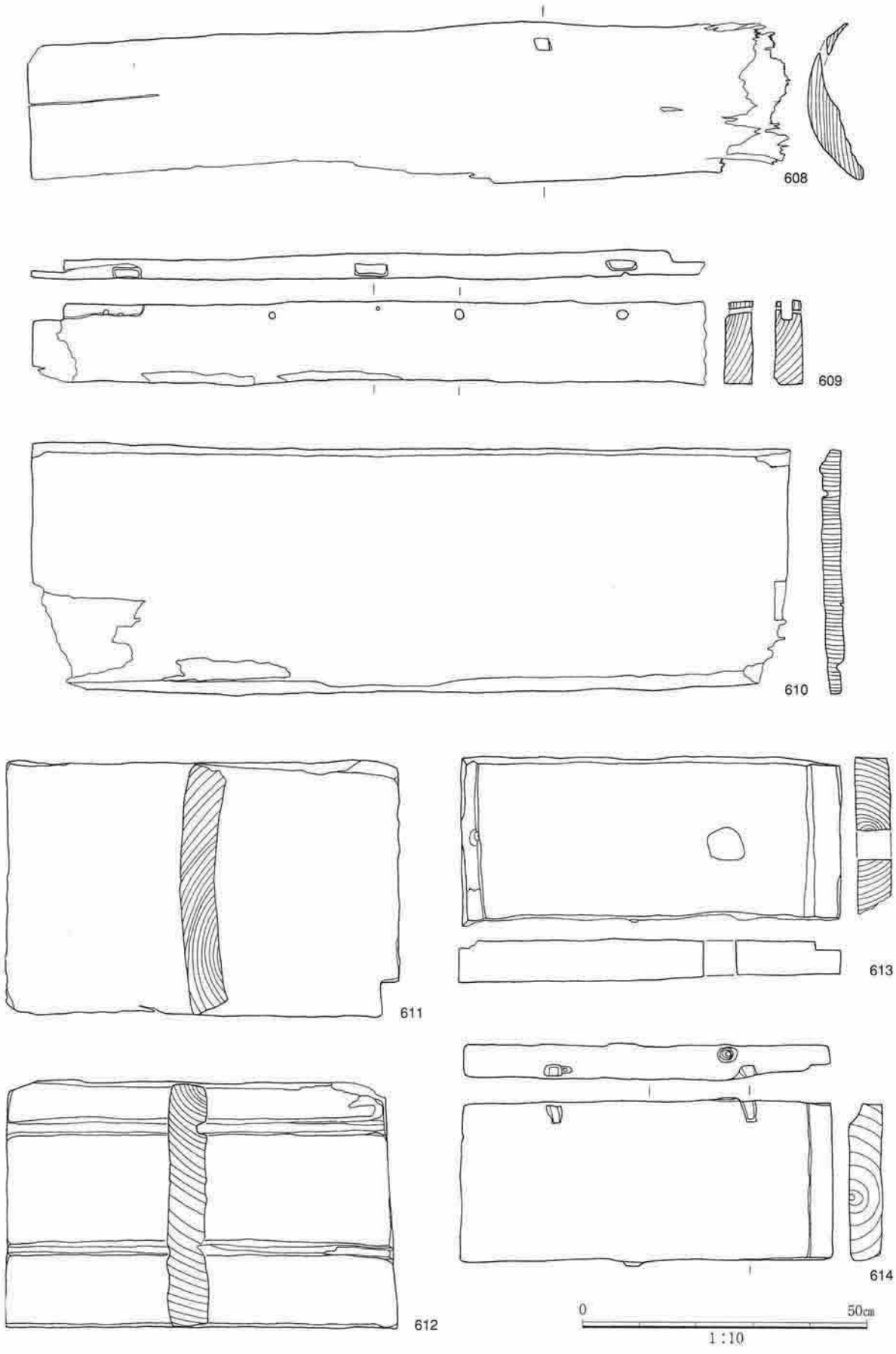


Fig.77　部材－4
第7b層(608・612)　木枠1(611)　木枠2(610・613・614)　木枠4(609)

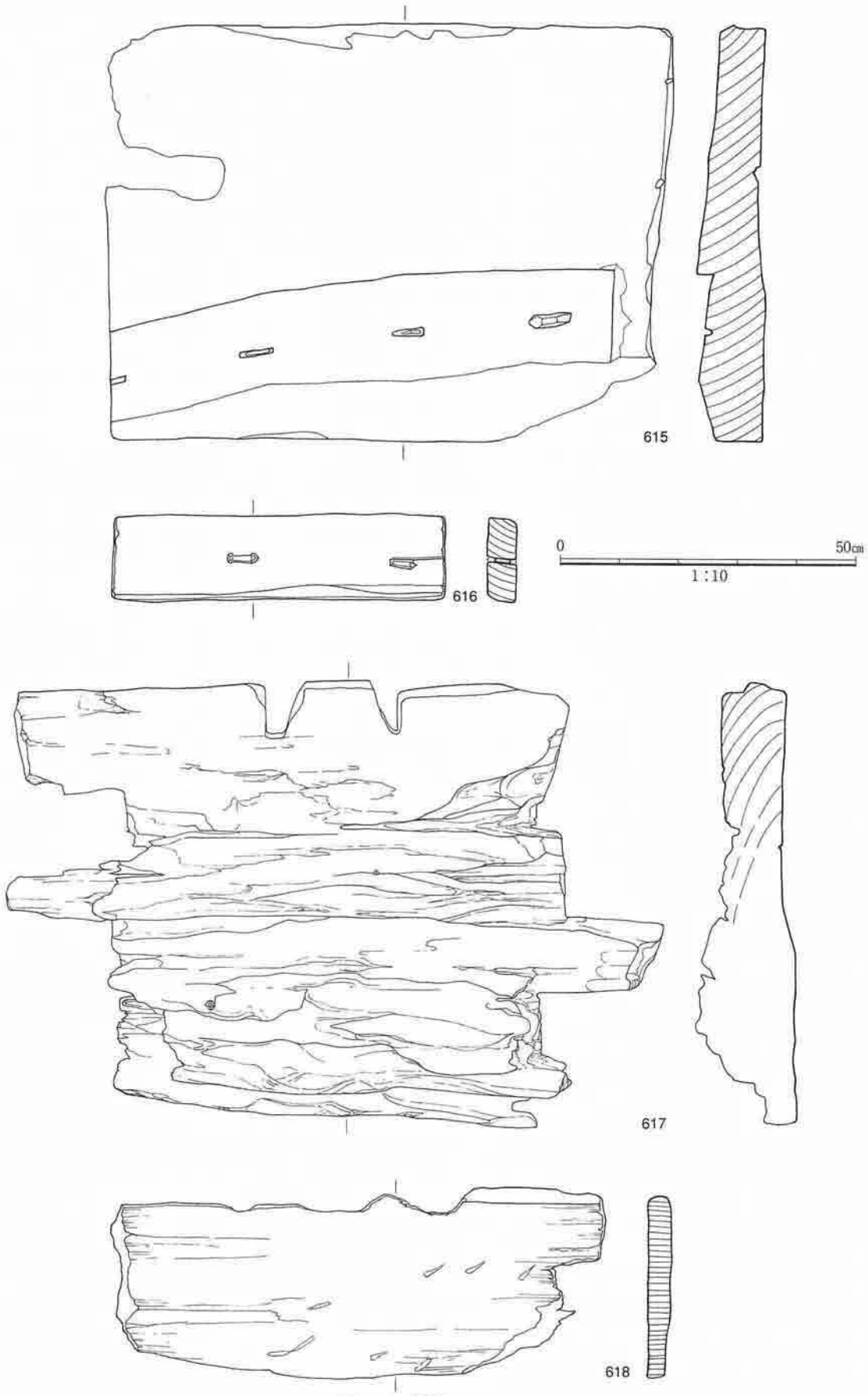


Fig.78　部材－5
第7b層(617・618)　木枠1(615)　木枠4(616)

ぼまる形の板材で、すぼまった方の端部を斜めにカットしている。593は角材を部分的に刳貫いている。598・599は長方形の孔をもつ板材である。600～603は円柱を半截したもので、枘穴をもつもの601ともたないもの600・602・603がある。602・603は**木枠1**の長側面を構成していた材で、また、600・601はそれぞれ**木枠4**・**木枠2**を構成していた材である。両端部の段は木枠を組むために施された加工であろう。604は角材で方形の孔をもつ。605は今回出土した中でもっとも大きな板材である。**木枠1**の上を覆うような状態で出土した。1個所に開けられた円形の孔は目的がわからない。606・607にも同様の円孔がある。606・609は側面に枘穴をもつ。608は丸みをもつ板材である。609には長辺に沿った片側に釘孔が並んでいる。606・607は**木枠2**を構成していた。608は第7b層から出土した。609は**木枠4**の一部である。610は孔・枘穴・段などの加工が見られない板材である。今回、奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏によって年輪年代が測定され、634年の伐採年代が出ている(次章第3節参照)。**木枠2**を構成していた。612は長軸方向に2条の溝がある。614の孔は側面に斜めに通されている。611は**木枠1**、613・614は**木枠2**の一部である。

615の片面にはやや斜め方向に凹められた個所があり、4個所の孔で蔓によって他の部材と固定されていたとみられる。**木枠1**の短側面である。616はその凹みにちょうどおさまり、孔の位置も合致するので関連する部材かもしれない。**木枠4**に転用されていた。615の凹みの形状は建物の部材とは考えにくく、たとえば舷側板のような船材の一部の可能性がある。617・618は図の上辺に2～3個所の刳込みがあり、これらも船材との関連を想定できよう。617は第7b層と第6b層との境目あたり、618は第7b層から出土した。

iv) 石製品(Fig.79、図版51)

結晶片岩製の紡錘車619と砂質凝灰岩製の砥石620がそれぞれ1点ある。

619はSG301の上位、第5b層から出土したが、形態や材質から当該期かそれ以前に属するものと考えた。表の面は平滑に仕上げられているが、刻線による文様は施されていない。620はSG301の第7b層から出土した。2面で明瞭な使用痕が認められ、他の面にもそれらしき条痕がある。

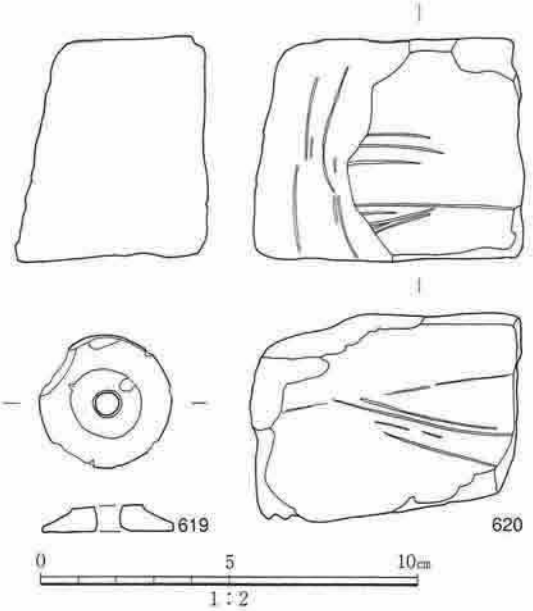


Fig.79　石製品
第7b層(620)　第5b層(619)

また、片面あるいは両面を平らに加工した板石2020～2030がSD301やSG301の周辺から出土した。板石は報告したもの以外にも存在する。水利施設の周囲に敷いて脆弱な地盤を補強するためのものと考えられ、また、装飾の目的もあったかもしれないが、原位置を保って出土したものはなかった。2020～2022・2024～2026・2029・2030は安山岩、2023は片岩、2027は砂質凝灰岩、2028は結晶片岩である。

v) 金属製品(Fig.80、図版51)

第7c層の上部から鉄製の釣針621が1点出土した。上端部を欠いており、残存長は6.1cm、断面形は

方形で、太さは２㎜である。先端から1.0㎝のところには短い逆刺が付くが、本体に対してほぼ直角の方向である。

vi）鍛冶関係遺物（原色図版11）

鍛冶関係の遺物として鞴羽口が５点以上ある。多くはSG301の埋土である第7b層や第6b層から出土した。SD301の北東２ｍには炉と思われる穴SX301が検出されている。また、SG301からは多量の木製品に混って燃料としての木炭が出土している。これらのことから、石組み遺構が機能していた時期、あるいは機能を停止した直後の時期にSX301の周辺で何らかの鍛冶行為が行われたと考えられる。ただし、鉱滓や焼土片も多くは出土しておらず、鋳型とわかるものも見られないので、どのような目的で使用されたのか詳細は不明である。

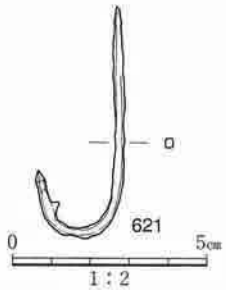


Fig.80　鉄製釣針
第7c層（621）

vi）小結

以上に述べてきた前期難波宮期の遺物は土器・土製品のみにとどまらず、木製品・石製品・金属製品と多岐にわたり、これまで報告されてきたものと質・量ともに大きく異なる。当該期の土器組成や祭祀法、建築技術や鍛冶技術を考える上で重要な資料である。特に、多量の土器は台地部の柱穴や整地層から得られてきた断片的な情報を一気にひとつの土器様相として認識させうるものである。前後の時期の土器群とこれらを比較し、今回得られた年輪年代のデータや、「戊申年」銘木簡などの暦年代のいくつかの定点を併せて検討すれば、前期難波宮の造営期は７世紀中葉に明確に位置づけることができるであろう。今回の成果により、永らく残ってきた前期難波宮＝難波長柄豊碕宮説に対する疑問は解消できたものと考える。この点については第Ⅴ章で詳しく検討したい。

３）後期難波宮期の遺物

前期難波宮の水利施設を埋立てた客土層や、わずかな遺構などから当該期の遺物が出土している。数量の上では先述した前期難波宮期のものに遠く及ばないが、後期の復元を行っていく上で大きな手がかりとなるような遺物も得られている。

ｉ）土器（Fig.81～83）

第5c層　土器は遺物整理箱にして10箱ほど出土しているが、多くは６～７世紀代のもので、先に見た前期のものと比べて破片も小さく、土師器には風化の著しいものが多い。本層は谷を埋立てる大規模な客土層であり、これらはすでに地表にあったものが混入したと考えられる。その中で、わずかではあるが客土の時期を示す土器が含まれていた。これらは客土層の上部よりも、SD301やSG301の第6a層の直上付近に集中し、客土が行われる直前段階の人の動きを示している。年代決定に係わる食器類を中心に図化を行った。

土器には土師器・須恵器があり、土師器には杯Ａ622～624・皿625・626・高杯627がある。すべての内面に暗文が施されている。杯Ａの体部は底部から緩やかに外反しながら立上がり、口縁端部を内側にかるく折返す。口縁端部が外側に肥厚する在地型のものは含まれない。高杯627は脚部に面取りを行うタイプで、杯部外面はヘラミガキ調整である。脚部の製作技法は棒状の芯に粘土を巻付ける。

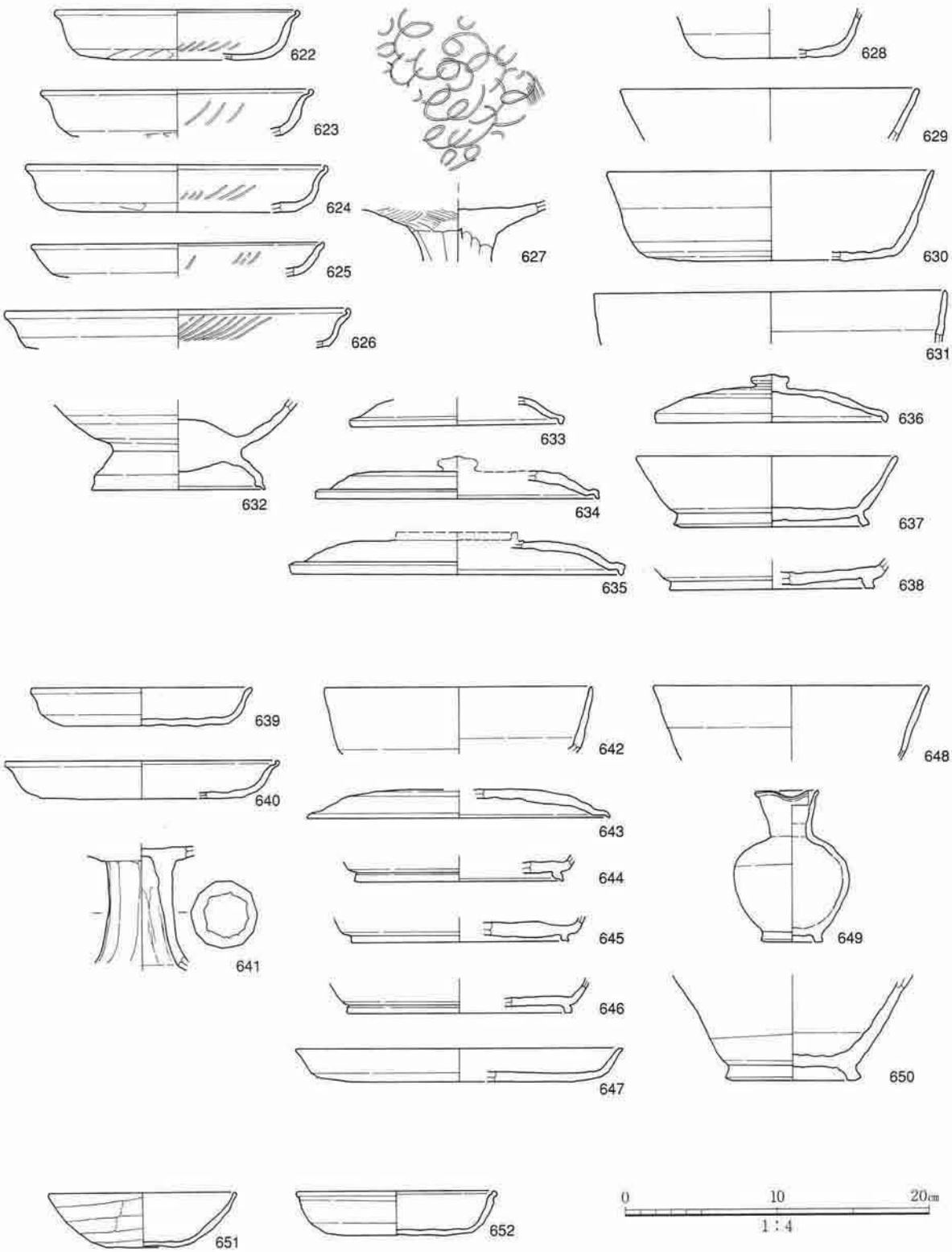


Fig.81　第5c・5b層など出土土器

第5c層(622～638)　第5b層(639・650)　SP401(651・652)

須恵器には杯A628・630・杯B637・638・杯AまたはB629・631・杯B蓋633・634・636・稜椀蓋635・壺632がある。632は薬壺形の底部と思われる。

以上の土器は、上で見た土師器杯Aの特徴などから難波V古段階に属するものと考えられ、8世紀中葉の年代が与えられる。このことから、本層の客土は後期難波宮の造営に係わって行われたものであるといえよう。

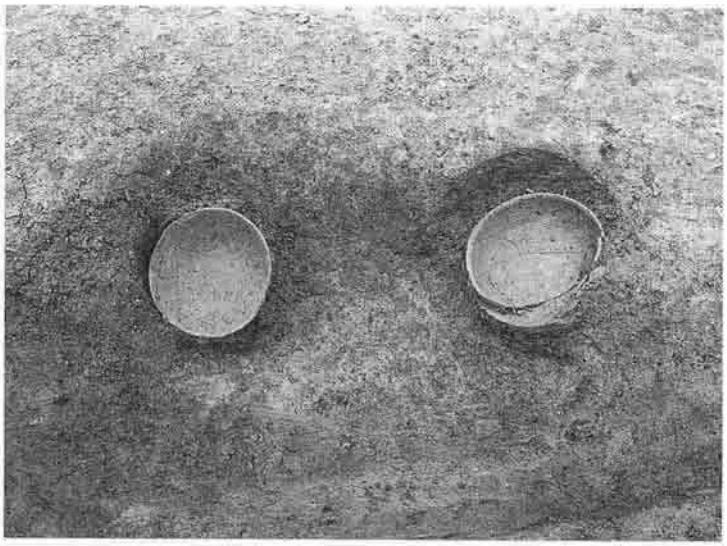


Fig.82　SP401土器出土状況

第5b層　第5c層の上位に堆積した水成層である本層からも土器が出土している。

土師器・須恵器があり、土師器には杯639・杯A640・高杯641がある。639は口縁端部を外側に肥厚させる在地産のタイプである。640の内面には暗文は施されていない。641の脚部は粘土紐巻上げによってつくる。内面には絞り痕が残る。



Fig.83　SP401出土土器(651・652)

須恵器には杯AまたはB642・648・杯B644～646・同蓋643・皿647・小壺649・壺650がある。皿647は灰白色を呈するやや軟質のもので、口縁端部に面をもつ。小壺649は体部が倒卵形で、底部はヘラ切りしたのち高台を付ける。壺650は649をそのまま大きくしたような形態と思われる。

以上の土器は土師器杯類や須恵器皿・壺類などの特徴から難波V中～新段階に相当し、年代は8世紀後葉～末である。第5c層による客土のあとにできた水溜りに入った遺物であり、長岡遷都＝難波廃都までのものを含むと考えられる。

SP401　柱穴の掘削中に2点の土器がほぼ完形の状態で出土した(Fig.82)。土器を取上げたのち柱痕跡が確認されたので、柱を抜取る際に埋納されたものと考えられる。

土師器椀651・杯652がある。椀651は外面全体をヘラケズリ調整する。同時期の都城で出土するタイプと変わらない。平城宮土器Ⅵに当る。胎土は平城京で出土するものよりもむしろ長岡京のものに近いが、在地産のものとは区別が難しい。杯652は口縁端部が外側につまみ出される在地のタイプである。これらは難波Vの新段階に相当し、8世紀末～9世紀初頭の年代が与えられる。組合う柱穴がなく、建物は復元できなかったが、柱抜取り後に埋納されたものなら長岡遷都時における難波宮の建物の解体に係わる可能性があろう。

ii）瓦・塼（Fig.84・85、図版59～61）

後期難波宮に使用された瓦・塼が遺物整理箱にして15箱出土している。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・鴟尾・塼がある。

軒瓦については新しく認識されたものはなく、すべてこれまでの型式の中に含まれる。それぞれの型式の計測値や特徴については『難波宮址の研究』第十［大阪市文化財協会1995］を参照されたい。

軒丸瓦　重圏文系と蓮華文系があり、型式が確認できたものはそれぞれ９点、６点である。

型式番号別に見ると、まず重圏文系では、653は6011B型式である。焼成は硬質で灰色を呈する。燻しは掛かっていない。第5a層から１点出土した。654・655は6013型式である。654は瓦当の部分がほぼ完存する。瓦当裏面には丸瓦部の外れた痕跡が見られる。655は瓦当の一部のみが残り、丸瓦部が外れている。焼成はやや軟質で、燻しが掛かる。どちらも第5c層から出土した。656は6014型式で、瓦当の一部のみが残存する。焼成は軟質で燻しが掛かっている。第5c層から１点出土した。657・658は6020型式である。小破片で不確かな１点を含めて５点出土した。657はSD301の開口部に差込まれていたもので（図版14－上）、瓦当の一部を欠くが、玉縁まで残っており全形のわかる資料である。658は瓦当の部分のみが完存する。丸瓦部は完全に外れている。657は先述のように石組み溝を最終的に埋立てる第5c層から出土した。658は第5b層から出土した。

蓮華文系では6303型式659・660・662と、6241型式661がある。6303型式は５点出土した。瓦当の完存するものはない。焼成は硬質で、燻しが掛かっている。659・662は第5b層から、660は第5c層から出土した。

軒平瓦　重圏文系と唐草文系がある。それぞれ６点、４点である。すべて破片で、瓦当の部分も完形に近いものはない。

重圏文系では663・665は6572A型式である。顎の形態は直線顎に近い曲線顎で、他の重圏文系の型式も同様である。焼成は硬質で、燻しは掛からない。663は第5a層から、665は第5c層から出土した。664・666は6572D型式である。664は第5b層から出土した。合計３点が見られた。667は6574C型式で、第5c層から１点出土した。他にも瓦当の部分を欠くが顎の形態から重圏文系と推定されるものがあるが、点数には加えなかった。

唐草文系は6664B型式668～670がある。顎の形態は段顎である。焼成は硬質で、668は燻しが掛かっており、669・670は掛かっていない。合せて４点ある。668は第5c層、669・670は後世の地層から出土した。

前報告の軒瓦は重圏文系が31点、蓮華・唐草文系が30点出土している。前者の比率の高い大極殿地域などと比較すると、蓮華・唐草文系が多いという傾向は今回も大きくは変わらないといえよう。

道具瓦　重圏文鬼瓦671・葡萄唐草文鴟尾672がある。

671は鬼瓦の側辺部の破片である。上下の向きは現状ではわからない。焼成はやや軟質で、燻しが掛かっていたようである。672は表側に突帯に取付く葡萄１房が表現されている。柏原市太平寺廃寺（智識寺跡）出土例から葡萄唐草文の一部と考えられる。葡萄の先端は曲がっているが、このような特徴は海獣葡萄鏡などにも見られる特徴で、特異なものではない。葡萄の実は１つずつ半球形の型を押

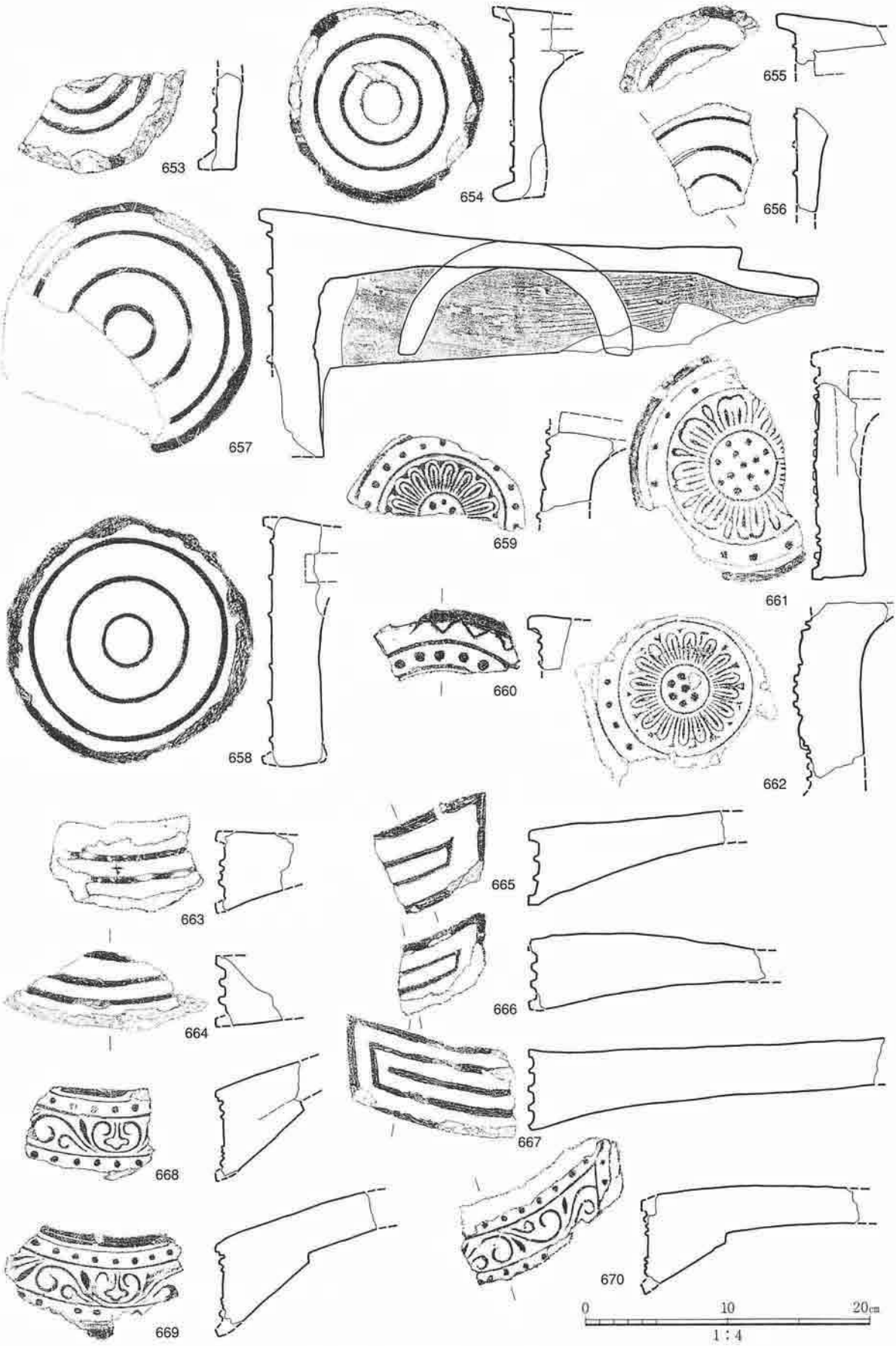


Fig.84　後期難波宮の瓦・塼－1

第5c層(654～657・660・665・667・668)　第5b層(658・659・662・664)　第5a層(653・663)　その他(661・666・669・670)

付けてつくる。突帯は断面半円形で、幅は3.5～3.7cmである。焼成は硬質で、燻しが掛かっている。胎土は砂粒をきわめて多く含む。第5b層から出土した。他に文様のある部分ではないが破片が１点出土している。

丸瓦・平瓦　丸瓦・平瓦合せて遺物整理箱で12箱が出土した。その中から残りのよいものを選んで図示している。673は丸瓦で、凹面には布目が残り、焼成はやや軟質で燻しが掛かる。第5b層から出土した。674～678は平瓦である。凸面は縦方向の縄目タタキで、凹面には布目が残る。675は狭端部の片方を斜めにカットしている。桶巻づくりの痕跡が確認できるものはなく、大半は一枚づくりと考

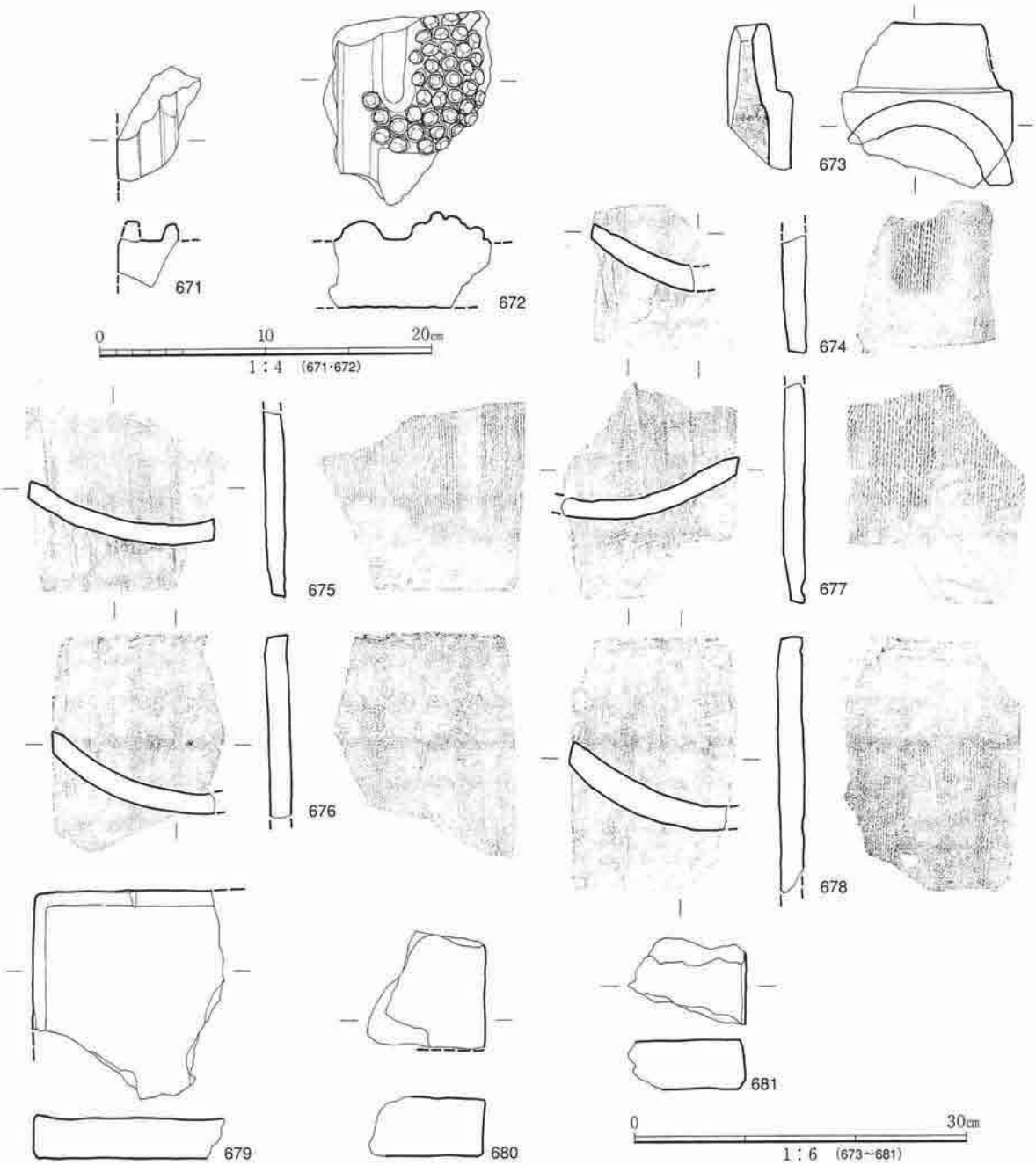


Fig.85　後期難波宮の瓦・塼－２
第5c層(674・676・678～681)　第5b層(672・673・677)　SK421(675)　その他(671)

えられる。焼成はやや軟質のものから硬質のものまであり、燻しは掛かっていない。674・676・678は第5c層、677は第5b層から、また、675は２Ｃ区の後期難波宮期の土壙であるSK421から出土した。

塼　比較的薄く面積の広い679と、レンガ形をした厚めの680・681がある。

679のタイプは平面方形かそれに近い形に復元でき、基壇の床に敷くためのものと考えられる。680・681はそれに対して基壇の化粧として積上げるものであり、それぞれ用途が異なる。いずれも第5c層から出土した。

iii）金属製品(Fig.86、図版61)

泉施設SG301の上位に堆積した第5b層から銅製の飾り金具682が出土した。直径8.5㎝の半球形で、端部は受口状をなす。内面中央部には釘状であったと思われる鉄製の金具が鋳からめられており、外面の中央部はそれに対応して少し突出している。これらの特徴から、この金具は「饅頭金物」あるいは「乳金物」と呼ばれる門扉の釘隠しであると考えられる。

なお、非破壊で表面の蛍光Ｘ線分析を行ったところ、90％を上回る銅と数％の砒素・ビスマス・錫、微量の鉛・銀・アンチモンを検出した(註３)。

また、その下位の第5c層からは和同開珎2031が１点出土した。やや歪んでいるが、直径は2.45㎝である。　(佐藤)

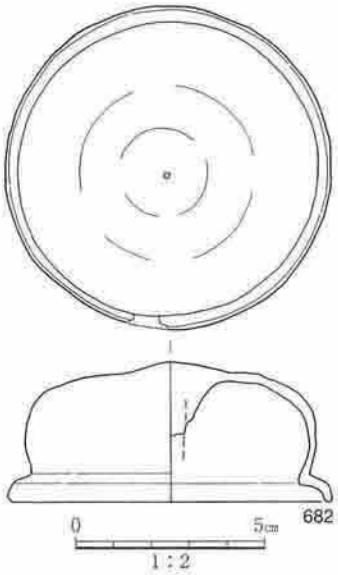


Fig.86　銅製饅頭金物

註)

(１)調査担当者である江浦洋氏のご教示による。

(２)漆の同定は奈良国立文化財研究所 佐藤昌憲氏による。

(３)奈良国立文化財研究所 村上隆氏にお願いした。分析は同研究所設置のテクノス製エネルギー分散型微焦点蛍光Ｘ線分析装置TREX640型を用い、半定量分析で行った。

第４節　室町時代の遺構と遺物

１）遺構(Fig.87、図版28)

SD530　４Ｅ区で検出された南北方向の堀状の窪みである。第3b層の基底面で検出され、第4a・4b層を掘込んでつくられている。確認できた長さは8.5ｍで、幅は9.8ｍである。深さは2.2ｍで、底は平らであった。埋土は底部のみに水漬き状のオリーブ黒色の粘土が薄く堆積し、それから上は暗灰黄～黒褐色の礫混り極細～細粒砂によって東から一気に埋戻されていた。遺物は陶磁器・土器や箸などの木製品が含まれていたが、小さい破片が多く、また、骨や貝などの食物残滓はほとんど含まれていなかった。このことから、この遺構はゴミ処理用の大きな土壙とするよりは、何らかの土地区画に係わる堀と考える。ただ、地山が高く残っていた４Ｅ区の南部では検出されなかったため、谷の南には延びていかないで途中で終わっていたと考えられる。

遺構の年代は埋戻し土に含まれていた陶磁器・土器や、掘込み面を形成する第4a・4b層のものからみて、石山本願寺期、すなわち16世紀末ごろに位置づけることができる。

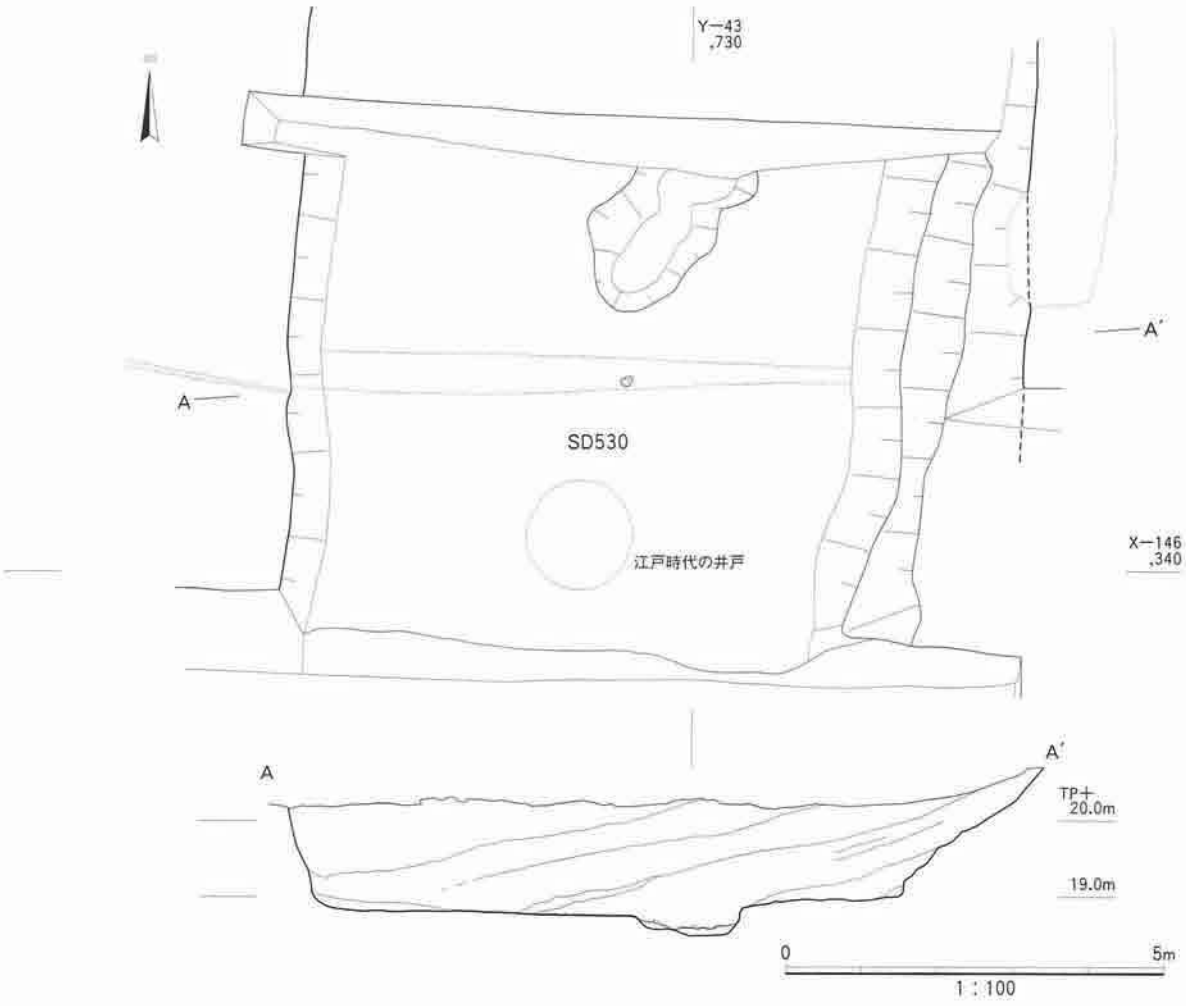


Fig.87　SD530平・断面図

2）遺物

i）陶磁器・土器

堀SD530から比較的まとまった数量の陶磁器・土器が出土した他、その下位の第4a層や第4b層からも同様の時期のものが見られた。SD530から出土したものを中心に報告し、他を補足的に述べる。

SD530（Fig.88、図版62）

中国製磁器には青磁・白磁・青花がある。国産の陶器・土器には瀬戸美濃焼・備前焼・瓦質土器・土師器がある。

青磁は碗683～686・2032・皿687・鉢688である。683・686・2032は蓮弁文の碗で、683は円弧と直線からなる特に形骸化した文様をもつ。685と菊花状の皿687は焼成がやや軟質である。鉢688は脚が3個所に付くと思われる。香炉のような形態であるが、内面にも施釉されており、火を受けた痕跡は見られない。白磁は皿689・690・693～695・2035・2038・2039・小碗691・692がある。689・690・693・694・2038・2039は端反りの皿である。695は体部が内湾し、外面に櫛のような工具で波状文を描く。2035は菊花状の皿である。691・692は底部内面を蛇の目状に釉剥ぎする。692は小さな皿かもしれない。青花には碗696～701・2033・2034・2037・2040・2041・皿702・704～708・2036・2042・2043・小杯703がある。2037の体部外面には簡略化した花のような文様が線刻されている。702・2042は碁笥底の皿である。706・2036は皿の底部で、706の高台内には□の4方に「富貴長春」の4字を配する。708は粗製の皿で、焼成はやや軟質で陶胎に近く、呉須の発色も悪い。

瀬戸美濃焼には鉄釉天目碗709・2044・灰釉天目碗？710・鉄釉皿711・灰釉皿712・2045がある。710は丸碗の可能性もある。折縁ソギ皿は見られない。

備前焼は壺717・鉢719・擂鉢720・721がある。鉢719は残存する範囲で擂目が見られず、口縁部の形態も擂鉢とやや異なっているため、擂鉢と区別した。擂鉢720・721の口縁部は上下に拡張し、端部は内傾する面をもつ。

718は瓦質土器花瓶の脚部と考えられる破片であるが、口縁部の可能性もある。部分的にしか黒色処理が及んでいないが、外面にはていねいにヘラミガキが施されている。瓦質土器には他に擂鉢2046・羽釜2047がある。土師器皿713～716は口縁部径9.0～20.6cmで、数種類の大きさがある。口縁端部はかるくつまみ上げている。

これら以外にも、NW96－29次調査で同様の陶磁器が出土している。調査地点からみて本遺構から出土した可能性が高いが、確認できなかったため報告からは割愛した。

第4b層（図版63）

本層からは上記のSD530と同様の陶磁器・土器が出土している。

中国製磁器として青磁・白磁・青花がある。青磁は碗2056である。先述の683と同様の形骸化した蓮弁文をもつ。白磁は端反りの皿2051・小杯2050である。2050の器壁は厚さ1.5mmで、きわめて薄い。青花は碗2048・2049・2053・2054・2057・2058・小杯2055・皿2052がある。2057・2058は底部が盛上がる饅頭心の碗で、2057の高台内には「宣徳年製」、2058には「大□（明か）年造」の字款がある。2052は碁笥底の皿であろう。

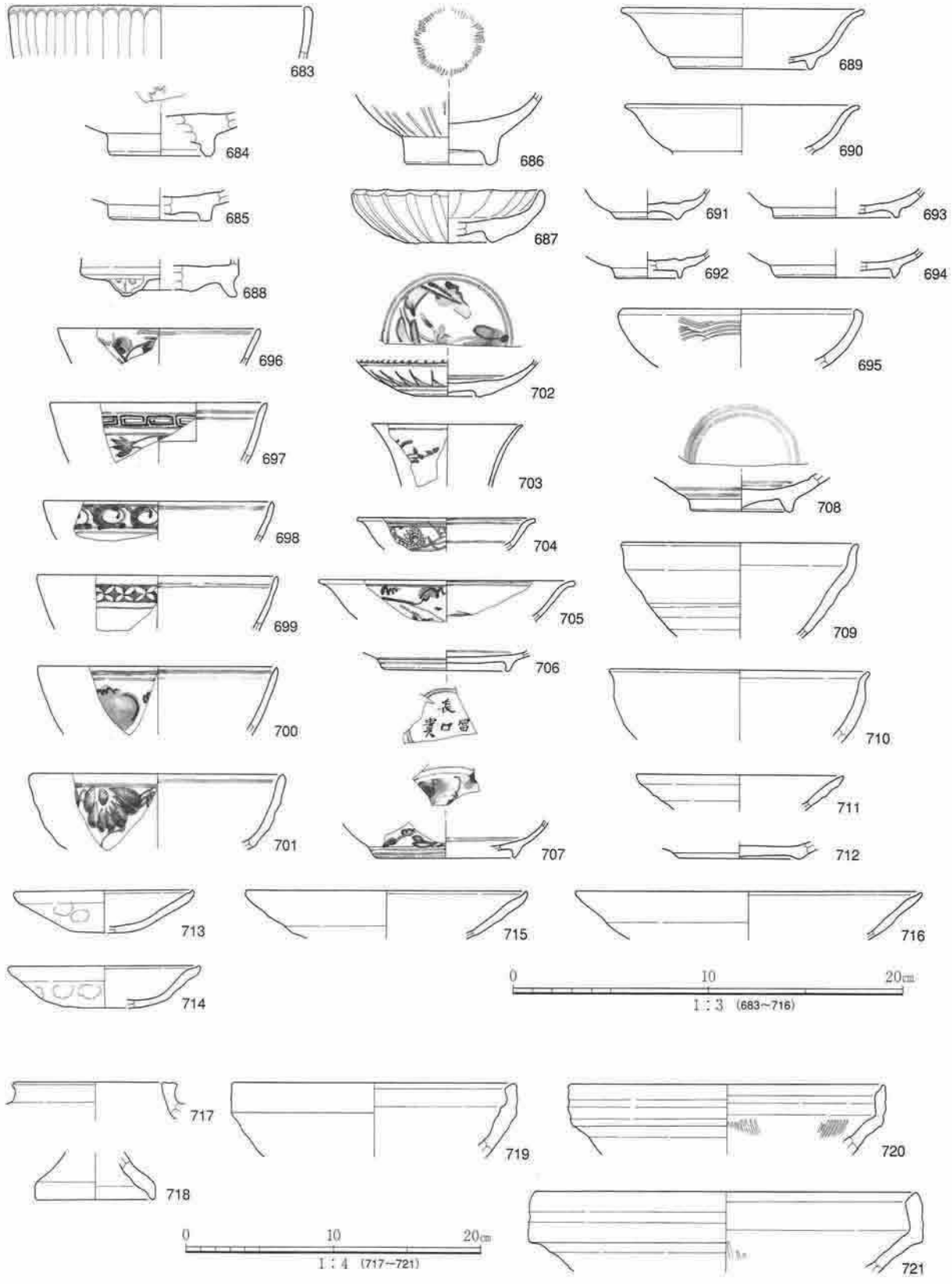


Fig.88　SD530出土陶磁器・土器

国産の陶器・土器には瀬戸美濃焼灰釉皿2059・鉄釉天目碗2060、備前焼擂鉢2061、土師器皿2062・2063・鍋2064がある。擂鉢2061は口縁端部に内傾するやや凹んだ面をもつ。土師器皿2062の口縁部径は12.2㎝、2063は14.4㎝である。

また、第4a層からも陶磁器・土器が出土しているが、数量はわずかで様相もあまり変わらない。

以上の陶磁器・土器をこれまでの大坂における中世後期から江戸時代初期にかけての編年観[森1992・佐藤1996]の中で位置づけてみる。中国製磁器の中でもっとも多いのは青花であるが、青磁・白磁の割合も小さいとはいえず、前報告の第7c～第7a層の様相に近い。瀬戸美濃焼には折縁ソギ皿がなく、土師器皿は口縁端部をつまみ上げるもので、丸く終わるものは見られない。豊臣前期の様相については最近検討が行われた[森・鋤柄1999]が、その成果からみても古い様相であるといえるため、石山本願寺期におさまると考えられる。暦年代は16世紀後葉～末である。

ii）瓦(Fig.89、図版63)

軒丸瓦２点722・723と軒平瓦１点724がある。これらの瓦に伴って丸瓦・平瓦も出土しているが、良好な出土状態でないため当該期のものを特定できなかった。

722は巴文軒丸瓦で、内区には巴文、外区には珠文を配し、珠文の外側には一重の圏線が巡る。巴の尾は約１周分のびるが互いには接しない。瓦当面・丸瓦部とも分厚くつくられている。灰色を呈し、焼成は硬質で燻しは掛けられていない。１Ｅ区の豊臣期の井戸SE541の埋戻し土から出土したが、瓦当文様や製作技法から時期のさかのぼるものと考えた。723は梵字文軒丸瓦である。内外区を一重の

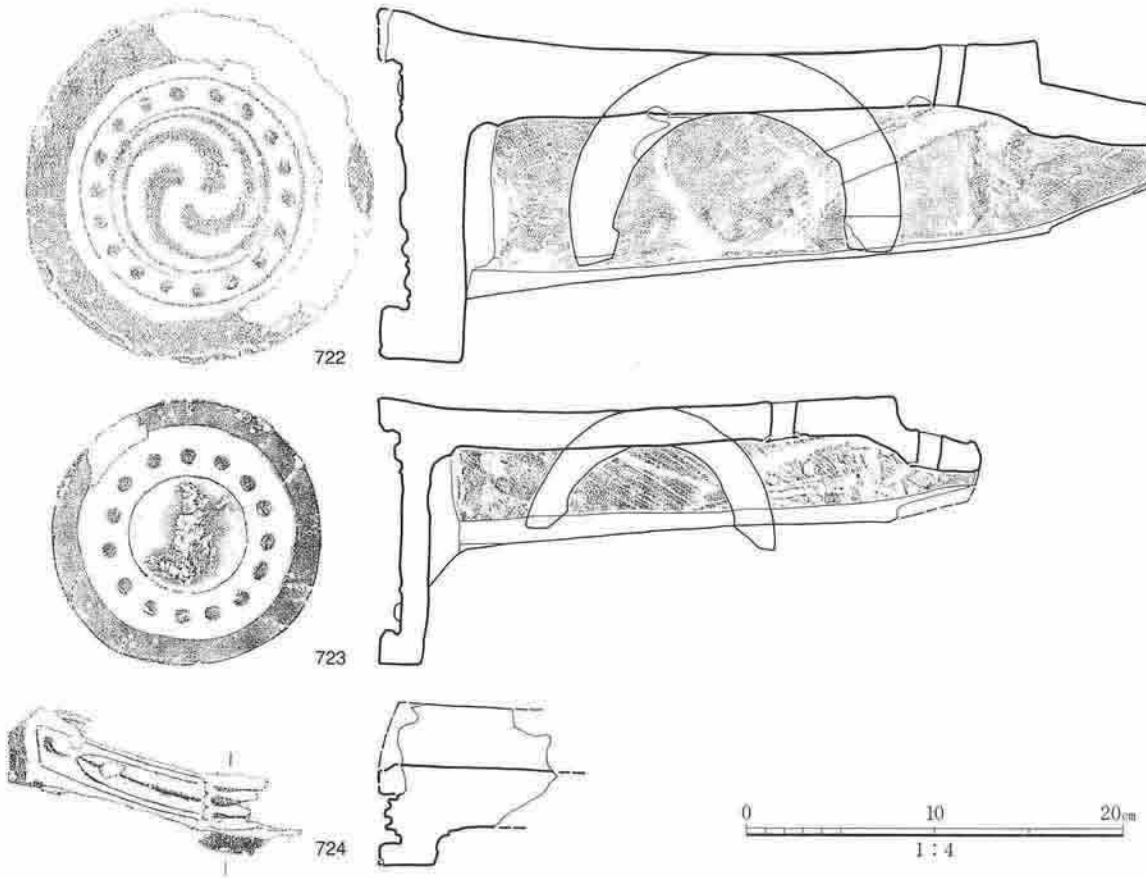


Fig.89　室町時代の軒瓦

圏線で区画し、内区には梵字を、外区には珠文を配する。梵字そのものは剥がれてしまっているが、痕跡から「𑖀(ウーン)」と読める。金剛界四仏のうちの阿閦仏などの意味をもつ。焼成は硬質で燻されている。４Ｅ区で出土した。

724は独鈷杵文軒平瓦である。瓦当の約半分と平瓦部の大半が失われている。一重の界線の内部には独鈷杵の文様が表現され、外は無文である。焼成は硬質で燻されている。軒丸瓦723とは同一地点で出土しており、どちらも密教的な文様をもつことや焼成の特徴が似ていることなどから、両者は組合った可能性が高い。

以上の軒瓦はそれぞれ１点ずつしか出土しなかったため、どのような建物に使用されていたかを推定することは困難であるが、723・724は瓦当文様から少なくとも一般の屋敷に葺かれたとは思われず、寺院の存在を想定させる。本調査地と石山寺内町との位置関係はまだよくわかっていないが、本願寺あるいは文献中に見られる周囲の寺院と係わるものであった可能性がある。

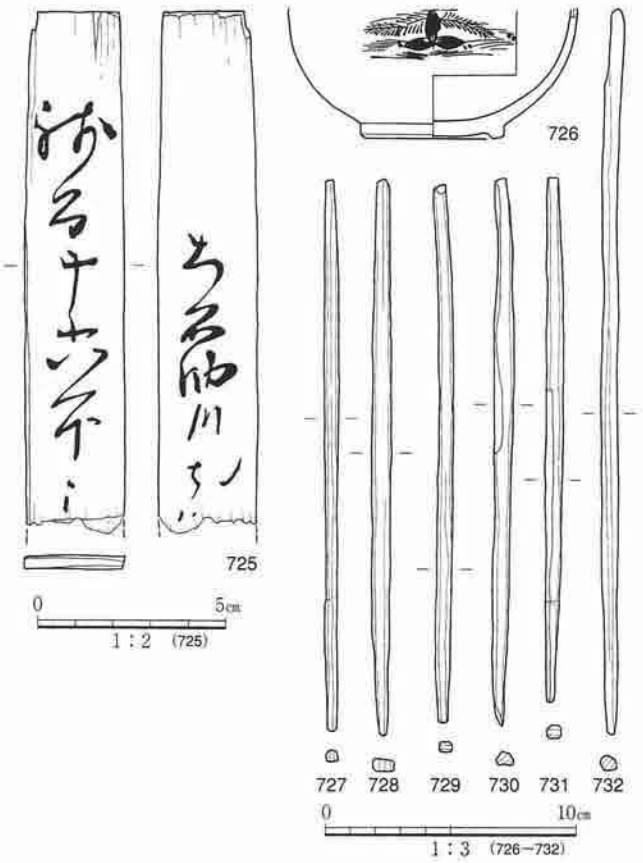


Fig.90　SD530出土木製品

iii) 木製品(Fig.90、図版63)

SD530から木簡725・漆椀726・箸727～732の他に、方形の容器の破片が出土した。

木簡725は下端部を欠損している。上端には切込みはない。残存長は13.9cmで、幅は2.7cmである。釈文を以下に示す。釈文は当協会鳥居信子による。

・「銭百十六本□×

・「大石助□□×

「銭百十六本」の「本」は緡の数量を表すと考えられる。下部が欠損しており、全体の内容は不明である。

漆椀726は口縁端部を欠く。黒漆の地に朱漆で草花の文様を描いている。

箸727～732は細長い材を断面が多角形をなすように削って仕上げる。先と思われる方を下に向けて図化したが、両端にはほとんど形態に差異が見られない。727～731は20.7～21.9cmで、長さはほぼそろっているが、732のみは28.9cmと長くて大型品である。

iv) その他の遺物(Tab.３、図版43・70)

第4a層からⅠ類の土錘2002が出土した(図版43)。SD530にも同形態のものが見られた。銭貨としては第4a層から出土した元豊通宝2066(1078年初鋳)がある。直径2.40cmである。また、次節で報告する豊臣期の石列1・2に用いられていた石製品の中には、当該期あるいはそれ以前にさかのぼるものが含まれている。　(佐藤)

第５節　豊臣期の遺構と遺物

１）遺構

これまでの調査では本調査地の全域で塀・柵、堀・溝など、多くの区画施設が見つかっている。前報告では、それらの分析や金箔押瓦の出土などから調査地内に大名屋敷を想定している。今回の調査でもこれまでの成果に関連する遺構が検出されたが、調査地北西部の４Ｄ・４Ｅ区で検出された石列とその脇の道路遺構は新たに得られた資料である。

ｉ）屋敷地区画施設(Fig.91～94、図版28～31)

前報告では本調査地およびその周辺地域において３つの大規模な屋敷地を復元し、大名屋敷の存在を指摘している。その手がかりとなったのは調査地の各所で見つかった塀・柵や堀などの区画施設である。今回の調査でも調査地北辺部や北西部で同様の遺構が検出されている。

北辺部の区画施設

SA520　２Ｅ・３Ｅ区で検出された東西方向の塀・柵である。これまでの調査で見つかっていた**SA506**の北1.6ｍのところを並行する。これらは**SA502**の東9.6ｍで途切れるが、２列の塀・柵がここで終わるのか、南に曲がるのかは南側が旧体育館の基礎によって破壊されているためわからない。柱穴の平面形は円に近く、直径は0.4～0.6ｍほどである。柱痕跡は確認できたものによれば直径６～７㎝である。石の礎板を置くものも多く見られた。柱間寸法は1.9～2.0ｍである。

北西部の区画施設

調査地北西部の４Ｄ・４Ｅ区ではＬ字形に曲がると推定される**石列1・2**が検出され、屋敷地の区画に係わるものと考えられた。その外側沿いには版築によって堅く突き固められた面**SF501・502**があり、東を南北に流れる石組み溝**SD542**までの限られた範囲にとどまることから、道路遺構とした。

また、版築層の基底面では石列や道路遺構と同方向に延びる溝**SD540・541**や塀・柵**SA521**が検出された。上述した上層遺構の方位や区画線はすでにこの面の遺構から存在していたことがわかる。以下、個々の遺構について述べる。

石列1・石列2　４Ｅ区において１列に並べて埋められた花崗岩の切石が検出された。**石列1**は調査区北西隅で、東西方向の長さは11.4ｍにわたる。間にはところどころ石のないところもあるが、抜取り穴が確認できた。**石列2**はその南19ｍのところで南北に長さ5.0ｍにわたって検出された。

石列1は北に、**石列2**は東にそれぞれ面をそろえて並べられている。その間は攪乱によって失われていたが、**石列1**の東限と**石列2**の北延長線がほぼ一致するため、これらは一連のものでＬ字状に曲がる区画施設であろうと考えられた。**石列2**は南の既調査区で見つかっているSA516の北延長線上にほぼ当っているため、屋敷地の中を区画する基本的なラインであった可能性がある。また、それらに接して後述する**SF501・502**がつくられていた。

切石には五輪塔を転用したもの、立方体に近い形のもの、裏面を仕上げずに凸凹のまま残している板石状のものなどがある。

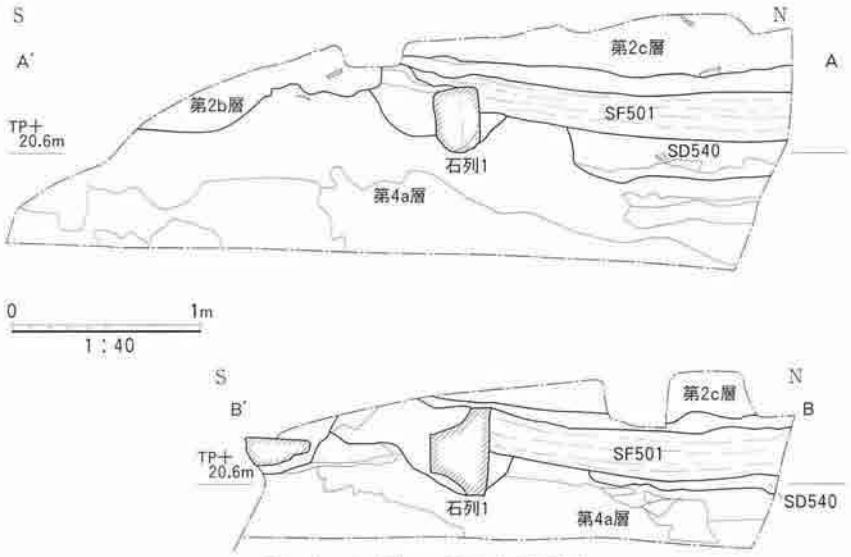


Fig.91　石列1・SF501断面図

SF501・502　細～粗粒砂を堅く叩き締めてつくられており、断面は版築状をなす。石列1の北に接して東西方向のものをSF501、および石列2の東に接した南北方向のものをSF502とする。SF501はSD542を境に東へは延びていかないで限られた範囲に存在する。SF502の直上には大坂夏の陣の焼土である第3a層が堆積しており、上面は赤く焼けていた。付近に建物が存在したことがわかる。

SD542　SF501の東沿いにある南北方向の溝である。石が部分的に残っており、抜取られた痕跡も見られるため、石組み溝であったことがわかる。溝の幅は0.6m、深さは0.3mで、掘形を含めた幅は1.2mである。SF501との先後関係は、SD542の裏込め部分のみがSF501の版築土に覆われており、埋戻し土はSF501の上にも及んでいる。このことから、両者は同時併存していた可能性が高い。

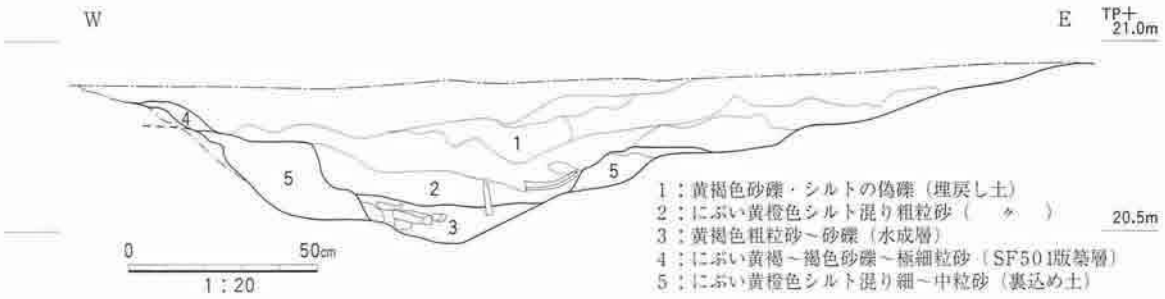


Fig.92　SD542断面図

版築層の基底面で検出された遺構は以下のものである。

SD540　SF501の下位にある東西方向の溝である。第3b層の下面で検出された。西半部ははっきりと見えるが、東にいくほど浅くなりよくわからなくなる。確認できたところでは、幅は1.2m以上で、深さは0.2mである。水が流れた痕跡はなく、土地の区画線として掘られたものかもしれない。

SD541　SF502の下位にある南北方向の溝である。SF502の版築土の基底面で検出された。東肩は失われているが、幅は0.9m以上である。深さは0.1～0.2mである。埋土からは陶磁器の細片が出土

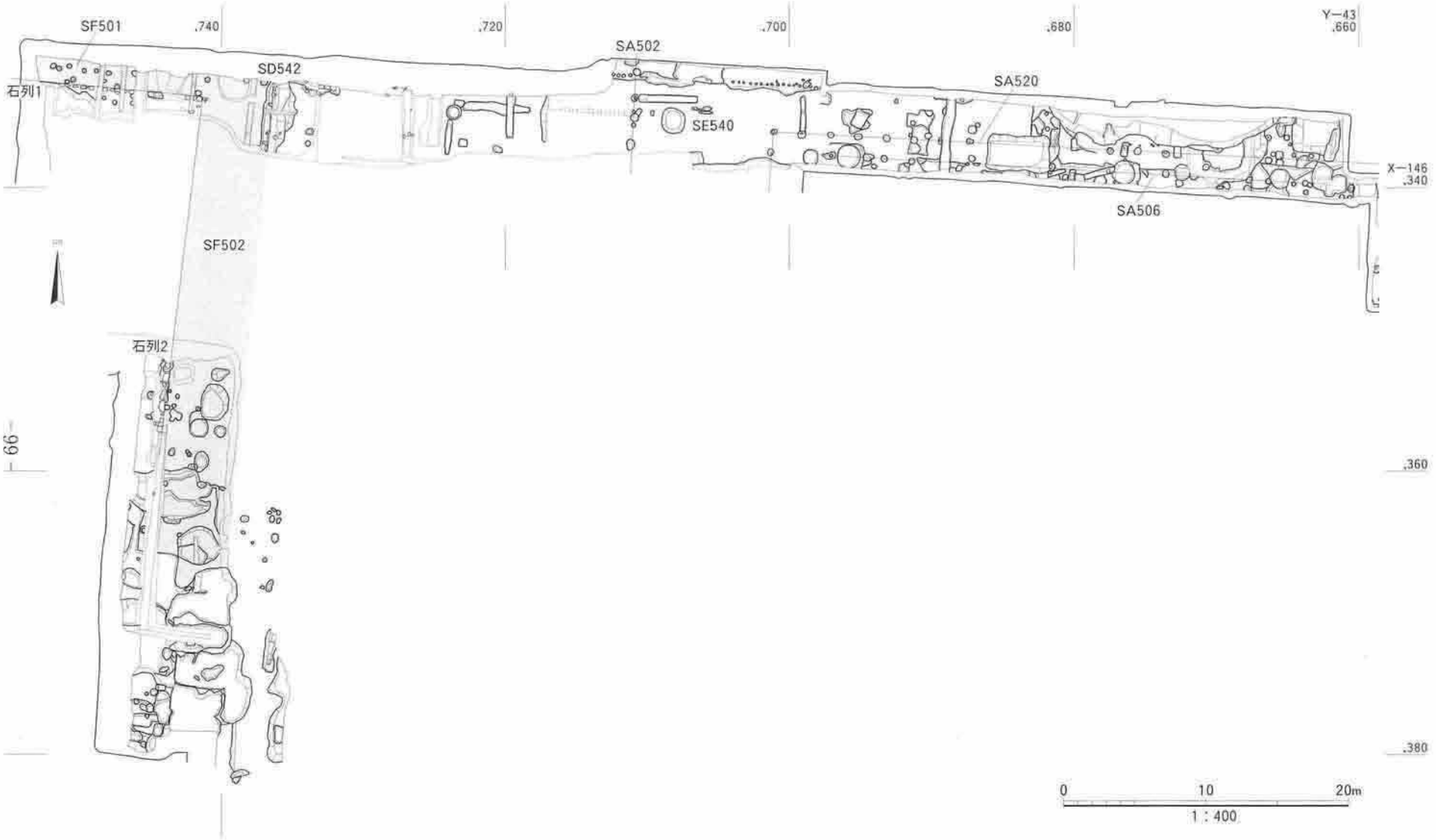


Fig.93　２Ｅ・３Ｅ・４Ｄ・４Ｅ区豊臣期遺構平面図

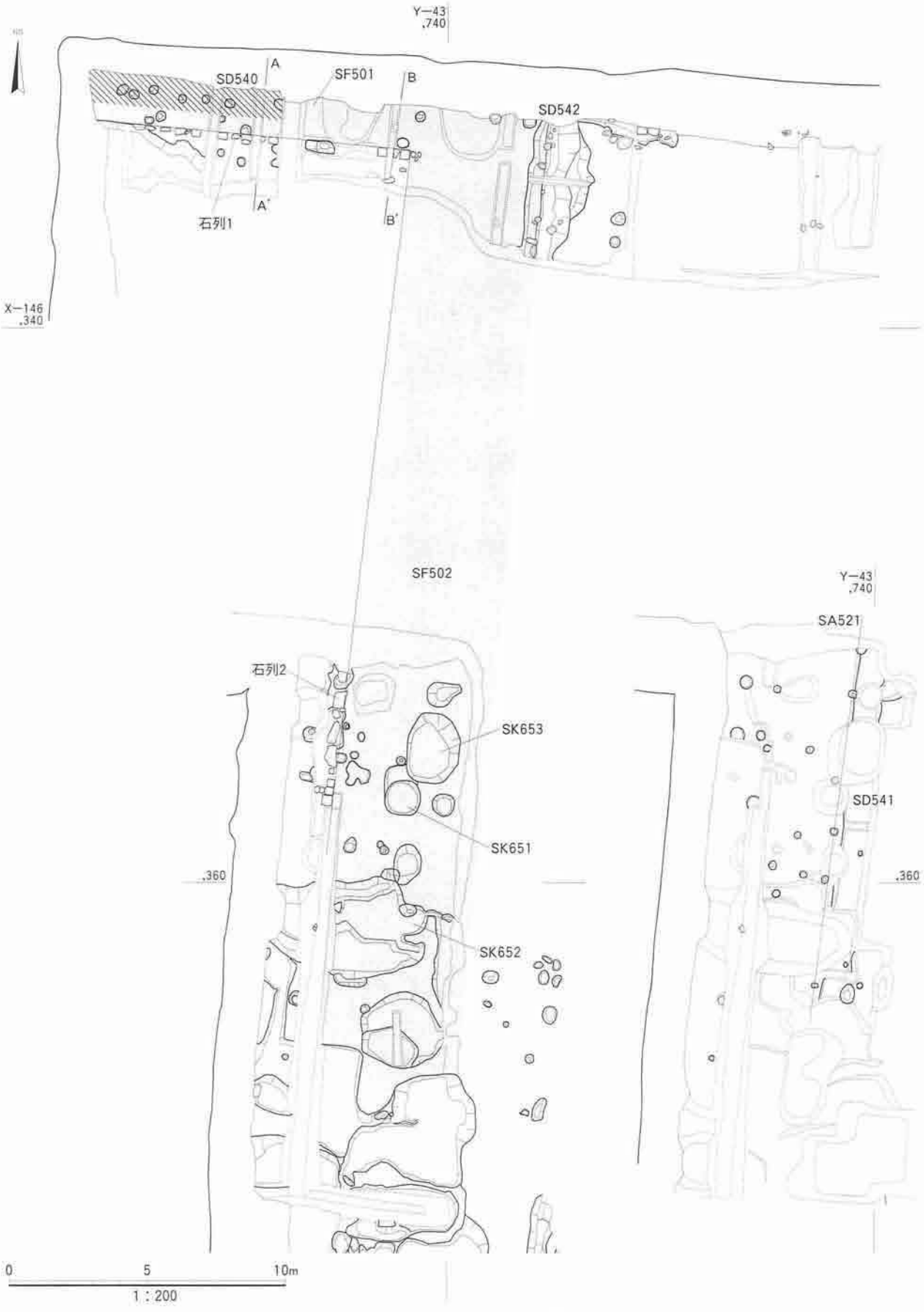


Fig.94　4 D・4 E区平面図



Fig.95　1C～1E区平面図(江戸時代前期を含む)

したが年代を決める手がかりにはならなかった。上位の石列2やSF502と方向が共通することから豊臣期のものと考えている。

SA521　SD541の西肩沿いにある南北方向の柵である。SD541とともにSF502の版築土の基底面(地山の第11層)で検出された。柱痕跡は明瞭ではなく、柱間寸法を柱穴の中心どうしでとると1.6～1.9mで、ばらつきがある。

ii) 井戸(Fig.93・95・96、図版32)

今回の調査で豊臣期のものと確認できた井戸は少なく、調査地北辺部で検出された2基のみである。

SE540　3E区の井戸である。平面円形で、直径は1.6mである。底は確認していない。埋土からは豊臣後期に属する青花・白磁や、瀬戸美濃焼志野向付、唐津焼碗・皿などが出土した。

SE541　1E区において調査区の北端で見つかった井戸である。掘形は一辺が4.5m以上の方形である。井戸側の抜取り穴もほぼ同じ形で掘られていたようである。井戸側の抜取り痕跡は掘形の中央やや西寄りにあり、直径0.8mの円形である。井戸の検出面からおよそ1.2m掘下げたところで確認した。井戸側そのものは抜取られており、さらに2.6m下まで掘削したが残っていなかった。遺物は少量であるが、井戸側の抜取り穴から白磁皿・瀬戸美濃焼灰釉皿・土師器皿などが出土した。豊臣前期のものと考えられる。

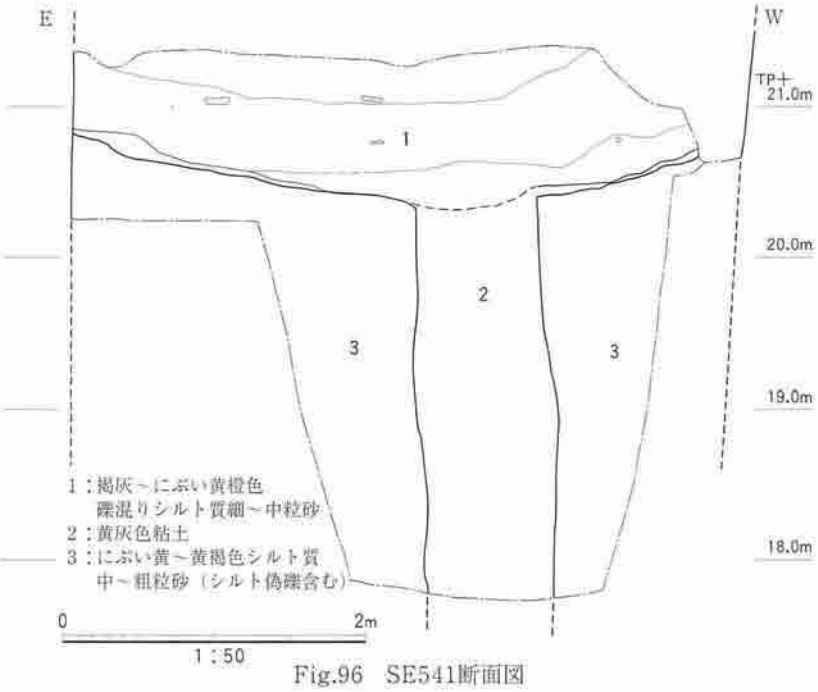


Fig.96　SE541断面図

iii) 土壙(Fig.94・95、図版32)

豊臣期に属する土壙はこれまでの調査に比べるとわずかしか見つかっていない。1C・1D区では点在し、4D・4E区では数基が近接して掘られていた。

SK650　1C区において江戸時代の土取り穴の基底面で見つかった土壙である。4.2m×2.2mの不整楕円形で、炭で埋まっていた。遺物は青花・瀬戸美濃焼・備前焼などが少量出土した。豊臣前期の遺構である。

SK569　1D区で検出された土壙である。西半部は以前の調査ですでに発掘されており、今回の成果と併せると東西3.8m、南北6.0m、深さは2.5m以上である。もとは長方形であったと思われるが、前調査側の肩がやや崩れている。地山を垂直に近く掘り込んでおり、地下室状の遺構と考えられる。埋土は間に炭層を挟んで数層に分かれるが、遺物に時期差は見られない。青花・瀬戸美濃焼・唐津焼・

土師器などが多量に出土した。

SK652　４Ｄ区の東西5.4m、南北3.4mの不整楕円形をした土壙である。上半は第3a層の焼土、下半は橙色の粘土質細粒砂で埋っている。どちらの層からも瓦が多量に出土し、豊臣後期の陶磁器・土器も含んでいる。

他にも４Ｄ・４Ｅ区からSK651・653などの土壙が検出された。焼土はあまり含まれていないが、SF502の上面から掘込まれており、大坂夏の陣直後の火事場整理用の穴であろう。

iv）その他の遺構(Fig.97、図版32)

その他の遺構として、底に根石を据えた柱穴SP501・502がある。どちらも１Ｄ区で検出された。SP501は東西1.2m、南北1.0mの楕円形で、深さは0.8mあり、底に根石を据えている。前報告では同種の遺構を土壙として報告しているが、柱を支える機能を重視して柱穴として報告する。東に４mのところにあるSP502はほぼ同様の形状をもつが、底には平瓦を敷いていた。これらからどのような建築物を復元するかは、前報告と同様にまだ有効な考えを提示できない。

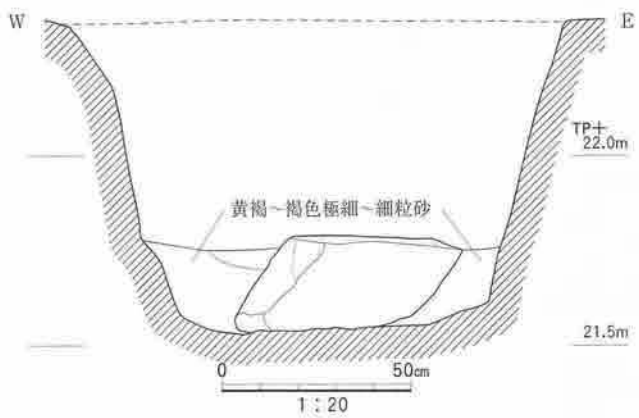


Fig.97　SP501断面図

２）遺物

ｉ）陶磁器・土器

今回の調査では、以下で報告するSK569から豊臣期の遺物が多量に出土したが、他の遺構からはまとまった数量の遺物は得られなかった。SK569の遺物を主として報告し、他の遺構の遺物は必要に応じて触れるにとどめておく。

SK569(Fig.98～100、図版64～65、原色図版12・13－上)

埋土は５層に分けて取上げたが、上下に時期差は見られないため一括して報告する。この土壙は前報告でも既調査の部分の遺物が報告されており、併せて参照されたい。原色図版にはそれらを含めた集合写真を掲載した。中国製磁器には青花と少量の白磁がある。国産の陶器・土器には瀬戸美濃焼・唐津焼・備前焼・土師器がある。

青花は碗733～738・皿738～740・大皿741がある。前報告では完形に近い大皿が掲載されている。大皿741はすでに報告されているものであるが、破片が今回のものと接合したため、あらためて図化を行った。742は口縁部を欠損しているが、石山本願寺期から存在する端反りの白磁皿である。

瀬戸美濃焼には黒織部沓茶碗743・744・志野筒茶碗745・鉄釉天目碗746・灰釉皿747がある。743の体部外面には線刻によって文様を描いているところがある。焼成によって文様がうまく出なかったところを補ったものかもしれない。747の底部外面にはトチンの脚が付着している。

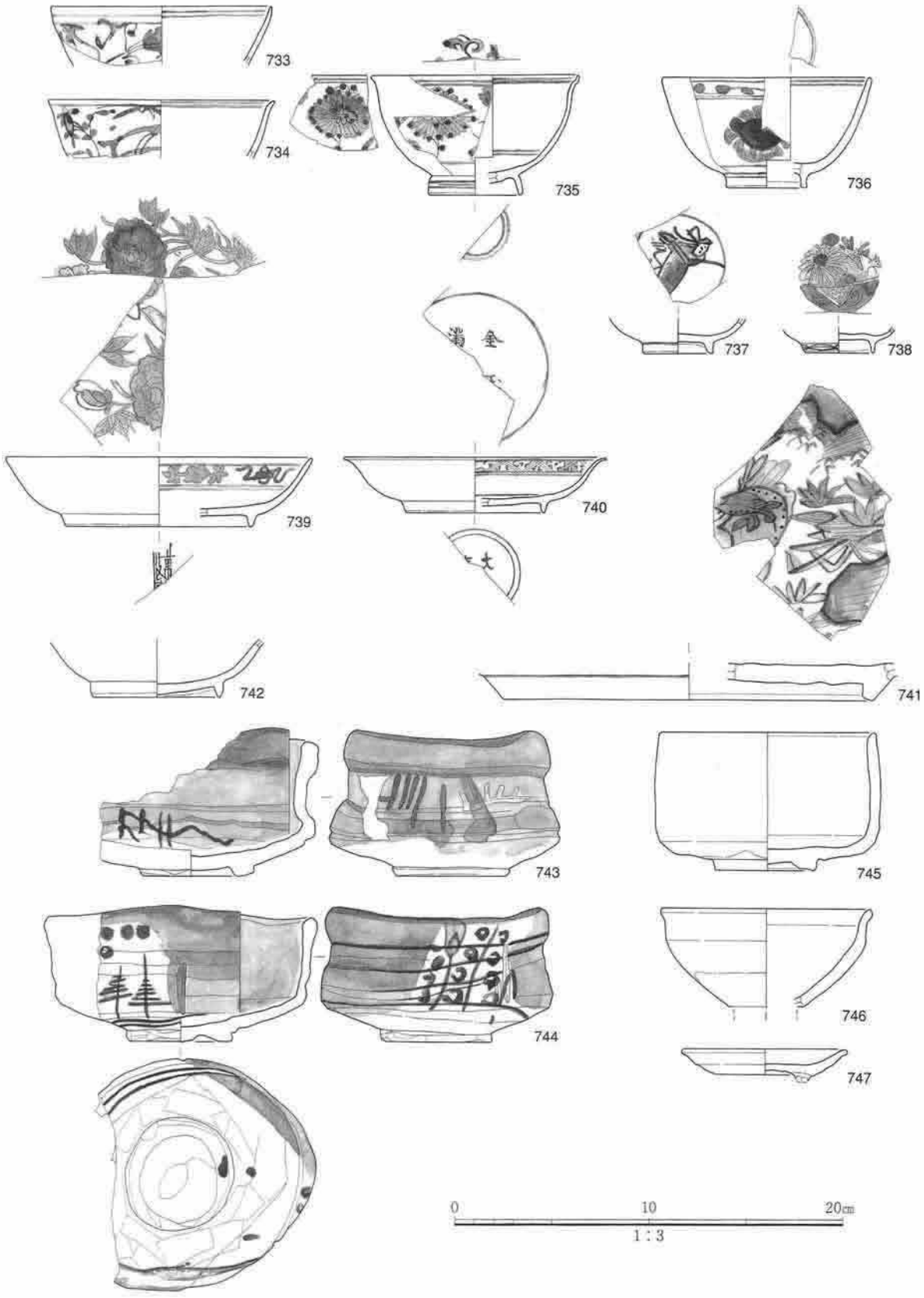


Fig.98　SK569出土陶磁器・土器－1

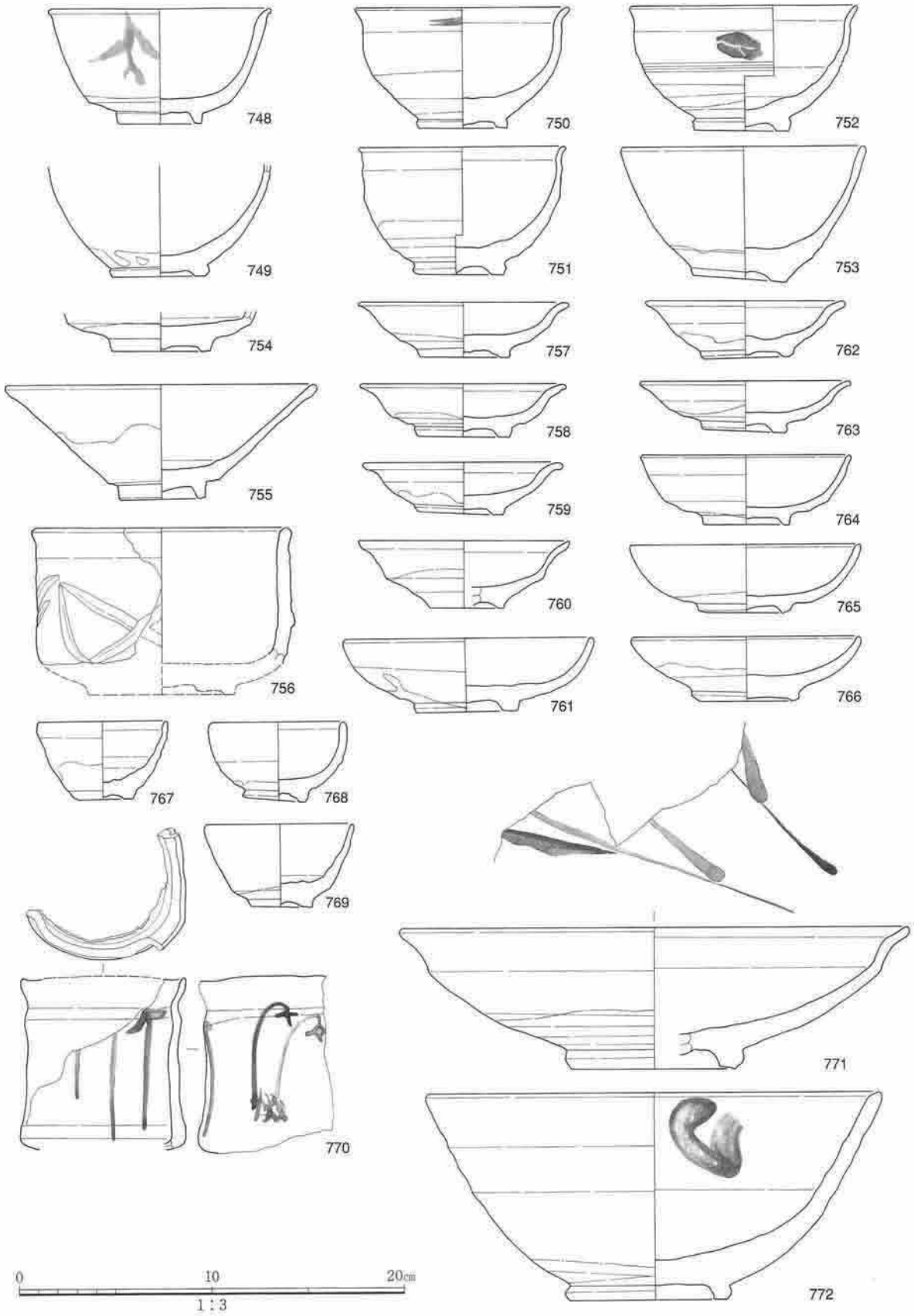


Fig.99　SK569出土陶磁器・土器－2

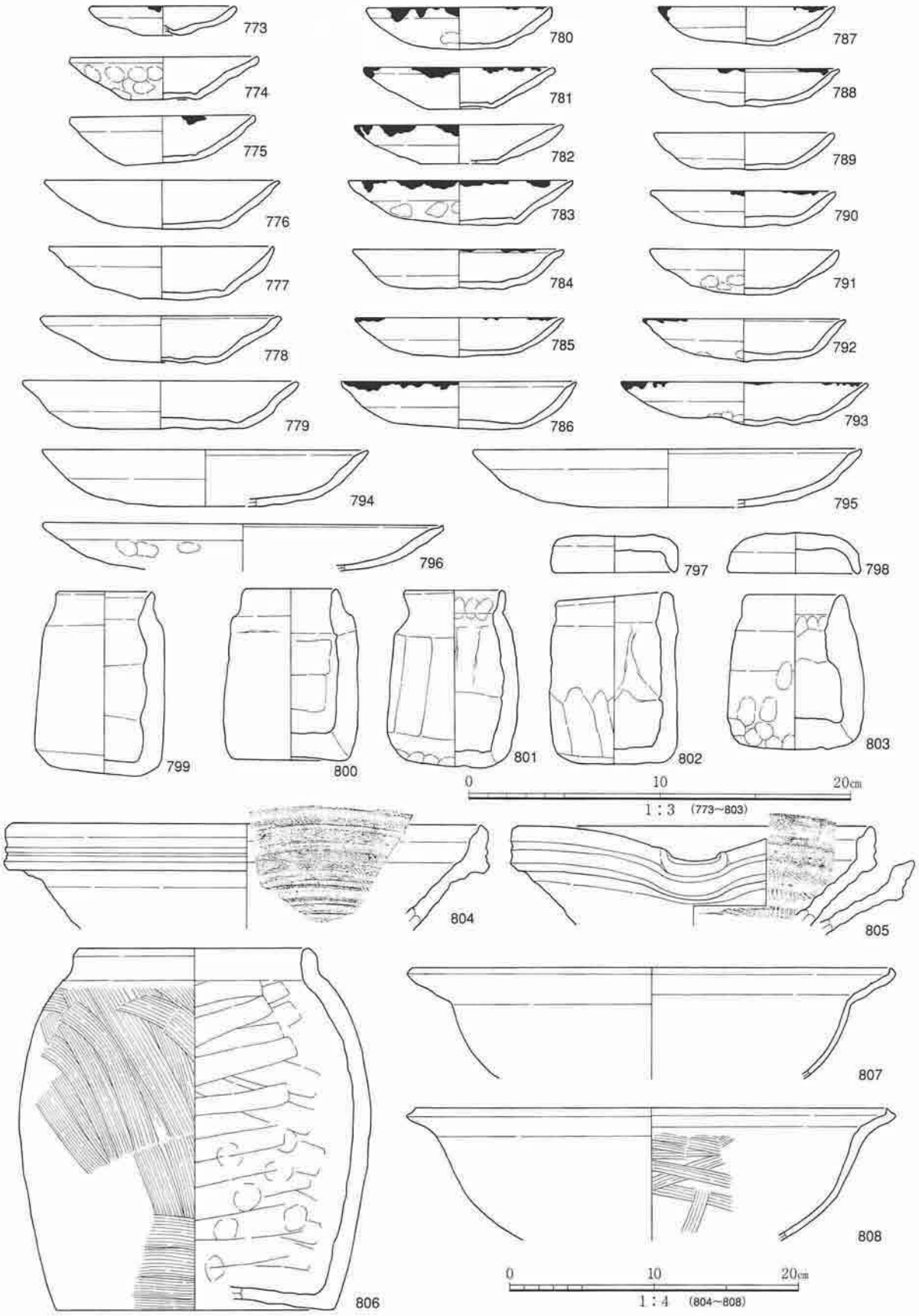


Fig.100　SK569出土陶磁器・土器－3

唐津焼には碗748～756、小碗767～769・向付770・皿757～766・大皿771・鉢772がある。他にも碗・皿は多数出土しているが図化していない、また、沓茶碗と考えられる破片が１点ある。

碗には銹絵の文様をもつもの748・750・752がある。754は筒茶碗である。755は体部が斜め上方に直線的に立上るタイプの茶碗である。756は筒茶碗であるが、体部外面に凹線で文様を施す。「彫り唐津」といわれるものである。向付770は底部近くは円形で、口縁部を隅丸方形につくる。体部には銹絵で草花らしき文様を描く。皿には端反りのもの757～760・762・763と内湾するもの761・764～766がある。大皿771の内面には草花が銹絵で描かれている。鉢772の口縁部外面にも銹絵がある。

備前焼は擂鉢804・805がある。口縁部は上下に拡張し、端部には内傾するやや凹んだ面をもつ。擂目は斜め上方に施される。

土師器には皿773～796・焼塩壺799～803・同蓋797・798・鍋807・808・甕806がある。

皿はSK569から出土した陶磁器・土器の中でもっとも多く、完形に近いものが目立つ。灯明具として使用されたものもある。法量によって８種類ほどに分かれる。口縁端部は丸く終わるものがほとんどで、つまみ上げるものや沈線を有するものはわずかである。底部と体部の境目にヨコナデによる強い凹線が巡るもの773～783と、凹線が見られないもの784～796とがあり、大きめの794～796を除けば、同じ法量でそれぞれのタイプが存在する。これは時期差ではなく製作した工人の違いを反映していると考えられる。焼塩壺799～803はほぼ同じ大きさで、口縁部のくびれがはっきりしているものとそうでないものがある。鍋807・808は形態・法量ともほぼ同じであるが、808は体部内面にハケ調整の痕跡が見られる。

以上の陶磁器・土器は瀬戸美濃焼に志野・織部を含み、唐津焼が多量に存在することなどから、豊臣後期に属するものである。前報告に掲載された資料と併せて見れば、豊臣後期の後半期の基準資料となりうる良好な一括資料である。

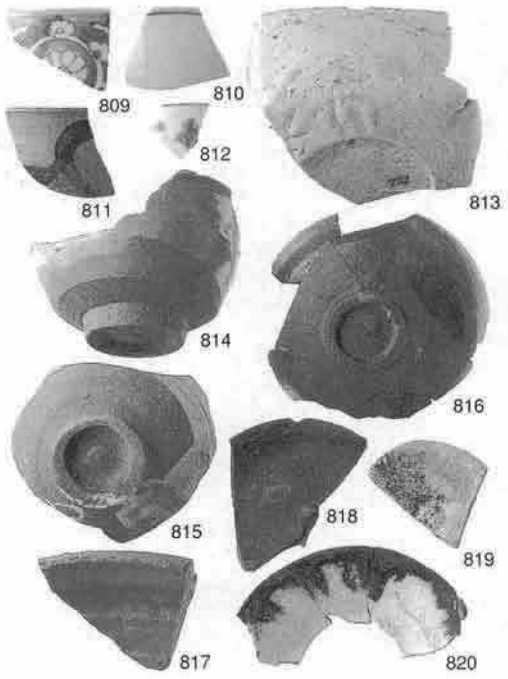


Fig.101　SE540出土陶磁器・土器

SE540（Fig.101）

埋土を深くまで掘下げていないので数量は少ないが、中国製の青花、瀬戸美濃焼・唐津焼・備前焼・土師器が出土した。

青花には碗809・810・812がある。瀬戸美濃焼は志野向付813がある。平面形は方形である。唐津焼は碗811・814・815、皿816である。811には銹絵がある。816には褐色の釉が掛かる。備前焼は擂鉢817、土師器は皿818～820である。818は底部内面の体部との境目にナデによる凹線のないタイプで、820は凹線が巡るタイプである。819は底部中央が盛上がるへそ皿である。これらの陶磁器・土器は豊臣後期に属する。

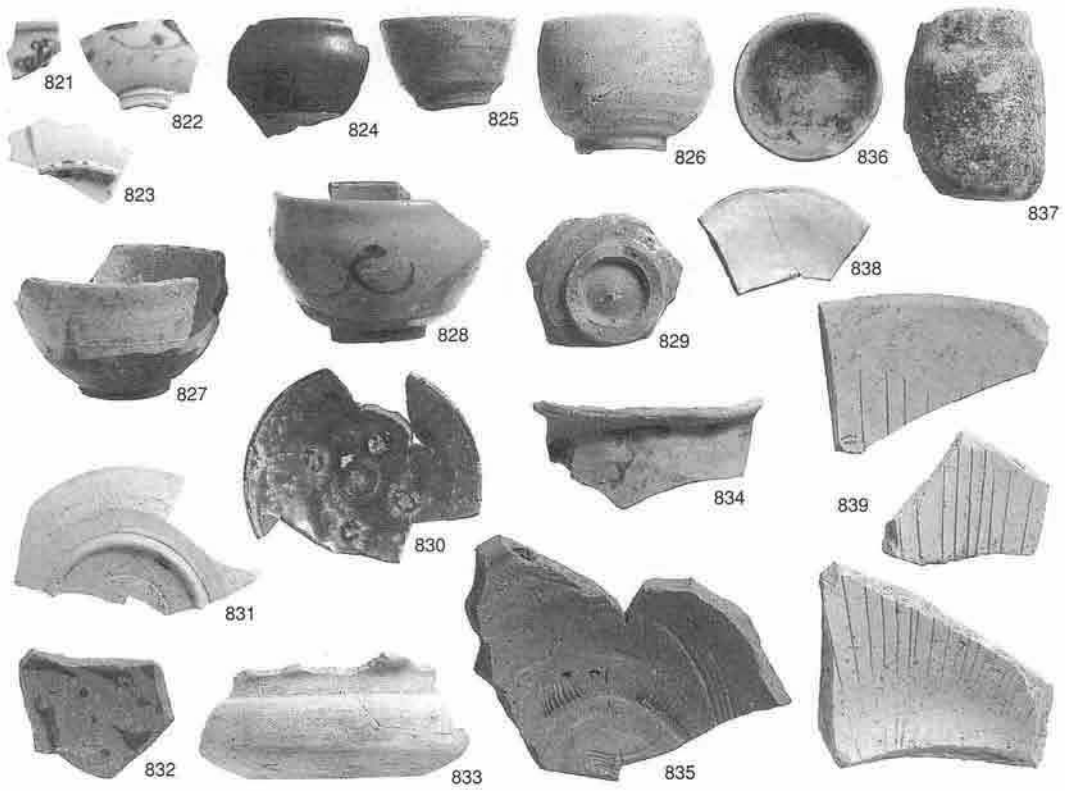


Fig.102　SK653出土陶磁器・土器

SK653(Fig.102)

青花・瀬戸美濃焼・唐津焼・備前焼・丹波焼・土師器がある。

青花は碗822・小杯821・皿823である。瀬戸美濃焼には鉄釉天目碗824・志野丸碗826・志野皿831・黄瀬戸鉢833がある。826は乳白色、831は黄白色の釉が掛かる。唐津焼には碗827・828・小碗825・皿829・830・832がある。828・832には錆絵で文様が描かれる。830には灰緑色の釉が掛かる。備前焼擂鉢835は使い込まれたもので、内面の擂目がかなり摩耗している。口縁部を欠く。丹波焼擂鉢839は1本擂目である。3点は接合しないが同一個体と考えられる。土師器には皿838・焼塩壺837・同蓋836・羽釜834がある。838は底部内面に凹線が巡る。834は口頸部がくの字に屈曲する京都系の羽釜である。これらの陶磁器・土器も豊臣後期のものである。

ii) 瓦(Fig.103～107、Tab.4、図版66～69)

近世の瓦類は遺物整理箱にしておよそ170箱が出土した。前報告では豊臣期のものが大半であるとされているが、今回の報告分では江戸時代の遺構・地層から出土したものが相当量含まれている。軒瓦のうち、瓦当文様の残りの良いものを中心に報告し、それぞれの出土点数はTab.4に示した。道具瓦は飾瓦・鯱瓦・棟込瓦を報告する。報告にあたっては、江戸時代前期の遺構から瓦がほとんど出土しなかったことから、次節で報告する江戸時代のものと瓦当文様が識別できるものについては後世の遺構・地層からの出土であってもここに含めている。丸瓦・平瓦については、完形に近いものがSK652から比較的まとまって出土したが今回は割愛した。

軒丸瓦　軒丸瓦の瓦当文様はすべて巴文である。残りが悪く、珠文・巴文の特徴から笵種の異同がわからないものは報告の対象から省いた。その結果、119点、57種の笵が確認できた。なお、今回は軒丸瓦に金箔押瓦は見られなかった。

巴文はすべて左巻き三つ巴である。珠文や圏線の有無などからⅠ～Ⅲ類に大別される。

まず、Ⅰ類は外区に珠文帯をもたないもので、840・841がこれに当る。それぞれ1点出土した。841は鳥衾瓦である。

Ⅱ類は外区に珠文帯をもち、内区の巴文とを一重の圏線で画するものである。厳密には圏線に巴の

Tab.4　軒瓦の出土点数

軒丸瓦

報告番号	点数	遺構・層
840	1	その他の土壙
841	1	その他の土壙
842	1	SK652
843	6	SK652
844	3	SK652他
845	2	SK652
846	2	第3a層
847	1	SK652
848	1	SK652
849	1	その他の土壙
850	6	SK652他
851	1	SD542
852	1	—
853	1	—
854	1	SK652
855	1	SK653
856	1	SK653
857	1	—
858	4	SK652・653
859	7	SK652他
860	1	SK652
861	1	その他の土壙
862	1	第3a層
863	3	SK652
864	2	その他の土壙他
865	2	SK652
866	1	SK653
867	9	SK652他
868	8	SK652・第3b層他
869	1	SK652
870	6	SE541・SK650・652
871	2	SK569・652
872	2	SE541・第3b層
873	1	SK652
874	2	SK652・653
875	1	SK652
876	2	SK652
877	1	SK652
877	1	SK652
878	2	SD542・SE541
879	9	SK652他
他に16種	18	SD542・SK652・第3b層他

軒平瓦

報告番号	点数	遺構・層
880	1	SK652
881	2	SK652他
882	1	SK652
883	1	SK650
884	1	—
885	11	SK652他
886	6	SK650
888	2	SE541
889	1	SK653
890	1	第3a層
891	7	SK652
892	1	その他の土壙
893	2	—
894	1	—
895	1	SK652
896	1	—
897	2	—
898	1	SK652
899	1	—
902	1	SK652
903	1	—
904	1	—
905	1	SK652
906	2	SK652
907	1	—
910	2	—
911	1	SE541
912	1	—
913	1	—
914	1	SD540
915	1	SK653
916	1	—
917	3	—
918	1	その他の土壙
919	1	SD540
920	1	SK652
922	6	SD540・SK652・653
927	4	SK652他
928	2	SK652他
900・901	8	SK652
908・909	2	第3a層他
923・924	5	SK569他
925・926	2	SD542

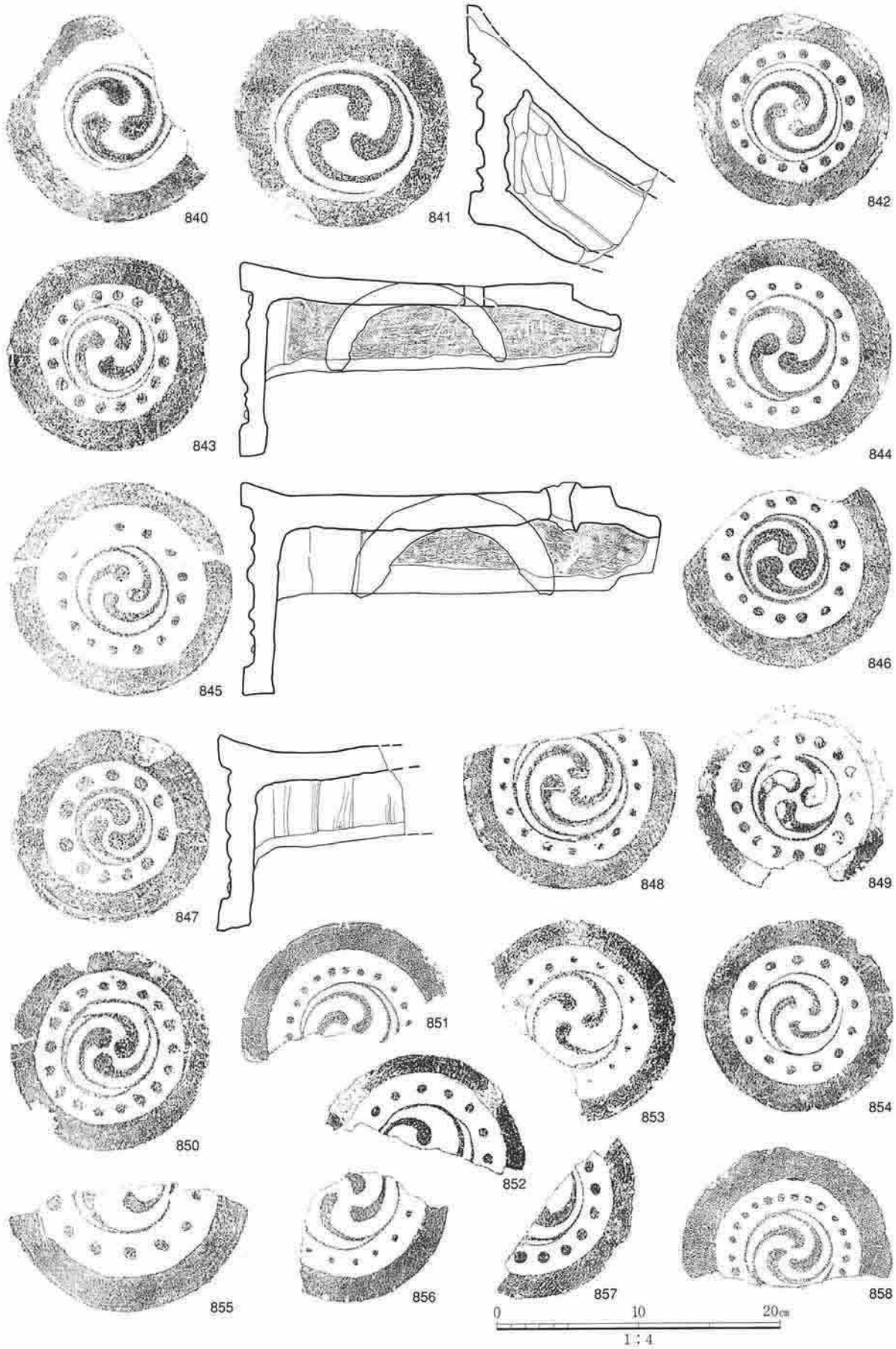


Fig.103　軒丸瓦－1

SK652(842～845・847・848・854)　SK653(855・856・858)　他の土壙(840・841・849)　SD542(851)　第3a層(846・850)　その他(852・853・857)

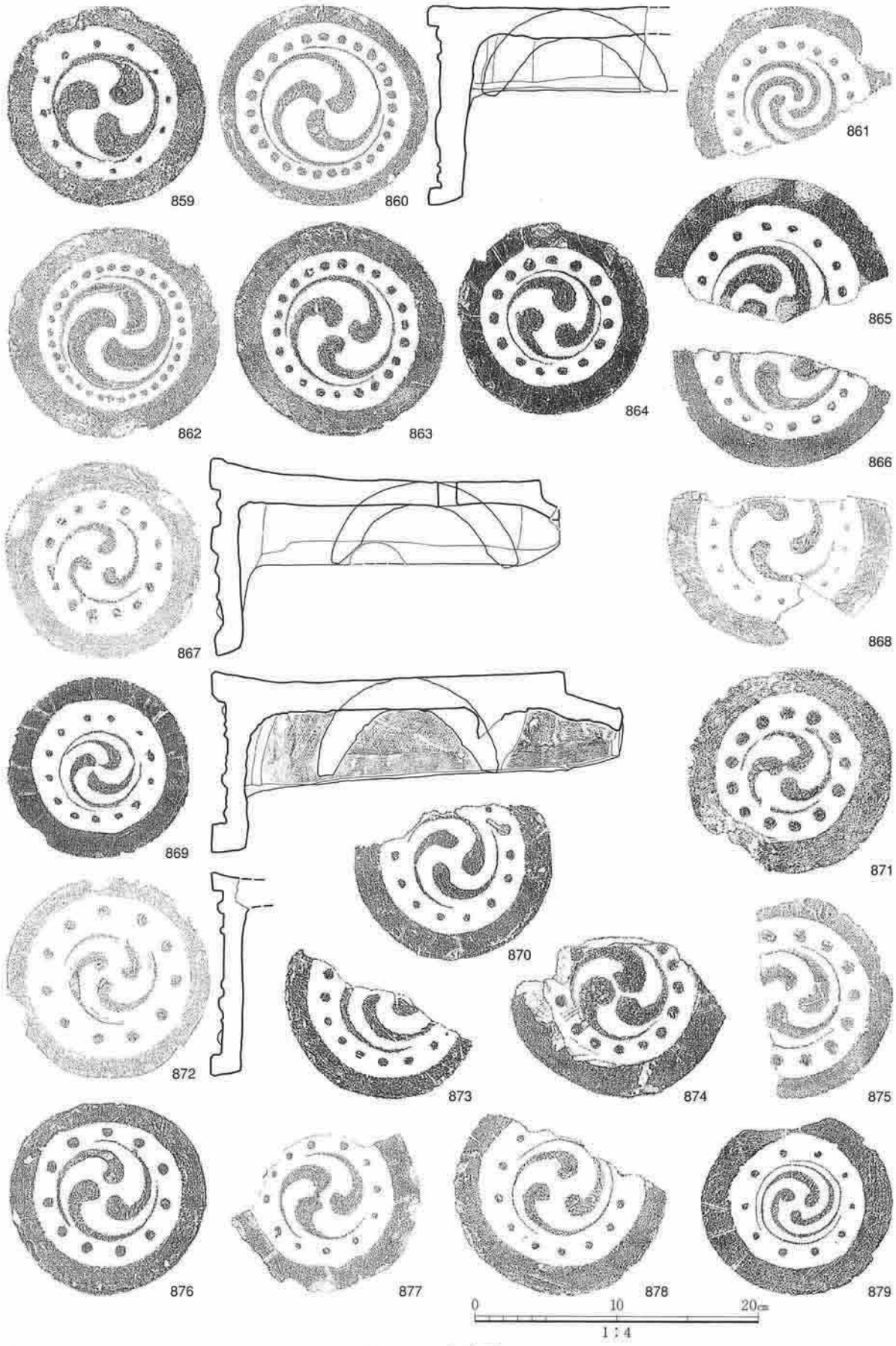


Fig.104　軒丸瓦－2

SK650(870)　SK652(860・863・865・866・869・871・873～877・879)　他の土壙(861・864)　SD542(878)
第3a層(859・862)　第3b層(867・868・872)

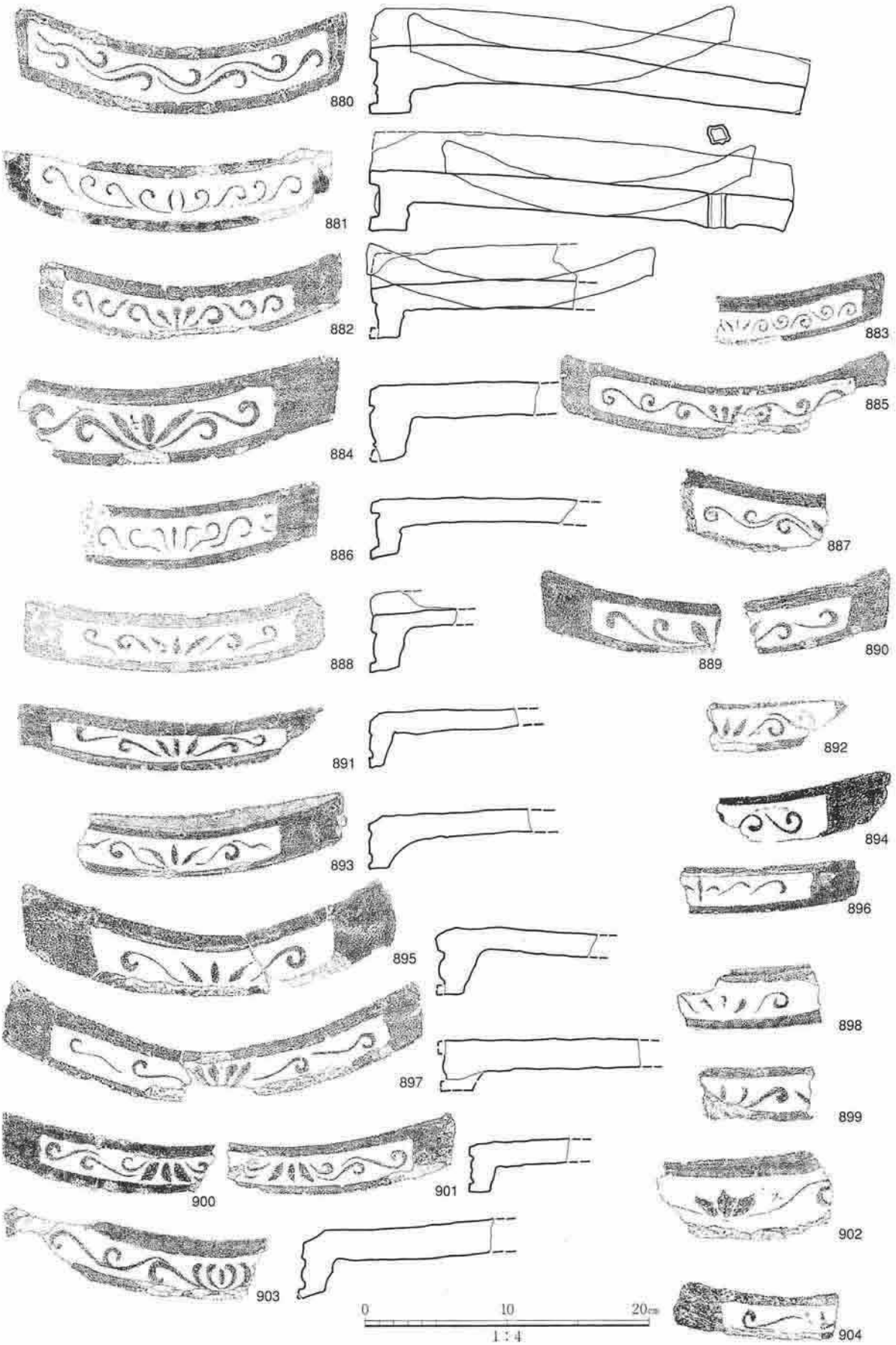


Fig.105　軒平瓦－1

SK650(870)　SK652(860・863・865・866・869・871・873~877・879)　他の土壙(861・864)　SD542(878)　第3a層(859・862)　第3b層(867・868・872)

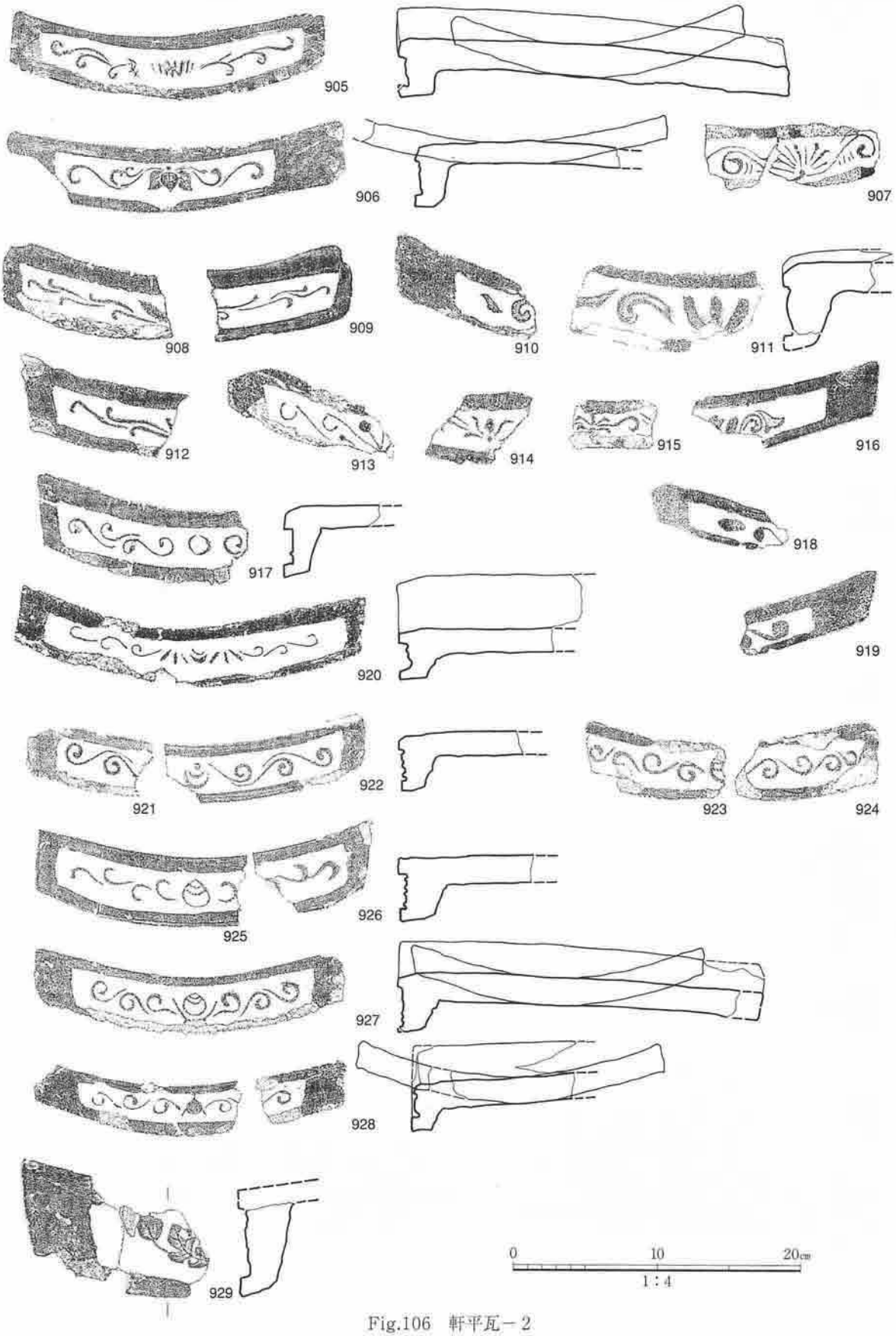


Fig.106　軒平瓦－2

SK652(905・906・920・928)　SK650(915・922)　他の土壙(918・927)　SD540(914)　SD542(925・926)
SE541(911)　第3a層(908)　第3b層(929)　その他(907・909・910・912・913・916・917・919・921・923・924)

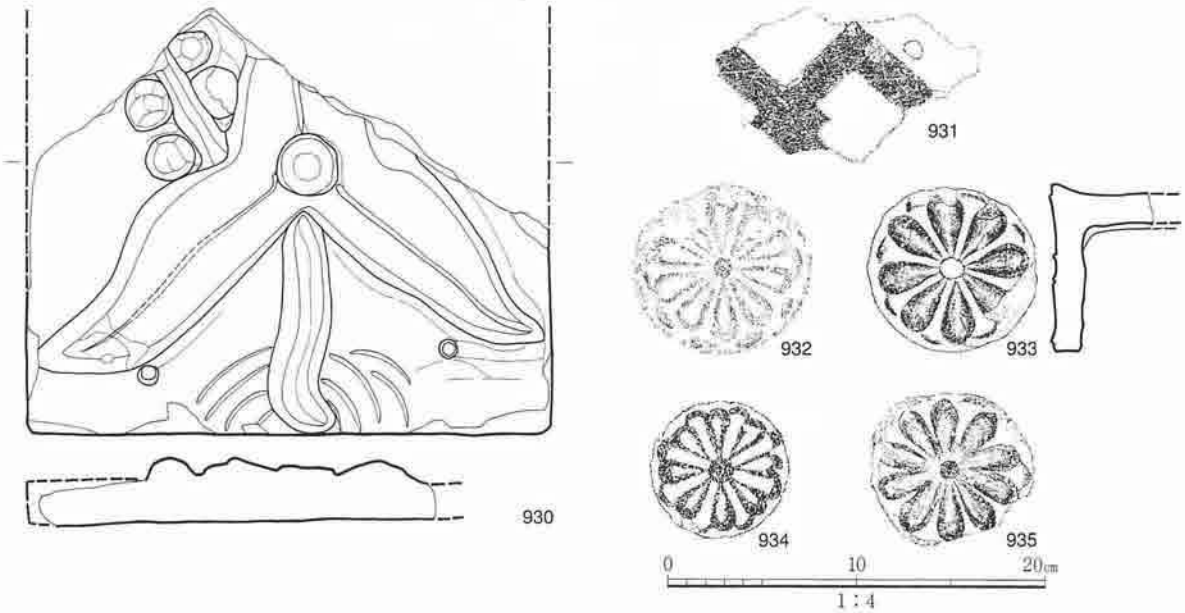


Fig.107　飾瓦・棟込瓦
SK569(930)　その他(931～935)

尾が接するものと、巴の尾どうしが接して圏線のように見えるものとがあるが、識別の困難なものもあるため、同じ類に含めた。842～859がこれに当る。珠文の数は843・850や858のように比較的密に配置されるものから859のように疎らなものがある。

Ⅲ類は外区に珠文帯をもち、巴の尾が互いに接しないものである。860～879がこれに当る。860～863のように珠文が密なものから867・872・876～879のように疎らなものまである。

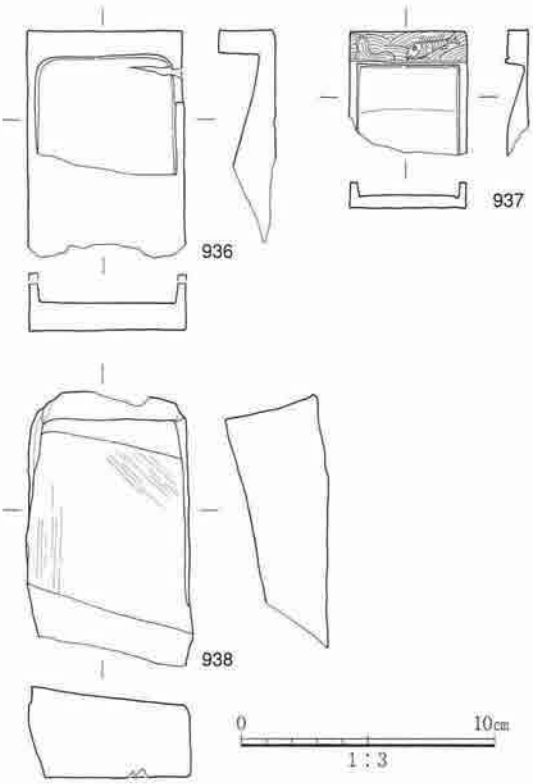


Fig.108　豊臣期の硯・砥石
第3a層(936・938)　第3b層(937)

軒平瓦

94点あり、43種の笵が確認できた。偏行唐草文の1種880と桐文と思われる1種929を除いて他はすべて均整唐草文である。

均整唐草文は以下のⅠ～Ⅳ類に分類した。

Ⅰ類は中心飾が2葉のもので、881のみである。

Ⅱ類は中心飾が3葉のもので、882～896・898～902・904・906・910・911・913～916・918・919がこれに当る。中心飾が欠けているが、文様構成からみてこの類に含めたものもある。蕚をもつものも見られる。

Ⅲ類は中心飾が3葉以上か、やや特殊なものである。897・903・905・907～909・912である。

Ⅳ類は中心飾が宝珠、またはそれに近い形のものである。917・920～928である。

929は瓦当面にわずかに漆が残っており、金箔押瓦である。第3b層から出土した。

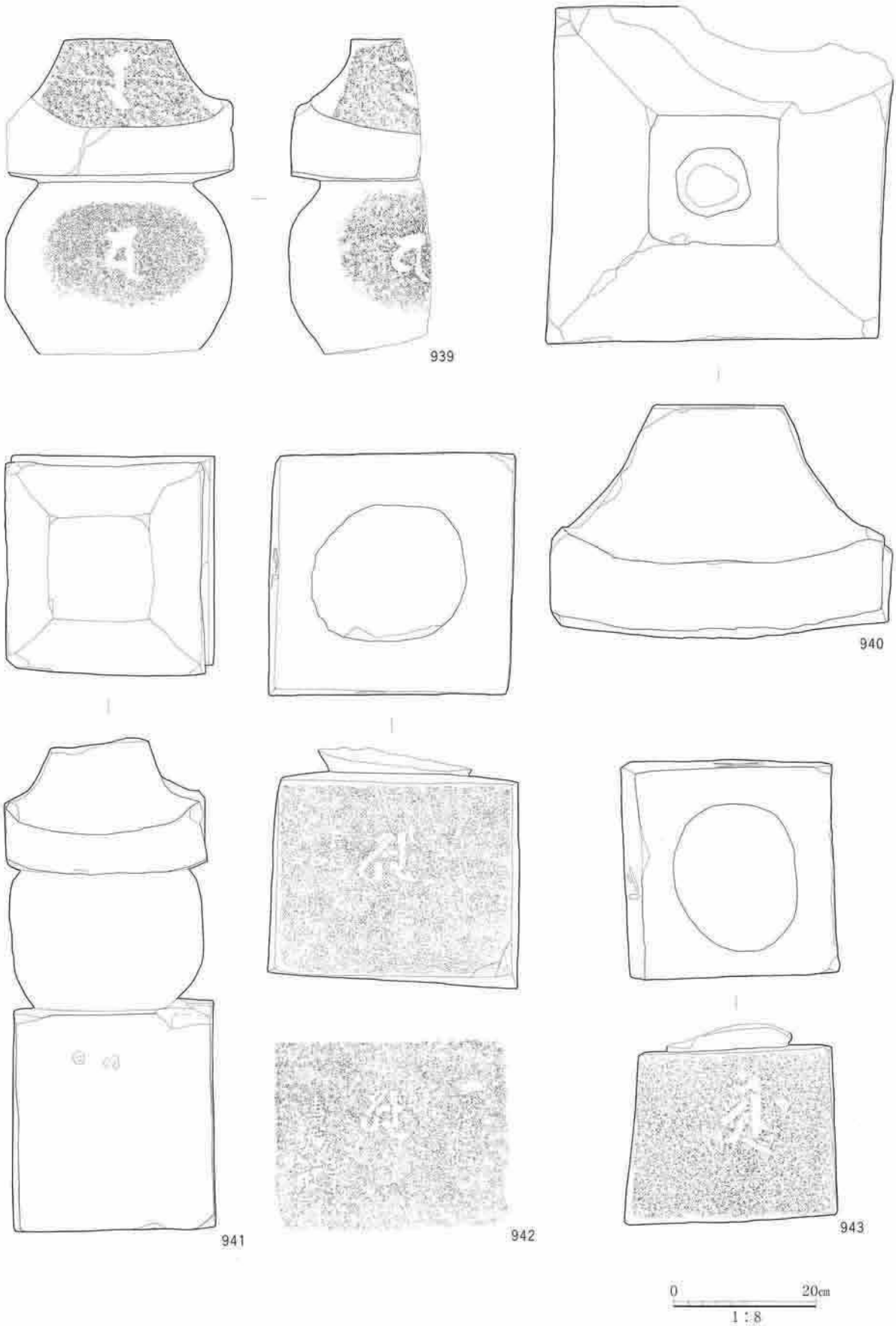


Fig.109　石列１・２に使用された石製品

道具瓦　飾瓦・鬼瓦・鯱瓦・棟込瓦などがある。

飾瓦930は沢瀉文、931は違い井桁文である。930と同種の沢瀉文飾瓦は前報告にも例があるが(原色図版13－下)、本例はやや残りが悪い。鯱瓦2065は尾部の破片である。以上の瓦には金箔・漆が残っている。また、鬼瓦は図・写真を掲載していないが、鬼面文の破片が見られた。棟込瓦932～935はいずれも菊文である。江戸時代に下る遺構や地層から出土したものが多いが当該期のものと判断してここで報告する。

iii) 石製品(Fig.108～110、図版70～71)

豊臣期の遺構から出土した石製品には、硯936・937・砥石938と、SF501・502に転用されていた五輪塔939～946・用途不明切石947～949がある。五輪塔については明らかに転用品であることから豊臣期より前にさかのぼる可能性があるが、ここで報告する。

硯937は縁に魚と青海波文が彫られている。泥質片岩製である。第3b層から出土した。他の砥石936・907も泥質片岩製である。第3a層から出土した。

五輪塔のうち、939・941～944は一石五輪塔である。941は完形で、他はその一部である。939は火輪・水輪の部分で、942～944は地輪の部分である。939・942・943の側面には梵字が彫られている。942の1面には梵字の右側に「尼僧心」、左側は上は1行2字が彫られ、下は2行に分かれている。いずれも文字が鮮明でなく判読が難しいが、上の2字は年号を記したものと考えられ、「嘉応」あるいは「嘉慶」である。嘉応年間は平安時代後期(1169～71)で、嘉慶年間は南北朝期(1387～89)である。五輪塔の型式からみて平安時代にさかのぼることはないと思われるので、「嘉慶」であろう。下の2行のうち右側は「二年」であろうか。左側は「正月三」と読める。940は組合せ式の五輪塔の火輪の部分である。945・946は平面方形で、図で下面とした面以外をていねいに仕上げる。形状や材質は上述の五輪塔と差異がないため、組合せ式の地輪の部材の可能性がある。

上記以外のうち、947は片側が丸い石材である。下面には別の部材と組合せるための凹みがある。形態はキリシタン墓に似るが、どの面にも文字が彫られた痕跡はない。948は1面のみに加工が施されておらず、この面を下あるいは裏にして使用されていたものと考えられる。949も大きさは948の1／4程度であるがほぼ同じ形態で、1面は未加工である。これらの石材は、939が砂岩、940～949は花崗岩である。

iv) 金属製品

開元通宝(初鋳621年)がSK650と第2a層から、元豊通宝(初鋳1078年)が1D区の第3～5層相当層と第2a層から出土した。他に皇宋通宝(初鋳1038年)が2点、熙寧元宝(初鋳1068年)が1点、聖宋元宝(初鋳1101年)が1点あり、いずれも江戸時代の遺構や地層からのものであるが、当該期かあるいはそれ以前に使用されたと考えられる。あとは鉄釘などが少量出土したのみである。　(佐藤)

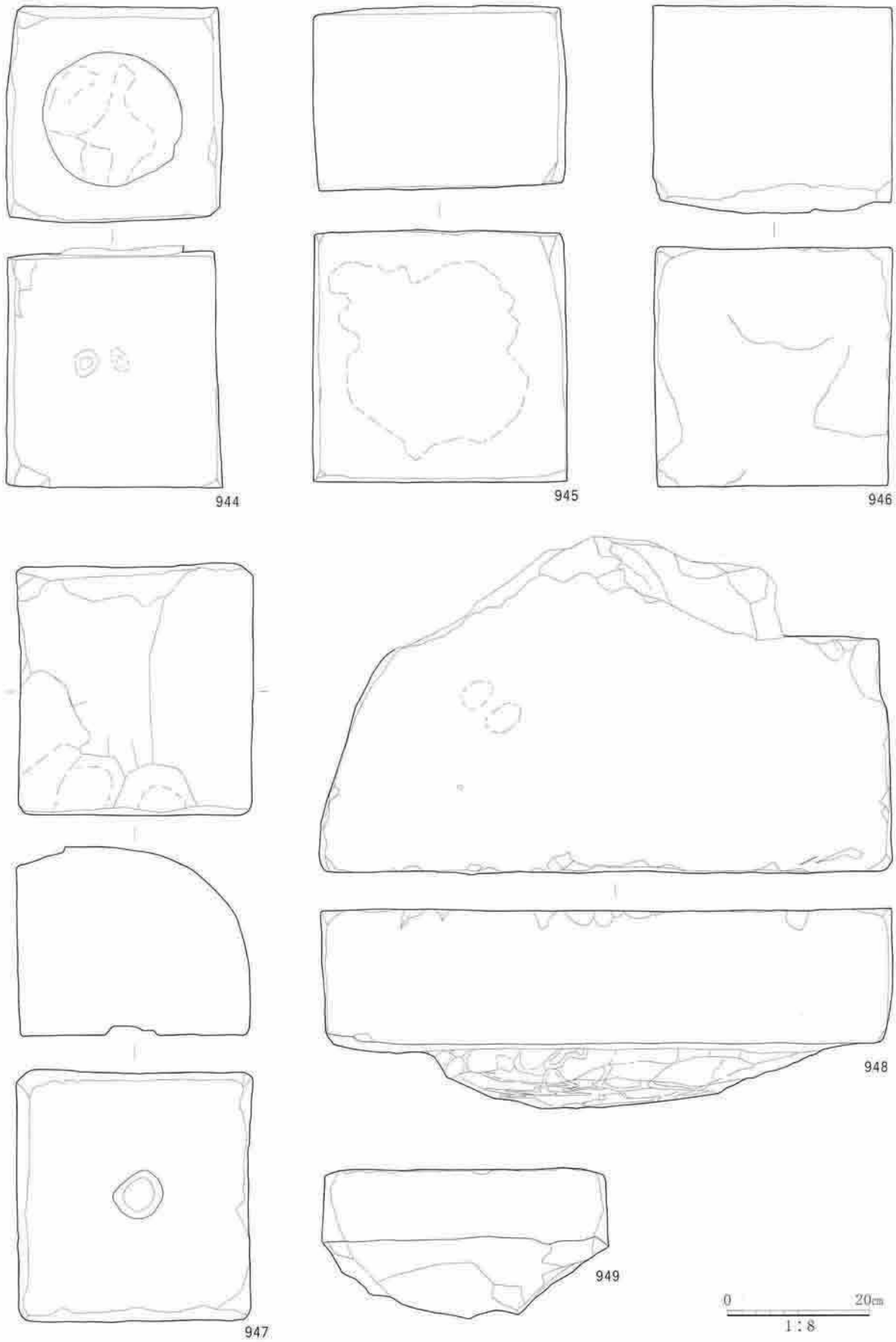


Fig.110　石列1・2に使用された石製品－2

第６節　江戸時代の遺構と遺物

１）遺構

本調査地で検出された遺構のうち、もっとも多いのは江戸時代の遺構である。それらは井戸・土壙（ゴミ穴・土取り穴）・溝（排水路）などであり、多量に出土した遺物とともにこの地で人々が盛んに活動したようすを克明に伝える資料である。ここではそれらの中から遺構・遺物が集中して見つかり、江戸時代における屋敷地の区画を検討しうる資料として１Ｃ～１Ｅ区の概要を主として報告する。他の遺構については必要に応じて触れるのみとする。

ｉ）１Ｃ～１Ｅ区（Fig.95・111・112、図版５・33～35）

遺構面は２時期に大別できる。この調査区では東半部が江戸時代の大規模な地下げにより地山面が大きく削平されていた。第１面は近代の客土層である第１層を除去した段階で検出され、このような高低差を利用して、３段階に造成された屋敷地が江戸時代末まで存続する。これを屋敷地Ａ～Ｃとする。第２面はその下層で検出された。地山面あるいは第2c層によって整地された面に掘込まれた遺構面である。

第２面　大規模な土壙群が検出された。土壙群は、屋敷地Ａに当る部分にあるSK795と屋敷地Ｂ・Ｃの位置に南北に並んで位置するSK797・796・793の２種に分けられる。前者は青灰色粘土によって一気に埋められており、後者は地山層の橙色砂質粘土の偽礫を含んだ地層によって埋まっている。これらの遺構の埋土やSK793の下面で見つかったSK794からはいわゆる初期伊万里が出土することから、最後に埋められたのは17世紀中葉ごろであることがわかる。この段階の大規模な土壙は調査地の西にも広がっており、今回見つかった土壙もそれに連続するものである。これらの土壙の配置を見ると、裏五軒屋敷の範囲に集中することがわかる。また、今回の調査地でも１Ｃ区にあるSK795とSK797の境は屋敷地ＡとＢの境界と一致する。このことから、２つの土壙はむやみに掘られたものではなく、江戸時代前半段階にすでに屋敷割りが行われており、この位置を意識して土壙が掘られたことがうかがえる。この土壙の機能については、年代から見て大坂城の再築工事に伴って行われた壁土用の粘土取り穴ではないかと考えられ、この地域を造成するにあたって埋戻しが行われたものであろう。

また、屋敷地Ａに当る部分にあるSK732はすでに前報告にある遺構であるが、今回の調査で壁と底面の境目に並べられた石や地上から中に降りるための階段が検出され、穴蔵であることがわかった。埋土からの遺物はほとんどないが、この段階の遺構群に含めておく。

第１面　先にも触れたように、第１層の基底面で高低差のある３つの屋敷地Ａ～Ｃが検出された。遺構面が最も高いのは、北・南区の西半部の屋敷地Ａで、TP+22.7m前後に遺構面がある。次いで遺構面が高いのは、南区と北区の南端部にかけての屋敷地Ｂで、遺構面の高さはTP+21.9m前後である。遺構面が最も低い屋敷地Ｃは、屋敷地Ｂの北にあり、遺構面の高さはTP+21.1～21.3mで、屋敷地Ａとの比高は1.5～2.0mを測る。

この段差をもつ屋敷地の配置をみると、ほぼ同じ高さに遺構面がある屋敷地Ａの東に一段低い遺構

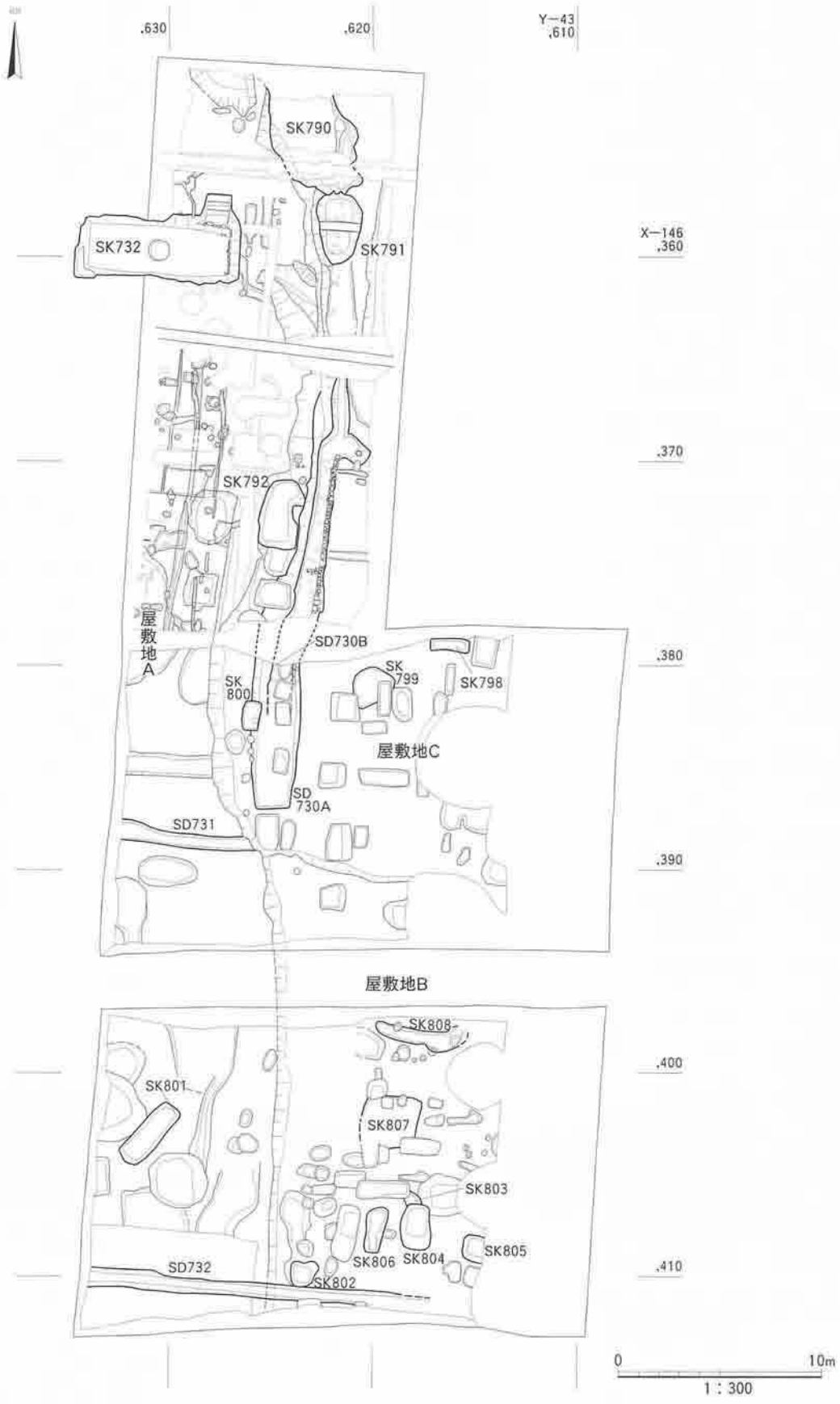


Fig.111　1C～1E区平面図(江戸時代)

面となる屋敷地Ｂ・Ｃが南北に並ぶ位置にある。この屋敷配置を江戸時代の本調査地周辺の屋敷割を記した福山藩の『大坂御家中屋敷割図』や江戸期の大坂の絵図と対比すると、上町筋に面した町家と城代家臣屋敷の境が屋敷地ＡとＢ・Ｃ間の段差に当ると考えてまず間違いない。したがって、屋敷地Ａは前報告で想定した「五軒屋敷」に相当し、SD731が本町通りに間口をもつ表五軒屋敷と現在は消滅した東西道路「赤門筋」に間口を開く裏五軒屋敷を区切る施設であった可能性が高い。このSD731の位置は屋敷地ＢとＣの境とも一致しており、第１面で確認された３面の屋敷地は、武家屋敷と町家の区画を示していると考えられよう。また、調査地の位置はいずれも屋敷内の裏に当り、屋敷地Ａで見つかった土壙は裏五軒屋敷のゴミ穴、屋敷地Ｂ・Ｃの土壙群は町家のゴミ穴と考えてよい。

この各屋敷地の遺構をもう少し詳しく検討すると、屋敷地ＡとＣの間にある南北溝SD730Aは、当初幅約２ｍの石組み溝であったが、それを幅１ｍの木組み溝SD730Bにつくり替えている。溝の廃絶後はこの位置に柵(塀)が立てられている。SD730・柵ともに屋敷地Ｃの南端で止まっており、屋敷地Ｃの南端から本町通りに向けての排水溝と考えられる。屋敷地Ａの排水は、基本的に東から西に向けて行われたと考えられるが、高低差がある以上、屋敷地Ｃへも雨水が流れ込むこともあったのではなかろうか。ところで、この溝から町家の奥行きを20間と想定し、約40ｍをとると、上町筋の東端の位置に当る。このことから、屋敷地ＡとＣの間の段差が町家と五軒屋敷の境を示し、屋敷地ＢとＣの段差は町家間の屋敷境に当るといえよう。その場合、なぜ段差をつける必要があったかが問題となるが、屋敷地を造成するにあたって地山の高い部分を武家屋敷に、低かった上町筋沿いを町家に設定し、高低差が大きかった馬場町の交差点付近の造成のためには、３段の高低差が必要となったのではないかと考えられる。

町家と考えられる屋敷地ＢとＣには、多数のゴミ捨て穴が確認され、特に屋敷地Ｂの南部と屋敷地Ｃの北部に多く存在する。前者のゴミ穴は東西に長辺をもつものと南北に長辺をもつものがあり、ある程度規則性をもって並んでいる。この差を屋敷地Ｂの中での屋敷の違いととらえることも可能であるが、屋敷境を示す遺構は認められなかった。後者である屋敷地Ｃのゴミ穴はSK790～

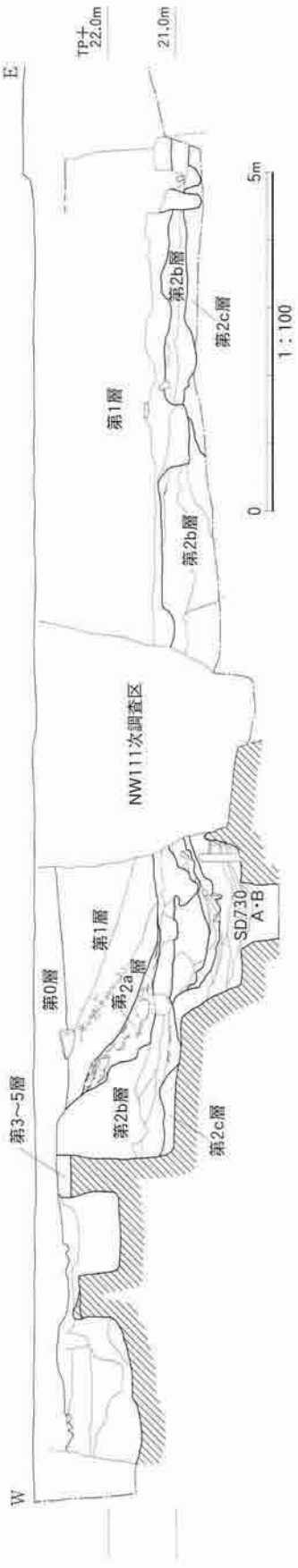


Fig.112　１Ｄ区調査区北壁断面図

792のように不定形である。性格の異なるものかもしれない。

また、屋敷地Bのゴミ穴にはシジミがつまった土壙SK803・804があり、武家屋敷のゴミ穴SK801からは多量のアサリやアワビの貝殻や土製玩具(土人形)が出土した。出土遺物の差は武士と町人の食生活や日常生活の差を反映している可能性もある。なお、出土した貝の概要については、次章第2節で、土製玩具については次項で報告する。

ii) その他の調査区(Fig.113)

溝・井戸・土壙・柱穴などが検出されたが、屋敷地との関連などがわかるものはない。数量としてまとまった遺物が出土したのは4D区SK809のみである。

(森・佐藤)

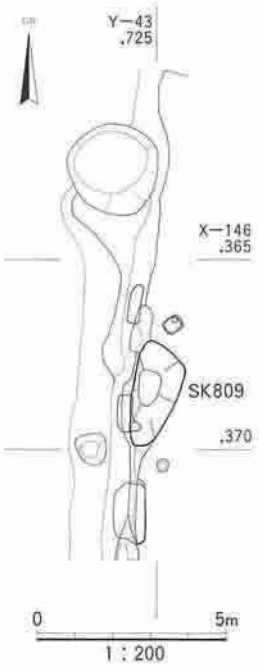


Fig.113　SK809平面図

2) 遺物

i) 陶磁器・土器

18世紀以降を中心に多量の陶磁器・土器が出土している。今回はそれらの中から編年上の基準資料となりうるような、まとまりのある資料についてのみを報告の対象とした。

SK797(Fig.114～118、図版72～74)

中国製磁器には青磁・白磁・青花がある。国産の陶磁器・土器には肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・丹波焼・備前焼・瓦質土器・土師器がある。その他に東南アジア産陶器が出土している。

青磁には皿950・碗953・壺951、白磁には皿952、青花には碗957・小碗954・955・皿956・958・大皿959がある。951は平面が楕円形の壺である。体部にある文字は「福」であろう。952の高台や959の体部下半には砂が付着している。

肥前磁器には染付碗960～966・小碗974・975・皿968～973・瓶979～981、青磁碗967・香炉978、白磁皿976・977がある。碗は高台の高いものがほとんどである。961の外面には体部の下端近くから高台の中程にかけて鉄釉が施されている。文様は965が風景のようで、966は一重網目である。他は残りが悪いためよくわからないが、概して簡素なものが多い。965・967は焼成がやや軟質で陶胎に近い。968や976など、ほとんどの皿の高台には砂が付着している。香炉978の体部下半には突起が3個所に付く。978および瓶979～981の内面は露胎である。

肥前陶器には碗982～989・沓茶碗999・小碗991・皿992～995・997・瓶1000・汁つぎ1002がある。碗は基本的に豊臣後期のものから大きくは変わっていない。991の文様は銹絵である。皿には底部から体部が直線的に伸びる992～994・997と内湾する995がある。溝縁皿は含まれていない。997には波を蹴立てて進む船とその上を飛ぶ蝶？の絵が象眼されている。焼成はきわめて硬質で、磁器に含めてもよいものである。ていねいに削り出された高い高台をもつ。1002は注口の部分がわずかに残っている。

瀬戸美濃焼には鉄釉天目碗990・志野菊皿996・志野向付1001・織部向付998がある。990の焼成は硬質である。

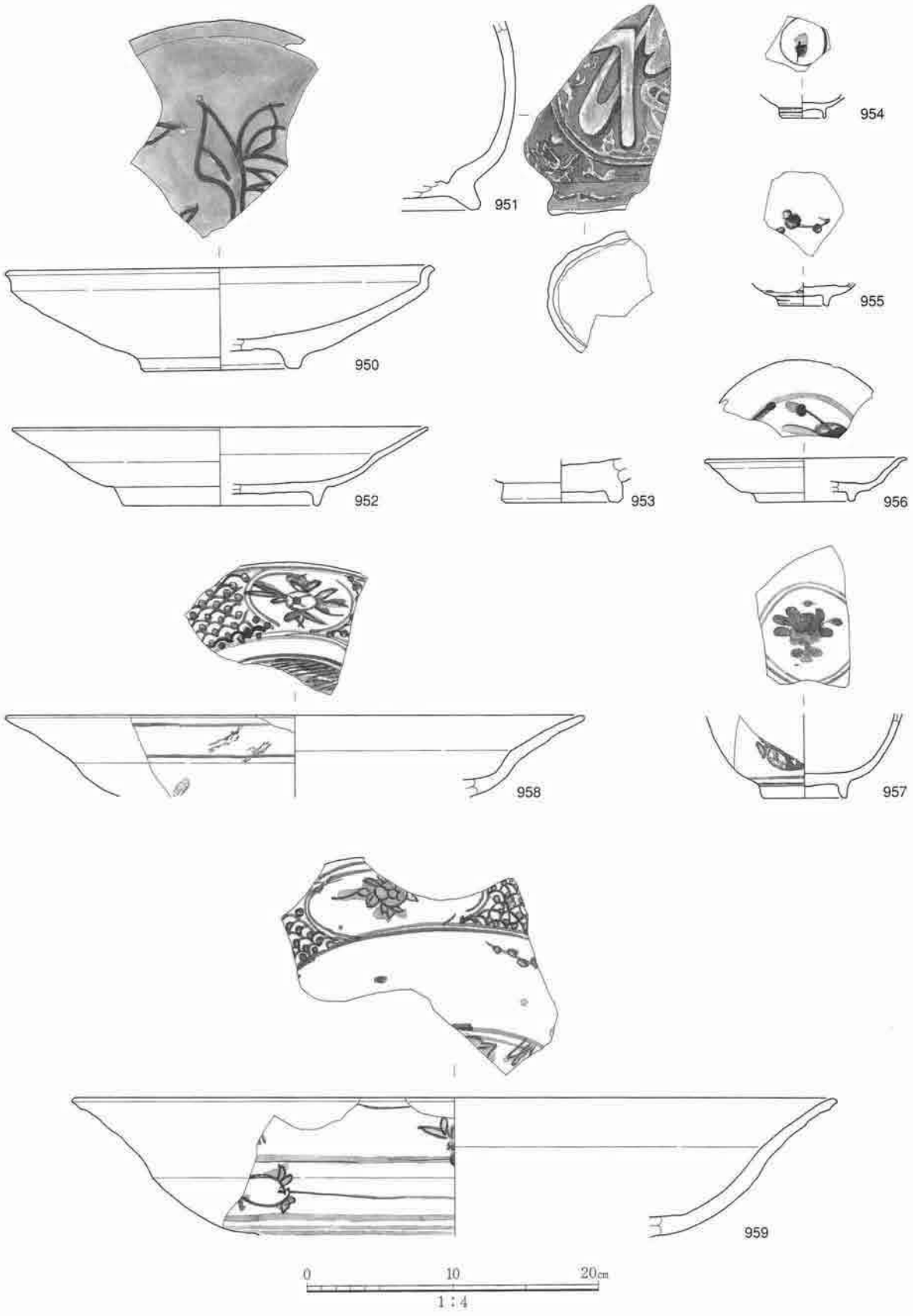


Fig.114　SK797出土陶磁器・土器－1

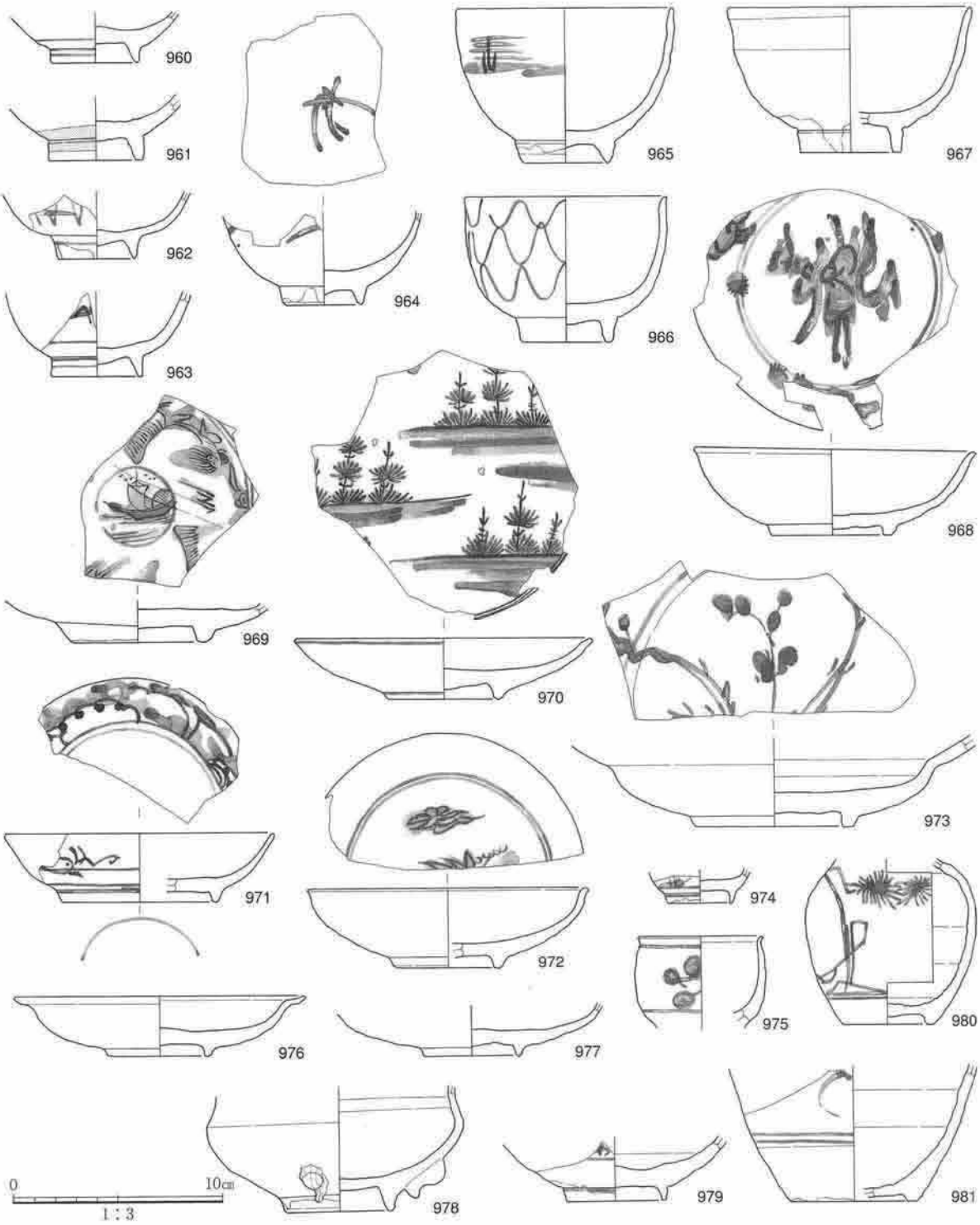


Fig.115　SK797出土陶磁器・土器－2

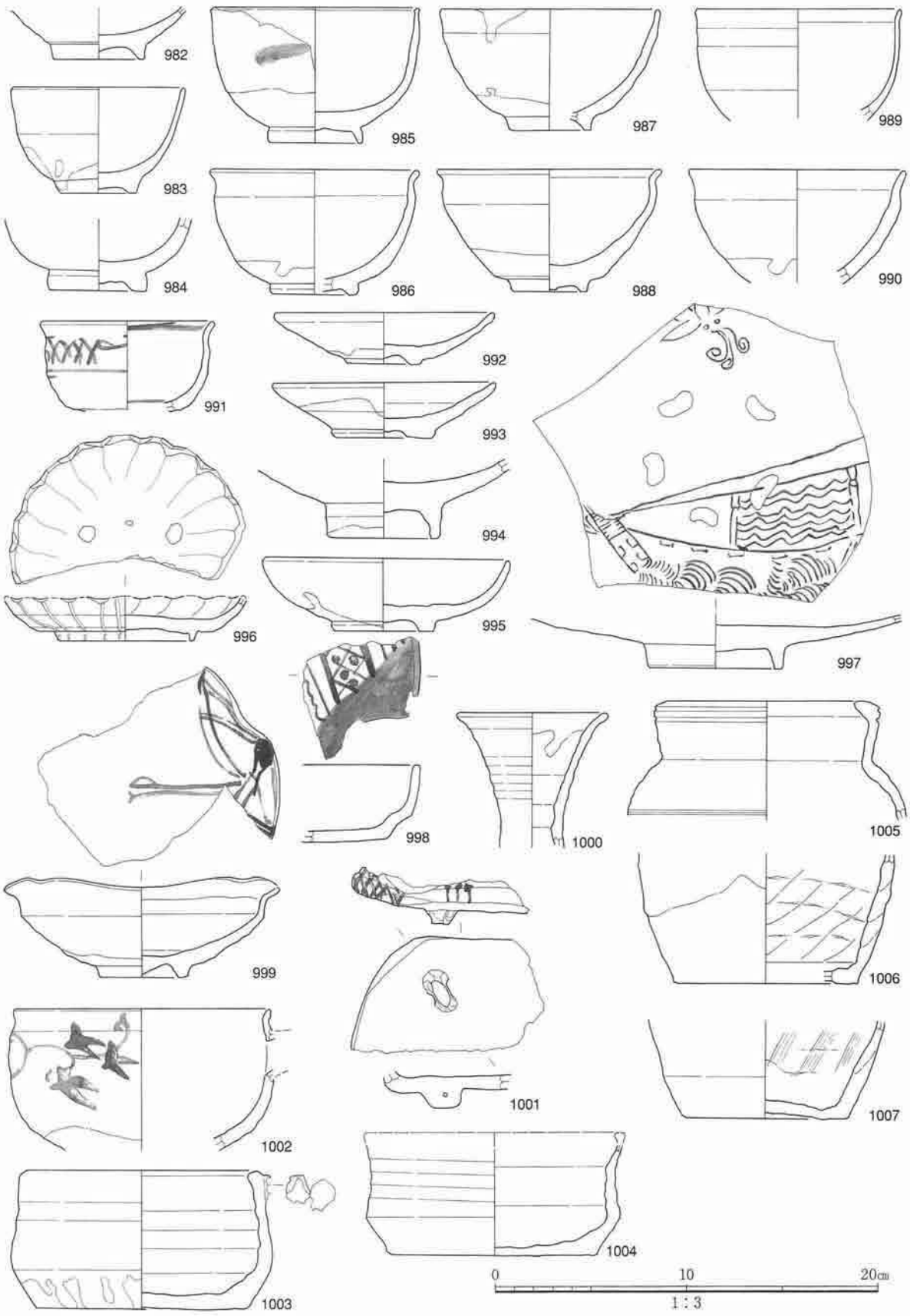


Fig.116　SK797出土陶磁器・土器－3

丹波焼は鉢1003・1004・擂鉢1009～1011・甕1012・1013がある。1003の口縁部にはボタン状の突起が付く。1004は1003と同様の鉢であるが、口縁部が欠損している。1009は擂目の単位が１本で、1010・1011は複数本である。後者は大平茂氏の編年によるⅣ～Ⅴ型式[大平1992]に相当する。

備前焼擂鉢1008の口縁端部は内傾する面をなす。器壁は厚い。擂目は斜め方向に施され、古い特徴を残している。

東南アジア産陶器は壺1005～1007である。体部には粘土紐の継ぎ目が残る。胎土はマーブル状で、きわめて特徴的なものである。

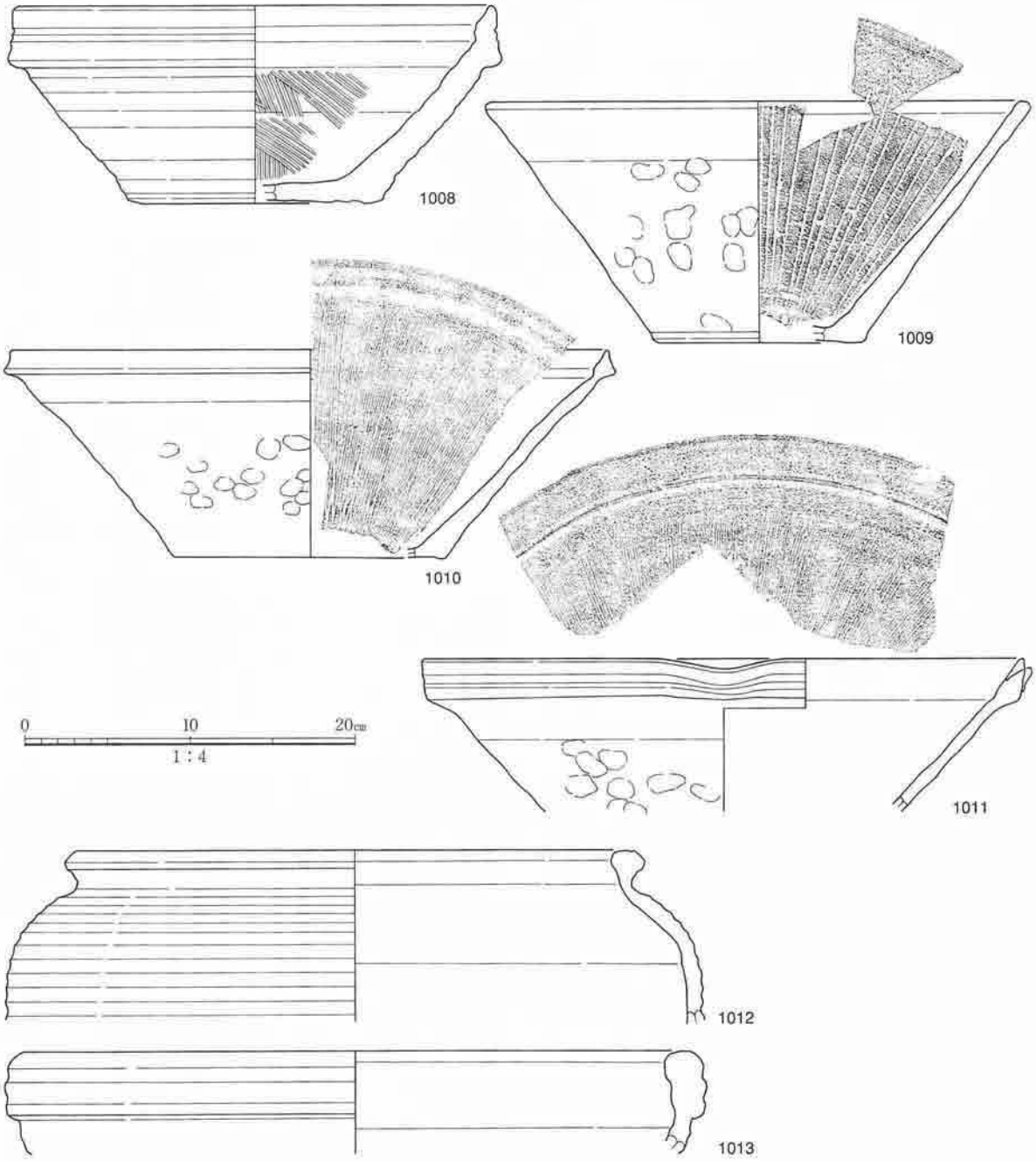


Fig.117　SK797出土陶磁器・土器－４

瓦質土器には火入1027・擂鉢1031がある。1027は平面が方形のものである。1031の擂目は部分的にしか施されない。

土師器には皿1014～1023・焼塩壺1026・同蓋1024・1025・火入1028・炮烙1029・鍋1032・甕1030・羽釜1033がある。皿はすべて手ずくねで、糸切り底のものはない。底部が盛上るへそ皿1014・1015の他、体部と底部の境目にナデによる凹線が巡るもの1016・1018・1021・1023と、巡らないもの1017・1019・1020・1022がある。焼塩壺1026の体部内面には図化できない細かい布目が残る。炮烙1029は体部外面を斜め上方へのカキトリによって調整する。難波洋三氏によるC類[難波1992]である。羽釜1033は京都系で精良な胎土である。

以上の陶磁器・土器は、染付皿971に新しい要素が見られ混入と考えられる他はまとまりをもっており、積山洋による近世大坂の編年では3の段階に当る[積山1994]。暦年代は17世紀中葉に位置づけることができる。

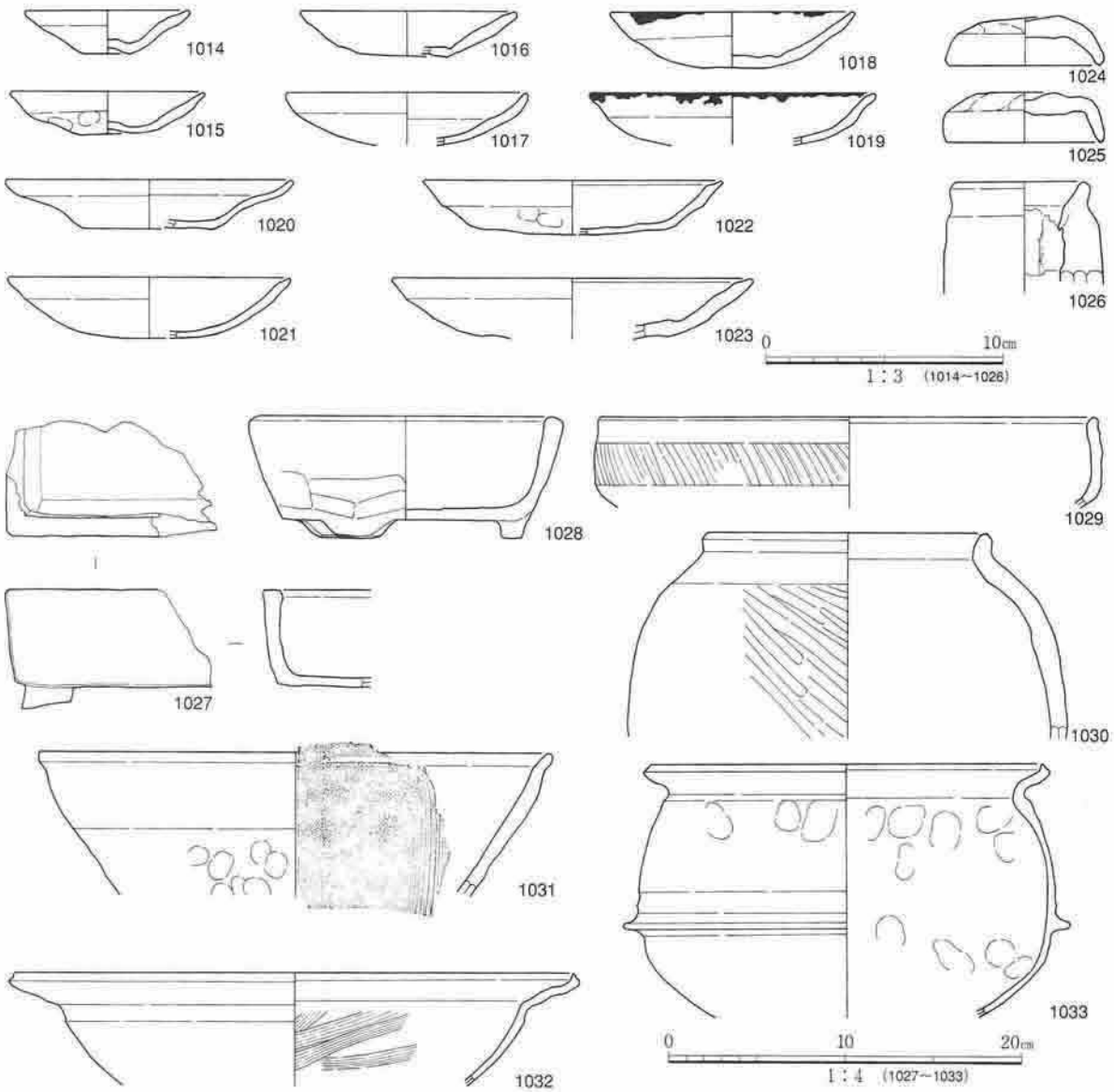


Fig.118　SK797出土陶磁器・土器－5

SK794(Fig.119・120、図版75)

中国製磁器１点を除いて国産の陶磁器・土器である。肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・瓦質土器・土師器がある。

中国製磁器は青磁皿1034のみである。底部内面には片切り彫りで花文が描かれている。体部内面にはソギが入れられて、口縁部は外反する。高台には砂が付着している。

肥前磁器には染付碗1039～1043、青磁碗1036～1038、白磁皿1035がある。染付碗の文様は先述のSK797と同様に簡素である。青磁碗のうち、1036は白磁の上に外面のみ青磁釉を掛ける。体部外面には縦方向の溝が平行して彫られている。1037・1038は内外面とも青磁釉が掛けられている。1035は底部内面を蛇の目状に釉剥ぎする。1040は底部内面を円形に釉剥ぎする。

肥前陶器には碗1045～1047・大皿あるいは鉢1048がある。1045は透明釉が掛けられ、高台内にも施釉される。1047は体部下半に稜をもち、そこから斜め上方に直線的に立上る。1046は前代の唐津

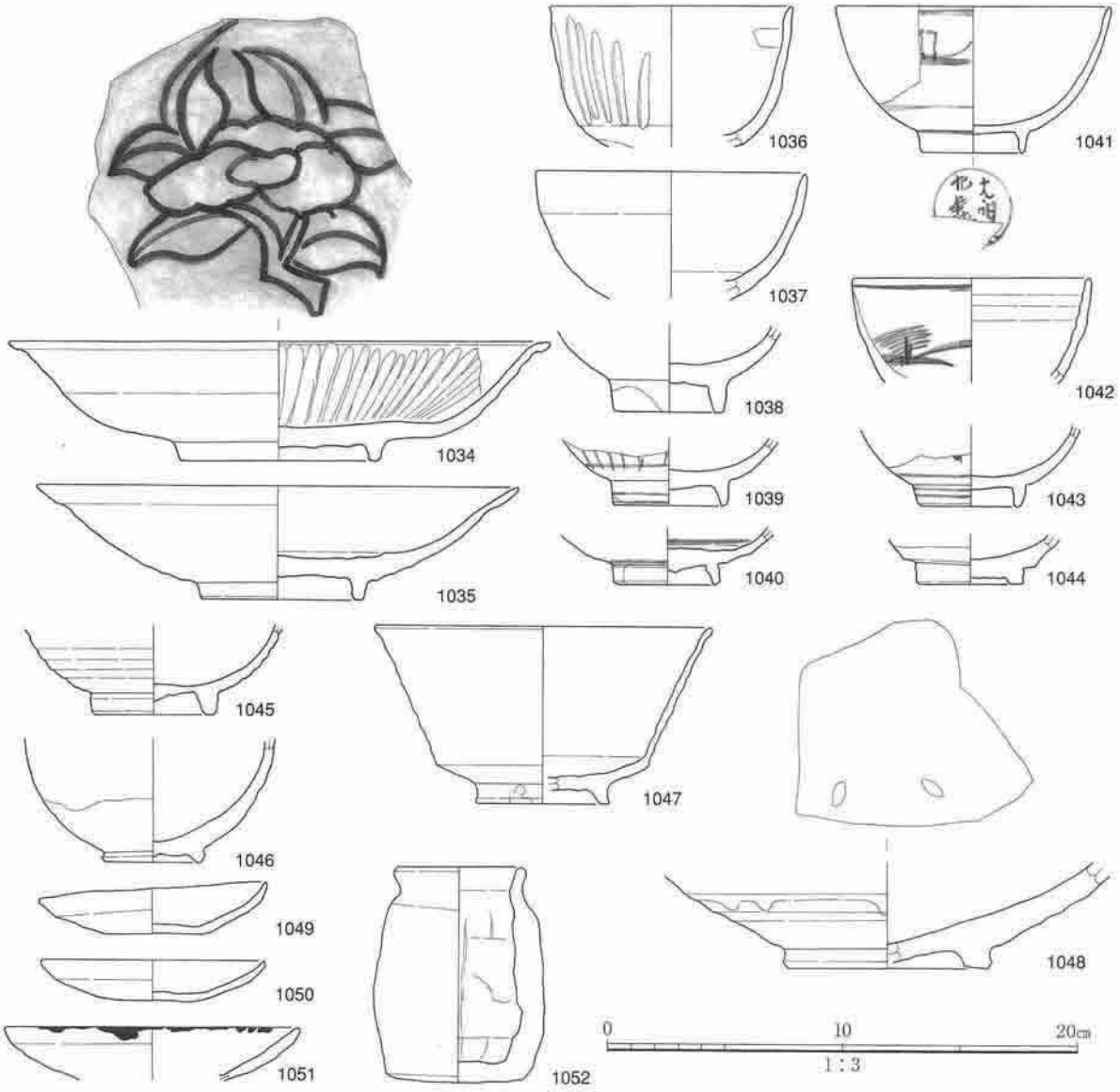


Fig.119　SK794出土陶磁器・土器－１

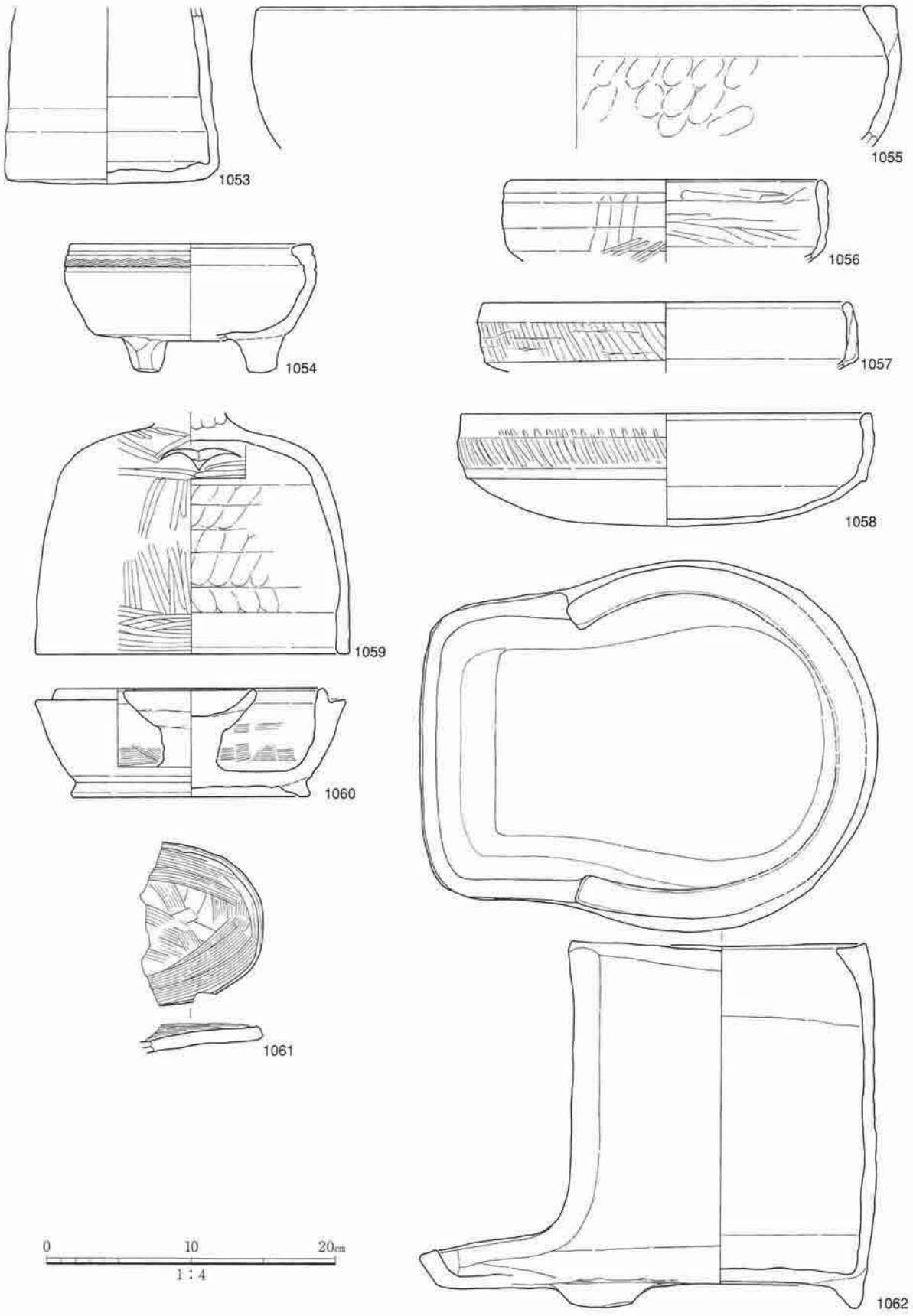


Fig.120　SK794出土陶磁器・土器－2

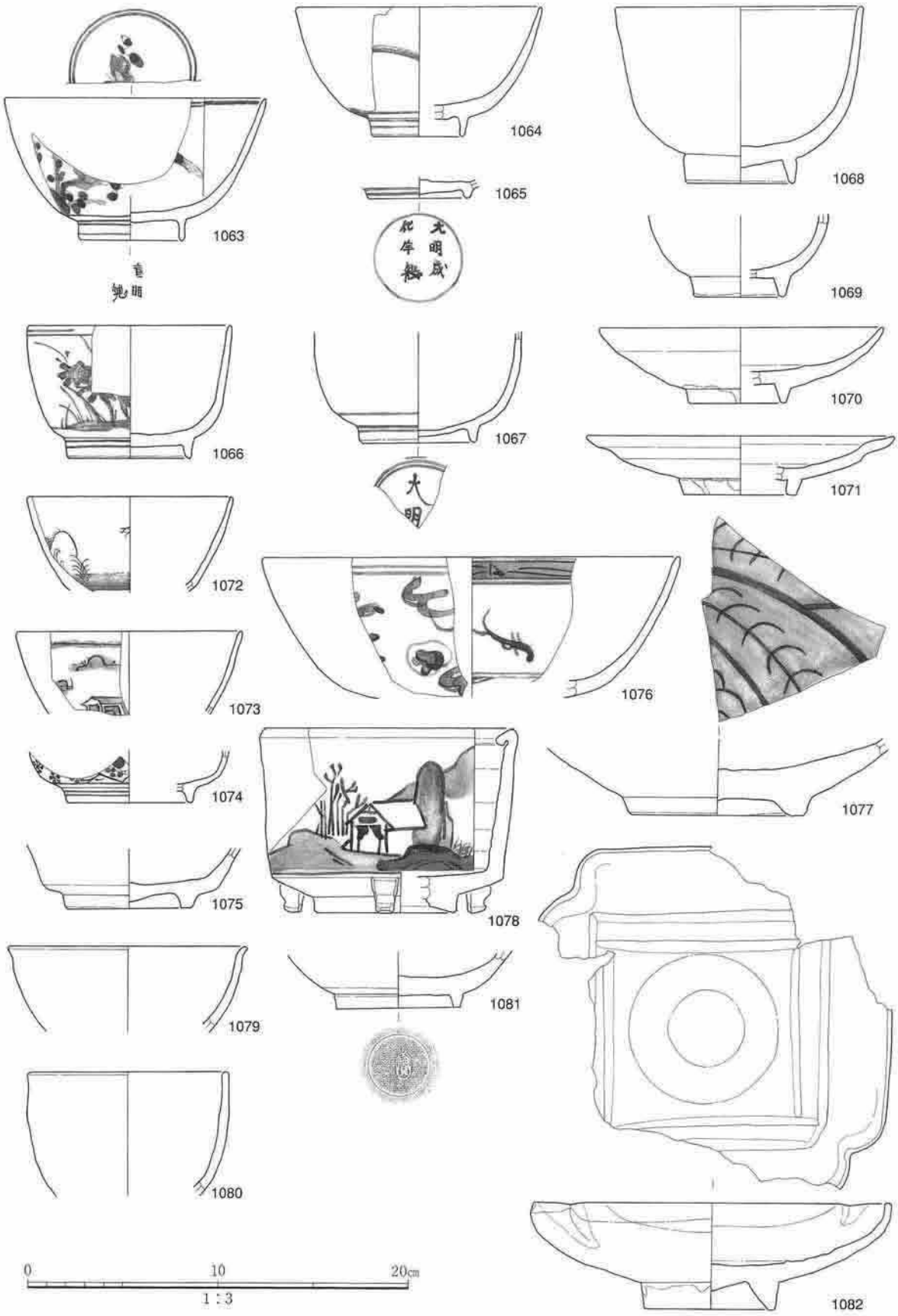


Fig.121　SK799出土陶磁器・土器－1

焼の系譜上にあるものである。

瀬戸美濃焼には鉄釉天目碗1044がある。

備前焼水指1053は平底から体部がやや内傾しながら立上る。

瓦質土器には火入1054・1055・瓦灯1059・1060および舌状製品1061がある。瓦灯は1060の上に1059を被せて用いる。1059の肩部には連弧形の透し孔があけられている。1061も瓦灯の一部と考えられるが、1060に伴うものとしては大きすぎるため、別個体のものであろう。

土師器には皿1049～1051・焼塩壺1052・炮烙1056～1058・竈1062がある。炮烙は1056が体部外面をタタキで整形しており、難波分類のA類である。1057・1058は体部外面カキトリで、体部と底部との境目の粘土を回転ケズリによって落としている。難波分類のC類である。1062の内面は底部と体部の下端部を除いて煤が付着している。底部周辺に煤が付かないのは底に灰を敷いて炭を焚いていたからであろう。この形態の竈はすでに豊臣前期の段階から出土例がある[大阪市文化財協会1992－SE520]。

以上の陶磁器・土器は先に報告したSK797と比べると、1041や1042に新しい要素が見られ、積山編年の4の段階に当る。暦年代は17世紀中葉におさまると考えられる。

SK799(Fig.121・122、図版76)

すべて国産の陶磁器・土器で、肥前磁器・肥前陶器・丹波焼・瓦質土器・土師器がある。

肥前磁器には染付碗1063～1067・1072～1074・鉢1076・香炉1078、白磁碗1068・1075・皿1070、青磁碗1069・皿1071・大皿1077がある。染付碗には草花文の描かれたものが見られる。1063は底部に「宣明年製」の字款がある。香炉1078は高台の周りの3個所に脚が付く。内面は露胎である。

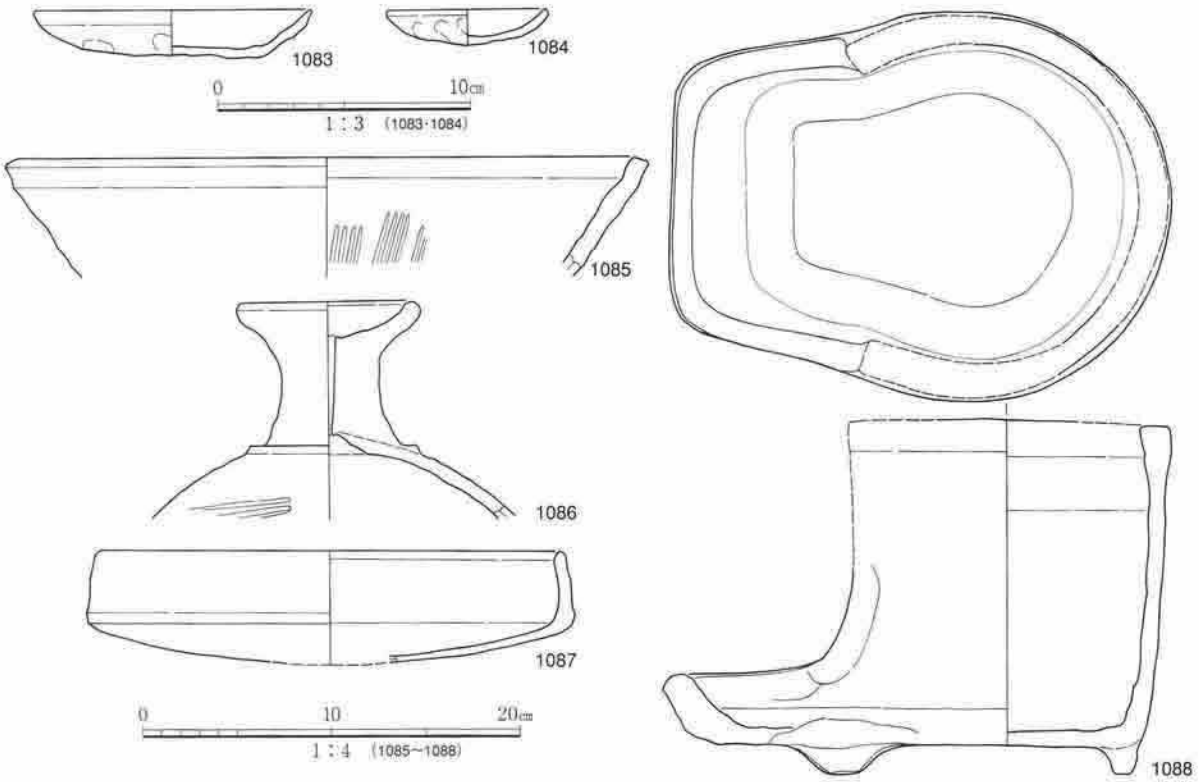


Fig.122　SK799出土陶磁器・土器－2

1076は外面は雲竜文で、底部内面には荒磯文が描かれていた可能性がある。1068は焼成がやや軟質である。1075は筒形碗であろう。白磁としたが破片のため文様の有無はわからない。1070はやや青みのある釉調を呈する。底部内面を蛇の目状に釉剥ぎする。1069は外面のみ青磁釉を掛ける。内面は白色である。1071は段をもつ皿である。1077は焼成がやや軟質である。

肥前陶器には碗1079～1081・角皿1082がある。1079は外面に緑釉、内面に透明釉を施す。1081は精良な胎土で、釉調は灰色がかった黄色である。いわゆる京焼風陶器で、底部外面に「寶」字の刻印がある。京焼風陶器の中で「寶」字の刻印は例が少ないが、福島1丁目所在遺跡(堂島蔵屋敷跡)で陶器窯以前の地層とした第5b層から同種の刻印のある壺が出土している[大阪市文化財協会1999A]。1080は1081に似た釉調・胎土である。1082は1079とは反対に外面に透明釉、内面に緑釉が掛けられている。底部内面は蛇の目状に釉剥ぎする。1079と1082は内野山窯系の製品である。

丹波焼擂鉢1085は擂目が4本単位である。口縁端部は切りそろえたままの状態で上下に拡張しない。大平編年のⅠ～Ⅱ型式に当る。

瓦質土器には瓦灯の蓋1086がある。上部のみが残存し、頂部の皿形の部分の底には灯芯を差込むための孔がある。土師器には皿1083・1084・炮烙1087・竈1088がある。1083・1084はどちらも手づくねである。1087は体部外面のカキトリ痕を回転ナデによって消している。難波分類のC類である。1088は先述のSK794の竈よりひとまわり小さい。煤の付き方は同様である。

以上の陶磁器・土器は積山編年では6の段階に当り、暦年代は17世紀後葉と考えられる。

SK802(Fig.123～125、図版77)

中国製磁器はなく、すべて国産の陶磁器で占められる。肥前磁器・肥前陶器・京焼(註1)・丹波焼・軟質施釉陶器・土師器がある。

肥前磁器には染付碗1094～1102・同蓋1103・小杯1104・蓋1091・皿1111・瓶1105・1112・壺1106・1107・紅皿1108・小皿1110、白磁碗1089・1090・皿1092・仏飯器1093・紅皿1109がある。染付の文様には手描き・コンニャク印判・型紙刷りの技法が用いられ、樹や草花を中心とした文様が表現されている。複数種のコンニャク印判を組合せたものには1094、印判と手描き文様とを組合せたものには1101・1102・1104がある。雨降り文は1096は手描きで、1098は型紙刷りである。1091は鉢か段重の蓋であろう。1111の底部内面は蛇の目状に釉剥ぎする。

肥前陶器には碗1113～1117・1119～1122・皿1123・香炉(灰落)1118・1124・鉢1127がある。碗には刷毛目碗1113～1115・1117・打刷毛目碗1116・京焼風陶器碗1119・1120・呉器手碗1121・1122がある。1114の口縁端部は釉剥ぎされており、蓋を伴う筒形碗である。1115には錆絵染付によって草花文が描かれている。現川焼の可能性がある。京焼風陶器碗では、1119は通有の碗であるが、1120は体部が直線的にひらく形態で、特異である。文様は呉須による簡略化された山水文で、胎土・焼成にも1119と共通点が見られる。1121はやはり通有の呉器手碗1122と同様の胎土・焼成であるが、形態は大きく異なる。内野山窯系の皿1123は透明釉が掛けられ、底部内面は蛇の目釉剥ぎである。香炉(灰落)はほぼ同じ形態で刷毛目のもの1118と青磁釉を掛けるもの1124がある。

京焼土瓶1128は同一個体と判断できるが接合しない3片から復元した。口頸部から体部上半にか

錆絵染付で 笹の文様が描かれている。器壁は薄い。土瓶の大坂における出土例としては堂島の陶器窯に関連する例とともに古いものである。

尿瓶1140は釉調や胎土・焼成の特徴からみて丹波焼と考えられる。ほぼ完形で把手の一部を欠く。底部を除いて外面全体に鉄釉が掛けられている。

軟質施釉陶器には灯明具1125・水差1126・皿1137がある。1125は皿の底部に灯芯を挿入するための孔を開けた突起がある。突起は皿の中心からややはずれたところに付く。鉄釉が掛けられる。1126

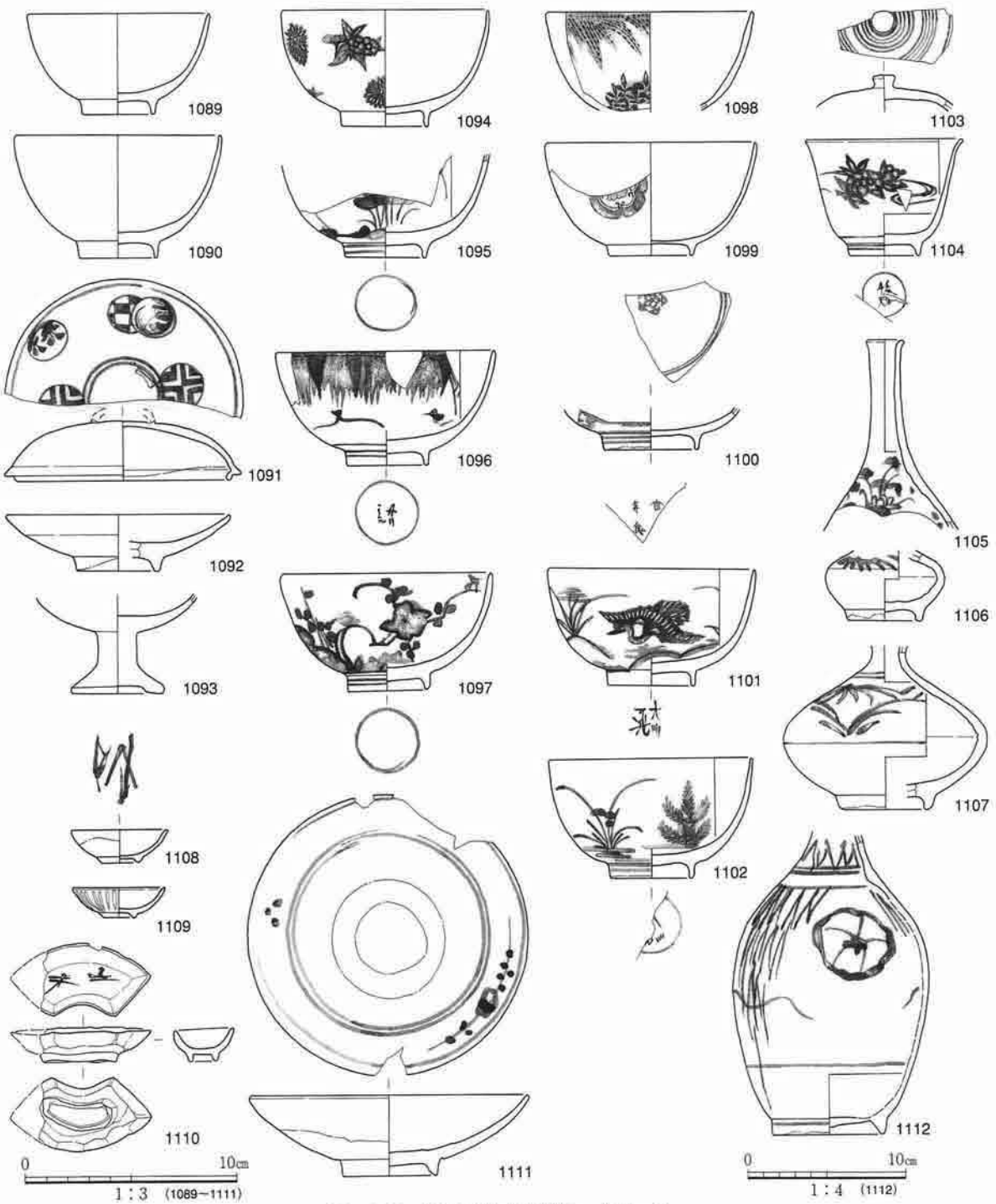


Fig.123　SK802出土陶磁器・土器－１

は小型の水差で、片口の近くに把手のとれた痕跡がある。1137は糸切り底で、灯明具に用いられている。1126・1137は透明釉が掛けられており、橙色を呈する。

丹波焼擂鉢1139は6本単位の擂目で、口縁部の断面形は三角形である。大平編年のV型式からVI型式にかけての特徴をもつ。

土師器には皿1129～1136・焼塩壺1138・十能1141・壺1142・炮烙1143～1146がある。

皿はすべて手づくねで、回転ナデ調整・糸切り底のものは見られない。灯明具に使用されたものが多い。炮烙は1143が体部の内湾する難波分類のE類、1144～1146は回転ナデ調整のD類である。

上記の陶磁器・土器は福島1丁目所在遺跡における陶器窯の操業時やその直後の第3・4層出土資料[大阪市文化財協会1999A]と共通点が多く、積山編年では8の段階に当る。18世紀初頭の年代が与えられる。

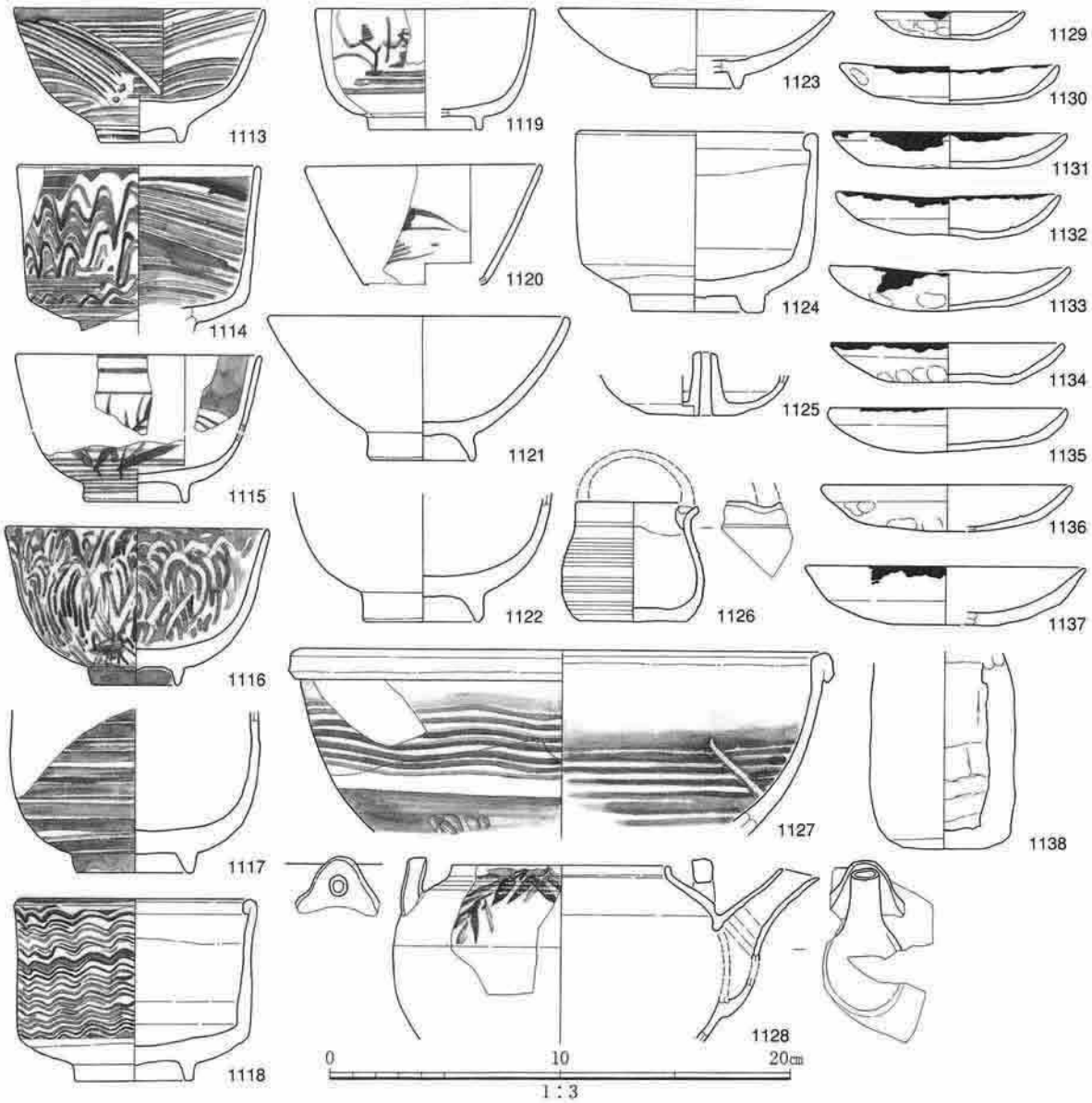


Fig.124　SK802出土陶磁器・土器－2

SK798(Fig.126～131、図版78・79)

中国製の青花が3点ある以外はすべて国産陶磁器・土器である。肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・関西系陶器・軟質施釉陶器・堺などの焼締陶器・瓦質土器・土師器がある。

中国製青花には皿1147～1149がある。1147・1148はほぼ同じ形態で、口縁部は外方へ折れ曲がる。1149の体部は内湾しながら立上り、上半部でくの字状に折れ曲がる。いずれも器壁は薄い。

肥前磁器には染付碗1152～1167・同蓋1150・1151・蕎麦猪口1172・1173・皿1179～1184・合子1186・段重あるいは鉢1187・鉢1188・1189・瓶1174・1177・1178、色絵うがい茶碗1168・小杯1169・壺1175、白磁碗1170・1171、鉄釉瓶1176がある。

1153の外面には鉄釉が掛かる。他と比べて年代のさかのぼるものである。碗1152と蓋1151は文様や口縁部径からみて組合うものである。1151・1152の口縁端部は釉剥ぎされており、焼成時も組合った状態であったと思われる。1159も口縁端部が釉剥ぎされ、蓋が伴った可能性がある。文様には樹木・草花を描くものが多く、山水画をモチーフにしたもの、氷裂文などがある。コンニャク印判と手描き文様を組合せたものには1163・1166がある。1156・1158・1159・1166のように器壁が薄く、文様も繊細な上質品がある一方で、1162や1163などのやや粗製のものも見られる。青磁染付は蓋1150の1点のみであった。内面の五弁花は手描きである。色絵のうち、うがい茶碗1168と壺1175の2点は赤色や黄色で描かれた文様が上絵付されているが、1168は火を受けており、それ以上はわからない。小杯1169は赤絵のみである。

簡素な文様の皿1183・1184や鉢1189は底部内面を蛇の目釉剥ぎする。1180・1181・1189の五弁花は印判による。合子1186・段重あるいは鉢1187は口縁端部を釉剥ぎし、蓋が伴う器形である。鉢1188の底部は蛇の目凹形高台である。

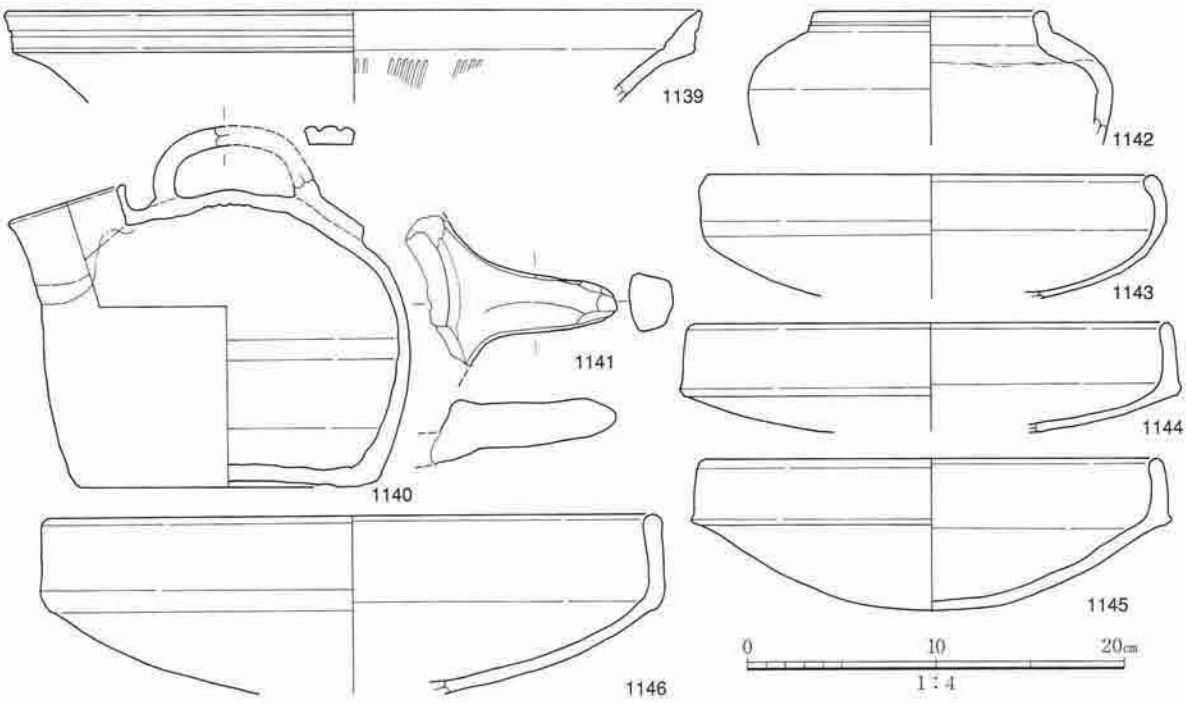


Fig.125　SK802出土陶磁器・土器－3

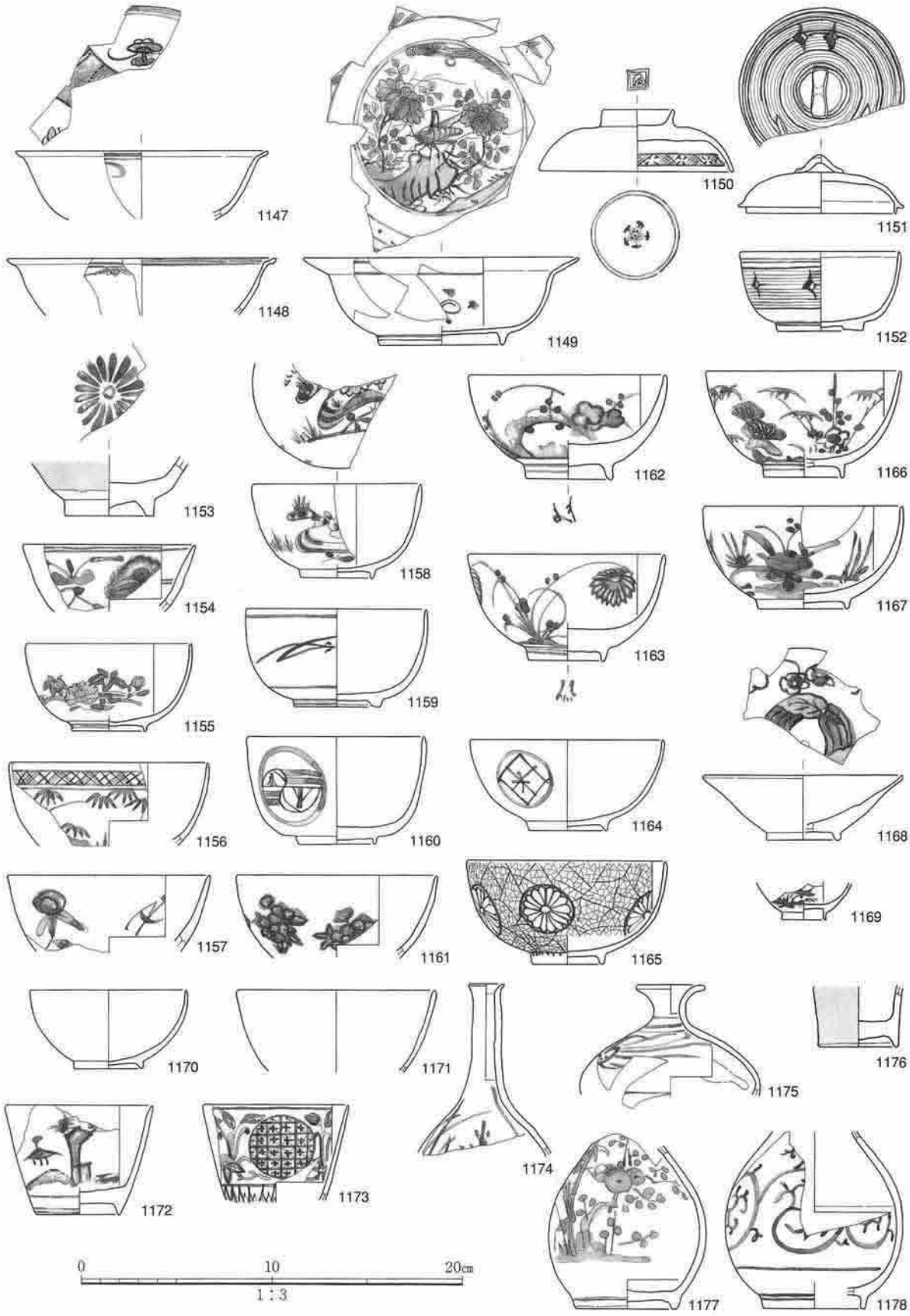


Fig.126　SK798出土陶磁器・土器－1

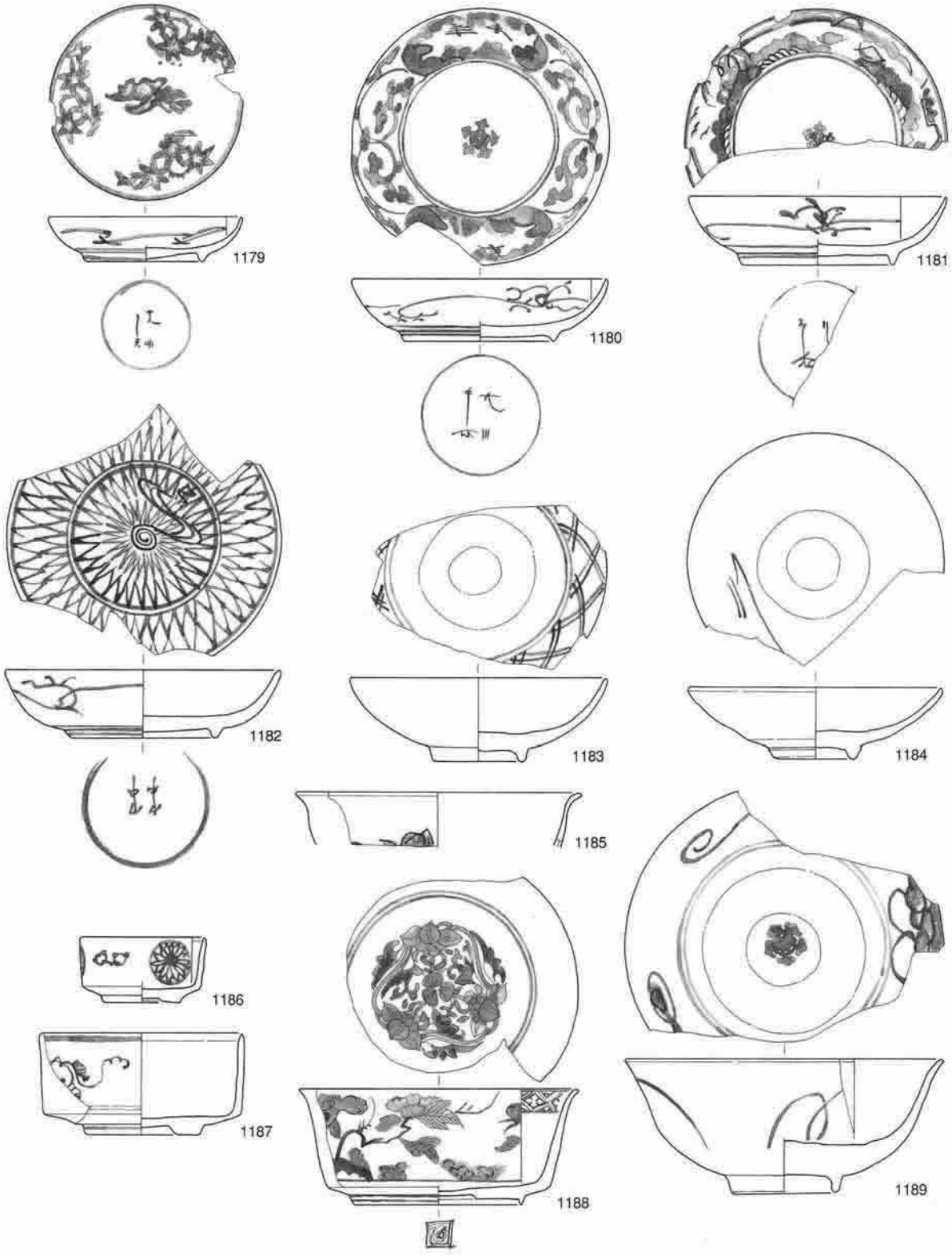


Fig.127　SK798出土陶磁器・土器－2

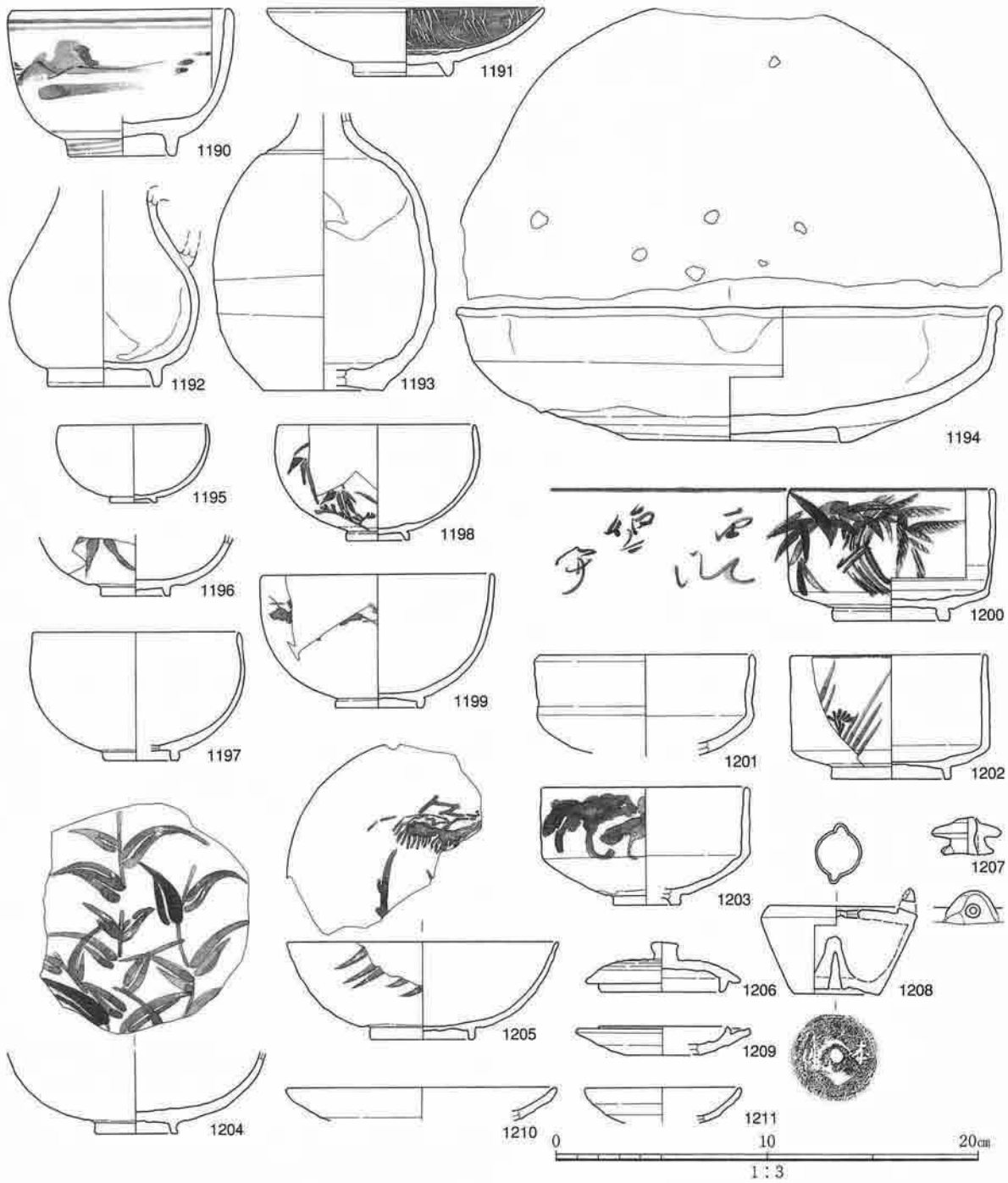


Fig.128　SK798出土陶磁器・土器－3

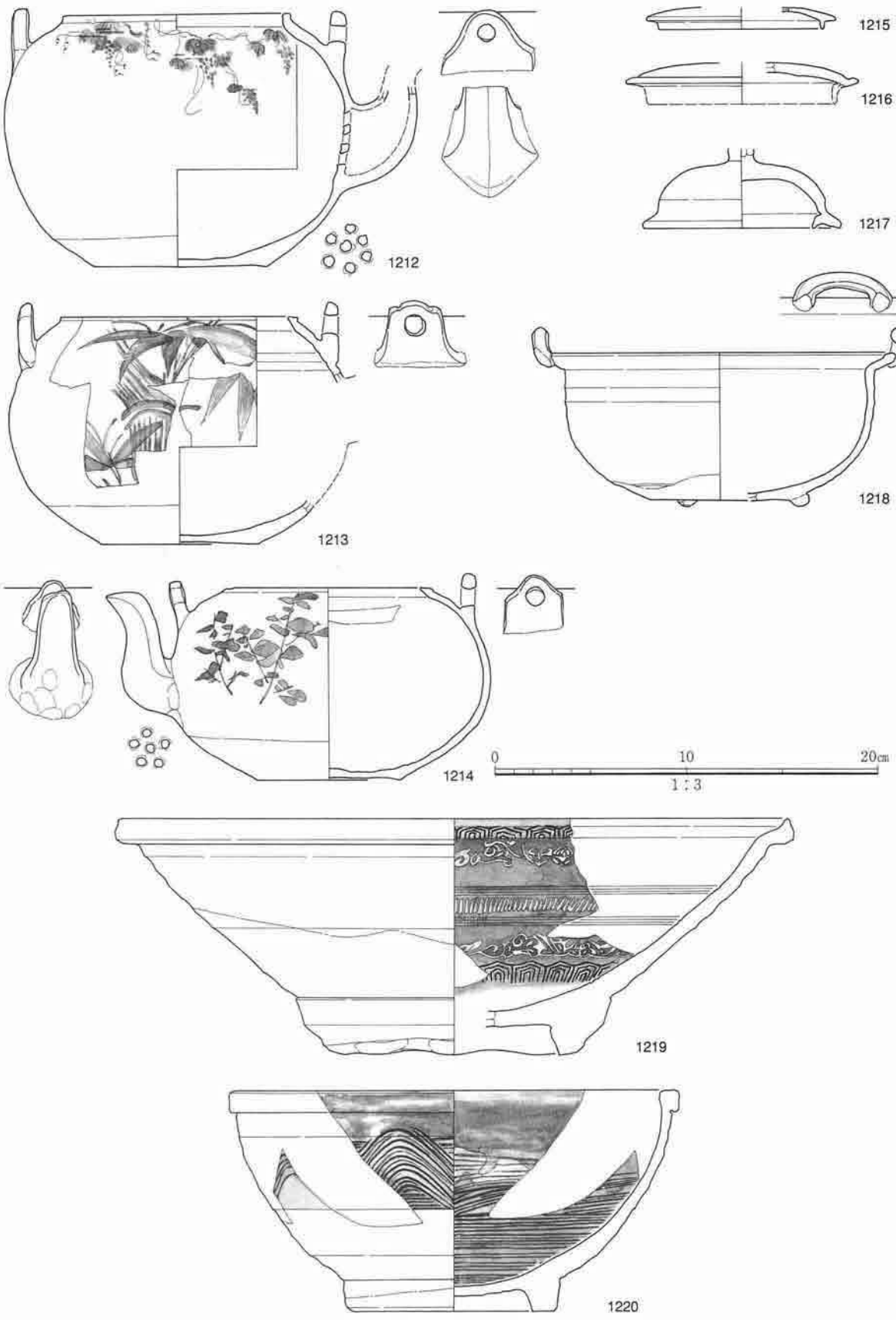


Fig.129　SK798出土陶磁器・土器－4

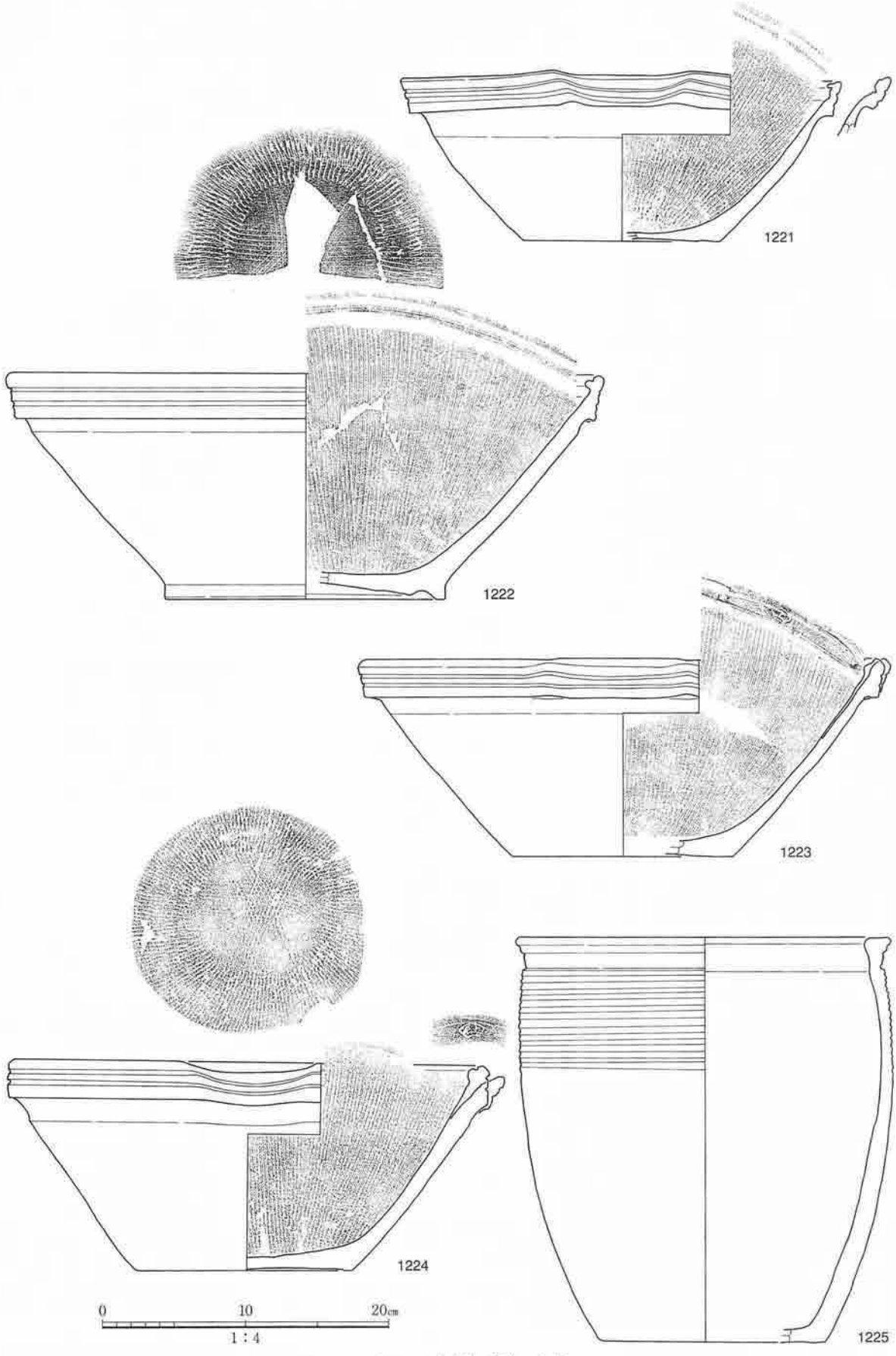


Fig.130　SK798出土陶磁器・土器－5

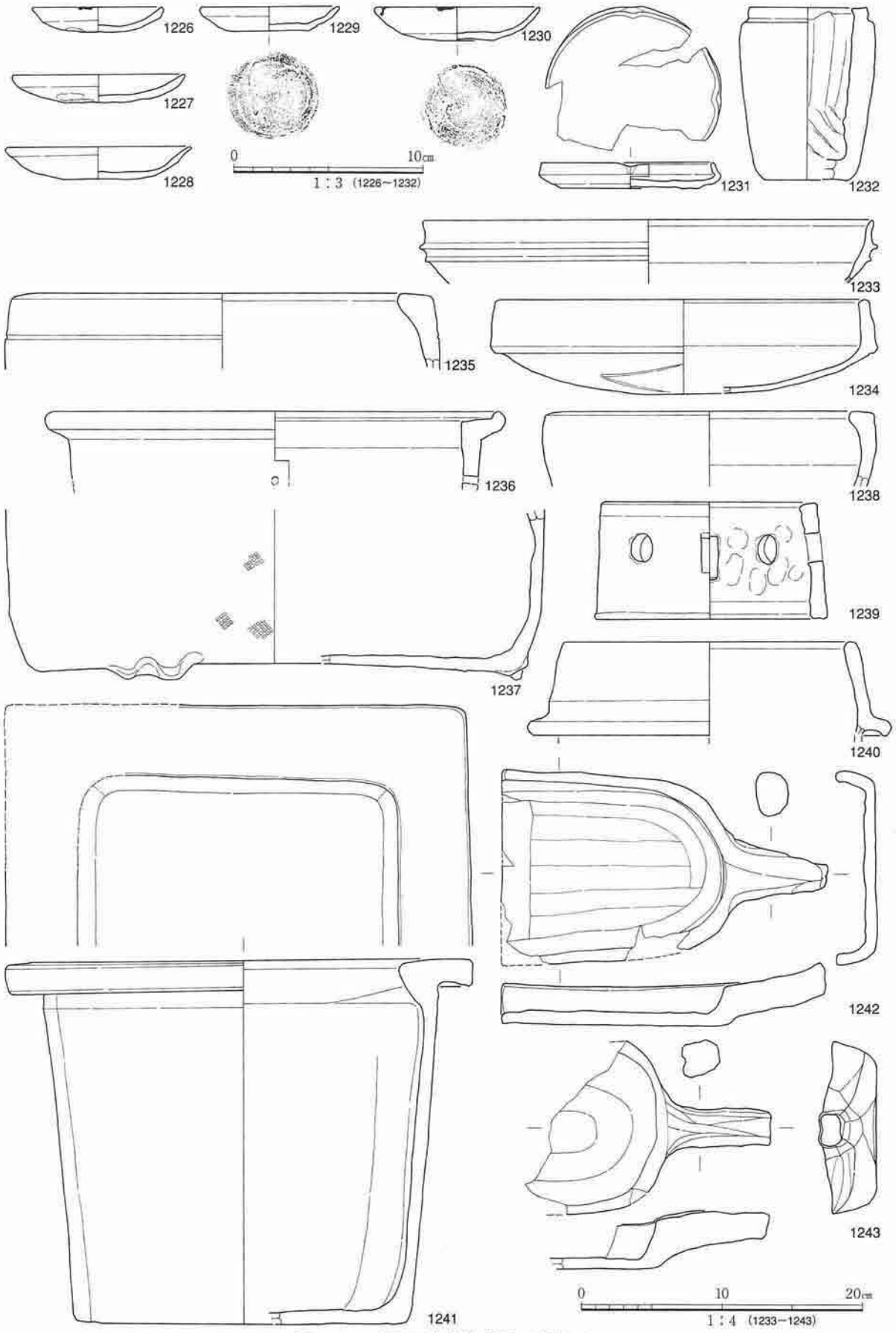


Fig.131　SK798出土陶磁器・土器－6

肥前陶器には陶胎染付碗1190・皿1191・壺1192・三島手鉢1219・刷毛目鉢1220がある。碗には図化していないが刷毛目碗の細片も見られた。1190は体部外面に山水文が描かれている。1191の内面は打刷毛目である。1192は黒色の釉が掛けられ、片側に把手が付く。

瀬戸美濃焼は灰釉鉢1194がある。口縁部は輪花状である。底部内面の目跡は中心部の他にその周囲にも見られる。

京焼には碗1195～1205・土瓶1212～1214・同蓋1215・1216・鍋1218・蓋1217がある。これらの中には京都以外で生産されたものが含まれている可能性もあるが、これより後に現れてくるようなバラエティは見られず、きわめて少数であると考えられる。碗には体部が球形の丸碗1195・1197～1199と、それより口縁部径が大きくて器高の低い平碗1196・1204・1205、筒形碗1200・1202、体部下半に稜をもつ半筒形碗1201・1203がある。1195・1197・1201は文様がない。1198・1203は錆絵、1199・1200・1202は錆絵染付で文様が描かれている。1196・1204・1205は色絵で、赤色や緑色の文様を上絵付する。土瓶1212は錆絵染付で葡萄の実と蔦を描く。1213・1214は錆絵のみである。蓋1215・1216は透明釉が掛けられている。鍋1218は鉄釉が掛けられ、表面には光沢がある。壺あるいは水差の蓋と考えられる1217も同様の釉調である。

軟質施釉陶器には灯明具1208・同蓋1207・水差の蓋1206・灯明受皿1209・皿1210・1211がある。1206～1208は鉄釉が掛けられて暗褐色、1209～1211には透明釉が掛けられており、橙色を呈している。1207は底部に2方向の突起があり、1208から抜けにくい仕掛けがされている。中央には孔が開けられ、1208の突起に巻付けた灯芯の先を蓋をしたまま外に出せるようになっている。

堺擂鉢は1221・1223・1224は平底で、1222には高台がある。口縁部の形状や擂目から、すべて白神典之氏のⅠ型式[白神1992]に属する。1223には片口の内面に扇形の枠に「上」の字の刻印があり、1224には扇形の枠に右から「上長」の刻印がある。その他に備前焼の可能性のある焼締陶器として甕1225がある。

瓦質土器には火入1235～1237・1241がある。すべて火鉢として使用されたものであろう。1241は方形のものである。

土師器には皿1226～1231・焼塩壺1232・炮烙1233・1234・火入1238・羽釜1240・十能1242・1243の他に、透し孔をもつ円筒形の製品1239がある。皿は1226～1228は手づくねで白色系の色調を呈する。1229・1230は回転ナデ調整で底部外面に糸切り痕が残る。1231は口縁部が輪花をなし、底部外面は手持ちヘラケズリである。1229～1231は赤褐色系である。炮烙は1233が貼付け突帯をもつ

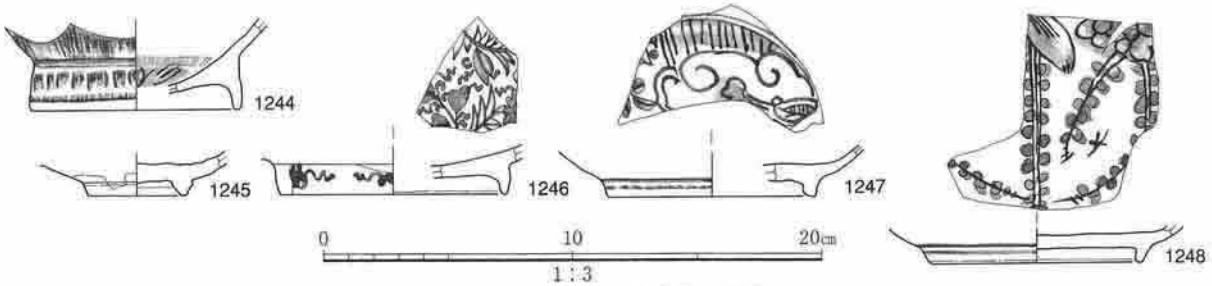


Fig.132　SK801出土陶磁器・土器－1

F類で、1234はD類である。1239の透し孔は長方形が2方向、円形が6方向に開けられている。火鉢の中に据えられて五徳の役割を果たしたものかもしれない。1240の羽釜の体部は他の遺構の類例から半球形である。

上記の陶磁器・土器は先述したSK802よりも後出的な要素があり、積山編年では9から10にかけての段階に当ると考えられる。暦年代としては18世紀前葉～中葉である。

SK801(Fig.132～144、図版80～84)

この土壙からは今回の調査でもっとも多くの遺物が出土した。特に陶磁器・土器は質・量とも豊富で、当時の器種構成など様相の特徴を知る上で良好な資料である。中国製磁器と国産の陶磁器・土器がある。

中国製磁器は底部の回転ケズリの特徴から識別した。青花碗1244・1246・皿1247・1248・2071および白磁皿1245がある。碗1244・1246はこの時期以後に肥前磁器で見られる広東碗に似た形態である。底部径がやや大きいので鉢とするべきかもしれない。

国産の陶磁器・土器には肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・関西系陶器(京焼系を含む)・備前焼や堺などの焼締陶器・軟質施釉陶器・瓦質土器・土師器がある。

肥前磁器は染付碗1250～1263・1265・1267～1271・1273・1274・1277～1285・1287～1293・1320～1343・1345・2067～2070・2074・2075・同蓋1296～1319・2072・2073・小碗1249・鉢1272・1275・1286・1294・1295・1346・皿1348～1360・変形皿1375・1376・1381・蕎麦猪口1361～1366・合子1368・同蓋1374・小杯1370・段重1371・1373・同蓋1372・仏飯器1377・1379・神酒徳利1384・瓶1385～1392・1394・1395、色絵碗1264・1266・2079・小杯1276・蓋2077・2078、白磁輪花碗1344・1380・紅皿1367・小杯1369・仏飯器1378・壺1383・1393、青磁香炉(灰落)1382がある。磁器としては他に三田焼青磁皿1347があるがやや時期が下るため混入であろう。

碗・小碗のうち、体部が半球形のものは1249～1271・1273・1274・2067～2070・2075・2079である。同様の体部をもつ鉢には1272・1275がある。底が広くて体部の立上がりが垂直に近いものは1276～1285・1287～1293で、同様の形態の鉢には1286・1294・1295がある。筒形碗には1320～1332・1334～1338があり、体部が開いた形態の碗には1339～1343・1345がある。1340は底部径が大きく、鉢とすべきか。1264は染付碗に赤色と金色の上絵付が施される。1269・1274・1286・1293・1295・1303・1305～1307・1311～1313・1315・1333・1336～1338・1341・1342・2072・2073は青磁染付である。これらの文様は樹木・草花・花唐草・蛸唐草・楼閣山水・竜・人物・文字・二重網目・幾何学文など多彩である。器形を越えて共通した文様を施すものが多い。

肥前陶器には碗1396～1399・1401・鉢1402・1403・1410・1411・甕1412がある。1396・1397・1399・1401は陶胎染付で、1398には透明釉が掛けられる。高台をやや高く削り出す。鉢は1402・1403は陶胎染付で、碗と同じ形態である。1410は刷毛目、1341は三島手である。1410には注口が付いている。

瀬戸美濃焼には碗1400・1404・灯明受皿1405・汁つぎ1406・鉢1407～1409・1413がある。

1400は打刷毛目のような文様の碗である。肥前のものに比べると体部が開き、器壁が厚い。1404



Fig.133　SK801出土陶磁器・土器－2

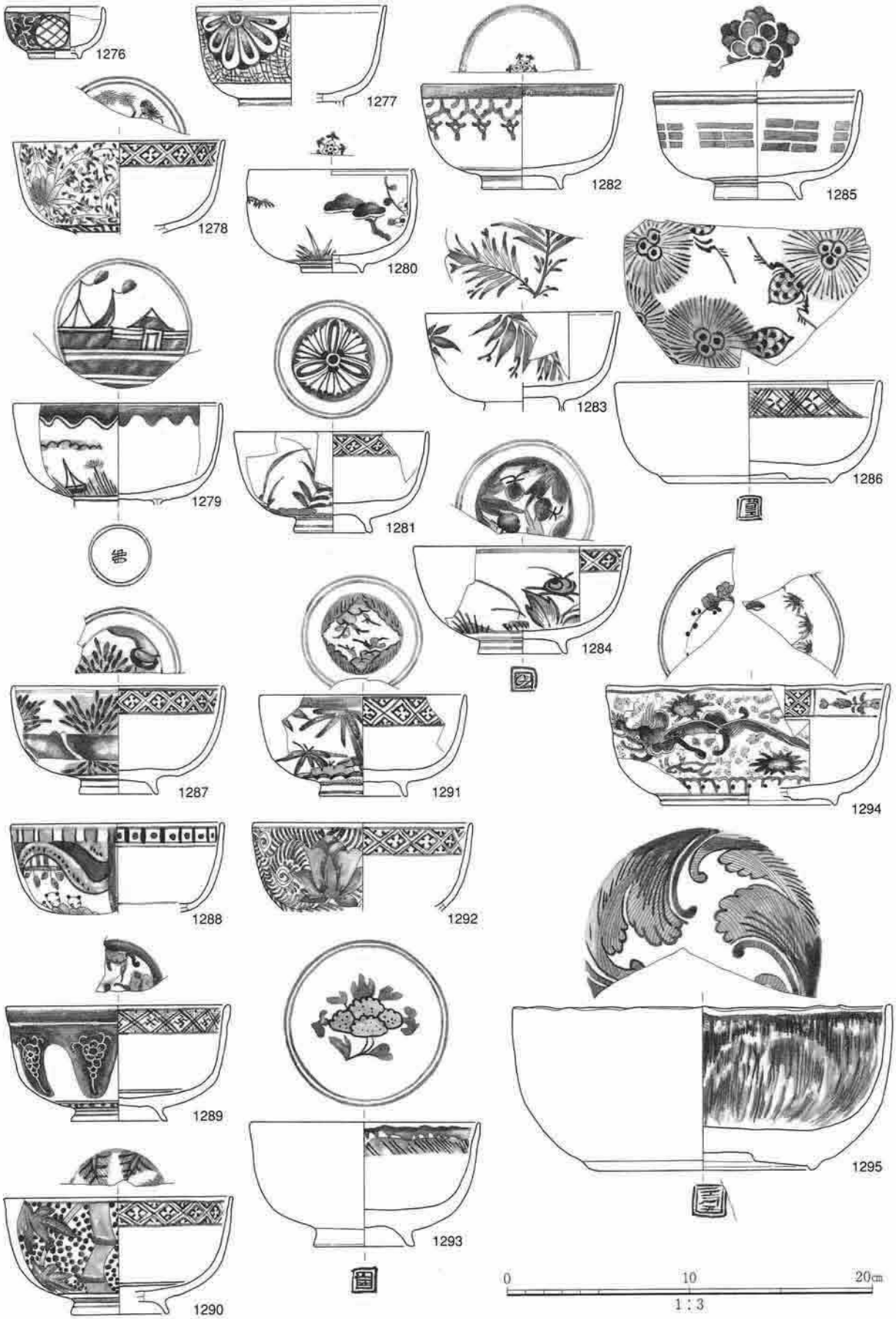


Fig.134　SK801出土陶磁器・土器－3

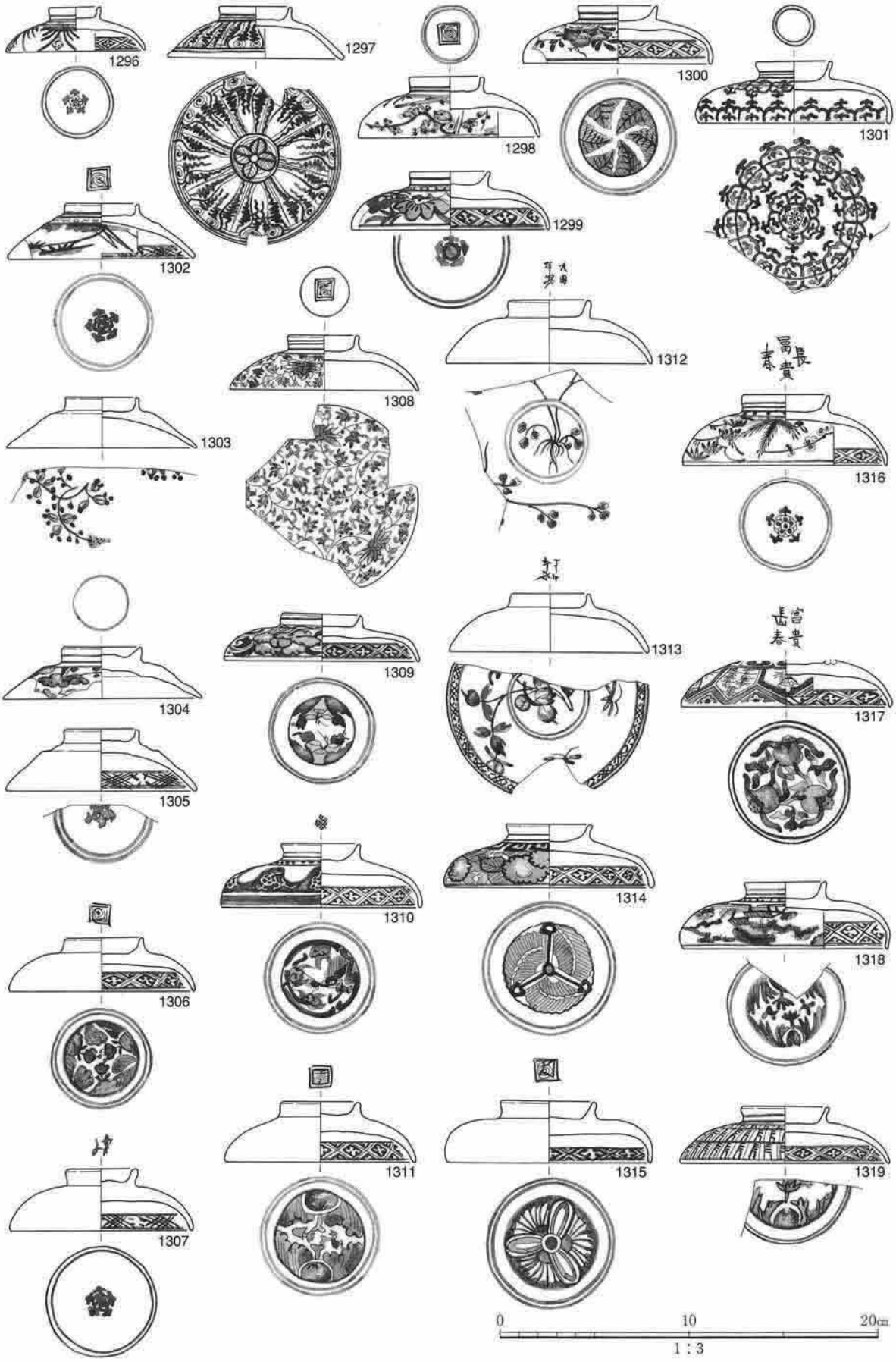


Fig.135　SK801出土陶磁器・土器－4



Fig.136　SK801出土陶磁器・土器－5

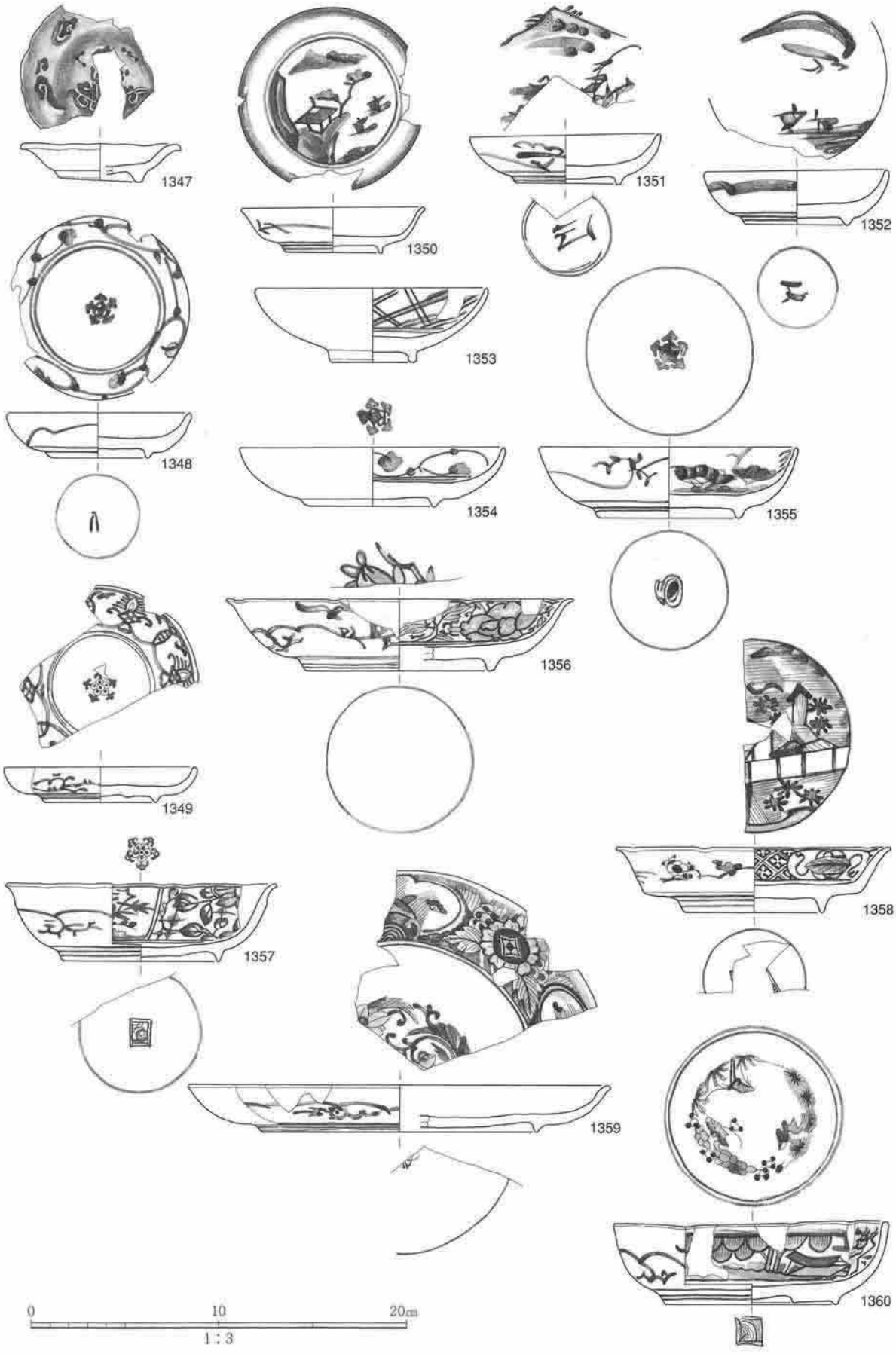


Fig.137　SK801出土陶磁器・土器－6



Fig.138　SK801出土陶磁器・土器－7

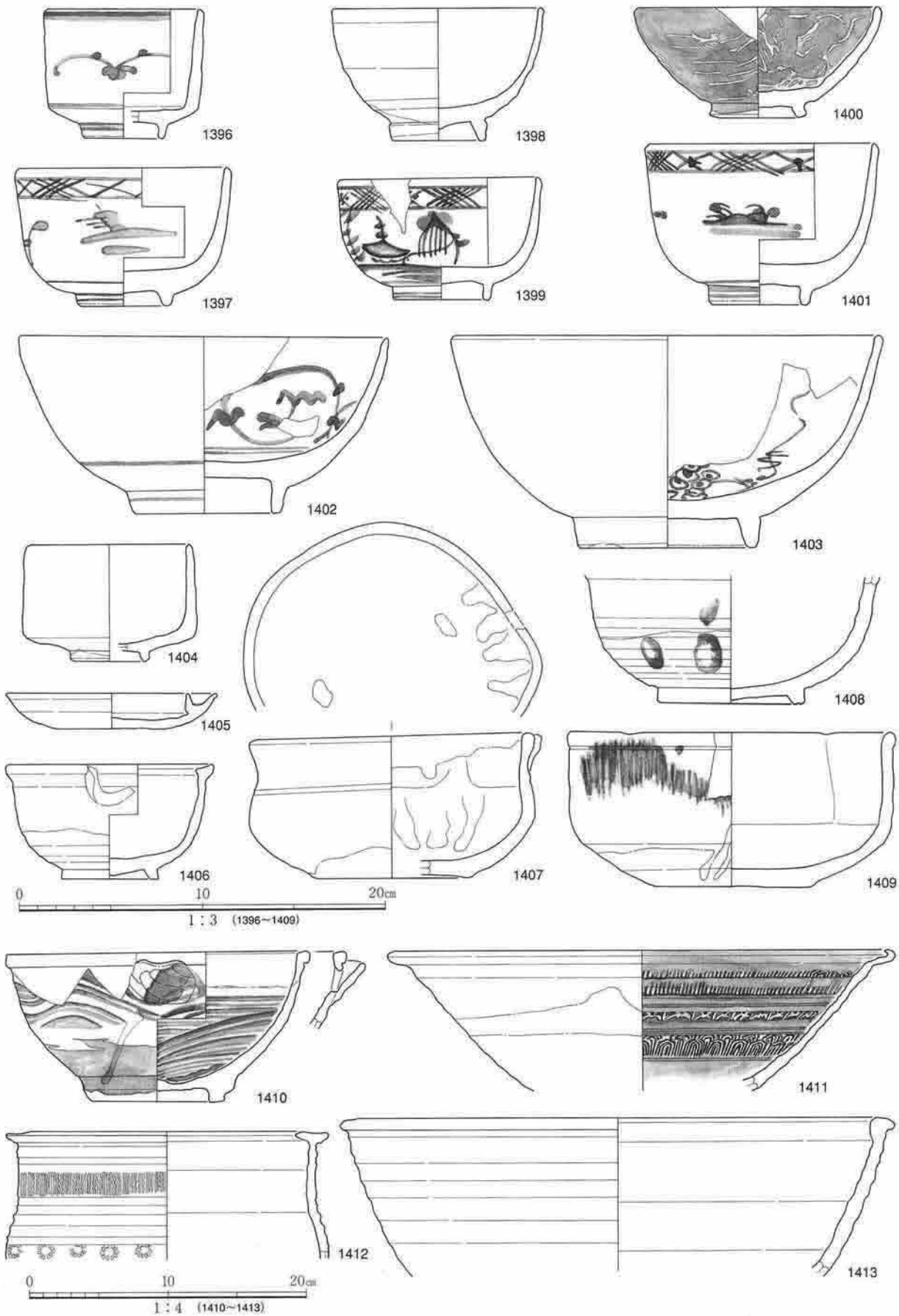


Fig.139 SK801出土陶磁器・土器－8

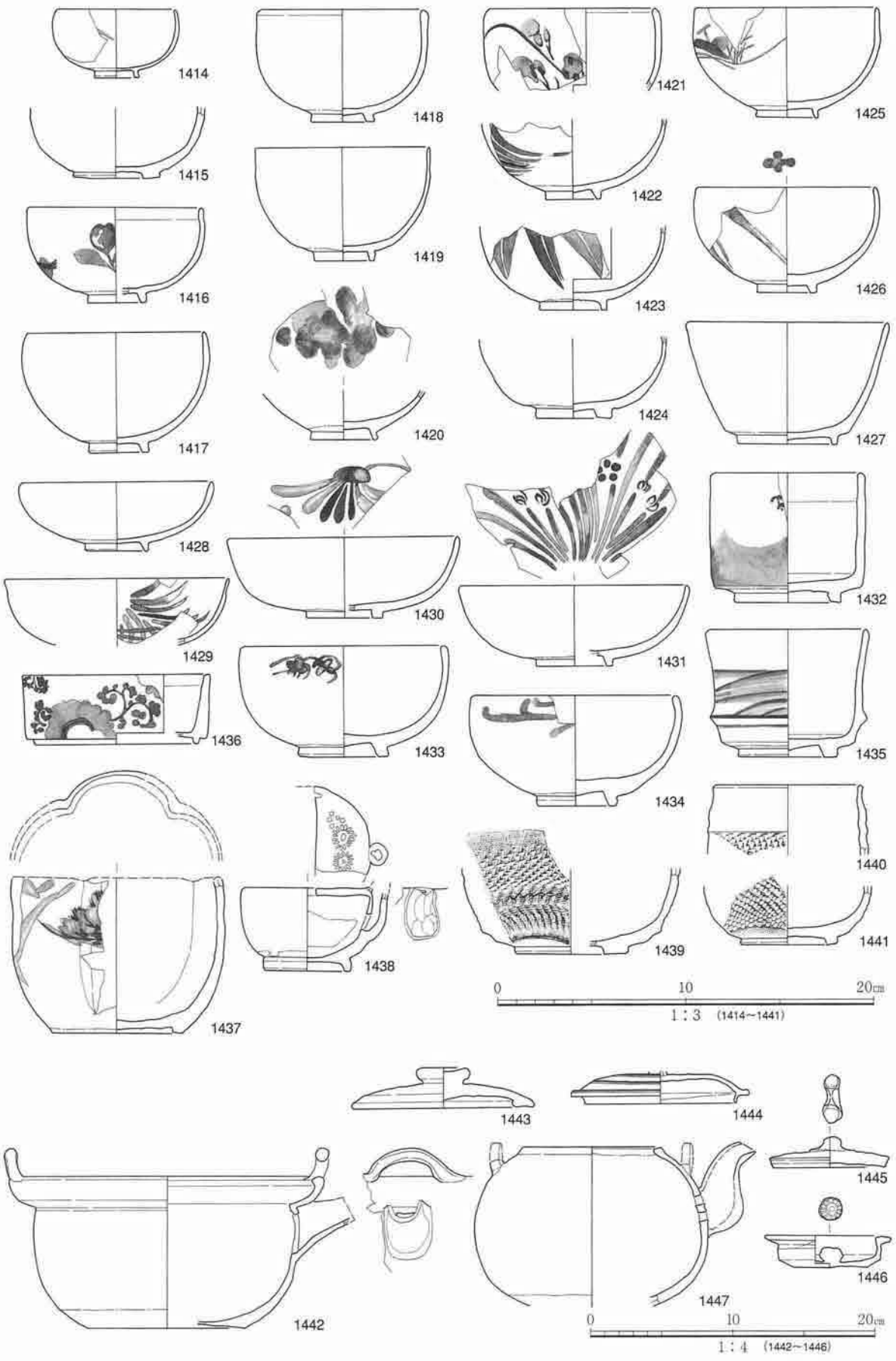


Fig.140 SK801出土陶磁器・土器－9

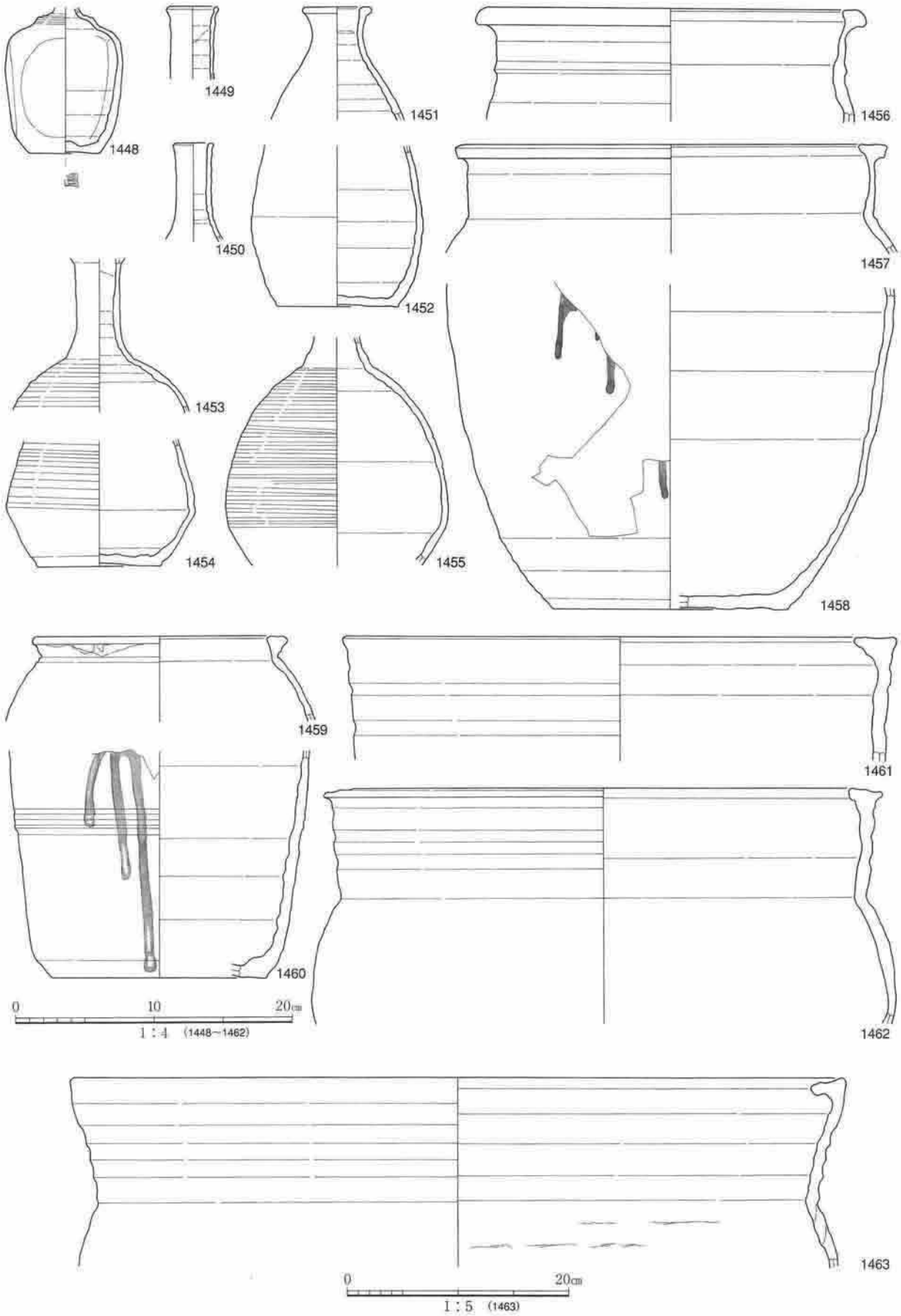


Fig.141 SK801出土陶磁器・土器－10

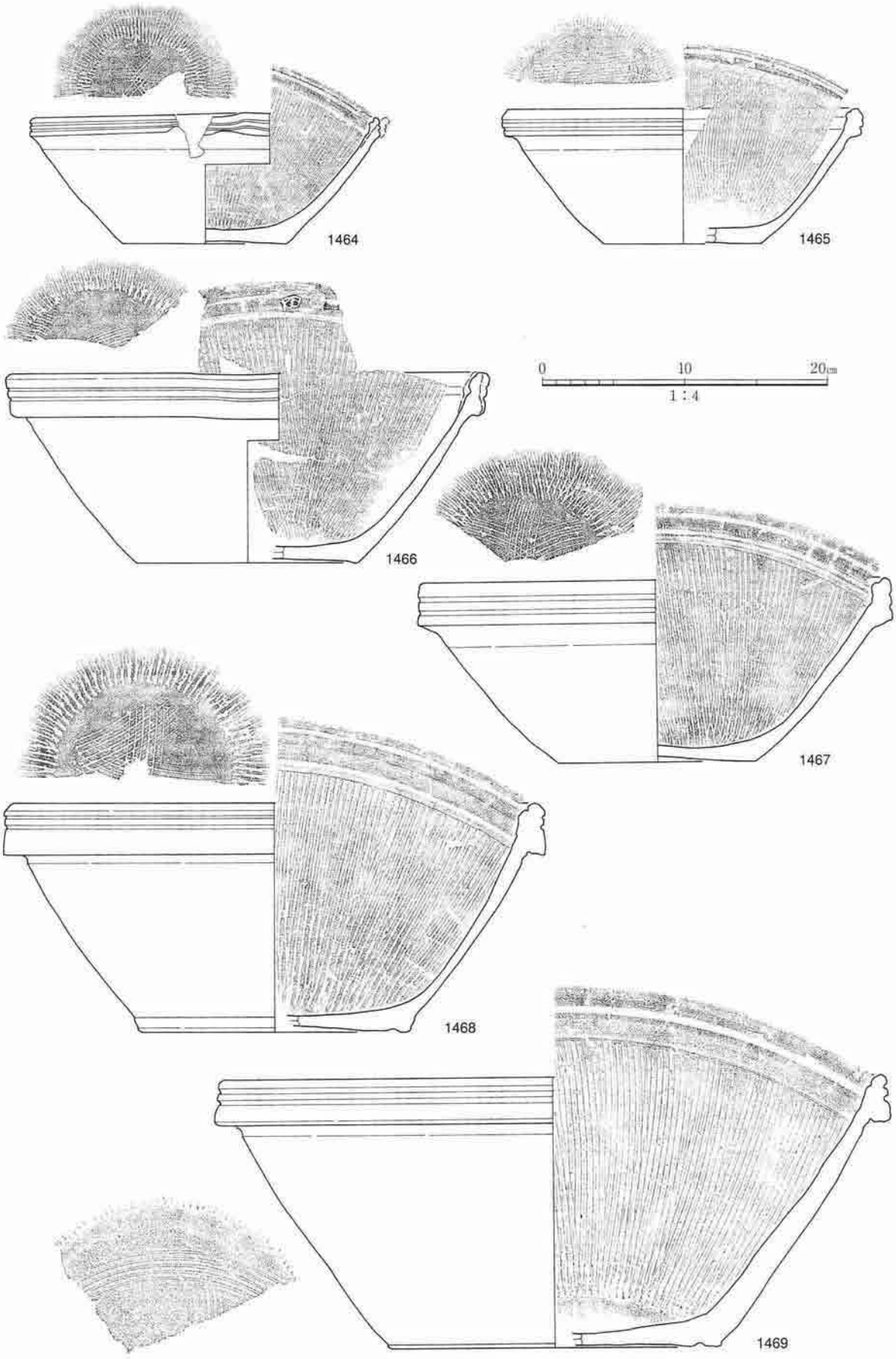


Fig.142　SK801出土陶磁器・土器－11

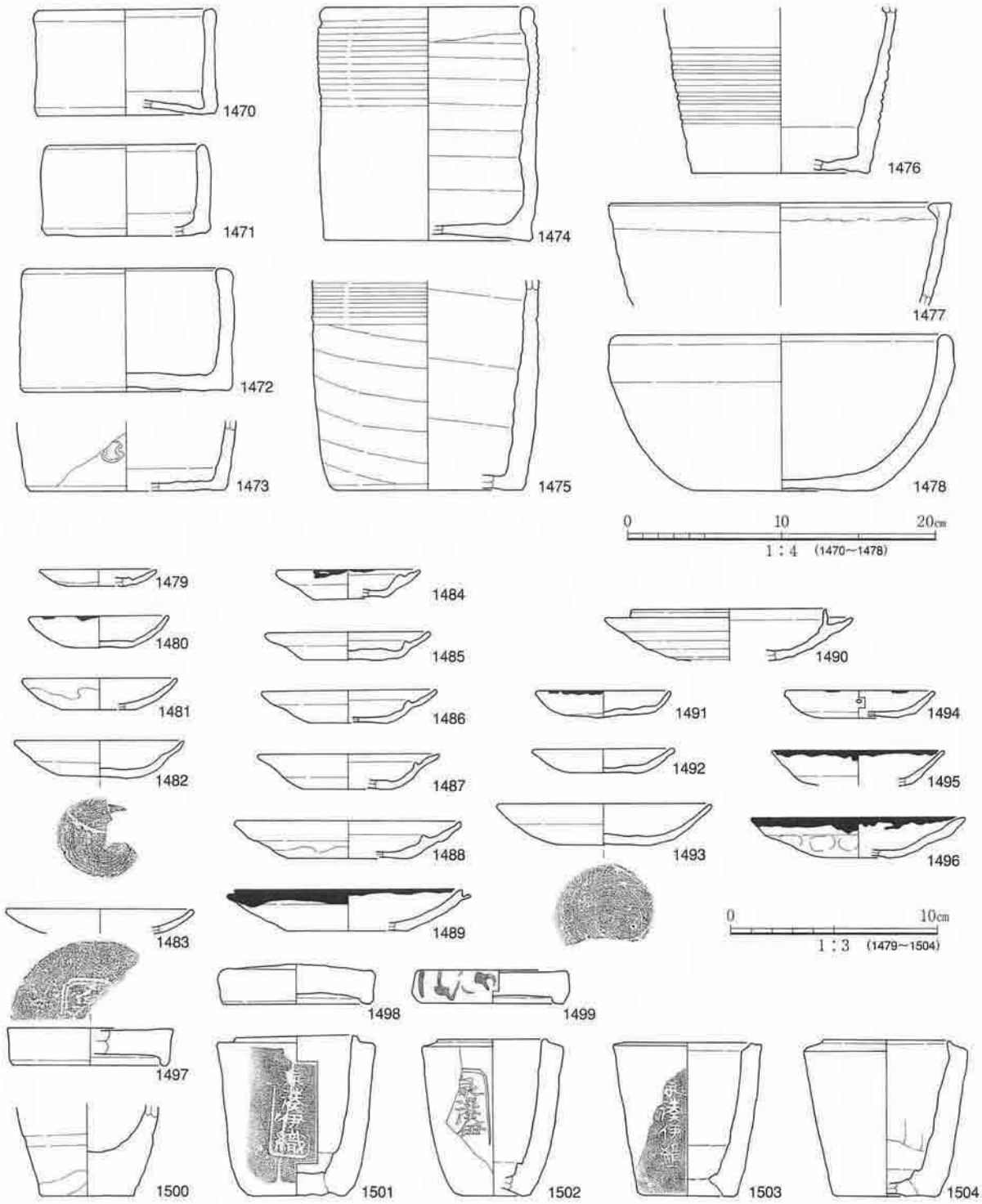


Fig.143　SK801出土陶磁器・土器－12

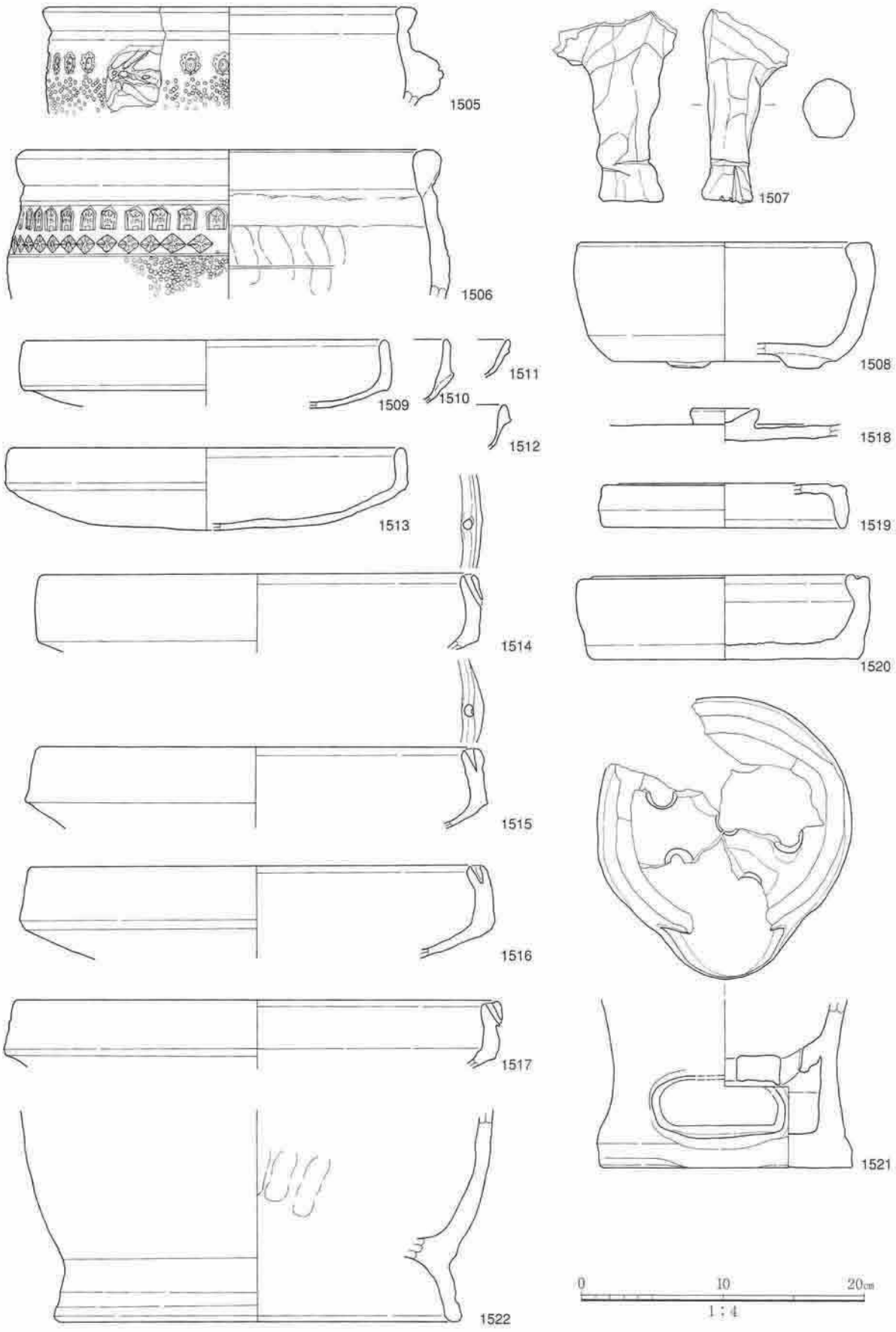


Fig.144　SK801出土陶磁器・土器－13

筒形碗である。1407の口縁部は歪んでおり片口のように見える。1409の口縁部は輪花状である。1405には鉄釉が薄く掛けられており、他はすべて灰釉である。

関西系陶器には碗1414～1435・1439～1441・段重1436・香炉(灰落)1437・水差1438・鍋1442・土瓶1447・蓋1443～1446・徳利1449～1455・甕1456～1463がある。

碗には先述したSK798と同様の特徴をもち京焼と分類してもよいものが多く含まれているが、やや異質なものとして1427・1432～1435・1439～1441・2080がある。前者の京焼系のものについては、形態は丸碗1414～1426と平碗1428～1431に分けられる。文様の施されていないもの1415・1417～1419・1424、錆絵染付のもの1425、上絵付による色絵1414・1416・1420・1422・1423・1426・1429～1431がある。土瓶の注口には図化していないが屈曲せずまっすぐに伸びる後出的なものも含まれている。鍋・土瓶・蓋・徳利・甕の釉は1444を除いて鉄釉である。光沢をもつものもある。1444は透明釉で、錆絵が同心円状に施される。つまみは欠損している。徳利・甕は丹波焼あるいは信楽焼の製品と考えられるが、特定しづらい。

堺擂鉢1464～1469のうち、1464～1467は平底で、1468・1469は高台を伴う。1464・1466・1467は口縁端部が古い特徴をもち、白神編年のⅠ型式に属している。1466の片口には扇形の枠内に山形とその下に「さ」の字を表した刻印がある。1465・1468・1469は口縁部の下端が突出しており、Ⅱ型式に当る。

その他に産地の特定しにくい焼締陶器がある。壺1448・建水あるいは鉢1470～1477・鉢1478・灯明受皿1490がある。1448は精良な胎土で、焼成も硬質である。備前焼の可能性が高い。1470～1475のうち、1470～1473は器高が低く、1474・1475は高い。1476・1477はやや体部が開いた形態である。底部外面や口縁端部には重ね焼の痕跡が見られ、1473の体部には分銅形、また1474の底部には「○」の刻印がある。これらも備前焼と考えられる。

軟質施釉陶器には皿1479～1483・灯明受皿1484～1489・鍋2083・把手2081・十能2082がある。すべて透明釉が掛けられ、橙色を呈する。皿・灯明受皿の底部外面には糸切り痕が残る。2081は2083に伴うものか。

瓦質土器には火入1505～1507がある。1507は牛の脚の形をした脚部である。これらの他に図化していないがSK798の1241と同形態の方形の火入がある。

土師器には皿1491～1496・焼塩壺1500～1504・同蓋1497～1499・火入1508・同蓋1518・1519・炮烙1509～1517・瓦灯1520・七輪1521・焜炉1522がある。

皿は1496を除いて底部外面糸切りである。焼塩壺は1500のみ製作技法が異なっている。1501～1503の体部外面には「泉湊伊織」の刻印があり、蓋にも1497には「泉」の刻印がある。1499には側面と内面に墨書がある。内面の字は判読できなかった。炮烙は1509・1513～1517がD類で、1514～1517は口縁部に粘土を足して把手をつくる。貫通する孔をもつもの1514・1517と貫通しない1515・1516がある。1511・1512はG類で、1510はやや特異なタイプである。図化していないがF類も出土している。1520は瓦質処理されていないが瓦灯と同じ形態で、底部内面中央に皿部がはずれた痕跡がある。

以上の陶磁器・土器にはやや古い要素を残すものがあり、また一方で染付碗1263や先述した1347

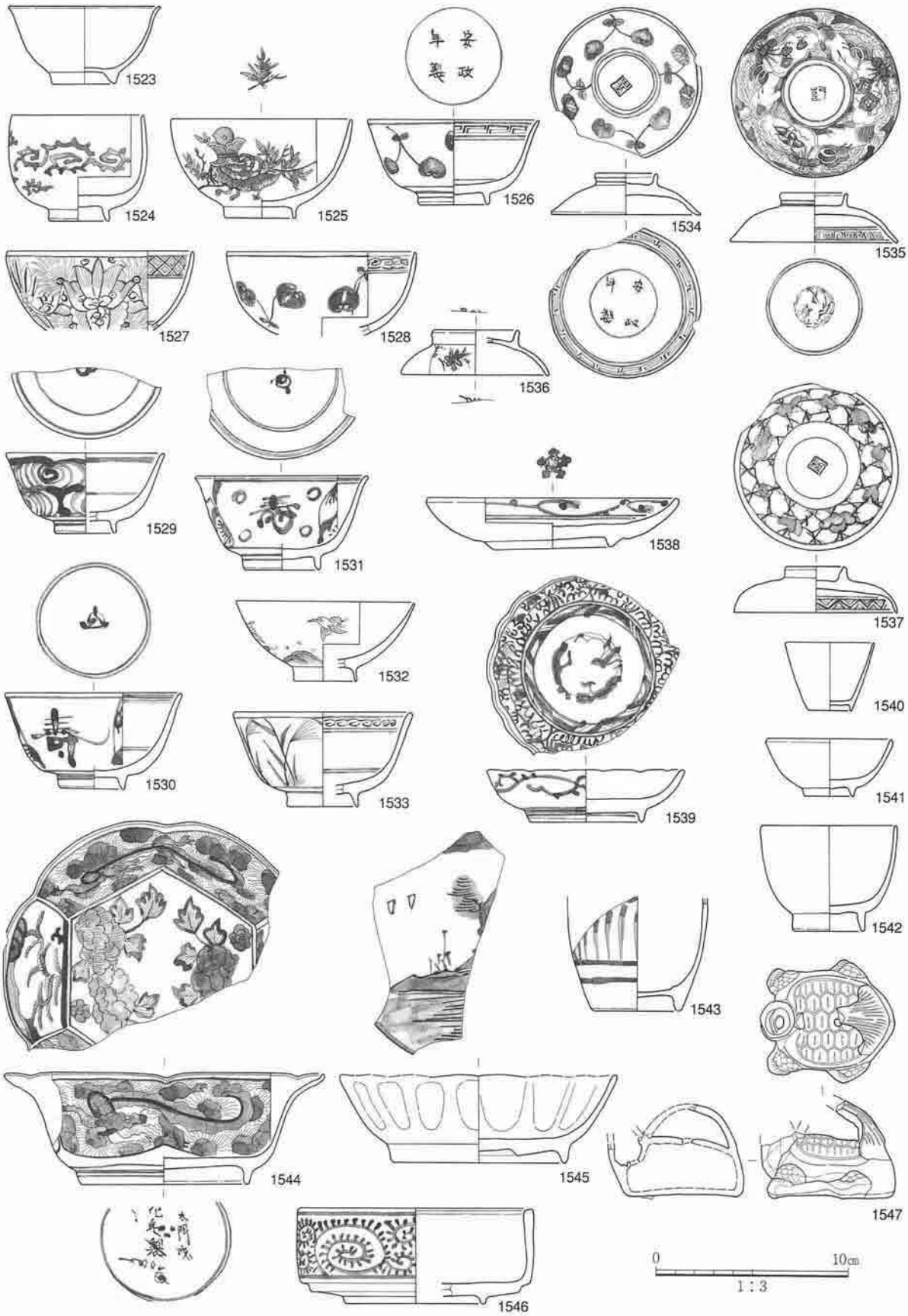


Fig.145　SK809出土陶磁器・土器－Ⅰ

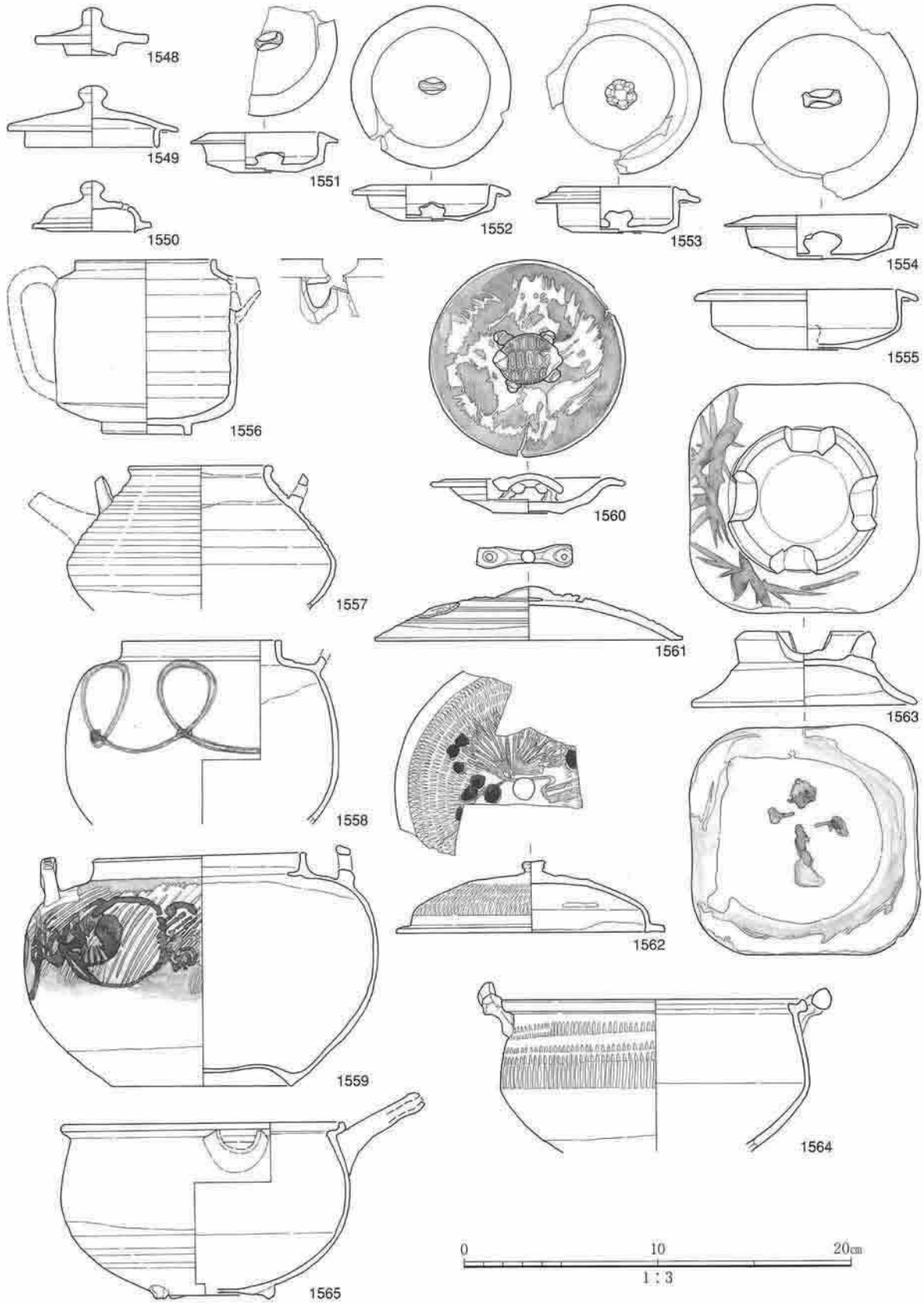


Fig.146　SK809出土陶磁器・土器－2

のように後出すると考えられるものが混入した状況もわずかながら見られた。ただし、その他の多量の陶磁器・土器はまとまった様相をもち、積山編年による12の段階に当る。18世紀後葉の暦年代が与えられる。肥前磁器は器形・文様ともバラエティを増し、肥前陶器に替わって関西系陶器が多くなるという器種構成の変化が見られる。この土壙からは共伴して多量の土製玩具や貝などの食物残滓が出土している。当時の生活を復元する良好な一括遺物である。

SK809(Fig.145～147、図版85)

中国製磁器として徳化窯の製品と考えられる白磁小碗1523がある他は、すべて国産の陶磁器・土器である。磁器には肥前磁器・瀬戸美濃焼があり、陶器・土器には肥前陶器・瀬戸美濃焼・関西系陶器・堺などの焼締陶器・土師器がある。

中国製の白磁小碗1523は型による成形が特徴的である。

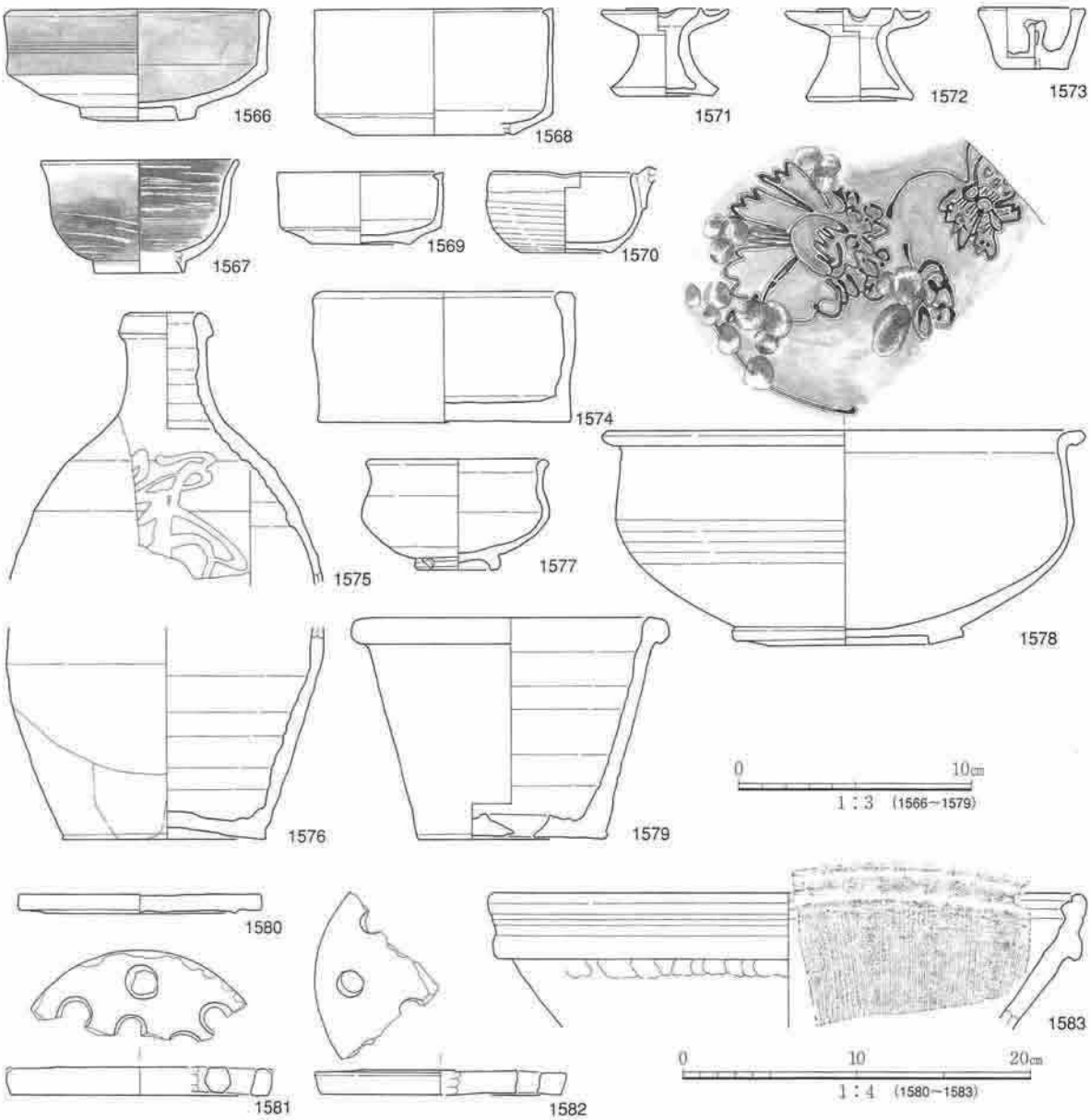


Fig.147　SK809出土陶磁器・土器－3

肥前磁器には染付碗1525～1527・同蓋1534～1536・皿1538・1539・輪花鉢1544・1545・段重1546・徳利1543、白磁小杯1540・小碗1541・水滴1547がある。染付の文様には繊細なものが多い。碗1526と蓋1534の内面には「安政年製」の字款があり、組合うものである。これらの遺物の年代を決定する手がかりとなる。

瀬戸美濃焼染付碗には1524・1528・1529～1533がある。端反りの碗は概して太い筆使いで絵付けがされている。碗蓋には1537がある。他には白磁小碗1542がある。

施釉陶器のうち、肥前陶器は碗1567・蓋1549・1550の３点で、1549・1550には緑釉が掛けられている。瀬戸美濃焼は把手付小碗1570の１点のみである。

他はすべて関西系陶器で、碗1566・鉢1568・1569・1577・1578・徳利1575・1576・台付灯明受皿1571・1572・水差1556・土瓶1557～1559・鍋1564・行平1565・蓋1548・1551～1555・1560～1563がある。多くは透明釉・鉄釉・灰釉が掛けられ、白泥で装飾を施したものもある。蓋は土瓶・鍋・急須・水差などに伴うもので、土瓶1559と蓋1560は組合うものである。土瓶の注口はまっすぐ斜め上方に伸びる。京都・信楽・丹波の諸窯で生産されたものがほとんどであると考えられるが、特徴から生産地が特定できるものもある。たとえば1561は万古焼系の蓋で、外面は鉄釉と白泥が混ざり合ったような釉調である。

軟質施釉陶器には秉燭1573がある。やや深めの器形の底部に灯芯を立てる突起を付ける。鉄釉が掛けられている。

焼締陶器には堺擂鉢1583の他に、産地の特定しにくいものとして建水あるいは鉢1574・植木鉢1579がある。SK801と同様に備前焼であろうか。1579の底部は焼成前に穿孔されている。

土師器には火入蓋1580・さな（七輪の部品）1581・1582がある。

以上の陶磁器・土器は積山編年によれば14の段階に当る。以下で報告するSK790と同じ様相をもち、19世紀中葉の暦年代が与えられる。これは染付碗にある「安政年製」の字款にも合致する。

SK790（Fig.148～156、図版86～89）

中国製青花碗1584・皿1585の２点を除いて、すべて国産の陶磁器・土器である。磁器には肥前磁器・瀬戸美濃焼・関西系（三田焼・珉平焼）があり、陶器には肥前陶器・関西系陶器・瀬戸美濃焼・萩焼・軟質施釉陶器・備前焼・堺擂鉢・土師器がある。

まず磁器から述べていく。

肥前磁器には染付碗1592～1599・同蓋1613～1618・2084・小碗1586・1589～1591・小杯1587・鉢1600～1604・1608・1623・1624・1628・皿1620・1629～1633・段重1606・1609・蓋1625～1627・瓶1610・1611・神酒徳利1612・仏飯器1607、色絵合子1605・白磁輪花皿1622がある。1606と1627は口縁部径や文様から組合う可能性が高い。文様は草花・花唐草・蛸唐草・竜・楼閣山水・人物・文字・幾何学文などで、繊細な絵柄が多い。

瀬戸美濃焼染付磁器には碗1634～1643・1646～1650・1652・1653・1655～1658・1660～1662・1668・1672・同蓋1674～1677・1679・小碗1667・1669～1671・皿1680～1682・1686、色絵碗1644・1645・1651・1654・1659・同蓋1673・1678・小杯1663～1666、白磁碗1683・皿1684・

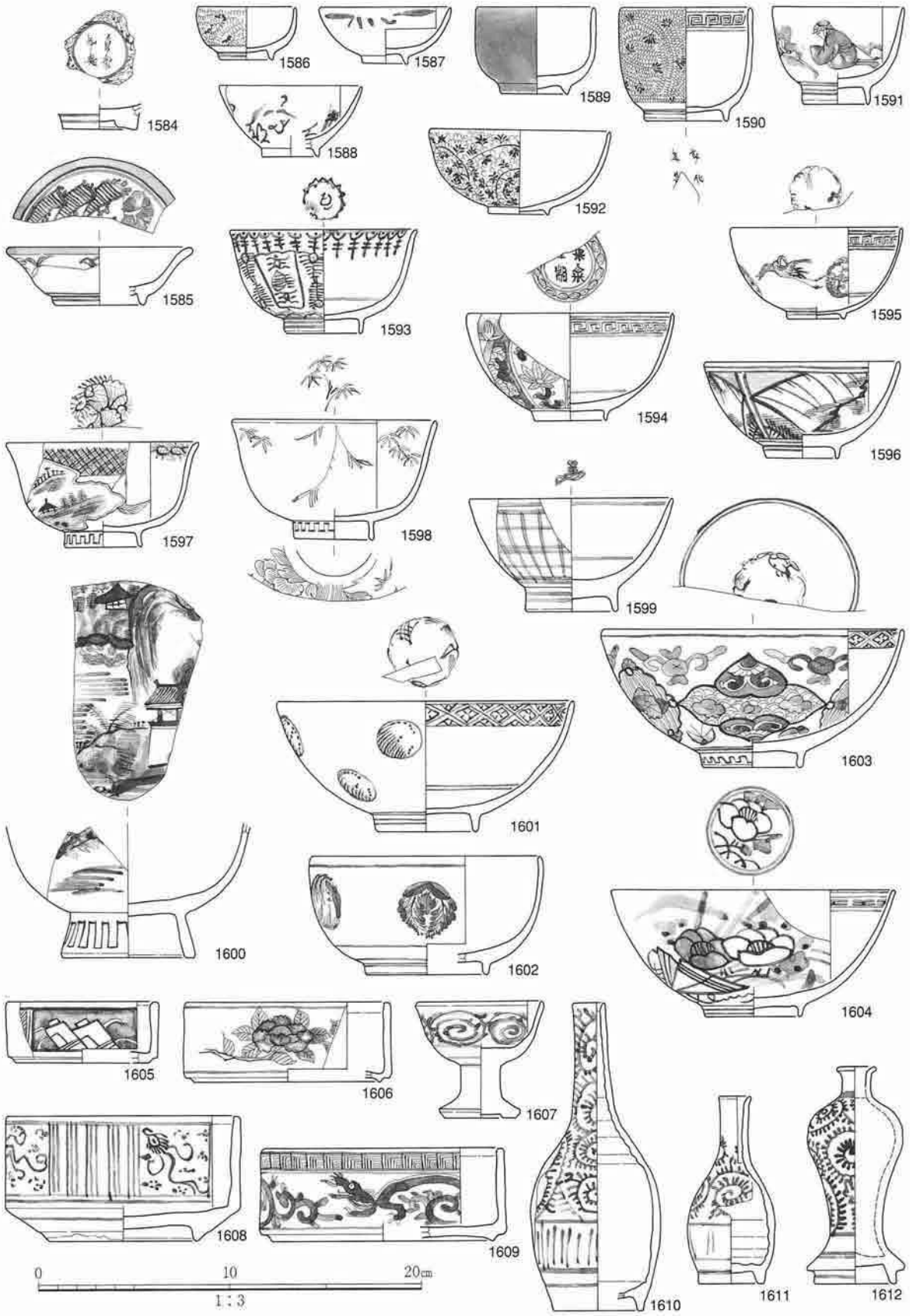


Fig.148　SK790出土陶磁器・土器－1



Fig.149　SK790出土陶磁器・土器－２

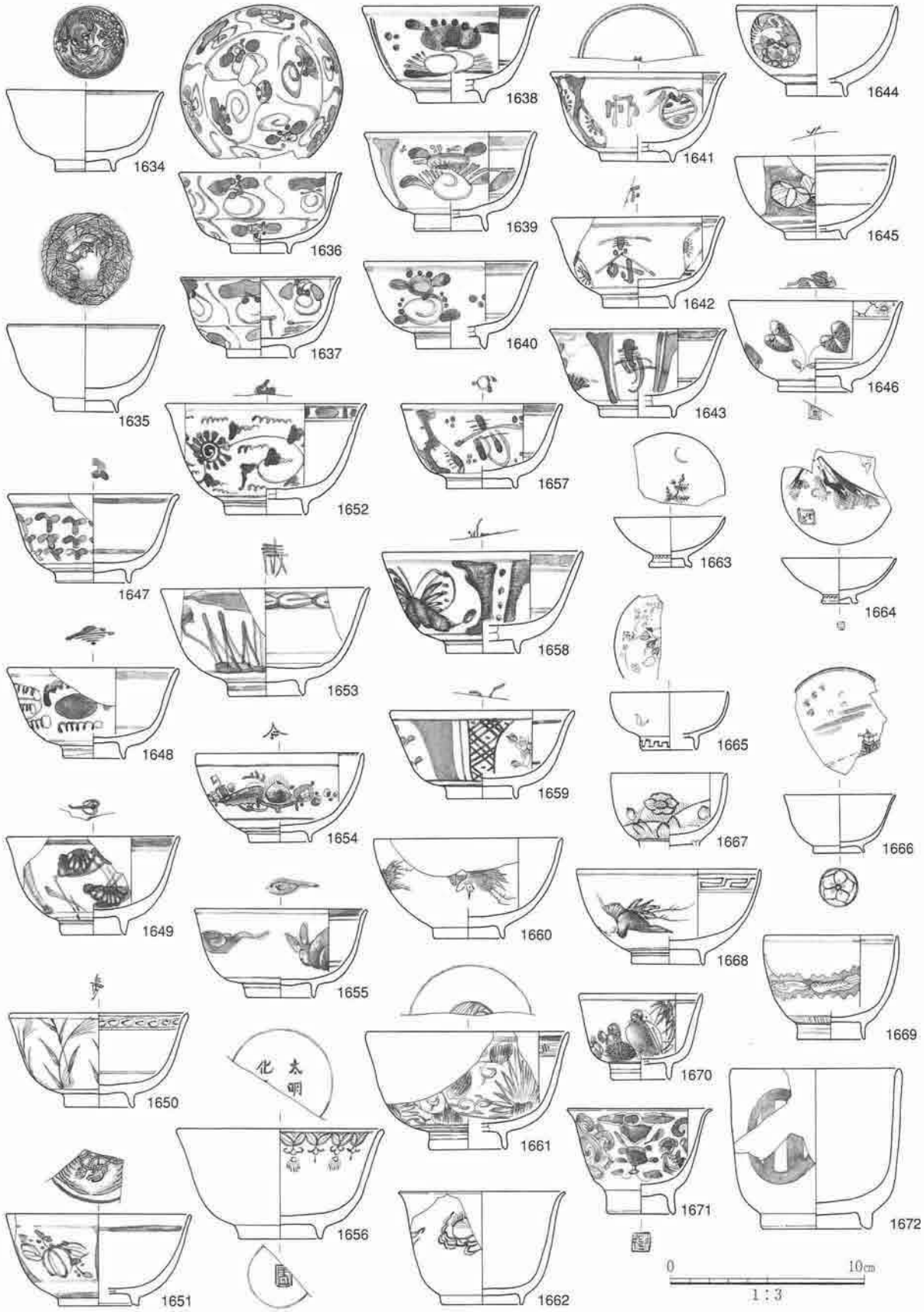


Fig.150　SK790出土陶磁器・土器－3

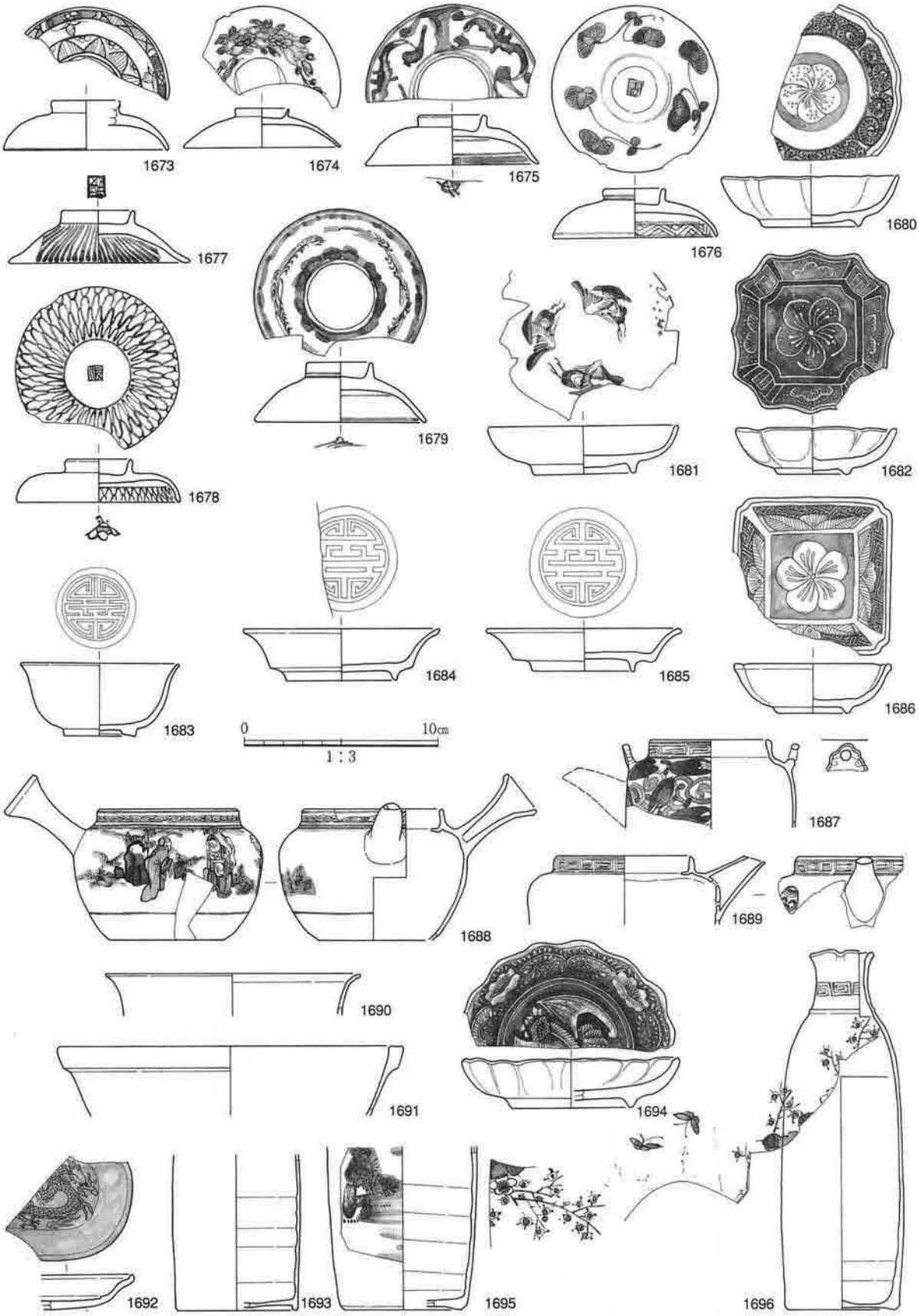


Fig.151　SK790出土陶磁器・土器－4

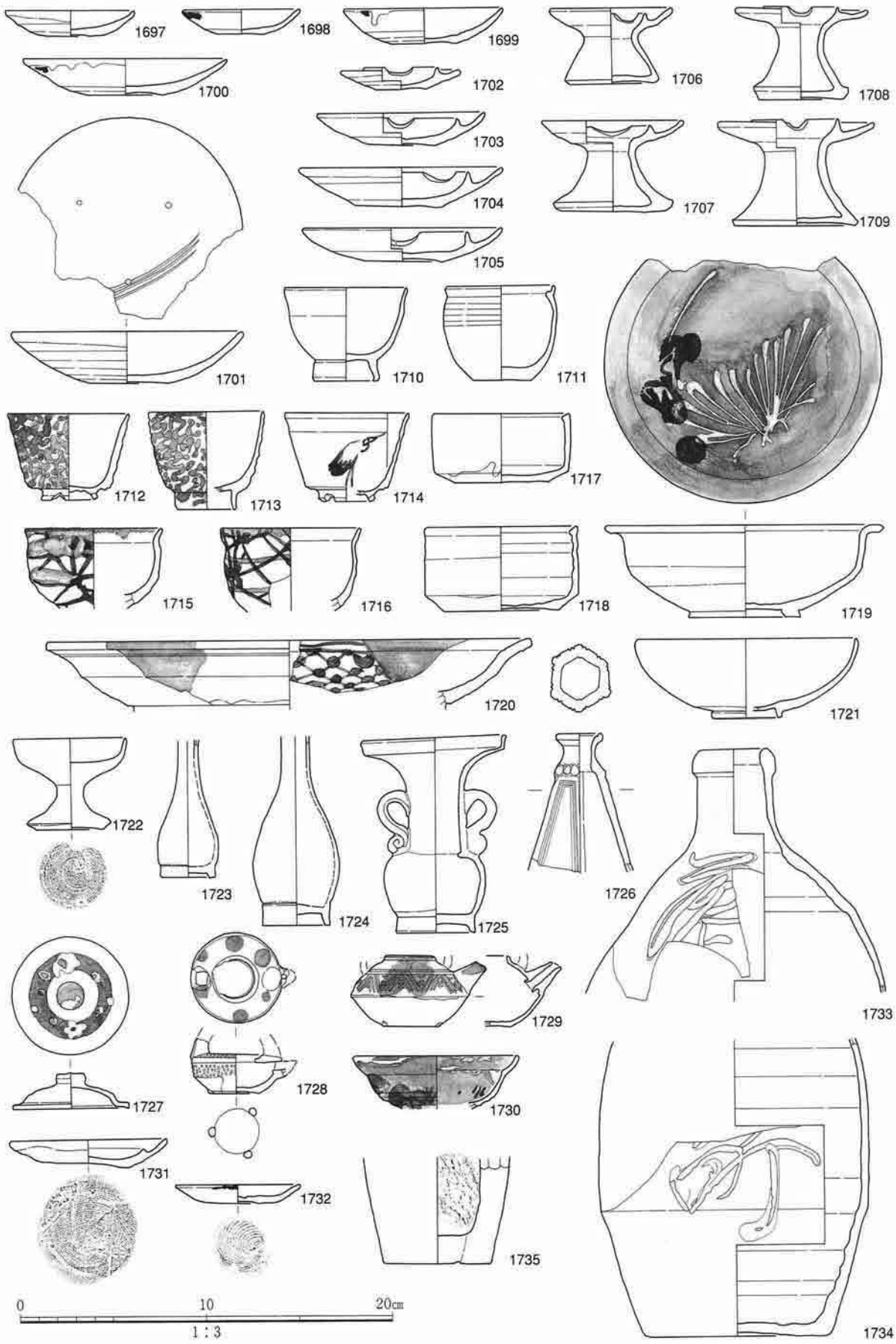


Fig.152　SK790出土陶磁器・土器－5

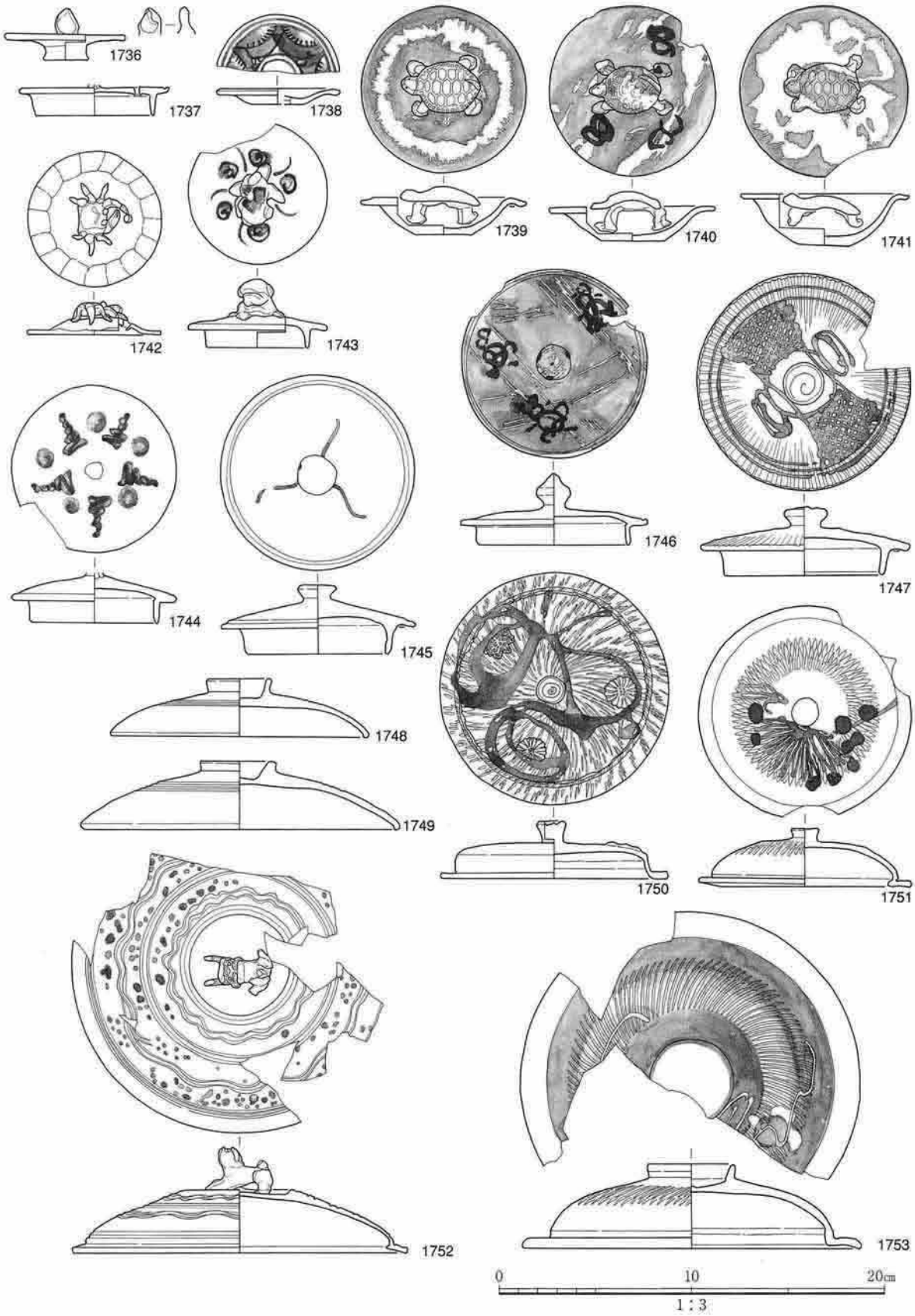


Fig.153　SK790出土陶磁器・土器－6

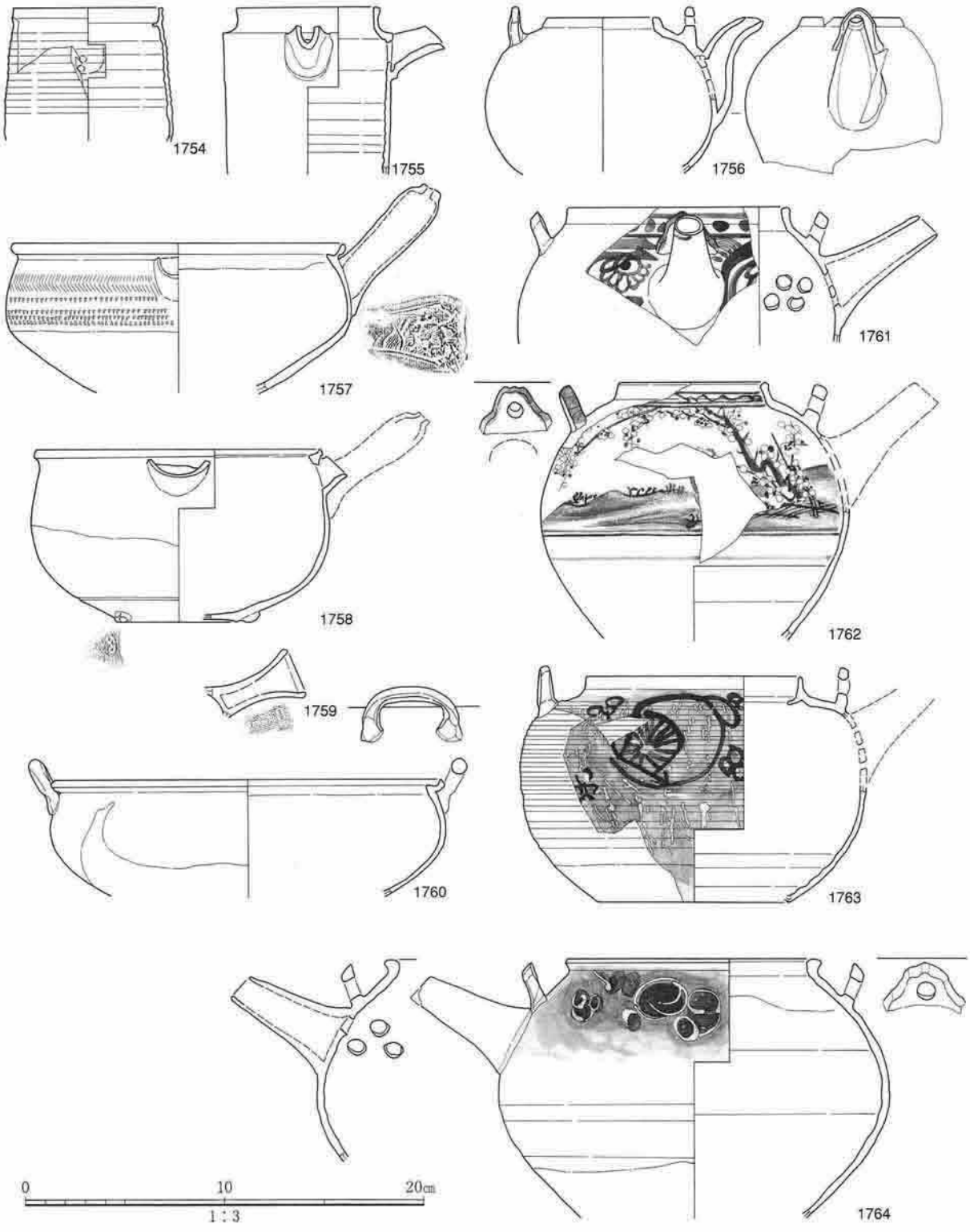


Fig.154　SK790出土陶磁器・土器－7

1685がある。1656は青磁染付である。

関西系の磁器には三田焼と珉平焼がある。三田焼の染付磁器には急須1687～1689・銚子1695・1696がある。器壁はきわめて薄い。これらの他に青磁皿1694がある。珉平焼は黄色の釉の鉢1690・1691・銚子1693と緑色の釉の皿1692がある。これらも器壁はきわめて薄くつくられている。

肥前陶器には仏飯器1722・小瓶1723・1724・仏花瓶1725がある。1722～1724にはSK809の1549・1550と同様の緑釉が掛けられている。1725は黒色の釉である。

瀬戸美濃焼には織部皿1720・鉢1765がある。1720は形態や釉調から豊臣期に属するものの混入ではないと思われる。

関西系陶器には皿1697～1701・灯明受皿1702～1705・台付灯明受皿1706～1709・小杯1710・

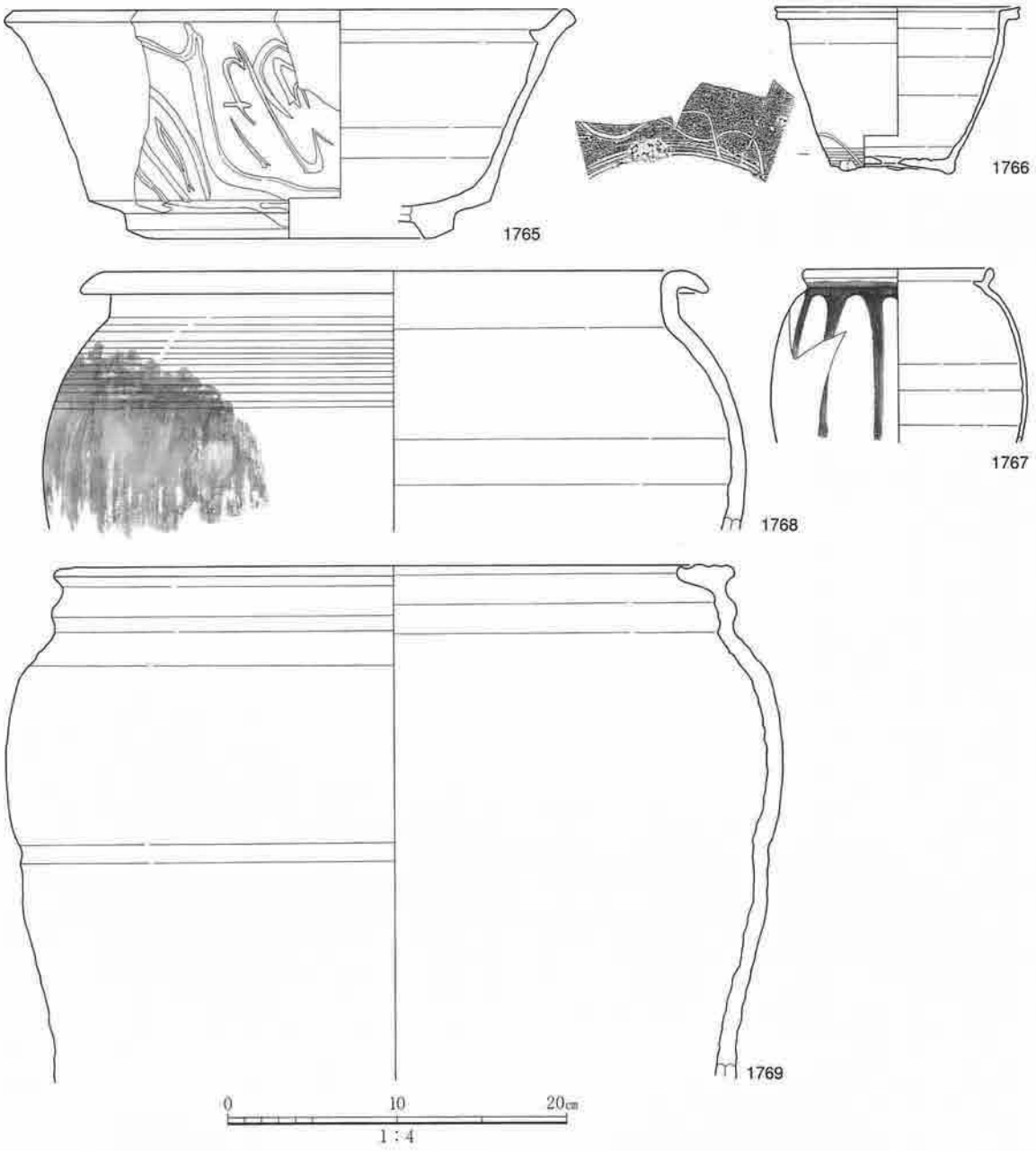


Fig.155　SK790出土陶磁器・土器－8

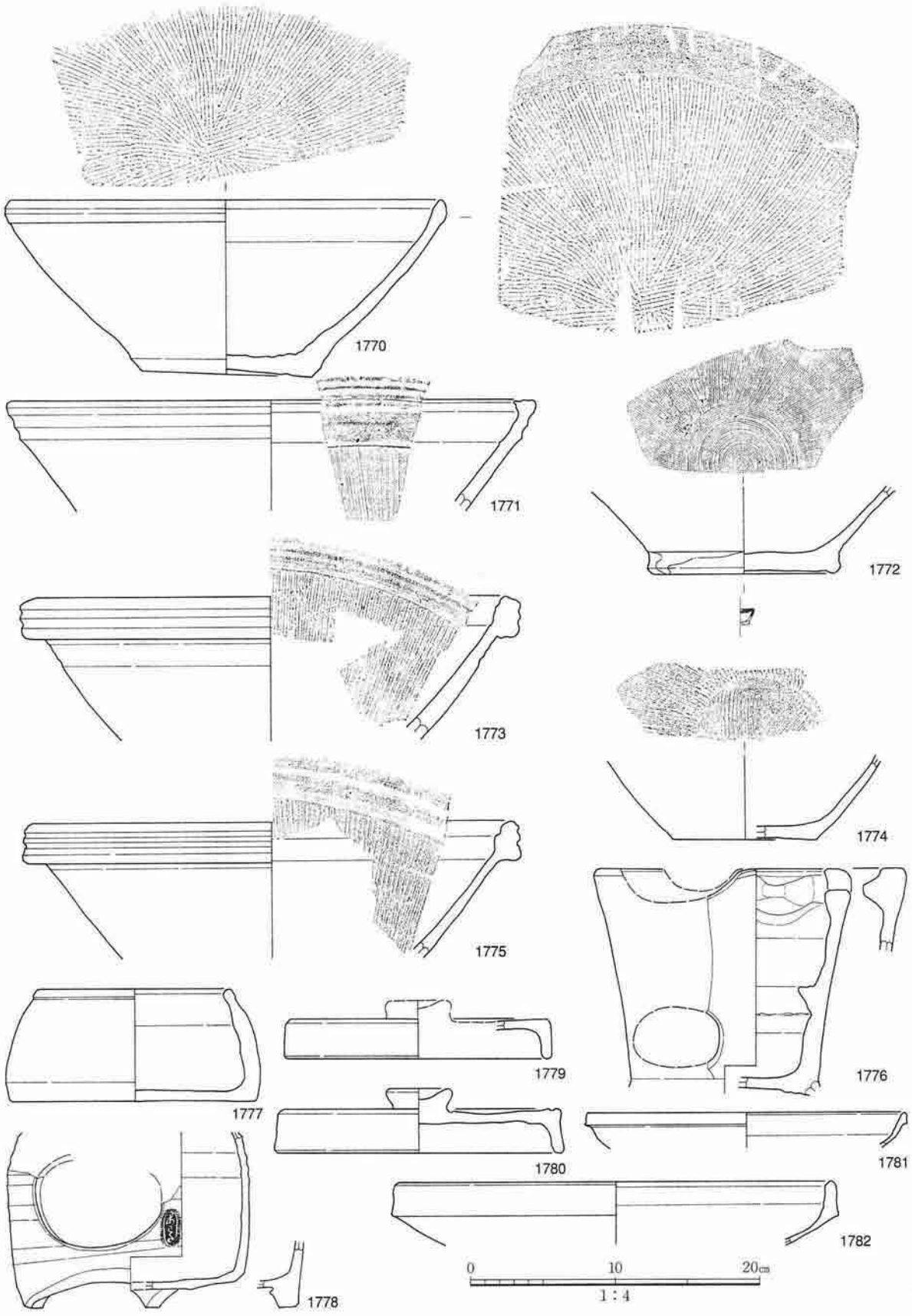


Fig.156　SK790出土陶磁器・土器－9

1712～1714・鉢1717～1719・徳利1733・1734・水差1755・土瓶1756・1761～1764・行平1757～1759・鍋1760・蓋1736～1753・甕1767～1769がある。小杯1712～1714はきわめてよく似た製品が滋賀県信楽町漆原C遺跡の陶器窯から出土している[鈴木1991]。窯道具の目を製作するための素焼の板状工具が共伴し、それには明治2年(1969)の紀年名がある。

萩焼はピラ掛けの小碗1715・1716である。

軟質施釉陶器には蓋1727・水注1728・1729・小鉢1730・皿1732・灯明受皿1731がある。すべて透明釉が掛けられて橙色を呈する。1727～1730は白泥による装飾が施されている。

1754は精良な胎土の水差である。備前焼と考えられる。器壁はきわめて薄い。

擂鉢には施釉されたもの1770～1772と、堺擂鉢1773～1775がある。施釉品は丹波焼と考えられる。堺擂鉢はいずれも白神編年のⅢ型式である。

瓦質土器には七輪1776がある。外面はていねいなヘラミガキ調整である。

土師器には焼塩壺1735・植木鉢1766・鉢1777・火入蓋1779・1780・七輪1778・炮烙1781・1782がある。皿は見られなかった。炮烙は1781がG類、1782がD類である。

以上の陶磁器・土器の年代観は、遺構の上部が文久3年(1863)の大火によるとみられる焼土層に覆われており、そこから出土する陶磁器・土器の様相がほとんど変わらないことから19世紀中葉の年代を示す良好な一括資料である。同内容のSK809出土資料には「安政年製」の字款をもつ瀬戸美濃焼染付碗と碗蓋が出土しており、この年代観を裏付けている。

小結　以上のように本調査地から出土した江戸時代の陶磁器・土器について、良好な一括資料を選んで報告した。大坂における江戸時代の陶磁器・土器の編年は積山の編年案が提示されたのちも、一括資料の蓄積があり、より精緻な編年が可能となっている。現段階ではこれらの資料は相対的な序列が示されるにとどまっており、それぞれの変化を陶磁器・土器の生産と流通の大きな流れの中で理解し、様式的な検討を行うことが必要である。また、大坂において暦年代を決定する資料も福島1丁目所在遺跡の焼土層[大阪市文化財協会1999A]や、今回報告した第2a層に係わるSK790など、徐々にではあるが増加している。同時期の都市遺跡である江戸や京都との比較研究を行う環境は次第に整ってきているといえよう。　(佐藤)

ii) 土製玩具(Fig.157、Tab.5～8、図版90・91)

江戸時代の土製品として、多量に出土し、これまであまり検討する機会のなかった土製玩具について報告する。

ここでとりあげる土製玩具は、土人形・飯事道具(食器・台所用品)・箱庭道具(構築物・風景)・遊具(おはじき・泥面子・芥子面子・型抜き)・土鈴といった、土師質あるいは陶磁器製の非日常的な生活用具である。本調査地出土の土製玩具のうち形状の判別できるものは、NW91−5次調査で277点、NW96−3次調査で24点、NW97−3次調査で21点となる。今回はNW89−1次調査出土の102点を加えた総数424点について検討を行った。本調査地における土製玩具の出土は豊臣後期から認められるが、数量的にまとまって出土するのは江戸時代の18世紀初頭の土壙出土例からである。大部分は18世紀後半から19世紀中ごろの廃棄土壙から出土している。これまで土製玩具の産地として推定されて

きた地域は、大坂：堺・住吉、京都：伏見などであるが、福島１丁目所在遺跡の調査で検出された18世紀初頭の京焼系陶器窯では、施釉陶器・軟質施釉陶器・焼締陶器・施釉土人形が焼かれていたことが報告されており、大坂城周辺でも土製玩具の産地が存在していたことがわかっている[大阪市文化財協会1999A]。以下、本調査地出土の土製玩具についての概要をまとめるにあたっては、まず土製玩具(検討総数424点)を製作方法によって分類し、18世紀後葉に比定されるSK801出土資料のおもなものについて検討を行った。

〈分類方法〉

土製玩具を分類するにあたり、①焼成方法、②成形方法、③施釉方法、④彩色方法について分析を行った。

①焼成方法

出土した土製玩具には、素焼(土師質)、燻焼(瓦質)、軟質施釉、焼締、陶器、磁器といった素材の焼成方法に違いが認められる。これらの違いは、生産地の違いを反映していると考えられる。堂島蔵屋敷跡出土例が示すように、18世紀以降の大坂では、日常用具と非日常用具が同じ産地で、同じ焼成方法をもって複合的に生産されていたことが考えられる。土製玩具の焼成方法と成形方法には一定の関係性がある。たとえば、素焼と軟質施釉では使用する型の製作から完成まで、独自の製作工程が存在していたことが成形方法の検討から考えられる。また、軟質施釉の１次焼成品が２次焼成によって施釉されずに産地以外か



Fig.157　計測値凡例

Tab.5　土製玩具属性表(軟質施釉)

番号	形　状	焼　成	成　形	穿孔径	穿孔長	高さ・器高	幅・口径	奥行き	重　さ	胎土色	彩　色	釉　薬	施釉方法	報告番号
1	天神	軟施釉	型4			4.7	4.1	2.2	22	灰白		緑・黄	施1	2100
2	釣人	軟施釉	手			3.9	(3.7)	(3.1)	(21)	灰白		緑・黄	施1	2101
3	鯉	軟施釉	型合せ1	0.3	1.5	2.7	(6.5)	2.4	(26)	灰白		緑・黄	施1	2102
4	槍	軟施釉	手			(2.0)	(3.0)	(6.4)	(13)	浅黄橙		緑・黄	施1	SK801
5	亀	軟施釉	型合せ1			(3.1)	(4.2)	(1.6)	(4)	灰白		緑・黄	施1	SK798
6	蓋置か灯明具	軟施釉	左回転轆轤成形			2.6	4.6	4.6	24	灰白		緑・黄	施1	SK798
7	蓋置か灯明具	軟施釉	左回転轆轤成形			(1.7)	(4.0)	(4.0)	(10)	浅黄橙		緑・黄	施1	SK801
8	碗(破片)	軟施釉	左回転轆轤成形			(1.9)	(4.4)	(4.4)	(12)	灰白		緑・黄	施1	SK801
9	碗(破片)	軟施釉	左回転轆轤成形			(1.9)	(4.4)	(4.4)	(12)	灰白		緑・黄	施1	SK801
10	碗(破片)	軟施釉	轆轤成形			(1.8)	(5.0)	(5.0)	(3)	浅黄橙		緑・黄	施1	SK798
11	碗(破片)	軟施釉	轆轤成形			(1.4)	(4.4)	(4.4)	(1)	灰白		緑・黄	施1	SK801
12	碗(破片)	軟施釉	轆轤成形			(0.7)			(1)	灰白		緑・黄	施1	SK801
13	碗	軟施釉	型7			2.0	(4.2)	(4.2)	(9)	灰白		緑・銀彩	施1	2118
14	雀?	軟施釉	型			(1.9)	(4.8)	(4.8)	(24)	灰白		緑・黄	施1	2121
15	飾皿	軟施釉	型			1.7	(5.8)	(5.8)	(11)	浅黄橙		緑・黄	施1	2122
16	飾皿	軟施釉	型			(1.2)				浅黄橙		黄	施1	不明
17	鈴形土鈴	軟施釉	型合せ1			(4.6)	(3.9)	(3.9)	(22)	橙		柿・緑	施2	2104
18	鯛形土鈴	軟施釉	型合せ1			3.0	5.7	2.6	(25)	橙		柿・黄・緑	施2	2105
19	花瓶	軟施釉	左回転轆轤成形			(4.7)	(4.1)	(4.1)	(40)	橙		柿・黄・緑	施2	2103
20	深皿	軟施釉	左回転轆轤成形			(2.0)	(6.2)	(6.2)	(17)	橙		柿・黄・緑	施2	2120
21	深鉢	軟施釉	型7			2.8	(4.6)	(4.6)	(32)	橙		柿	施2	2119
22	深鉢	軟施釉	型7			(2.9)			(5)	橙		柿	施2	SK801
23	甕	軟施釉	轆轤成形			(1.9)	(6.9)	(6.9)	(5)	橙		柿	施2	SK801
24	徳利か花瓶	軟施釉	轆轤成形?			(4.1)	(3.4)	(3.4)	(12)	橙		柿・白・黒	施3	SK801
25	擂鉢(擂目5本)	軟施釉	左回転轆轤成形			2.4	(5.8)	(5.8)	(11)	橙		柿	施2	2117
26	擂鉢	軟施釉	轆轤成形			(1.6)	(8.2)	(8.2)	(5)	橙		柿	施2	SK801
27	擂鉢(擂目6本)	軟施釉	左回転轆轤成形			2.2	(6.8)	(6.8)	(12)	橙		柿	施2	2115
28	擂鉢(擂目3本)	軟施釉	左回転轆轤成形			2.4	(5.6)	(5.6)	(17)	橙		柿	施2	2116
29	擂鉢(擂目5本)	焼締	轆轤成形			(2.4)	(9.2)	(9.2)	(9)		暗赤灰			SK801
30	擂鉢(擂目5本)	焼締	轆轤成形			(2.7)	(8.2)	(8.2)	(5)		赤褐色			SK801
31	片口	軟施釉	型7			(3.5)			(6)	黄橙		柿・黄	施2	SK801
32	山	軟施釉	手づくね			10.6	(17.9)	(12.3)	(608)	橙		柿・褐色	施2	2123

ら出土した例は確認されていない。これらのことから、土製玩具の焼成方法と生産地には因果関係があることが考えられる。

それぞれの焼成方法をみると、素焼される素材は、成形後の乾燥を経て窯入れされ、焼成後に胡粉や彩色が施される。出土する資料のほとんどが風化のために彩色が残らない場合が多い。燻焼される素材は、成形後の乾燥を経て窯入れされ、焼成時に素材の表面が燻されて瓦同様に黒変することを目的に焼成されたものである。軟質施釉で焼成される素材は、成形後の乾燥を経て１次焼成され、釉薬を施して低温で２次焼成されたものである。陶磁器に焼成される素材は、成形後の乾燥を経て１次焼成され、絵付けや釉薬を施して２次焼成されたものである。

本調査地出土の土製玩具の焼成方法の大半は素焼で328点(78%)を数える。以下、軟質施釉は78点(18%)、燻焼は４点(１%)、磁器は10点(２%)、陶器は５点(１%)という比率を占めている。

②成形方法

土製玩具の成形方法には型押し、型合せ、手づくね、ロクロ成形がある。型押し成形は、表裏２枚の凹型に粘土塊を当てて型をとり、表裏２枚の型取りした粘土塊を合せて１個体の製品を作る方法で、土人形や箱庭道具の製作に用いられている。表面や外面のみ凹型に粘土塊を当てて、片面のみに型押し成形する方法もあり、これらは型抜きや面子などの遊具と、飯事道具の製作に用いられている。また、飯事道具に特有の型押し成形の方法として、完成品の型枠に粘土板を合せて内外面から型押しする方法があり、おもに碗や皿といった食器類の製作に用いられている。

型合せ成形は、表裏２枚の凹型に粘土板を当てて型をとり合せたもので、断面は中空である。素焼された大型の土人形のうち、使用する粘土板が薄手のものは、表面や胎土に雲母が多く含まれており、京都：伏見で生産されたと考えられる。一方、大型ながら使用する粘土板が厚手のものは、表面や胎土に雲母が認められず、大坂で生産されたと考えられる型押し成形された一群と胎土に共通性が認められることから、大坂で生産された可能性がある。型合せの方法で製作されるものは、土人形と土鈴にほぼ限定される。手づくね成形は、粘土板や粘土紐から成形する部位を手づくねと篦によって表現する方法で、土人形の場合、頭部、胴部などの各部位を個別に製作し、貼付けることによって製品を完成させている。

手づくね成形は、素焼や軟質施釉で焼成された土人形などの製作に用いられている。ロクロ成形は、おもに飯事道具の製作に用いられる方法で、口径が７～９cmといった小形の皿や擂鉢などをロクロを使って成形している。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。素焼される飯事道具が、型押し成形される一方で、軟質施釉で焼成される飯事道具の特定の器形がロクロ成形されている点は特徴的である。焼成方法との関係をみると、型押し、型合せ成形はおもに素焼と軟質施釉、陶磁器に認められ、手づくね成形は素焼と軟質施釉、ロクロ成形は軟質施釉と焼締で焼成された製品に用いられている。

本調査地出土の土製玩具の成形方法の大半は型押し成形で261点(62%)を数える。以下、型合せ成形は66点(16%)、手づくね成形は66点(16%)、ロクロ成形は31点(７%)という比率を占めている。

型押し、型合せ成形される土製玩具の中には、底部に直径0.3～2.0cmの孔が認められる。底部に残された穿孔痕跡の観察から、３種類の穿孔方法が想定できる。直径0.3cm前後の串や直径1.3cm前後の

Tab.6－1　土製玩具属性表(軟質施釉以外)

番号	形　状	素材	成　形	穿孔径	穿孔長	高さ・器高	幅・口径	奥行き	重　さ	胎土色	彩　色	釉　薬	備　考
1	鳩	素焼	型1	1.3	3.5	5.4	2.8	8.9	48	黄橙			2089
2	鳩	素焼	型1	1	2.3	(3.8)	2.6	(4.9)	26	黄橙			
3	鳩	素焼	型1			(4.2)	3.3	(5.1)	33	黄橙			
4	鳩	素焼	型1			(4.7)	2.9	(5.2)	(33)	黄橙			
5	鳩	素焼	型1			(4.8)	3.1	5.4	(34)	橙	赤		
6	雀	素焼	型合せ1	0.3	0.2	4	2.6	7.5	21	灰白	赤・黒点		2106
7	鳩	素焼	型合せ2	0.5	0.4	(5.3)	(2.4)	(7.1)	(34)	浅黄橙	雲母		
8	鳩	素焼	型合せ2	0.3	0.6	(7.8)	4.7	(7.2)	(84)	浅黄橙	雲母・ススト		
9	牛(立)	素焼	型2	1.7	2.2	(4)	3.2	(6.4)	(50)	黄橙			
10	牛(立)	素焼	型2	1.8	1.9	(3.9)	3.2	(6.1)	(48)	黄橙			
11	牛(立)	素焼	型2	1.3	2.3	(3.2)	(3.2)	(4.5)	(28)	黄橙			
12	牛(座)	素焼	型2			(3)	(3)	(2.9)	(16)	黄橙			
13	牛	素焼	型合せ1			(28)	(2.6)	3.8	(12)	黄橙			
14	牛(大形)	素焼	型合せ2			(4.3)	(2.8)	(8)	(39)	浅黄橙			
15	牛(大形)	素焼	型合せ2			(6.7)	(3.7)	(10.1)	(70)	浅黄橙			
16	牛の背に子供	瓦質	型合せ1	0.4	1	(3.3)	3.4	(8.2)	(60)	灰白	瓦質ススト		2107
17	牛の背に子供	瓦質	型合せ1	0.4	0.8	(3.1)	(1.8)	(5.8)	(21)	灰白	瓦質ススト		
18	馬	素焼	型2	1.6	1.4	(3.2)	(2.8)	(6.4)	(32)	黄橙	赤+雲母		2091
19	馬	素焼	型2	1.6	1.4	(2.7)	(2.8)	(4.8)	(24)	黄橙	赤+雲母		
20	馬	素焼	型2			(3.2)	(2.6)	(4.7)	(19)	黄橙	赤+雲母		
21	馬	素焼	型2			(4.5)	(2.4)	(4.5)	(18)	浅黄橙	赤+雲母		
22	馬	素焼	手2							灰白	赤+黒		2109
23	馬と人物	素焼	型3	0.3	2.1	(6.2)	2.8	(6)	(59)	浅黄橙			2092
24	犬	素焼	型合せ2			(6.5)	(7.7)	(12.2)	(111)	灰白	胡粉+雲母		2110
25	犬	素焼	手2			(3.4)	(3.2)	(4.3)	(33)	灰白			
26	狐・稲荷	素焼	型1	1.2	2.9	(5.8)	(2.4)	(4.1)	(36)	黄橙			
27	狐・稲荷	素焼	型1	(0.9)	(2.3)	(5.1)	(2.5)	(3.6)	(20)	黄橙			
28	狐・稲荷	素焼	型合せ2			(5.4)	(3.4)	(3.7)	(29)	黄橙	雲母		
29	狐・稲荷	素焼	型合せ1			(2.9)	(4.7)	(2.7)	(9)	黄橙・橙	胡粉		
30	狐・稲荷	素焼	型合せ1			(3.8)	(4)	(2.3)	(12)	橙			
31	猫(座)	素焼	型2	1.8	2.2	(4.2)	(5.1)	(3.3)	(40)	浅黄橙			2090
32	猿(彩色)	素焼	型1	(1.4)	3.8	(5.1)	(4.4)	(2.9)	(35)	黄橙	赤		
33	亀	素焼	型			(2)	(3.7)	(3.4)	(10)	黄橙	胡粉		
34	犬	素焼	型合せ2			(4.4)	(2.7)	(5.6)	(25)	浅黄橙	胡粉		
35	狐	素焼	手3			(3.5)	(2.9)	(7)	(49)	黄橙			
36	猫	素焼	型合せ1	(0.4)	(0.5)	(2.9)	(1.8)	(3.3)	(6)	橙	雲母		
37	猫	素焼	型合せ2			(2.1)	(2.5)	(4.8)	(16)	黄橙	雲母		
38	婦人立像右手に物	素焼	型1	1.4	3.8	(6.8)	(3.3)	(2.9)	(34)	黄橙	雲母		2086
39	婦人立像	素焼	型1	1.1	3.9	(6)	(3.5)	(2.3)	(33)	浅黄橙・黄橙・橙			
40	婦人座像	素焼	型1	1.7	3.6	(4.5)	(4.4)	(2.8)	(25)	黄橙			
41	婦人座像	素焼	型1	1.3	3.7	(4.5)	(5.2)	(2.8)	(30)	黄橙			
42	婦人座像	素焼	手1			(5.5)	(4.5)	(3.1)	(46)	黄橙			形状不明
43	婦人両手に物	素焼	手1			(5.3)	(4.2)	(2.8)	(43)	浅黄橙			
44	婦人座像	素焼	手1			(5.1)	(4.9)	(3.6)	(67)	灰白			2099
45	婦人座像	素焼	手1	0.8	2.4	(7)	(6.1)	(6.8)	(167)	黄橙			墨書、2098
46	婦人胴部	素焼	手1			(5)	(4.3)	(3.2)	(42)	橙			形状不明
47	婦人両手に物立像	素焼	型合せ1			(6)	(3.1)	(1.9)	(21)	灰白	胡粉		2097
48	婦人立像(胴部)	素焼	手1			(7.4)	4.2	3.1	(69)	黄橙			
49	婦人	素焼	手1			(6.2)	(4.2)	(3.9)	(65)	黄橙			
50	婦人立像	素焼	手1			(7.8)	(4.3)	(2.7)	(55)	橙			
51	婦人立像	素焼	手1			(7.5)	(4)	(3)	(47)	橙			
52	婦人立像	素焼	手1			(6.1)	(3.9)	(3.5)	(42)	浅黄橙			
53	婦人立像	素焼	手1			(6.5)	(4.2)	3.1	(55)	浅黄橙			
54	婦人立像	素焼	手1			(7.3)	(5.1)	(2.7)	(46)	浅黄橙			
55	婦人立像	素焼	手1			(5.1)	(2.6)	(2.9)	(26)	浅黄橙			
56	婦人立像左手に子供	素焼	型1	1.3	5	(6.4)	(3.7)	(2.1)	(31)	黄橙	雲母		
57	婦人立像左肩に子供	素焼	手1			(10)	(5.4)	(3.4)	(98)	浅黄橙	胡粉		2096
58	婦人立像	素焼	型			(5.5)	(5.4)	(0.6)	(13)	黄橙			
59	婦人立像?	素焼	型合せ2			(4.5)	(3.4)	(1.9)	(17)	黄橙	赤		
60	地蔵	素焼	型1	(0.8)	(2.5)	(4.8)	3.1	(1.8)	(20)	黄橙			
61	地蔵	素焼	型1	1.3	(4.2)	(4.9)	3.7	2.9	(31)	黄橙			
62	地蔵	素焼	型1	1.4	(5.5)	(5.4)	3.4	2.3	(23)	橙			
63	地蔵	素焼	型1	1.3	(4.5)	(4.7)	3.9	2.9	(29)	橙	赤+雲母		
64	地蔵	素焼	型1	1.5	(3.5)	(3.7)	3.6	2.9	(28)	黄橙			
65	地蔵	素焼	型1	1.2	(4.3)	(4.6)	3.6	3	(24)	黄橙	胡粉		
66	地蔵	素焼	型1	(1.1)	(6)	(6.8)	3.2	(2.5)	(34)	黄橙	赤		
67	地蔵	素焼	型1	(0.5)	(1.8)	(4)	3	(1.4)	(13)	黄橙	胡粉		
68	地蔵	素焼	型1	1.4	7.3	(9.5)	3.5	3.6	(58)	黄橙	赤+雲母		2085

Tab.6－2　土製玩具属性表(軟質施釉以外)

番号	形　状	素材	成　形	穿孔径	穿孔長	高さ・器高	幅・口径	奥行き	重　さ	胎土色	彩　色	釉　薬	備　考
69	地蔵	素焼	型1	0.8	(3.2)	(4.2)	2.9	(1.6)	(17)	黄橙			
70	地蔵	素焼	型1	0.7	(1.6)	(4.6)	3.3	(1.8)	(23)	橙			
71	地蔵後背付き	素焼	型1	1.5	4.6	(5.2)	3.8	(2.8)	(33)	黄橙			
72	地蔵の台のみ	素焼	型1	1.7	(1.2)	(2)	3.3	(2.9)	(14)	橙			
73	天神	素焼	型1	(0.9)	3	(5.5)	(4.5)	(2.1)	(25)	浅黄橙	胡粉		
74	天神	素焼	型1	1.3	3.6	(5.2)	(4.7)	2.4	(33)	黄橙	胡粉		
75	天神	素焼	型1	1.2	2.5	(5.4)	(4.2)	2.7	(36)	黄橙	胡粉		
76	天神	素焼	型1	1.5	3.3	(4.7)	(4.2)	2.3	(37)	黄橙	胡粉		
77	天神	素焼	型1	0.7	3.2	(3.6)	4.2	1.8	(23)	浅黄橙			
78	天神	素焼	型1			(3.5)	(2.4)	(2.5)	(7)	黄橙			
79	天神	素焼	型1	1.5	2.5	(3.4)	(4.2)	(2.2)	(20)	浅黄橙	胡粉		
80	天神	素焼	型1			(3.8)	(4.5)	1.5	(24)	黄橙	胡粉		2094
81	西行	素焼	型1	(0.7)	(1.7)	(3.7)	(3.4)	(2.8)	(28)	黄橙			
82	西行	素焼	型1	(1.1)	5.8	(6.8)	(3.5)	(2.7)	(38)	黄橙	雲母		2087
83	福助	素焼	型1	1.4	2.3	(3.9)	5.4	3.1	(28)	浅黄橙	胡粉		
84	大黒	素焼	型1	(1.3)	4.2	(6.8)	(3.8)	(2.3)	(29)	黄橙			
85	武人?	素焼	型4	0.3	1.5	(4.8)	(5.2)	(2.7)	(46)	浅黄橙	雲母		2093
86	武人?	素焼	型			(3.2)	(3.3)	(1.6)	(14)	浅黄橙	雲母		
87	武人か仁王	素焼	型3	0.4	0.7	2.6	(3.6)	(1.7)	(10)	浅黄橙			
88	舞人	素焼	型4			(3.9)	(5.4)	(2.1)	(28)	黄橙			2095
89	童子頭	素焼	型合せ1			(3.3)	(3.8)	(2.1)	(14)	浅黄橙			
90	童子頭	素焼	型合せ1			(3.1)	(3.8)	(1.9)	(11)	浅黄橙	赤		
91	西行	素焼	型3	(0.2)	(0.4)	(3.4)	(2.3)	(1.9)	(10)	黄橙			
92	磁器製鶏	陶磁	型合せ1			(5.4)	(5.5)	(2.6)	(12)	灰白	赤+黒	透明	
93	磁器製太鼓	陶磁	型合せ1			(5)	(5)	(1.6)	(12)	灰白	赤	透明	
94	陶器人形	陶磁	型合せ1			(5.9)	(8.7)	(1.3)	(63)	灰白	青	緑	
95	唐童子と犬	陶磁	型合せ1			(5.4)	(4)	(2.9)	(26)	灰白	黒	緑	中空
96	陶器人形頭	陶磁	型合せ1			(4.1)	(3.5)	(1.9)	(9)	灰白	黒	緑	
97	土鈴・犬	素焼	型合せ2	0.4	1.5	8	6.2	3.2	51	橙			2108
98	土鈴	素焼	手			3.3	2.8	2.9	10	灰白			
99	土鈴	素焼	手			(3.6)	(2.3)	(4.2)	(10)	浅黄橙			
100	土鈴・鯉	素焼	型合せ1			(2.8)	(0.8)	(3.9)	(1)	灰白			施釉未成品?
101	型抜き・猿	素焼	型5			4.8	3.5	2	22	黄橙			2112
102	型抜き・狂言箱	素焼	型5			(5.5)	(3.1)	(1.8)	(20)	黄橙			2111
103	型抜き・蝶	素焼	型5			5.6	5.7	1.6	27	黄橙			2114
104	型抜き・達磨か奴の扇子	素焼	型5			4.4	6.6	1.5	18	灰白			2113
105	焜炉?	素焼	型7			2	(6.8)	(6.8)	(25)	黄橙	胡粉		
106	焜炉	素焼	型7			1.8	(6.4)	(6.4)	(28)	黄橙	胡粉		
107	焜炉?	素焼	型7			1.8	(7)	(7)	(12)	黄橙	胡粉		
108	焜炉?	素焼	型7			1.9	(5)	(5)	(19)	浅黄橙	胡粉		
109	焜炉	素焼	型7			1.8	(6.7)	(6.7)	(19)	橙	胡粉		
110	把手つき釜	素焼	型7			1.2	(5.9)	(5.9)	(20)	黄橙	胡粉		
111	把手つき釜	素焼	型7			1.2	(3.7)	(3.7)	(9)	灰白	赤		
112	甕	素焼	輪積			3.1	(3.8)	(3.8)	(19)	浅黄橙			
113	羽釜	素焼	型7			3.1	(3.5)	3.5	(27)	黄橙	胡粉+雲母		
114	片口	素焼	型7			3.1	(4.8)	4.8	(49)	黄橙	胡粉+雲母		
115	片口	素焼	型7			2.8	(5.2)	(5.2)	(27)	黄橙	胡粉+ススス		
116	擂り鉢	素焼	輪積			2.3			(8)	黄橙			
117	皿	素焼	型7			0.8	(4.2)	(4.2)	(4)	灰白	雲母		内底部に凸文、穿孔あり
118	皿	素焼	型7			0.9	(5.8)	(5.8)	(4)	灰白	雲母		内底部に凸文、穿孔あり
119	擂鉢(擂目3本以上)	素焼	型7			(2.1)			(14)	灰白			
120	鍋?	素焼	型7			(3.5)	(3.4)	(3.4)	(25)	灰白			
121	羽釜	素焼	型7			(5.1)	(4.8)	(4.8)	(43)	黄橙			
122	羽釜	素焼	型7			(2.6)	(3.2)	(3.2)	(11)	黄橙			
123	茶釜(刺突文)	素焼	型7			4.2	(9)	(9)	(53)	黄橙	ススス		
124	羽釜蓋	素焼	型7			1	(3.7)	(3.7)	(8)	橙			
125	神輿	素焼	型1	1.6	3.7	5.9	(3.5)	(3.5)	(46)	黄橙			2088
126	灯籠	素焼	型1	1.5	3.8	(4.3)	(2.9)	(3.1)	(29)	黄橙			
127	灯籠?	素焼	型1	1.6	(3.1)	(3.2)	3.4	3.5	(28)	灰白			
128	城門	素焼	型4			(4.4)	(3.5)	2	(20)	黄橙	雲母		
129	鳥居	素焼	型4			(3)	(3.7)	1.4	(9)	黄橙	雲母		
130	櫓	素焼	型7			(2.6)	(2.9)	(1.2)	(8)	橙	胡粉		
131	灯籠	素焼	型							黄橙	暗赤褐色		不明孔
132	仁王門	素焼	型4			(2.6)	5	(2)	16	黄橙	雲母		
133	藁葺屋根	素焼	型1			(3)	5.9	(2.9)	30	黄橙	雲母		
134	土扉	素焼	型7			(3.4)			(17)	黄橙	胡粉		不明孔
135	藁葺屋根	素焼	型1			(2.7)	(5.7)	(2.9)	(26)	灰白			

棒を使用する方法と、篦によって直径1.8cm前後の孔を刳貫く方法である。この孔については、焼成しやすくするための内部の空気抜きの機能が考えられているが[大阪市文化財協会1984]、串刺し人形や指人形などの民俗例から、焼成後の使用方法との関連性も考えられる。また、型押し成形時の表裏の接合や焼成後の彩色の際に、串や棒を芯にすることが製作工程にあらかじめ組込まれていたことによる、一種の作業痕跡であったことも考慮しておきたい。串や棒、篦で穿孔された土製玩具の大半は、型押し成形されたものである。また、型押し成形には棒を、型合せ成形には串を用いる傾向がある。焼成方法との関係をみると、素焼・燻焼・軟質施釉で穿孔が認められる。陶磁器製の土製玩具については不明で、焼締で焼成されたものについては、形態が擂鉢に限定されているため穿孔はない。

本調査地出土の土製玩具で、穿孔の認められるものの総数は111点である。内訳は、棒使用が63点(57%)、串使用が38点(34%)、篦使用が10点(９%)である。

上記の分類から、型押し、型合せ成形については、底部に残された穿孔方法の違いによって細分し、手づくね成形については、粘土素材の使用方法の違いによって細分した。素材となる粘土の形状から成形までの一連の製作工程内に違いがあることは、産地や製作技術の特徴、製作時期を検討する上で重要である。

型押し１：表裏２枚の型に粘土塊を合せて型をとり、先端部が細くなる箸状の棒芯を中心にすえて表裏を合せ、成形後に抜き取ったもので、焼成後の底部には最大径約1.3～1.5cm、長さ３cm以上の穿孔痕が残る。

型押し２：表裏２枚の型に粘土塊を合せて型をとり、成形時に篦状の工具を用いて底部にドーム形の孔を刳貫いたもので、焼成後の底部には最大径約1.6～1.8cm、長さ1.4～2.2cmの刳貫き痕が残る。おもに動物の成形方法である。

型押し３：表裏２枚の型に粘土塊を合せて型をとり、表裏を合せたもので中実である。底部には穿孔径0.3cm前後、穿孔長0.7～2.0cmの串で刺した穿孔痕が残る。厚さ約２cmの長円形の台座をつける形態は、この成形方法で認められるもので、穿孔は台座部分を貫通している。台座のないものは、竹串で刺して使用した用途が考えられるが、台座のあるものについては、穿孔部分が貫通していることから別の用途が考えられる。胎土は浅黄橙色で、表面に胡粉の痕跡を残すものがある。人物や人物と動物の組合せの成形に認められる。

型押し４：表裏２枚の型に粘土塊を合せて型をとり、表裏を合せたもので穿孔はない。胎土は黄橙色で、表面に胡粉の痕跡が残っているものもある。

型押し５：型抜きとよばれる凹型の土製品を製作するための方法で、型押しによって翁や猿の頭部や扇や蝶といった対象物の凸型原形に粘土塊を押し付けて凹型を取り、形状に合せて周囲を篦で切り取っている。裏面はドーム状にナデで成形している。胎土は灰白色～黄橙色で、型抜きしやすくするために雲母が残されているものもある。

型押し６：型に粘土塊を合せて型をとり、裏面を水平に成形しておはじき、芥子面子や泥面子を製作する方法で、役者や布袋の頭部や家紋を写したものがある。

型押し７：飯事道具や箱庭道具を製作する方法で、完成品の器形に合せて凹凸両面の型枠をとり、

型枠内に粘土板を当てて成形する方法である。外面のみ型枠を使用する場合、内面はナデで仕上げられる。おもにミニチュアの食器の製作に用いられている。

型合せ１：表裏２枚の型に粘土板を合せて型を取り、表裏を合せたものである。内部は中空で底部には、穿孔径0.3～0.5cmの孔が穿たれている。赤褐色の胎土と灰白色の胎土が混在したもので表面に彩色のないもののほかに、胎土が灰白色で、表面を赤色顔料や墨で彩色したものと、胎土が浅黄橙色で、表面に胡粉が塗られたものがある。

型合せ２：表裏２枚の型に粘土板を合せて型を取り、表裏を合せたものである。内部は中空で、底部の穿孔は不明である。胎土は灰白色で、型外しのために用いられた雲母が付着している。最大長が10cm以上の大型の製品で、表面に雲母や胡粉が残っている点に特徴があり、これらの特徴をもって京都産の可能性が指摘されている[安芸1994]。

型合せ３：表裏２枚の型に粘土板を合せて型を取り、表裏を合せたものである。内部は中空で、底部の穿孔は不明である。型合せ２と異なり大型ながら生地が厚手で、雲母を含まない。

手づくね１：手づくねによって成形したもので、断面は基本的に中空である。細部を粘土紐の貼付けと篦による調整によって表現している。胴部は粘土板を筒状に丸めて成形している。胎土は灰白色で、表面に胡粉が残されているものや赤色顔料と墨で彩色しているものもある。形態は人物が主体である。

手づくね２：手づくねによって成形したもので、断面は中実である。各部位を粘土紐や粘土板などで個別に製作し、それらを互いに貼付けることによって成形している。胎土は灰白～浅黄橙色である。

③施釉方法

軟質施釉された土製玩具には大別すると３種類の胎土と、それらと関係する施釉方法が認められる。施釉１は胎土が灰白～浅黄橙色で、透明釉ないしは黄色釉をベースに黄色・緑色・銀色の釉薬を重塗する一群で、土人形や飯事道具に用いられている。施釉２は胎土が赤褐色で、柿釉をベースに柿色・黄色・緑色の釉薬を重塗する一群で、土鈴や飯事道具に用いられている。施釉３は胎土が橙色で、柿色・白色・黒色の釉薬による一群で、飯事道具に用いられている。それぞれ使用する釉薬の組合せにはバラエティーがあり、一種類のみの施釉もある。

本調査地出土の土製玩具で、軟質施釉されたものの総数は62点である。内訳は、施釉１が38点(61％)、施釉２が21点(34％)、施釉３が３点(５％)である。

④彩色方法

素焼製の土製玩具の表面には、成形時に使用した剥離剤の雲母が残されているものや、焼成後の胡粉や彩色の痕跡が残るものがある。焼成後に彩色した土製玩具の大半は退色している。現状で観察できる彩色方法には大別すると２種類の方法がある。彩色１は下地塗に胡粉が使われ、赤・黒・白色の顔料を単彩あるいは多彩で使用する方法で、土人形や箱庭道具に認められる。彩色２は、赤色などの顔料を単彩で使用する方法で、土人形に認められる。

本調査地出土の土製玩具のうち彩色された痕跡の認められるものの総数は118点で、彩色１は86点(73％)で、彩色２は32点(27％)である。

〈SK801出土の土製玩具〉

ここでは、以上で行った分類基準に基づいて出土遺物の検討を行う。出土した土製玩具のうち形状の判別できるものは、166点である。これらを焼成方法の違いによって大別し、成形方法の分類にしたがって細別する。

素焼

土人形(91点)・箱庭道具(11点)・飯事道具(20点)・土鈴(４点)・型抜き(４点)が出土している。成形はおもに型押し成形である。そのほか、型合せ・手づくね・ロクロ成形がある。出土した土人形は神仏・人物・動物があり、頭部の欠損したものが多い。頭部のみないし、欠損部位のみの出土例は希少であるという出土状態についての特徴が指摘できる。また、神仏には台座を設けるという特色がある。

型押し１

天神(６点)：胎土は浅黄橙～黄橙色で、表面に胡粉が施されている。

仏像あるいは地蔵尊(13点)：胎土は黄橙～橙色で、表面に胡粉を施した後赤色の顔料と胡粉で彩色された痕跡が残るものもある。2085は頭部を欠損した地蔵尊で、高さ約9.5cm、重さ約58ｇである。底部から頭部にある穿孔痕は、孔径1.4cm、長さ7.3cmである。

婦人立像(３点)・婦人座像(２点)：胎土は浅黄橙～黄橙色で、表面に胡粉が部分的に残る。2086は左手に包み物を抱えた頭部欠損の立像で、高さ6.4cm、重さ31ｇである。底部から胸部に残る穿孔痕は、孔径1.3cm、長さ５cmである。

人物(５点)：西行が３点、福助が１点、大黒が１点出土している。胎土は浅黄橙～黄橙色で、表面に胡粉の痕跡が残るものもある。2087は正面に唐傘をもった西行像で、頭部が欠損している。高さ6.8cm、重さ38ｇである。底部から胸部に残る穿孔痕は、孔径1.1cm、長さ5.8cmである。

動物：鳩が５点、狐が２点、猿が１点出土している。胎土は黄橙色で、表面を赤色顔料で彩色しているものもある。2089は鳩で、高さ5.4cm、重さ48ｇである。底部から頭部に斜めに残る穿孔痕は、孔径1.3cm、長さ3.5cmである。

箱庭道具：神輿が１点、燈篭が２点出土している。胎土は灰白～黄橙色である。2088は神輿で、高さ5.9cm、重さ46ｇである。底部から上部に残る穿孔痕は、孔径1.6cm、長さ3.7cmである。神輿の台座には持ち手を取り付けるための孔(直径0.4cm、長さ3.4cm)が２個所に穿たれている。ほかの出土地点では鳥居や太鼓橋が出土していることから、神社の境内の景観を表した箱庭道具の一部に分類した。

型押し２

動物(９点)：牛が４点、馬が４点、猫が１点出土している。胎土は灰白～黄橙色である。2090は猫で、高さ4.2cm、重さ40ｇである。底部の穴は、直径1.8cm、深さ2.2cmである。2091は馬で、高さ3.2cm、重さ32ｇである。表面に施されたたてがみや尾の表現には、細かい線描を使い、胡粉の上に赤色顔料で彩色が施されている点に特徴がある。牛は立ち牛と座り牛の２種類があり、立ち牛は高さ3.2～4.0cm、重さ28～50ｇで、底部の穴は、直径1.8cm前後、深さ2.0cm前後である。底部に刳貫かれ

た孔は、型押し1の製品と比較しても大きくて浅い。

型押し3

人物：武人が3点出土している。胎土は浅黄橙色である。2093は武人で高さ4.8cm、重さ46gである。底部には穿孔径0.3cm、穿孔長1.5cmの孔が穿たれており、表面には胡粉の痕跡が残る。

人物と馬：2092は騎馬人物で1点出土している。胎土は浅黄橙色で、高さ6.2cm、重さ59gである。台座には穿孔径0.3cm、穿孔長2.1cmの孔が貫通している。

型押し4

人物：天神が1点、舞人が1点出土している。2094は天神で高さ3.8cm、重さ24gで胡粉の痕跡がある。2095は上半部を欠損しているが、腰帯付の衣装をつけた雅楽の舞人と思われる。高さ3.9cm、重さ28gである。

箱庭道具：城門が2点、鳥居が1点出土している。欠損しており全体の形状がつかめないが、底部への穿孔の痕跡が認められないことから型押し4に分類した。

型押し5

2111～2114は型抜きの製品で、上段には型抜きの凹型から復元製作した粘土型を配置した。2111は寿老人、2112は猿、2113は奴と凧の意匠をもつ扇子、2114は蝶である。いずれも、土人形の表現と異なり、繊細で写実的である。

型合せ1

動物：犬が1点、鳥が3点、牛が3点出土している。2108は洋犬の土鈴で高さ8.0cm、重さ51gである。底部には穿孔径0.4cm、穿孔長1.5cmの孔が穿たれている。胎土は赤褐色の胎土と灰白色の胎土が混在する特徴的なものである。2106は雀で高さ4.0cm、重さ21gである。底部には穿孔径0.3cm、穿孔長0.2cmの孔が穿たれている。胎土は灰白色で、表面を赤色顔料や墨で彩色している。鳩は浅黄橙色の胎土で、表面には胡粉や煤の痕跡が認められる。高さは5.3～7.8cmで、重さは34～84gである。底部には穿孔径0.3～0.5cm、穿孔長0.4～0.6cmの孔が穿たれている(表面に雲母が多く付着していることから、京都産の可能性もある。)。牛は浅黄橙～黄橙色の胎土で、表面に彩色はない。高さは2.8～6.7cmで、重さは12～70gである。底部の穿孔の有無は不明である。

型合せ2

動物：犬が1点出土している。2110はうずくまった犬で高さ6.5cm、重さ111gである。胎土は灰白色で、表面には胡粉が残っている。京都伏見産と思われる。

手づくね1

婦人：立像が10点、座像が2点出土している。2096は右肩に子供を背負った婦人立像で頭部や腕を欠損している。高さ10cm、重さ98gである。胎土は浅黄橙色で、表面には白泥を施した痕跡が残る。子供や体の各部位を手づくねで成形し、互いに接合している。2097は婦人立像で頭部や腕を欠損している。高さ7.4cm、重さ69gである。2098は頭部と手を欠損した婦人座像で、高さ7.0cm、重さ167gである。胎土は橙色で、底部に墨書の痕跡が残る。2099は頭部と左手を欠損した婦人座像で、高さ5.1cm、重さ67g、胎土は黄橙色である。

手づくね２

2109は馬で、高さ8.6cm、重さ93ｇ以上である。胎土は灰白色で、たてがみや馬具を赤色顔料や墨で表現している。

軟質施釉

総数は29点で、型押し、手づくね、ロクロで成形されている。施釉方法は施釉１が16点、施釉２が12点、施釉３が１点である。形態は人物や動物、土鈴、飯事道具、箱庭道具がある。

施釉１

人物・動物・飯事道具・箱庭道具が出土している。天神2100は表裏を粘土塊に型押して合せたものである(型押し４)。胎土は灰白色で表面には緑色と黄色の釉薬が施されている。釣り人2101は手づくねで成形されており、中空の胴部に頭部を差し込んで接合されている。胎土は灰白色で表面には緑色と黄色の釉薬が施されている。細部の表現は串状の工具でていねいに仕上げられている。鯉2102は粘土板の表裏２枚を型押しして合せたもので中空である(型合せ１)。底部には直径0.3cmの穿孔がある。飯事道具のひとつである椀2118は、復元口径が５cm弱のミニチュアながらロクロ成形されており、底部には回転糸切り痕が残る。

施釉２

土鈴・飯事道具が出土している。土鈴2104は表裏を粘土板で型取りして合せたもので、内部に土玉を入れている。胎土は橙色で、柿色と緑色の釉薬が施され、透明釉で仕上げられている。鯛形土鈴2105は表裏を粘土板で型取りして合せたもので、同じく内部に土玉を入れている(型合せ１)。胎土は橙色で、柿色と緑色の釉薬が施され、透明釉で仕上げられている。花瓶2103は回転糸切りロクロ成形で柿色と緑色と黄色の釉薬が施され、透明釉で仕上げられている。擂鉢2115～2117は復元径が約６～９cm前後のもので、ロクロ成形され、底部には糸切り痕がある。内面には３～５本の擂目が施されている。胎土は橙色で、内面から口縁部にかけて柿釉が施されている。

焼締

ロクロ成形されたミニチュアの擂鉢が２点出土している。内面には５本の擂目が施されている。胎土は赤褐色で、仕上げに赤色の彩色が施されている可能性がある(Tab.5－29・30)。

燻焼(瓦質)

牛の背に人物が乗った形状のものが２点出土している。2107は胎土は灰白色で、表面は焼成時に

Tab.7　調査地出土の土製玩具の種類と形態

土製玩具の種類	形　　態
土人形	神仏、人物、動物
飯事道具	碗、皿、瓶、甕、擂鉢、片口、壺、向付、徳利、鍋、羽釜、茶釜、篭、蓋、炉、灯明具、炊飯具
箱庭道具	城、城壁、城門、家、灯籠、橋、門、鳥居、仁王門、船、神輿、山
型抜き	人物、動物
芥子面子・泥面子	人物、動物、植物、家紋
土鈴	鳥形、犬形、袋形、球形、仏具形（五鈷鈴）

燻焼くことによって黒色に仕上げている。成形は表裏2枚の型に粘土板を合せて型をとり、表裏を合せ(型合せ1)、手づくねによって牛の背の人物や牛の頭部を造作している。内部は中空で、底部には直径0.4cmの穿孔がある。

陶器

頭部を欠損した人物座像(Tab.6－94)、にこやかに子犬を抱える唐子の頭部(Tab.6－95)、内面に布目圧痕が認められる布袋と思われる男性頭部が出土している(Tab.6－96)。いずれも灰釉で仕上げられているが、産地は不明である。

磁器

肥前磁器の鶏冠を赤絵付した鶏頭部(Tab.6－92)と、巴文を赤絵付した祭太鼓(Tab.6－93)が出土している。

〈まとめ－本調査地出土の土製玩具－〉

土人形の形態と産地の推定

土人形の形態には、神仏・人物・動物があり、その内訳をみてみると、神仏では、地蔵19点、天神12点、摩利支天1点、布袋1点、恵美須1点、大黒1点が出土している。人物では婦人37点、西行8点、虚無僧1点、釣人3点、福助1点、武人4点、異人2点、奴1点、相撲取り1点が出土している。動物では、鯉2、兎1、亀5、鳩11、雀2、牛11、馬7、犬4、狐8、猫5、猿9、鳥3、蛙1が出土している。そのほか、人と動物との組合せや空想上の動物として、牛と童2点、馬と馬子3点、胴体が人で頭部が猿2点、狛犬4点、河童2点が出土している。なかでも、地蔵、天神、婦人、鳩、牛が目立っている。土人形の製作は、型押し、型合せ、手づくねで成形し、素焼、燻焼、軟質施釉、焼締、陶器、磁器といった焼成方法で仕上げられている。土製玩具の生産遺構と考えられる堂島蔵屋敷跡の調査例から、軟質施釉と焼締については、大坂城下町産である可能性がある。素焼については出土数量や胎土の観察所見から、型押し1、型合せ2・3、手づくね1・2は大坂城周辺産、型押し3は堺周辺産と推定したい。また、型合せ2は京都：伏見産と考えられる。その他の製作方法による土製玩具も含め、今後の生産遺構の調査を待って修正を加えていきたい。

Tab.8　土人形の形態と縁起

形　態	縁　　起
地蔵	地蔵菩薩信仰
天神	天神・雷神信仰、五穀豊穣、学徳成就
恵美須	招福神
大黒	招福神
布袋	招福神
福助	招福神
西行	腰痛・盗難除け
虚無僧	船酔い・酒酔い除け
相撲取り	子供の健康祈願
物持ち婦人	待ち人来る縁起物
摩利支天	武士の守神
馬	開運祈願、稲荷・観音信仰
牛	疱瘡除け、天神信仰
鶏	子供の夜泣き除け、荒神信仰
土鈴	井戸の祀り、水神信仰
猿	魔除け、庚申信仰
組み猿	家内和合縁起物
狐	稲荷信仰

土製玩具の変遷

江戸時代における土製玩具の変遷について、遺構単位の分析に基づいた検討はできなかったものの、本調査地では概略以下のような出土傾向がある。18世紀前半と19世紀中葉の土壙から出土する土製玩具の製作方法には

変化は認められなかった。むしろ出土状況や、土製玩具の形態、組成に多様化が認められることがひとつの傾向としてとらえられる。

Ⅰ期：18世紀前半の土壙から、素焼と軟質施釉で焼成された型押し・型合せ・手づくね成形の土人形、飯事道具、箱庭道具、土鈴が出土する。１つの土壙からの出土数は10点以下であることが多く、素焼の型押し成形された土人形が主体である。また、土製玩具を伴う遺構数も少ない。この傾向は18世紀中ごろまで認められる。

Ⅱ期：18世紀後半～19世紀前半に、１つの土壙から100点以上の土製玩具がまとまって出土する特殊な廃棄例が認められる。焼成は素焼、燻焼、軟質施釉、焼締、陶器質・磁器質で、型押し・型合せ・手づくね・ロクロ成形の土人形、飯事道具、箱庭道具、遊具、土鈴が出土する。土製玩具を伴う遺構数は少ない。素焼の型押し成形された土人形に加えて、手づくね成形の土人形が多く出土する。

Ⅲ期：19世紀中葉の土壙から素焼、軟質施釉、陶磁質・磁器質の型押し・型合せ・手づくね・ロクロ成形の土人形、飯事道具、箱庭道具、遊具、土鈴が出土する。１つの土壙からの出土数は20点前後で素焼の型押し成形された土人形と、多様な遊具が出土している。土製玩具を伴う遺構数は多い。燻焼、焼締の土製玩具は認められず、軟質施釉の土製玩具は少ない傾向がある。型押し２、手づくね１も認められない。

以上概略をまとめたが、製作方法と変化、出土遺構の性格と分布、産地の同定、江戸・名古屋・京都との比較、土製玩具の流通、土製玩具の嗜好変化など今後の課題は多い。特に、今回検討できなかった豊臣後期～江戸時代初期の土製玩具については、近世の土製玩具の出現を考える上で重要であり、資料数の増加を待って検討していきたい。（平井）

iii）瓦（Fig.158、図版92）

軒瓦のうち、瓦当文様の残りの良いものと飾瓦を報告する。軒瓦の同笵関係はすべての破片については確認できていない。

軒瓦

軒丸瓦の瓦当文様はすべて巴文である。残りが悪く、珠文・巴文の特徴から笵種の異同がわからないものは整理対象から省いた。45点ある。笵種については43種の笵が確認できたが、同笵のものが多数あるという状況ではない。瓦当面の彫りが浅く、燻し処理の著しくないものには1783～1786がある。また、彫りが深く、燻し処理のため表面に光沢のあるものには1787～1794がある。『堂島蔵屋敷跡』[大阪市文化財協会1999A]における瓦の報告の際にも述べたが、前者は比較的先行するもので、後者は後出すると考えられる。今回の伴出遺物からもこの傾向は矛盾していない。

軒平瓦の瓦当文様はすべて均整唐草文である。41点ある。笵種については26種の笵が確認できた。軒丸瓦より同笵で数点ある種が存在する。軒丸瓦と同様に先行すると考えられるものとして1795・1796・1798・1799・1802・1803がある。後出する彫りの深いものには1797・1800・1801・1804～1809がある。

軒桟瓦の瓦当文様は巴文と唐草文の組合せや、2124のように無文のものがある。横幅は29.8㎝である。

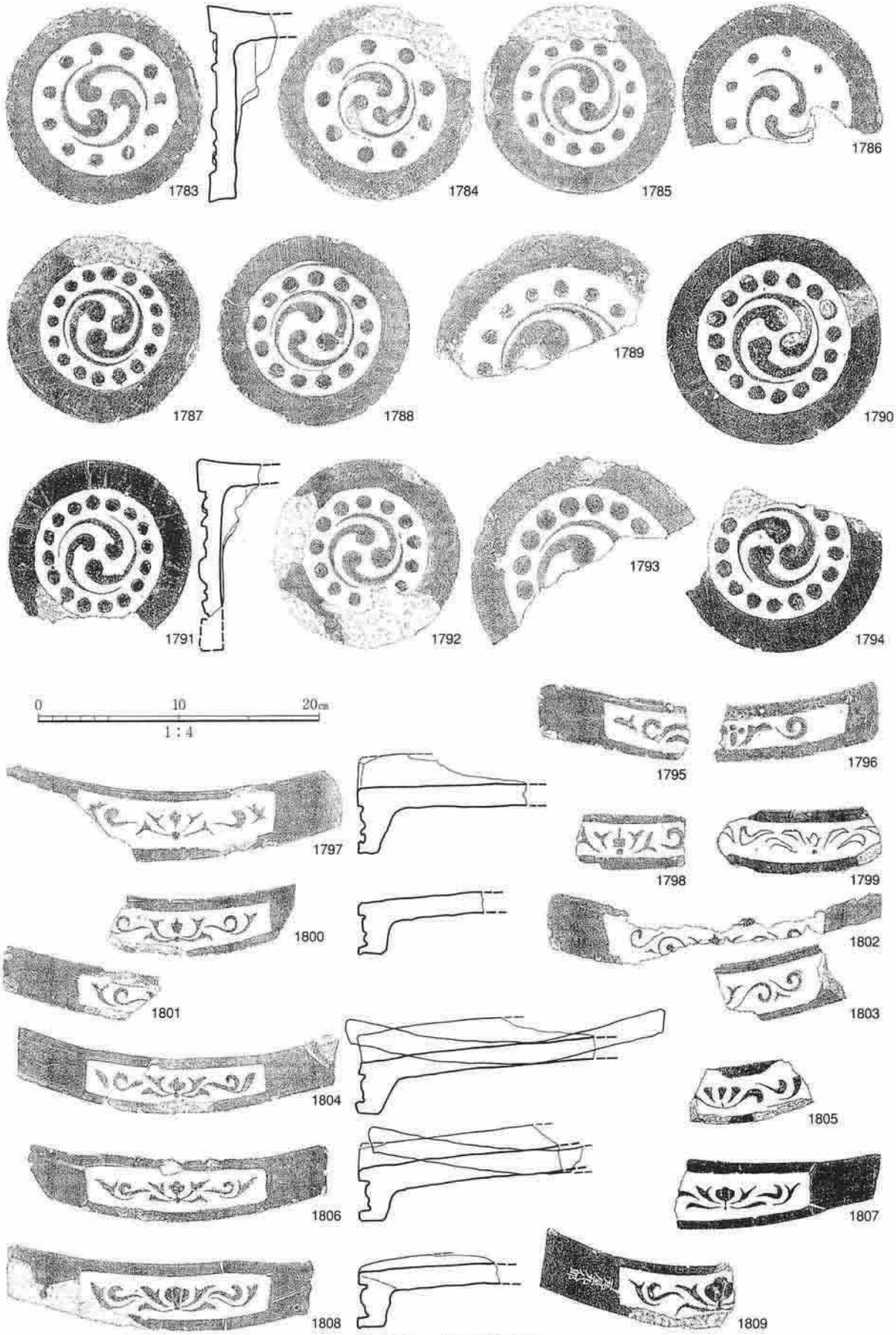


Fig.158　江戸時代の瓦

SK798(1795·1798·1801)　SK801(1783·1799·1803)　SK807(1806·1808)　SK804(1797·1804)　SK790(1794)　SA730A(1787·1800)　第2b層(1790·1791·1796·1805)　第2a層(1809)　その他(1784～1786·1788·1789·1792·1793·1802·1807)

飾瓦

2125は波文の飾瓦である。底面は平らで、中心を上から下まで貫く釘孔がある。残存する横幅は30.5cmである。

iv）木製品(Fig.159、図版93)

下駄1810が18世紀後半の土壙(番号なし)から出土した。遺存状態はよくない。他には顕著な遺物は見られなかった。

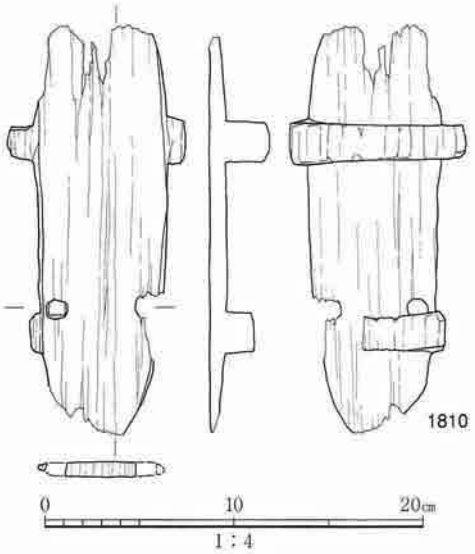


Fig.159　木製品(下駄)

v）骨角製品(図版93)

櫛払2126・2127・簪2128～2130がある。2126・2127はブラシ形をした櫛払の柄である。18世紀以後のものとされている[久保1993]。2126は残存長5.2cmである。簪は2128は脚の片方が先まで残っている。残存長は12.7cmである。これらの材質は2126・2129・2130は牛や馬などの骨で、2127・2128は象牙の可能性がある。

vi）石製品(Fig.160、図版93)

硯1811～1817と砥石1818～1820がある。

硯の平面形は、1811は隅丸長方形、1812は楕円形、1813～1817は長方形である。石材は1811が黒色片岩、1812が石英片岩、1813が頁岩、1814が泥質片岩、1815が砂質凝灰岩、1816が凝灰岩、1817が粘板岩である。1811の裏面には「上石」の刻字がある。1812～1814はかなり使い込まれたもので、陸部の中央が凹んでいる。1812はSK803か807のどちらか、1815はSK798から、1817はSK794から、1811・1813・1814・1816はその他の土壙から出土した。

砥石1818～1820のうち、1818・1819は直方体、1820は楔形をなしている。石材は1818・1820が結晶片岩、1819が頁岩である。1818の短辺側の面には「木工」の刻字がある。1819・1820はSK798から、1818はその他の土壙から出土した。

vii）金属製品(図版94)

真鍮製品2131・銅製品2132～2153・鉄製品2154～2164がある。

真鍮製品は１点のみで、煙管雁首2131である。

銅製品としては、煙管雁首2132～2135・吸口2136～2138・物差2139・釘隠2140・分銅2141・鋲2142～2144・十能の柄？2145・把手2146・飾金具2147・匙2148・2149・簪2150・火箸2151～2153がある。2133の両端は銅製の輪や針金で合せ目を固定している。2139は3.3mmの単位で短い目盛りが刻まれており、長い目盛りはおそらく3.3cm(１寸)単位であろう。2141の重さは16.0ｇである。2145は中に木が残っており、棒状の把手が挿入されていたことがわかる。本体の部分は失われているが、十能などの道具と考えられる。2146は手で握る部分の断面は直径５mmの円形で、何かに取付けていた方の端部は平らである。孔を開けてリベットで固定されていた。

図版94の写真では、2138の長さは7.2cm、2151の長さは21.1cmである。

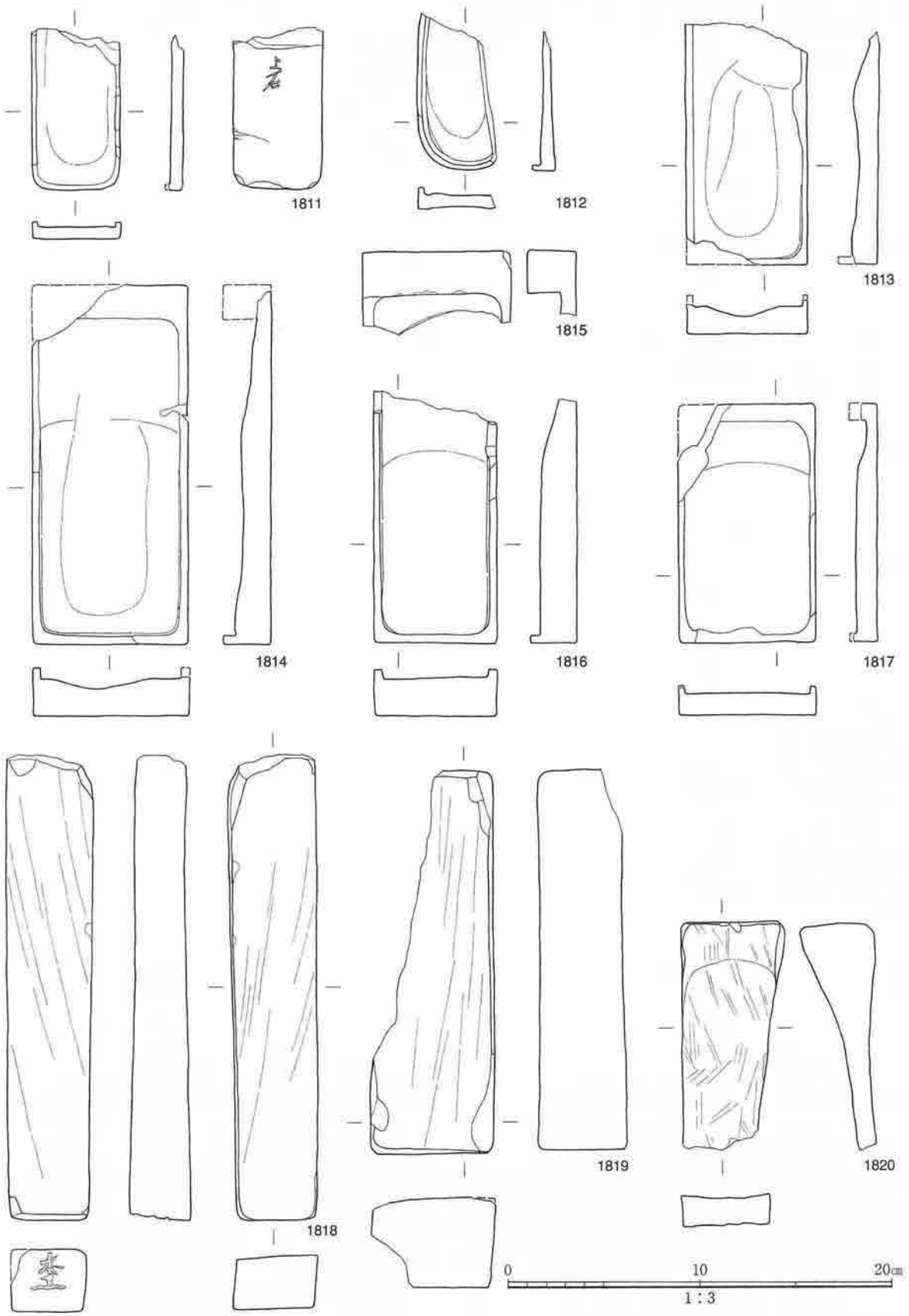


Fig.160　江戸時代の石製品
SK794(1817)　SK798(1815・1819・1820)　他の土壙(1811～1814・1816・1818)

銅銭あるいはその類似品としては、寛永通宝2157～2160・偽銭2161・絵銭2162・雁首銭2163・2164がある。

寛永通宝のうち、2157は古寛永で、他は新寛永である。2157の直径は2.45cmである。寛永通宝は図版に掲載した他にもあり、合せて41点出土した。偽銭2161は寛永通宝とほぼ同じ直径の銅製円盤に四角い孔をあけ、「寛永通宝」の字を刻んでいる。字はそれほど整っておらず、実際の寛永通宝に比べるとかなり分厚い。玩具として用いられたものと思われる。絵銭2162は上半部に馬、下半部に猿を表現している。猿は片手に馬の手綱をもち、もう片手には桃をもっているらしい。用途についてはよくわかっていない。直径は2.60cm、厚さは4.8mmである。雁首銭2163・2164は煙管の雁首の先を潰して平らにしたものである。

鉄製品には錠2154・小柄の鞘2155・鋏2156の他、掲載していないが刀子や多数の釘がある。2154の残存長は10.6cmである。環が付いているが錆化が著しくどのような状態で組合わさっているのかは観察できない。2155の表面は、魚子地に鳥かあるいは花の文様をもつ。2156の残存長は6.5cmである。

viii）鋳造関係遺物（図版94）

SK801から鞴羽口2165・坩堝2166～2169が出土した。2165は先端の破片で、最大径は7.2cmである。鍛冶に用いられたものである。2167の口縁部径は4.6cmである。他の2166・2168・2169もほぼ同じ大きさである。

これらの坩堝に対して顕微鏡観察・X線透過撮影を行ったところ、4点すべてに金属様の粒が付着していることがわかった。2166の内面には金色で径1㎜以下の粒が多数付着している。付着している状態や色などから金を含んだ金属粒と考えられる。2167には紫灰色で径1～5㎜程の粒が付着している。この粒の1つを試料に供し分析したところ銀を検出した（註2）。

このようなことから、2166は金を、2167は純度の高い銀を加熱・溶融する作業に用いたと思われる。いづれの坩堝も小さく容量が少ないことから、何らかの加飾に用いるための少量の金・銀の地金を溶かすためのものと思われる。2168・2169も同様の作業に用いられた可能性が高い。　（佐藤）

註）

（1）「京焼」は京都の五条坂・清水・粟田口などの地域で焼かれた陶器の総称である。出土する数量は少ないが、器壁の薄い良質のものが多く、錆絵や錆絵染付などで繊細な文様が描かれているため、陶磁器の中では軽視できない存在感をもっている。ただ、18世紀後半以後、信楽が同種の陶器を大量生産し始めると、それらの識別は困難となり、さらに時期が下ると周辺の窯業地の製品が加わって状況はより複雑なものとなる。そこで近年ではこれらの陶器を一括して「関西系陶器」と総称している。「京焼」も広義でいえば関西系陶器の範疇に入れるべきかもしれないが、18世紀前半までの信楽など他の生産地を想定しないでよい段階までのものについては「京焼」と呼称しておく。問題点としては一昨年発見された堂島の陶器窯の製品をどう呼ぶか、時期・生産地別の推移を見ていく場合に統計上どう処理をするか、といったことが残されている。

（2）奈良国立文化財研究所 村上隆氏にお願いした。分析は同研究所設置のテクノス製エネルギー分散型微焦点蛍光X線分析装置TREX640型を用い、半定量分析で行った。

第Ⅳ章　出土資料の分析と検討

第１節　石組み遺構の石材同定

４Ｅ区では前期難波宮期の石組み溝SD301と一部に石組みの施された泉施設SG301が検出された。それぞれの遺構に使用された石材の岩石鑑定を行った結果について以下に述べる。

１）調査方法

石材の岩種を判定するため、現地において肉眼および実体顕微鏡により石材表面を観察した。観察に際しては鉱物の種類、色とその特徴、形状や大きさに留意して行った。

２）観察結果(Fig.161・162、Tab.9)

ｉ）石組み溝SD301の岩種

平・立面図をFig.161に示し、岩種構成をFig.162に示す。石材は大半を占める花崗岩類と花崗岩類以外の岩石からなる。花崗岩類は黒雲母花崗岩が大半を占め、その他に黒雲母白雲母花崗岩、アプライト質花崗岩、優白質花崗岩、カタクラサイト化した花崗岩、花崗斑岩、片麻状花崗閃緑岩、閃緑岩がある。花崗岩類以外の岩石には斑れい岩、砂岩、安山岩、マイロナイト、輝緑岩(ひん岩)がある。

〈岩相の特徴〉

石材のうち特徴的な岩相を示すものについて以下に述べる。

花崗岩類

黒雲母花崗岩：粗～中粒、ときに細粒(アプライト質)である。角閃石を含まないものと含むもの、淡桃～桃色のカリ長石が目立つもの、角閃石あるいは電気石と考えられる針状結晶を含むもの、暗色包有物が観察されるものがある。

アプライト質花崗岩：角閃石あるいは電気石と考えられる針状結晶を含むもの、優白質で前述の針状鉱物を含むもの、優白質で前述の針状鉱物を含み桃色のカリ長石を含むものがある。

優白質花崗岩：中～細粒である。角閃石を含むもの、角閃石あるいは電気石と考えられる針状結晶を含むもの、ペグマタイト質なもの、アプライト質なもの、桃色のカリ長石を含むものがある。

花崗斑岩：桃色のカリ長石を含むもの、花崗閃緑斑岩がある。

片麻状花崗閃緑岩：粗粒で黒雲母を含んでいる。

閃緑岩：細粒なもの、ペグマタイト脈を含むもの、片状構造が見られるものがある。

花崗岩類以外の岩石

斑れい岩：細～中粒で角閃石や輝石を含んでいる。

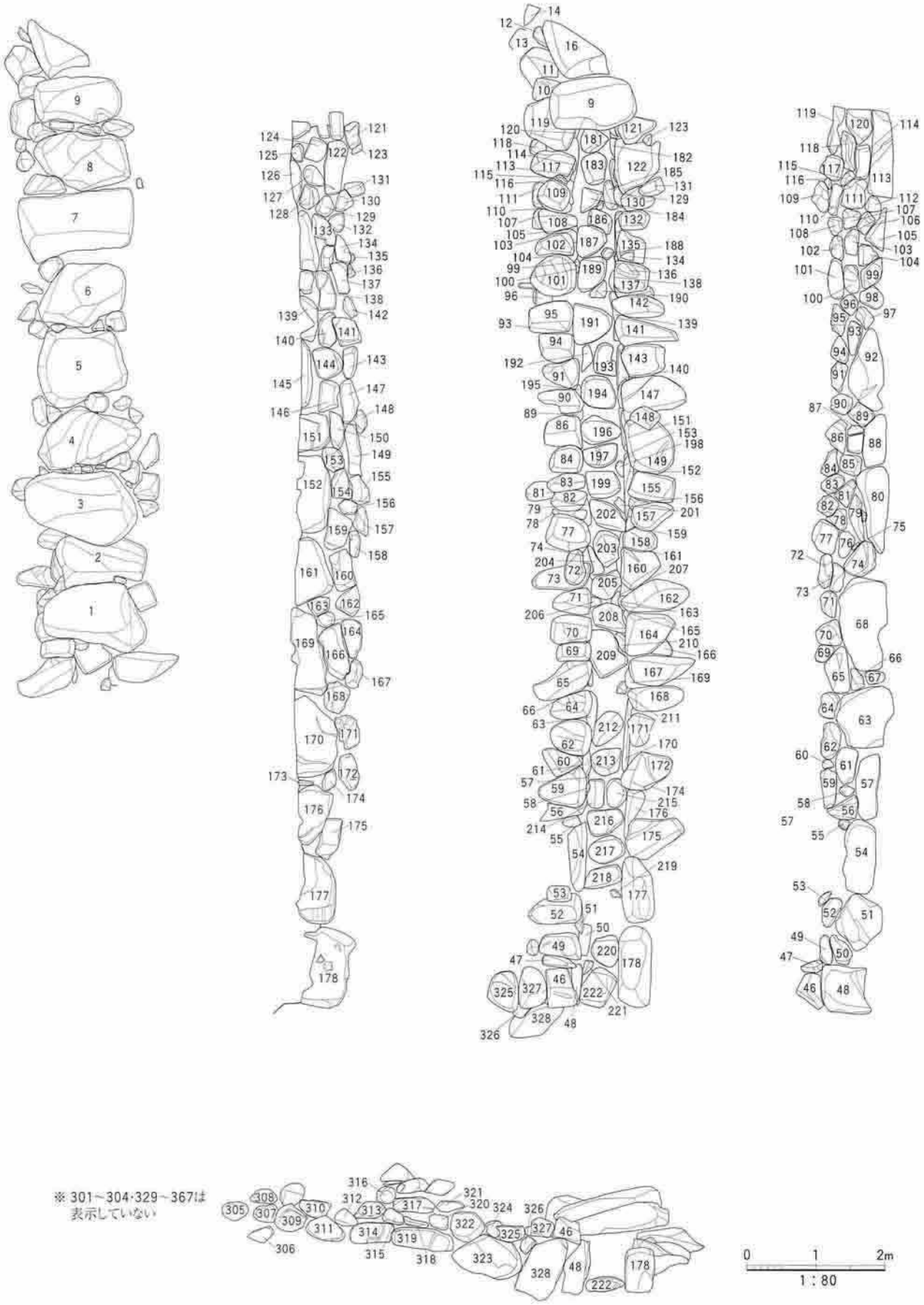


Fig.161　水利施設の石組み

Tab.9－1　出土石材一覧（＊は桃色カリ長石を含む花崗岩を示す。）

石組み溝 SD301　天井石とその周辺	
No	石材の種類
1*	粗粒黒雲母花崗岩
2*	粗粒黒雲母花崗岩
3*	優白質花崗岩
4*	粗粒黒雲母花崗岩
5*	粗粒黒雲母花崗岩
6*	粗粒黒雲母花崗岩
7*	中～粗粒黒雲母花崗岩
8*	細粒黒雲母花崗岩
9*	粗粒黒雲母花崗岩
10*	粗粒黒雲母花崗岩
11*	粗粒黒雲母花崗岩
12*	粗粒黒雲母花崗岩
13*	粗粒黒雲母花崗岩
14	輝石角閃石斑れい岩
15	安山岩
16*	粗粒黒雲母花崗岩
17*	斑状粗粒黒雲母花崗岩
18	アプライト質花崗岩
19	アプライト質花崗岩
20*	含角閃石細粒黒雲母花崗岩
21	中粒黒雲母花崗岩
22	安山岩
23	細～中粒黒雲母花崗岩
24	アプライト質細粒花崗岩
25	安山岩
26	中粒黒雲母花崗岩
27	花崗斑岩
28	安山岩
29	カタクラサイト化した花崗岩
30*	粗粒黒雲母花崗岩
31	アプライト質細粒花崗岩
32*	粗粒黒雲母花崗岩
33*	中～粗粒黒雲母花崗岩
34	中粒黒雲母花崗岩
35	輝石角閃石斑れい岩
36	中～粗粒黒雲母花崗岩
37	中粒黒雲母花崗岩
38	中～粗粒黒雲母花崗岩
39	細粒黒雲母花崗岩
40*	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
41*	粗粒黒雲母花崗岩
42	中粒黒雲母花崗岩
43*	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
44*	細粒黒雲母花崗岩
45*	中粒黒雲母花崗岩

石組み溝 SD301　南西壁	
No	石材の種類
46	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
47	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
48*	粗粒黒雲母花崗岩
49*	粗粒黒雲母花崗岩
50*	粗粒黒雲母花崗岩
51	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
52*	粗粒黒雲母花崗岩
53	砂岩
54	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
55	砂岩
56*	含角閃石黒雲母花崗岩
57*	粗粒黒雲母花崗岩
58*	粗粒黒雲母花崗岩
59	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
60*	含角閃石中～粗粒黒雲母花崗岩
61	中～粗粒黒雲母花崗岩
62	黒雲母花崗岩
63	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
64	細～中粒輝石角閃石斑れい岩
65	輝石角閃石斑れい岩
66	輝石角閃石斑れい岩
67*	粗粒黒雲母花崗岩
68	含角閃石黒雲母花崗岩
69*	粗粒黒雲母花崗岩
70*	粗粒黒雲母花崗岩
71	含角閃石黒雲母花崗岩
72*	粗粒黒雲母花崗岩
73	片麻状花崗岩
74	花崗閃緑斑岩
75	マイロナイト
76	輝石角閃石斑れい岩
77*	粗粒黒雲母花崗岩
78	含角閃石黒雲母花崗岩
79	閃緑岩
80*	中粒黒雲母花崗岩
81	中粒黒雲母花崗岩
82*	粗粒黒雲母花崗岩
83	優白質花崗岩
84*	花崗斑岩
85	含角閃石細～中粒黒雲母花崗岩
86*	粗粒黒雲母花崗岩
87	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
88	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
89	含角閃石黒雲母花崗岩
90*	粗粒黒雲母花崗岩
91*	粗粒黒雲母花崗岩
92*	中粒黒雲母花崗岩
93*	粗粒黒雲母花崗岩
94*	粗粒黒雲母花崗岩
95*	粗粒黒雲母花崗岩
96*	粗粒黒雲母花崗岩
97	粗粒片麻状黒雲母花崗閃緑岩
98	閃緑岩
99	粗粒花崗岩
100*	粗粒黒雲母花崗岩
101*	粗粒黒雲母花崗岩
102	中粒等粒状含角閃石黒雲母花崗岩
103	中粒黒雲母花崗岩
104	粗粒花崗岩
105*	粗粒黒雲母花崗岩
106	細粒閃緑岩
107	中粒等粒状含角閃石黒雲母花崗岩
108*	粗粒黒雲母花崗岩
109*	粗粒黒雲母花崗岩
110*	粗粒黒雲母花崗岩
111*	花崗斑岩
112*	粗粒黒雲母花崗岩
113	粗粒花崗岩
114*	粗粒花崗斑岩
115*	粗粒黒雲母花崗岩
116*	粗粒黒雲母花崗岩
117*	粗粒黒雲母花崗岩
118*	粗粒黒雲母花崗岩
119	優白質花崗岩
120	粗粒花崗岩

石組み溝 SD301　北東壁	
No	石材の種類
121	中粒黒雲母花崗岩
122*	粗粒黒雲母花崗岩
123	含角閃石黒雲母白雲母花崗岩
124	中粒黒雲母花崗岩
125	細粒花崗岩
126*	中粒黒雲母花崗岩
127*	粗粒黒雲母花崗岩
128	優白質含角閃石中粒黒雲母花崗岩
129*	粗粒黒雲母花崗岩
130	輝石角閃石斑れい岩
131*	粗粒黒雲母花崗岩
132*	粗粒黒雲母花崗岩
133	アプライト質花崗岩
134*	粗粒黒雲母花崗岩
135*	粗粒黒雲母花崗岩
136*	粗粒黒雲母花崗岩
137*	粗粒黒雲母花崗岩
138*	粗粒黒雲母花崗岩
139*	粗粒黒雲母花崗岩
140*	粗粒黒雲母花崗岩
141	優白質花崗岩
142	輝石角閃石斑れい岩
143*	粗粒黒雲母花崗岩
144*	粗粒黒雲母花崗岩
145*	粗粒黒雲母花崗岩
146	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
147*	粗粒黒雲母花崗岩
148	細粒輝石角閃石斑れい岩
149*	粗粒黒雲母花崗岩
150	アプライト質花崗岩
151*	粗粒黒雲母花崗岩
152	優白質花崗岩
153*	粗粒黒雲母花崗岩
154*	粗粒黒雲母花崗岩
155*	粗粒黒雲母花崗岩
156*	粗粒黒雲母花崗岩
157*	粗粒黒雲母花崗岩
158	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
159	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
160*	粗粒黒雲母花崗岩

Tab.9－2　出土石材一覧（＊は桃色カリ長石を含む花崗岩を示す。）

161*	粗粒黒雲母花崗岩
162	輝石角閃石斑れい岩
163	閃緑岩
164	含角閃石中～粗粒黒雲母花崗岩
165	含角閃石中～粗粒黒雲母花崗岩
166	輝石角閃石斑れい岩
167	粗粒花崗岩
168*	中粒黒雲母花崗岩
169*	粗粒黒雲母花崗岩
170*	粗粒黒雲母花崗岩
171*	粗粒黒雲母花崗岩
172*	粗粒花崗岩
173	マイロナイト
174*	粗粒黒雲母花崗岩
175	優白質含角閃石細粒黒雲母花崗岩
176	粗粒黒雲母花崗岩
177	粗粒黒雲母花崗岩
178*	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
179*	粗粒黒雲母花崗岩

石組み溝SD301　床石

No.	石材の種類
180	花崗岩
181	花崗岩
182	輝緑岩orひん岩
183	含角閃石黒雲母花崗岩
184*	粗粒黒雲母花崗岩
185	閃緑岩
186	含角閃石黒雲母花崗岩
187*	粗粒黒雲母花崗岩
188*	粗粒黒雲母花崗岩
189*	粗粒黒雲母花崗岩
190*	粗粒黒雲母花崗岩
191*	粗粒黒雲母花崗岩
192	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
193	アプライト質花崗岩
194	花崗岩
195*	粗粒黒雲母花崗岩
196*	粗粒黒雲母花崗岩
197*	粗粒黒雲母花崗岩
198	閃緑石
199*	粗粒黒雲母花崗岩
200	無斑晶質安山岩
201*	粗粒黒雲母花崗岩
202*	粗粒黒雲母花崗岩
203*	粗粒黒雲母花崗岩
204	細粒閃緑岩
205*	粗粒黒雲母花崗岩
206*	粗粒黒雲母花崗岩
207*	粗粒黒雲母花崗岩
208*	粗粒黒雲母花崗岩
209*	粗粒黒雲母花崗岩
210	細粒閃緑岩
211	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
212*	粗粒黒雲母花崗岩
213*	粗粒黒雲母花崗岩
214*	粗粒黒雲母花崗岩
215*	粗粒黒雲母花崗岩
216*	粗粒黒雲母花崗岩
217*	粗粒黒雲母花崗岩
218*	粗粒黒雲母花崗岩
219	粗粒黒雲母花崗岩
220*	粗粒黒雲母花崗岩
221	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
222*	粗粒黒雲母花崗岩

泉施設SG301

No.	石材の種類
301*	粗粒黒雲母花崗岩
302*	粗粒黒雲母花崗岩
303	優白質白雲母花崗岩
304*	粗粒黒雲母花崗岩
305*	粗粒黒雲母花崗岩
306	優白質白雲母花崗岩
307	チャート
308	砂岩
309	粗粒黒雲母花崗岩
310	含角閃石中～粗粒黒雲母花崗岩
311	中粒黒雲母花崗岩
312	輝石角閃石斑れい岩
313	輝石角閃石斑れい岩
314*	粗粒黒雲母花崗岩
315*	粗粒黒雲母花崗岩
316	中粒黒雲母花崗岩
317	中粒黒雲母花崗岩
318*	粗粒黒雲母花崗岩
319	中～粗粒花崗岩
320*	粗粒黒雲母花崗岩
321	粗粒黒雲母花崗岩
322*	粗粒黒雲母花崗岩
323*	中粒黒雲母花崗岩
324*	中粒黒雲母花崗岩
325*	粗粒黒雲母花崗岩
326	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
327	含角閃石中粒黒雲母花崗岩
328	含角閃石中～細粒黒雲母花崗岩
329	粗粒花崗閃緑岩
330*	粗粒黒雲母花崗岩
331	粗粒黒雲母花崗岩
332*	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
333	中粒黒雲母花崗岩
334	粗粒黒雲母花崗岩
335	中粒黒雲母花崗岩
336	アプライト質細粒花崗岩
337*	粗粒黒雲母花崗岩
338	含角閃石細粒黒雲母花崗岩
339*	中粒黒雲母花崗岩
340	含角閃石黒雲母花崗閃緑岩
341	中粒黒雲母花崗岩
342*	粗粒黒雲母花崗岩
343	粗粒黒雲母花崗岩
344*	中粒黒雲母花崗岩
345*	中粒黒雲母花崗岩
346	細粒輝石角閃石斑れい岩
347*	粗粒黒雲母花崗岩
348	中粒黒雲母花崗岩
349*	粗粒黒雲母花崗岩
350	含角閃石粗粒黒雲母花崗岩
351*	中粒花崗岩
352*	粗粒黒雲母花崗岩
353	中粒～粗粒黒雲母花崗岩
354	紅れん石石英片岩
355	粗粒黒雲母花崗岩
356*	粗粒黒雲母花崗岩
357*	粗粒黒雲母花崗岩
358*	粗粒黒雲母花崗岩
359*	粗粒黒雲母花崗岩
360	中粒黒雲母花崗岩
361	花崗斑岩
362	含角閃石黒雲母花崗岩
363	優白質中粒花崗岩
364	アプライト質細粒花崗岩
365	チャート
366	含角閃石細粒黒雲母花崗岩
367*	中粒黒雲母花崗岩

安山岩：無斑晶質のものがある。

〈岩種構成〉

石組み溝SD301から出土した石材215個体のうち、花崗岩類が196個体で全体の91%、残りの９%に当る19個体が花崗岩類以外の岩石である。花崗岩類の中で60%(117個体)が淡桃～桃色のカリ長石が目立つ黒雲母花崗岩であり、これ以外の花崗岩類は残りの40%(79個体)である。花崗岩類以外の岩石の中の約半数に当る９個体、４%が斑れい岩である。

ii）泉施設SG301の岩種

立面図をFig.161に示し、岩種構成をFig.162に示す。SG301の石材も石組み溝と同様に、大半を占める花崗岩類と花崗岩類以外の岩石からなる。花崗岩類は黒雲母花崗岩が半数を占め、その他にアプライト質花崗岩、優白質花崗岩、花崗斑岩、花崗閃緑岩がある。花崗岩類以外の岩石は、斑れい岩、砂岩、チャート、紅れん石石英片岩である。

〈岩相の特徴〉

石材のうち特徴的な岩相を示すものについて以下に述べる。

花崗岩類

黒雲母花崗岩：粗～中粒である。角閃石を含むものと含まないもの、淡桃～桃色のカリ長石が目立つもの、黄色や黄褐色のカリ長石を含むもの、角閃石あるいは電気石と考えられる針状結晶を含むもの、暗色包有物が観察されるもの、ペグマタイト脈を含むものがある。

アプライト質花崗岩：細～中粒で、角閃石あるいは電気石と考えられる針状鉱物を含むものがある。

優白質花崗岩：白雲母を含むものがある。

花崗斑岩：変色して緑色を呈している。

花崗閃緑岩：粗粒で角閃石や黒雲母を含む。

花崗岩類以外の岩石

斑れい岩：細～中粒で角閃石や輝石を含んでいる。

紅れん石石英片岩：紅れん石が特徴的な石英片岩である。

〈岩種構成〉

泉施設SG301から出土した石材68個体のうち、花崗岩類が61個体で全体の90%、残りの10%にあ

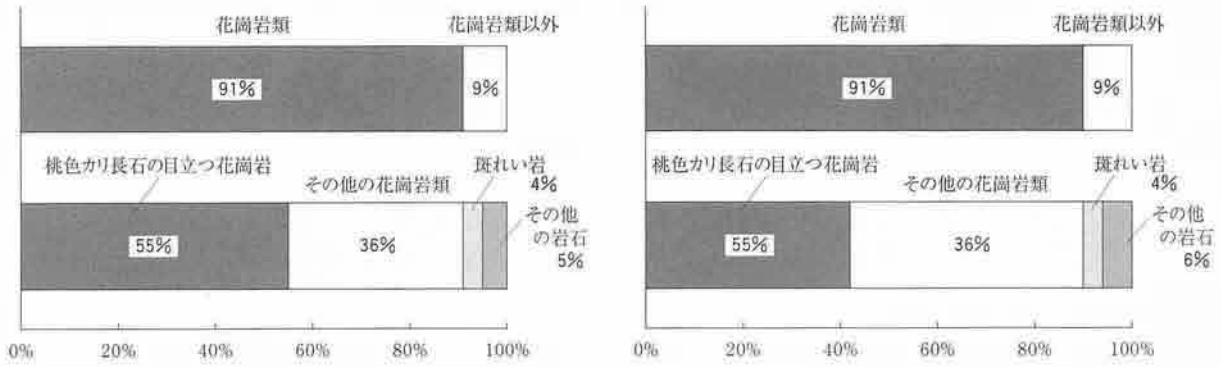


Fig.162　SD301とSG301の岩石の構成

たる７個体が花崗岩類以外の岩石である。花崗岩類の中で46％(28個体)が淡桃～桃色のカリ長石が目立つ黒雲母花崗岩であり、これ以外の花崗岩類は残りの54％(33個体)である。花崗岩類以外の岩石の中の約半数に当る３個体、全体の４％が斑れい岩である。

３）それぞれの石材の分布地域(Fig.163～165)

近畿地方に見られる花崗岩類の分布をFig.163に、領家帯の地質図をFig.164に示す。また、近畿地方および周辺地域の地帯構造区分をFig.165に示す。

黒雲母花崗岩は花崗岩類の中でも一般的に産出する岩石である。山陽帯や山陰帯の花崗岩類と、領家帯の新期花崗岩類の一部に見られる。

また、針状の電気石を含むという記載のある花崗岩は近畿地方には見当らないが、針状の角閃石を含む花崗岩としては土橋石英閃緑岩がある。

アプライト質花崗岩は、領家帯に属する泉南地域の滝尻アダメロ岩や淡路島の野島花崗閃緑岩をはじめとし、その他の花崗岩体においても観察される花崗岩であるが、六甲山地にも山陽帯に属する六

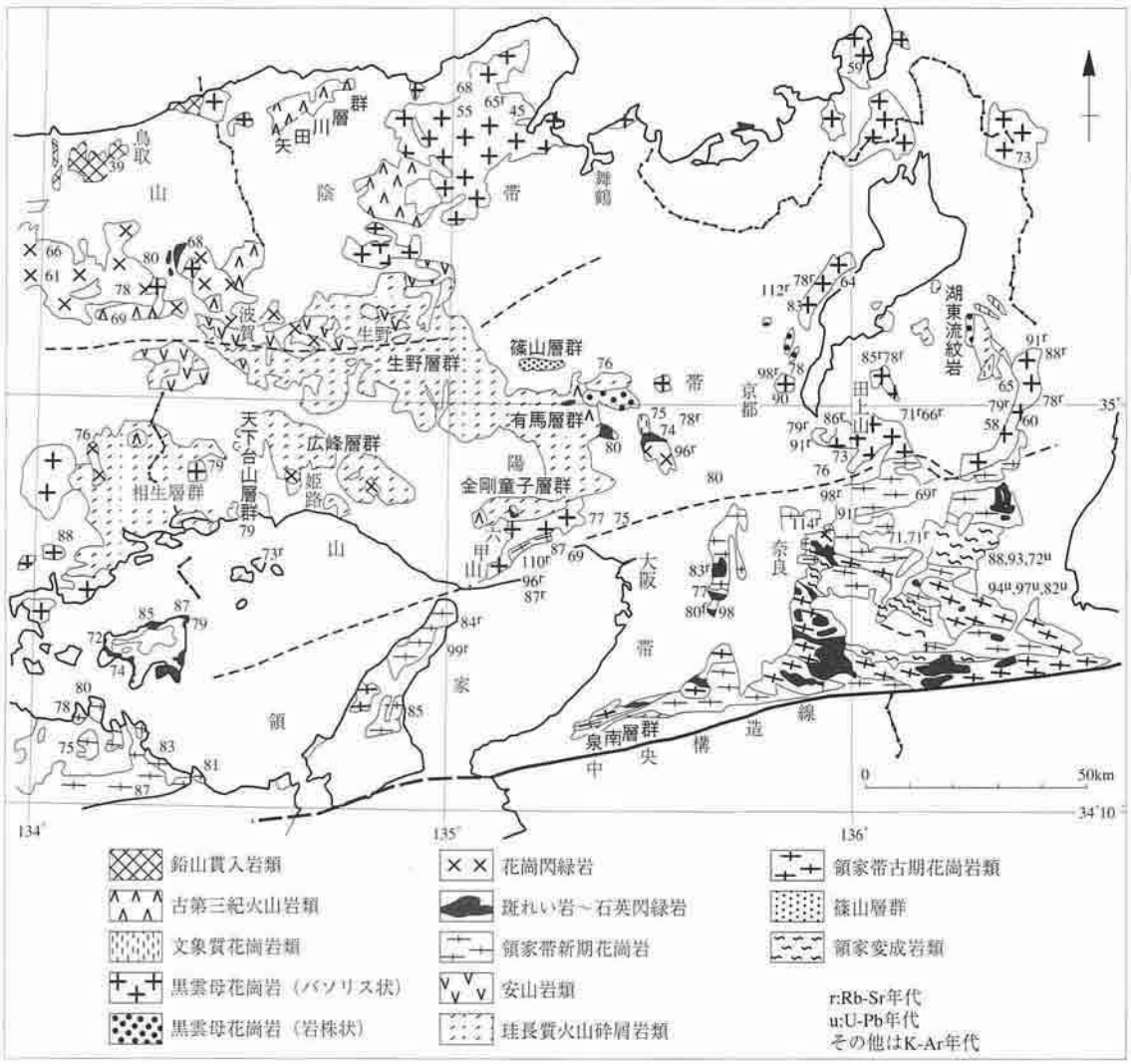


Fig.163　近畿地方内帯の白亜紀～古第三期の火成岩類の分布と放射年代[日本の地質『近畿地方』編集委員会1987]

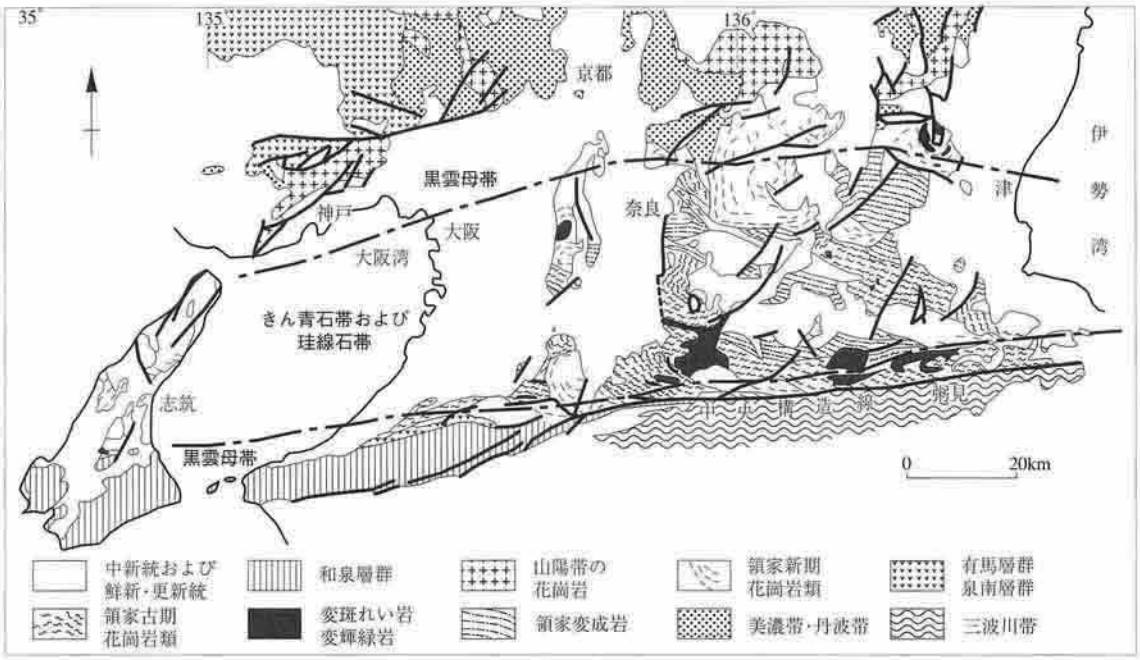


Fig.164　近畿地方領家帯の地質図および変成分帯図[日本の地質『近畿地方』編集委員会1987]

甲花崗岩を貫き、あるいは漸移して地形的に高所に点在する細粒のアプライト質花崗岩が見られる。

優白質花崗岩は、領家帯の新期花崗岩に属する淡路島の茂谷花崗岩、山陽帯に属する播磨花崗岩、奈良県天川村から和歌山県本宮町にかけて南北に点在する大峰酸性岩類の白倉岩体や川迫岩体、旭岩体に見られる。

黒雲母白雲母花崗岩は、領家帯の新期花崗岩に属するものでは笠置から加茂に分布する木屋花崗岩、奈良県東方の深川から笠置南部に分布する深川花崗岩、信貴山付近とその北部に分布する細粒花崗岩、淡路島の茂谷花崗岩がある。山陽帯に属するものでは、北摂に分布する行者山花崗岩体がある。

カタクラサイト化した花崗岩は、花崗岩体を切る断層沿いに形成されることが多く、中央構造線沿いの領家帯の花崗岩や葛城石英閃緑岩などに見られる。

花崗斑岩は、花崗岩体を貫く岩脈などの貫入岩類に見られ、領家帯や山陽帯の花崗岩類の分布地域によく産出する。花崗斑岩脈の分布する地域には、北摂山地の能勢町付近に分布する花崗斑岩脈、琵琶湖南側から西側にかけて分布する田上花崗岩体や比良花崗岩体、比叡花崗岩体の岩脈、琵琶湖東方から岐阜県との県境付近に分布する犬上花崗斑岩などがある。その他、近畿地方南部の和歌山県勝浦町から三重県尾鷲市にかけて分布する熊野酸性火成岩類の花崗斑岩体や奈良県天川村から和歌山県本宮町にかけて南北に点在する大峰酸性岩類の片川－椋呂岩体や



Fig.165　近畿地方の地質構造区分
[日本の地質『近畿地方』編集委員会1987]

白谷岩体がある。また、田上花崗岩体と泉南地域の領家帯新期花崗岩類の石見川アダメロ岩には花崗閃緑斑岩が見られる。

片麻状花崗閃緑岩は、領家帯の古期花崗岩類におもに見られる岩石である。その分布地域は中央構造線沿いの北側である。泉南地域では神於山片麻状花崗閃緑岩、金剛山地から桜井南方地域では竜門岳石英閃緑岩・千早片麻状花崗閃緑岩－芦原片麻状石英閃緑岩、平石花崗閃緑岩－滝畑片麻状花崗閃緑岩、高取山アダメロ岩、笠置地域では狭川花崗岩、須川花崗岩、生駒山から信貴山付近にも片麻状花崗閃緑岩が見られる。淡路島では塩尾花崗岩、都志花崗岩がある。

花崗閃緑岩および閃緑岩は、領家帯の新期花崗岩類および山陽帯の花崗岩類が分布する地域に見られる。その分布地域は領家帯新期花崗岩類では中央構造線沿いの北側である。金剛山地から桜井南方地域に分布する粗粒花崗岩や塊状花崗閃緑岩、笠置地域では木屋花崗岩、柳生花崗岩、初瀬地域の粗粒花崗閃緑岩、生駒山から信貴山付近にも粗粒花崗岩、塊状花崗閃緑岩が見られる。淡路島では志筑花崗閃緑岩、洲本花崗閃緑岩、江井花崗閃緑岩、野島花崗閃緑岩である。山陽帯では、琵琶湖北部の貝月山花崗岩体、北摂の茨木複合花崗岩体の能勢岩体、六甲山地の布引花崗閃緑岩、石切花崗岩、播磨地域の八重畑花崗岩体、船岩花崗岩がある。また、山陰帯では、播但地域に分布する東河内花崗閃緑岩・川上花崗閃緑岩や波賀複合花崗岩体にも見られる。この他、琵琶湖南側の田上花崗岩体には岩脈として見られる。

花崗岩類以外の岩石の中で斑れい岩は、近畿地方では生駒山に分布する生駒斑れい岩が有名であるが、これ以外にも初瀬地域の領家帯の斑れい岩、生駒山地の領家帯古期花崗岩類の片麻状花崗閃緑岩に伴う斑れい岩、北摂の三草山複合岩体の北部岩体、播磨地域の船岩花崗岩、山陰帯の波賀複合花崗岩体や但馬海岸地域の小花崗岩体の吉川花崗岩中の斑れい岩にも見られる。

砂岩は、奈良県北部および京都市東部から近畿地方中－北部にかけて広く分布する丹波帯、大阪南部の和泉山脈を構成する和泉層群(和泉帯)や和歌山県から三重県南部にかけて広く分布する四万十累帯や秩父累帯に分布する。

安山岩類のうち白亜紀から古第三紀にかけては、大阪府和泉市に分布する領家帯泉南層群の小川安山岩類、兵庫県篠山町付近に分布する山陽帯の篠山層群、姫路の北方に分布する生野層群や相生層群、兵庫県北部の但馬地域に分布する山陰帯の矢田川層群に見られる。また、新第三系から第四系にかけては、奈良市北東の若草山に分布する三笠山安山岩、大阪府と奈良県の県境付近に分布する二上層群のドンズルボー累層の畑火山岩、原川累層の春日山火山岩・石まくり火山岩、藤井火山岩、明神山火山岩・柏峰火山岩・雄岳火山岩、ドロコロ火山岩、雁多尾畑火山岩・東条火山岩・芝山火山岩、定ヶ城累層の寺山火山岩六甲山地東部に位置する甲山安山岩、富田林市から岸和田市にかけて小規模な安山岩類などがある。その他、岩脈状に分布する安山岩として、領家帯の花崗岩類や山陽帯の六甲花崗岩地帯、信貴山周辺と山頂や中央構造線沿いに見られる。これらのうち無斑晶質安山岩は甲山安山岩、春日山火山岩・石まくり火山岩、信貴山頂の安山岩脈に見られる。

マイロナイトは、中央構造線の付近に分布する領家帯の古期花崗岩類に属する岩石に見られる。和泉山脈北縁部では北へ離れて分布しており、代表的なものには岸和田南方の津田川・牛滝川中流域

や竜門岳の南の竜門岳石英閃緑岩がある。

輝緑岩(ひん岩)は、花崗斑岩と同様に花崗岩体を貫く岩脈などの貫入岩類に見られ、領家帯や山陽帯の花崗岩類の分布する地域に産出する。その他、琵琶湖南側の田上花崗岩体、西側の比叡岩体・比良岩体中の岩脈、淡路島の新期脈岩類、兵庫県北部の八鹿西方に分布する猿尾滝ひん岩脈にも見られる。

チャートは、奈良県北部および京都市東部から近畿地方中ー北部にかけて広く分布する丹波帯、和歌山県から三重県南部にかけて広く分布する四万十累帯や秩父累帯、和歌山県有田川の中・上流部の北方の三波川帯に属する生石層に見られる。

紅れん石石英片岩は、淡路島の南方の沼島や徳島県の眉山、中央構造線の南側に構造線に沿って分布する三波川帯に見られる。

4）石材の産地推定

出土した石材は以上の地域に分布する。それぞれの石材について、その特徴から考えられる原産地を推定する。

i）花崗岩類

出土した石材の中で特徴的な岩相を示すものに淡桃～桃色のカリ長石の目立つ黒雲母花崗岩がある。近畿地方では淡桃～桃色のカリ長石の目立つ花崗岩に、山陽帯に属する六甲花崗岩や剣尾花崗岩体、茨木複合花崗岩体の妙見岩体、播磨花崗岩、領家帯の新期花崗岩に属する滝尻アダメロ岩、東山寺花崗岩、山陰帯に属する和田山花崗岩がある。これらの花崗岩体のうち、剣尾花崗岩体は主として等粒状で中～粗粒の角閃石黒雲母アダメロ岩で、茨木複合花崗岩体の妙見岩体は均質・細粒のアダメロ岩である。また、滝尻アダメロ岩は中～粗粒で塊状の黒雲母アダメロ岩を主とし、東山寺花崗岩は細～中粒で塊状の黒雲母花崗岩～花崗閃緑岩で、和田山花崗岩は中～粗粒の角閃石黒雲母アダメロ岩であり、粗～中粒で淡桃～桃色のカリ長石が目立つ黒雲母花崗岩という特徴に一致しない。六甲花崗岩はおもに中～粗粒、ときに細粒相が見られる黒雲母花崗岩で、桃色のカリ長石・斜長石・石英・黒雲母からなり、岩相は均質で捕獲岩はなく、播磨花崗岩に岩相が似ている。播磨花崗岩は相生付近・加古川市北方・龍野市北方・家島に点在する粗～中粒で優白質の黒雲母花崗岩で、桃色のカリ長石・斜長石・石英・黒雲母、ときに少量の角閃石を含む。六甲花崗岩および播磨花崗岩はともに、主に中～粗粒で桃色のカリ長石を含む黒雲母花崗岩の特徴に一致する。さらに、播磨花崗岩は角閃石を少量含むが六甲花崗岩には含まれない。

以上の鉱物組成や鉱物の量比、粒子の大きさより、石組み溝および水溜めの花崗岩類のうち、桃色のカリ長石と少量の角閃石を含む黒雲母花崗岩は播磨花崗岩、桃色のカリ長石を含む黒雲母花崗岩は六甲花崗岩または播磨花崗岩と考えられる。ただし、今回の調査では偏光顕微鏡による観察を行っていないので桃色のカリ長石を含む黒雲母花崗岩については六甲花崗岩または播磨花崗岩とするにとどめる。

黄色や黄褐色のカリ長石を含むという記載のある黒雲母花崗岩は近畿地方では見当らない。風化作

用によってカリ長石が変質したものの可能性があり、この特徴から原産地を推定できない。

また、六甲花崗岩の貫入時に捕獲されたと考えられている土橋花崗閃緑岩には六甲花崗岩による接触変成作用・花崗岩化作用によって生成された針状の角閃石が見られる。石材の花崗岩類の特徴の一つにある、角閃石あるいは電気石と考えられる針状鉱物が角閃石なら、それは土橋石英閃緑岩である可能性がある。

アプライト質花崗岩は前項でも述べたように花崗岩体において普遍的に観察されるものであるが、角閃石あるいは電気石と考えられる針状結晶を含むもの、あるいは優白質で前述の針状鉱物を含むアプライト質花崗岩は土橋石英閃緑岩である可能性がある。優白質で前述の針状鉱物を含み桃色のカリ長石を含むアプライト質花崗岩は、土橋石英閃緑岩と六甲花崗岩との境界部付近である可能性がある。

優白質の特徴が顕著な花崗岩には前項で述べたように、淡路島の茂谷花崗岩、山陽帯に属する播磨花崗岩、大峰酸性岩類の白倉岩体や川迫岩体、旭岩体がある。石材の中で優白質花崗岩やペグマタイト質あるいはアプライト質優白質花崗岩は、その特徴からでは原産地は推定できないが、角閃石あるいは電気石と考えられる針状鉱物を含む優白質花崗岩は土橋石英閃緑岩である可能性がある。角閃石を含む優白質黒雲母花崗岩は播磨花崗岩あるいは大峰酸性岩類の白倉岩体である可能性がある。白雲母を含む優白質花崗岩は淡路島の茂谷花崗岩あるいは大峰酸性岩類の川迫岩体、旭岩体の可能性がある。

黒雲母白雲母花崗岩(複雲母花崗岩)には、木屋花崗岩、深川花崗岩、信貴山付近とその北部に分布する細粒花崗岩、茂谷花崗岩、行者山花崗岩体がある。石材に見られる黒雲母白雲母花崗岩には角閃石が含まれるが、上記の黒雲母白雲母花崗岩には角閃石を含むという記載がないため、黒雲母白雲母花崗岩の原産地を特定することはできない。

カタクラサイト化した花崗岩は、前項で述べたように中央構造線沿いの領家帯の花崗岩や葛城石英閃緑岩などに見られるが、出土した石材の岩石学的な特徴から原産地を特定することはできない。これらの分布地域のいずれかに原産地があると考えられる。

花崗斑岩、片麻状花崗閃緑岩、花崗閃緑岩と閃緑岩も同様に石材の岩石学的特徴からこれらの原産地を特定することはできない。前項で述べた分布地域のいずれかに原産地があると考えられる。

ii) 花崗岩類以外の岩石

斑れい岩は、前項で述べたように近畿地方では生駒斑れい岩、初瀬地域の斑れい岩、生駒山地の片麻状花崗閃緑岩に伴う斑れい岩、三草山複合岩体の北部岩体、播磨地域の船岩花崗岩、山陰帯の波賀複合花崗岩体や吉川花崗岩中の斑れい岩、潮岬火成複合岩類中の斑れい岩がある。これらの斑れい岩のうち、初瀬地域の斑れい岩は細～中粒で斜長石・角閃石と少量の黒雲母からなる角閃石斑れい岩で、生駒山地の片麻状花崗閃緑岩に伴う斑れい岩は片状～弱片状の輝石角閃石斑れい岩である。三草山複合岩体の北部岩体に見られる斑れい岩は複輝石石英斑れい岩と単斜輝石石英斑れい岩で、船岩花崗岩に見られる斑れい岩は石英斑れい岩である。また、波賀複合花崗岩体に見られる斑れい岩は輝石石英斑れい岩で、吉川花崗岩に見られる斑れい岩は石英斑れい岩であり、潮岬火成複合岩類に見られる斑れい岩はかんらん石斑れい岩と斜長岩質斑れい岩である。石材に見られる輝石角閃石斑れい岩の岩相

に一致しない。生駒斑れい岩はほとんど角閃石斑れい岩からなるが、斜方輝石を含む粗粒の輝石角閃石斑れい岩、かんらん石輝石角閃石斑れい岩、細粒で輝緑岩質の組織を残す角閃石斜方輝石斑れい岩や斜長石の斑晶の多い角閃石斑れい岩、斜長石の多い優白質角閃石斑れい岩がある。

以上の造岩鉱物組成より、石組み溝SD301および泉施設SG301の斑れい岩は生駒斑れい岩であると考えられる。

安山岩の中で特徴的な岩相を示すものに無斑晶質安山岩がある。前述のように無斑晶質安山岩は春日山火山岩・石まくり火山岩、信貴山頂の安山岩脈に見られるが、出土した石材の特徴からはさらに細かな原産地を特定することはできない。

砂岩、マイロナイト、輝緑岩(ひん岩)、チャート、紅れん石石英片岩は石材の岩石学的特徴からこれらの原産地を特定することはできない。前項で述べた分布地域のいずれかに原産地があると考えられる。

5）まとめ

今回行った石組み溝SD301と泉施設SG301を構成する石材の岩種判定で、以下のことが明らかとなった。

①両遺構ともに出土した石材の90%以上は花崗岩類が占めた。

②花崗岩類のうちSD301では59%、SG301では46%が淡桃～桃色のカリ長石が目立つ黒雲母花崗岩で占められ、この特徴を有する花崗岩類は六甲花崗岩あるいは播磨花崗岩であると推定された。

③石材の岩石学的特徴の一つに挙げられる角閃石あるいは電気石と考えられる針状鉱物が角閃石であるなら、それは土橋石英閃緑岩の可能性がある。

④優白質花崗岩類のうち角閃石を含む黒雲母花崗岩は播磨花崗岩あるいは大峰酸性岩類の白倉岩体、白雲母を含む花崗岩は淡路島の茂谷花崗岩あるいは大峰酸性岩類の川迫岩体、旭岩体の可能性がある。

⑤石組み溝には領家帯古期花崗岩類やこれに属して中央構造線沿いに分布するマイロナイトが含まれ、泉施設では三波川帯の紅れん石石英片岩が含まれている。

⑥花崗岩類以外の石材は両遺構で全体の10%以下であるが、そのうちの約半数が輝石角閃石斑れい岩であった。

⑦輝石角閃石斑れい岩は生駒斑れい岩であると推定された。　（川端・小倉）

第2節　動物遺体

1）貝類

本書で報告した各調査では、飛鳥時代に属する4E区の第7c層中の貝集中層・第7a層、および江戸時代に属する1C・1D区のSK798・800・801・802・803・804・805・807などの土壙、SD730Bなどの溝や、1E区の第2a層・SK790などの各遺構・層から貝類が出土している。ここでは、古墳時代後期～飛鳥時代に属する第7c層中の貝集中層と、江戸時代に属するSK801・804・805・803・800出土の貝類につき定量のサンプル土を水洗選別した結果を報告する。なお、報告を割愛する他の出土貝類については、1D・1E区でヒオウギが1点出土しているのを除き、すべて以下に報告する種に含まれている。

i）出土状況およびサンプルの採取方法

4E区における第7c層中の貝集中層は、谷の南北アゼNo.2の東で検出された(Fig.166、原色図版5－下)。谷の中での分布はこの辺りに限られる。水成層ではなく偽礫からなる客土層であるため、出土した貝についてはこの場所に投棄されたものではなく、古墳時代以降に谷の内部に堆積した地層に含まれていたものが運ばれたと考えられる。

江戸時代の各遺構については、貝をはじめとする食物残滓が多く見られる土壙(ゴミ穴)を選んだ。

ここで報告する資料は、第7c層中の貝集中層出土資料については2個所から合計42.25kgのサンプル土を、江戸時代のゴミ穴については各遺構の埋土(SK804については埋土の各層)から27.2～127.7kgのサンプル土を採取し、最小0.5㎜の篩を用い水洗篩別して得られたものである。第7c層中の貝集中層の2個所のサンプル土や、江戸時代のSK804の各層サンプル土から得られた結果にはサンプル間で大きな差異が認められなかったことから、それぞれ一括して報告する。

Tab.10　出土貝類一覧

腹足綱
クロアワビ　*Notohaliotis discus* (Reeve)
マダカアワビ　*Notohaliotis gigantea* (Gmelin)
ミミガイ科(アワビ類)　Family Haliotidae
キサゴ　*Umbonium (Suchium) costatum* (Kiener)
ダンベイキサゴ　*Umbonium (Suchium) giganteum* (Lesson)
サザエ　*Turbo (Batillus) cornutus* Solander
ヘナタリ　*Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata* (Gmelin)
カワアイ　*Crithidea (cerithideopsilla) djadjariensis* (K. Martin)
マガキガイ　*Conomurex luhuanus* (Linne)
アカニシ　*Rapana thomasiana* (Crosse)
バイ　*Babyronia japonica* (Reeve)
カワニナ　*Semisulcospira bensoni* (Philippi)
タケノコカワニナ　*Stenomelania loebbeckii* (Brot)
ヒメタニシ　*Sinotaia quadrata* (Benson)
オオタニシ　*Cipangopaludina japonica* (v. Martens)
タニシ科　Family Viviparidae
オカチョウジガイ　*Allopeas kyotoensis* (Pilsbry et Hirase)

斧足綱
サルボウ　*Anadara (Scapharca) subcrenata* (Lischke)
アカガイ　*Anadara (Scapharca) broughtonii* (Schrenck)
マガキ　*Crassostrea gigas* (Thunberg)
ハマグリ　*Meretrix lusoria* (Roeding)
カガミガイ　*Dosinia (Phacosoma) japonica* (Reeve)
オキシジミ　*Cyclina orientalis* Sowerby
オキアサリ　*Gomphina (Macridiscus) veneriformis* (Lamarck)
アサリ　*Tapes (Amygdala) japonica* (Deshayes)
オオノガイ　*Mya (Arenomya) arenaria oonogai* Makiyama
セタシジミ　*Corbicula sandai* Reinhardt
マシジミ　*Corbicula (Corbiculina) leana* Prime

ii）整理・分析方法

資料の同定作業には現生標本と図鑑[吉良1954・波部1961]を利用した。また資料の一部の同定については、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏および滋賀県立琵琶湖博物館の中井克樹氏より貴重なご助言を賜った。個体数については、シジミガイ科は殻頂総数の1／2を、その他の二枚貝類については左右殻数の多数の方を、腹足類は殻口数を原則として採用した。

iii）貝類の構成と考察（Tab.10～13、図版95）

出土した貝類はTab.10、図版95に示した通りである。以下、飛鳥時代の資料と江戸時代の資料に大別して報告する。

古墳時代後期～飛鳥時代の資料

第7c層中の貝集中層から出土した貝類のうち同定されたものは総数166点である。資料はチョーク化が進行しておらず、遺存状態は比較的良好であったが、ハマグリとカガミガイは大半が破損しており、特にカガミガイは殻頂を確認できた資料が皆無であった。貝類の構成については、セタシジミ・ヘナタリ・カワアイ・オオタニシ・ヒメタニシなど淡水・汽水性のものが86.7％を占め、鹹水性のものは12.7％にとどまる（Tab.11）。ハマグリなど鹹水性の資料は基本的に内湾で捕獲可能なものといえよう。陸産のオカチョウジガイは人為的に持ち込まれたものではないと考えられる。

弥生時代の終末から古墳時代にかけての当遺跡周辺の貝出土遺跡には、大阪市崇禅寺遺跡・豊中市

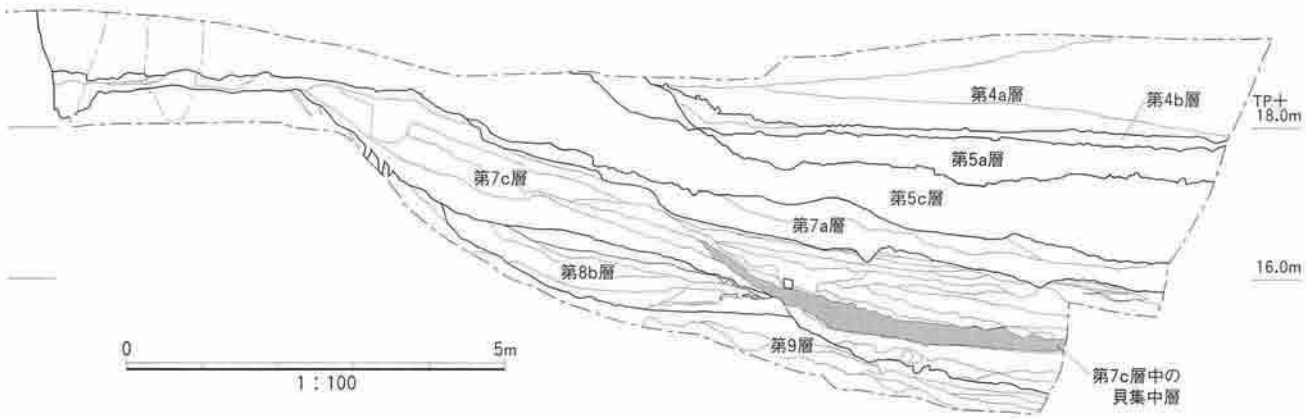


Fig.166　4 E区谷南北アゼNo.2東壁断面図

Tab.11　第7c層出土貝類

種　名	個体数	比率(%)
セタシジミ	116	69.9
ハマグリ	17	10.2
カワアイ	17	10.2
ヘナタリ	5	3.0
アカニシ	3	1.8
オオタニシ	3	1.8
ヒメタニシ	2	1.2
タニシ科	1	0.6
カガミガイ	1	0.6
オカチョウジガイ	1	0.6
合　計	166	100.0

Tab.12　第7c層・上津島遺跡出土セタシジミの計測値

遺跡名(計測数)	平均値(mm)		最大値(mm)		最小値(mm)	
	殻長	殻高	殻長	殻高	殻長	殻高
難波宮(68)	24.2	24.4	35.2	34.2	14.6	15.3
上津島(30)	24.7	24.7	30.6	29.6	21.9	22.0

上津島遺跡[石井1997]・同市島田遺跡などがあるが、貝種の構成を見ると、いずれもセタシジミ・ヤマトシジミを筆頭に淡水・汽水性の貝を主体とし、ハマグリなどの鹹水性の貝が少量含まれるという共通した特徴をもつ[池田1999]。ここで報告する資料についても、同様の傾向を示すものといえよう。また、前期難波宮の造営直前とみられる７世紀中葉の遺構であるSK10043からはシジミ属の資料を主体とする少量の貝類が出土している[樽野1981]。

次に、個別の特徴を見ると、まず、セタシジミについては、黒褐色の殻皮をもつ資料が多く、殻頂部の突出がやや弱いタイプも含まれる。古墳時代中期の上津島遺跡第５次調査出土資料と比較すると(Tab.12)、殻長・殻高の平均値はほぼ等しいこと、当遺跡出土資料にはより大きさの多様なものが含まれることなどがわかる。カガミガイは、貝層断面の観察によれば大型の資料が大半を占めるものとみられる。サンプルも含めて殻頂を欠損しており正確に計測することはできなかったが、殻長は70～80㎜前後に及ぶものと推定される。一方、ハマグリは、計測可能であった３点の殻高は28.3～47.5㎜であり、破片からも小型の資料が大半を占めるものとみられる。河内湾(湖)岸の遺跡から出土したハマグリの殻高をこれまでに計測した結果によれば、弥生時代前・中期には平均60㎜を超えていたのに対し、弥生時代後期から古墳時代にかけては30～40㎜程度と小型化する傾向を示す[池田1999]。当遺跡出土資料についてもそうした傾向に当てはまるものとして捉えることができよう。

古墳時代以降の貝出土遺跡の研究は未だ基礎的な段階であるが、物資流通の拠点であった可能性が高い当遺跡で出土したこれらの資料の分析が今後進めば、当時の貝の採集・加工・流通形態を検討する上で貴重な情報を得られる可能性がある。

Tab.13　江戸時代遺構出土貝類種名および個体数

種名＼遺構名 (サンプル土量kg)	SK801 (52.4)	SK804 (331.0)	SK805 (—)	SK803 (26.4)	SK800 (42.3)
セタシジミ・マシジミ	61	2,185	6	429	40
ハマグリ	477	55	53	1	1
サザエ	21	4			
バイ	24				
アカガイ	11	3	2	1	
アカニシ	9				
サルボウ	7				
オキシジミ	7				
アサリ	4				
クロアワビ	1				
マダカアワビ		1			
ミミガイ科(アワビ類)	●		●	●	●
キサゴ		1			
ダンベイキサゴ	1				
マガキガイ？					1
マガキ				1	
オキアサリ	1				
オオノガイ？	1				
カワニナ		1			1
タケノコカワニナ				1	
オカチョウジガイ	8	22	3	8	1
合計	633	2,272	64	441	44

●殻頂は確認できなかったが破片から存在が確認できるもの

江戸時代の資料

江戸時代に属する諸遺構から出土した貝類のうち、同定できたのは総数3,454点であった。シジミ類には、側歯角[高安 他1986]が広く低い殻頂をもち、輪脈が規則正しく密に並ぶタイプと、殻頂が高く輪脈の粗いタイプの2者が存在する。前者はマシジミ、後者は側歯角がやや広くヤマトシジミにも似るが、他の特徴からセタシジミと判断した。個体数に関してはマシジミがセタシジミを上回るものとみられるが、ここでは両者を一括して報告している。貝類の構成については、シジミ類もしくはハマグリが大半を占めるという点でいずれの遺構から出土した資料も共通している。また、鹹水性の資料のうち、ダンベイキサゴやアワビ類をはじめ、現生種では紀伊水道以南に棲息するとされるマガキガイとみられる資料や、外海棲息種の特徴であるとされる棘突起をもつサザエなど、外湾に棲息する貝類が少数ではあるが含まれる。こうした事実は、文献に加え、大坂魚市場跡の発掘調査で出土した木簡や魚介類遺体の分析などにより、紀伊水道の外側の黒潮本流水域など遠隔地からも多種多様な魚介類が持ち込まれたとされる、これまでの研究成果[酒井1997]とも合致し興味深い。

次に、個別の特徴を見ると、ハマグリ・アカガイ・サルボウについては大小の個体が存在し、大きさにより選別された形跡は見られない。特にハマグリは殻高30～40㎜程度の小型の資料が大半を占めており、サザエについても殻長11.7㎜の稚貝が1点出土している。アカニシについては、近世に至りその捕獲(出土)量の減少傾向がみられることが発掘調査の結果から報告されており、その背景として嗜好変化説・乱獲説・人為的駆除説などが主張されている[西岡1998など]。今回の調査では、18世紀後半の遺構であるとみられるSK801からまとまった数のアカニシが出土しており、必ずしもそうした傾向は見受けられない。また、汽水域に棲息するタケノコカワニナは現在では稀少種となっており、その減少の過程をたどる上でも貴重な資料である。

最後に、少ない資料からではあるが、1987～1990年に行われた調査の報告[久保1992]や、住友銅吹所の調査報告[久保1998]などを参考にしつつ近世大坂における出土貝類の特徴をまとめると、シジミ類とハマグリを主体とする点やアサリの出土量が少ない点などはそれ以前と比して変化はないものの、シジミ類の中にマシジミが主要な貝種として加わること、また鹹水性の貝類がサザエ・アワビ類など外湾に棲息するものも含め、種類・数量ともに豊富になることなどが挙げられるといえよう。

(池田)

2）脊椎動物(Tab.14、図版96)

今回の調査では、4E区で検出された谷を埋める古墳～飛鳥時代の地層から、また1C～1E区においては江戸時代の遺構から動物遺体が多数出土した。以下、遺構・層位別にそれらの種別・概要をまとめる。なお、本稿で使用した和名に対する学名はTab.14のとおりである[阿部 他1994]。

i）古代

第8b層

哺乳類　ウマ　左上腕骨1

シカ　左上腕骨1

第8a層

哺乳類　ウマ　下顎骨１、右肩甲骨１、末節骨１、左上顎臼歯１、右上顎第２小臼歯１、右下顎第３切歯１

ウマまたはウシ　左肋骨１

ウシ　左下顎骨２

イノシシ　右距骨１

イノシシ？上腕骨１

不明　肋骨　１

本層からは、脊椎動物と同時に貝類が多く産出している。

第7c層

哺乳類　ウマ　左上顎臼歯　１、第１・第２大臼歯付右下顎骨片１(一部焼けている)、右下顎骨片１(解体痕・噛み痕)、下顎骨片１、右上腕骨３、左上腕骨１、左撓骨２、右中手骨１、右坐骨１、左大腿骨１、左脛骨１

ウマまたはウシ　臼歯片１、左第１肋骨１

イノシシ　右踵骨１、右上腕骨２(解体痕・噛み痕)、左脛骨１(解体痕)

シカまたはイノシシ　胸椎１、不明１

シカ　左落角１(切断痕)、左上腕骨１、右距骨１

ウシ　右上顎第４小臼歯１

ウシ？　胸椎１

鳥類　ハシボソガラス　右上腕骨１、左脛骨１、左中足骨１

Tab.14　和名と学名との対応

哺乳類	Mammalia	ハシボソガラス	*Corvus corone*
コウベモグラ	*Mogera robusta*	スズメ	*Passer montanus*
ヒト	*Homo sapiens*		
ネズミ科	Muridae	**爬虫類**	Reptilia
ハタネズミ	*Microtus montebelli*	スッポン	*Trionyx sinensis*
クマネズミ属	*Rattus* sp.	ヘビ亜目	Serpentes
クマネズミ	*Rattus rattus*		
ドブネズミ	*Rattus norvegicus*	**両生類**	Amphibia
イヌ	*Canis familiaris*	カエル目	Anura
ネコ	*Felis catus*		
ウマ	*Equus caballus*	**魚類**	Pisces
イノシシ	*Sus scrofa*	サメ類	Elasmobranchii
シカ	*Cervus nippon*	ハモ属	*Muraenesox* sp.
ウシ	*Bos primigenius taurus*	コイ	*Cyprinus carpio*
		タイ科	Sparidae
鳥類	Aves	クロダイ	*Acanthopagrus schlegeli*
サギ科	Ardeidae	マダイ	*Pagrus major*
アオサギ亜科	Ardeinae	サワラ属	*Scomberomorus* sp.
タンチョウ属	*Grus* sp.		
タンチョウヅル	*Grus japonensis*	**棘皮動物**	Echinodermata
ガンカモ科	Anatidae	ウニ類	Echinodea

不明(小型)　左上腕骨1

爬虫類　ヘビ亜目　脊椎骨3

両生類　カエル目　右下顎骨1、左下顎骨1、右上腕骨1、左上腕骨1、上腕骨1、撓尺骨1、左寛骨1、寛骨1、右脛骨1、左脛骨1

棘皮動物ウニ類　種類不明　殻片2

第7c層の動物遺体には、泉施設を成形するための盛土から出土したものと、谷の埋立て土から出土したものとがある。イノシシの右踵骨のみは泉施設の盛土から出土した。

本層のうち谷の埋立て土から出土したウマの左上顎臼歯は、下位の第8a層から出土した左上顎臼歯と隣接し、泉施設を成形するための盛土から出土したイノシシの右踵骨は、同じく第8a層から出土した右距骨と関節する。本層から出土した上記2点の遺物は、第8a層から土砂とともに掘り出され、再度埋められたことになる。

ウマ・イノシシ・シカの一部には解体痕あるいはイヌなどに噛まれた痕が見られる。シカの左落角は刃物で叩いたのち、折られている。カエルは同一個体の骨であろう。脛骨が左右とも残っているので、食用にされたものではないだろう。上記の他少量であるが、魚類の骨が出土している。

第7b層

哺乳類　ウマ　右下顎第1切歯1、右下顎第2小臼歯1、右下顎第3小臼歯1、右下顎第4小臼歯1、右下顎第1大臼歯1、右下顎第2大臼歯1、左下顎第1切歯2、左下顎第2切歯1、左下顎第3切歯1、左下顎第2小臼歯1、左下顎第3小臼歯1、左下顎第4小臼歯1、左下顎第1大臼歯1、左下顎第2大臼歯1、下顎骨片1、臼歯片3、左中足骨1

シカ　右脛骨1

ウシ　右下顎第1または第2大臼歯1

ウマの歯の中で重複している左下顎第1切歯2個のうち、1個を除き他は同じ個体の下顎に生えていたものである。下顎骨片も出土しており、おそらく下顎骨が1個埋まっていたものであろう。

第7a層

哺乳類　ウマ　中節骨1

シカ　左肩甲骨1(解体痕・噛み痕)、左脛骨1(噛み痕)

シカ？肋骨1

ウシ　左下顎大臼歯1

第6b層

哺乳類　ウマ　右中手骨1、右下顎第3大臼歯1、左下顎第3大臼歯1、臼歯片、下顎骨片多数

イノシシ　臼歯破片2

ウマの臼歯と下顎骨ならびにそれらの破片は、同一個体の下顎骨に由来するものと考えられる。上記の他にも哺乳類と思われる破片が多数ある。また、未同定の哺乳類の肩甲骨？が、石組み溝内の同層から1点出土している。

第6a層

保存状態不良のため同定できない哺乳類の骨が3点、およびウマまたはウシの臼歯破片が出土している。

ii）石山本願寺期

SD530

哺乳類　ウマ　右下顎臼歯1、軸椎1、左第2中手骨1
ウマ？肋骨2
シカ　左寛骨1
ウシ　右上腕骨1

上記の他、脊椎動物で同定されたものは第4b層から出土したシカの左上腕骨のみである。

iii）江戸時代

各遺構の動物遺体は以下のとおりである。多くの遺構で、多量の魚類の骨が出土している。

SK801

哺乳類　コウベモグラ　右上腕骨1
コウベモグラ？　尾椎1
ネズミ科　尾椎3
イヌ　頭骨1、腰椎1、左第3・4中手骨1、左第5中手骨1、寛骨1、右大腿骨2、左大腿骨1、右脛骨2
イヌ？肋骨2
シカ　角4
鳥類　種類不明　尺骨1、中手骨1
爬虫類　スッポン肋骨板2
ヘビ亜目　脊椎骨1
魚類　サメ類　脊椎骨1
マダイ　右前顎骨1
タイ科　歯3
ウニ類　種類不明　棘2

イヌは右大腿骨と右脛骨が2点ずつ発掘されており、少なくとも2頭分の骨が混ざっている。癒合した第3・4中手骨と第5中手骨は同一個体のものである。シカの角はすべて、鋸かそれに類似の道具で切断された痕が観察される。また一部には、おそらくイヌに噛まれた痕も見られた。鳥類は同定できていないが、かなり大型の種である。上記の他、多数の魚類を主とする未同定の資料がある。

SK806

哺乳類　イヌ　左第3中手骨？1
鳥類　アオサギ亜科　右中足骨1

動物遺体は上記の2点のみである。

SK804

この土壙は埋土を5層に分けることができ、層位別に取上げを行った。以下、層位ごとに動物遺体を報告する。

第1層

哺乳類　クマネズミ　左上顎第1大臼歯1
　　ハタネズミ　左下顎第1大臼歯1
　　ネズミ科　上顎切歯1、下顎切歯1、上腕骨2、左撓骨1、右尺骨1、右脛骨1、基節骨1
　　ネコ？　切歯1
鳥類　不明1
爬虫類　ヘビ亜目　脊椎骨1
魚類　サメ類脊椎骨5
　　タイ科前頭骨1、歯6

上記の他、多数の哺乳類・魚類を主とする未同定の資料がある。

第2層

哺乳類　クマネズミ属　左下顎第2大臼歯1、左下顎第3大臼歯2、左上顎第2大臼歯1
　　ネズミ科　上顎切歯1
爬虫類　スッポン　脊椎板1
魚類　タイ科　歯7

クマネズミ属としたものは、大きさからクマネズミあるいはドブネズミであろう。上記の他、多数の魚類を主とする未同定の資料がある。

第3層

哺乳類　クマネズミ　右上顎骨(第1・第2大臼歯付)1(表面溶解)
　　ヒト　左下顎第2乳臼歯1
爬虫類　スッポン　肋骨板1
　　ヘビ亜目　脊椎骨1
鳥類　不明　右中足骨1
魚類　タイ科　歯2

人の乳臼歯は歯根が吸収されているので、歯の生え替わりによって抜け落ちたものと考えられる。鳥類の中手骨はスズメの中手骨とほぼ同じ長さであるが、より細い。上記の他、多数の魚類を主とする未同定の資料がある。

第4層

哺乳類　ネズミ科　上顎切歯1、下顎切歯1
鳥類　不明　右中手骨1
爬虫類　スッポン？　不明(四肢骨)1

両生類　カエル目　不明(四肢骨) 3

魚類　　マダイ　左前顎骨 1

　　タイ科　歯 5

鳥類の中手骨は、ほぼスズメの中手骨に近い大きさのものである。上記の他、多数の魚類を主とする未同定の資料がある。

第 5 層

魚類　　マダイ　左前顎骨 1

同定できたものは上記の 1 点のみ。未同定の資料の中には焼けた骨が含まれる。

層位の記載のないもの

哺乳類　クマネズミ　右上顎第 1 大臼歯 1 (表面溶解)

　　ネズミ科　上顎切歯 2 (表面溶解)、環椎 1 、軸椎 1 (表面溶解)、尾椎 1

　　シカ？　四肢骨片 1

鳥類　　不明　右中足骨 1 、不明 2

爬虫類　スッポン　肋骨板 1

魚類　　タイ科　左歯骨 1 、歯 1

鳥類の中足骨は同じSK804の第 3 層から産出しているものと同種である。上記の他、多数の魚類を主とする未同定の資料がある。

SK804からは多くのネズミ科の骨や歯が出土したが、種まで同定できたのはハタネズミ 1 点を除き、すべてクマネズミであった。クマネズミ属あるいはネズミ科としたものは、その大きさから、多くがクマネズミまたはドブネズミと推定される。ドブネズミに同定される歯は発見されなかったが、その骨が混じっている可能性はある。ネズミ科の骨・歯の多くは表面が溶けていたり、他の種類と比較して表面の保存状態が悪く、他の動物に食べられたものである可能性が高い。また、産出層準は第 1 層から 4 層に及び、同じ部位の骨が複数出土している。つまりSK804には動物の糞が何度も捨てられていた可能性がある。

SK805

出土遺物は魚類が主であるがすべて未同定。

SK803

同定できたものはネズミ類の脊椎骨 1 点のみで、その他に、多数の未同定の魚骨がある。

SK800

魚類　　ハモ属　頭骨 4 、歯 7

　　サワラ属　脊椎骨 1

　　コイ　咽頭骨 1

　　タイ科　歯13

種類が明らかなものはすべて魚類である。サワラ属の脊椎は大型である。上記の他にも、多数の未同定の魚骨がある。

SK807

哺乳類　イヌ　右下顎骨1

イノシシ　左上腕骨1

シカ　左大腿骨1

鳥類　タンチョウ属　左脛骨1、右中足骨1

魚類　タイ科　頭骨1

鳥類の骨はともにタンチョウ属の中でも大型で、ほぼ現生のタンチョウヅルと同程度の大きさの個体と考えられる。

SK808

鳥類　種類不明　脛骨1

魚類　タイ科　頭骨1

タイ科の頭骨には鋭利な刃物による切断痕が見られる。

SK790

哺乳類　ネコ　頭骨1、右下顎骨1、左下顎骨1、舌骨2、右肩甲骨1、左肩甲骨1、右上腕骨1、左上腕骨1、右尺骨1、左尺骨1、右撓骨1、左撓骨1、右第2中手骨1、右寛骨1、左寛骨1、右大腿骨1、左大腿骨1、右脛骨1、左脛骨1、右腓骨1、左腓骨1、左第3中足骨1、左第4中足骨1、胸椎1、腰椎3、右肋骨5、左肋骨5

イヌ　右肩甲骨1、左肩甲骨1、右上腕骨1、左上腕骨1、右尺骨1、左尺骨1、右撓骨1、左撓骨1、寛骨1、右大腿骨1、左大腿骨1、左膝蓋骨1、右脛骨2左脛骨1、右腓骨1、左腓骨1、右踵骨1、右距骨1、右立方骨1、右舟状骨1、右外側楔状骨1、右中間楔状骨1、右内側楔状骨1、右第3中足骨1、右第4中足骨1、右第5中足骨1、胸椎2、腰椎6、仙骨1、尾椎4、右肋骨8、左肋骨8、肋骨5

鳥類　サギ科　撓骨1、脛骨1

サギ科(小型)　脛骨1、中足骨1

ガンカモ科　上腕骨2、尺骨1

不明　脛骨1、指骨1

魚類　クロダイ　左前顎骨1

タイ科　左歯骨1

ネコの骨の中には同じ部位の骨が1点も見られないので、これらは同一個体に属する骨と考えられる。各部分の骨の大きさも、同一個体であるという考えに矛盾しない大きさである。解体痕、かじられた痕などは認められない。埋められたものであろう。

イヌの骨の中では右脛骨2点のうち1点を除くと、同じ部位の骨が1点も見られないので、これらは同一個体に属する骨と考えられる。上記の1点を除くと各部分の骨の大きさも、同一個体であると

いう考えに矛盾しない大きさである。解体痕、かじられた痕などは認められない。埋められたものであろう。

ガンカモ科の上腕骨２点のうち１点には解体痕が認められた。

上記の他に、多数の魚類を主とする未同定の資料がある。

その他の土壙

シカの左大腿骨１点、イノシシ？の若い個体の右脛骨１点、イヌの右尺骨と左大腿骨各１点、シカの右大腿骨１点や、他に種類不明の哺乳類の骨が１点が出土している　（樽野）

第３節　前期難波宮水利施設出土木材の年輪年代測定

光谷拓実（奈良国立文化財研究所）

１）試料と方法（Fig.167）

泉施設SG301やその周辺からは、多くの木材が出土した。大型の水溜め木枠の中からヒノキ材の板材で年輪数の多いものに着目し、年輪年代測定用のものを２点選定した。この中の１点には、心材部に続く辺材部が完存していた（Fig.167）。試料の形状でいうとＡタイプに属するものである。この板材については慎重を期して、面皮が残存している個所を切断し、木口面から年輪幅の計測を行った。年代を割り出すヒノキの暦年標準パターンには、37B.C.～845A.D.のものを使用した。

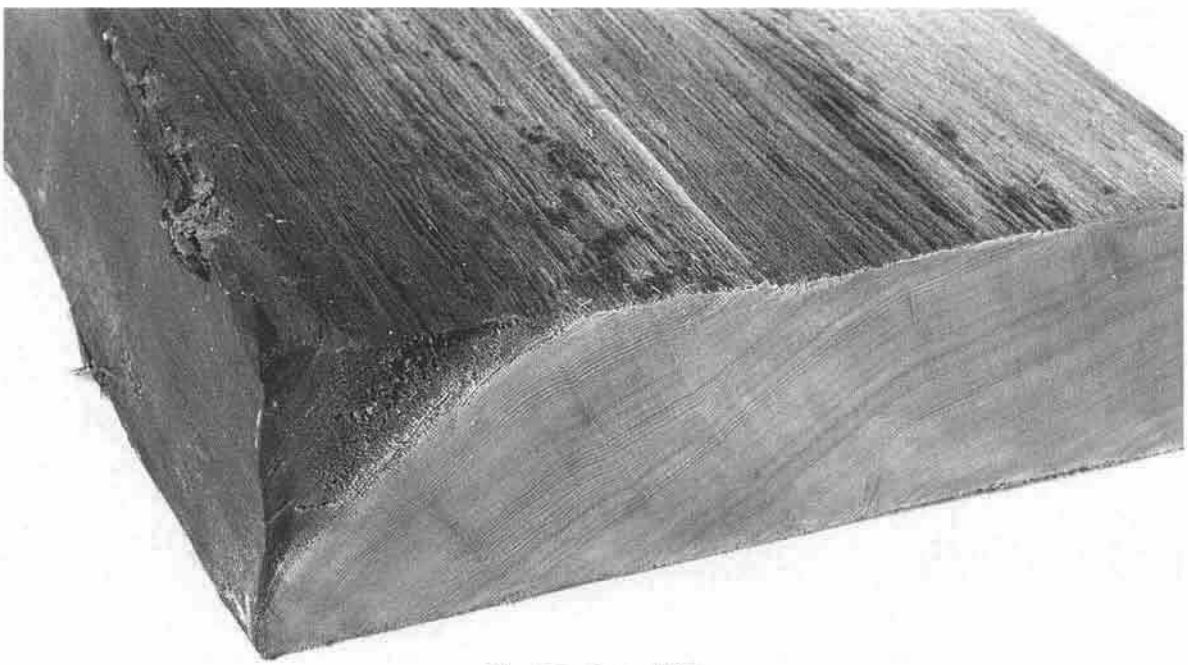


Fig.167　№１の断面

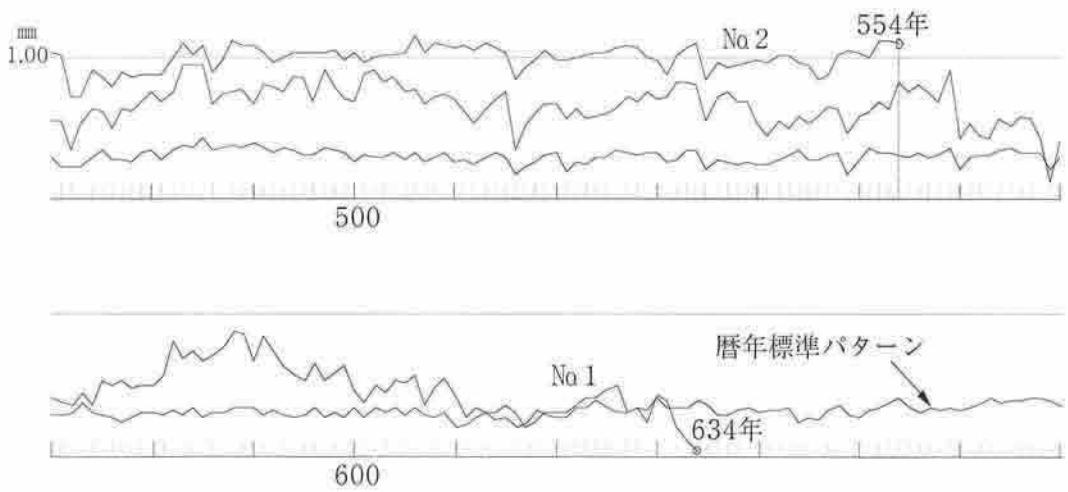


Fig.168　暦年標準パターングラフ（下）と№１・２の年輪パターングラフ

2）結果(Fig.168)

2点の計測年輪数は、Aタイプのものが267層(№1)、他の1点が241層(№2)であった。これらの年輪パターンと暦年標準パターンとの照合は高い相関で合致し、№1が634年、№2が554年と判明した(Fig.168)。№1の木枠の形状は、原材から板状に割り、若干一部分を成形しただけのもので、転用材ではない。したがって、634年と確定した年輪年代は原木の伐採年である。№2の形状は、以前何かに使っていたと思われる痕跡があるので、これは転用材であり、しかも辺材部が残存していないので、この年輪年代は遺構の年代を考える上ではそう重要ではない。

前期難波宮がいつつくられたのか、長年の論争に対し、SG301の№1の年輪年代は、遺跡、遺構を解釈する上で貴重な年代情報となるであろう。

第４節　前期難波宮水利施設出土木材の樹種同定

古代の森研究舎

１）試料

試料は非炭化材（以下「材」と表記）119点と炭化材30点である。いずれも前期難波宮（７世紀中葉～後葉）のものとされる加工材・炭化材である。

２）方法

材は剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の３面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。炭化材は木口・柾目・板目の３断面を作製、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（加速電圧10kV）で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版97～101）も作製した。電子顕微鏡観察にあたっては㈱ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝致します。なお作製したプレパラートと図版のネガ・フィルムはすべて財団法人大阪市文化財協会に保存されている。

３）結果（Tab.15・16、図版97～101）

炭化材試料の中には確実な同定ができず類似種としたものもあったが、材が９分類群、炭化材が不明広葉樹１点を除き10分類群、合わせて15分類群（ここでは属・亜属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は『日本の野生植物　木本Ⅰ・Ⅱ』[佐竹 他1989]にしたがい、一般的性質については『木の事典　第１巻～第17巻』[平井1979～1982]も参考にした。

マツ属複雑管束亜属の一種（*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.）　マツ科

炭化材：124・128・135・142・144

早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。放射組織は単列、１～15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

複維管束亜属（いわゆる二葉松類）には、クロマツ（*Pinus thunbergii*）・アカマツ（*P. densiflora*）と琉球列島特産のリュウキュウマツ（*P. luchuensis*）の３種がある。アカマツは北海道南部から九州に、クロマツは本州から琉球に分布するが暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

モミ属の一種（*Abies* sp.）　マツ科

材：４・５・26・51

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の末端壁には数珠状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型(Cupressoid)で1～4個。放射組織は単列、1～30細胞高。

モミ属にはウラジロモミ(*Abies homolepsis*)・トドマツ(*A. sachalinensis*)・モミ(*A. firma*)・シラビソ(*A. veitchii*)・オオシラビソ(*A. mariesii*)の5種があり、トドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州(秋田・岩手県以南)・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部(福島県以南)・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、オオシラビソは本州(中部地方以北)の亜高山帯に、シラビソは本州中部(福島県以南)・奈良県・四国に、トドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。材の解剖学的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高い。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられる他、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

スギ(*Cryptomeria japonica*)　スギ科

材：3・7・10・15～18・20～24・28～30・32・39・40～42・44・45・52・53・56・58・59・63・66・68・69・76・81・93～97・99・110・129・116

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型(Taxodioid)で2～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

コウヤマキ(*Sciadopitys verticillata*)　コウヤマキ科

材：33～35・43・57・62・70・71・82・84～86・88～90・103・105・106・112・119

炭化材：123・125・131・146

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1～15細胞高。

コウヤマキは1科1属1種の日本特産の常緑高木である。自生地は本州(福島県以南)・四国・九州に点在し、また植栽される。材はやや軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度であるが耐水性がある。各種樽桶類・土木・舟材・棺材などの用途がある。

ヒノキ属の一種(*Chamaecyparis* sp.)　ヒノキ科

材：1・6・9・11～14・19・25・27・31・36～38・47～49・54・55・61・67・73～75・77～80・83・87・91・92・98・100～102・104・107～109・111・113～115・117・118

炭化材：130・134・143・147～149

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒ

ノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属にはヒノキ(*Chamaecyparis obtusa*)とサワラ属(*C. pisifera*)の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在植林面積第1位の重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラ属は本州(岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが、耐水性が高いため樽や桶にする他各種の用途がある。

カヤ(*Torreya nucifera*)　イチイ科

材：60・72

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

カヤは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州の常緑広葉樹林中に点生する常緑高木で、樹高25～30mにもなるが生長は極めて遅い。庭木として植栽されることも多く、いくつかの変・品種がある。その材は針葉樹としては重い方で、強度は中程度、割裂性は大きく、加工は容易、保存性とくに耐水性に優れる。建築・各種桶類・木地・器具・家具材など各種の用途が知られ、碁盤としては最高級品とされる。

クマシデ属類似種(cf. *Carpinus* sp.)　カバノキ科

炭化材：140

散孔材で、管孔は放射方向に2～6(10)個が複合する。横断面では楕円形。単穿孔をもつ。放射組織は異性、集合組織も認められる。断面の状態が不良で充分観察できないため類似種とした。

クマシデ属はサワシバ(*Carpinus cordata*)・クマシデ(*C. japonica*)・イワシデ(*C. turzaninovii*)・イヌシデ(*C. tschonoskii*)・アカシデ(*C. laxiflora*)の5種が自生するが、サワシバ・クマシデは階段穿孔をもつ。イワシデは本州(中部地方)・四国・九州の石灰岩地に生育し、アカシデは北海道南部・本州・四国・九州に、イヌシデは本州(岩手・新潟県以南)・四国・九州に生育する温帯性落葉高木～低木である。材はやや重硬で、割裂性が小さく、曲木や木地、薪炭材などに用いられる。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. Cerris sp.)　ブナ科

炭化材：121・129・137・138・141・145

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列し、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節はコナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ(*Quercus acutissima*)とアベマキ(*Q. variabilis*)の2種がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州・琉球に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地

方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。この他に器具・杭材、楾木などの用途が知られる。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされている。

コナラ属アカガシ亜属の一種(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)　ブナ科

炭化材：133・136

放射孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属(カシ類)はイテイガシ(*Quercus gilva*)・アカガシ(*Q. actlta*)・アラカシ(*Q. glauca*)など8種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ(*Q. phillyraeoides*)も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靭で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。

クリ(*Castanea crenata*)　ブナ科

材：65

炭化材：(132)

環孔材で孔圏部は多列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。132は節の部分で、組織の変形が著しいため類似種とした。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築器具・家具・薪炭材、楾木や海苔粗朶などの用途が知られている。

シイ属の一種(*Castanopsis* sp.)　ブナ科

材：50

炭化材：122

環孔性の放射孔材で孔圏部は接線方向に連続しない。その他の特徴は上記のクリに類似する。

シイ属にはスダジイ(*Castanopsis sieboldii*)とツブラジイ(*C. cuspidata*)がある。カシ類とともに暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種である。ツブラジイ(コジイ)は本州(関東以南)・四国・九州に、スダジイ(イタジイ)は本州(福島・新潟県以南)・四国・九州に分布し、また植栽される高木である。一般にはスダジイが沿海地、ツブラジイが内陸地に生育する。材はやや重硬で、割裂性は大きく、加工はや

や容易、耐朽性は中程度～低い。材質的にはツブラジイはスダジイより劣るものとされている。薪炭材としての用途が最も多く、器具・家具・建築材などにも用いられる。

クスノキ(*Cinnamomum camphora*)　クスノキ科

材：2

散孔材で横断面では楕円形、単独まれに2～3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。年輪界は明瞭。

クスノキは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布し、また植栽される常緑高木である。材はやや軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽・耐虫性は高い。建築・内装・建具・家具・器具材や船舶材に用いられる。

サカキ(*Cleyera japonica*)　　ツバキ科

炭化材：127

散孔材で横断面では多角形、単独または2～3個が複合する。道管は階段穿孔をもち、段(bar)は多数、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。年輪界は不明瞭。

サカキは本州(石川・茨城県以西)・四国・九州・琉球に自生するとされる常緑高木で、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、神社などに植栽される。このため本来の自生北限は明らかではない。材は重硬・強靭で、割裂しにくく加工は困難。建築・器具材としても用いられるが、薪炭材として一般的である。

スノキ属類似種(cf. *Vaccinium* sp.)　ツツジ科

炭化材：126・139

散孔材で、管径は小さく横断面では多角形、ほぼ単独。道管は単穿孔および段数が10程度の階段穿孔をもち、壁孔は対列～交互状に配列。放射組織は異性、1～8細胞幅、高さは高く、鞘状の細胞が認められる。年輪界は不明瞭。らせん肥厚らしきものはあるが確定できないため類似種とした。

スノキ属は16種が自生し、常緑(シャシャンボ(*Vaccinium bracteatum*)など)または落葉(ナツハゼ(*V. oldhamii*)など)性の低木で、属としてはほぼ全土に分布するが高山や亜熱帯など限られた地域にのみ生育するものも多い。材の用途は特に知られていない。

ハイノキ属の一種(*Symplocos* sp.)　ハイノキ科

材：46・64

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～5個が複合する。道管は階段穿孔をもち、段は多数。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

ハイノキ属には常緑性のハイノキ節(ハイノキ(*Symplocos myrtacea*)・クロバイ(*S. runifolia*)など)と、落葉性のサワフタギ節(サワフタギ(*S. chinensis* forma *pilosa*)・タンナサワフタギ(*S.coreana*)など)がある。サワフタギを除いて関東地方以西に分布する。材は重硬・強靭で割れにくく、各種工具の柄など器具・旋作・薪炭材などに用いられる。

Tab.15　出土木材の樹種

試料番号	報告番号	遺構・層	用　途	種　　名
1	584	第7c層	盤	ヒノキ属の一種
2	591	第7c層	板材	クスノキ
3		第7c層	杭	スギ
4		第7c層	杭	モミ属の一種
5		第7c層	杭	モミ属の一種
6		第7c層	木槽？	ヒノキ属の一種
7		第7c層		スギ
8	586	第7b層	柄	スギ
9	592	第7b層	板材	ヒノキ属の一種
10		第7b層	杭	スギ
11	617	第7b層	板材	ヒノキ属の一種
12		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
13	612	第7b層	板材	ヒノキ属の一種
14		第7b層	柱材	ヒノキ属の一種
15	590	第7b層	木槽	スギ
16		第7b層	板材	スギ
17	605	第7b層	板材	スギ
18		第7b層	板材	スギ
19		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
20	604	第7b層	角材	スギ
21		第7b層	板材	スギ
22		第7b層	板材	スギ
23		第7b層	板材	スギ
24	608	第7b層	板材	スギ
25		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
26		第7b層	板材	モミ属の一種
27	618	第7b層	板材	ヒノキ属の一種
28		第7b層	板材	スギ
29		第7b層	板材	スギ
30		第7b層		スギ
31		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
32		第7b層	柱材？	スギ
33	598	第7b層	板材	コウヤマキ
34		第7b層	杭	コウヤマキ
35	594	第7b層	杭？	コウヤマキ
36		第7b層	杭	ヒノキ属の一種
37		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
38		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
39		第7b層	板材	スギ
40		第7b層	板材	スギ
41		第7b層	板材	スギ
42		第7b層	角材	スギ
43	699	第7b層	板材	コウヤマキ
44		第7b層	板材	スギ
45		第7b層	板材	スギ
46		第7b層	柱材？	ハイノキ属の一種
47		第7b層	端材	ヒノキ属の一種
48		第7b層	板	ヒノキ属の一種
49		第7b層	板	ヒノキ属の一種
50		第7b層	柱材	シイ属の一種
51	589	第7b層	木槽	モミ属の一種
52		第7b層		スギ
53		第7b層	板材	スギ
54		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
55		第7b層	木槽？	ヒノキ属の一種
56		第7b層	板材	スギ
57	597	第7b層	板材	コウヤマキ
58		第7b層	板材	スギ
59		第7b層	板材	スギ
60		第7b層	板材	カヤ

試料番号	報告番号	遺構・層	用　途	種　　名
61		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
62		第7b層	柱材	コウヤマキ
63		第7b層	角材	スギ
64	593	第7b層	角材	ハイノキ属の一種
65		第7b層	板材	クリ
66		第7b層	円板	スギ
67		第7b層	板材	ヒノキ属の一種
68		第7b層	板材	スギ
69	595	第7b層	板材	スギ
70		第7a層	板材	コウヤマキ
71	588	第7a層	履物	コウヤマキ
72		木枠1	板材	カヤ
73		木枠1	柱材	ヒノキ属の一種
74	603	木枠1	柱材	ヒノキ属の一種
75		木枠1	板材	ヒノキ属の一種
76	611	木枠1	板材	スギ
77	602	木枠1	柱材	ヒノキ属の一種
78		木枠1	柱材	ヒノキ属の一種
79		木枠1	柱材	ヒノキ属の一種
80		木枠1	柱材	ヒノキ属の一種
81	615	木枠1	板材	スギ
82		木枠2	板材	コウヤマキ
83	610	木枠2	板材	ヒノキ属の一種
84	614	木枠2	板材	コウヤマキ
85		木枠2	板材	コウヤマキ
86	607	木枠2	板材	コウヤマキ
87		木枠2	板材	ヒノキ属の一種
88	601	木枠2	柱材	コウヤマキ
89	606	木枠2	板材	コウヤマキ
90	613	木枠2	板材	コウヤマキ
91		木枠2	板材	ヒノキ属の一種
92		木枠3	端材	ヒノキ属の一種
93		木枠3	板材	スギ
94		木枠3	板材	スギ
95		木枠3	板材	スギ
96		木枠3	板材	スギ
97		木枠3	丸太刳貫	スギ
98		木枠3		ヒノキ属の一種
99	596	木枠3	杭	スギ
100		木枠4	板材	ヒノキ属の一種
101		木枠4	角材？	ヒノキ属の一種
102		木枠4	角材	ヒノキ属の一種
103		木枠4	杭	コウヤマキ
104	609	木枠4	板材	ヒノキ属の一種
105		木枠4	柱材	コウヤマキ
106	600	木枠4	柱材？	コウヤマキ
107		木枠4	杭転用	ヒノキ属の一種
108		木枠4	板材	ヒノキ属の一種
109		木枠4	角材	ヒノキ属の一種
110	616	木枠4	板材	スギ
111		木枠4	角材	ヒノキ属の一種
112		木枠4	柱材	コウヤマキ
113		第6b層	板材	ヒノキ属の一種
114		第6b層	板材	ヒノキ属の一種
115		第6b層	板材	ヒノキ属の一種
116		第6a層	板材	スギ
117		第6a層		ヒノキ属の一種
118		第5c層	板材	ヒノキ属の一種
119		第5c層		コウヤマキ

Tab.16　出土炭化材の樹種

試料番号	遺構・層	種　　名
120	第8b層	広葉樹(節)
121	第8b層	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
122	第7c層	シイ属の一種
123	第7c層	コウヤマキ
124	第7c層	マツ属複維管束亜属の一種
125	第7c層	コウヤマキ
126	第7c層	スノキ属類似種
127	第7c層	サカキ
128	第7c層	マツ属複維管束亜属の一種
129	第7b層	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
130	第7a層	ヒノキ属の一種
131	第7a層	コウヤマキ
132	第7a層	クリ類似種(節)
133	第7a層	コナラ属アカガシ亜属の一種
134	第7a層	ヒノキ属の一種
135	第6b層	マツ属複維管束亜属の一種
136	第6b層	コナラ属アカガシ亜属の一種
137	第6b層	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
138	第6b層	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
139	第6b層	スノキ属の一種
140	第6b層	クマシデ属類似種
141	第6b層	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
142	第6b層	マツ属複維管束亜属の一種
143	第6b層	ヒノキ属の一種
144	第6b層	マツ属複維管束亜属の一種
145	第6b層	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
146	第6b層	コウヤマキ
147	第6b層	ヒノキ属の一種
148	「朱雀門」柱抜取り穴	ヒノキ属の一種
149	「朱雀門」柱抜取り穴	ヒノキ属の一種

※148・149は別調査出土である。比較するための試料として同定した。

Tab.17　出土木材の種類構成

分　類　群	材	炭化材
マツ属複維管束亜属	−	5
モミ属	4	−
スギ	42	−
コウヤマキ	20	4
ヒノキ属	46	6
カヤ	2	−
クマシデ属類似種	−	1
コナラ属クヌギ節	−	6
コナラ属アカガシ亜属	−	2
クリ	1	1
シイ属	1	1
クスノキ	1	−
サカキ	−	1
スノキ属類似種	−	2
ハイノキ属	2	−
不明広葉樹	−	1
合計	119	30

120(炭化材)は節の部分に当っていたため組織の変形が著しく、観察用の良好な断面を得ることができず同定できなかった。

以上の同定結果を材・炭化材に分けて一覧表で示す(Tab.15・16)。

4)　考察(Tab.17)

今回同定対象とした試料からは、材では針葉樹が5分類群(114点)、広葉樹が4分類群(5点)、炭化材では針葉樹が3分類群(15点)、広葉樹(不明1点を除く)が7分類群(14点)認められた(Tab.17)。材試料では針葉樹が全体の95%以上を占め　ヒノキ属(46点、38.7%)とスギ(42点、35.3%)が圧倒的に多く、コウヤマキ(20点、16.8%)がこれに次ぐ。これに対し、広葉樹は各分類群1・2点にすぎない。試料の用途はほとんど特定できていないが、形状をみると板または板状のものが大半である。中には残存長1.9～2m超(17・18・20)あるいは板幅70cm以上(11・81)の板材もある。試料は7世紀後半のものとされているが、この時代には大判の板を製材できる鋸(＝縦挽)は普及していなかったとされる[吉川1976]。したがって、製板は斧やクサビを用いた「割」技法で行うしかなく、必然的に木理が通直で割裂性に富んだヒノキ属やスギ、コウヤマキが選択されたものであろう。ここで得られた

組成は、「割」技法で製板を行っていた時代の典型ともいえる例を示していると思う。わずかに用いられている広葉樹が丸太の表面を少し削り落とした心持ち材(46・64)であることも、このことの反映と考えている。また、製材・製板に多大な労力と時間を費やさなければならなかったがために、現代からみればはるかに原材の入手が容易であったと思われるにもかかわらず、二次・三次の転用が行われたものと考えている。なお、13・81・93・95などのように幅が40～70cmを超える板材でも樹心は含まれていない。したがって、これらの板は少なくとも１m以上の径をもつ樹木から割り出されたものである。その伐出地はわからないが、当時そのような大径木がそれほどまれでなく生育していたものであろう。

炭化材は試料数では針葉樹・広葉樹が相半ばしているが、その組成は材で多数を占めたスギが認められないうえに、材にはみられなかった複維管束亜属やクヌギ節・アカガシ亜属などが認められ、材とは異なったものとなっている。針葉樹のうちヒノキ属やコウヤマキに同定されたものの中には、その一部が未炭化のまま、すなわち明らかに焼け残ったとみられるものも半数(123・130・131・143・147)あった。一方、広葉樹のクヌギ節やアカガシ亜属に同定されたものの中には、観察用の断面の作製が困難なほど硬く焼き締まり、金属光沢をもつものもあった(121・136～138・140・141・145など)。これらはその樹種からみても、木炭として焼かれたものである可能性が高いと考えている。このように、今回の炭化材の中には、その由来を異にする試料が混在しているものと思う。

(高橋利彦)

第５節　前期難波宮水利施設に係わる古環境分析

古代の森研究舎

１）弥生時代から前期難波宮の花粉化石群

ｉ）概要

本調査地は大阪平野を東西に二分する上町台地北端に位置し、この付近は飛鳥・奈良時代には首都あるいは副都として、政治、外交、文化上の中心地を形成していた[大阪市文化財協会1992・1999B]。本遺跡の調査地北西部の開析谷から約８ｍ×５ｍの泉施設と北西方向に延びる石組み溝からなる遺構が発見された。溝の一部は石により蓋がされた暗渠であったことがわかっている。この遺構は北西方向に発達する谷奥部に形成され、谷を半ばまで埋め立てた後に整地してつくられている。遺構内堆積物から出土した遺物は７世紀中ごろ以前に限定されることから、前期難波宮(645～686年)に伴うものと考えられている。これらの遺構は谷奥にあることから集水域は狭く、流水により搬入される異地性の化石がまれであることから、古植生復元のための精度の高い資料が期待された。こうしたことから、ここでは主として前期難波宮の植生と人間活動との係わりを解明することに焦点を据え、花粉化石群を調査した。

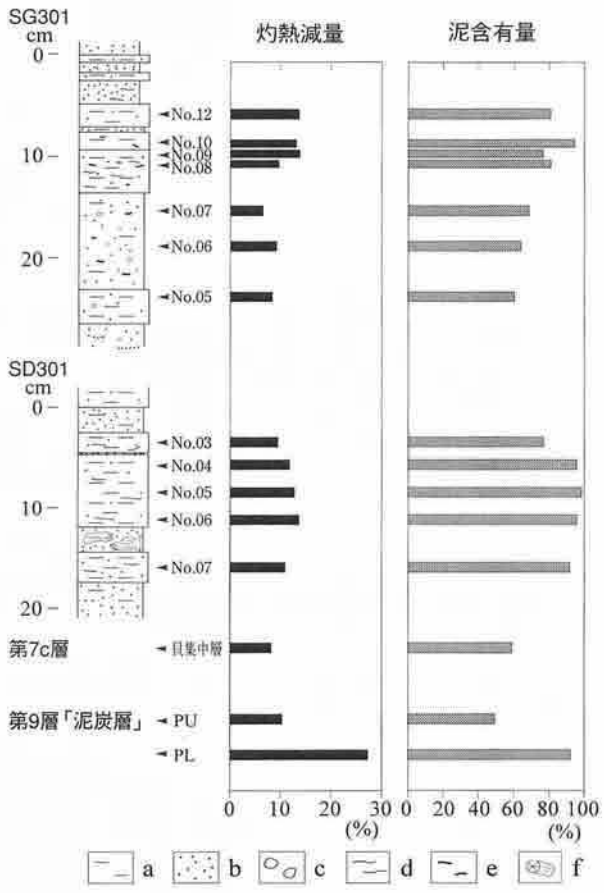


Fig.169　各遺構における微化石分析層準の灼熱減量と泥含有量
(a:シルト、b:砂、c:礫、d:ラミナ、e:木屑、f:木材)

ii）試料と方法

分析試料は、発掘調査担当者により採取された試料を用いた。試料は、放射性炭素年代から弥生時代と推定される第９層(「泥炭層」上・下層、各々PU･PLと仮称)、谷の埋立て土である第7c層(貝集中層)、前期難波宮の泉施設SG301および石組み溝SD301内堆積物の第６層を対象とした。分析試料の堆積物の特徴については花粉化石群の項で示すが、層序については前章第１節を参照されたい。

分析試料の堆積物の特性を調べるために、有機物含有量と泥含有量について調査した。堆積物の有機物量と粒度特性は花粉化石群の堆積過程を推定する１資料となる。有機物含有量の変動については灼熱減量を測定した。灼熱減量は、るつぼと乾燥試料約２ｇとの質量を測り、るつぼをマッフル中に置き、700～800℃で約２～３時間強熱した。強熱後、白金線で内容物を緩く攪拌し黒色が認められ

Tab.18−1　花粉化石の組成表

和　名	学　名	泉施設SG301 №12	№10	№09	№08	№07	№06	№05	石組み溝SD301 №03	№04	№05	№06	№07	第7c層	泥炭層 PU	PL
樹　本																
マキ属	*Podocarpus*	1		2	4	1	2	1	3	3	5	1	1		1	2
モミ属	*Abies*	10		2	14	15	13	22	18	26	15	10	34	11	3	6
ツガ属	*Tsuga*	25		10	10	11	22	30	31	19	12	11	15	8	4	6
トウヒ属	*Picea*			1										1		
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*									1					1	2
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	20	1	28	34	22	18	22	32	17	25	15	9	19	92	9
マツ属(不明)	*Pinus* (Unknown)	2	2	6	6	6	4	5	5	3	4	1	4	4	3	
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	5	1	12	17	3	7	11	11	6	18	16	5	18	5	9
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.fil.)D.Don	34	2	7	5	8	21	12	12	4	11	20	3	17	15	33
イチイ科−ヒノキ科	Taxaceae - Cupressaceae	14				1	1	2	1		1	8	3	9	4	19
−イヌガヤ科	- Cephalotaxaceae															
ヤマモモ属	*Myrica*	4				1	3	1		2		4			1	1
サワグルミ属	*Pterocarya*				1		1		1			2				
クルミ属	*Juglans*			1		1		2	2							2
クマシデ属−アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	14		1		1	2	4		1	3	8	2		1	4
ハシバミ属	*Corylus*								1						1	
カバノキ属	*Betula*	2		1		1		2	1	4		5			1	4
ハンノキ属	*Alnus*								4			2			1	2
ブナ	*Fagus crenata* Blume	1		1		1			2	1			2		1	
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	2								2		4				1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	8		7	2	3	12	10	10	6	14	11	7	3	77	13
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	39		19	14	17	34	40	36	20	33	102	17	5	43	67
クリ属	*Castanea*			1	2	1	2		1			4			8	
シイノキ属	*Castanopsis*	2		6	7	6	12	1	2	3	13	19	1	3	25	20
ニレ属−ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	7		1	3		3	3	7	1	2	2	2		1	2
エノキ属−ムクノキ属	*Celtis - Aphananthe*	3		2	1		4	2	2		2	10	1		1	1
サンショウ近似種	*Zanthoxylum* cf. *piperitum* (Linn.) DC.			1												
他のサンショウ属	other *Zanthoxylum*							1	2							
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	1							1			2				2
モチノキ属	*Ilex*			3					1						23	10
カエデ属	*Acer*														1	1
トチノキ属	*Aesculus*			1	1				1							
ブドウ属	*Vitis*											1				1
ツタ属	*Parthenocissu*				1											
ヒサカキ属	*Eurya*						1									
ツバキ属	*Camellia*							1			1					
グミ属	*Elaeagnus*					1					1					1
サルスベリ属	*Lagerstroemia*															1
ウコギ科	Araliaceae	1			2		2			2		1		2	1	2
ツツジ科	Ericaceae				1	1			1	1					5	2
ガマズミ属	*Viburnum*						1									
スイカズラ属	*Lonicera*							1								
草　本																
ガマ属	*Typha*	1		2	3	1	4	1	1			1		7	1	
サジオモダカ属	*Alisma*										1					
オモダカ属	*Sagittaria*			2												
イネ科(イネ属型)	Gramineae (*Oryza* type)	26	4	126	114	81	119	123	28	12	31	21	8	140	1	29
イネ科(野生型)	Gramineae (Wild type)	38	2	89	105	39	69	93	48	57	72	70	8	15	8	70
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	1	7	15	2	7	12	1	1	1	7		11	2	20
ツユクサ属	*Commelina*			1		2	1	1	1			2				
イボクサ属	*Aneilema*			1												
ミズアオイ属	*Monochoria*	2		237	134	2	4	1					3			
アヤメ科	Iridaceae													1		
クワ科	Moraceae	1		3	5	1	4	1	2	1		8	1	1	1	4
ギシギシ属	*Rumex*	16		6	7	6	18	9	11		6	10	3			
サナエタデ節	*Polygonum* sect. Persicaria	2	1	16	10	5	6	4	36	8	7	1		1		
−ウナギツカミ節	- Echinocaulon															
タデ属イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria										1					
タデ属ミチヤナギ節	*Polygonum* sect. Avicularia						1	1	5	1						
アカザ科−ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	5		27	26	18	40	9	18	3	23	26	3	55		

Tab.18−2　花粉化石の組成表

和　名	学　名	泉施設SG301							石組み溝SD301					第7c層	泥炭層	
		№12	№10	№09	№08	№07	№06	№05	№03	№04	№05	№06	№07		PU	PL
スベリヒユ属	*Portulaca*					1		1	2					1		
ナデシコ科	Caryophyllaceae			5	1	1	5	8	3	1	6	3	5	2		
キンポウゲ科	Ranunculaceae			7	5	2	2				2		1			12
アブラナ科	Cruciferae	1		15	10	3	12	1	7	2	4	3		19		
バラ科	Rosaceae	1			1		2				2	3			4	
ノアズキ属	*Dunbaria*							1								
他のマメ科	other Leguminosae			1	2											65
カタバミ属	*Oxalis*										1	1				
ミソハギ属	*Lythrum*							1								
アリノトウグサ属	*Haloragis*						1									
セリ科	Umbelliferae	1		1	1		3	1				1	1	2		
ネナシカズラ属	*Cuscuta*													1		
シソ科	Labiatae											1		1		
ナス属	*Solanum*						1					1				
オオバコ属	*Plantago*			4	3	1	4	3	8	1	10	12				
オミナエシ属	*Patrinia*			1							1					1
ベニバナ属	*Carthamus*		1	26	10	8	7	18	59	572	75	106	1			
ヨモギ属	*Artemisia*	2		40	41	8	27	9	3	2	14	9	1	19	6	33
他のキク亜科	other Tubuliflorae	3	1	3	6	3	7	2	4		9	2		2	1	18
タンポポ亜科	Liguliflorae			2	2		2	2								
シダ植物																
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*						1									7
ゼンマイ属	*Osmunda*	2		1			1	1	1	1	1			2	4	40
ミズワラビ属	*Ceratopteris*					1										
サンショウモ	*Salvinia natans* (L...) All.									1						
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	10	4	16	14	10	21	17	16	3	6	5	5	25	6	11
樹木花粉総数	Total arboreal pollen	195	6	113	125	101	165	173	188	122	160	259	106	100	319	223
草本花粉総数	Total nonarboreal pollen	100	10	622	501	184	346	302	237	661	266	288	35	278	24	252
シダ植物胞子総数	Total fern spore	12	4	17	14	11	23	18	17	5	7	5	5	27	10	58
花粉・胞子総数	Total pollen and spore	307	20	752	640	296	534	493	442	788	433	552	146	405	353	533
不明花粉	Unknown pollen	9	2	4	10	8	15	12	6	4	4	15	4	14	19	14

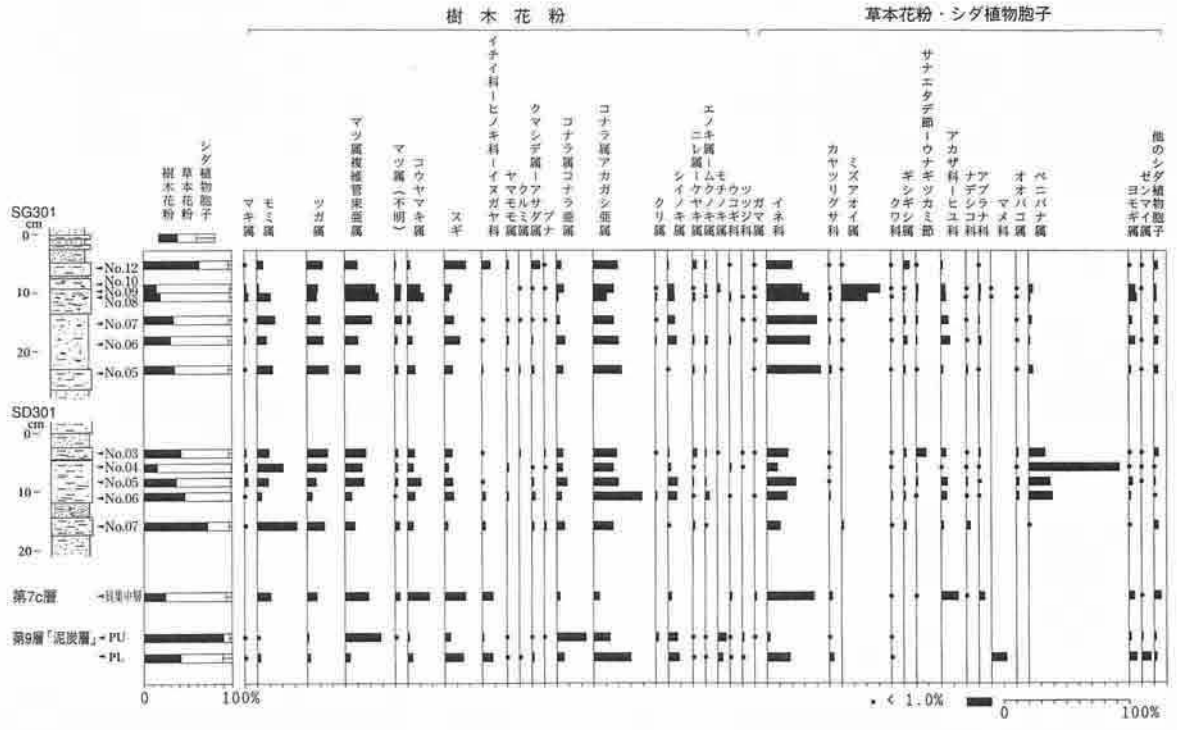


Fig.170　各遺構における主要花粉変遷図

れば再度強熱を継続した。測定値は灼熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。また、泥含有量はシルト以下の細粒成分で、この成分の割合を乾燥重量百分率で算出した。測定結果をFig.169に示す。

花粉化石の抽出は、試料１～２ccをとり、10%KOH（湯煎約15分）－傾斜法により粗粒砂を取り除く－48%HF（約30分）－重液分離（比重2.15の臭化亜鉛）－アセトリシス処理（濃硫酸１：無水酢酸９の混液で湯煎７分）の順に処理を行った。プレパラート作成は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで充分撹拌後マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。花粉化石群の同定と計数は、プレパラート１～２枚の連続走査による観察を行った。出現した分類群のリストとその個数をTab.18に、主要花粉変遷図をFig.170に示す。出現率は、樹木は樹木花粉、草本・胞子は花粉・胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群を「－」で結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。なお、樹木と草本があるクワ科、バラ科、マメ科などの分類群は現時点では区別ができないため暫定的に草本花粉に含めてある。図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示す。

iii）花粉化石群（Fig.169・170、Tab.18、図版102・103）

「泥炭層」（弥生時代ごろ）

「泥炭層」下（PL）および上（PU）の２試料について行った。PLは黒褐色泥炭質砂質シルトからなり、灼熱減量が27.3%、泥含有量93%と比較的有機質な堆積物である。PUは褐色砂質シルトで、クロマツの球果などの植物遺体を層状に含む。灼熱減量が10.5%、泥含有量50%であることから、無機物に富む堆積物といえる。補正^{14}C年代でPLから2250±40yrsBP、PUから1830±40yrsBPの放射性炭素年代測定結果（AMS法）が得られている。

PLの花粉組成は、常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占し、針葉樹のスギ、イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科、常緑広葉樹のシイノキ属、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑ないし落葉広葉樹のモチノキ属などを伴う。草本ではイネ科、マメ科が比較的多く占める。PUでは、アカガシ亜属は減少し、コナラ亜属やマツ属複維管束亜属が比較的高率に占める。草本はまれである。

第7c層中の貝層（古墳時代後期～飛鳥時代）

試料の堆積物は貝片を含む灰褐色中～粗粒砂質シルトからなり、灼熱減量8.3%、泥含有量59%である。

花粉組成は、広葉樹花粉はまれで、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギ、モミ属、ツガ属、イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科の針葉樹が大半を占める。草本ではイネ科が多産し、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科が比較的多く占める。イネ科花粉の大半はイネ属型からなる（Tab.18）。

泉施設SG301・石組み溝SD301（前期難波宮）

SG301内堆積物は層厚約70cmで、大きくは下位より暗灰色砂礫層、細礫混り暗灰色砂層、暗灰色ないし黒灰色砂質シルト層（木屑混入）、暗灰色ないし黄灰色砂層から構成される。分析は中部層の木屑混り暗灰色ないし黒灰色細粒砂質シルト層（No12、No10～No05）について行った。分析層準における灼熱減量は6.5～13.8%、泥含有量は61～95%と変動し、上位ほど細粒で有機物量が多くなる傾向が認められる。SD301内堆積物は層厚約80cmで、下位より暗灰色・黄灰色砂質シルト層ないしシルト質砂層、暗灰色極細粒～細粒砂混りシルト層（木屑混入）、暗灰色ないし黄灰色シルト質砂層からなる。

分析は中部層の暗灰色極細粒～細粒砂混りシルト層(№03～07)について行った。分析層準における灼熱減量は9.6～13.7%、泥含有量は78～99%と全般に細粒で比較的有機物が多い。SD301の№03～06層準は、SG301の№06～09層準に相当するが、水溜内堆積物より細粒である。

SG301およびSD301内堆積物は、樹木花粉組成は概ね同様な産出傾向を示すが、草本は異なった組成を示す。すなわち、樹木では常緑広葉樹のアカガシ亜属、針葉樹のマツ属複維管束亜属、ツガ属、モミ属が優占し、スギ、コウヤマキ属、シイノキ属、コナラ亜属などを伴う。全般に針葉樹が目立ち、特にSD301の№07ではモミ属が32%と優占する。草本では、SG301はイネ科が優占し、№09・08でミズアオイ属が高率に占め、アカザ科－ヒユ科、ギシギシ属、アブラナ属、ベニバナ属が低率ながら連続して産出する。SD301ではベニバナ属およびイネ科が優占し、特に№04ではベニバナ属が73%と高率に占める。イネ科花粉に占めるイネ属型花粉の割合は、SG301が最上部の№12を除いては約52～68%を占めるのに対し、SD301では最下部の№07を除いて17～37%と低率である。つまり、SG301ではイネ属型花粉とミズアオイ属が目立つが、SD301ではベニバナ属が優占し、イネ属型は低率でミズアオイ属はまれである。

iv) 花粉量と植物遺体量(Fig.171)

単位体積当りの炭片数(約12μmよりサイズが大きい粒子)を算出し、植物遺体に占める炭片の割合および花粉量と一緒にFig.171に示した。

樹木花粉量は、「泥炭層」では比較的多いが、古墳時代以降ではSD301の№06で5,600個/cc占めるものの大半の試料は1,000個/cc以下と少ない。炭片量も「泥炭層」で多く、SD301の№06で347,000個/ccといくぶん多いが他の層準では10万個/cc以下の試料が多い。このように炭片量と樹木花粉量の層位的変動が概ね同様な変化を示すことは、堆積速度が関係している可能性を指摘できる。花粉処理後の残渣中の植物遺体と炭片の割合は、「泥炭層」下(PL)を除いて、いずれも炭片の割合が高く、石組み遺構内堆積物では№12を除いて炭片が90%前後を占める。また、ヒノキ型やスギ型の分野壁孔が認められる炭片があり、ヒノキ型が目立つ。特にSG301の№08には多く認められ、炭片が主に針葉樹から構成されていることを示唆させる。なお、ヒノキ型の分野壁孔をもつ針葉樹には、ヒノキ、サワラ属、イチイ属、マキ属などがある。

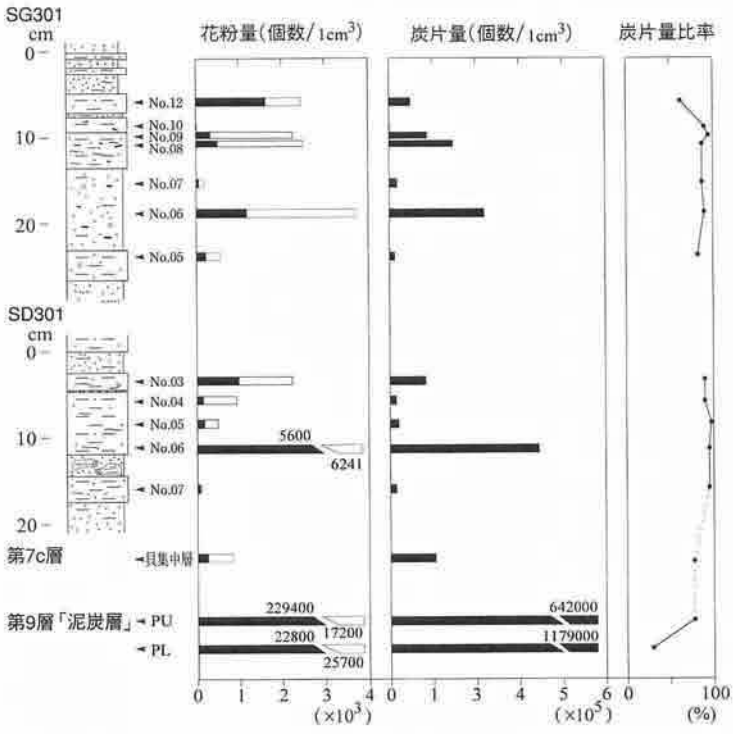


Fig.171　各遺構における花粉量、炭片量および炭片量比率
(炭片量比率は植物遺体に占める炭片の割合を示す)

v）調査地周辺の弥生時代から前期難波宮期における植生変遷と人間活動

花粉化石群の層位的な変動に基づくと、本調査地周辺の弥生時代から前期難波宮のころは、下位よりNA、NBの２つの植生期を設定することができる。NA期はアカガシ亜属が優勢な照葉樹林期、NB期は照葉樹と針葉樹林期である。

ＮＡ期：アカガシ亜属が優勢な照葉樹林期(弥生時代初頭頃)

「泥炭層」下(PL)が相当し、放射性炭素年代測定結果から概ね弥生時代初頭ごろと推定される。周辺の森林植生は、アカガシ亜属やシイノキ属を主とする照葉樹林が形成され、温帯性針葉樹のスギやイチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑ないし落葉広葉樹のモチノキ属も主要な森林構成要素であった。大阪平野周辺地域では、約6,000年前にコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林からアカガシ亜属が優勢な照葉樹林への交替期が見られ[Maeda1976・古谷1979・安田1978・松下1987]、縄文時代晩期以降には気候の冷涼多雨化により中間温帯林要素のスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガなどの針葉樹が増加し、後背山地の500m以上に中間温帯林針葉樹林が成立した可能性が示されている[那須1989]。また、2,500年前ごろの近畿地方太平洋側地域の標高700m以下には、モミ、ツガ、スギ、コウヤマキなどの温帯性針葉樹をかなり伴う照葉樹林が広がっていたことが報告されている[高原1998]。照葉樹に温帯性針葉樹を伴う花粉化石群は森の宮遺跡[渡辺・古谷1996]、新家遺跡[吉川1995]でも認められることから、大阪平野周辺で広範囲に成立していた可能性は高い。

「泥炭層」上(PU)では、マツ属複維管束亜属およびコナラ亜属が優勢で、アカガシ亜属は減少する。こうした変化はアカガシ亜属の減少に伴う二次林としてのマツ林やコナラ亜属林の増加の可能性も考えられるが、草本花粉がまれであることおよび堆積物が粗粒で泥含有量が少ないことから選択的な堆積を示唆させる。当遺跡の南方約２㎞に立地する細工谷遺跡では、５世紀後半以前にコナラ亜属を主とする森林が分布していた可能性が報告されている[金原正子1999]。これは流路内堆積物の砂層に狭在するシルト層から得られた花粉化石群で、コナラ亜属が高率に占めアカガシ亜属を伴う単調な組成を示し、上位層準では検出された花粉数も少ない。周辺地域の花粉化石群からもコナラ亜属の増加が認められないこと、後述するように前期難波宮においてコナラ亜属が低率であることから、単純にコナラ亜属林が分布拡大したわけではないであろう。一方、古墳時代後期～飛鳥時代の貝集中層では、針葉樹花粉が大半を占め、アカガシ亜属を始めとする広葉樹花粉がまれである。弥生時代に照葉樹林が分布していたこと、および古墳時代終末の前期難波宮期において針葉樹と伴にアカガシ亜属が優勢であることから、古墳時代後期に温帯性針葉樹林が優勢な森林が形成されていたとは考えられない。貝集中層の地質については、分析試料は貝片混りの灰褐色中～粗粒砂質シルトからなり泥含有量が59％と少ない。堆積物の特徴からは花粉が流水等により選択的に堆積したことを示唆させる。いずれにしても「泥炭層」上および貝集中層については、各々１試料と充分な資料がないことから普遍的な組成であるかどうかの判断ができないこと、さらに粗粒砂を含む無機質な堆積物であることから異地性花粉の影響、および流水等による選択的堆積など複雑な要因が関係し解析を困難にする。

ＮＢ期：照葉樹と針葉樹林期(前期難波宮期)

SG301およびSD301内堆積物が相当する。考古遺物から前期難波宮(645～686年)に限定され、さ

らにSG301地点は水源に当ることから、搬入される花粉は飛来花粉と雨水により台地斜面から搬入される花粉に限定される。閉鎖的な小さな堆積盆であることから植生や生業の復元にきわめて有効な地点といえる。

さて、周辺の上町台地の森林植生は、常緑広葉樹のアカガシ亜属とシイノキ属、ヤマモモ属、針葉樹のモミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギ、落葉広葉樹のコナラ亜属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などの植物相から構成される。照葉樹と温帯性針葉樹からなる森林が形成されていたと推定されるが、樹木花粉の比率が低いことから周辺の植生は疎林のように森林密度が低かったとみられる。大阪平野周辺地域では縄文時代晩期以降に中間温帯林要素のスギ、コウヤマキ、モミ、ツガなどの針葉樹が増加し照葉樹林を伴っていたことを先に示したが、古墳時代頃には関東平野の各地においてもモミやツガ林が拡大し気候の湿潤化による可能性が示されている[吉川1999]。こうしたことから、温帯性針葉樹の増加は気候の変化により分布拡大したと捉えるのが普通であろう。しかしながら、大阪平野周辺地域で主要な森林構成要素であったと推定されるアカガシ亜属に比べモミ属やツガ属の頻度が比較的高く、さらに全体に占める樹木花粉の割合が低率でありながら針葉樹花粉の比率が高い。つまり、難波宮周辺にはモミやツガ、およびマツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギなどの針葉樹が目立って分布していた可能性が高く、人為的に形成されたことを示唆させる。三内丸山遺跡などのように、縄文時代においても人為的に生態系を変えてきたことが解明されつつあるが、難波宮のような特殊な場所では生態系をつくり変えていたとみた方が妥当であろう。

一方で、草本は産出した分類群は類似するが花粉組成は異なる。つまり、2つの遺構からはイネ属型、ミズアオイ属、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、オオバコ属、ベニバナ属などの概ね同様な分類群が産出しているが、SG301ではイネ属型が優占しNo08・09でミズアオイ属が高率に産出するのに対し、SD301ではベニバナ属が優占しイネ属型は低率である。イネ籾殻1粒内に2,000粒に達する花粉が残留している[中村1980]ことから、SG301内で洗米、あるいは洗米した水が流れ込むことにより多くの花粉が搬入される。ミズアオイ属は水田などに生育する抽水性の一年草で、食用とされ全草が薬としても利用される[沖1996]。花期に茎葉部を利用されれば花粉が搬入される可能性はある。ミズアオイ属は細工谷遺跡[金原正子1999]の8世紀ごろにも花粉化石が比較的多く産出し、上町台地の北端付近の水湿地に目立って分布していた可能性があり、食用に利用されることを重視すれば栽培あるいは積極的な保護の可能性も考えられる。ベニバナ属は日本に自生しないことからベニバナとみられる。染料、化粧料、薬用、紅色素に防虫性があるため搾りかすを乾燥して夏の蚊やりに用いられた[堀田 他編1989]。また、虫下しの薬としても利用されていた可能性も推定されている[黒崎1997]。このように栽培植物ないし有用植物の花粉が大半を占める。一方で、寄生虫卵化石は鞭虫卵と回虫卵化石がわずかに産出する程度で、密度は堆積物の質により異なることから単純に比較できないが細工谷遺跡の遺構および溝内堆積物と有意な差は認められない。こうした状況に基づくと、SG301にミズアオイ属やサナエタデ節－ウナギツカミ節が生育していた可能性は否定できないが、洗米した排水等が流入していた可能性は高い。ベニバナ属は各遺構における産状から、下流部である溝

の部分で付加されたことは明らかで、染料として利用した廃液、あるいはベニバナ花の何らかの加工に伴う廃液が流れ込んだ可能性がある。また、遺構周辺にはイネ科、ツユクサ属、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、スベリヒユ属、カタバミ属、オオバコ属およびヨモギ属を含むキク科植物などの雑草が生えていたとみられる。なお、SG301には木枠や杭などの多くの木材が出土し何らかの施設があったことは明らかであるが用途は不明である。遺構の性格および状態を解明するためには考古学的所見と珪藻化石や大型植物化石などの自然科学的資料などを含め総合的に検討する必要があることはいうまでもない。（吉川昌伸）

2）珪藻分析

i）はじめに

珪藻は、幾何学的な模様をもつ珪酸の殻を有する単細胞藻類である。珪藻類全体の分布は淡水域から海水域のほぼ全ての水域環境にわたるが、個々の種は様々な環境要因に適応をみせ、それぞれ特定の生息場所をもつ。また、珪藻の化石は顕微鏡サイズながら水成堆積物中から保存よく多産し、化石群集の種の組成は堆積環境をよく反映するため、古環境の復元の指標としてこれまでに数多く利用されてきた。

ここでは、本調査地において出土した遺構のうち、第6層の泉施設SG301（№12、№10～05）、石組み溝SD301（№03～07）および第7c層中の貝集中層と第9層の「泥炭層」の上（PU）・下（PL）において土壌試料を採取し、珪藻分析を加え古環境の復元とその変遷について検討を行った。

ii）分析方法

土壌から珪藻分析用に採取した試料を風乾後、秤量する。この試料に約15％の過酸化水素水を加え反応が終わるまで加熱し、有機物の分解・漂白および一般堆積物と珪藻殻の分離を行う。反応終了後蒸留水を注ぎ、遠心分離をかけて上澄みを捨てることにより珪藻殻の濃集を行う。この操作を数回繰り返した後、適当な濃度に調整した珪藻懸濁液0.5ml程度をカバーグラスに滴下し乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のマウントメデイアを滴下し、スライドグラスに張り付け永久プレパラートを作成する。

検鏡は油浸1000倍で行った。珪藻化石群集の組成を把握するために、メカニカルステージを用いて任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定（参考[Krammer&Lange-bertalot 1986～1991など]）・計数した。なお、珪藻殻が半分以上破損したものについては計数・同定は行っていない。また、古環境の復元のための指標としては、海水から汽水域は環境指標種群（A、B、C1、C2、D1、D2、E1、E2）[小杉1988]を、淡水域は環境指標種群（J、K、L、M、N、O、P、Q）[安藤1990]を主に参考にした。各環境指標種群と生育環境の特徴をTab.19に示す。

iii）結果（Fig.172、Tab.19・20、図版104・105）

珪藻分析を加えた全ての試料において、陸域指標種群の優占する淡水生の珪藻化石群の産出が認められた。この一般的に陸生種とも呼ばれる陸域指標種群は、水際の湿った土壌やコケなどに付着しているものから、半乾燥の土壌や樹皮といった陸上環境に適応したものまであり、他の水中に生息域を

もつ珪藻群とはやや異なった生息分布を示す。また化石の産状についてみると、全ての試料に共通して試料堆積物１ｇ中に含まれる珪藻化石殻数が100～300殻数程度、場合によっては100殻に満たない試料もあり、一般的な水成堆積物に保存される殻数に比べると1／100以下の値を示した。さらにそれらのうち完形体を保持して産出した化石殻は、どの試料においても全体の60％以下と低い値を示した。この完形殻の出現率は化石の保存性を反映した値を示していると考えられ、この値が低ければ、続成作用による地下水や土壌中の間隙水による化石の溶解、あるいは下位層からの誘出による再堆積(誘導化石)、および異なった地域からの流入(異地性化石)による破損した化石の堆積といった要因が関係していることを示唆し、場合によっては化石の産出した地域に生息した生物相と全く異なった群集を形成している可能性も存在する。

これらの化石の産出傾向から、今回分析した全ての試料は共通して一般的な水成堆積物とは異なった堆積環境を示したと考えられる。以下に各遺構ごとに、産出した珪藻化石群集について得られた知見をまとめた。

泉施設SG301

産出した化石群集には特徴的な層位的変化は見られず、全体を通して陸域指標種群である*Diadesmis contenta*、*Hantzchia amphioxys*、*Navicula mutica* var. *mutica*、*Pinnularia borealis* が優占種として産出した。*Diadesmis contenta* はもとは*Navicula* 属にされていたものが、近年属名変更が行われたものである。これらの種の化石殻の保存性は他の種に比べると相対的には良い傾向を見せたが、60％以下とかなり続成作用を受けていると考えられる。このような保存傾向は、湿地など水域としては干上がって

Tab.19　環境指標種群と生育環境の特徴［小杉1988・安藤1990］

	環境指標種群	生育環境の特徴
A	外洋指標種群	塩分濃度が約35‰の外洋水中を浮遊生活する種群
B	内湾指標種群	塩分濃度が35～26‰の内湾水中を浮遊生活する種群
C1	海水藻場指標種群	塩分濃度が12‰以上の水域の海藻や海草(アマモなど)に付着生活する種群
C2	汽水藻場指標種群	塩分濃度が12～４‰程度の水域の海藻や海草に付着生活する種群
D1	海水砂質干潟指標種群	塩分濃度が26‰以上の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群 この生育場所にはウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する
D2	汽水砂質干潟指標種群	塩分濃度が26～５‰程度の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群
E1	海水泥質干潟指標種群	塩分濃度が12‰以上の水域の泥底に付着生活する種群 この生育場所にはイボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる
E2	汽水泥質干潟指標種群	塩分濃度が12～２‰程度の水域の泥底に付着生活する種群 淡水の影響により汽水化した塩性湿地に生活するものである
J	上流性河川指標種群	上流部の峡谷部に集中して出現する種群
K	中～下流性河川指標種群	中～下流部、すなわち、河川沿いに河岸段丘、扇状地、および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群
L	最下流性河川指標種群	最下流部の三角洲の部分に集中して出現する種群
M	湖沼浮遊生種群	水深が約1.5m以上ある湖沼環境を指標する種群
N	湖沼沼沢湿地指標種群	湖沼、沼沢湿地の環境を指標する種群
O	沼沢湿地付着生種群	水深が１m内外で一面に植物が繁殖している沼沢ならびに、湿地で付着の状態で優勢な出現が見られる種群
P	高層湿原指標種群	ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層が形成される環境を指標する種群
Q	陸域指標種群	上記の水域に対して、陸域を生育地として生活している種群 濡れている～乾いている土壌、岩面、樹木のコケに付着生活

しまい土壌の露出した地域において、異地性遺骸が混入するのではなく溶解や底生生物による捕食による殻の破損によって各保存度が低下することが報告されている[村田1994]。また陸域環境においては、生息する珪藻の種数が水中における種数に比べきわめて少ないことや、栄養塩濃度やその吸収形態の問題から生産性が、水中のものに比べて格段に低いため、生息個体数も少ないことが想定される。

この他に沼沢湿地付着生種群である*Fragilariforma constricta* var. *quadrata*、*Frustria rhomboides*、*Pinnularia viridis*、*Placoneis elginensis* などが環境指標種として多産した。*Placoneis elginensis* は*Navicula* 属にされていたものが、近年属名変更が行われたものである。これらの種は比較的浅い水深にも生息し、陸生種と分布域において重なることも多い[村田1994MS]。また保存性はきわめて悪く若干量ではあるものの、中～下流性河川指標種群である*Achnanthes lanceorata* の産出が認められた。この種は好流水性の付着生種であり異地性遺骸として他の水域に流れ込むこともあるものの、陸生種の生息分

Tab.20　産出した珪藻化石

分類群			泉施設SG301							石組み溝SD301					第7c層	泥炭層	
			№12	№10	№09	№08	№07	№06	№05	№03	№04	№05	№06	№07		PU	PL
Achnanthes lanceorata	F	K	1		1	1		2									
Cymbella ovalis	F	O		3			1	1	1								
Fragilariforma constricta var. *quadrata*	F	O	2	8	5	5	3	5	2								
Frustria rhomboides	F	O	11	10	10	7	11	10	10								
Pinnularia viridis	F	O	8	9	6	10	7	11	10	5	4	7	5	8			
Placoneis elginensis	F	O	1		2		13	12	15	14	10	16	11	13			
Stauroneis phoenicenteron	F	O				2		3	2								
Diadesmis contenta	F	Q	22	22	17	18	20	14	21	31	28	33	30	31	24	30	27
Diadesmis contenta fo. *biceps*	F	Q	11	20	18	21	15	20	18	8	11	10	13	11	18	10	15
Diadesmis perpusilla	F	Q	10	5	8	2	9	10	5	11	10	16	12	13	17	20	18
Hantzchia amphioxys	F	Q	26	25	30	29	32	25	30	34	30	33	21	30	33	30	38
Navicula mutica var. *mutica*	F	Q	10	14	10	10	21	24	24	22	17	19	20	20	27	14	22
Navicula mutica var. *ventricosa*	F	Q	30	21	33	30	37	24	27	14	20	17	11	20	20	28	25
Pinnularia borealis	F	Q	18	11	13	10	5	8	10	13	10	10	22	11	10	18	11
Pinnularia borealis var. *scalaris*	F	Q	5	1	1	9	4	8	8	15	11	14	12	17	8	11	16
Amphora veneta	F									5	1	6	3	3			
Aulacoseira pensacolae	F														28	30	19
Caloneis bacillum	F		1			2	8	5	8	3	8	8	2	5			
Coloneis sp.	F									4	4			3	5		
Gomphonema angustum	F		10	11	11	5	8	2	2	6	9	3	8	8	2	2	3
Gomphonema parvulum	F		10	10	11	10	6	8	5	5	10	4	8		4	3	4
Navicula cari	F		5	14	10	5	3	8	8	4	3	5	6	3	2		
Navicula cincta	F		1	1	4	2	6	5	5	3		3	5	1		2	3
Navicula constans var. *symmetrica*	F									2	5	2	4	4	3	2	2
Navicula libonensis	F		10	5	8	10	1	6	3	3	4	2	6	3	1	3	1
Navicula microcehpala	F														7		
Neidium affine var. *ceylonicum*	F		2		6	5	8	3	6								
Nitzschia inconspicua	F		5	2	2	5	3	3	3	7	3	3	2				
Nitzschia microcehpala	F		1	6		3	4	4	6								
Nitzschia normanii	F				3	2	2	2	2								
Nitzschia ovalis	F		1	5	1	4	2	1	2							4	4
Pinnularia lundi	F				3	1	2	2	2	1			2	2	3		
Pinnularia obscura	F		4			3	4	4	4	3	4	4	2	5			3
Pinnularia subcapitata var. *paucistriata*	F				3	6	2	5	5						6		
Surirella angusta	F		7	7	4	10	8	8	8	1			3	2			
Surirella minuta	F					3	2	4	4		5	1					
Tryblionella levidensis	F				4	4	2	6	5			1					
中～下流性河川指標種群(K)			1		1	1		2									
沼沢湿地付着生種群(O)			22	30	23	24	35	42	40	19	14	23	16	21			
陸域指標種群(Q)			132	119	130	129	143	133	143	148	137	152	141	153	157	161	172
完形殻の出現率(%)			34	27	44	57	60	55	58	63	71	60	64	60	55	38	40
1g中の殻含有量(×100)			1.7	2.0	1.6	3.0	2.4	1.7	2.0	2.0	1.0	1.6	1.3	1.7	3.0	1.3	1.0

布域とは異なるため、同一水域において陸生種と群集相を形成することはない。このため化石の産状も含めてこの種は異地性のものの混入と考えられるが、比較的継続した産出を見せている点が特異的である。

これらのことから、この堆積物は陸生種の多産するような水流のない湿地や沼沢地の水際のような環境を反映したものであると考えられる一方で、*Achnanthes lanceorata* のような好流水性種が若干量ながらも継続して産出するという矛盾点を示した。また層位的にきわめて類似した群集が産出することから、堆積環境がまったく安定していたか、ある同じ土壌でこの遺構を埋めた可能性も示唆される。

石組み溝SD301

産出した化石群集には特徴的な層位的変化は見られず、全体を通して陸域指標種群である*Diadesmis contenta*、*Hantzchia amphioxys*、*Navicula mutica* var. *mutica*、*Pinnularia borealis* が優占種として産出した。また*Pinnularia viridis*、*Placoneis elginensis* などが環境指標種として多産した。この結果、SG301とほぼ同様な堆積環境であり、水域としては干上がってしまった湿地のような環境が継続的に展開したことが示唆される。しかし、そのような自然の陸成堆積環境において比較的細かな粒径により構成される堆積物が堆積する場合、堆積物の供給量が少ないことから堆積速度は急激に遅くなり、その結果堆積物の層厚自体もきわめて薄いものとなるのが一般的である。この場合、このような一般的な堆積物の様相とやや異なった傾向が見受けられた。

貝集中層と泥炭層PU・PL

産出した化石群集には特徴的な層位的変化は見られず、また泥炭層と貝層との試料間における相違も見られず、全体を通して陸域指標種群である*Diadesmis contenta*、*Hantzchia amphioxys*、*Navicula*

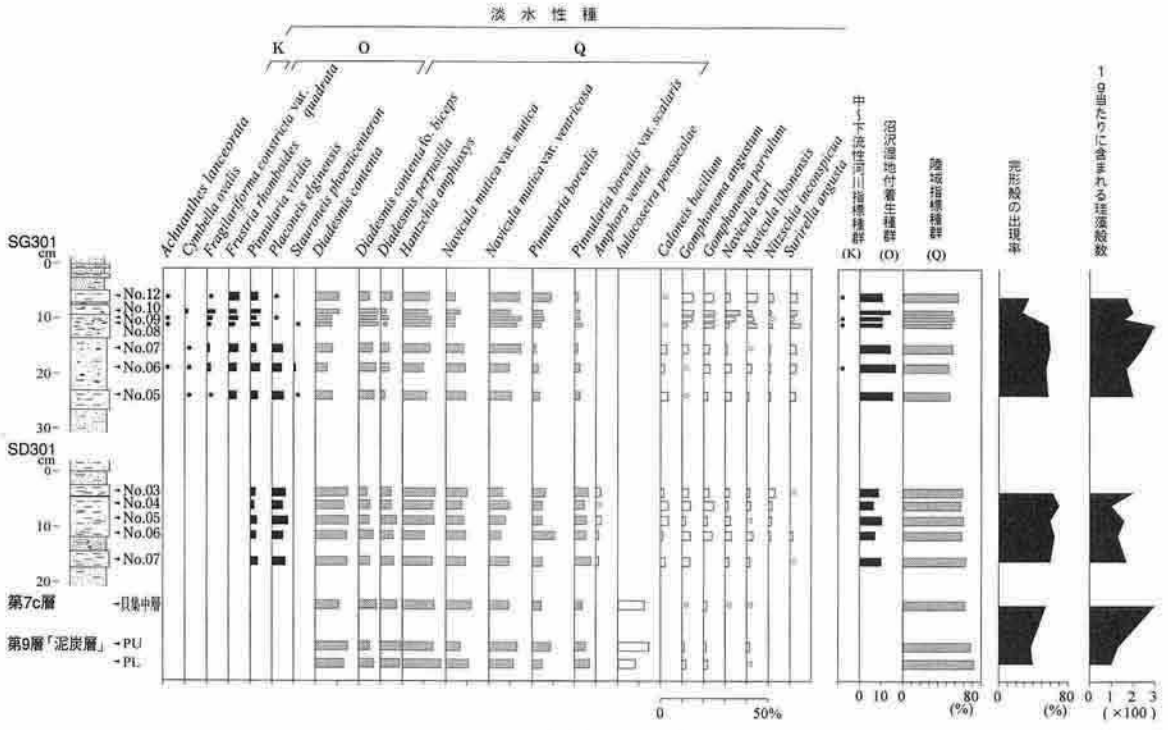


Fig.172　産出した珪藻化石

環境指標種群は[安藤1990]・[村田1998]に基づき分類した。丸印は１％未満の産出を示す。

mutica var. *mutica*、*Pinnularia borealis* が優占種として産出した。また本州の湖沼や沼沢地において、典型的に分布が確認されている[Kobayashi1968、真山・小林1982]*Aulacoseira pensacolae* が多産した。これらの結果から、他の遺構の堆積環境と非常に類似した堆積環境が存在したことが考えられる。また貝層から得られた試料は、貝層であるにもかかわらず、陸成堆積環境を示唆することから、この試料が貝層形成期とは異なる時代のものであるか、もしくは二次的に貝が混入したと考えられる。

ⅳ）まとめ

今回の分析の結果、すべての試料においてきわめて類似した陸域環境を反映する群集が産出した。この原因については今回の結果からは明らかにすることはできないが、この遺跡の形成期もしくは埋没期の堆積環境が湿地帯のような陸域環境にあり、しかもこの環境が安定して継続したことを化石群集は示唆している。しかし層位方向に対しても、また面的な分布範囲にしてもあまりに均一化した群集の産出は、自然の堆積環境において埋積された生物化石相としてはやや奇異な産状を示している。このため試料を採取した地域が似たような土壌で人為的に埋められたのではないかということも可能性として考えられる。（村田泰輔）

3）大型植物化石

ⅰ）はじめに

大阪市中央区法円坂を中心とする一帯では2時期の宮殿跡が見つかっている。そのうち本調査地では前期難波宮期の大規模な倉庫群とともに北西の谷から石組みの水利施設が発見された。湧水を汲むための泉施設SG301と水を流す石組み溝SD301からなり、堆積物には植物化石が含まれていた。この遺構から出土した土器は7世紀中葉以前のものに限られることから前期難波宮と推定され、石組み遺構の使用目的を探るために堆積物を分析した。試料は、発掘担当者によりSG301中央付近の木枠の脇で各試料とも約10kgが採取され、0.5㎜目の篩を用いて水洗し、残渣から同定可能な植物化石が選び出された状態であった。また、前期難波宮期の19試料の他、古墳時代後期～飛鳥時代の2試料、江戸時代後半の12試料、計33試料を分析した。

古墳時代後期～飛鳥時代の堆積物は第7c層中の貝集中層である。前期難波宮の堆積物はFig.173に模式柱状図を示し、大型植物化石用の試料採取層準は黒三角で示した。以下に簡単に堆積物の記載を行う。№01および№02採取層は青灰色砂質シルトおよび青灰色シルト質砂層で地山と考えられる。その上位№03～05は暗灰色の砂礫層で葉理があり、この層の上部から石組み溝がつくられたと考えられる。№06～09は第6b層で、暗灰～黒灰色で細かい木屑や炭化物、礫を含むシルト質砂層である。№10は暗灰色シルト層、№11・12採取層は炭化物を含む暗灰色砂質シルト層、№13～17は黄灰色砂層と暗灰色砂質シルト層が交互に堆積している。№18はやや大きい礫を含む砂礫層となっている。

ⅱ）時代ごとの産出状況および古環境(Fig.173、Tab.21・22、図版106～108)

産出したすべての分類群をTab.21・22に示した。それぞれの表の明らかな栽培種および人間によって利用された痕跡が顕著な分類群には＊を付してある。以下に各時期別に産出状況とそれから類推される当時の環境を推定する。

古墳時代後期～飛鳥時代

貝層からはコハコベ近似種、ヘビイチゴ属近似種、スベリヒユ、シロザ近似種、ヒユ属、カタバミ属といった、比較的日当たりのよい乾燥ぎみの場所に生育する種類を大変多く産出した。ヒユ属はつぶれた種子の割合がたいへん多くなっている。また、ハコベ属、エノキグサ、ナス属なども多い。陰湿地に生育するサンショウソウ属は比較的多く産出したが、日当たりのよい水湿地周辺に生育するホタルイ属、ヤナギタデ、ボントクタデ近似種、ミゾソバはわずかに産出しただけであった。タガラシも水田や溝などといった日当たりのよい湿地に生育する種類である。これらの他の草本はエノコログサ属、ツユクサ、カナムグラ、ギシギシ属、ヤブジラミ属、トウバナ属、オドリコソウ属、シソ属、アカネ属などを産出したが、いずれも開けた場所あるいは林の縁に生育する種類である。これらの水生でも乾生でもない種類のものは中生植物と呼ばれる。栽培植物はモモ、イネ、ヒエ、アサ、キュウリ属メロン仲間を産出したが大変少ない。また、木本では林縁部に生育するタラノキをやや多く産出し、やや少ないが落葉広葉樹で比較的高木になるエノキ、ムクノキ、カジノキ、サンショウ、カラスザンショウ、エゴノキやムラサキシキブ属、低木のイヌザンショウなども産出した。この時期は土器や貝の破片が堆積し、穀類は炭化しているものもあり、破片のアサ、ヒユ属のつぶされた種子などといった利用された痕跡のある植物がやや多く含まれている。このことから周囲から谷に流れ込んだものがそのまま堆積していたような場所ではなかったかと推定される。また、木本由来の種実やヘビイチゴ属近似種、カタバミ属、エノキグサといった中生植物が比較的多いことから周辺に生育していた種子の供給や雨水などによる流れ込みもあったと考えられる。サンショウソウ属も比較的多いため、日陰で常に湿ったような環境であったと考えられる。

前期難波宮期

砂礫層の下位に当る青灰色シルトのNo01・02からはヒサカキ、サナエタデ近似種、シロザ近似種以外は産出されなかった。またそれらはきわめて少なかった。

第7b層であるNo03～05からは、水生植物のコナギ、ヤナギタデをやや多く産出し、イグサ属、ボントクタデ近似種、タガラシ、陰湿地を好むサンショウソウ属、ミズ属も産出した。また、中生植物のヒユ属、コハコベ近似種、ハコベ属、カタバミ属、ナス属もやや多く産出した。これらの他に栽培植物はモモ、イネ、ヒョウタン、キュウリ属メロン仲間を産出した。また、これらの層では木本種実の種類がやや多く、エゴノキ、エノキを少し産出し、わずかであるがマツ科、ブナ科、ムクノキ、クワ属、カジノキ、サンショウや林縁部に多いタラノキ、低木のイヌザンショウ、林縁部のつる植物であるブドウ属、ノブドウを産出した。

No06～09の第6b層と呼ばれる堆積物からは、やや日当たりのよい場所を好むギシギシ属、サナエタデ近似種、ヒユ属、コハコベ近似種、カタバミ属、トウバナ属をやや多く産出し、栽培植物はキビ、ヒョウタン、キュウリ属メロン仲間をわずかに産出した。ヒユ属はつぶれた種子がやや多くなっている。水生植物(湿地性、抽水性、沈水を含める)ではヤナギタデをやや多く産出し、わずかにホタルイ属、コナギ、イグサ属、サンショウソウ属、ノミノフスマ近似種、タガラシを産出した。木本は種類数が減少し、エノキ、カジノキ、ウルシ属、エゴノキなどをわずかに産出する。

Tab.21－1　大型植物化石

分類群	学名	試料番号	第7c層貝集中層 R986	第7c層貝集中層 R995	泉施設SG301（前期難波宮） No01	No02	No03	No04	木屑層 No05	木屑層 No07 06	木屑層 No08	No10 09
木本												
マツ科	Pinaceae	種子破片						1	1			
クリ＊	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	果皮破片										
ブナ科	Fagaceae	果皮破片							2			
エノキ	*Celtis sinensis* Pers.	内果皮	2				6	10		1		
	var. *japonica* (Planch.) Nakai	果実割れ					1	3				
ムクノキ	*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.	内果皮破片		1			1					
クワ属	*Morus*	種子						5				
カジノキ	*Broussonetia papyrifera* (Linn.) Vent.	内果皮	1	10			2	2	2		1	1
		破片										
モモ＊	*Prunus persica* (Linn.) Batsch	核完形					1	1				
		完形食痕		1								
		半分	3									
		半分食痕	1									
		破片	2	1								
サクラ属サクラ節	*P.* sect. Pseudocerasus	核破片										
キイチゴ属	*Rubus*	核	5	4						2		
フジ属	*Wisteria*	芽鱗										
サンショウ	*Zanthoxylum piperitum* (Linn.) DC.	内果皮	1	4			1					
		半分	3	5								
		破片	3	3					1			
		外果皮付		1								
カラスザンショウ	*Z. ailanthoides* Sieb. et Zucc.	内果皮半分	1	2								
		破片	4									
イヌザンショウ	*Z. schinifolium* Sieb. et Zucc.	内果皮		3			2					
		半分	5	6			4	2				
ウルシ属	*Rhus*	種子								1		
ブドウ属	*Vitis*	種子	1	1			1					
ノブドウ	*Ampelopsis brevipedunculata*	種子					1	1				
	(Maxim.) Trautv.	破片					1	2	4			
ヒサカキ	*Eurya japonica* Thunb.	種子破片			1							
アカメガシワ	*Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg.	種子										
		種子破片		1								
タラノキ	*Aralia elata* (Miq.) Seemann	内果皮	62	35				1				
ムラサキシキブ属	*Callicarpa*	内果皮	9	4								
エゴノキ	*Styrax japonicum* Sieb. et Zucc.	内果皮		1			4					
		破片		1			30	8	1	6		
ガマズミ属	*Viburnum*	風化内果皮					1					
不明		芽鱗										
草本												
オモダカ科	Alismataceae	種子										
イネ＊	*Oryza sativa* L.	穎完形		2								
		穎破片	1	2								
		炭化穎片		2								
		炭化胚乳	3	5					1			
		炭化しいな		2								
		穎果焼膨れ		1								
		穎付胚乳		4								1
		胚乳焼膨れ		4					1			
オオムギ＊	*Hordeum vulgare* L.	種子焼膨れ										
ムギ類＊	*Triticum* and/or *Hordeum*	焼膨れ										
ヒエ＊	*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno	穎	1									
イヌビエ	*E. crus-galli* (Linn.) Beauv.	穎完形										
キビ＊	*Panicum miliaceum* L.	炭化種子									1	
エノコログサ属	*Setaria*	穎	13	17			3	2	4		1	
		炭化穎果										
イネ科B	Gramineae B	種子										
イネ科C	Gramineae C	種子										
イネ科D	Gramineae D	炭化種子										
ウキヤガラ	*Scirpus yagara* Ohwi	果実										
ホタルイ属	*Scirpus*	果実	1	5							1	

Tab.21－2　大型植物化石

分類群	学名	試料番号	第7c層貝集中層 R986	第7c層貝集中層 R995	泉施設SG301（前期難波宮）（未周堤）No01	No02	No03	（未周堤）No04	（本周堤）No05	（本周堤）No07 06	No08	No10 09
コゴメガヤツリ近似種	*Cyperus iria* L.	果実						2	1	1		
カヤツリグサ属	*Cyperus*	果実										
スゲ属	*Carex*	苞										
		果実	4	2			2		1	1		
カヤツリグサ科	*Cyperaceae*	果実	8	5					1			
ツユクサ	*Commelina communis* L.	種子		2								
イボクサ	*Aneilema keisak* Hassk.	種子										
コナギ	*Monochoria vaginalis* Presl.	種子					62	8	4		2	
イグサ属	*Juncus*	種子						7	4	2	9	1
サンショウソウ属	*Pellionia*	種子		122			5	2	5	1		
ミズ属	*Pilea*	種子					2					
カナムグラ	*Humulus scandens* (Lour.) Merrill	種子	1									
アサ＊	*Cannabis sativa* L.	種子半分	10	10								
		破片	16	28								
ギシギシ	*Rumex japonicus* Houtt.	花被付果実						1	1	1	2	
ギシギシ属	*Rumex*	果実	21	10			3	8	17	19	14	1
サナエタデ近似種	*P.* cf. *scabrum* Moench	果実			1		1		2	3	12	1
ヤナギタデ	*P. hydropiper* Linn.	果実	1	3			36	2	18	11	20	
ボントクタデ近似種	*P.* cf. *pubescens* Blume	果実	1				2					
ネバリタデ近似種	*P.* cf. *viscoferum* Makino	果実	6	15			3	1	1	2	3	1
イヌタデ近似種	*P.* cf. *Longisetum* De Bruyn	果実										
ミゾソバ	*P. thunbergii* Sieb. et Zucc.	果実	1									
タデ属ミチヤナギ節	*P.* sect. Avicularia	果実		4								
シロザ近似種	*Chenopodium*	種子	233	1142	1			3	1	3		
ヒユ属＊	*Amaranthus*	種子	171	35			29	18	16	12	16	4
		破損種子	162	485					31	40	19	19
スベリヒユ	*Portulaca oleracea* Linn.	種子	86	154						5	1	1
コハコベ近似種	*Stellaria media* Villars	種子	1076	831			17	15	44	16		
ノミノフスマ近似種	*S.* cf. *alsine* Grimm var. *undulata* Ohwi	種子	5				6	17	8	4		
ハコベ属	*Stellaria*	種子		73					32	11	4	2
タガラシ	*Ranunculus sceleratus* L.	果実	4	2				2	7	3	7	1
キンポウゲ属	*Ranunculus*	果実					1					
ナズナ属	*Capsella*	種子						1	2	1		
ヘビイチゴ属近似種	cf. *Duchesnea*	核	472	450			1	1	6	6	2	
カタバミ属	*Oxalis*	種子	22	121			32	23	45	28	2	1
エノキグサ	*Acalypha australis* Linn.	種子	25	51			7	1	1	1	1	
スミレ属	*Viola*	種子		1			1		6			
チドメグサ属	*Hydrocotyle*	果実					1	1	2	1	1	1
ヤブジラミ属	*Torilis*	果実	1	1								
コナスビ	*Lysimachia japonica* Thunb.	種子								1		
キランソウ属	*Ajuga*	果実	7	3			1					
イヌコウジュ属	*Mosla*	果実	1				3			1		
トウバナ属	*Clinopodium*	果実	1				1			11	6	1
オドリコソウ属	*Lamium*	果実	3	2								
シソ属	*Perilla*	果実		4						3		
アカネ属	*Rubia*	種子	1	8								
ナス属	*Solanum*	種子	26	44			80	47	12	7	3	1
ハダカホオズキ属	*Tubocapsicum*	種子							1			
ヒョウタン＊	*Lagenaria siceraria* (Molina)Standl.	種子					1			1		
		半分					1	1		2		
		破片						5		1		
キュウリ属メロン仲間＊	*Cucumis melo* L.	種子						1	3		1	
		破片	1	1			1		1		1	
タカサブロウ	*Eclipta prostrata* L.	果実						1			6	1
キク科	Compositae	果実	7	1					1	2		
担子菌		菌核	10			2		1				
不明C			5									
不明D								1				
不明E												
不明F							1					
不明K									1			1

Tab.21－3　大型植物化石

			泉施設SG301(前期難波宮)										
分類群	学名	試料番号	No12 11	No13	No14A	No14B	No15	No16A	No16B	No16C	No17A	No17B	No18
木本													
マツ科	Pinaceae	種子破片											
クリ＊	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	果皮破片										1	
ブナ科	Fagaceae	果皮破片											
エノキ	*Celtis sinensis* Pers.	内果皮											
	var. *japonica* (Planch.) Nakai	果実割れ											
ムクノキ	*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.	内果皮破片											
クワ属	*Morus*	種子											
カジノキ	*Broussonetia papyrifera* (Linn.) Vent.	内果皮		1		1							4
		破片								1		4	
モモ＊	*Prunus persica* (Linn.) Batsch	核完形											
		完形食痕											
		半分											
		半分食痕											
		破片							2				
サクラ属サクラ節	*P.* sect. Pseudocerasus	核破片										1	
キイチゴ属	*Rubus*	核										2	3
フジ属	*Wisteria*	芽鱗		1									
サンショウ	*Zanthoxylum piperitum* (Linn.) DC.	内果皮											1
		半分											
		破片							3	1		2	
		外果皮付											
カラスザンショウ	*Z. ailanthoides* Sieb. et Zucc.	内果皮半分											
		破片											
イヌザンショウ	*Z. schinifolium* Sieb. et Zucc.	内果皮											
		半分										1	
ウルシ属	*Rhus*	種子											
ブドウ属	*Vitis*	種子	1						1				1
ノブドウ	*Ampelopsis brevipedunculata*	種子											
	(Maxim.) Trautv.	破片								1		1	
ヒサカキ	*Eurya japonica* Thunb.	種子破片											
アカメガシワ	*Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg.	種子											1
		種子破片											6
タラノキ	*Aralia elata* (Miq.) Seemann	内果皮							1				
ムラサキシキブ属	*Callicarpa*	内果皮											
エゴノキ	*Styrax japonicum* Sieb. et Zucc.	内果皮											
		破片				1			1			1	
ガマズミ属	*Viburnum*	風化内果皮		1									
不明		芽鱗	2	4			2						3
草本													
オモダカ科	Alismataceae	種子		1		1							
イネ＊	*Oryza sativa* L.	籾完形		1									
		籾破片		1									
		炭化籾片											
		炭化胚乳							1			1	3
		炭化しいな											
		籾果焼膨れ											
		籾付胚乳											
		胚乳焼膨れ					1						
オオムギ＊	*Hordeum vulgare* L.	種子焼膨れ				1							
ムギ類＊	*Triticum* and/or *Hordeum*	焼膨れ										1	
ヒエ＊	*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno	籾				6	2					11	3
イヌビエ	*E. crus-galli* (Linn.) Beauv.	籾完形					1		1		1		
キビ＊	*Panicum miliaceum* L.	炭化種子											
エノコログサ属	*Setaria*	籾		1		5	2		1			11	2
		炭化籾果				1							
イネ科B	Gramineae B	種子		3		3	31		2			1	
イネ科C	Gramineae C	種子		5		1							
イネ科D	Gramineae D	炭化種子					1						
ウキヤガラ	*Scirpus yagara* Ohwi	果実										1	
ホタルイ属	*Scirpus*	果実		3		1	1					1	

Tab.21－4　大型植物化石

分類群	学名	試料番号	泉施設SG301（前期難波宮）										
			№12 11	№13	№14A	№14B	№15	№16A	№16B	№16C	№17A	№17B	№18
コゴメガヤツリ近似種	*Cyperus iria* L.	果実	3	1		3	7					15	4
カヤツリグサ属	*Cyperus*	果実					3						
スゲ属	*Carex*	莖					1						
		果実	1			1	2	1	1		2	1	1
カヤツリグサ科	*Cyperaceae*	果実		4		2	1						
ツユクサ	*Commelina communis* L.	種子											
イボクサ	*Aneilema keisak* Hassk.	種子	1										
コナギ	*Monochoria vaginalis* Presl.	種子	1	1									
イグサ属	*Juncus*	種子	5	19					1		1	10	
サンショウソウ属	*Pellionia*	種子				3	4					2	
ミズ属	*Pilea*	種子											
カナムグラ	*Humulus scandens* (Lour.) Merrill	種子											
アサ＊	*Cannabis sativa* L.	種子半分											
		破片											
ギシギシ	*Rumex japonicus* Houtt.	花被付果実	1	2		7	3						
ギシギシ属	*Rumex*	果実	3	7	2	33	10		6	4		5	3
サナエタデ近似種	*P.* cf. *scabrum* Moench	果実	1	7		6	1		1			62	3
ヤナギタデ	*P. hydropiper* Linn.	果実	8	2		2	1	1		1		119	
ボントクタデ近似種	*P.* cf. *pubescens* Blume	果実				2						2	1
ネバリタデ近似種	*P.* cf. *viscoferum* Makino	果実	5	6		1	1					19	4
イヌタデ近似種	*P.* cf. *Longisetum* De Bruyn	果実		2									
ミゾソバ	*P. thunbergii* Sieb. et Zucc.	果実										3	
タデ属ミチヤナギ節	*P.* sect. Avicularia	果実											
シロザ近似種	*Chenopodium*	種子	3	4		3	2		6	1		6	5
ヒユ属＊	*Amaranthus*	種子	23	15		10	13		8	4		20	3
		破損種子	47	143		131	139	4	51	23	1	313	80
スベリヒユ	*Portulaca oleracea* Linn.	種子	3	3	1	10	10	1	3	1		29	7
コハコベ近似種	*Stellaria media* Villars	種子	5	84	3	111	96		29	8	1	15	6
ノミノフスマ近似種	*S.* cf. *alsine* Grimm var. *undulata* Ohwi	種子		1			7		1			3	3
ハコベ属	*Stellaria*	種子	3	21		1	42		8	4		6	2
タガラシ	*Ranunculus sceleratus* L.	果実	1						1			1	
キンポウゲ属	*Ranunculus*	果実											
ナズナ属	*Capsella*	種子	3	10		1	4	1				4	
ヘビイチゴ属近似種	cf. *Duchesnea*	核	2			3	5		2	7		8	9
カタバミ属	*Oxalis*	種子	16	46		113	50	1	28	3	1	66	58
エノキグサ	*Acalypha australis* Linn.	種子	5	6		2	1		3			7	
スミレ属	*Viola*	種子	2	1		1			1			4	2
チドメグサ属	*Hydrocotyle*	果実	1				1			1			
ヤブジラミ属	*Torilis*	果実											
コナスビ	*Lysimachia japonica* Thunb.	種子											
キランソウ属	*Ajuga*	果実											
イヌコウジュ属	*Mosla*	果実										1	6
トウバナ属	*Clinopodium*	果実	3	6		6	4		3	1		8	22
オドリコソウ属	*Lamium*	果実											
シソ属	*Perilla*	果実				1							
アカネ属	*Rubia*	種子											
ナス属	*Solanum*	種子	3	2		3	6		4			7	2
ハダカホオズキ属	*Tubocapsicum*	種子										1	
ヒョウタン＊	*Lagenaria siceraria* (Molina)Standl.	種子											
		半分											
		破片											
キュウリ属メロン仲間＊	*Cucumis melo* L.	種子	1						1		2	8	3
		破片				1	1			1	1	8	4
タカサブロウ	*Eclipta prostrata* L.	果実	2			2	2					7	1
キク科	Compositae	果実				1							
担子菌		菌核						2	6	4		3	7
不明C													
不明D													
不明E			1										
不明F													
不明K													3

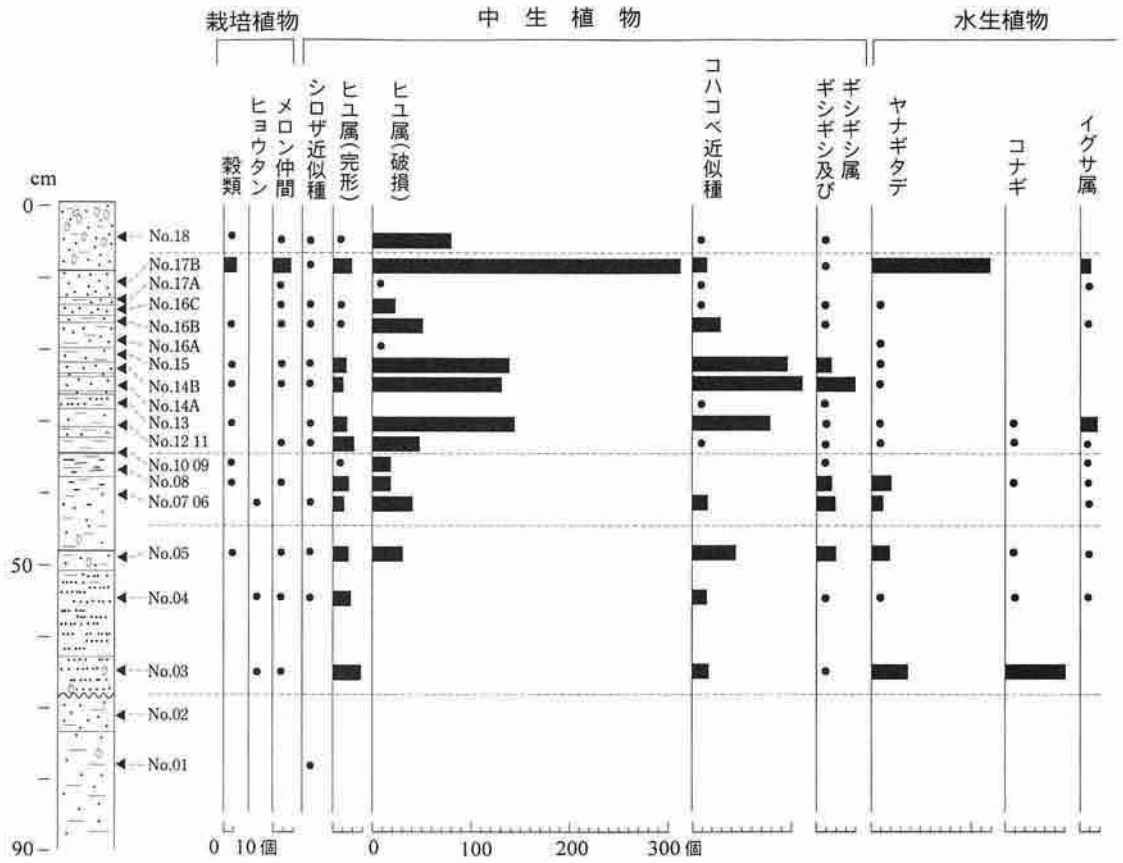


Fig.173　泉施設SG301の主要な大型植物化石変遷図
表示個数は約10kg中に含まれていた種子総数、黒丸は10個未満

No11～15は、木本がさらに減少し、カジノキ、エゴノキ、ガマズミ属などを産出するがきわめて少ない。栽培植物ではイネ、オオムギ、ヒエ、キュウリ属メロン仲間をわずかに産出し、ヒョウタン、アサはNo12より上位では産出しなくなる。産出数が多いのは中生植物であるヒユ属、コハコベ近似種、カタバミ属で、ヒユ属はやはりつぶれた種子が大半を占める。また、ギシギシ属、スベリヒユ、ハコベ属、ナズナ属も比較的多く産出する。水生植物ではイグサ属を比較的多く産出し、わずかであるがオモダカ科、ホタルイ属、イボクサ、コナギ、サンショウソウ属、ヤナギタデ、ボントクタデ、タガラシも産出する。

No16A～17Aは全体的に産出数が減少する。栽培植物はやはり少なく、モモ、イネ、キュウリ属メロン仲間をわずかに産出するのみである。ここで産出数が多いのはヒユ属、コハコベ近似種、カタバミ属で、ヒユ属はつぶれた種子が多い。水生植物はイグサ属、ヤナギタデ、タガラシを産出するがきわめて少ない。

No17Bでは再び産出数が多くなり、ヒユ属のつぶれた種子が大変多く、サナエタデ近似種、カタバミ属を多く産出する。また栽培植物のヒエ、中生植物のエノコログサ属、コゴメガヤツリ近似種、ネバリタデ近似種、スベリヒユ、コハコベ近似種もやや多く産出するが、No18では減少してしまう。これらの他に減少するものとしてはサナエタデ近似種、ナス属、キュウリ属メロン仲間、タカサブロウがあげられる。No17Bでは水生植物のヤナギタデを多く産出し、イグサ属、ミゾソバの他、ウキヤガ

ラ、ホタルイ属も産出するがこれらの水生植物はNo18ではまったく産出されない。ほとんど減少しないものはカタバミ属、逆に増えるものにはイヌコウジュ属、トウバナ属がある。

水利施設周囲では、当初は比較的樹木が多くやや日陰の多い湧水池であったが、その後徐々に樹木が少なくなり日当たりのよい水辺へと変化していったと考えられる。またそれに伴って、周囲からの植物遺体の流れ込みの割合はやや増加していったと推測される。

江戸時代後半

SK801の2試料は種類、個数ともに大変少ない。栽培植物としてはイネ、コムギ、その他ムカシヨモギ属、ヤマゴボウ、カタバミ属や風化されたツユクサなどがわずかに産出している。SK804の試料はキイチゴ属、サンショウ、アカメガシワといった木本の他、栽培植物のカキノキ、イネ、コムギ、オオムギや中生植物のスベリヒユ、ヤマゴボウ、カタバミ属を産出した。カキノキ、イネ、コムギ、オオムギはいずれも炭化しており、人為的に利用されたあと堆積したことがわかる。SK805はわずかにヒユ属、カボチャの破片を産出したのみであった。SK807はキイチゴ属、アカメガシワ、栽培植物のオオムギ、ヒエ近似種、他に炭化したシロザ近似種、オヒシバ、ヘビイチゴ属近似種、イヌコウジュ属などを産出した。SK803はわずかに木本の芽およびイネ、イヌコウジュ属を産出したのみであった。SK800は生活ゴミが集積した層とみられ、豊富な種類が産出した。なかでもカボチャの種子が大変多く、他の栽培植物はモモ、イネ、コムギ、アズキ、キュウリ属メロン仲間を産出した。また、堆積物中の保存が良かったためか、サンショウの外果皮がついたまま残っているものがあった。他にはナス属、センダン、炭化したシロザ近似種、キランソウ属、オドリコソウ属なども産出している。アズキは虫が食った種子が炭化したものが多く、肉眼で不良種子をはじき火にくべたものがゴミとして堆積したのであろう。シロザ近似種は種子ではなく果実が炭化した状態であった。

以上のように栽培植物や有用植物と伴に多種の中生植物が産出している。SK800では栽培植物ないし有用植物が多く産出しているが、他の試料では栽培植物はまれでいわゆる雑草である中生植物が目立つ。また、穀類の多くは炭化した試料からなる。

iii）石組み遺構の性格

Fig.173には柱状図とともにSG301で産出した分類群のうち特徴的な種類を図示した。SG301下位の青灰色砂質シルト層は地山と考えられ、No03より上位は同遺構の利用とともに埋積していった層と考えられる。栽培植物については産出した全種を示してあるが、全体を通して比較的少ないが連続的に産出していることがわかる。No05までは樹木の数も多く、コナギ、サンショウソウ属、ヤナギタデといった抽水や湿地に生育する種類も多いことから水場付近の茂みの周囲に林があったとも考えられる。この場合でも湧水量が多ければそれほど多くの種子は堆積せず流れてしまう。また、常時利用しているとすれば底さらいなどの清掃をしつつ徐々に堆積していったと考えられる。水生植物のコナギ、ヤナギタデは下位で多く上位ほど少なくなり、コナギは上位では産出されなくなる(Fig.173)。第6b層から上位では木本由来の植物遺体が少なくなると同時に種子を多く産出する層とほとんど産出しない層が規則的に見られる。いわゆる雑草は条件さえよければ種子を生産し続け、種子の生産が止まる時期は厳寒期のみである。したがって、この種子数の少ない堆積層は冬期を示しているとも考えら

Tab.22　江戸時代後半の大型植物化石

分類群	学名	遺構	SK801		SK804					SK805	SK807	SK803		SK800
					1層	2層	3層	4層	5層			NR11	NR12	
木本														
マツ科	Pinaceae	種子破片												1
モモ＊	*Prunus persica* (Linn.) Batsch	核完形												1
		風化												1
		破片												3
サクラ属サクラ節	*P.* sect. Pseudocerasus	核炭風化											1	
キイチゴ属	*Rubus*	核				1		1			1			2
サンショウ	*Zanthoxylum piperitum* (Linn.) DC.	内果皮				1	1							22
		外果皮付												3
センダン	*Melia azedarach* Linn.	内果皮												7
		破片												16
カキノキ＊	*Diospyros kaki* Thunb.	炭化種子						1						
ツタ	*Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. et Zucc.) Planch.	種子							1					6
アカメガシワ	*Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg.	種子			1									4
		種子破片	2		1				1		2			3
ソクズ	*Sambucus sieboldiana* (Miq.) Blume ex Graebn.	内果皮半分			1									
不明		芽鱗										1		
草本														
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	風化果実						1						
イネ＊	*Oryza sativa* L.	籾付胚乳												1
		同焼膨れ					1	2	1			1		13
コムギ＊	*Triticum*	炭化種子	1											
		焼膨れ					1	1						2
オオムギ＊	*Hordeum vulgare* L.	炭化種子			1		1				1			
		焼膨れ			1									
ヒエ近似種＊	*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno	炭化種子									2			
エノコログサ属	*Setaria*	穎果	2											
オヒシバ	*Eleusine indica* (Linn.) Gaertn.	種子									3			
イネ科A	Gramineae A	種子												1
イネ科B	Gramineae B	種子												1
ハリイ属	*Eleocharis*	果実												1
ホシクサ属近似種	cf. *Eriocaulon*	種子	1								1			
ヤブミョウガ	*Pollia japonica* Thunb.	種子	1											1
ツユクサ	*Commelina communis* Linn.	風化種子	1											
イグサ属	*Juncus*	種子					1	1						
クワクサ	*Fatoua villosa* (Thunb.) Nakai	種子												2
シロザ近似種	*Chenopodium*	炭化果実						1			9			14
ヒユ属＊	*Amaranthus*	種子									2			
		破損種子								1				
ヤマゴボウ	*Phytolacca esculenta* Van Houtte	種子	1	1		1	5		1		3			3
ザクロソウ	*Mollugo pentaphylla* Linn.	種子			1		1							
スベリヒユ	*Portulaca oleracea* Linn.	種子	1		11		5	1			2			44
コハコベ近似種	*Stellaria* cf. *media* (Linn.) Villars	種子												5
キンポウゲ属	*Ranunculus*	果実												5
ケシ科近似種	cf. Papaveraceae	種子			1		1							
ナズナ属	*Capsella*	種子											1	
ヘビイチゴ属近似種	cf. *Duchesnea*	核									8			4
アズキ＊	*Vigna angularis* (Willd.) Ohwi et Ohashi	炭化種子												5
カタバミ属	*Oxalis*	種子	2		1	3	3	4	1		3			6
エノキグサ	*Acalypha australis* Linn.	種子												4
キランソウ属	*Ajuga*	果実												13
イヌコウジュ属	*Mosla*	果実			3		1				9	1		1
トウバナ属	*Clinopodium*	果実			1									
オドリコソウ属	*Lamium*	果実												6
アカネ属	*Rubia*	種子	1					1						
ナス属	*Solanum*	種子												67
キュウリ属メロン仲間＊	*Cucumis mello* L.	種子												1
カボチャ＊	*Cucurbita moschata* Duch. ex Poiret.	種子												451
		破片								2				832
ムカシヨモギ属	*Erigeron*	果実	2		1		2	1						
担子菌		菌核	14	3	1						11			8
不明A							5							
不明B								1						
不明G			8	3										
不明H					2		5	1			3	1	2	
不明I					2									
不明J						4	12		1					1
不明K														1
不明L														1

れる。このことは、減りつつあるがヤナギタデやイグサ属といった水生植物種子もやや同調していることからも季節性の可能性が考えられる。

さて、この水利施設の水が流れていた場所には水生植物のコナギやイグサ属といった浅い水位の湿地を好む水生植物が生育し、流水のすぐそばにはヤナギタデ、サンショウソウ属などの草本が生育した比較的きれいな水環境だったと考えられる。そういった場所でヒユ属のつぶされた種子が多く堆積し、しかも上位に向かって増加しているのはなぜだろうか。試料が採取された場所は木枠で囲まれた水の沸きだし口のすぐ脇である。一つの可能性として木枠周囲での食器類洗浄があげられる。つまり、ヒユ属のなかでもヒユの種子は眼病の治療薬として用いられるため、この薬剤加工処理に用いた器をここで洗浄していたのではないだろうか。つぶす、汁を漉すという行為では器にこびりつく種子の殻は多く、洗浄によって供給される量も多くなる。古墳後期の貝層でもヒユ属のつぶれた種子は多く、日常的に利用していたことを示唆させる。なお、石組み遺構の堆積物から産出した種類の多くは現在では単なる雑草としてみられているが、実に多くの種類が食用や薬用として利用可能である。食用としては、サンショウ、イヌザンショウ、オモダカ科、コナギ、ミズ属、ギシギシ、ヤナギタデ、シロザ近似種、ヒユ属、コハコベ近似種、薬用としてはサンショウ、イヌザンショウ、エゴノキ、サンショウソウ属、ギシギシ、シロザ近似種、ヒユ属、ナズナ属、エノキグサ、スミレ属、チドメグサ属、キランソウ属、イヌコウジュ属、トウバナ属、シソ属、アカネ属、ナス属、またツユクサ、ギシギシ、アカネ属は染料として利用可能である。おそらく湧水周辺を石組みで囲った上、土砂の流入を防ぐために草を茂らせたままにしておいたものではないだろうか。これらギシギシ属やヒユ属、カタバミ属、イヌコウジュ属、ナス属のような中生植物とオモダカ科、イグサ属、ホタルイ属のような水生植物がともに産出するという大型植物化石群集は、同時期の周辺遺跡でも認められる[金原正子1999・パリノサーヴェイ株式会社1996]。これは試料の採取場所が台地から谷におりた水湿地と地形的に類似するためとみられるが、一方で谷周辺に同様な草本植生が広がっていた可能性が考えられる。

iv）特筆すべき大型植物化石と形態記載

以下に特に必要と考えられる分類群について形態や特徴、用途などの記載を行う。なお、薬用植物としての薬効、利用植物等は[堀田 他編1989]を参考にした。

エノキ：内果皮は径３㎜程度の球形で淡褐色、壁は薄く柔らかく、基部に白色の目立つ突起がある。本遺跡では５㎜ほどの果実の状態でも産出しているが、割れて内果皮が露出していたため同定できた。果実は甘く、樹皮は薬用となり、繊維を取ることもある。

サンショウ、イヌザンショウ、カラスザンショウ：サンショウの内果皮は長さ４㎜程度の黒色で厚く大変堅く楕円形、表面には比較的そろった網目模様があり、一方に内果皮長の半分より短いやや開いたへそがある。香辛料、芳香性健胃剤、駆虫薬として利用可能である。イヌザンショウの内果皮は長さ3.5㎜程度の黒色で厚く大変堅くサンショウよりやや細長い楕円形、表面にはサンショウよりやや大きい網目模様があり、内果皮長より長いへそがある。イヌザンショウはせき止め民間薬として利用可能である。カラスザンショウはサンショウやイヌザンショウより不規則でごつごつした網目模様があり、イヌザンショウはへそと内果皮壁の角度がほぼ直角につくのに対してカラスザンショウはそ

れよりも鈍角である。

タラノキ：内果皮は扁平で半月形、淡黄褐色で長さは2.5㎜程度、向軸側はほぼ直線、背軸側には表面に浅い溝が２～３本走る。表面はざらつきやや薄く堅い。食用の他、民間薬として糖尿病に用いられる。

ソクズ：内果皮は３㎜程度の扁平な楕円形で下端一方に小さな穴状のへそがあり、ニワトコに似るが全面にあるしわ状の模様が著しく突出している。

オモダカ科：種子は褐色で薄い膜のチューブ状のものをU字に折り曲げた形状。

コナギ：種子は0.8～12㎜の円筒形で頂部は丸く、基部は破れたような形状、縦に10本程隆起があり、隆起の間に横に長い網目細胞が並んでいる。なお、今回の試料に含まれている種子のほとんどが0.8～1.0㎜で、1.2㎜より長い種子が認められなかったため、ミズアオイではなくコナギと同定した。ナギ(ミズアオイ)と同様に野菜として食用にされる他、高熱、喘息などに薬用として用いる。

サンショウソウ属：種子は淡褐色、ゆがんだ紡錘形で長さは0.8㎜程度、薄くやわらかい。表面には大きな瘤状隆起が点在する。打ち身、捻挫、歯痛に用いられる。

ミズ属：種子は淡褐色で倒卵形、扁平、長さ１㎜程度で薄く柔らかい。山菜としての利用は現在でも一般的である。

シロザ近似種：種子は円形扁平で一端に少しへこんだへそがあり、そこから種子の中央に向かって不明瞭なくぼみが伸びている。表面は光沢のない黒色。シロザはもとより、アカザ属はほとんど全種若菜を食用とする。また、全草が解熱、駆虫に利用される。

ヒユ属：種子は円形扁平で光沢がある黒色、一端に唇状に少し突出してへこんだへそがある。ヒユ属には数種類あり、いずれも若菜や種子を食用あるいは薬用としている。現在世界中に雑草として分布しており原産地は不明であるが、ヒユ属の中でもヒユはインド地方原産といわれる一年草で全草を解毒用の薬とし、とくに種子は眼病の治療に利用される。

スベリヒユ：丸みがかった三角形で一方にへこんだへそがあり、カルンクラ(白っぽい突出物質でアリなどがこれを食べるのを目的に種子を運搬する)が残っているものがある。表面には丸い突起が全面に分布する。南米の熱帯原産とされる。茎葉は野菜として、また全草が解毒、血便に利用される。

コハコベ近似種：一般的にいわゆるハコベと呼ばれている種類である。種子は径１㎜前後の扁平な円形で一方に少しへこんだへそがある。表面には同心円上に並んだ鈍頭の突起が密布し、類似するミドリハコベは突起の先端がやや尖っている。しかしながら著者はハコベ属の全種を観察検討していないため近似種とするにとどめた。これらのハコベの仲間は短歌にも詠まれているように野菜類が不足する時期に葉菜類として重宝されていた。

エノキグサ：長さ1.9㎜、灰黒色で倒卵形、頂部はやや尖り表面は平滑でやや光沢がある。壁はやや厚くやや堅い。全草を止血、利尿、打ち身に利用する。

トウバナ属：長さ0.8～１㎜程度で褐色、円形で下端は唇状にわずかに突出し、表面は平滑。漢方で止血剤や風邪腸炎などに用いられる。

オドリコソウ属：灰褐色で長さ2.3㎜、倒卵形で三角柱、果皮はやや厚く頂部は切り型で平坦、下

端は扁平になり、表面はざらつく。全草を筋骨の痛み、打ち身に、また民間薬として吐血、喀血にも用いる。

キランソウ属：長さ1.1㎜、褐色で曲がった長卵形、一方が刃物でえぐられたようになっている。表面はざらつきやや柔らかい。全草が咳止め、解熱、止血に利用される。

イヌコウジュ属：果実は1.4㎜、褐色で円形、下端が唇状に少し尖り、表面には大きく不規則な網目がある。全草を湿疹、下痢、駆虫薬として用いる。

ナス属：種子は0.7～2.0㎜、円形で扁平、薄く柔らかく、表面は複雑に絡み合った網目模様がある。数種類の可能性があるがここでは区別しなかった。栽培種のナスではない。ナス属は有毒成分のアルカロイドを含む種類が多いが、その成分を薬用として利用する。

ハダカホオズキ属：長さ2.0㎜、形状はナス属に似るが網目模様が著しく大きい。

不明Ａ：黒褐色で平滑で光沢が無く推定全長が４㎜ほどの球形ではないかと思われる。

不明Ｂ：長さ３㎜の黄褐色で深い穴のような網目があり、半分に割れている。

不明Ｃ：５～６㎜ほどの球形の果皮で中身が抜けている。サンショウ属の果実にも似るが内部が空洞になっているため同定できなかった。

不明Ｄ：壁厚が１㎜ほどで表面がざらつき堅く推定全長は１㎝以上と思われる。

不明Ｅ：長さ４㎜で三角形、クマシデ属の果実に似ているが表面に隆起が無くつるつるになっているため同定できなかった。

不明Ｆ：果実の頂部で５つに割れた星形の溝があるため、バラ科などの５弁花の果実ではないかと考えられる。

不明Ｇ：長さ１㎜ほどで、大変薄く椀状の膜が２つくっついているものが多かった。葯の可能性がある。

不明Ｈ：長さは３㎜、黒く堅いが薄い壁で楕円形ではないかと見られる。

不明Ｉ：長さ1.1㎜で楕円球を半割にした形状で炭化もしくは炭化したように堅く黒い。樹皮などに着く担子菌の可能性もある。

不明Ｊ：長さ１～1.2㎜の割リンゴ型、褐色で薄く堅い壁に針でついたような穴が密布する。ツツジ科の種子に似るが確認できなかった。

不明Ｋ：長さ１㎜、暗灰色偏三角柱で頂部は尖り、一方に少し傾いている。表面は光沢がないが平滑、ややエノキグサの種子に似るため、奇形の可能性も考えられる。

不明Ｌ：長さは３㎜、水滴型で扁平、褐色で柔らかく薄く、２枚が重なったようになっている。

（吉川純子）

４）寄生虫卵化石

ｉ）はじめに

ここでは周辺施設における日常生活の影響が前期難波宮の泉施設と石組み溝でどの程度見られるかを手がかりに、これらの遺構の性格を解明するため、寄生虫卵化石を調査した。

ii) 試料と方法

寄生虫卵化石の調査は花粉と同一試料で行った。試料は、放射性炭素年代から弥生時代と推定される第９層(「泥炭層」上・下層、各々PU・PLと仮称)、古墳時代後期～飛鳥時代の第7c層(貝集中層)、前期難波宮の泉施設および石組み溝内堆積物の第６層を対象とした。分析試料の堆積物の特徴については、花粉化石群の項を参照されたい。

寄生虫卵化石の抽出は、試料約0.5ccをとり、約２%KOH －傾斜法により粗粒砂を取り除く－48%HF(約30分)の順に処理した。残渣を適量に希釈しタッチミキサーで充分撹拌後マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。予察的に観察を行ったところ寄生虫卵化石は検出されなかった。無機物粒子が多い状況では観察が現実的でないことから、ここでは重液(比重2.15の臭化亜鉛)による有機質遺体の濃縮(処理時間は15分以内)を行った。塩化亜鉛などの重液や水酸化ナトリウム、酢酸などの一部の薬品処理により寄生虫卵の分解、または変形を生じることが指摘されている[金原正明1999]が、その根拠となる資料が示されていないことから具体的な変化については不明である。なお、花粉と同様な処理を行っても多量の肝吸虫卵や鞭虫卵が残っていた試料もあり、薬品に対する抵抗性は寄生虫卵の堆積後の続成作用も関係していると考えられる。

寄生虫卵化石の同定については、現生寄生虫卵の形態記載[吉田1996・藤田1997]に基づく。現生の寄生虫卵の同定は、大きさ、形、色調、卵殻および付属物(卵殻の厚さ・構造、模様、小蓋、蛋白膜、栓、小突起など)、卵の内容(卵細胞、卵黄細胞、ミランジウム、六鉤幼虫など)の５項目により行われるが、化石では一般的には色調、卵の内容の情報は得られない。こうしたことから、現生レベルでの同定は不可能である。さらに、堆積後の続成作用による変質等が不明なため同定を難しくする。最近、『考古学と動物学』[西本・松井編1999]という動物考古学の概説書が出版され、化石試料を扱う基礎となる分類・同定について哺乳類・貝・魚類などは示されているが、寄生虫卵は示されていないことは残念である。寄生虫卵化石については、処理方法、同定、解析などあらゆる面で充分な研究が行われていないのが現状と思われる。

iii) 結果(Tab.23、図版103)

寄生虫卵化石の同定・計数結果をTab.23に示す。寄生虫卵化石は、第９層の泥炭層からは産出しないが、古墳時代以降の堆積層からは鞭虫卵が普通に、回虫卵がまれに産出している。１cc当りの個数は、SG301のNo12で131個含まれるが、大半の試料では50個体以下と少ない。密度は堆積物の質により異なることから単純に比較できないが、細工谷遺跡[金原正子1999]の遺構および溝内堆積物と有

Tab.23　寄生虫卵化石

		泉施設SG301							石組み溝SD301					第7c層	泥炭層	
分類群		No12	No10	No09	No08	No07	No06	No05	No03	No04	No05	No06	No07	R995	PU	PL
回虫	*Ascaris lumbricoides*		1		1									1		
鞭虫	*Trichuris*	7	4	5	4	1	4		2		2	3	3	2		
毛細虫類	*Capillaria*											1				
肝吸虫	*Clonorchis sinensis*							1								
肺吸虫	*Paragoniumus*							1								
1cc当りの寄生虫卵数		131	28	54	78	4	21	10	16	0	11	26	21	30	0	0

意な差は認められないことから、トイレに関係する施設ではないとみられる。なお、鞭虫と回虫は手指や野菜に付着、あるいは塵と共に食品の上に散布した幼虫包蔵卵を経口摂取すると感染し、肝吸虫は第２中間宿主である淡水魚(モツゴ、モロコなど)の生食により、肺吸虫は第２中間宿主のサワガニなどの生食により感染する[藤田1997]。　(吉川 昌伸)

５)「泥炭層」の放射性炭素年代測定結果

古墳時代層より下位に分布する形成時期が不明な第９層の「泥炭層」上・下層について放射性炭素年代測定を行った。測定試料は、下層は黒褐色砂質泥炭、上層はクロマツの球果(１個体)を用いた。測定等を地球科学研究所に依頼し、AMS法(加速器質量分析法：前処理は酸－アルカリ－酸洗浄)により測定を行った。測定結果を下記の表に示す。

測定結果は、補正^{14}C年代で下層は2250±40yrsBP(暦年代：395−195B.C.)、上層は1830±40yrsBP(暦年代：A.D.85−260)の年代が得られた。「泥炭層」に関する層序資料がないため正確な判断は出来ないが、下層は砂質の堆積物であることからいくぶん古い測定値が得られている可能性がある。こうしたことから、「泥炭層」は概ね弥生時代の堆積層と推定される。　(吉川 昌伸)

Tab.24　ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定結果

No	試　料	^{14}C年代 *1 (yrs BP)	δ^{13}C *2 (permil)	補正^{14}C年代 *3 (yrs BP)	暦　年　代 *4 ( )内の%は確率	測定番号
NWT−PU 上	クロマツ (球果１個体)	1910±40	−29.7	1830±40	cal AD 215	Beta−132280
					cal AD 85−260 (2σ, 95%)	
					cal AD 130−240 (1σ, 68%)	
NWT−PL 下	砂質泥炭	2280±40	−27.0	2250±40	cal BC 370	Beta−132279
					cal BC 395−195 (2σ, 95%)	
					cal BC 385−350 (1σ, 68%)	
					cal BC 300−220 (1σ, 68%)	

＊１　^{14}C年代測定値：試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に西暦1950年から何年前(yrs BP)かを計算した年代。半減期としてはLibbyの5,568年を用いた。

＊２　補正^{14}C年代値：試料の炭素安定同位体比(^{13}C／^{12}C)を測定して、試料の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

＊３　δ^{13}C測定値：試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための^{13}C／^{12}C比である。この安定同位体比は、下式のように標準物質の同位体比からの千分偏差(permil)で表現する。

$$\delta^{13}C\ (‰) = \frac{(^{13}C/^{12}C)[\text{試料}] - (^{13}C/^{12}C)[\text{標準}]}{(^{13}C/^{12}C)[\text{標準}]} \times 1000$$

$(^{13}C/^{12}C[\text{標準}] = 0.0112372)$

＊４　暦年代：過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。それには年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定、サンゴのU−Th年代と^{14}C年代の比較により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。この補正は約19,000年までの換算が可能である。

6）総括：調査地周辺の環境変遷史と生業

i）はじめに

本調査地は上町台地北端に位置し、前期難波宮の泉施設SG301と北西方向に延びる石組み溝SD301からなる遺構の発見により注目された。この遺構は調査地北西部の開析谷内から発見され、遺構内堆積物の時期は遺物から7世紀中葉の前期難波宮期(645～686年)に限定された。遺構は谷奥の湧水地にあるため集水域は狭く、流水による異地性の化石の影響はまれであることから、植生や生業の復元のための精度の高い資料が期待された。こうしたことから、本遺跡では主として前期難波宮の植生と人間活動との係わり、および石組み遺構の性格を解明することに焦点を据え、花粉化石群・珪藻化石・大型植物化石群・寄生虫卵化石の調査を行い、各部位に基づいて議論した。以下では各自然科学分析の結果を総括し、遺跡を取り巻く環境変遷と生業について検討を行う。

ii）水利施設の性格

水利施設は約8ｍ×5ｍのSG301と、そこから北西方向に延びるSD301からなる。水利施設を埋積する堆積物は砂礫層、砂層、シルト層からなり、全般に水溜より溝内堆積物が細粒である。また、微化石分析を行った各遺構内堆積物の中部層の有機物含有量(灼熱減量で10%前後)は流水性堆積物では比較的高い方である。各遺構の中部層の堆積環境は、珪藻化石からは陸域指標種群が優占し、沼沢湿地付着生種群を伴うことから、湿地、あるいは湿地や沼沢地とその水際のような環境が推定された。陸域指標種群が優占し、沼沢湿地付着生種を伴う珪藻殻数が少ない群集は、素掘りの井戸内堆積物にも認められ、井戸内に充分な光が届く環境にないことが井戸内壁の湿った部分に付着し生育する陸生珪藻が卓越したと推定している[吉川 他1997]。SG301に常に水があったと仮定した場合、井戸の珪藻化石群と類似した組成を示すことから2つの可能性が考えられる。1つは遺構の大部分が蓋をされていた可能性、もう1つは小規模な湧水地では一般的な水域の珪藻は少なく水際等に生育する陸生珪藻が卓越する可能性である。一方で、花粉化石からはSG301には食物などを洗った生活排水が、SD301には染色として利用した廃液、あるいはベニバナ花の何らかの加工に伴う排水が流れ込んだ可能性が示されている。大型植物化石からはSG301内に水生植物のコナギやイグサ属、ヤナギタデ、サンショウソウ属などが生育した比較的きれいな水環境と、つぶれたヒユ属の産出からヒユ属を加工処理に使用した器を洗浄した可能性が示されている。こうした状況に基づくと、SG301内の木枠などの部分を除いては水生植物が生育し、食物や器類を洗った生活排水が流れ込んでいた可能性が高い。また、小規模な湧水地では一般的な水域の珪藻が少ないことが示唆される。なお、遺構が機能していた時期には底さらいなどを行っていたことは充分考えられ、植物化石群は遺構が放棄された後の埋積過程期の変化を示している可能性もあり、遺構の用途・状態は考古学的所見も含めて検討する必要があることはいうまでもない。

iii）遺跡周辺の植生変遷史と生業

弥生時代初頭頃

第9層の「泥炭層」下(PL)が相当し、放射性炭素年代測定結果から概ね弥生時代初頭頃と推定され

た。周辺の森林植生は、アカガシ亜属やシイノキ属を主とする照葉樹林が形成され、温帯性針葉樹のスギやイチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑ないし落葉広葉樹のモチノキ属も主要な森林構成要素であった。こうした森林は周辺地域でも認められることから、大阪平野周辺で広範囲に成立していた可能性が示された。一方で、「泥炭層」上(PU)の花粉化石群については選択的な堆積を示唆させることから古植生については解析できない。

古墳時代後期～飛鳥時代

花粉化石群は針葉樹花粉が大半を占めたが、層位的な変化と堆積物の特徴から花粉が流水等により選択的に堆積した可能性を示した。大型植物化石からは、多種の分類群が産出し、中生植物が比較的多いことから周辺に生育していた種子の供給と伴に雨水などによる流れ込みもあったとした。草本ではコハコベ近似種、ヘビイチゴ属近似種、スベリヒユ、シロザ近似種、ヒユ属、カタバミ属といった比較的日当たりのよい乾燥ぎみの場所に生育する種類を多く、木本では林縁部に生育するタラノキを多く産出し、落葉広葉樹のカジノキ、サンショウ、カラスザンショウ、イヌザンショウ、ムラサキシキブ属などからなる。栽培植物はモモ、イネ、ヒエ、アサ、キュウリ属メロン仲間を産出し、炭化した穀類、破片のアサ、ヒユ属のつぶされた種子など利用された痕跡のある植物が比較的多く含まれていた。

前期難波宮期

周辺の上町台地の森林植生は、常緑広葉のアカガシ亜属とシイノキ属、ヤマモモ属、針葉樹のモミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギ、落葉広葉樹のコナラ亜属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ、ムクノキ、クワ属、カジノキ、イヌザンショウ、エゴノキ、およびつる性植物のフジ属、ノブドウ、などの植物相から構成される照葉樹と温帯性針葉樹からなる疎林が形成されていたとみられる。また、難波宮周辺にはモミやツガ、およびマツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギなどの針葉樹が目立って分布していた可能性が高く、人為的に生態系を作り変えていた可能性が示された。泉施設内には、抽水植物のコナギ、イグサ属、ヤナギタデ、水際にはサンショウソウ属が生育していたと推定される。遺構周辺には、エノコログサ属、イネ科、ズゲ属、ツユクサ属、ギシギシ、シロザ近似種、スベリヒユ、コハコベ近似種、ナズナ属、カタバミ属、エノキグサ、スミレ属、トウバナ属、ナス属、オオバコ属およびヨモギ属を含むキク科植物などの中生植物が生えていたとみられる。また、大型植物化石群から、遺構内堆積物から産出した種類の多くが現在では単なる雑草としてみられているが、多くの種類が食用や薬用として利用可能であることが示された。一方で、前節で報告した加工材ではスギ、コウヤマキ、ヒノキ属が多いが、こうした使用樹種は大阪・奈良・京都などの近畿地方に見られ[山田1993]、この地域の一般的な特徴と考えられる。

江戸時代後半

この時期の資料は大型植物化石のみである。樹木ではサンショウ、センダン、ツタ、アカメガシワなどからなり、一部のサンショウは外果皮がついたまま残っていた。栽培植物としては、モモ、イネ、コムギ、オオムギ、ヒエ近似種、ヒユ属、アズキ、キュウリ属メロン仲間、カボチャを産出した。他に、炭化したシロザ近似種、ヤマゴボウ、スベリヒユ、カタバミ属、キランソウ属、オドリコソウ属、

ナス属などの多種の中生植物が産出している。SK800は生活ゴミの集積とみられ、豊富な種類が産出し、特にカボチャの種子が多量に出土している。このように栽培植物や有用植物と伴に多種の中生植物が産出しているが、SK800を除いては雑草である中生植物が目立ち、穀類の多くは炭化した試料からなる。（吉川昌伸）

第６節　前期難波宮水利施設における古地磁気年代測定

神戸大学内海域機能教育研究センター　兵頭政幸
神戸大学大学院自然科学研究科　金子雅一

１）試料と方法

泉施設SG301に堆積した粘土層を中心に、成層した堆積構造が見られる不撹乱部分２個所（Ａ・Ｂ）から、定方位試料を採取した。SG301の第6b層より上の粘土層（第6a層：Ａ地点）から、36個の試料を採取した。木材を組合せた枠近くの谷埋積層、またはSG301を成形するための盛土の可能性もある部分（第8a層：Ｂ地点）から15個の定方位試料を採取した。採取法は、ガイドを固定し走行と傾斜を測ったのち、ガイドに沿ってプラスティックキューブを直接打ち込む方法を取った。

古地磁気測定は、神戸大学の超伝導磁力計と交流消磁装置を使って行った。すべての試料につき、最高80ｍＴまでの段階消磁を行い磁化の安定性を調べた。主成分分析法を使って安定な磁化成分を出し、考古地磁気・堆積磁気学研究による地磁気永年変化曲線と対比して年代を推定した。

２）結果（Fig.174、Tab.25）

すべての試料において二次的な粘性残留磁化は10ｍＴ以下の消磁により除去された。しかし、それ以上の消磁レベルで原点に向って直線的に減衰する安定な磁化は少なかった。シルトや砂がわずかでも混入した場合は極めて不安定で、また表層部分に近い試料ほど不安定であった。これらは発掘作業などの過程で堆積構造の乱れが生じた可能性を示唆している。

ここでは主成分分析を行い、６点以上のデータ点で計算できる安定な磁化成分のみを特徴的残留磁化成分として採用した。地点ごとの平均古地磁気方位をTab.25に示す。

Tab.25　難波宮跡SG301堆積物の平均古地磁気方位

地点	偏角(°)	伏角(°)	試料数	k	α_{95}(°)
A	−13.1	46.3	6	110.0	6.4
B	4.5	47.8	8	334.9	3.0

k：精密度パラメータ、α_{95}：95％信頼円の半径

次に、得られた古地磁気方位がどの時代の地磁気を記録しているのかを推定する。Ａ地点の偏角−13.1°は強い年代制約をもつ。Fig.174に示すように過去2,500年間で偏角が西に10°以上も振る期間は５世紀から11世紀までに限定される。図中に引いた−13.1°の実線が考古地磁気データと交わる年代は、A.D.550−600年、A.D.750−1100年である。一方、伏角46.3°は、A.D.450−500年、A.D.800年付近、A.D.950年付近で考古地磁気データと交差する。以上のことを考慮して、Fig.174に白丸で

示したようにA地点の堆積物はA.D.800年ころの古地磁気を記録していると考えた。同様にB地点の古地磁気方位は、A.D.450年ころのものと推定された(Fig.174)。

A地点の古地磁気推定年代(A.D.800年ころ)は、堆積物から後期難波宮の瓦が出土するなど考古学的証拠とも矛盾しない。一方、B地点の推定年代(A.D.450年ころ)は、前期難波宮と推定されている泉施設の築造年代より200年も古い。このことは、A.D.450年ころの堆積層に手を加えてSG301がつくられたと考えれば説明できる。

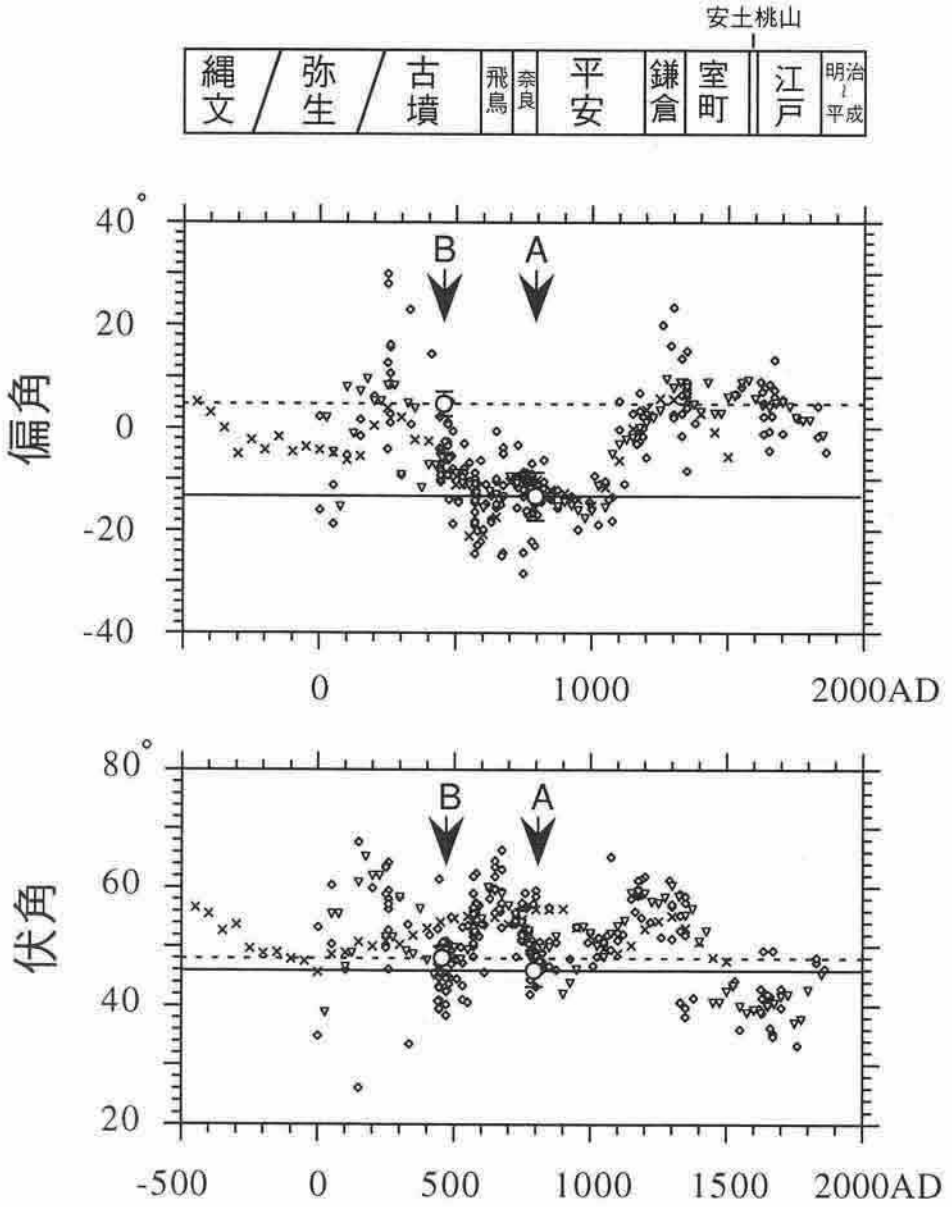


Fig.174　地磁気永年変化による年代変化

※地磁気永年変化データは兵頭作成の図[兵頭1999]を一部変更して使用している。実線はA地点の、破線はB地点の偏角と伏角を示す。矢印はそれぞれの地点の推定古地磁気方位。

第Ⅴ章　遺構と遺物の検討

第１節　前期難波宮の水利施設と内裏西方倉庫群

今回の調査でもっとも注目される成果は、調査地北西部４Ｅ区の谷に築かれた前期難波宮の水利施設の発見である。本節ではこの水利施設の造営過程やその性格、周辺の調査成果との関係について述べたい。特に南西に展開する内裏西方倉庫群との関係を検討することは、前期難波宮の構造や営まれた宮廷生活のようすを知る上でも重要である。

１）水利施設の造営過程(Fig.175)

それではまず、水利施設を構成する石組み溝SD301と泉施設SG301の造営過程を復元してみよう。その工程は谷内部の層序を理解することで明らかになる(第Ⅲ章第１節参照)。関係する地層は第７層と第８層である。

①まず、水利施設造営直前の状況は、北西に開く谷の底付近に第８層が堆積している、というものであった。本層には土器の他に食物残滓として捨てられた貝や骨、種なども含まれている。また、谷の中央には水が流れる河道が刻まれていたと思われる。この斜面の中程には集落から投棄された土器

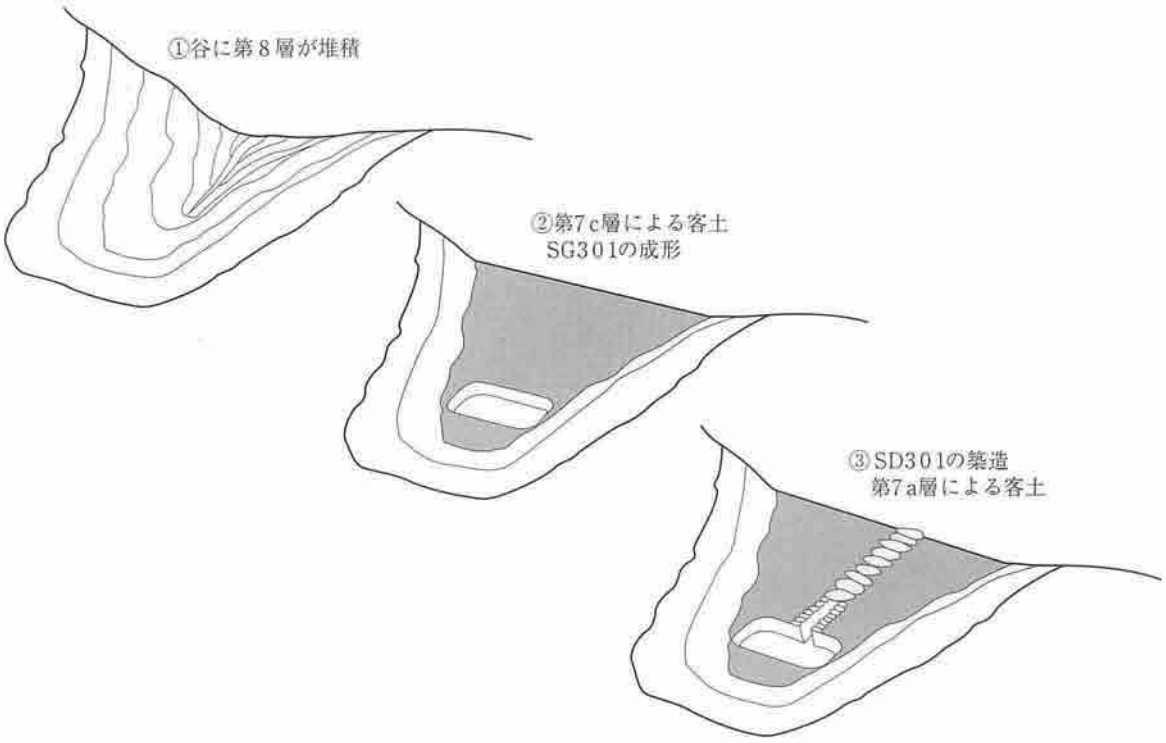


Fig.175　水利施設の造営過程

の集積も見られる。

②次いで第7c層による第１次の客土が行われる。泉施設SG301の部分はそれまでの埋土を残さず掘下げ、地山である第11層を露出させる。客土に用いられた土はその際の排土とともに、石組み溝SD301の築造予定部分の堆積土や外から運ばれてきた台地の土である。これらの土で谷のほぼ半ばまでを埋立て、SG301の肩部もこのときに成形している。谷の堆積層を掘返して盛上げていることは、偽礫の層相や、双方から出土した動物遺体に同一個体のものがあることからも明らかである(第Ⅳ章参照)。


Fig.176　SG301に溜った湧き水

地山を掘込んだSG301でこのときすでに水がかなりの勢いで湧き出していたことは、発掘調査中の経験から想像できる(Fig.176)。その湧水によってSG301の中には第7b層が堆積していった。この間に掘形の掘削などSD301の築造の準備は整えられ、石を積んでいく作業が始められた。SD301の開渠部の石は第7b層の上に乗っている。

③最後にSD301の石が積み上がったのち、裏込めの部分を埋立て、暗渠の蓋石が隠れる程度まで第7a層による客土を行う。石の隙間には水漏れを防ぐ目的であったと思われるきめの細かい粘土が詰められている。並行してSG301内に木枠を設置すれば水利施設の完成である。この層からは前章で報告したように多量の土器が出土した。谷の堆積土を含むと考えられる第7c層に比べて前代の遺物の混入が少なく、また土馬を含んでいることからこの周辺で水に係わる祭祀を行った後で、そのときに用いた土器類をこの層の客土時に投棄した可能性もある。

今回発見された水利施設の造営過程は以上のとおりである。その年代は谷の堆積層(第8a層)のもっとも新しい土器や客土(第7c・７a層)に含まれる多量の土器が難波Ⅲ中段階(次節参照)に属し、７世紀中葉とすることができる。これらの土器は、台地上に展開する前期難波宮の殿舎の柱穴から出土するものや、その造営に伴う整地層に含まれるものと同じ様相をもつ。六甲山系や生駒山系から巨大な石材を集め、大規模な土木事業を必要とするこの施設が前期難波宮に属するものであることは確実であり、宮殿の造営当初から重要な役割を担って設けられたものと考えられる。では次項でこの点について前期難波宮との関係を検討してみよう。特に注目したいのはこの水利施設が置かれていた内裏西方官衙との係わりである。

２）内裏西方倉庫群との関係

前期難波宮の内裏西方官衙はその名のとおり、内裏地域の西方約100ｍに位置する、塀で区画された敷地内に倉庫を整然と配置した施設である。倉庫の配置を見ると、北には複数の倉庫に一連の大屋

根をかけた「並び倉」がある。現在に残る東大寺正倉院宝庫や法隆寺綱封蔵に見られる双倉の原形とも考えられるもので、他の倉庫より格式の高い倉庫として位置づけられる。西には４×３間ですべて同じ規模の倉庫を南北に６棟以上並べている（北から３棟目は攪乱により消失）。また、中央の管理棟と考えられる建物を挟んで東の対称の位置にも倉庫は１棟見つかっているが、今回の調査によってそれより北には倉庫が存在しないことを確認した。呂大防による唐長安城図によれば、太極宮の北西部に「太倉」が位置し、前期難波宮と内裏西方官衙との関係と同様である。さらにその中の構造を見ると（Fig.177）、北に長い倉庫を置き、中央の建物を中心にして左右対称に他の倉庫を配している。倉庫群と比較してみると、左右対称を別にすれば、北に置かれる倉庫が桁行の長いものである点や中央に管理棟らしき普通の建物がある点はきわめて興味深い類似点である[中尾1995]。おそらく、長安城の構造を知る者が宮殿における前期難波宮の殿舎配置の決定に係わっていたのであろう。内裏西方官衙はこのようにして前期難波宮の北西部に置かれることとなった。この官衙は『日本書紀』にある「難波大蔵」に当るという考えが出されている[積山1992]。

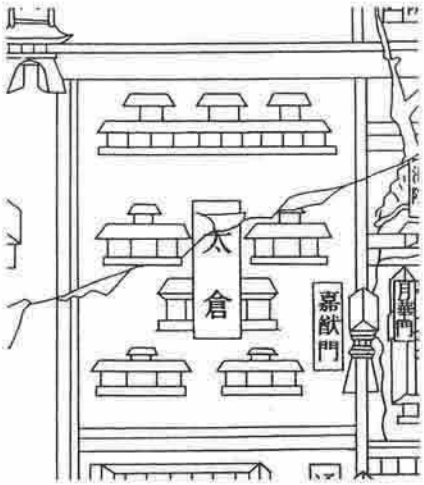


Fig.177　太倉の倉庫群[平岡1956]

さて、実際に内裏・朝堂院とともにこれらの官衙をどう配置するかを決定する際には、台地上のさまざまな地形が影響したことが予想される。また、逆にこれらの地形が宮域を規制する要素となったとも考えられる。内裏西方官衙の場合はその西を区画するSA301が谷の肩にかからないぎりぎりのところを通されており、水利施設の築かれた谷と内裏西方官衙の位置関係もこのときに決定されたと考えられる。水利施設への行き来のためにはコーナー付近で簡単な門が必要とされるが、「並び倉」の第１倉が存在すると、この部分は南の倉庫との間にあまりスペースが確保できない。東での倉庫の配置から「並び倉」を中心とした左右対称にこだわる必要がなくなったことも勘案すると、第１倉はもともと存在せず、３棟の倉庫によって構成されていたと考えておきたい。

そのさらに西にあるSA303と地形との関係についてみてみよう。SA303はそれより西の調査で前期難波宮の明確な遺構が検出されないため、宮域の西限を画すると考えられている一本柱塀である。南方400mの地点には南から北へ入り込む開析谷があり、後期難波宮の段階で埋立てられたと考えられている[大阪市文化財協会1984]。前期の段階ではまだ谷が残されていたことになるが、SA303はこの谷よりも内側に位置している。このことも上記のSA303が西面大垣であるという考えを補強している。本調査地の部分ではSA303は谷によって途切れてしまっているが、当初の計画から水利施設を盛り込んだ上で地割りが行われたのであろう。宮域外に当る部分では、谷の肩部は垂直に近い角度でカットされており、宮域の内と外を分けていたと考えられる。

北方150mで行われた財団法人大阪府文化財調査研究センター（以下、府センター）の調査地では残念ながらSA301・303の延長部分は地山が大きく削平されていて確認できなかったが、本調査地とは別の東西方向の谷が検出された。幅は30m以上で、深さは８mあり[江浦2000]、谷内の南側からは

土器や木簡が出土しており、これらは南から投棄されたと推定されている。この谷は古代においては客土をされた痕跡がまったく見られないことから、整地の必要な範囲の外であった可能性が高い。前期難波宮(後期も含めて)の宮域はこの谷を越えて北へ延びることはないものと思われる。中尾芳治氏の復元案によれば[中尾1993]、八角殿を囲む南回廊の中央の柱筋を中心にして、それから「朱雀門」までの距離を北へ折返したラインがこの谷のすぐ南にくる(Fig.178)。今回の調査でSA301が北へ延びたことを考え合せると倉庫群の区画の北に、南北100mほどの何らかの官衙域を設け、すぐ北を宮域の北限にしていたと考えられる。府センター調査の遺物群は前期難波宮の北西隅から投棄されたものである可能性が高い。

3）水利施設の機能

先述のように泉施設SG301では絶えず水が湧き続けており、人々は木枠から水を汲取って利用していたと考えられる。その機能は平地における水溜めというよりは、建物があるレベルとSG301とに数mの高低差があるという点で、井戸と同じ機能であったといえよう。これまで前期難波宮期の井戸は宮域では見つかっておらず、この遺構は宮域において数少ない水の供給源として重要な役割を担って

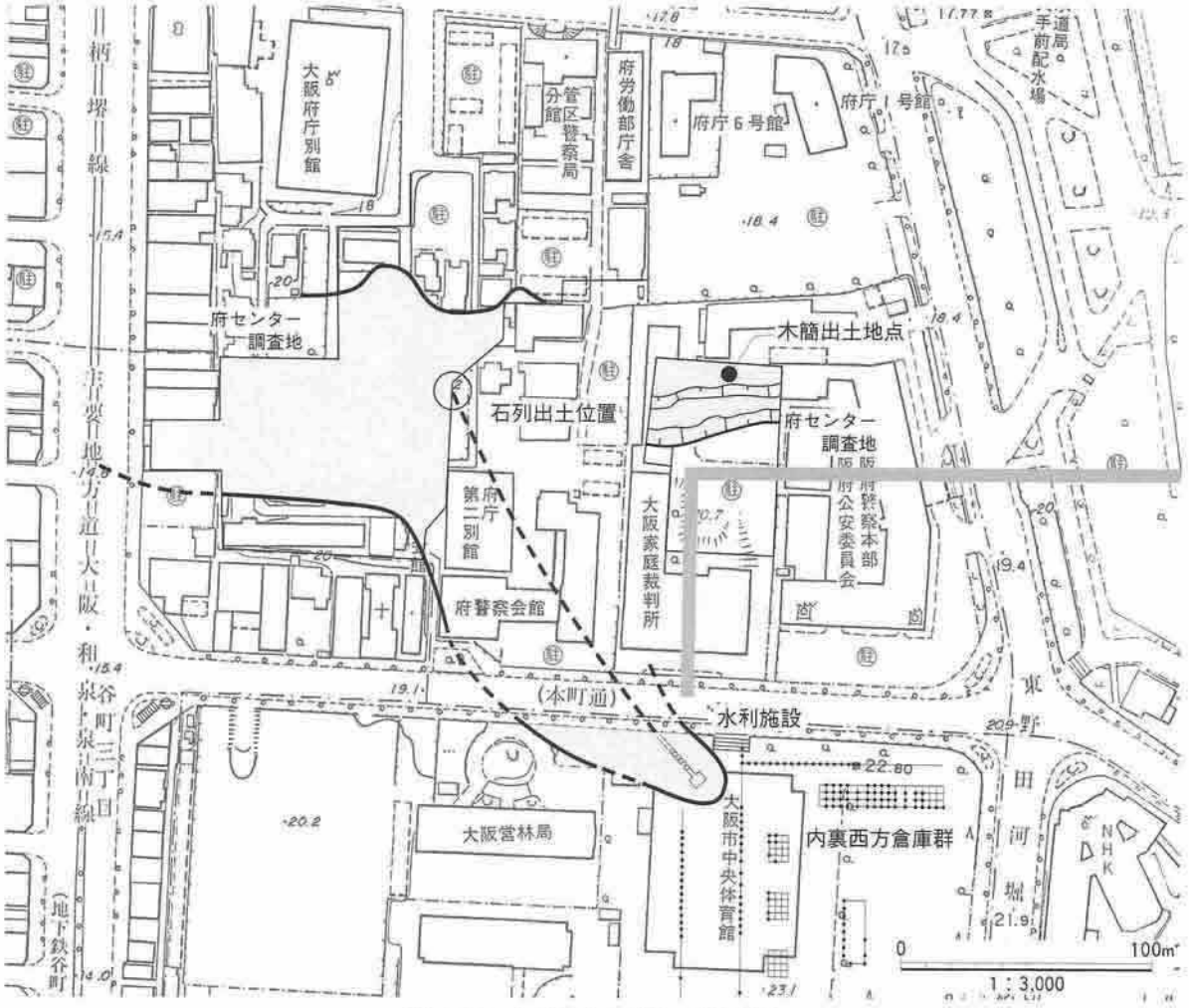


Fig.178　水利施設と周辺の調査成果

いたとみられる。

飛鳥地域ではこれまでにも石組みを用いた池や水路が多く見つかっており、最近も伝承飛鳥板蓋宮跡の北西では大規模な園地遺跡が調査された[卜部1999]。これらとSG301とを比較すると、前者が外国からの使節などを迎えたときの饗宴の場であったのに対して、SG301とその周辺の性格はやや異なっていたように思われる。中に設けられた木枠についても、転用材が用いられた装飾的な要素の見られないものであり、より実用的なものであったことがうかがえる。また同時に祭祀具が多く出土したことから祭祀的な色彩の強い施設であったことも確かである。

SG301を実用的な側面から見た場合、倉庫群との組合せに関して興味深い記事がある。『律令』の『倉庫令』には「(倉庫の)側に池渠を開け」という条文がある。この条文は『大宝令』に存在したかどうかは不明で、『養老令』の段階までしかさかのぼりえないが、これまでに検討してきたように、この水利施設が宮域の設定段階から計画に入っており、倉庫群とともに宮域北西部に置かれたものとすれば、条文にいう倉庫と池・溝という組合せは単なる偶然とはいいきれないであろう。『倉庫令』は散逸が著しく、唐の『倉庫令』についても大半が失われているため、比較検討が困難な状況ではあるが、『大宝令』成立以前にこのような関係が存在するとすれば、すでに唐にあった規定を前期難波宮の計画に反映させた可能性もあろう(註1)。

また一方、祭祀的な側面に目を向けると、この状況は園地遺跡とされる飛鳥の諸遺跡よりも、むしろやや時代がさかのぼるが、三重県城之越遺跡に見られるような水源を対象とする祭祀が行われたとされる「井泉」に近いものと考えられる[穂積1992]。前期難波宮の宮域で数少ない(現在では唯一)清らかな水の供給源であったこのSG301が、古墳時代以来人々が抱いてきたイメージから「聖なる泉」として考えられた可能性は高い。また南東の倉庫群には広い空閑地が存在し、種々の儀礼行為が行われたことが想定できる。SG301がこのような儀礼空間と近接したところに位置していることも注目すべき点であろう。

以上のように、SG301は水の供給源であるという実用的な側面をもつとともに、それゆえの神聖視を受けた施設であったと考えた。SA303が谷によって分断されていることは先述したが、このような聖なる水辺が、日常生活の場である宮域内と外の世界である宮域外との境界に位置することも重要である。谷の埋土上にSA301を通してこの区画を閉ざしてしまうことをせず、あえてあいまいな形を採ったことについてもむしろ積極的な意味を見出したいと思う。

それでは、そこから水が流れ出した石組み溝SD301の機能はどのようなものであったのか。府センターの別の調査地点では本調査地の谷の下流域が調査されており(Fig.178、[大阪府文化財調査研究センター1996])、約200m離れた地点で長辺約1mほどの花崗岩を溝状に並べた石列遺構が検出されている。調査時点では周辺でも花崗岩が多く出土したが、性格はよくわからなかったという(註2)。この地点は今回のSD301のほぼ延長上にあり、石の状況もよく似ていることから一連の遺構であった可能性が高い。これらがひとつながりであったとすると、200m以上もの水路が築かれていたことになる。SG301は清らかな湧き水を得るためのものであり、SD301は石の目地を粘土で塞いで水漏れや外からの水の浸入を防いでいる。SG301で湧き出した水は木枠を利用してその場で汲まれる以外に、

SD301に流れ出していく。その先にどのような施設があって、どのような目的で水が供給されたのかは不明であり、今後の発掘調査に期待するしかないが、排水用の下水道ではなく、上水道が難波につくられていたことがわかる。SG301の実用面を考えれば、難波における都市計画の一端をうかがうことができたのかもしれない。大和の飛鳥地域でも同様の施設が見つかっている。たとえば、川原寺下層で検出された石組みの暗渠はこのSD301と似た構造で、途中にはマンホールが設けられていたと報告されている[奈良国立文化財研究所1960]。

このように壮大な規模で築造されたと考えられる水利施設であるが、その機能が停止した直後と推定される第6b層から出土した遺物はやはり７世紀中葉のもので、先に述べた造営時のものと大きな差がない。この施設が機能していた期間はさほど長くはなかったと推定される。

以上のように、水利施設と周辺施設との係わりやその機能について検討した。内裏西方官衙の構造とそこで行われた儀礼、西面大垣の設定、宮廷生活における水源の確保、聖なる泉、都市計画と、多くの問題が今回の成果によってあらためて浮かび上ってきた。これらについてさらに検討を進めるための手がかりは周辺の未調査部分に残されており、今後の調査の進展が期待される。

註）

（１）『倉庫令』の条文でその後に続く部分では、倉庫から50丈（約150m）の範囲内に館舎を建てることを禁じている。５世紀の倉庫群の周囲には他の施設がまったく見つかっておらず、上の規定はさらに時代をさかのぼってこの時代にも存在していたかのようである。ただし、「池渠」については、谷の下層で当該期の遺構の有無は確認できなかった。

（２）調査担当者である鋤柄俊夫氏（現同志社大学）のご教示による。

第２節　古代難波地域の土器様相とその史的背景

古代における難波地域の歴史的変遷を発掘成果からたどれば、まず、５世紀代に造営された壮大な倉庫群に始まり、ついで６世紀～７世紀前半の集落が営まれたのち、わが国初の本格的宮殿である前期難波宮が造営される。８世紀の後期難波宮が長岡京遷都によって停止したのちもその交通の要所としての性格は変わらず、時を経て太閤秀吉の大坂築城へとつながっていく。５世紀の大型倉庫群以後、この地はつねに当時の政権の動向と無縁ではなかったといえる。本節ではこれらの変遷を遺構に伴う遺物の側からみていこうとするものであるが、その中でも全時代にわたって出土する土器の変遷を通じて、古代の難波地域が歴史的にどのような立場にあったのかを検討したい。時代を追って検討を進めるため、まずその年代観のよりどころとなる土器の編年について述べていこう。

１）これまでの編年研究

難波地域における古代の土器編年は、つねに７世紀を中心とし、前期難波宮の年代と関連して述べられてきたといえる。難波宮の土器に関する最初の報告は、岡田茂弘氏による「難波宮址第10・11次発掘調査出土遺物」[岡田1961]で、整地層中の土器（須恵器）を森浩一氏の第３期終末～第４期前半、あるいは横山浩一氏らの桃谷式とし、川原寺下層の川原宮整地層出土土器と同型式であることから655年以前の年代が当てられ、このような大土木工事は長柄豊碕宮造営に伴う整地工事以外には考えられないとした。

つづいて中尾芳治氏は整地層およびその下位の竪穴から出土した土器を報告し[中尾1965]、杯Ｈを口縁部径や底部の調整手法からＡ～Ｃに分類し（上位層で出土した８世紀の杯Ｂは杯Ｄ）、杯Ａは整地層より下位の竪穴から出土し、杯Ｂ・Ｃを含まない。杯Ｂ・Ｃは共伴するが、同一時期におけるバラエティとしてとらえるよりも、一系列の変遷とみて前者が古いとする。杯Ｂ・Ｃの年代の根拠は、その整地層が難波長柄豊碕宮の造営に伴うという解釈を前提として、７世紀中ごろとしている。難波宮に直接係わる土器のみを単に他遺跡と比較するだけでなく、もう少し前後の時期を含めて難波地域での土器組列をつくろうとした初めての試みとして評価できる。

藤田幸夫による難波宮下層遺跡の一括資料の報告[藤田1981]はその延長上にある。そのうち、SK9343は須恵器が飛鳥寺下層より後出するもので６世紀末～７世紀前半代、SK10043出土土器は前期難波宮の整地層下で見つかったもので、手斧による削り屑などが共伴したことから、宮殿の造営に係わるものと仮定すれば、７世紀の第２四半期ごろと考えられ、須恵器が川原寺造営以前のものよりやや古い様相をもつことと矛盾しないとした。

以上の編年に共通することは、前期難波宮の造営を孝徳朝とし、それに伴う土器を７世紀中ごろのものとすることを前提としていることである。これらの成果をうけて、前期難波宮＝難波長柄豊碕宮を土器の暦年代推定の根拠にしている研究は、白石太一郎氏[白石1982]、菱田哲郎氏[菱田1986]の論考などがある。

このような中で、内田好昭氏は宮殿の比定が前提となって年代論が展開されていることに対して批判を加えた[内田1988]。中尾編年は「孝徳朝難波宮」が「天武朝難波宮」に切られる形で存在するという理解をもとにしており、その2者が同一のものとして「前期難波宮」と考えられている現在では、その整地層を孝徳朝期であるとはじめから考えることはできない。SK10043の埋土と上位の整地層との間に薄い地層が介在する点が問題である。朝堂院東回廊の柱穴で見つかった杯G蓋は、遺構に伴い完形の良好な資料であるが、これに言及する議論が少ないのはこれの型式・年代を明らかにするまで須恵器研究が至っていないからである。よって、前期および下層遺跡の土器は年代の定点にならず、天武朝まで下る可能性を否定する決定的なデータはない、というものであった。

これに対して、前期難波宮＝難波長柄豊碕宮という考えをひとまず保留しておいて、まず土器様相の変化を把握したのち、暦年代の明らかな他遺跡(主として飛鳥)の資料と比較して年代を推定しようと試みたものが以下の京嶋覚[京嶋1989B]および南秀雄[南1992]による編年研究である。

京嶋は6世紀末から7世紀後半に至る土器群をⅠ～Ⅳ期に編年した。前期難波宮造営の上限はⅢ期古相以後で、Ⅲ期新相の土器は整地層や前期難波宮期と思われる建物の柱穴を切る土壙から出土しているため、難波宮との関連を指摘しうる。また、造営をⅣ期以降にするのは困難である。実年代については、水落遺跡や石神遺跡の資料がⅢ期新相に近いことから、Ⅲ期新相は660年に及び、Ⅲ期古相も7世紀中葉を大きく遡らせることは難しいとした。京嶋編年では前期難波宮造営以後の土器についてもⅢ期新相・Ⅳ期という時期を設定し、見通しを述べている点がこれまでの編年とは異なっている。また、その後も難波の都市性を土器から検討するという形で研究を進展させている[京嶋1999]。

また、南は前期難波宮内裏西方官衙地域における難波宮下層遺跡の土器群を須恵器を中心に1～5期に編年を行った。4期の年代は山田寺下層[奈良国立文化財研究所1990]との類似から641年を遡る可能性が高いとする。5期は水落遺跡[奈良国立文化財研究所1995A]よりやや古い傾向をもつことから660年に近いか若干古い年代を当てている。5期を最後に方位の振る遺構が見られなくなる。これは前期難波宮が造営されたためで、その年代は640～660年と推定でき、天武朝まで下げるのは無理が大きいとした。

筆者もこれらの研究史を踏まえつつ、新たに出土した資料を含めて再検討を行ったことがある[佐藤1997]。前期難波宮が造営された段階の土器様相は上述した両者の編年では共通しており、ほぼ間違いない。また、前期難波宮の遺構から出土した資料としては、朝堂院回廊柱穴から出土した須恵器杯G蓋が長い間唯一ともいえる例であったが、近年では内裏西方倉庫群[大阪市文化財協会1992]や内裏南門[大阪市文化財協会1995]の出土土器が報告されており、本書でもSA303の土器を掲載した。その内容は上の成果と矛盾しないものである。ただし、京嶋のいうⅢ期新相については数量のまとまった資料がなく、Ⅲ期が細分できるかどうかについては検討の必要があった。本書で報告した第7層の土器群はそれに応えうる質・量を備えている。また、8世紀についてはこれまで断片的な資料が報告されているのみで[古代の土器研究会1994・大阪市文化財協会1999B・C]、編年的な検討は行われておらず、7世紀の段階からの連続的な変遷の理解が求められていた。

2）土器編年と年代

i）編年(Fig.179、Tab.26)

京嶋編年以後、Ⅳ期あるいはそれ以降に相当する良好な資料が見つかっており、それらを含めて難波地域の土器編年を再検討する。京嶋・南編年では5世紀の倉庫群に併行する時期の資料が検討されていないが、先にも述べたように、古代難波地域の発展の出発点という位置づけから、この時期の資料を新たに加えて時期設定を行う必要がある。すでに京嶋編年では「難波Ⅰ期」～「難波Ⅳ期」、南編年では「Ⅰ期」～「Ⅴ期」という区分名が用いられ、またここに似たような時期設定を行うのは煩雑さを助長するおそれもあるが、今回の編年は、古代から近世までを通して難波・大坂地域における土器の様相の変化をとらえていく作業の一部と考えており、大きな様式設定を「難波Ⅰ…」とし、必要に応じて古・新段階、あるいは古・中・新段階に細分する(Tab.26)。

難波Ⅰ

古墳時代以降における上町台地上で、人々が本格的に活動を始める段階である。主な資料としては本調査地で検出された16棟以上に及ぶ大規模な倉庫群に関連して出土した土器や、難波宮東方官衙地域の土壙SK201・202[大阪市文化財協会1981B]、後期難波宮大極殿院地域の窯[大阪市文化財協会1995]からの出土土器などがある。これらの遺構から出土した土器はまだ少量で、特に土師器の資料はわずかであるが、難波宮南東部の谷堆積層の資料[京嶋1989A]なども含めて検討すれば、後の時期に現れる「難波型」とされるものはまだ見られないようである。まだ様相を細かく検討できる状況ではないが、須恵器の型式はTK73型式からTK47型式までが含まれ、以下に挙げる土器群に比べて明らかにさかのぼるものであり、ひとつの様式として設定した。細分については資料の増加を待って検討したい。

Tab.26　時期区分と標識資料

様式	標識資料	京嶋編年	南編年	都城編年	暦年代
難波Ⅰ	NW80−9次SK201·202 倉庫群関連			飛鳥Ⅰ 飛鳥Ⅱ 飛鳥Ⅲ 飛鳥Ⅳ 飛鳥Ⅴ～平城宮Ⅱ 平城宮Ⅲ 平城宮Ⅳ～Ⅴ 平城宮Ⅵ/平安京Ⅰ中	5世紀
難波Ⅱ古	SB214埋土下部·上部		1期古相·新相		6世紀
新	NW93次SK9343 NW14次東地区竪穴	Ⅰ期	2期 3期		6世紀後葉～7世紀初
難波Ⅲ古	NW66次方形土壙	Ⅱ期	4期		7世紀前葉
中	NW100次SK10043 SK223·水利施設第7層	Ⅲ期	5期		7世紀中葉
新	DB91−1次SD801	Ⅳ期			7世紀中葉～後葉
難波Ⅳ古	MR94−7次SD701				7世紀後葉～末
新	OS92−74次Ⅲ8層				7世紀末～8世紀初
難波Ⅴ古	OS90−50次溝 OS91−32次土壙1·2				8世紀前葉～中葉
中	OS87−29次井戸 府センター調査溝1				8世紀後葉
新	OS90−50次東井戸 OJ92−22次SK04				8世紀末～9世紀初

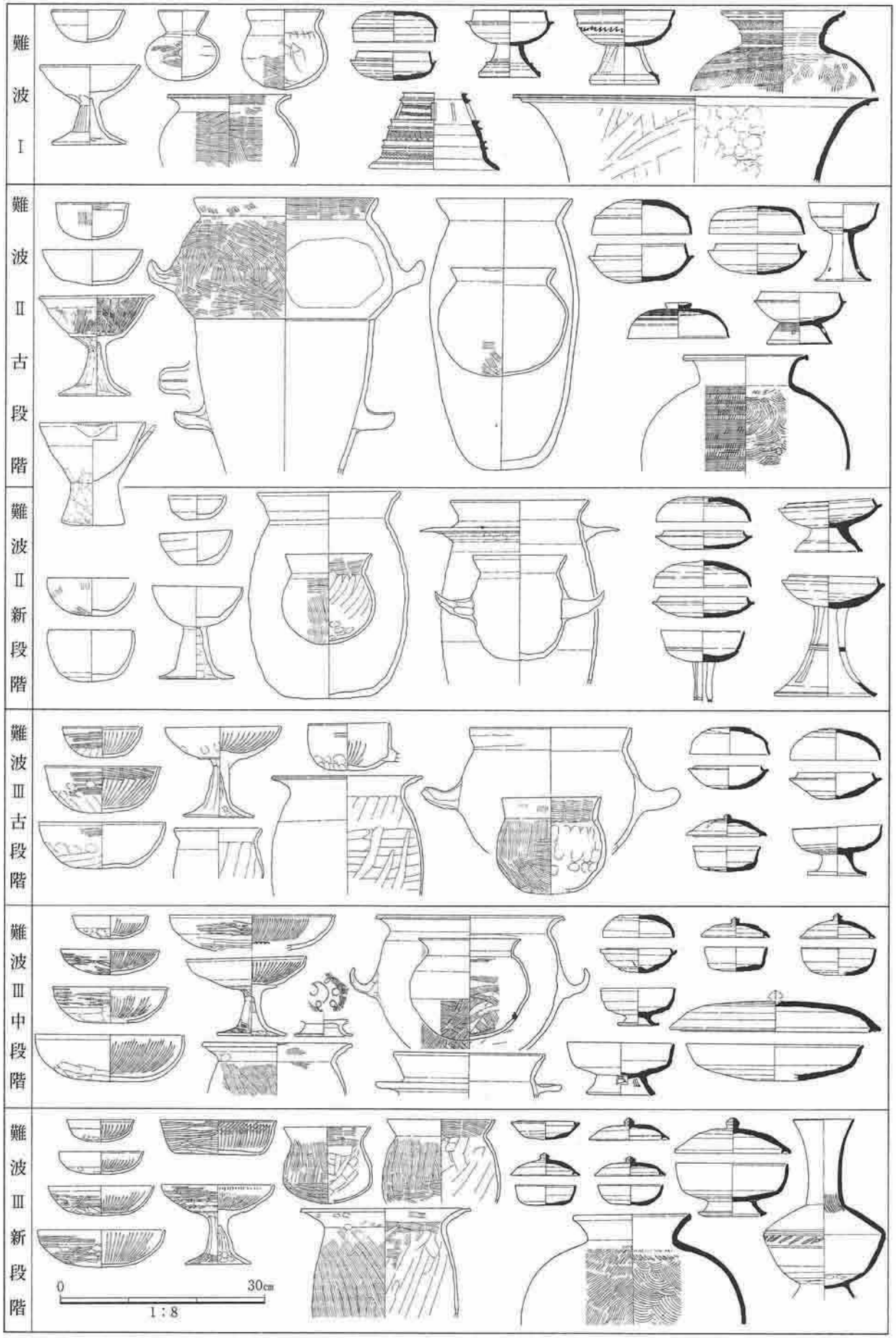
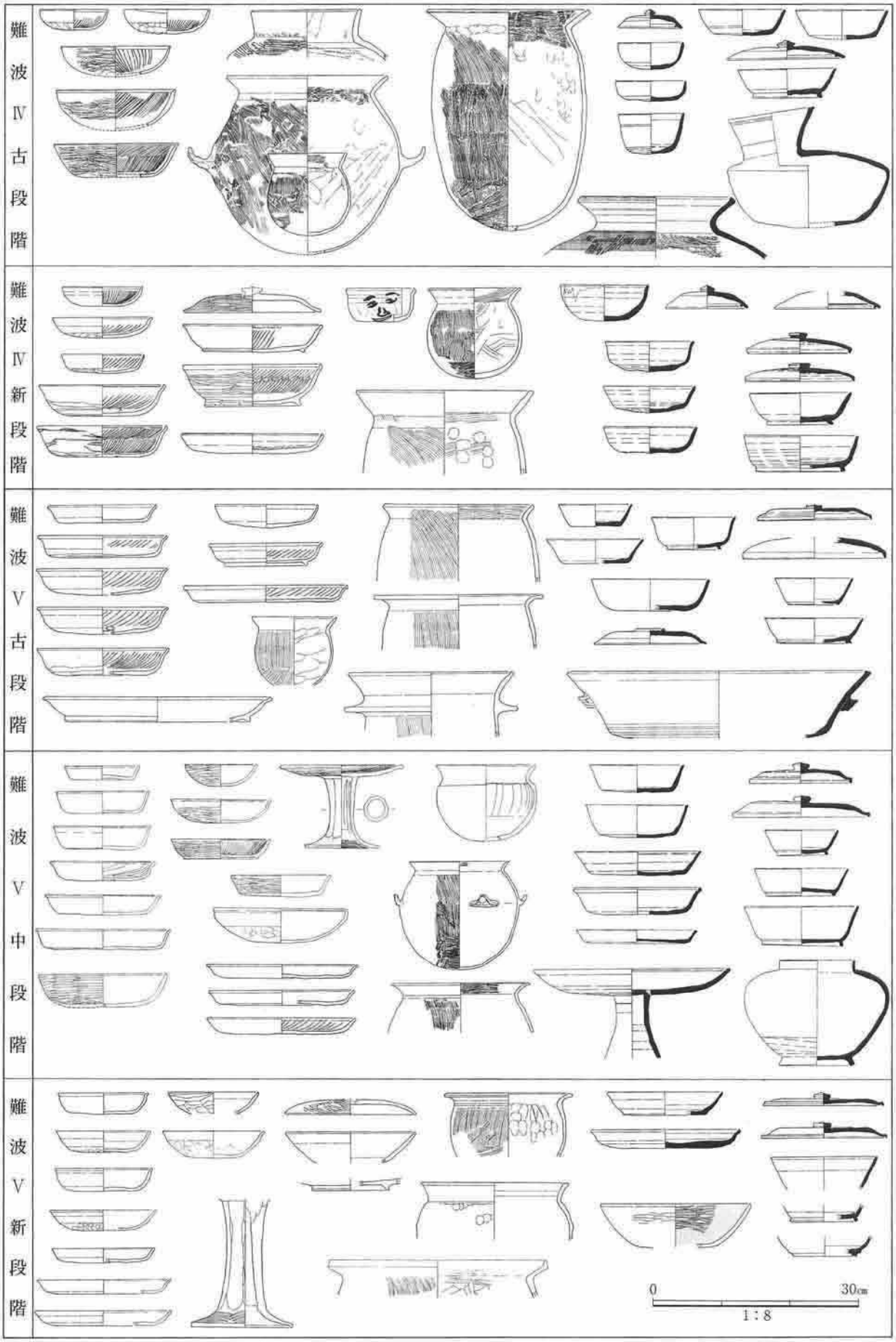


Fig.179　古代難波



地域の土器編年

難波Ⅱ

土師器では杯から甕・竈までをナデ・ユビオサエによって調整する「難波型」と称される土器群が現れ、主体を占めるようになる。須恵器では杯H・同蓋の受部径・口縁部径が最大に達し、底部・天井部はヘラケズリ調整である。古・新の2段階に細分する。

古段階は本調査地SB214の廃絶後に投棄された土器群を標識資料とする。南編年では埋土下部を1期古相、埋土上部を同新相として細分しているが、今回はとりあえず一括して提示しておく。

土師器はハケメのものがナデ・ユビオサエのものとともに存在するが、次第に後者が多数を占めるようになる。難波地域に特徴的な台付鉢も現れる。羽釜は在地の胎土でつくられている。須恵器はMT15～TK10型式である。

やや新しいものを含むが、今回報告した第8b層出土土器の多くはこの段階に属する。

新段階はNW14次東地区竪穴・NW93次SK9343出土土器を標識資料とする[難波宮址顕彰会1965・大阪市文化財協会1981A]。どちらの遺構も難波宮整地層の下位にある遺物包含層下の地山面で検出されている。京嶋編年ではⅠ期、南編年では2・3期となっている。前段階との間には若干の空白があるとされている。土師器では、食器類にはヘラミガキ・暗文を施す精製品はまだ見られない。ただし、粗製の杯の中でも同じ形態で法量の異なるものが見られ、精製の土師器の場合と同様の法量分化が起っている可能性がある。7世紀前半代で全国的に見られる現象である。煮炊具が食器類に比べて多く、ナデ・ユビオサエによって調整される難波地域に特徴的な「難波型」で占められ、ハケによるものは見られない。受部径は東地区竪穴のものはほぼ14cm代で、SK9343のものは東地区竪穴に比べて径のばらつきがあり、平均をとればもう少し大きくなる。ただし、最小は12cm代で、やはり14cm代のものが多い。底部・天井部はヘラケズリ調整である。TK43～TK209型式に当る。

難波Ⅲ

土師器では暗文の施された精製の食器類やハケ調整の器壁の薄い甕が現れて主流となる。食器類のほとんどは杯Cである。須恵器の杯Hは法量が縮小する。新しい器形として杯Gが現れ、次第に杯Hを凌駕する。遅れて杯Bが加わるが、まだ初現的な形態である。古・中・新の3段階に細分する。

古段階はNW66次方形土壙出土土器を標識資料とする。その他、NW100次SK10048および本調査地SK219出土土器などもこの段階に属する。京嶋編年ではⅡ期、南編年では4期に当る。土師器食器類はヘラミガキ・暗文の施された精製品が現れ、主体を占める。杯Cの径高指数は30代の後半にほぼおさまる。煮炊具もハケ調整のものが現れる。須恵器杯Hは受部径11～12cm代のものが中心で、底部・天井部はヘラ切り後不調整のものがほとんどになる。また、わずかながら杯Gが現れる。

中段階はNW100次SK10043[大阪市文化財協会1981A]・本調査地SK223[大阪市文化財協会1992]出土土器や、本書で報告した水利施設に関連する第7層に含まれていた土器を標識資料とする。SK10043は整地層下の遺物包含層の上から掘り込まれた土壙で、報告段階では前期難波宮造営時に廃棄物を処理したものと考えられていたが、その後、下層遺構の建物に付属するという見解も出されている[京嶋1989B]。SK223は前期難波宮内裏西方官衙地区において地山上で検出された。下層遺跡の建物に近接していることや、土錘が多く出土することから都城的なものというよりも一般的な集落の

性格を想定でき、前期難波宮造営の直前に埋められた土壙と考える。NW84−6次SK01は前期難波宮の東方で当該期と思われる建物の柱穴を切っている土壙で、少数ながらこの段階の土器が出土した。京嶋編年ではⅢ期、南編年では５期に当る。

土師器食器類はヘラミガキ・暗文のものがほとんどで、杯Ｃの径高指数は30代の前半である。煮炊具の調整にはハケが多用される。須恵器の食器類では、杯Ｈと杯Ｇの比率は前者が少し多い。杯Ｇ蓋には口縁部径がひとまわり大きなものがあり、法量分化が認められる。須恵器杯Ｂ・同蓋は可能性のある蓋１点(本書の394)を除いて、これまでまったく見つかっていない。

京嶋編年では古相と新相とに細分されているが、法量や形態に一線を画するほどの差異は認められない。古相とした資料では見られない土師器皿についても、資料の多寡もあり、決定的な指標ではなかろう。今回、質・量ともに良好な第７層出土資料が得られたことで、とりあえずこの様相をもって同段階のものと考えたい。

新段階は住友銅吹所下層SD801出土土器を標識資料とする[大阪市文化財協会1998]。京嶋編年のⅣ期に当る。SD801は難波宮西方の沖積地にあり、船形・人形・斎串を伴うため、祭祀を行った際に投棄されたものと思われる。土師器食器類では、杯Ｃは器高が低くなり、杯Ａが見られる。須恵器の食器類は杯Ｇが大半を占め、杯Ｈはわずかである。いずれも前段階に比べると法量が縮小している。ひとまわり大きな杯Ｇ蓋がここでも存在する。杯Ｂはこの資料には含まれていない。

最近の府センター調査において、「戊申」紀年銘を含めて33点の木簡(可能性のあるもの)とともに良好な資料が出土した。本調査地から北へ150ｍの地点にある別の谷で、その埋土である16層からである。府センターのご好意で実見できた資料の概要について述べる。

まず、土師器では、杯Ｃは微妙に器高は減じているかもしれないが、前段階と比べて大きくは変化していないようである。杯Ｂ・同蓋がある。高杯の杯部は斜め上方に直線的に開いて、短く立上り、後出的な特徴をもつ。別のタイプでは杯部の器壁の厚いものが見られた。甕はハケメのものがほとんどで、他には南河内地域の製品が少数含まれる。須恵器では、杯Ｈ・Ｇとも口縁部径が小さい。破片を概観したかぎりでは杯Ｇが多い。杯Ｂ・同蓋が一定量存在する。杯Ｂの高台は壺や高杯の脚と同じつくりで、初現的な形態である。それに対して高杯はほとんど見られない。壺蓋に杯Ａを伏せて底部外面につまみを付けたものがあることから、杯Ａが存在していたことがわかる。

これらの土器は総じて小さな破片が多いが、型式の幅はあまりないと思われ、年代の遡るものがほとんど混入していない。住友銅吹所下層SD801出土土器群にもっとも近く、かつ、質量ともにより充実した資料といえる。

これまで、７世紀中葉より新しく７世紀末～８世紀初めまでの間に位置付けられる資料としては、このSD801例と森の宮遺跡SD701出土土器群があり、以前検討した段階では前者は後者より先行する可能性が高いと思われたが、資料不足もあってとりあえずはこの２資料をひとくくりに考えておいた。今回の資料によって各資料間の先後関係は明確になり、型式設定が可能となったといえる。大和の飛鳥地域では、水落遺跡漏刻跡出土土器群[奈良国立文化財研究所1995A]に似た様相である。これまで不確実であった杯Ｂ(須恵器・土師器とも)の出現が確認できたことは、須恵器高杯・瓶といった

古墳時代以来の伝統的器形の消滅や、後続段階で盛行する杯A(須恵器・土師器とも)の希薄さなどとともに同型式の器形構成を考える上で重要な手がかりとなろう。

難波Ⅳ

土師器では定型化した杯Aが現れ、杯Cの径高指数が減小する。須恵器では杯Hがほとんど見られなくなり、杯A・Bが主体となる。この時期の土器は上町台地上の難波宮の中心部分ではほとんど見つかっていない。古・新の2段階に細分する。

古段階は森の宮遺跡SD701出土土器を標識資料とする。SD701は難波宮東方の沖積地で見つかった溝で、やはりここでも船形・斎串など祭祀に係わる遺物が伴出している。土師器食器類では、杯Cは傾向指数が30を下回るものが多い。杯Aは難波Ⅲ新段階のSD801のものに比べて定型化しているように見える。須恵器食器類では、杯Gの他に定型化した杯A・杯Bが確認できる。またやや深い椀も存在する。報告では杯Hはないとされているが、杯Gに杯H蓋と考えてもいいものが含まれているため、存在した可能性がある。

前代の銅吹所下層SD801や府センター調査の16層と比べると、土師器杯Aや須恵器杯A・Bの定型化は完了しているようで、やや距離感がある。今後、間を埋めるような良好な資料が得られれば難波Ⅳを3段階に細分することができるかもしれない。

新段階はOS92−74次Ⅲ8層出土土器を標識資料とする[大阪市文化財協会1993]。難波宮の東方を北流していた旧猫間川に関連する自然流路の埋土である。流路であることから資料の一括性の問題は残るが、完形に近いものも多く、比較的まとまりがある。全容は未報告であるが、土師器では杯A・杯B・杯C・同蓋・皿・小壺(人面墨画あり)・甕・竈など、須恵器では杯A・杯B・同蓋・杯G・杯H・壺・甕などが出土している。土師器では杯A、須恵器では杯A・杯Bが主体である。土師器杯Aは次の時期に見られるような外へ折れ曲がるような口縁部はなく、自然な曲線を描く。杯Bには連弧状暗文が認められるものがある。須恵器杯B蓋はかえりのないものがほとんどである。またここでも船形・土馬・人面墨画土器などの祭祀遺物が出土している。

難波Ⅴ

土師器食器類において在地的な特徴が顕在化する段階である。暗文は初めは密に施されるが、次第に省略される。須恵器は杯A・Bが主体で、底の形状が丸みをもつものから平らなものに変わる。暗文の施され方や形態の変化から古・中・新の3段階に細分する。

古段階はOS90−50次東西溝出土土器やOS91−32次土壙1・2出土土器を標識資料とする。これらの全容はいずれも未報告であるが、すでに紹介した資料では、遺構からの一括出土ではないものの、OS90−51次第6層出土土器がある[古代の土器研究会1994]。

土師器は食器類に暗文が密に施される。杯Aの口縁部は外側に折れ曲がるように外反する。高台付の皿など大型の器形が現れる。須恵器は杯B蓋の口縁部があまり屈曲しないものが多い。金属器模倣の稜椀も見られる。

中段階はOS87−29次SE301出土土器を標識資料とする。

土師器では食器類の暗文が省略され、疎らなものがわずかにある程度で、施されないものが増える。

杯には前段階で見られた口縁部の外折が著しくなり、体部が直線的に伸びるものが多い。形態からは従前の杯Ａとはかなり離れたものとなる。皿の口縁部径は20cmを越えるものがほとんどである。杯Ｂ・高杯には暗文をていねいに施すものがあるが、これは器形による仕上げ方の違いで、古いものの混入品ではない。須恵器は、前段階からの傾向ではあるが、食器類の大半について底部と体部との境の屈曲が明瞭になる。杯Ｂ蓋の口縁部は屈曲する。口縁端部に面のある皿が現れる。

新段階はOS90−50次井戸出土土器を標識資料とする。

土師器杯・皿は前段階に比べて口縁部径がやや縮小し、法量のバラエティが減少する。皿の体部も屈曲がなくなり、直線的になる。OJ92−22次SK04からは河内地域の椀が出土している。長原遺跡周辺における編年では平安時代Ⅰ期[佐藤1992]に当る資料である。須恵器は杯Ｂの高台が底部の端に付くものが増える。黒色土器Ａ類もこの段階から現れる。高台の付かない深めの杯である。

ii）暦年代（Tab.27）

難波地域では直接暦年代の一点が与えられる資料は少なく、本書で報告した年輪年代測定によるもの（634年）と、先述した府センターの調査で出土した「戊申年」銘（648年）の木簡しかない。示された年代自体は動かしがたいものではあるが、少数の年代資料から年代観を構築するのは危険が伴うため、これらの成果に飛鳥地域をはじめとする他地域の資料を併せて検討する。

難波Ⅰについてはそれに先行する初期須恵器の出現年代を５世紀初頭～前葉とするか、５世紀中葉とするかに左右される。最近の年輪年代測定の成果によれば、TK73型式の年代の一点として412年という年代が与えられている[光谷・次山1999]。初期須恵器の年代論については今後もさらにこのような年代を決定する資料が望まれるが、とりあえずそれから年代をみていくと、難波Ⅰには５世紀前葉～末の年代が与えられよう。

難波Ⅱ古段階はそれに続いて６世紀前葉～中葉である。継体陵である可能性の高い高槻市今城塚古墳に埴輪を供給していた新池窯のＣ群関連遺構からMT15型式の須恵器が出土している[森田1996]。暦年代を推定する上で重要な資料である。

難波Ⅱ新段階は、土師器からは飛鳥地域や河内地域などとの併行関係を考えるのは難しい。須恵器は飛鳥寺下層[奈良国立文化財研究所1958]より後出すると考えられ、TK43型式～TK209型式に当る。７世紀初頭に没した押坂彦人大兄皇子の墓の可能性が高いとされる牧野古墳からはTK209型式に当る須恵器が出土している[奈良県立橿原考古学研究所1987]。また、狭山池北堤に築かれた１号窯出土須恵器[狭山池調査事務所1998]はこの段階から次の難波Ⅲ古段階までの資料が含まれている。北堤では伐採年代616年のコウヤマキを用いた東樋遺構が検出されており、狭山池の築造はこれ以降であることがわかっている。このことから難波Ⅱ新段階の年代の一点を616年に求めることができる。これらのことから６世紀後葉～７世紀初頭の年代が与えられる。

難波Ⅲ古段階では精製の土師器が現れ、また須恵器からも他遺跡との比較ができる。飛鳥Ⅰとされている中でも山田寺下層出土土器[奈良国立文化財研究所1990]と近い様相をもつことから、７世紀前半の中でも第２四半期に中心があると思われる。

この段階に対応する資料として楠葉平野山窯の須恵器がある。８号窯の前庭部の杯Ｈが口縁部径11

cm前後とやや大きく、他の窯では口縁部径10～10.5cm前後で、やや小さいという差はあるものの、どちらも底部のヘラケズリが省略されたものが大半であること、杯G・同蓋が少ないながら一定量含まれていることから、型式差があまりなく、操業期間は短かったと判断できよう。このことから、四天王寺の創建瓦の生産を7世紀第2四半期を中心とする可能性がきわめて高く、第1四半期にはほとんど遡らないと考えられる[佐藤1999]。この年代観は村田治郎氏が史料から導き出した結果とほぼ一致しており、推古朝末年ごろを上限とすることで、年代の定点をもった資料と考えることができた。

難波Ⅲ中段階は山田寺下層出土土器より新しく、甘橿丘東麓SX037出土土器[奈良国立文化財研究所1995C]や坂田寺SG100出土土器[奈良国立文化財研究所1973]などに近く、この2者の中間的な様相をもつと考えられる。従来から述べられているように、水落遺跡が斉明6年(660)につくられた漏刻の跡であるとすると、その土器は漏刻の廃絶の時期、すなわち大津宮へ遷都した天智6年(667)か大津宮に漏刻を置いた天智10年(671)に年代の一点をもつことになろう。後述する新段階が水落遺跡出土土器と同じ様相であることから、本段階はこれらよりは確実に古く、7世紀中葉という年代が与えられる。前章第3節ではSG301の木枠2の板材について、634年という伐採年代が年輪年代測定によって得られている。板材の転用の可能性や、やや古い年代であることは問題になるが、測定された年代そのものは明らかな数値である。台地上では木製品が残りにくく、柱もほとんどが抜取られているた

Tab.27　土器編年と年代の定点

難波編年	難波および他地域の対応する資料	年代の手がかり	文献
Ⅰ	陶邑TK73型式～TK47型式	年輪年代(412年)	[光谷・次山1999]
Ⅱ古	陶邑MT15型式～TK10型式	今城塚古墳(継体陵と推定)	[森田1996]
Ⅱ新	飛鳥寺下層	588年に造営開始	[奈文研1958]
	牧野古墳	押坂彦人大兄皇子墓と推定、7世紀初頭に没	[橿考研1987]
Ⅱ新～Ⅲ古	狭山池1号窯	北堤の木樋616年に伐採	[狭山池1998]
Ⅲ古	山田寺下層SD619・整地層	641年から整地	[奈文研1990]
Ⅲ古～中	甘橿丘東麓SX037	645年の焼土	[奈文研1995C]
Ⅲ中	SG301	木枠2の部材は634年に伐採	本書
	三条九ノ坪遺跡SD01	木簡の干支は白雉3年(652)か	[兵庫県教委1997]
	川原宮下層	655年には存在	[奈文研1960]
Ⅲ中～新	阿武山古墳墳丘裾	藤原鎌足の墓と推定、669年没	[高槻市教委1983]
Ⅲ新	府センター調査	戊申年(648)の紀年木簡	[江浦2000]
	水落遺跡漏刻遺構	漏刻跡、660～667か671年	[奈文研1995A]
	西橘遺跡谷地形	木簡の内容から661または672年	[相原1999]
Ⅳ古	藤原宮下層SD1901A	694年以前	[奈文研1978]
Ⅳ新	藤原宮諸遺構	694～710年	[奈文研1980]など
	長屋王邸関連遺構	養老年間頃(720年前後)の木簡	[奈文研1995B]
Ⅴ古	平城宮SK820・滋賀県宮町遺跡	天平年間後半(740年前後)の木簡	[奈文研1976]など
Ⅴ中	平城宮SK219・2113	天平宝字年間(720年前後)の木簡・長岡遷都前	[奈文研1962] [奈文研1976]
Ⅴ新	長岡京諸遺構・平安京SX4・9	長岡京784～794年	[京都市1983]など

め、難波宮跡では年輪年代測定は絶望的と思われていたが、今回良好な成果を得ることができた。今後も資料の増加が期待される。また、Tab.27には挙げていないが、SG301の第7b層から「山部王」と書かれた木簡が出土している。この山部王が壬申の乱で殺害された人物であるなら、その人物に宛てたと考えられる木簡を含む第7b層が672年以前に埋没したということを示す傍証にはなるであろう。

兵庫県三条九ノ坪遺跡SD01からは白雉3年(652)と考えられる干支を記した木簡に共伴して本段階の土器が出土している[兵庫県教育委員会1997]。

難波Ⅲ新段階は土師器杯Cの傾向指数や須恵器杯類の特徴などを飛鳥の水落遺跡・西橘遺跡谷出土資料[相原1999]などの資料と比較すると、飛鳥Ⅲに当ると考えられる。7世紀中葉～後葉(大半が第3四半期)としておきたい。この結果、「戊申年」木簡とは若干の年代差が生じることとなったが、その要因については木簡1点から考えるべきものではなく、共伴した木簡群の性格・廃棄に至る経過などが明らかになって初めて検討できる問題と考える。

難波Ⅳ古段階は土師器杯Cや須恵器杯Gに古い要素が残っているが、土師器杯Aや須恵器杯A・Bが定型化しており、藤原宮下層のSD1901A出土資料[奈良国立文化財研究所1978]に近く、飛鳥Ⅳにほぼ対応する。暦年代は7世紀後葉～末としておく。

難波Ⅳ新段階は土師器杯Aに2段の放射状暗文をもつものが多いが、連弧状暗文をもつものや放射状暗文が1段のものが含まれることから、やや幅をとってみても藤原京の諸遺構で出土する土器や、平城京長屋王邸[奈良国立文化財研究所1995B]のものに共通する。飛鳥Ⅴ(平城宮土器Ⅰ)～平城宮土器Ⅱに相当し、8世紀初頭を中心とした年代が考えられる。

難波Ⅴ古段階は土師器杯Aの暗文や須恵器杯Bの形態などから、平城宮SK820[奈良国立文化財研究所1976]や滋賀県宮町遺跡[古代の土器研究会1994]の資料に類似する。平城宮土器Ⅲに相当する。したがって暦年代は8世紀前葉～中葉とすることができる。

難波Ⅴ中段階は土師器杯の在地化が進むことから、平城宮土器との対応がやや困難になるが、少数存在する外面ヘラミガキの土師器杯A・椀や須恵器杯A・Bの形態が平城宮SK219[奈良国立文化財研究所1962]やSK2113[奈良国立文化財研究所1976]の土器に共通し、平城宮土器Ⅳ～Ⅴに相当し、8世紀後葉の暦年代が与えられる。

難波Ⅴ新段階はさらに在地化が進んで宮都の土器から離れるが、黒色土器杯や河内産の土器の存在や、平安京の初期の土器群からこの段階のものと思われる杯が出土していることから[京都市埋蔵文化財研究所1989など]、平城宮土器Ⅵに相当し、暦年代は8世紀末～9世紀初頭である。

以上の編年は先述のようにまだ若干の空白期間を残した状況で行ったもので、今後資料の増加によって、暦年代に多少の変更の必要が生じてくることは考慮に入れておかなければならないが、大きくは修正の必要のないものであろう。

3）土器からみた難波地域の動向

以上、これまでの研究成果に導かれつつ、難波地域における5～8世紀の土器編年について概観してきた。

それではこれらの変遷を難波宮域における遺跡の動向とともに見てみよう。

まず難波Ⅰはナデ・ユビオサエによる「難波型」がまだ見られない段階で、韓式系土器も多く出土する。遺構では大倉庫群が造営され、機能していた時期を含む。韓式系土器の存在はこの地域に海外を含めて多くの人々が活動したことを示している。同時代の集落の状況はよくわからないが、後期大極殿院地域で検出された窯からは生産活動の一端をうかがうことができる。

難波Ⅱは倉庫群廃絶後の集落から出土する土器である。土師器はおもにナデ・ユビオサエによる難波型が主体で、特に新段階では同時期の河内中心部や飛鳥地域とはまったく異質な土器様相をもっていた。『日本書紀』によれば、6世紀の段階で難波には大郡・小郡・難波館などの施設があり、外交・西国経営の要地となっていたというが、この段階の資料からは韓式系土器はあまり見られない。「難波型」土師器の出現については土器の需要の増加に対応するもので、土師器生産が恒常的に行われるようになったと評価する考えもあるが、この地域が当時の政権の中枢である大和や河内とはまったく異なった土器圏を形成しており、一定の距離をおいたものであったことを示している。ただし、集落は次第に発展・拡大していったと考えられ、次の難波Ⅲ古段階の集落との断絶はないと思われる。

難波Ⅲ古段階には飛鳥地域や河内の中心部と同様の暗文を施した精製の土師器食器類やハケ調整の甕類が現れて主体となる。この段階には大型の建物が増えて集落の規模も拡大していくようで、土器の様相の変化はこの動きに対応したものといえよう。同じ台地上の南方では四天王寺が建立されるが、この時期も所用瓦を焼成した瓦陶兼業の楠葉平野山窯の須恵器を検討した結果、ほぼ対応すると考えている[佐藤1999](註1)。難波Ⅲ古段階の時期に台地上では当時の政権と結び付いた大きな動きがあったことがわかる。

難波Ⅲ中段階には前段階の土器様相がいっそう明らかになる。飛鳥地域や河内の中心部との様相の差異は見られず、中央の政権との関係がきわめて密であったことを示している。年代は前後の土器様相が新しい資料の増加によって明らかになってきており、7世紀中葉から動くことはない。前期難波宮の造営はまさにこの段階に行われたものであり、『日本書紀』の記載に基づいてこの時期の難波に起こった最も重大な出来事と結び付ければ、前期難波宮＝難波長柄豊碕宮説がもっとも有力であることを今回あらためて確認することができた。

難波Ⅲ新段階の資料はこれまで宮域からは見られなかったが、府センター調査によって良好な資料が得られ、また他にもNW99−15次やOS99−16次調査でこの段階の土器が出土し、宮域周辺からの資料が一気に増えたことにより土器様相の理解が進んだ。中大兄皇子らが飛鳥に還り、孝徳天皇が崩御したのちも、難波宮は歴史上に現れている。『日本書紀』によれば、斉明元年(655)には難波宮で蝦夷や百済の使を迎えて饗宴を行った、とあり、斉明6年(660)には朝鮮出兵のため、天皇が難波宮に入ったと記されている。都が移ったのちも難波宮が機能していたことが土器の状況からもうかがえる。

難波Ⅳの資料は中心部から離れたところでの出土例が多く、水辺の祭祀に伴って出土していることは興味深い。古段階に当る資料は今回の水利施設でも見られたがきわめてわずかであり、これまでの出土状況からは中心部では今後も増加するとは思えない。天武天皇は天武12年(683)に難波宮を含めた複都制の詔を発するが、天皇自身が難波に行幸したという記事は残っておらず、どのように宮殿が

使用されたかを示す資料はない。聖武天皇による難波宮造営まで、歴代の天皇は即位すると難波の地を訪れているが、日常の政務に係わることというよりも、伝統的な儀礼を行う場として難波に行幸していることがほとんどである。それには当然ながら祭祀的な行為も含まれていたと考えられ、この時期の土器のあり方を示している。ただし、新段階については宮域の周辺での出土例が少し増えるようで[大阪市文化財協会1999Bなど]、「難波京」に当る地域における開発が進んでいることがわかる。

難波Ⅴは前代の終りに見られた動きを受けて、再び土器が台地上で見られるようになる段階である。神亀3年(726)、藤原宇合を知造難波宮事として難波宮の造営が始まり、その後、聖武天皇の「彷徨五年」の間に難波宮は一時的ではあるが皇都と定められた。このような歴史的な動きを背景にして、土器が人々の活動の場で使用される機会が増したと考えられ、難波Ⅴ古段階以後における土器の増加は上の事情をよく反映している。また、特に土師器に顕著に見られた在地性は、土器需要の増加にあたって、大和からの工人の移動がなかったことを示している。伊藤純氏は難波京を統括する摂津職に補任された官人の半数は広義の難波地域(摂・河・泉)に本拠地をもつ氏族であることから、難波京が平城京と異なり在地性の強い機能を有していた、と指摘している[伊藤1982]。また、この時期の資料は難波宮北西方の大川沿いで比較的多く出土し、平安時代に入ると台地部ではほとんど見られなくなる。人々の動きは平安時代以後水上交通の要所としての難波津(渡辺津)の周辺に集中していくが、このような動きがすでに現れているのかもしれない。

4）まとめにかえて

以上、難波地域における5～8世紀の土器の変遷と歴史的な動向をみてきた。土器様相の変化の背景には何らかの社会的な変動があることは明らかで、当時の政権の動きのみならず、東アジアの情勢の変化に常に敏感に反応する難波の人々の姿が浮かび上がってくる。

このような状況は古代にのみ見られるものではなく、本書で報告してきたように、天下の台所大坂、はては近現代の大阪まで引き継がれている。今回行ったような検討を、難波・大坂における土器・陶磁器の編年研究という形でつないでいくことにより、一定の視座から見た大阪の歴史を描くことができると考えるが、いずれ機会をあらためて検討したい。

註)

(1)この考えに対して京都市埋蔵文化財研究所 網伸也氏は、楠葉平野山窯においては瓦生産が須恵器生産に先行しているため、須恵器の年代観はそのまま四天王寺の創建年代に結び付けられない、としている[網2000]。瓦陶兼業窯における瓦と須恵器の生産の実態についてはそれぞれの窯で慎重に検討されるべきであるが、本窯の場合、報文によると[八幡市教育委員会1992]、たとえば8号窯は須恵器窯から瓦焼成用につくり替えがあるとされている。また、この時期の瓦陶兼業窯が在地的な須恵器工人と結び付くことによって成立したという考え方[菱田1986]に従うかぎり、瓦と須恵器の焼成に大きな時間差は考慮する必要がないと思われる。

第3節　調査のまとめ

難波宮跡・大坂城跡一体化構想に伴って1987年から始められた大阪市中央体育館敷地内での発掘調査は、本書で報告した発掘調査をもって終了した。都市部にあってかなりまとまった面積が調査でき、かつ各時代にわたる多くの成果が得られたという点から、この一連の調査は大阪がどのように発展してきたかを知る上できわめて重要な意味をもっている。第Ⅱ章では1989年度までの成果について概略を述べた。また、本章第1・2節では、主として新しく得られた資料をもとに古代の難波地域および難波宮についての考察を試みた。本節では後期難波宮期の特徴的な2つの遺物をとりあげて検討したのち、最後にもっとも多く出土した江戸時代の遺物について触れ、本調査地における発掘調査のまとめを行いたい。

1）後期難波宮の遺物2例

今回の調査では後期難波宮の遺構には顕著なものはなかったが、宮殿の殿舎を復元していく上できわめて重要と思われる遺物が出土した。葡萄唐草文の鴟尾片672と銅製の饅頭金物682である。

葡萄唐草文の鴟尾(Fig.180・181)

残存長5.8cm、残存幅5.1cmの破片で、葡萄の一房の表現がある。葡萄の房の先端は曲がっており、突帯に接している。この鴟尾の類例には柏原市太平寺廃寺出土の鴟尾があり(Fig.180、[飛鳥資料館1980])、全容を推定する際の手がかりとなる。太平寺廃寺出土の鴟尾は胴部の破片で、2条の突帯で画された部分に波状の茎を貼付けた後で、葉・葡萄の房・巻いた蔓などを貼付ける(註1)。突帯を挟んで外側には珠文帯があり、さらに突帯があると推定される。葡萄の房の先は剥離しているが、

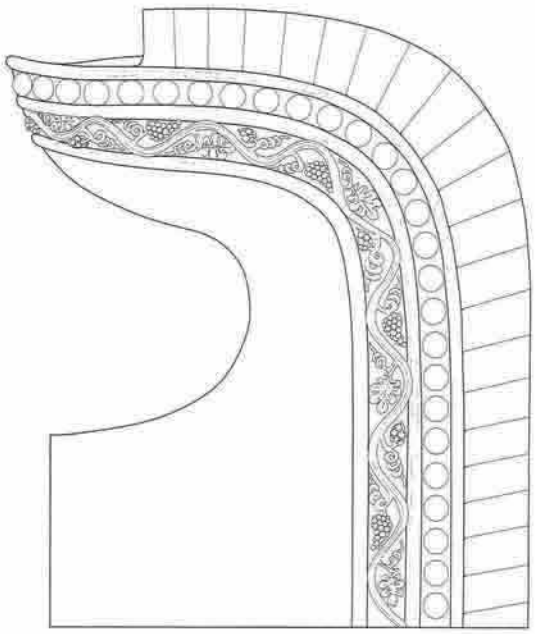


Fig.180　太平寺廃寺出土鴟尾復元図
([飛鳥資料館1980]を改変)

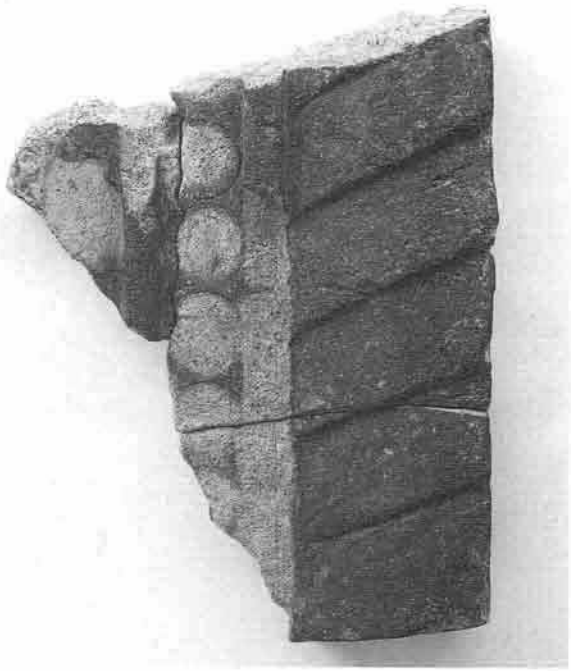


Fig.181　難波宮跡出土鴟尾片

痕跡から672と同様に曲がっていることがわかる。実の施文方法も半球形の型を用いて1個ずつつくる点が共通している。先端の曲がった葡萄の表現は海獣葡萄鏡にも例がある[東京国立博物館1996]。葡萄唐草文は飛鳥の岡寺出土例など、軒平瓦の瓦当文様としても採用されているが、表現や施文方法がまったく異なっている。

太平寺廃寺は『続日本紀』などの文献にもしばしば名前の出る智識寺の跡と考えられている。天平12年(740)に聖武天皇が行幸し、盧遮那仏に感銘を受けて大仏の造立を発願したという。

これまで後期難波宮の鴟尾の出土例としては山根博士によって採集された鴟尾片(Fig.181)をはじめとして6片がある。この鴟尾片を再度観察すると、突帯の内側の粘土の剥離痕跡は唐草のような細長いものの他に、何か塊状のもの、おそらく葉や葡萄の房が付いていたように見える。現在、大阪市立博物館に展示されている鴟尾模型はこの破片をもとに復元されたものであるが、その際に参考にしたのはこの太平寺廃寺の鴟尾であるという。復元の際には葡萄唐草文も検討には上がったと思われるが、明確な資料がない段階では推測の域を出ないとされたのであろうか。今回の672をもとに再検討すると、これまで知られていた鴟尾も同様の文様で飾られていた可能性が高く、後期難波宮の殿舎の屋根には葡萄唐草文の鴟尾が載せられていたことがわかった。智識寺は先にも述べたように聖武天皇やその後継者である孝謙天皇に関係の深い寺院であり、672は後期難波宮の鴟尾が製作された背景を考える上で重要な資料である。

饅頭金物

SG301の上位に堆積した第5b層から出土した。直径8.5cmで高さ3.7cmの鋺のような形で、中央はやや突出する。端部近くで外に折れて端部は内湾する。内面には鉄製の棒(釘の部分)が差込まれているが根元から先は折れて失われている。

この金具は饅頭金具、乳金物とも呼ばれ、扉板を矧ぎ合せる際に取付けられるもので、釘隠の一種である。現存する建物に使用されている例としては法隆寺綱封蔵のものが古く、新しいものは花形の座を一体につくり出す。法隆寺例は平安時代のものとされており[奈良六大寺大観刊行会1972]、平城宮跡でも出土例がないことから、本例が現在のところ管見では最古のものということになる。

出土状況は1点が単独で出土し、周辺に木片も見られなかったので、扉そのものが捨てられていたのではなかろう。共伴した土器の年代は8世紀後葉～末であり、後期難波宮の主要な殿舎の扉に使用されたものであることはまず疑いない。

2）江戸時代の陶磁器・土器

江戸時代において本調査地には大坂城代の家臣屋敷、いわゆる五軒屋敷が存在したことが明らかにされている。前報告や本書においては、そこで使用されて捨てられた多量の陶磁器・土器資料を報告した。報告に際しては質・量ともにまとまった一括資料を選んで掲載しているが、実際にはその何倍もの遺物が出土し、調査で得られた全遺物の中でももっとも割合が多い。

これらの遺物を通じていえることは、18世紀代、特に後半代以後の遺物の爆発的な増加である。それは遺構の数に表れているだけでなく、ひとつの遺構から出土する遺物の量、すなわち捨てられたも

のの量に顕著に表れている。このような変化は肥前諸窯の磁器や、関西系陶器と総称している京・信楽・丹波などにおける陶器の生産量の増加、瀬戸美濃における磁器の生産開始などに支えられている。商品としてこれらが生産され、流通するシステムが確立したことが大きな要因であり、この背景には一般民衆も含めた生活水準の向上があると考えられる。この段階において初めて、いわゆる「日常雑器」が現れ、われわれが現在享受しているような多様な食器使用の様式が成立したといえるのではないだろうか。この点については食生活の変化を食物残滓の面からも考える必要があるが、本書ではいつくかの遺構から採取した資料を分析してデータを公表することができた。各時期を通じての比較検討は今回の資料が比較的新しい時期のものに偏ってしまったため、今後の課題とせざるをえないが、城下町跡などで得られているデータも含めて検討していきたい。また、物質文化と精神生活との両面から検討できる資料として、今回は土製玩具(土人形)についてまとまった数量の報告を行うことができた。これらもまた、ある種の社会的な「余裕」によって生み出されてきたものと位置づけることができ、現代に生きるわれわれの生活様式の形成に大きな役割を果たしたが、現在急速に失われつつある文化でもある。

3）総括

本書で報告した調査成果の中でもっとも注目すべきものは、前期難波宮の水利施設の発見であろう。この遺構は、これまで井戸の調査例のなかった難波宮の中心部で初めて見つかった水を供給する施設である。出土した多量の木製品や、動物遺体、豊富な花粉・種子を含んだ土壌サンプルは、台地部における調査では得られなかった貴重な資料であり、新たなイメージを前期難波宮に加えることができた。今後さらに検討を進めることによって、この宮殿の全容は明らかになっていくと考えられる。

以上の成果の他にも、本調査地で見つかった遺構・遺物には、古いものでは縄文～弥生時代の石器や弥生土器、新しいものでは第二次大戦前の旧陸軍の兵舎などがある。これらは原始から現代に至るまで、この地で人々が盛んに活動を続けてきたことを示す痕跡であり、また反面そのために失われたものも数多い。その点が同様に古代の宮室が置かれた大和の飛鳥地域や藤原京、平城京との決定的な違いである。むしろ平安京が置かれ、そのまま中近世の都市として発展してきた京都との共通点が多いが、難波地域が歴史の表舞台に出てくるのは平安遷都を３世紀以上さかのぼった古墳時代である。また、あるときは「みやこ」、あるときは「いなか」と、当時の政権の動向によってさまざまに周囲を巡る環境が変わり、それが遺構・遺物の状況に反映されるという、きわめてまれな変遷をたどる地域でもある。本調査地における発掘調査ではこれらの要素がほぼ揃った形で得られた。いわば、大阪の歴史を凝縮したような調査成果であったということができる。（佐藤）

註）

（１）この鴟尾片は現在奈良国立博物館に寄託されており、同館のご好意で実見させていただいた。

付章　遺構・遺物の保存と活用

第１節　検出遺構の保存と公開について

難波宮跡は大阪市中央区法円坂の一帯に広がっている。昭和29年以降の発掘調査により大規模な宮殿遺跡が明らかとなり、現在その中枢部が国の史跡に指定され、保存されている。しかしこの地は大阪市の中心部に位置し、高度に都市化が進んでいたことから、その遺跡の保存は容易なことではなく、さまざまな困難に直面した。多くの人々の努力によりこれらの多くが克服され、現在までに総計90,677㎡が史跡に指定されている。

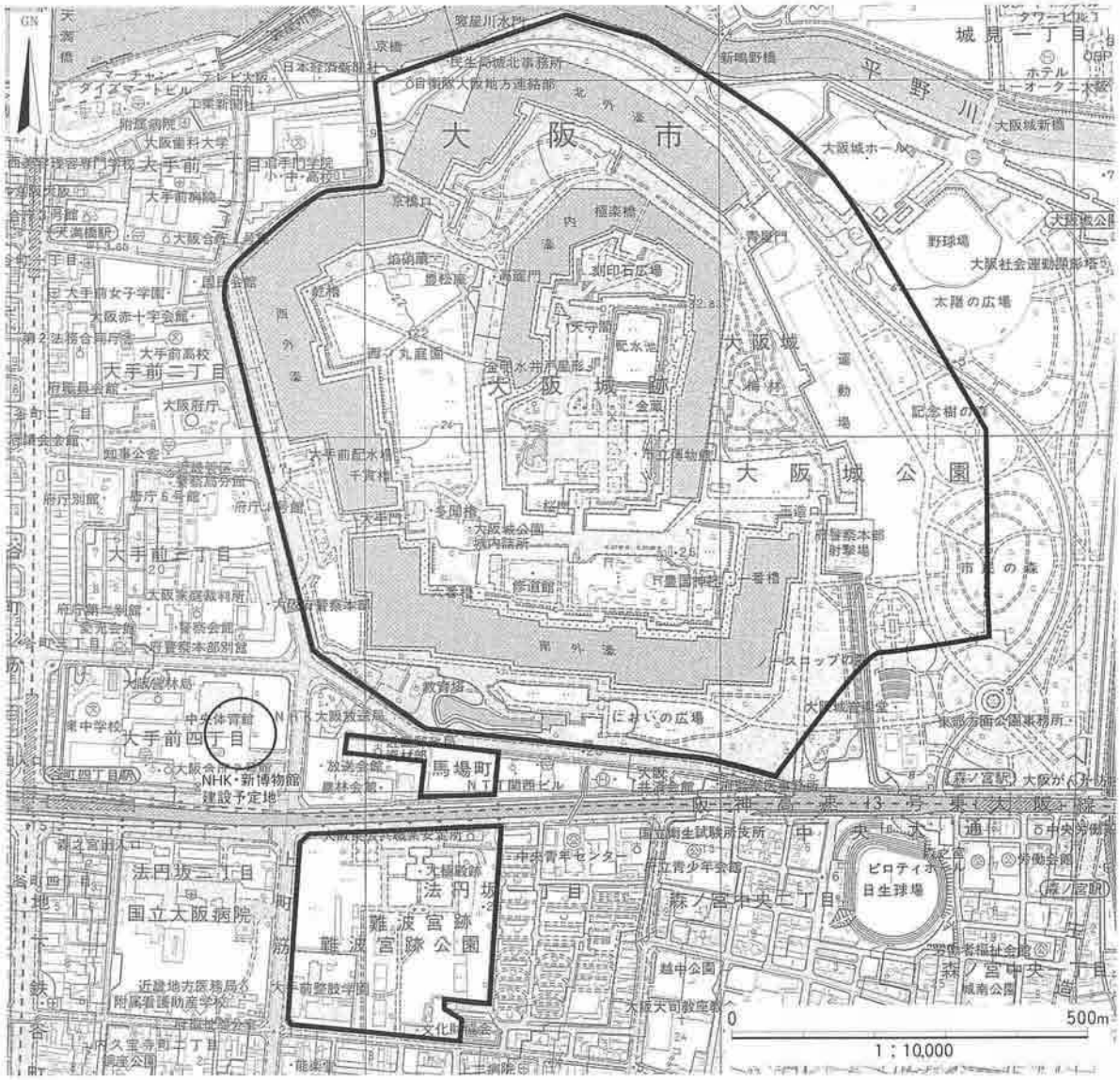


Fig.182　難波宮跡とＮＨＫ・新博物館

同時にこれらの用地を歴史公園として整備することが計画され、昭和46年より第１次整備事業として、後期大極殿院の整備が行われた。また同51年からは第２次整備として、大極殿周辺の朝堂院を中心とした区域についての整備が続けられ、現在に至っている。

１）難波宮跡と大坂城跡の連続一体化構想について(Fig.182)

現在、難波宮跡として史跡の指定がなされているのは、内裏および朝堂院を中心とした範囲であり、北側に位置する特別史跡大坂城跡とは隣接するものの、道路により分けられ、別々の区画となっている。また難波宮跡の史跡指定地についても、中央大通り以北についてはまだ整備工事は未着手であり、間にはＮＨＫ大阪放送局や大阪府農林会館などの建物がある。さらに阪神高速道路が間を通ることから、難波宮跡と大坂城跡は分離したものというイメージが一層強調されることになる。

大坂城内の地形は、築城に際してかなり改変が加えられており、また広い範囲を発掘調査する機会がなかったため、これまでに難波宮に関連する明確な遺構は発見されていない。しかし藤原宮や平城宮などの同時期の宮殿と比較して、内裏の規模やその北側に配置された殿舎の状況を想定すると、難波宮の北限が大坂城と重複する位置にあることは明らかである。

このような両遺跡の重複する配置形態をもとに、大阪市は昭和60年に、難波宮跡と大坂城跡の連続一体化構想を公表した。両者を一体的に整備し、古代から中世、近世へと続く大阪の歴史を凝縮した、大阪の歴史のシンボルとしての史跡公園とするという長期的な構想である。大阪市はこの構想に基づき、中央大通りと大坂城跡の間に位置する建物の移転を行うべく、土地、建物の所有者との協議を始めた。所有者の理解を得て、まず実現したのがＮＨＫ大阪放送局の移転であった。移転先として候補にあがったのは、西側に隣接する大阪市中央体育館(当時)の敷地であった。同体育館も老朽化がすすみ建替えの時期にきていたことから、これの建替えと共にＮＨＫの新社屋建設を同敷地内で実施しようというものである。両事業を想定して、昭和62年より敷地全域の発掘調査を開始した。

長期にわたる発掘調査により、古代から近世にいたる多くの遺構を検出した。なかでも５世紀代の巨大高床倉庫群、“難波の大蔵”かと思われる前期難波宮の倉庫群、豊臣前期の高級家臣クラスの屋敷地、江戸時代の武士の宅地など各時代に及ぶ多くのまとまった遺構が検出された。大阪市は遺跡の重要性に鑑み遺構の保存方法等を検討し、中央体育館のこの地での建替えは断念することにより、敷地南半部を完全保存することとした。それにより、ここに位置する５世紀代の倉庫群をはじめ前期難波宮の遺構を保存し、後日史跡に追加指定し、歴史公園としての整備を行うことが決定された。

ただし難波宮跡と大阪城公園との一体化をすすめるためにはＮＨＫ大阪放送局の移転は不可欠であることから、前期難波宮の遺構の保存に留意しつつ、敷地北西部において建築することとした。同時に(仮称)考古資料センターをつくることも決定された。これは40数年に及ぶ難波宮跡の発掘成果を一堂に展示し、楽しみながら学ぶことのできる体験型のサイトミュージアムを史跡に隣接した場所につくるというものである。

その後経済状況の変化等の理由により状況を変え、ＮＨＫ大阪放送局と合築で大阪市立新博物館の建設を行うことが計画された。同地一帯は難波宮跡だけでなく豊臣期・徳川期の大坂城の遺構・遺物も多く検出されており、これらの成果を生かすことにより博物館の展示を一層幅広いものとすること

ができる。また難波宮の専門館である考古資料センターと役割を分担することにより、各時代の特色を強調した歴史系の総合博物館とする。そして考古資料センターについても、博物館と一体的な施設とすることでさらに強力な体制のもとに諸活動を行うことが可能と思われた。

2）遺構の保存方法について

このような経緯をたどり着工の運びとなったＮＨＫ新放送会館および新博物館・考古資料センターの建設にあたっては、地下の難波宮遺構の保存方法が問題となった。そしてさまざまな検討の結果、“パイプルーフ工法”が採用されることとなった。これは保存する遺構の両側に支柱を打設し、これに接続した受け梁上にパイプを密着して挿入し、これによって遺構の荷重を受けるとともに、遺構に影響が及ぶことなく周囲の工事を行うというものである。主に土木工事で使用される工法であるが、埋蔵文化財の保存に関しても、京都市の神泉苑関連遺構と壬生大路築地遺構の保存や、厚木市内の道路建設に際しての古墳の保存などに採用された例があった。設計および施工の内容については、(財)日本建築センター内に設置された工法検討委員会により厳しいチェックを受け、問題のないことが確認された。

3）遺構の公開について(Fig.183)

以上のような工法を採用することにより、前期難波宮の遺構を建物内部に保存することとした。この計画は、都市部において遺跡の保存を進めるために、開発と共存する手法を探ったものである。一方、保存したこれらの遺構を、ただ埋め戻しておくだけではなく、見学者に対して公開できるようにし、実物の遺構のもつ迫力、面白さや重要性をより多くの人々にアピールすることが必要であると考え、大阪市およびＮＨＫは検討を重ね、平成10年９月、その手法を公表した。中央部の保存遺構については、内部にギャラリーを設け、柱穴等の遺構を目前に観察することができ、また保存範囲全体について遺構の広がりを認識できるようにした。また石組み遺構についても同様にギャラリーを設け、この中から遺構を望むことができるようにした。博物館棟下部の遺構については、遺構面と１階床面のレベル差があまりないことから、遺構上部の床面をガラス張りとし、柱穴遺構を見ることができるようにした。この遺構は焼失痕跡を良好に残しており、柱の抜取り穴に焼土や炭化物が多量に混入している。見学者はこれらを明瞭に認識でき、前期難波宮の焼失した状況を生々しく実感できるものと

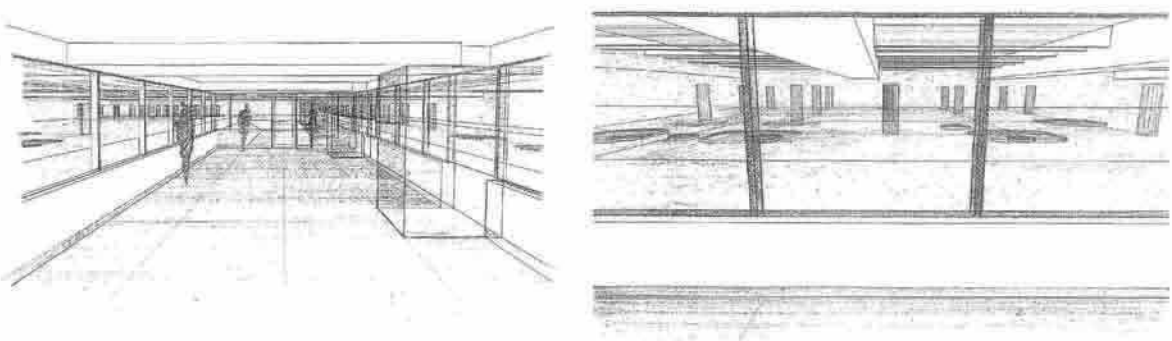


Fig.183　アトリウム下部保存遺構のギャラリー

思われる。また長期にわたる公開により予想される遺構の劣化に対しても十分に対応できるよう、遺構の保存個所に係員が出入りしメンテナンス等ができるようにしている。

4）保存遺構と史跡整備個所および博物館内展示との一体化(Fig.184)

新博物館の展示においては10階フロアーに難波宮を中心とした古代大阪の展示を展開する計画である。展示室の東南側に開いた窓から難波宮跡公園の範囲を一望のもとに見渡すことができ、また遠景に生駒・金剛山系を望むことができる。これらの眺望を展示の中に組込み、展示ストーリーの一部として活用することにより、わかりやすく親しみのある展示ができるものと思われる。史跡に隣接するという地の利を最大限に活用したサイトミュージアムにしたいと考えている。

これに加え、建物地下に保存した遺構を常時公開し、これもまた展示の一部とすることにより一層臨場感を増し迫力のある展示を展開できるものと思われる。保存遺構と博物館内の展示、および眼下に広がる難波宮跡公園の3者が一体となり相互に連携することにより、従来の博物館ではなし得なかった総合的、多角的な展示および活動が可能になるであろう。

難波宮跡は大阪という大都市の中心部に位置する遺跡であるため、その保存にはさまざまな困難があった。今回の調査で発見された遺構群についても同様であったが、敷地南半部については完全保存することができた。また北半部についても、特殊な工法を用い難波宮の遺構を建物の内部に保存することとなった。遺構の保存のことだけをみれば埋め戻すことが最善なのであるが、建物の内部にあることを利用し、これらの遺構を公開、活用することにより遺構のもつ生の迫力が実感でき、ひいては遺跡の面白さとともにその重要性を訴えることができると思われる。

今回の例は都市部における遺跡保存を考えるときの一例となるものといえる。　（植木）



Fig.184　新博物館から難波宮跡を望む

第２節　木製遺物の保存処理

１）はじめに

本書で報告する各調査において出土した木製遺物の保存処理を行った。

対象としたのは前期難波宮期・石山本願時期・江戸時代の木製遺物146点で、特にNW97－３次調査で検出された前期難波宮の水利施設から出土した板材や杭、祭祀具、道具類が大半を占める。板材のいくつかは泉施設SG301の中あるいは周囲に設けられた木枠1～4を構成していたものである。

処理方法は糖アルコール含浸処理法を採用し、大型木製遺物は木製品含浸処理装置(PEG含浸処理装置を転用、有効寸法2000×1000×1000㎜)を用い、２回に分けて行った。小型木製遺物については、熱風循環式乾燥器中にステンレス槽を入れ、その中で含浸処理を行った。

用いた糖アルコールはラクチトール(註１)で、処理工程は以下のとおりである。

１．洗浄・脱色
２．含浸処理(Fig.185)
３．取上げ・洗浄(Fig.186)
４．固化(Fig.187)・乾燥
５．表面処理
６．乾燥(Fig.188)

２）経過と結果(Fig.185～188)

含浸処理の工程のうち、50％程度までは常温で行った。

含浸処理に要した期間は大型木製遺物は５ヶ月、小型木製遺物は２ヶ月である。

最終濃度は大型木製遺物は80％、小型木製遺物は85％である。

最終濃度が85％に達しない場合、遺物に損傷を与える三水和物の結晶が生成される可能性がある。これを防ぐために、第１回目に含浸処理した大型木製遺物の固化・乾燥の工程は、処理液を抜き取った木製品含浸処理装置の中を利用して50℃で保温し、一水和物・二水和物の結晶をつくる方法を試みた(Fig.188)。しかし、槽内の温度分布のばらつきが大きく、均一に50℃の環境をつくることができなかった。このため、腐朽の進んでいる個所から三水和物の結晶が生成され始めたので、ホットドライヤー(註２)を用いて熱風を送る方法に変更したところ、三水和物の生成を抑え、固化・乾燥することができた。また、三水和物が生成された個所については、その結晶にドライヤーなどで熱風を当てて溶解し、固化することで、三水和物の結晶が再度生成されることを防いだ。

第１回目の処理で生じた最終含浸濃度に起因する問題を解消するため、第２回目の含浸処理には三水和物の生成を抑制する効果のある糖類を添加(註３)したところ、良好な結果が得られた。

小型木製遺物は85％まで濃度を上げているため、問題は生じなかった。

3）まとめ

結果的には無事処理を終えることができたが、その過程でいくつかの問題が提示された。

もっとも大きな問題は、含浸処理にPEG含浸処理装置を転用した場合、加熱・保温能力が不充分であるため、理想とする最終濃度85％まで効果的に上げることができないことである。これにより、固化・乾燥の工程で50℃の環境が必要になるなど、いくつかの問題を派生する結果となった。

第２回目の含浸処理では糖類の配合を調整することにより、三水和物の生成を抑えることができたが、より安全に、効果的に大型木製遺物の含浸処理を行うためには、含浸処理装置の温度管理能力の向上が望まれる。　（伊藤・鳥居）

註）

（１）商品名：ミルヘン、東和化成工業株式会社製

（２）SUIDEN社製　SHD1.5型

（３）奈良県立橿原考古学研究所保存科学室長今津節生氏の御教示による。



Fig185　含浸処理



Fig186　取上げ・洗浄



Fig187　固化



Fig188　乾燥

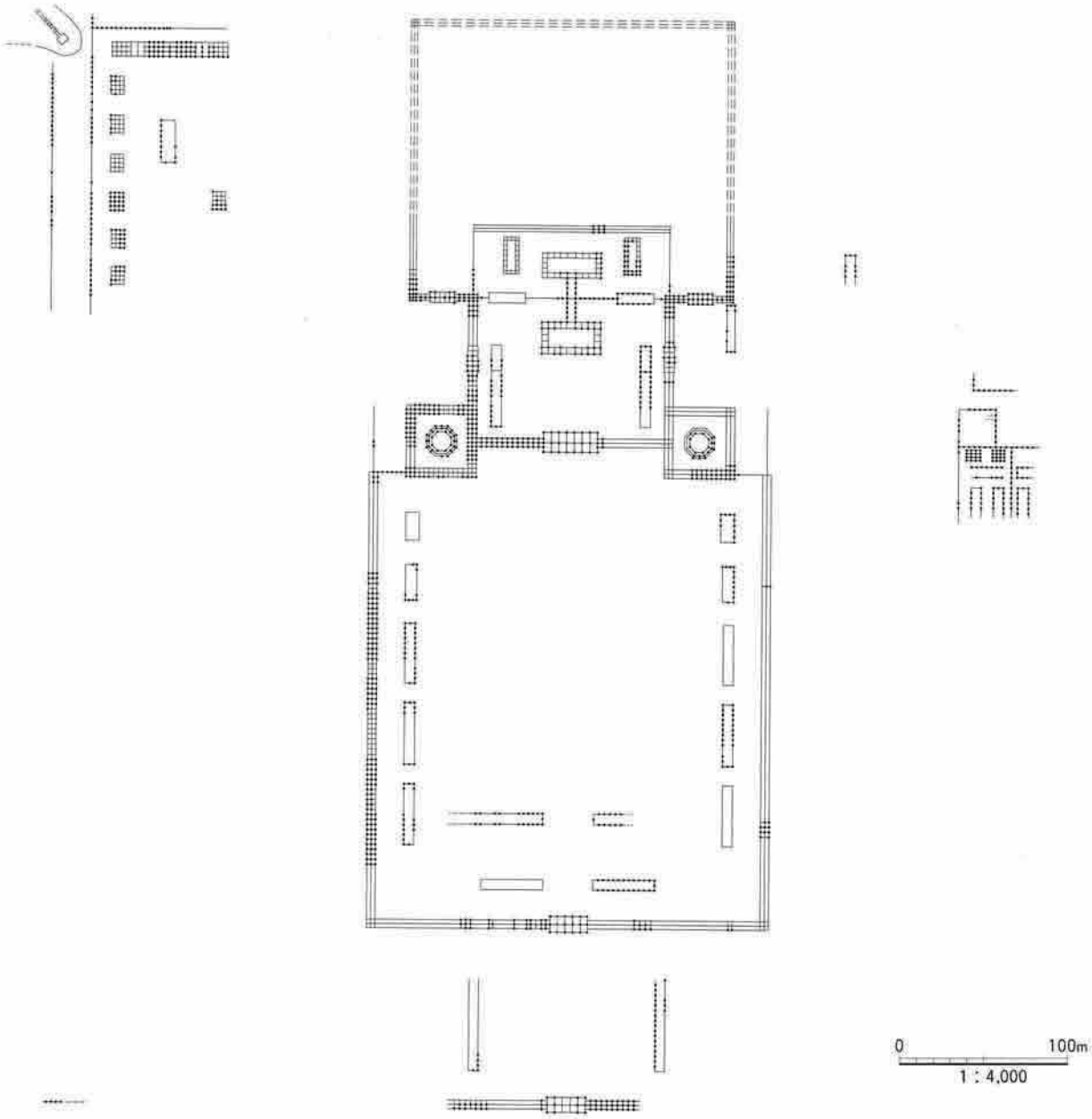


Fig.189　前期難波宮の遺構配置(2000年３月)

引 用・参 考 文 献

相原嘉之1999、「西橘遺跡出土の土師器」:『古代土師器の生産と流通』研究会資料　奈良国立文化財研究所

安芸毬子1991、「江戸遺跡にみる土人形」:『江戸在地系土器の研究』Ⅰ　江戸在地系土器研究会

1994、「製作技法から見る土人形」:『江戸在地系土器の研究』Ⅱ　江戸在地系土器研究会

飛鳥資料館1980、『日本古代の鴟尾』

阿部永 他1994、『日本の哺乳類』 東海大学出版

網伸也2000、「古代寺院の創建と瓦陶兼業窯—四天王寺の創建年代を中心として—」:『あまのともしび』 原口正三先生の古稀を祝う集い　pp.142−152

安藤一男1990、「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」:『東北地理』42巻2号　東北地理学会　pp.73−109

池田研1999、「古墳時代の貝出土遺跡」:『大阪市文化財協会研究紀要』第2号　pp.373−379

イケマン人形文化保存財団1998、『さがの人形の家紀要』第5号

石井久夫1997、「上津島遺跡から出土した軟体動物(貝類)遺骸」:『上津島遺跡 第5次発掘調査報告』 上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会　pp.99−104

伊藤幸司・鳥居信子1996、「糖アルコール含浸処理法による脆弱遺物の処理例」:『第18回文化財保存修復学会講演会大会講演要旨集』 文化財保存修復学会

伊藤純1982、「摂津職官人の本拠地からみた難波京」:『大阪文化誌』第14号　大阪文化財センター　pp.1−17

今津節生1996、「糖アルコール含浸処理による保存処理の実例」:『第18回文化財保存修復学会講演会大会講演要旨集』文化財保存修復学会

今津節生・伊藤幸司・鳥居信子・橋本輝彦1997、「糖アルコール含浸法における乾燥工程の効率化」:『日本文化財科学会代14回大会研究発表要旨集』 日本文化財科学会

植木久1992、「建築遺構に関する考察」:『難波宮址の研究』第九　大阪市文化財協会　pp.350−357

内田好昭1988、「『前期難波宮』とその下層の須恵器」:『古代文化』40−6　古代学協会　pp.29−32

卜部行弘1999、「飛鳥京跡苑地遺構の調査」:『発掘された飛鳥の苑地』第16回橿原考古学研究所公開講演会資料

江浦洋2000、「難波宮北西部の発掘調査—木簡の出土とその周辺」:『第40回大阪府埋蔵文化財研究会資料集』 大阪府文化財調査研究センター

大阪市文化財協会1981A、『難波宮址の研究』第七

1981B、『財団法人 教員会館敷地発掘調査(NW80−9)略報』

1984、『難波宮址の研究』第八

1992、『難波宮址の研究』第九

1993、『大阪市交通局による地下鉄7号線森ノ宮駅舎建設工事に伴う大坂城跡・森の宮遺跡発掘調査(OS92−74)略報』

1995、『難波宮址の研究』第十

1996、『森の宮遺跡』Ⅱ

1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』

1999A、『堂島蔵屋敷跡』

1999B、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪市文化財協会1999C、『大坂城跡』Ⅳ
2000、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV
大阪市文化財センター1994、『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡　1992・1993年度発掘調査報告』
大阪府文化財調査研究センター1996、『大坂城跡の発掘調査』6
大平茂1992、「近世丹波焼擂鉢の型式分類とその編年」:『下相野窯址』　兵庫県教育委員会　pp.75−80
岡田茂弘1961、「難波宮址第10・11次発掘調査出土遺物」:『難波宮址の研究』研究予察報告第4　難波宮址顕彰会　pp.79−90
沖陽子1996、「ミズアオイ科」:週間朝日百科『植物の世界』113　朝日新聞社　pp.154−156
金原正明1999、「寄生虫」:西本豊弘・松井章編『考古学と動物学』考古学と自然科学②　同成社　pp.151−158
金原正子1999、「細工谷遺跡の古環境復元」:『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ　大阪市文化財協会　pp.121−133
亀井正道1972、「琴柱形石製品考」:『東京国立博物館紀要』八　pp.30−170
京嶋覚1989A、「難波地域の土師器とその地域色」:『韓式系土器研究』Ⅱ　韓式系土器研究会　pp.12−22
1989B、「『難波宮下層』土器の再検討」:『大阪市文化財論集』　大阪市文化財協会　pp.193−216(刊行は1994年だが脱稿年を重視した。)
1999、「難波地域の古代土器—土器における都市性の把握—」:『大阪市文化財協会研究紀要』第2号　pp.305−322
京都市埋蔵文化財研究所1983、「内裏外郭跡」:『平安京跡発掘調査概報 昭和57年度』　京都市文化観光局　pp.1−11
1989、「平安京右京六条三坊」:『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』　pp.35−37
吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』　保育社
國下多美樹1988、「京都府下の紡錘車について」:『京都考古』第49号　京都考古刊行会　pp.1−25
久保和士1992、「中近世遺構出土の動物遺体」:『難波宮址の研究』第九　大阪市文化財協会　pp.299−304
1993、「櫛払」:『葦火』　大阪市文化財協会　pp.6−7
1998、「住友銅吹所跡出土の動物遺体」:『住友銅吹所発掘調査報告』　大阪市文化財協会　pp.339−377
黒崎直1997、「考古学の発掘現場におけるトイレ研究」:『トイレの考古学』　大田区立郷土博物館　pp.183−196
群馬県埋蔵文化財調査事業団1986、『下佐野遺跡Ⅱ地区』
小杉正人1988、「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」:『第四紀研究』27　日本第四紀学会　pp.1−20
古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成Ⅰ』
1994、『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』
小森俊寛1999、「山背北野廃寺溝SD38出土土器群の再検討」:『瓦衣千年』　森郁夫先生還暦記念論文集刊行会　pp.513−545
小森俊寛・上村憲章1996、「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」:『研究紀要』第3号　京都市埋蔵文化財研究所　pp.187−271
酒井亮介1997、「生魚市場」:『大阪府漁業史』　大阪府漁業史編さん協議会　pp.152−189
佐竹義輔・原寛・亘理俊次・冨成忠夫編1989、『日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ』　平凡社
佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ　大阪市文化財協会　pp.102−114
1994、「森の宮遺跡の土馬と人面土器」:『葦火』48号　大阪市文化財協会　pp.6−7
1996、「中世後期の陶磁器・土器について」:『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ　大阪市文化財協会　pp.81−92
1997、「難波地域」:『第5回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器—』　古代の土器研究会

佐藤隆1999、「四天王寺の創建年代―土器・瓦の年代決定をめぐって―」：大阪市教育委員会編『大阪の歴史と文化財』第３号　大阪市文化財協会　pp.19−24
狭山池調査事務所1998、『狭山池 埋蔵文化財編』
嶋谷和彦1984、「堺環濠都市遺跡―調御寺跡―出土の土人形について」：『堺市文化財調査報告』20　堺市教育委員会　pp.213−214
白石太一郎1982、「畿内における古墳の終末」：『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集　pp.79−120
鋤柄俊夫1994、「近世の土人形」：『同志社大学考古学シリーズ』Ⅵ　同志社大学考古学シリーズ刊行会　pp.147−155
鋤柄俊夫・森毅1999、「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」：『大阪市文化財協会研究紀要』第２号　pp.143−182
杉本宏1987、「飛鳥時代初期の陶硯―宇治隼上り瓦窯出土陶硯を中心として―」：『考古学雑誌』第72巻第２号　日本考古学会　pp.１−28
鈴木良章1991、「信楽町漆原Ｃ遺跡発掘調査の紹介」：『関西近世考古学研究』Ⅱ　関西近世考古学研究会　pp.177−181
積山洋1989、「前期難波宮内裏西方官衙の検討」：『ヒストリア』124号　大阪歴史学会　pp.44−54
1990、「古墳時代中期の大型倉庫群―難波のクラと紀伊のクラをめぐる一試論」：『大阪の歴史』30号　大阪市史編纂所　pp.37−66
1992、「前期難波宮内裏西方官衙とその周辺」：『難波宮址の研究』第九　大阪市文化財協会　pp.340−349
1994、「消費地報告 大坂」：『近世陶磁器の諸様相―消費地における18・19世紀の器種構成―』第６回関西近世考古学研究会大会発表資料
高槻市教育委員会1983、「阿武山古墳」：『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要』７　pp.22−26
高原光1998、「近畿地方の植生史」：安田喜憲・三好教夫編『図説日本列島植生史』　pp.114−137
高安克己・漆戸尊子・奥出不二生1986、「日本産シジミ３種の殻体の比較形態学」：『島根大学地質学研究報告』第５号　pp.35−42
田辺昭三1966、『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古クラブ
樽野博幸1981、「難波宮下層遺跡出土の自然遺物 動物遺体」：『難波宮址の研究』第七　大阪市文化財協会　pp.228−232
趙哲済・京嶋覚・高井健司1992、「長原遺跡の標準層序」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ　大阪市文化財協会　pp.19−32
東京国立博物館1996、『法隆寺献納宝物』特別展図録
直木孝次郎・小笠原好彦編著1991、『クラと古代王権』　ミネルヴァ書房
中尾芳治1965、「難波宮遺跡における土器編年の問題」：『難波宮址の研究』研究予察報告第５－２　難波宮址顕彰会　pp.29−32
1993、「前期難波宮『朱雀門』跡発見とその意義」：『大阪人』47巻10月号　大阪都市協会　pp.8−12
1995、「前期難波宮と唐長安城の宮・皇城」：『難波宮の研究』　吉川弘文館　pp.173−188
中村純1980、「花粉分析による稲作史の研究」：古文化財編集委員会編『考古学美術史の自然科学的研究』　日本学術振興会　pp.185−204
中村博司1989、「大坂城と城下町の終焉」：『よみがえる中世』２　本願寺から天下一へ 大坂　平凡社　pp.177−206
那須孝悌1989、「活動の舞台：概論」：永井昌文・那須孝悌・金関恕・佐原真編『弥生文化の研究』Ⅰ　弥生人とその環境　pp.119−130
難波宮址顕彰会1965、『難波宮址の研究』研究予察報告第５－２
1976、「第66次発掘調査概報」：『難波宮跡研究調査年報 1974』　pp.25−30

波部忠重1961、『続原色日本貝類図鑑』 保育社
奈良県立橿原考古学研究所1987、『史跡牧野古墳』
奈良国立文化財研究所1958、『飛鳥寺発掘調査報告』
1960、『川原寺発掘調査報告』
1962、『平城宮跡発掘調査報告』Ⅱ
1973、「坂田寺跡の調査」:『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』3 pp.5−9
1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ
1978、藤原宮第20次(大極殿北方)の調査」:『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』8 pp.3−13
1990、「山田寺第7次調査」:『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』20 pp.76−86
1995A、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅳ
1995B、『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』 奈良県教育委員会
1995C、「甘橿丘東麓の調査」:『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25 pp.94−101
1999、「飛鳥池遺跡の調査」:『奈良国立文化財研究所年報』1999−Ⅱ pp.26−52
奈良六大寺大観刊行会1972、『奈良六大寺大観』第1巻 法隆寺1
難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」:『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会 pp.373−400
西岡達哉1998、「巻貝から二枚貝へ—アカニシの出土量の減少について—」:『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅵ pp.113−123
西口裕泰・伊藤幸司・鳥居信子・今津節生・北野信彦1999、「糖アルコール含浸法による漆製品の処理」:『日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集』 日本文化財科学会
西本豊弘・松井章編1999、『考古学と動物学』考古学と自然科学② 同成社
日本の地質『近畿地方』編集委員会1987、『日本の地質』6 近畿地方 共立出版 pp.6−182
花谷浩1997、「大和 飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」:『飛鳥時代の瓦づくり』Ⅰ発表要旨 古代瓦研究会
林部均1998、「伝承飛鳥板蓋宮跡出土土器の再検討」:『橿原考古学研究所論集』第十三 吉川弘文館 pp.129−164
原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真1962、『船橋遺跡の遺物の研究』(Ⅱ) 平安学園考古学クラブ
パリノサーヴェイ株式会社1996、「森の宮遺跡における種実分析などの自然科学的分析」:『森の宮遺跡』Ⅱ 大阪市文化財協会 pp.193−203
菱田哲郎1986、「畿内の初期瓦生産と工人の動向」:『史林』第69巻第3号 史学研究会 pp.1−38
兵庫県教育委員会1997、『三条九ノ坪遺跡』
兵庫県土木地質図編纂委員会1996、「兵庫県地質図解説書・地質編」:『兵庫の地質』 兵庫県 pp.80−182
兵頭政幸1999、「考古学と年代測定学・地球科学」:松浦 他編『考古・古地磁気法』Ⅰ−2 pp.143−161
平井信一1979〜1982、『木の事典』第1巻〜第17巻 かなえ香房
平岡武夫1956、『唐代の長安と洛陽 地図』 京都大学人文科学研究所
枚方歴史フォーラム実行委員会1997、『古代の枚方—継体大王と渡来人—』
藤田紘一郎1997、『新版臨床検査講座』8 医動物学 医歯薬出版株式会社
藤田幸夫1981、「難波宮下層遺跡出土の土器について」:『難波宮址の研究』第七 大阪市文化財協会
古市晃1998、「前期難波宮内裏西方官衙の再検討—庭に物を積み上げて賜う儀礼について—」:『ヒストリア』158号 大阪歴史学会 pp.108−133
古谷正和1979、「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」:『第四紀研究』18 日本第四紀学会 pp.121−141

堀田満(代表)編1989、『世界有用植物事典』 平凡社
穂積裕昌1992、「『大溝空間』の性格とその意義」:『城之越遺跡』 三重県文化財センター pp.197−203
松下まり子1987、「晩氷期以降の植生史—照葉樹林の出現と拡大—」:『群落研究』4号 群落研究会 pp.15−20
豆谷浩之1992、「文献史料からみた大坂城代家臣屋敷」:『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会 pp.407−416
真山茂樹・小林弘1982、「青野川のケイソウ」:『東京学芸大学紀要 4部門』34号 pp.77−107
光谷拓実・次山淳1999、「平城宮下層古墳時代の遺物と年輪年代」:『奈良国立文化財研究所年報』1999−Ⅰ pp.8−9
南秀雄1992A、「5世紀の建物群の検討」:『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会 pp.309−319
1992B、「難波宮下層遺跡の土器と集落」:『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会 pp.320−339
村田治郎1966、「四天王寺創立史の諸問題」:『聖徳太子研究』第2号 聖徳太子研究会 pp.73−128
村田泰輔1994MS、「珪藻分析における基礎研究—潮汐の影響による珪藻群集の変化—」:埼玉大学教養学部 卒論
1994、「珪藻分析に基づく古環境復元」:『小杉正人記念ワークショップ予稿集』32
森田克行1996、「新池遺跡」:『考古学と実年代』第Ⅰ分冊 埋蔵文化財研究会 pp.19−28
森毅1992、「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」:『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会 pp.358−372
安田喜憲1978、「大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変遷と古地理」:『第四紀研究』16 日本第四紀学会 pp.211−229
山田昌久1993、「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植生関係史」:『植生史研究』特別号1号 植生史研究会 pp.1−242
山中敏史1991、「古代の倉庫群の特徴と性格」:直木孝次郎・小笠原好彦編著『クラと古代王権』 ミネルヴァ書房 pp.89−123
八幡市教育委員会1985、『平野山瓦窯跡発掘調査概報』
1992、『楠葉平野山窯跡(第2次)発掘調査概報』
吉川金次1976、『ものと人間の分化史』18 鋸 法政大学出版局
吉川昌伸1995、「新家遺跡の縄文時代晩期以降の植生変遷史」:『新家遺跡 第6次発掘調査報告書—大阪府高速東大阪線東大阪ジャンクション建設に伴う発掘調査—』 大阪府文化財調査研究センター pp.63−70
1999、「関東平野における過去12.000年間の環境変遷」:『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集、pp.267−287
吉川昌伸・吉川純子・藤根久1997、「井戸内堆積物の植物化石群」:『下戸塚遺跡の調査—早稲田大学安部球場跡地埋蔵文化財調査報告書—』第4部 中近世編 早稲田大学 pp.257−273
吉田幸雄1996、『図説人体寄生虫学』 南山堂
和歌山市教育委員会1983、『鳴滝遺跡発掘調査概報』
渡辺正巳・古谷正和1996、「森の宮遺跡発掘調査(MR94−8)における花粉・珪藻分析」:『森の宮遺跡』Ⅱ 大阪市文化財協会 pp.175−192
Maeda, Y. 1976. Palynological study of the forest history in the coastal area of Osaka Bay since 14,000 BP. Journal of Geosciences , Osaka City University, 20, Art.4, pp.59-62.
Krammer, K. and H. Lange-Bertalot. 1986. Bacillariophyceae. Susswasserflora von Mitteleuropa, 2(1)
1988. Bacillariophyceae. Susswasserflora von Mitteleuropa, 2(2)
1991a. Bacillariophyceae. Susswasserflora von Mitteleuropa, 2(3)
1991b. Bacillariophyceae. Susswasserflora von Mitteleuropa, 2(4)
Kobayashi, H. 1968. A survey of the Fresh Water Diatoms in the Vicinity of Tokyo. Japanease Jour.of Botany, 20, pp.93-122.

あ と が き

本調査地では1987年以来の一連の調査によって、難波宮はもとより、各時代にわたる多くの成果を得ることができ、これらは調査地域のみならず大阪の歴史を明らかにする上で重要な位置を占めている。なかでも調査地北西部の谷に築かれた前期難波宮の水利施設や内裏西方倉庫群は、この宮殿の実態を解明する上でことに重要である。一本柱塀で区画された敷地内に整然と配置された倉庫群は、巨大な「並び倉」を含むことや倉庫群が広場に面することから、前期難波宮に置かれた国家的な倉であったことは疑う余地がない。唐長安城の太倉と同様の位置に存在することは、前期難波宮の殿舎の全体配置が唐長安城を参考にして施工されたという説を補強するものと思う。さらに、水利施設および土馬や木製祭祀具の発見は、ここが前期難波宮に付随した儀礼の場であったことを示す。当時の宮廷生活の様子が一部であれ明らかにされた意義は大きい。

一方、5～8世紀にいたる難波地域の古代の土器編年を提示して、前期難波宮の造営期に対応する土器様式が7世紀中葉であることを確定した。これによって土器論からも前期難波宮＝長柄豊碕宮説をあらためて裏付けたといえよう。この他にも本書では豊臣期および江戸時代の大坂城に関連する遺構や遺物についても事実記載を中心に収録したが、多岐に渡る膨大な量の遺物のすべてについて充分な検討を加えられなかったことは否めない。ただし、今回の調査では動植物遺体の同定に基づく古環境の復元、石材の同定のみならず、前期難波宮の年代を決定するための科学的な手段のひとつである年輪年代測定や古地磁気年代測定などを実施して重要な成果が得られた。

現在、調査が行われた旧大阪市中央体育館敷地内では、地下に保存した難波宮の遺構を見学しうる大阪市の新しい博物館の建設が2001年の開館をめざして進んでいる。本書が地下の遺構ともども学術資料としてのみならず、博物館や難波宮跡公園を訪れる方々にも有効に活用していただけることを願ってやまない。

（田中清美）

索　引

索引は遺構・遺物に関する用語、地名・遺跡名・歴史上の事件などの固有名詞、および本書に関連する難波宮跡の調査次数に分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

S　SA301 ……5, 9, 10, 37, 48, 50, 52, 249, 250, 251
SA302 ……5, 9, 48, 50
SA303 ……5, 10, 50, 52, 68, 249, 251, 254
SB301 ……9, 10, 47, 50
SB310 ……47
SD301 ……16, 37, 42, 47, 58, 63, 67, 74, 84, 85, 88, 185, 189, 195, 217, 220, 221, 222, 223, 224, 227, 228, 242, 247, 248, 251, 252
SD302 ……43, 47
SD303 ……43, 47
SG301 ……14, 16, 35, 37, 42, 43, 47, 58, 63, 67, 68, 71, 74, 79, 84, 85, 91, 185, 189, 195, 207, 208, 217, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 228, 235, 240, 242, 245, 246, 247, 248, 250, 251, 252, 262, 263, 267, 273
SX301 ……47, 85

い　斎串 ……74, 259, 260
生駒西麓産 ……57, 58
石山本願寺期 ……7, 10, 14, 92, 95, 103, 202

う　漆容器 ……67, 68

お　沢瀉文 ……12, 116
織部 ……103, 107, 121, 167

か　開元通宝 ……116
崖錐堆積物 ……19, 43
飾瓦 ……108, 116, 180, 182
花粉 ……217, 220, 221, 222, 223, 240, 242, 243, 268
唐草文(軒平瓦) ……88, 114, 180
唐津焼 ……102, 103, 107, 108
韓式系土器 ……264
広東碗 ……142

き　寄生虫卵 ……223, 239, 240, 242
黄瀬戸 ……108
熙寧元宝 ……116
京焼(系) ……131, 141, 155, 170, 184
京焼風陶器 ……131
木枠 ……42, 43, 68, 79, 84, 207, 208, 224, 228, 237, 242, 248, 250, 251, 262, 273
金箔押(瓦) ……11, 12, 97, 109, 114

く　櫛払 ……182

け　径高指数 ……30, 52, 58, 67, 258, 259, 260
珪藻 ……224, 225, 226, 242

こ　皇宋通宝 ……116
五弁花 ……134
五輪塔 ……97, 116
(コンニャク)印判 ……131, 134

さ　祭祀具 ……6, 71, 74, 251, 260, 273
堺擂鉢 ……141, 155, 159, 169
三田焼 ……142, 167

し　志野 ……102, 103, 107, 108, 121
鴟尾 ……35, 36, 88, 266, 267, 268
重圏文(軒瓦) ……88
種子 ……229, 234, 235, 237, 238, 239, 243, 244, 268

新羅(陶質)土器 ····35

す 水利施設 ····10, 13, 14, 16, 19, 33, 37, 47, 52, 68, 84, 85, 207, 209, 217, 228, 235, 237, 242, 245, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 258, 264, 268, 273
硯 ····63, 116, 182

せ 製塩土器 ····58
青花 ····93, 95, 102, 103, 107, 108, 121, 134, 142
青磁 ····93, 95, 121, 127, 130, 131, 142, 167
青磁染付 ····134, 142, 167
聖宋元宝 ····116
石製垂飾 ····33
石鏃 ····24, 26
石列 ····4, 5, 6, 96, 97, 98, 102, 251

た 丹波焼 ····108, 121, 125, 130, 131, 132, 133, 155, 169

つ 杯A ····67, 85, 87, 259, 260, 261, 263
杯B ····63, 67, 87, 253, 258, 259, 260, 261, 263
杯C ····33, 52, 58, 60, 63, 67, 68, 258, 259, 260, 263
杯G ····33, 35, 57, 58, 63, 67, 68, 254, 258, 259, 260, 262, 263
杯H ····26, 28, 30, 33, 35, 57, 58, 63, 68, 253, 258, 259, 260, 261

て 泥炭層 ····19, 217, 220, 221, 222, 224, 227, 240, 241, 242, 243

と 砥石 ····84, 116, 182
糖アルコール含浸処理法 ··273
土錘 ····35, 52, 69, 96, 258
土製玩具 ····121, 158, 169, 170, 171, 174, 175, 176, 179, 180, 268
独鈷杵文軒平瓦 ····96
土馬 ····68, 248, 260
豊臣(前・後)期 ····3, 4, 5, 10, 11, 12, 13, 14, 95, 96, 97, 102, 103, 107, 108, 116, 121, 130, 167, 169, 180, 270
鳥衾瓦 ····109

な 難波Ⅰ ····255, 261, 264
難波Ⅱ古段階 ····261
難波Ⅱ中段階 ····28, 35
難波Ⅱ新段階 ····24, 26, 28, 261
難波Ⅲ古段階 ····261, 264
難波Ⅲ中段階 ····37, 42, 52, 58, 63, 248, 262, 264
難波Ⅲ新段階 ····26, 28, 37, 260, 263, 264
難波Ⅳ古段階 ····67, 263
難波Ⅳ新段階 ····263
難波Ⅴ古段階 ····37, 87, 263, 265
難波Ⅴ中段階 ····263
難波Ⅴ新段階 ····263
「難波型」 ····28, 33, 35, 36, 57, 63, 255, 258, 264
「並び倉」 ····1, 3, 4, 9, 10, 47, 249
軟質施釉陶器 ····131, 132, 134, 141, 155, 159, 169, 170

ね 年輪年代測定 ····84, 85, 207, 208, 261, 262, 263

は 白磁 ····93, 95, 102, 103, 121, 127, 130, 131, 134, 142, 158, 159

ひ 備前焼 ····93, 95, 102, 103, 107, 108, 121, 125, 127, 130, 141, 142, 155, 159, 169
人形(代) ····42, 71, 74, 259

ふ　鞴羽口 ……47, 85, 184
　　葡萄唐草文 ……88, 266, 267

へ　平城宮土器 ……10, 87, 263

ほ　放射性炭素 ……19, 217, 220, 222, 240, 241, 242
　　紡錘車 ……69, 84
　　炮烙 ……126, 130, 131, 133, 141, 155, 169
　　墨書(土器) ……68, 71, 155, 177
　　梵字 ……96, 116
　　梵字文軒丸瓦 ……95

ま　饅頭金物 ……91, 266, 267

み　ミニチュア壺 ……35
　　珉平焼 ……167

む　棟込瓦 ……108, 116

も　木簡 ……6, 42, 71, 74, 85, 96, 199, 250, 259, 261, 263

や　焼塩壺 ……107, 108, 126, 130, 133, 141, 155, 169
　　弥生土器 ……24, 268

る　坩堝 ……184

れ　蓮華文(軒丸瓦) ……88

わ　和同開珎 ……91

〈地名・遺跡名など〉

あ　飛鳥寺 ……36, 253, 261
　　甘橿丘東麓 ……262

お　『大坂御家中屋敷割図』‥120
　　大坂夏の陣 ……10, 13, 14, 98, 103
　　大津宮 ……262

く　楠葉平野山窯 ……36, 261, 264, 265

こ　(法隆寺)綱封蔵 ……47, 249, 267
　　五軒屋敷 ……12, 118, 120, 267
　　五幸町の(文久3年の)
　　大火 ……14, 169

さ　(兵庫県)三条九ノ坪遺跡 ‥263

し　四天王寺 ……35, 36, 262, 264, 265
　　(三重県)城之越遺跡 …251

す　住友銅吹所下層 ……74, 259

そ　『倉庫令』 ……251, 252

た　「太倉」 ……10, 249
　　内裏西方官衙(倉庫群) ‥9, 10, 37, 47, 52, 247, 248, 249, 252, 254, 258

ち　長安城 ……10, 249

な　難波(の)大蔵 ……10, 249, 270
　　難波宮下層遺跡 ……7, 36, 253, 254
　　難波長柄豊碕宮 ……85, 253, 254, 264
　　鳴滝遺跡 ……7, 8

ふ　福島1丁目所在遺跡 131, 133, 169
　　藤原京 ……263, 268

へ　平城宮(京) ……10, 87, 263, 265, 267, 268, 270

ほ　蛍池東遺跡 ……7

み　水落遺跡 ……254, 259, 262, 263
(滋賀県)宮町遺跡 ‥263

も　森の宮遺跡 ……67, 69, 222, 259, 260

や　山田寺下層 ……254, 261, 262
山部王 ……71, 263

わ　倭王権 ……9

〈難波宮跡の調査次数〉

N　NW14次調査 ……258
NW66次調査 ……258
NW69次調査 ……1
NW87次調査 ……7
NW100次調査 ……74, 258
NW87−20次調査 ‥7
NW88−1次調査 …3, 7, 20
NW89−1次調査 …7, 169
NW91−5次調査 …1, 3, 13, 169
NW96−3次調査 …1, 3, 4, 13, 169
NW96−29次調査 ‥2, 4, 13, 58, 93
NW97−3次調査 …2, 4, 13, 58, 169, 273

The Excavation Reports
of
the Naniwa Palace Site

(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume XI)

A Report of Excavations
undertaken at the Government Offices area
to the west of the Imperial Residence
in the Former Naniwa Palace
between 1991 and 1998
in Osaka, Japan

March 2000

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

SA : Palisade or fence
SB : Building
SD : Ditch
SG : Spring utilized facility
SE : Well
SK : Pit
SP : Posthole
SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Background and Progress 1
1. Background of research 1
2. Progress of research 3

Chapter II Research results to date 7

Chapter III Investigation results 13
1. Excavated area and the Stratigraphy 13
2. Features and artifacts prior to the construction of the Naniwa Palace 20
3. Features and artifacts of the Naniwa Palace phase 37
4. Features and artifacts of the Muromachi period 92
5. Features and artifacts of the Toyotomi phase 97
6. Features and artifacts of the Edo period 118

Chapter IV Analysis and examination of the excavation data 185
1. Identification of stone from the water supply facility 185
2. Faunal remains 196
3. Dendrochronological study of wooden objects from the water supply facility 207
4. Identification of wooden objects from the water supply facility 209
5. Palaeo-environmental analysis of the remains from the water supply facility 217
6. Palaeomagnetic dating 245

Chapter V Examination of features and artifacts 247
1. Water supply facility and the cluster of Warehouses to the west of the *Dairi* in the Former Naniwa Palace 247
2. Examination of pottery from the Naniwa area and historical background 253
3. Conclusion of the investigation results 266

Appendix: Preservation and utilization of features and remains 269
1. Preservation and exhibition of the excavated features 269
2. Preservation treatment of the wooden objects 273

Bibliography and References 276

Postscript

Index

Contents and Summary (in English)

Reference Card

SUMMARY

Introduction -The Naniwa Palace site-

The Naniwa Palace site is situated in Osaka city, on the north of the Uemachi Terrace. Excavation at this site have been continued for more than forty years since 1954. These investigations revealed the palace which is divided into two phases, the Former and the Latter. The Former Naniwa Palace was the first Chinese style palace and capital built in Japan, is likely to be *"Naniwa-no-Nagara Toyosaki-no-miya"* established by Emperor Kotoku. And the Latter Naniwa Palace was built by Emperor Shomu in the Nara period.

Background and progress

Between the fiscal 1987-89, excavations were carried out at the northwest area of the Naniwa Palace. Features and remains from the Kofun to Edo period were found. Features prior to the Naniwa Palace phase include the remains of a 5th century large-scale Warehouse complex and evidence of a village dated to between the 6th and former half of the 7th century. The remains of Warehouse complex containing the long *"Narabikura"* were unearthed in the western side of the Former Naniwa Palace's *Dairi* (Imperial Residence). In addition to this, small-scale buildings, ditches, pits and a cremation grave in the Latter Naniwa Palace phase were found. A large number of features and remains dating to between the Ishiyama Hongan-ji phase and the Edo period were also found. Remains of the Toyotomi phase, including ditches, walls and a large number of gold leaf roof-tiles, have been interpreted as the mansion of a feudal lord. Similarly, the features of an Edo period residential area were identified as the so-called "Goken-Yashiki". This structure, recorded in Edo period documents, was the residence of the vassals of Osaka Castle's ruler. The results of these excavations were summarized in "The Excavation Report of the Naniwa Palace Site: Volume IX", published in June 1992.

Following these excavations, the construction of a new NHK broadcasting building with an adjoining new historical museum facility was announced. The construction work enabled researchers to investigate previously inaccessible areas to the north of the 1987-89 investigation area, and four excavations took place: NW91-5 (June 1st – August 22nd 1991) in fiscal 1991, NW96-3 (May 7th – July 23rd) and NW96-29 (February 28th – March 31st 1997) in fiscal 1996, and NW97-3 (May 6th 1997 – March 17th 1998) in fiscal 1997. This report details the results of these investigations.

Investigation results

Current investigation results include the materials from between the Jomon and Edo periods.

The most significant was the discovery of a stone water-supply facility of the Former Naniwa Palace constructed in a valley in the northwest of the research area. Prior to this discovery there have been no features related to the supply of water to the Palace and built with large ston , maximum 1 t in weight. This facility is an unprecedented scale, and much larger than the features of this kind found in Asuka area. A large number of pottery and wooden objects, containing wooden tablet, were found in the strata and other archaeological features associated with the water-supply facility.

An examination of the remains of the water-supply facility indicates that it had been a part of the Palace from the beginning of construction process and had probably been included in the original plan of the Palace with the government offices, the cluster of warehouses, in the western side of the *Dairi*. The construction of this facility within the Imperial Residence has been seen to indicate that it may have held ceremonial significance and have been considered to be a sacred place. With the results of dendrochronological study on the wooden objects from the water-supply facility and the chronological examination of the pottery vessels in this area, dating to between the 5th and 8th centuries, the construction of this facility and the Former Naniwa Palace have been presumed to be the middle of the 7th century. As a result, the Former Naniwa Palace have been identified as the *"Naniwa-no-Nagara Toyosaki-no-miya"* which is documented in the Chronicle of Japan (*"Nihonshoki"*), established by Emperor Kotoku after the Taika Reform in 645A.D.

Additionally, fragments of the Shibi (tailed ridge-end tile) bearing arabesque pattern of grapevines associated with the Latter Naniwa Palace were found, and Late Toyotomi phase to Edo period ceramic vessels were discovered in sufficient quantities to establish a detailed chronological sequence in this area.

Preservation and utilization of features and remains

The excavated features of the 5th century Warehouse complex and the Former Naniwa Palace have been planned to be preserved. These features will be placed on public display within the NHK building currently under constructed as well as within the new historical museum facility, they will be added to existing material including the Naniwa historical Park to establish a new exhibition.

The wooden material excavated from the water-supply facility and other places, has also been subjected to preservation treatment to make it available to both exhibition and research. They were preserved using Sugar Alcohol method.

Further reading

Nakao, Y.
1995 *A Study of the Naniwa Palace Site.* Yoshikawa Kobunkan , Tokyo,(In Japanese)

Osaka City Cultural Properties Association
1992 *The Excavation Report of the Naniwa Palace Site*: Volume IX, Osaka. (In Japanese, with English summary)

Osaka City Museum
1995 *Speccial Exhibition "1350th Anniversary Celebration of NANIWA-no-miya Palace"* (exhibition catalogue)

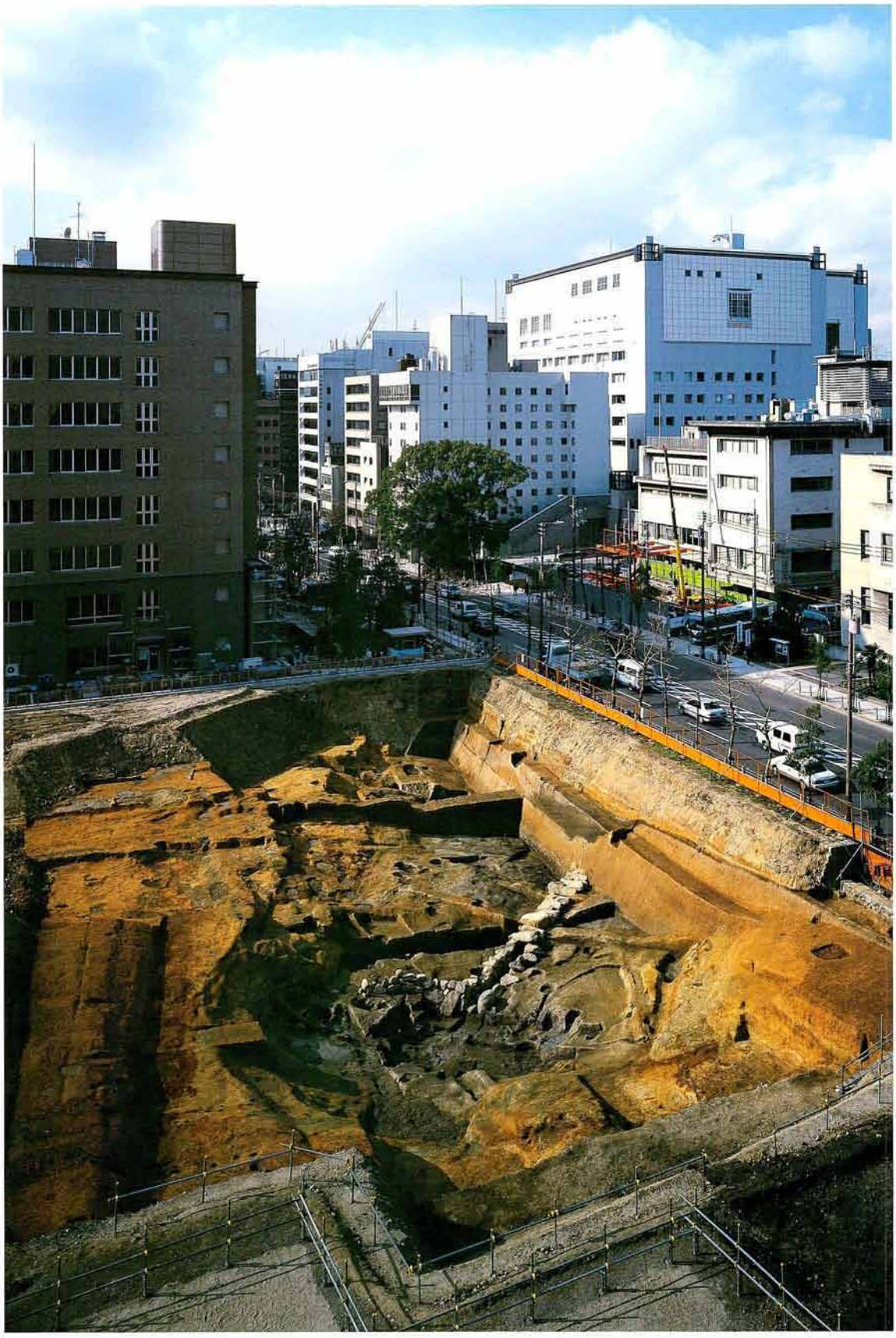
報告書抄録

ふりがな	なにわきゅうしのけんきゅうだいじゅういち
書名	難波宮址の研究第十一
副書名	前期難波宮内裏西方官衙地域の調査
編著者名	佐藤隆・京嶋覚・南秀雄・小倉徹也・辻美紀・平井和・森毅・川端清司・池田研・樽野博幸・光谷拓実・兵頭政幸・金子雅一・植木久・伊藤幸司・鳥居信子・宮本康治・Robert Condon・田中清美
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所在地	〒540-0006　大阪市中央区法円坂１－１－35　　TEL 06−6943−6833
発行年月日	西暦2000年３月31日

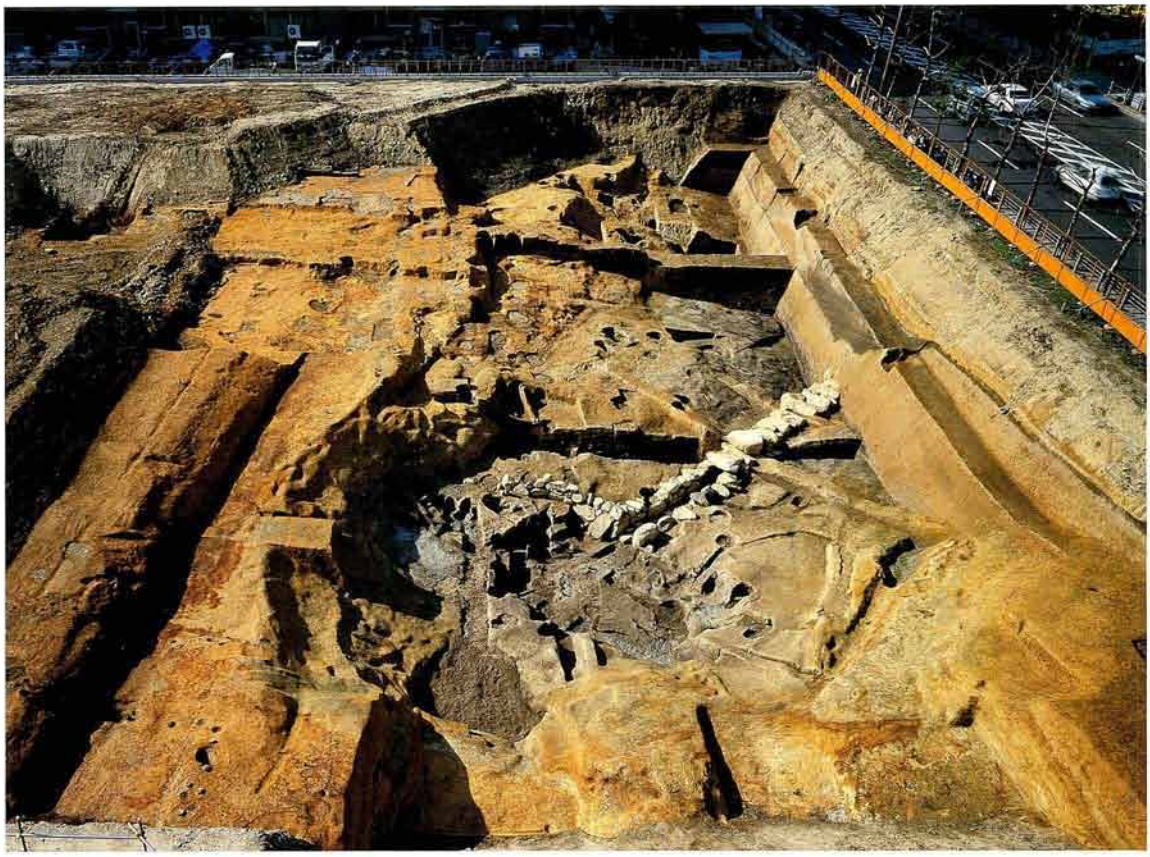
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なにわのみやあと 難波宮跡	おおさかしちゅうおうく 大阪市中央区 おおてまえ 大手前４丁目	27128	−	34°40′38″	135°31′34″	19910601~19980317	5,070㎡	ＮＨＫ新放送会館および新博物館建設。計４件

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
難波宮跡	集落	縄文時代	なし	石鏃
		弥生時代	なし	弥生土器・石鏃
		古墳時代	掘立柱建物	土師器・須恵器・滑石製品
	都城	飛鳥時代	難波宮造営前 掘立柱建物・溝・土壙 前期難波宮 石組み溝・泉施設・掘立柱建物・塀・炉	土師器・須恵器・新羅陶質土器・土馬・土錘・木簡・木製品・石製品・金属製品
		奈良時代	後期難波宮 柱穴・土壙	土師器・須恵器・瓦・金属製品
	集落	平安～鎌倉時代	なし	土師器・瓦器・陶磁器
	集落・寺院	室町時代	堀	土師器・陶磁器・瓦・木簡
大坂城跡	城郭	豊臣期	石列・道路・溝・井戸・土壙	土師器・陶磁器・瓦・石製品
		江戸時代	溝・土壙	土師器・陶磁器・瓦・木製品・石製品

原色図版



谷と水利施設全景（東から）



水利施設（東から）

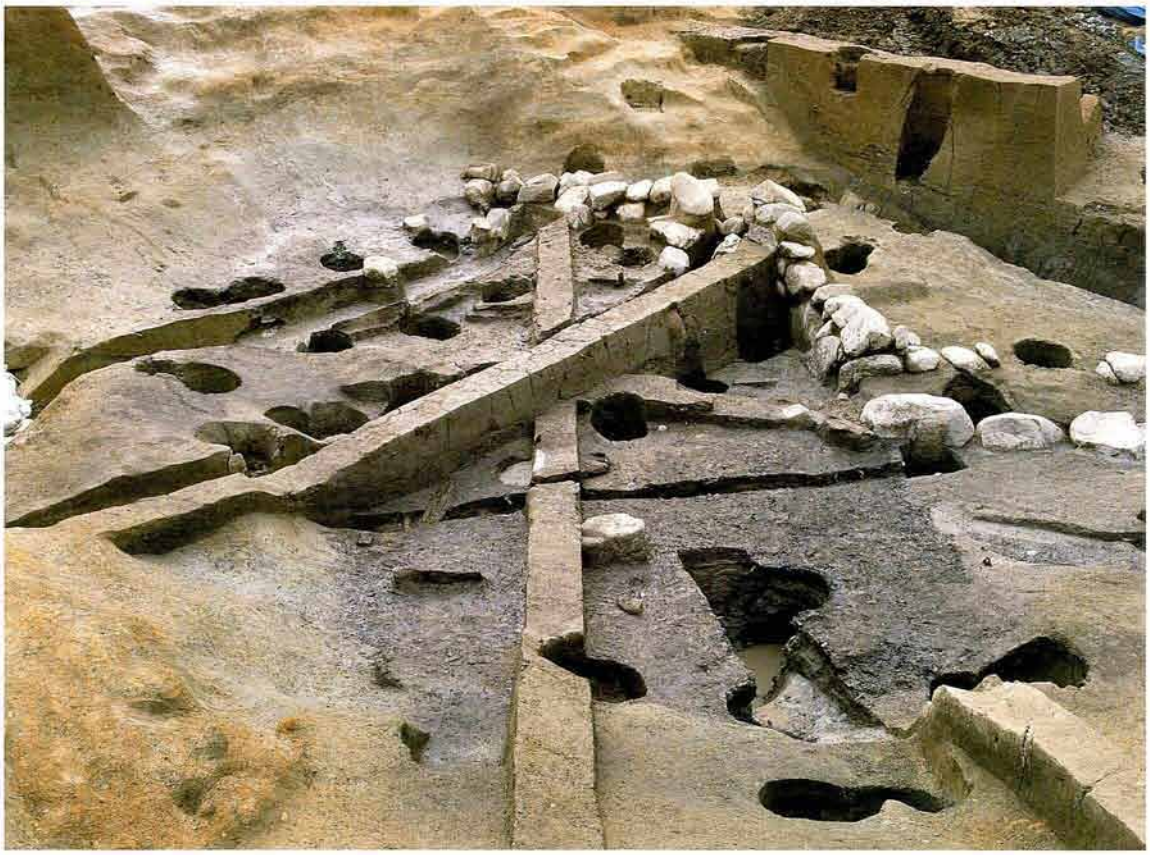


水利施設（南から）

原色図版三　前期難波宮の遺構

石組み溝SD301（南東から）

同右　蓋石除去後



泉施設SG301検出状況（北東から）



泉施設SG301検出状況（北から）



4 E区北壁断面



4 E区南北アゼNo.2 東壁断面(北東から)



石組み溝SD301と谷の横断面（南東から）



泉施設SG301断面（南東から）

2E・3E区検出遺構（西から）

2E・3E区検出遺構（東から）

原色図版八　難波宮造営前の土器



原色図版九　前期難波宮造営期の土器





木簡



祭祀具



漆容器



鞴羽口

原色図版一二　豊臣後期の陶磁器・土器





中国製磁器



金箔押飾瓦

原色図版一四　江戸時代中期の陶磁器・土器



江戸時代末期の陶磁器・土器





土製玩具

図　　版

図版一　調査地遠景・旧体育館基礎部分検出遺構



調査地遠景(南から)



4C・4D区旧体育館基礎部分検出遺構(南から)



3E・4E区旧体育館基礎部分検出遺構(東から)



4E区北壁(南から)



4E区北壁下部(南から)



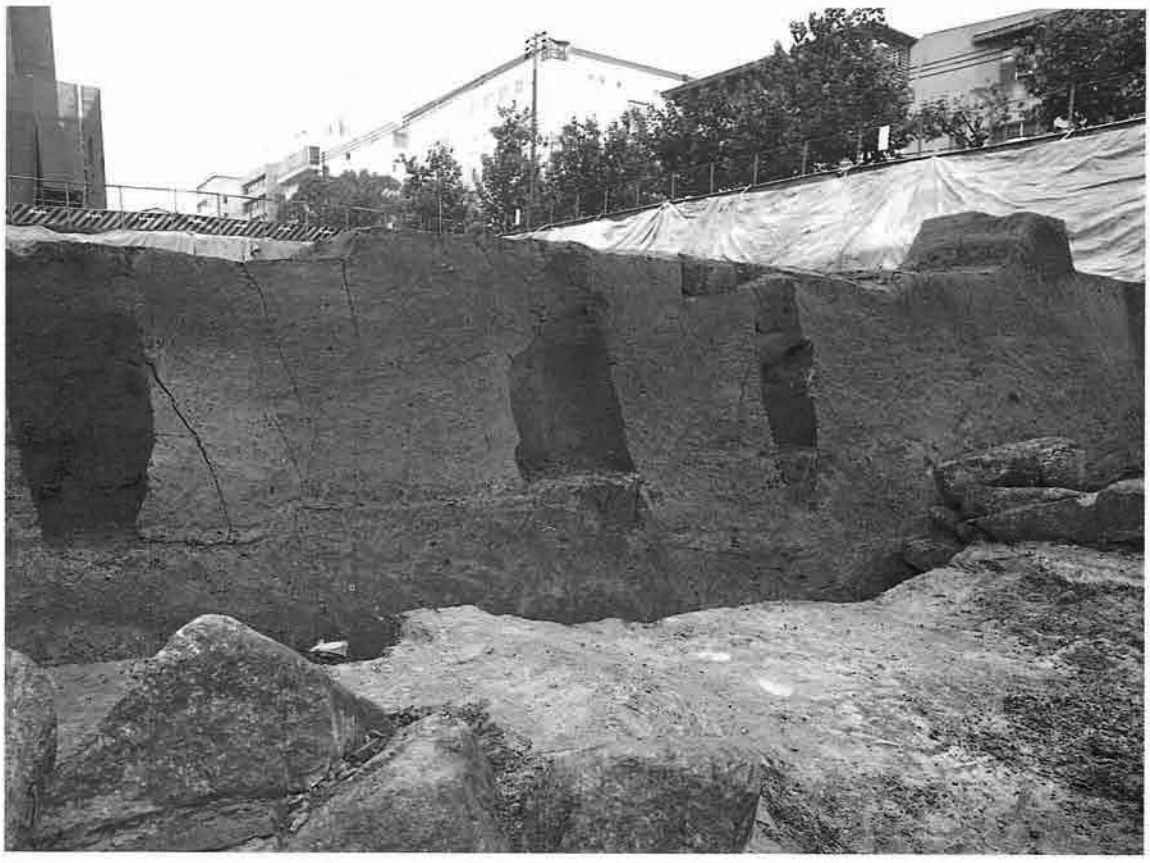
4 E区南北アゼNo.2 東壁南部(北東から)



4 E区南北アゼNo.2 東壁北部(東から)



谷埋土北東肩部(南東から)



4 E区南北アゼNo 1 東壁(南東から)

1C・1D区調査区全景
（上空から）





同調査区北半部（南から）

図版六　地山面検出遺構



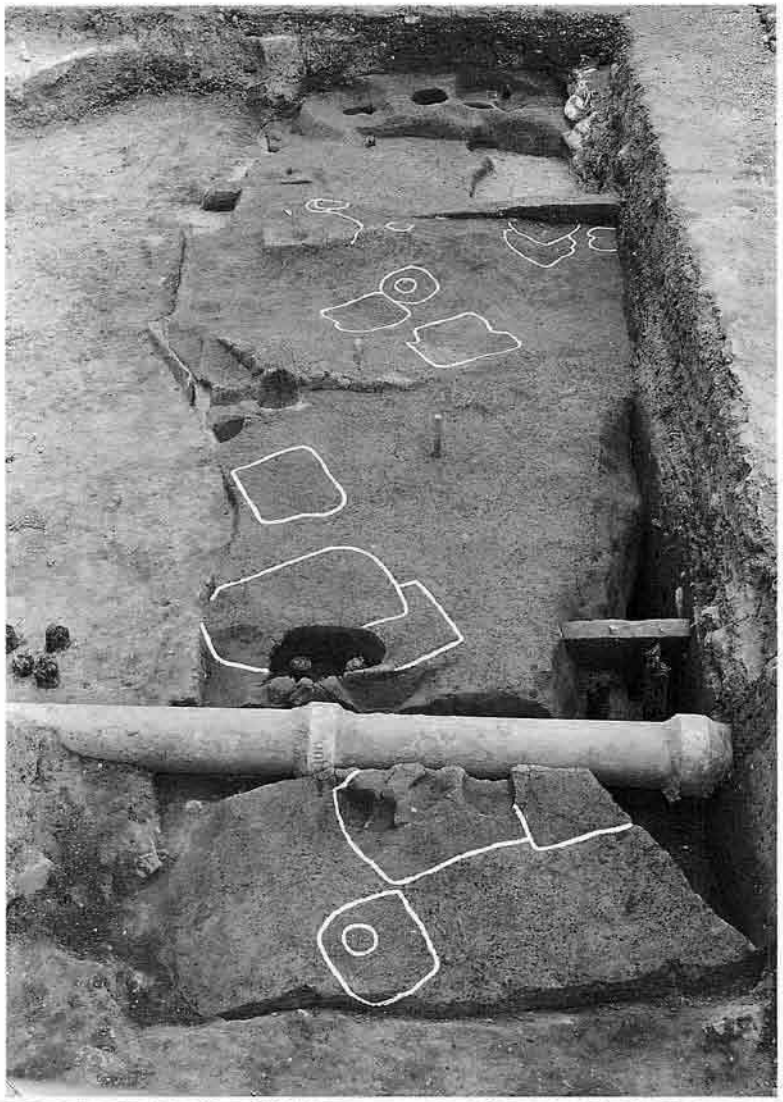
１D･１E区調査区全景
（南から）

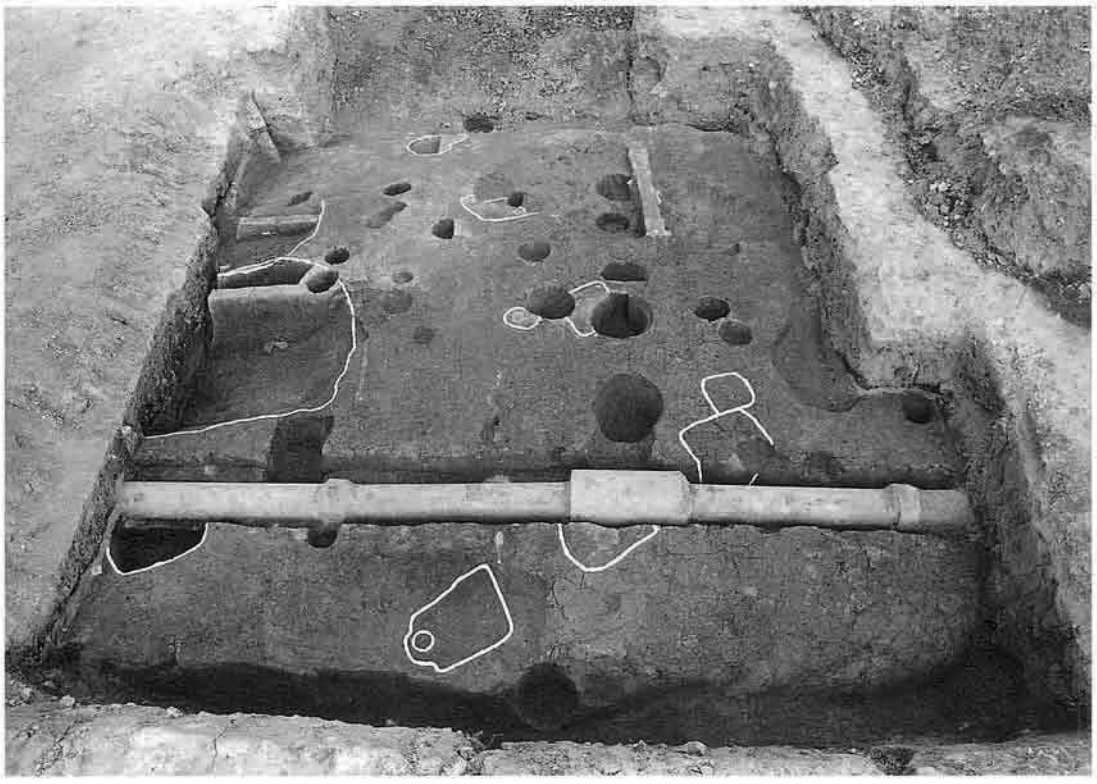


同調査区北半部（南から）

図版七　地山面検出遺構

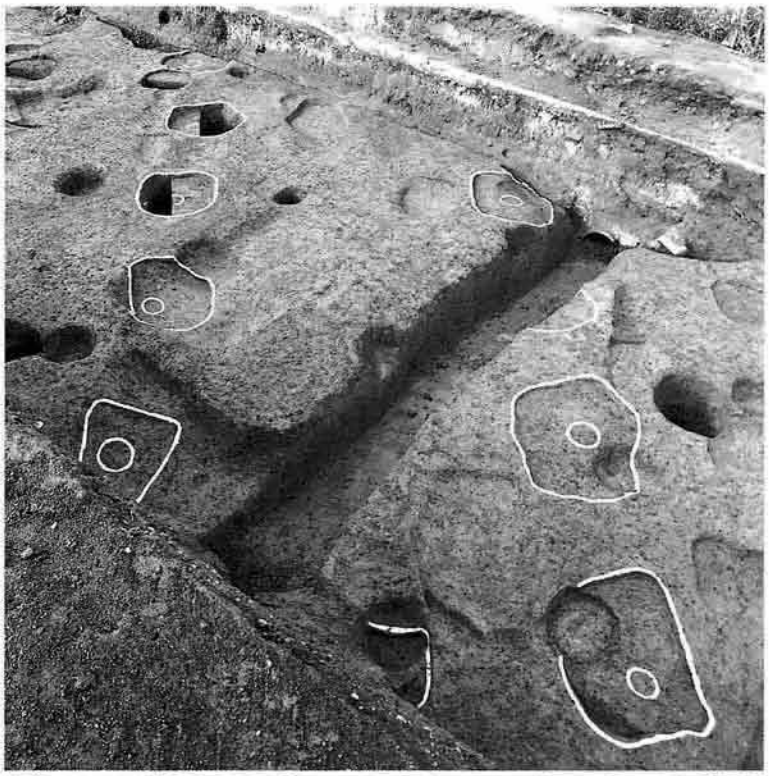
２Ｄ区地山面検出遺構
（西から）





２Ｃ区地山面検出遺構（西から）

図版八　難波宮造営前の遺構



SB281（南東から）

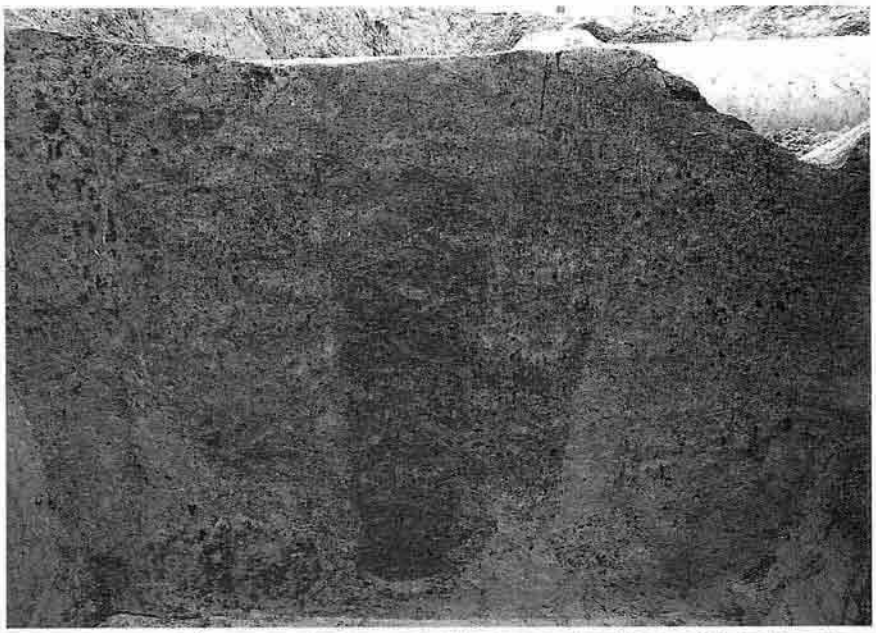


SB280（南東から）



SB285（北西から）

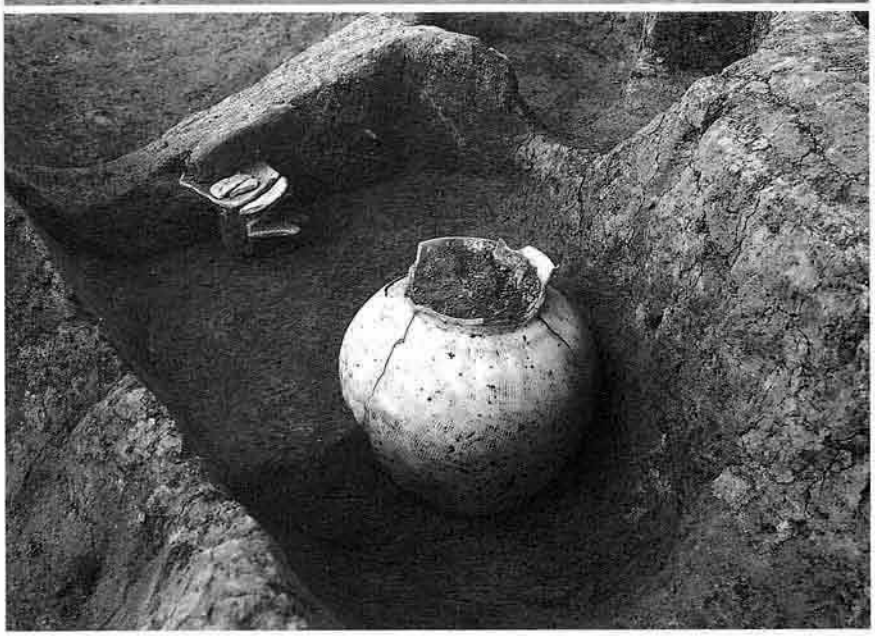
SB287柱穴断面
（北東から）



第8b層土器出土状況
（南東から）



SD203土器出土状況
（東から）



図版一〇　前期難波宮の遺構　SD301



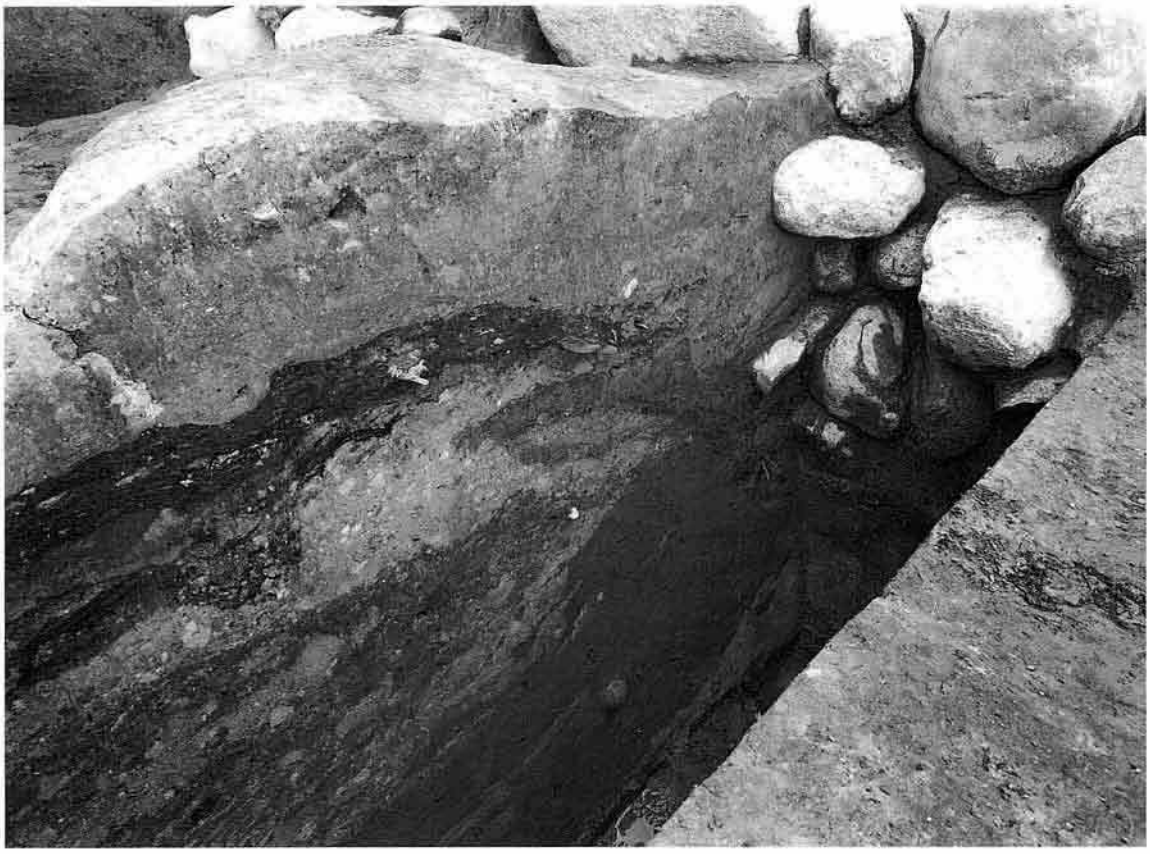
SD301検出時（南東から）



SD301（南東から）



断割りNo.2断面（東から）



断割りNo.2断面（南から）

図版一二　前期難波宮の遺構　SD301



掘形北東側（東から）



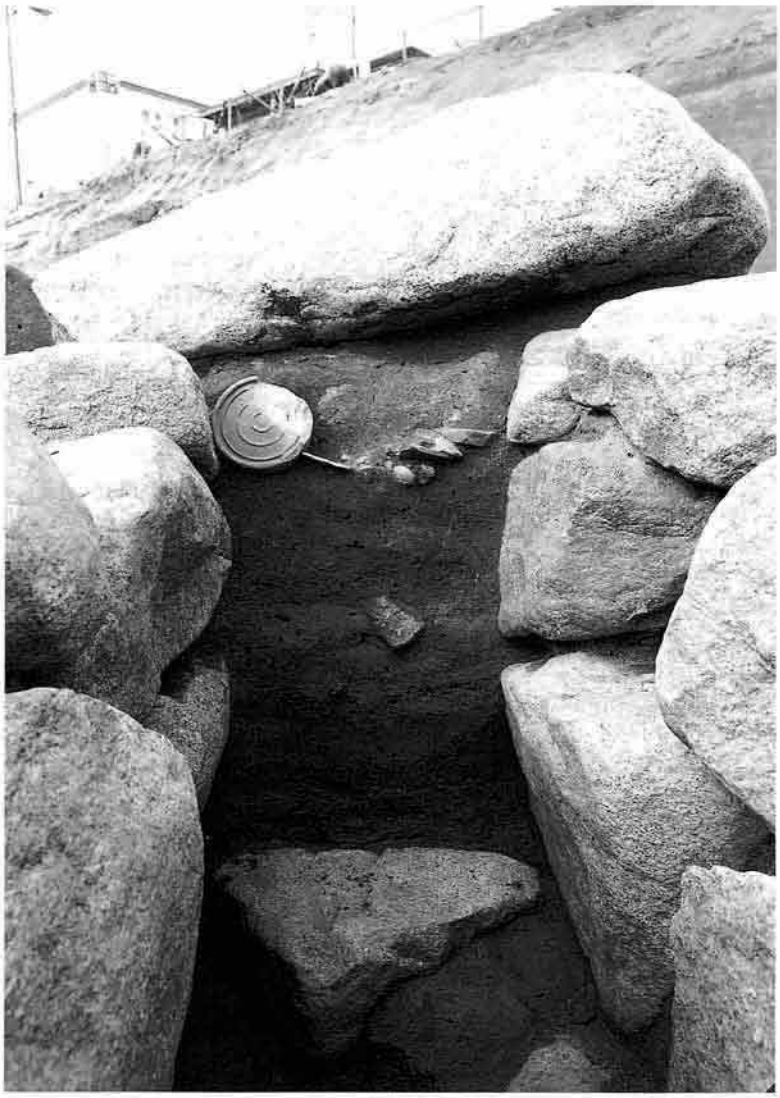
断割りNo.1断面（南から）

図版一三　前期難波宮の遺構　SD301

断割り No.1 断面（東から）

断割り No.2 断面（南から）

図版一四　前期難波宮の遺構　SD301



開口部堆積状況（南東から）



開渠部堆積状況（南東から）

図版一五　前期難波宮の遺構　ＳＤ３０１

蓋石撤去前（北西から）

蓋石撤去後（北西から）

図版一六　前期難波宮の遺構　SD301

蓋石撤去後（北西から）

蓋石撤去後　奥（北西から）

蓋石下堆積状況(南から)





蓋石下堆積状況(南西から)



西外断割り（北から）



左：北東肩断割り（西から）
右：南西肩断割り（北から）



堆積状況（北西から）

木枠１掘削時
（北西から）



木枠１（北から）



木枠２（北から）



図版二〇　前期難波宮の遺構　SG301周辺



木枠３検出時（北から）



木枠３（北から）



木枠３最下段（東から）

木枠4（北西から）







左：SD302（南東から）
右：SD303（南東から）



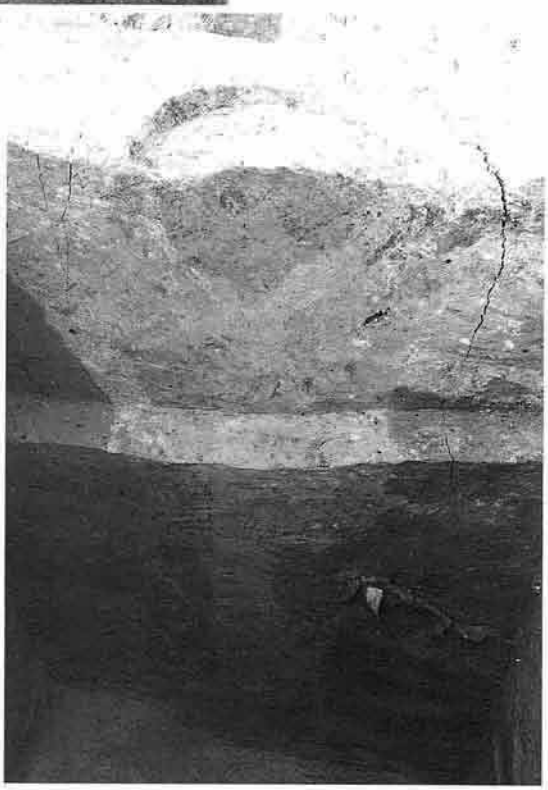
SX301（南から）



柱抜取穴検出状況（東から）



柱穴11断面



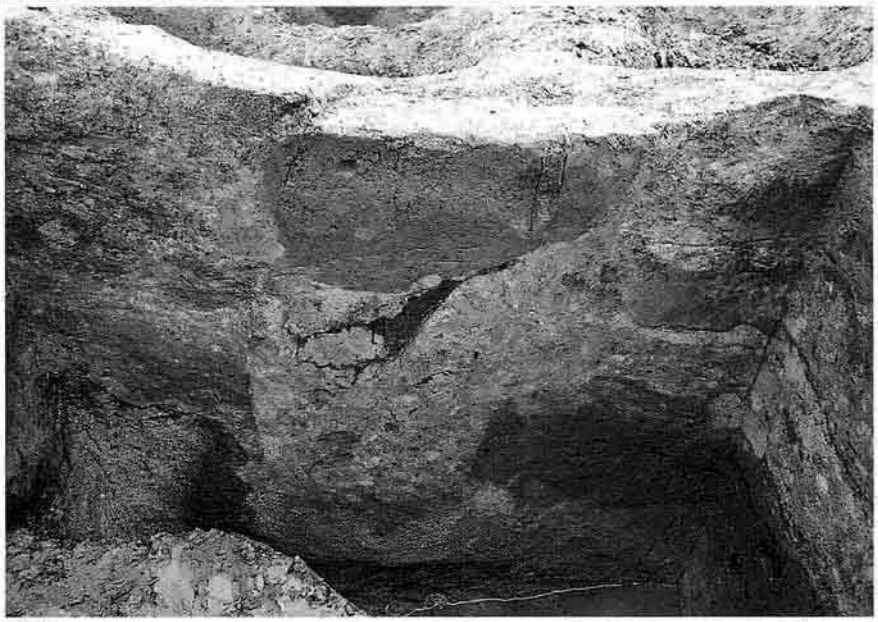
柱穴４断面

図版二三　前期難波宮の遺構　SB310

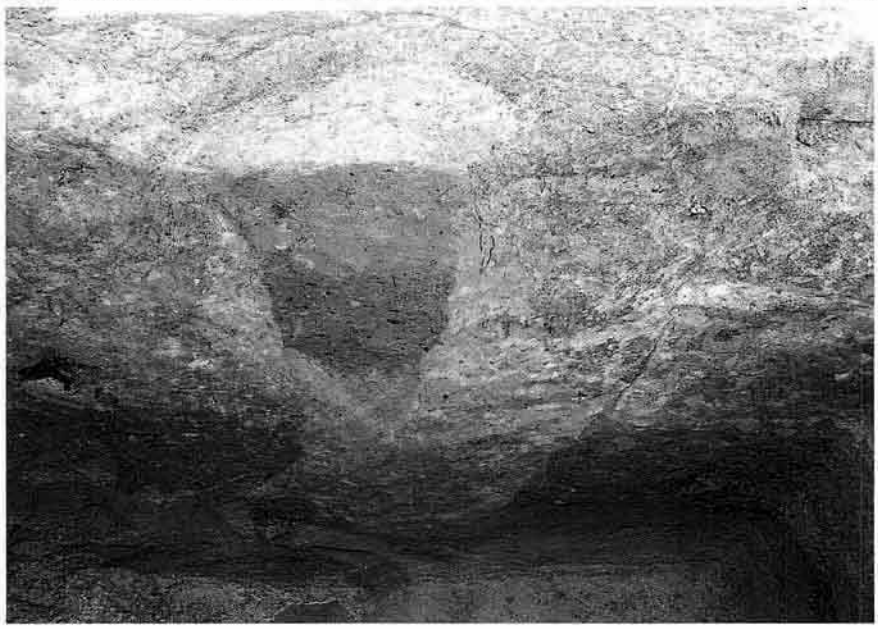
柱穴５断面



柱穴７断面



柱穴８断面



図版二四　前期難波宮の遺構　SB301・SA301



SB301東端部（東から）



SA301（南から）

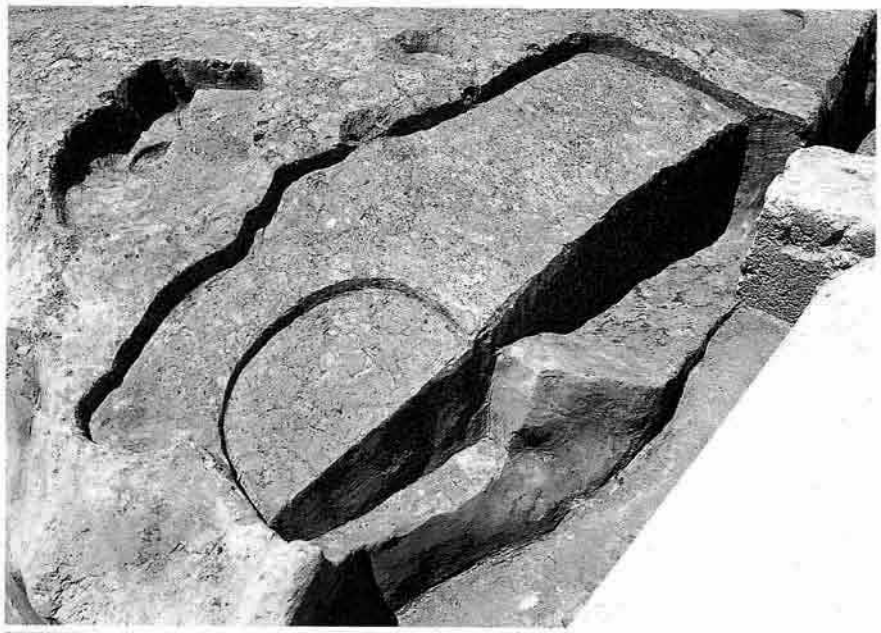


SA303（南西から）

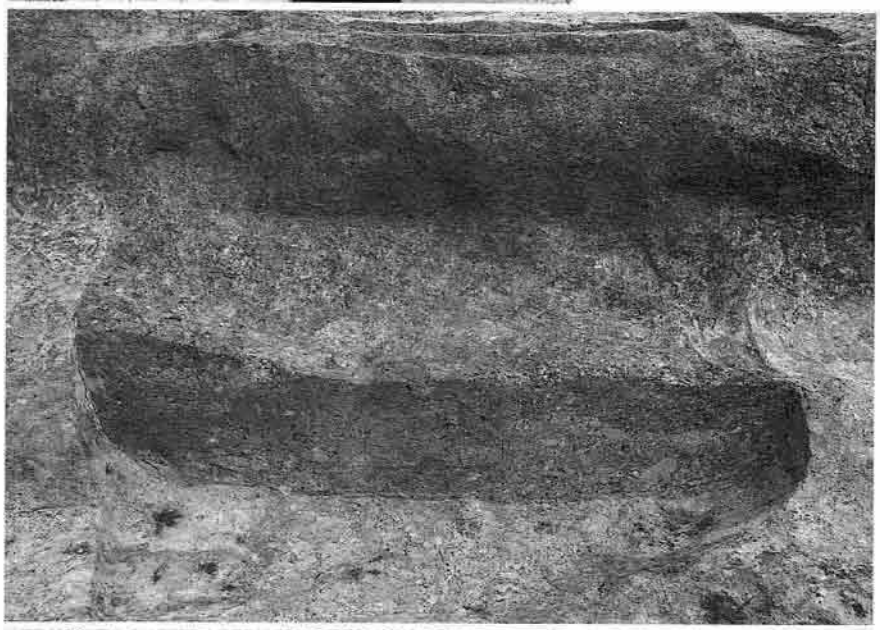


SA303（南から）

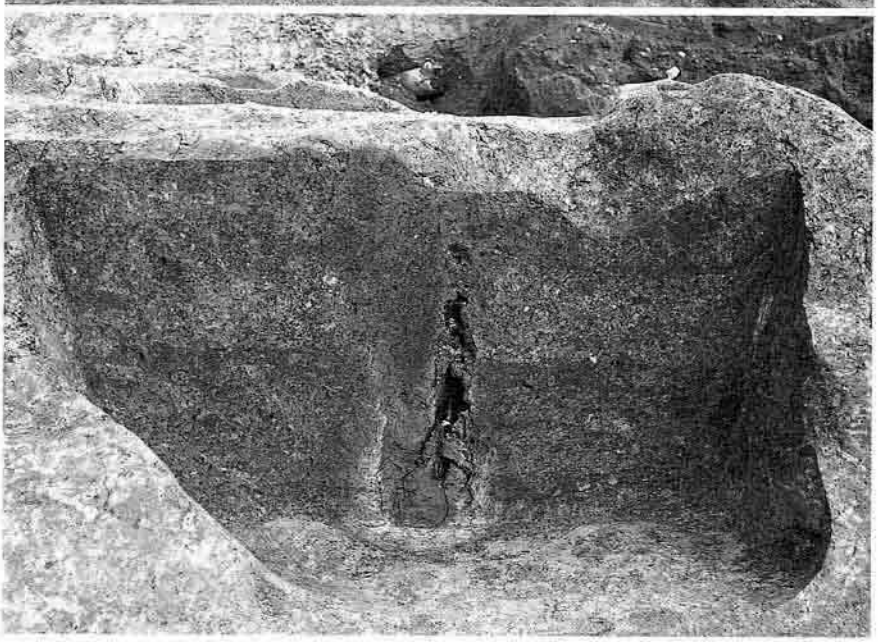
図版二六　前期難波宮の遺構　SB301・SA303



SB301
（南東隅柱穴断面）

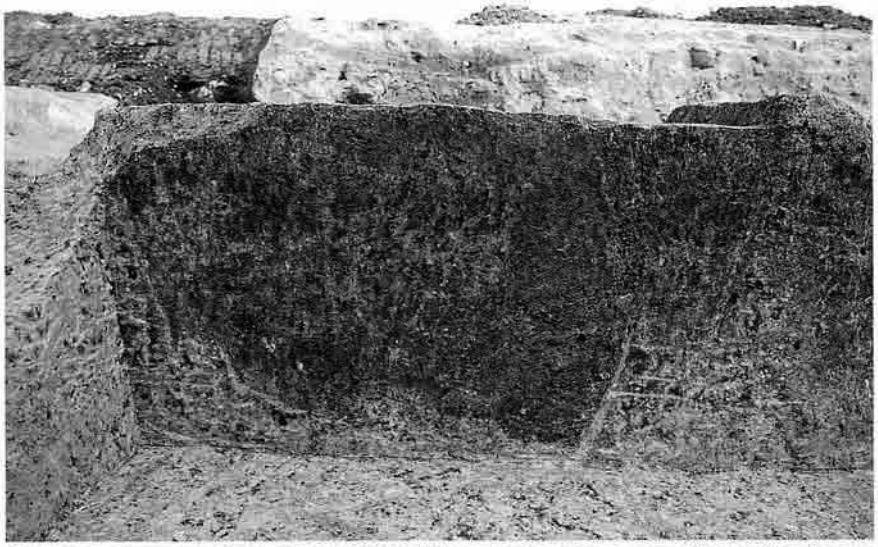


SA303
（柱穴5断面）

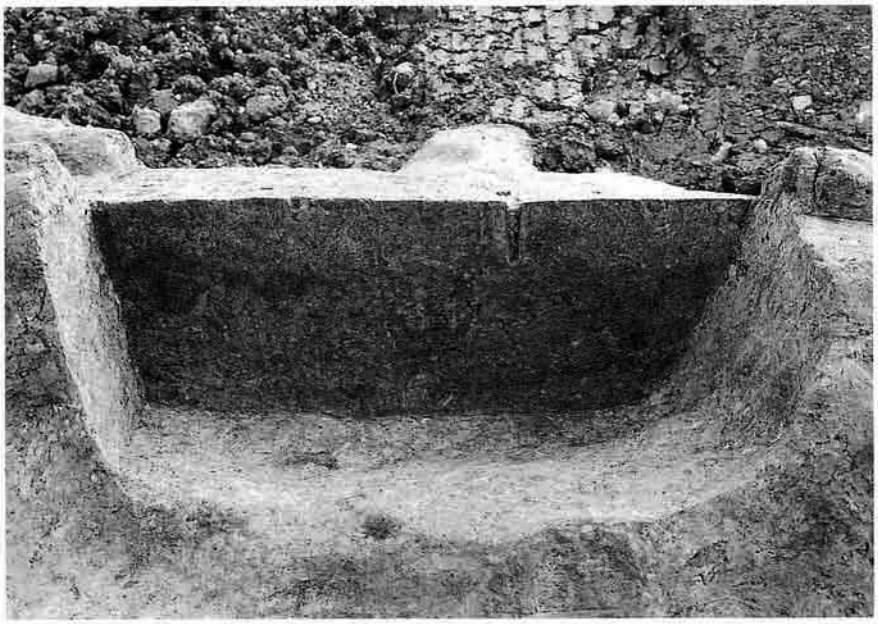


SA303
（柱穴8断面）

SA303
（柱穴９断面）



SA303
（柱穴10断面）



SA303
（柱穴14断面）





SD530（南から）



石列1・2とSF501・502（南東から）

図版二九　豊臣期の遺構　屋敷地の区画

石列1ＳＳＦ５０１(東から)

石列2ＳＳＦ５０２(北から)

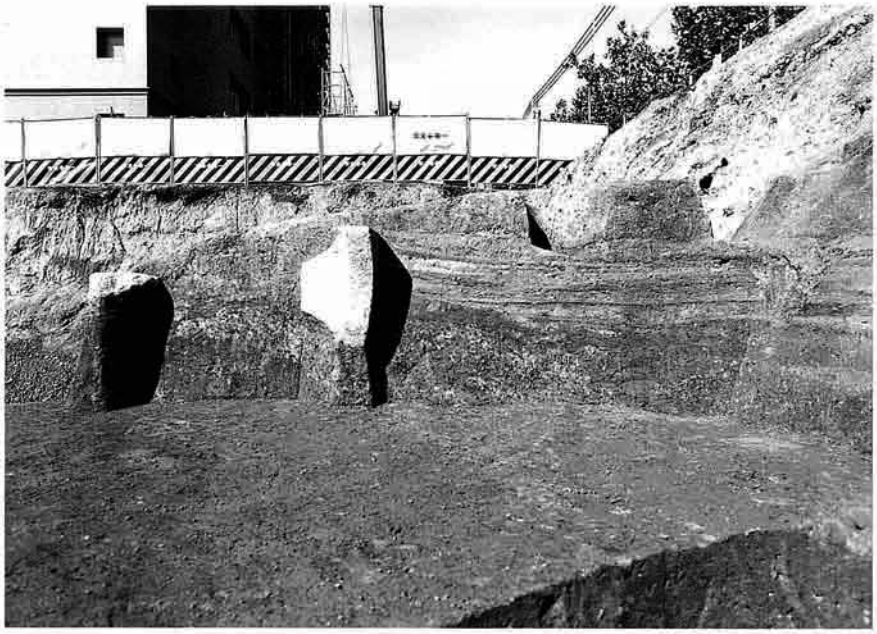


SD540（西から）



SA521とSD541（南から）

石列1・SF501断面（東から）



4D・4E区南北アゼ（東から）

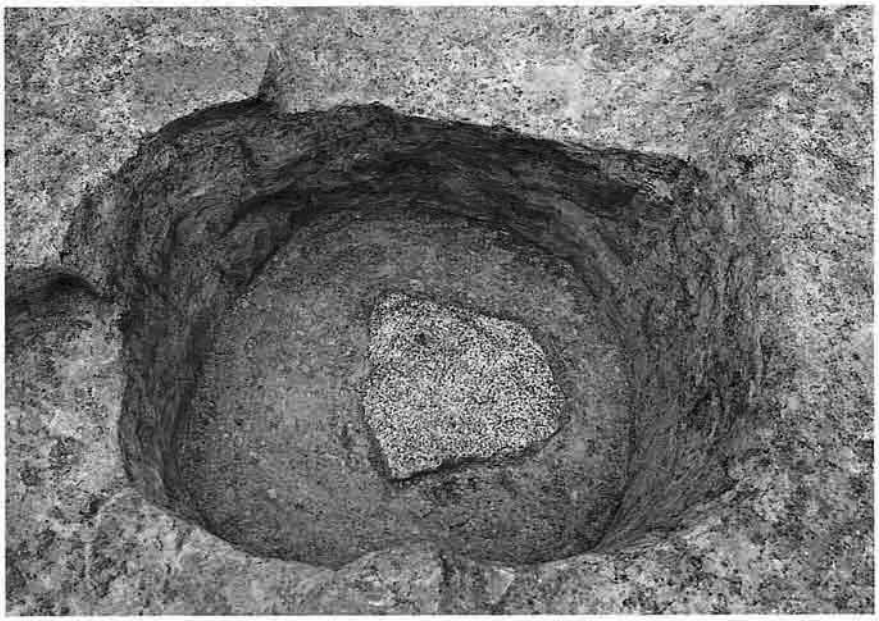


SD542（南から）





SE541（北から）

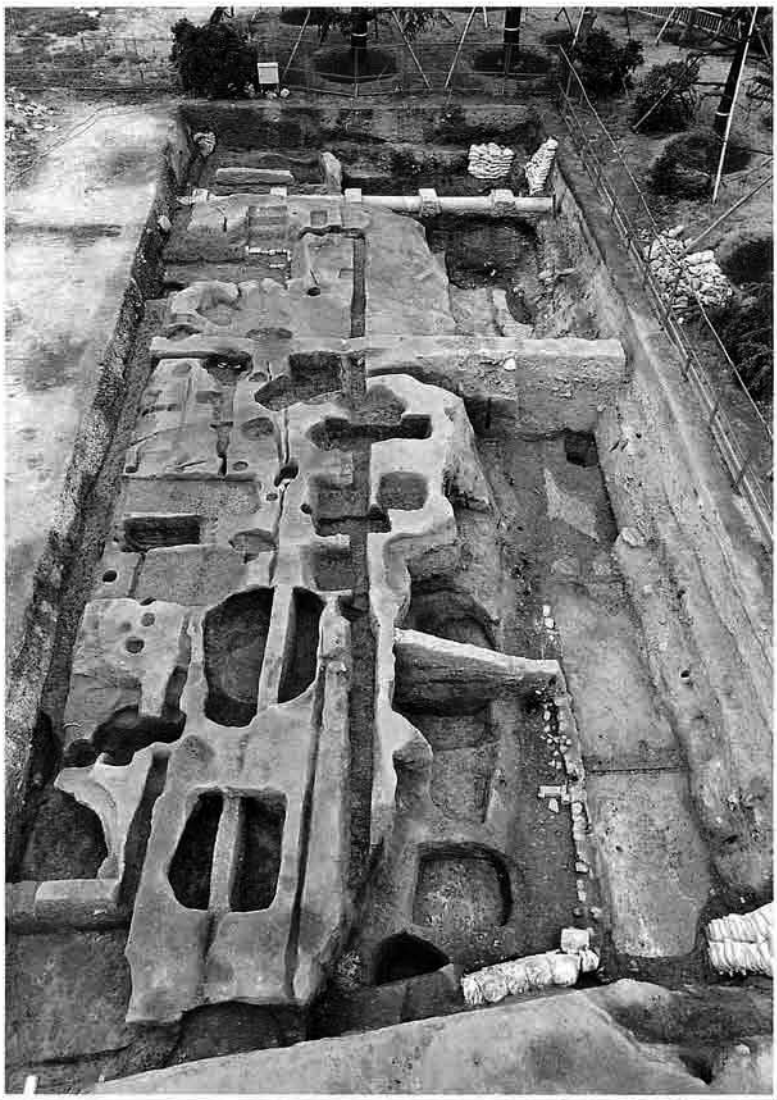


SP501（南から）



SK569（北から）

1D・1E区調査区全景
（南から）





1C・1D区調査区南半部第1面（南から）

図版三四　江戸時代の遺構



SD730A（南から）



SK732（南西から）



SK797断面（西から）

SK801断面（東から）



SK804断面（北から）



SK790（南東から）



図版三六　難波宮造営前の土器　SD203・第8b層他



37



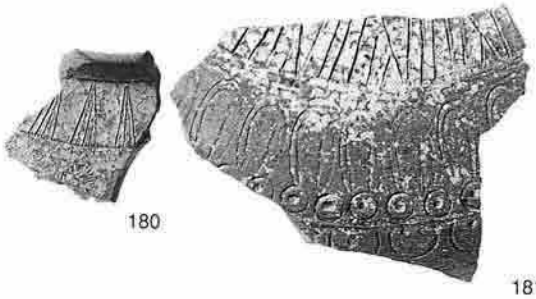
43



44



51



180　181



60



64



68



67



69

SD203(37・43・44・51)　SK250(60)　第8b層(64・67～69)　第8a層(181)　その他(180)

図版三七　難波宮造営前の土器・石製品　第8b層


72

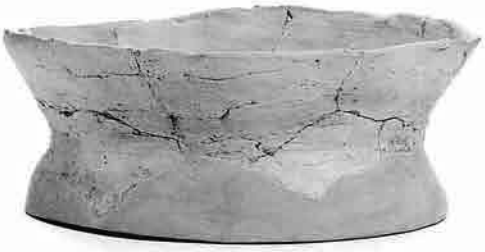

71


75


89


80


82


85


146

第8b層(71・72・75・80・82・85・89・146)

図版三八　難波宮造営前の土器　第8b層


91


92


93


95


96


97


98


99


102


100


130

第8b層(91～93・95～100・102・130)

図版三九　難波宮造営前の土器　第8b層


105


106


107


108


109


110


112


113


114


116


117


118


119


121

第8b層(105～110・112～114・116～119・121)

図版四〇　難波宮造営前の土器　第8b層



123



124



125



129



134



145



131



139



144

第8b層(123～125・129・131・134・139・144・145)


147


148


155


156


154


161


166


167


168


169


175

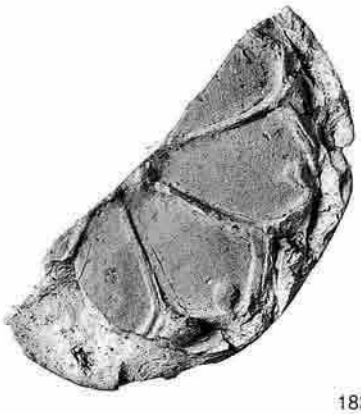
第8a層(147・148・154～156・161・166～169・175)

図版四二　難波宮造営前の瓦





184



183



186



2001





185





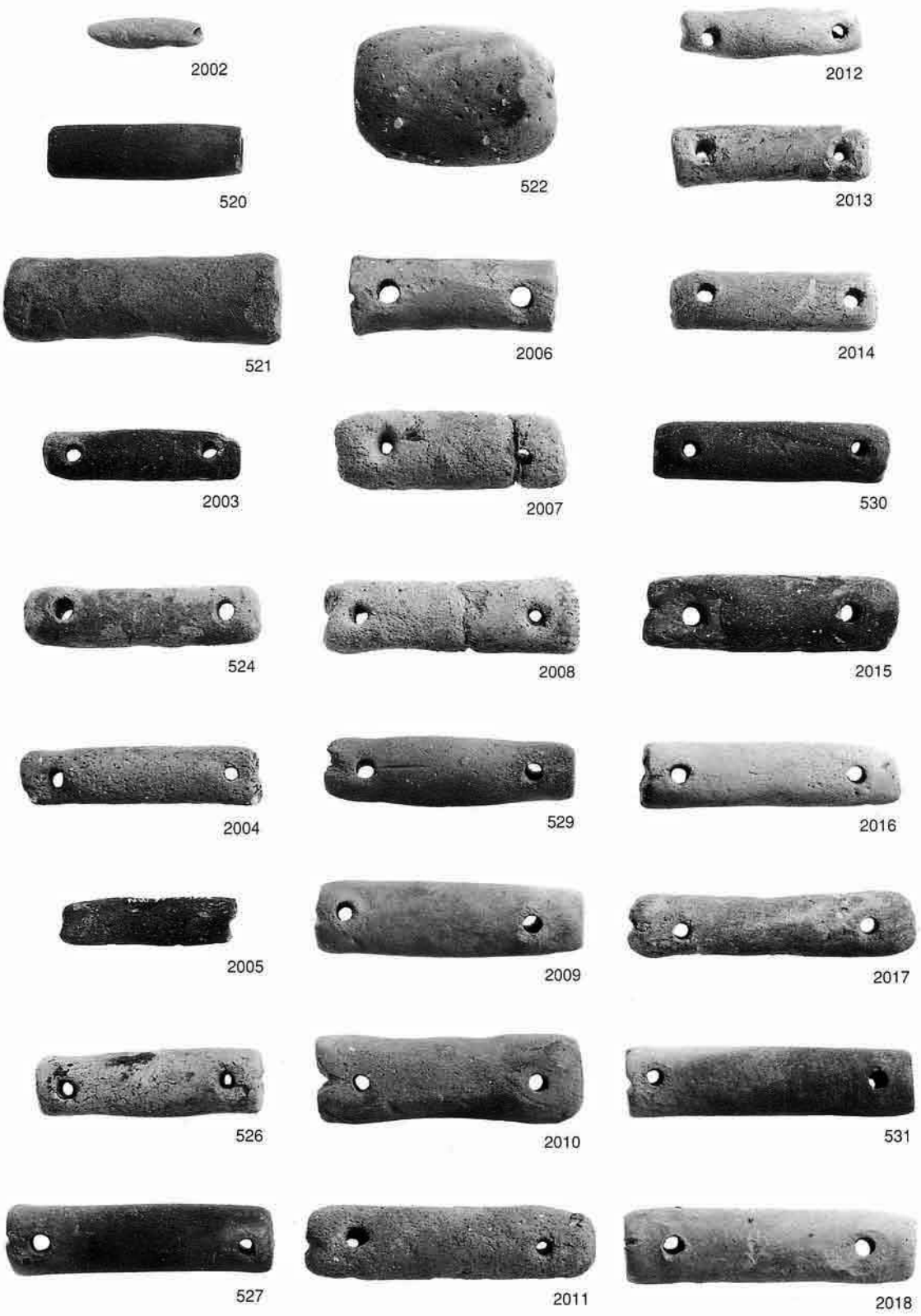
187





188

第7c層(183・187・188)　第7a層(184・185・2001)　SK421(186)



SB243(2008)　SA303(526・530)　SB401(2013)　第8a層(2016)　第7c層(531・2005・2006・2009・2010・2012・2018)　第7b層(520・529)　第7a層(2004・2011・2015・2017)　第6a層(521・524・527)　第5c層(522)　第5b層(2014)　第5a層(2003)　第4a層(2002)　その他(2007)

図版四四　前期難波宮期の土器　第7c層


193


200


205


203


201


229


233


235


232


241


238


240


242

第7c層(193・200・201・203・205・229・232・233・235・238・240～242)

図版四五　前期難波宮期の土器　第7c層



245



246



243



248



247



249



254



250



258



256



265



269

第7c層(243・245～250・254・256・258・265・269)

図版四六　前期難波宮期の土器　第7c層



259



262



261



263



264



268



270

第7c層(259・261～264・268・270)

図版四七　前期難波宮期の土器　第7b層他



274



281



284



292



293



289



308



508



2019

第7b層(274・281・284・289・292・293・308)　第6a層(508)　木枠3(2019)

図版四八　前期難波宮期の土器　第7a層


325


318

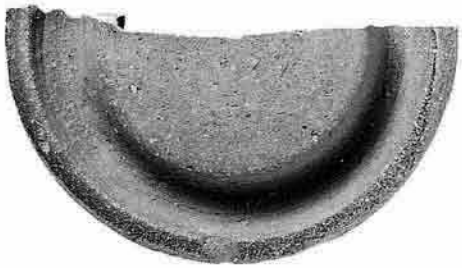

336

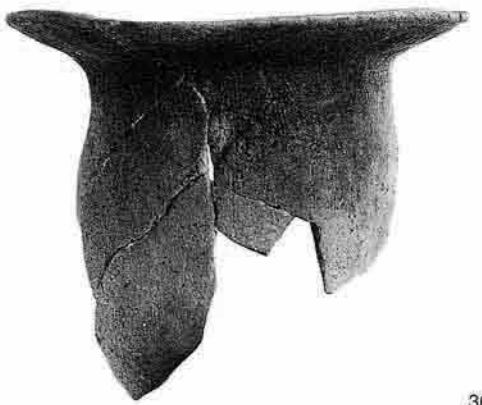

352


340


345


351




364


455


366


450

第7a層(318・325・336・340・345・351・352・364・366・450・455)

図版四九　前期難波宮期の土器　第7a層


374


370


378


368


372


376


399


431


426


395


410


405


414


435


415

第7a層(368・370・372・374・376・378・395・399・405・410・414・415・426・431・435)

図版五〇　前期難波宮期の土器　第7a層


379


383


393


390


382


391


477


384


445


444


446


457


469

第7a層(379・382～384・390・391・393・444～446・457・469・477)

図版五一　難波宮造営前～前期難波宮期の土製品・石製品・金属製品


518


182



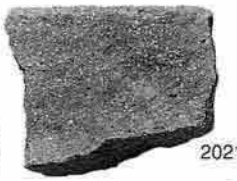

519


620


619


621


2020

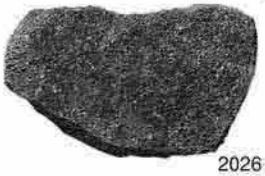

2021


2024


2025

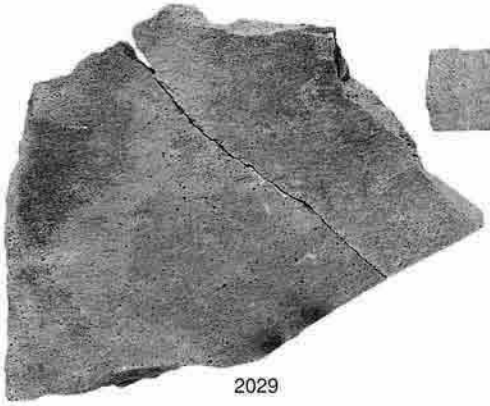

2022

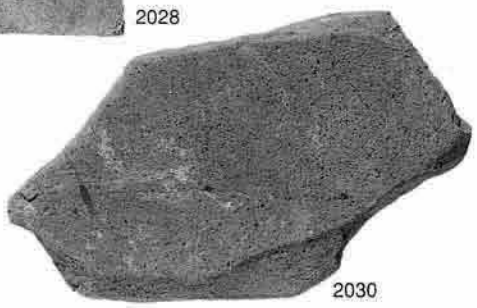

2023


2026


2027

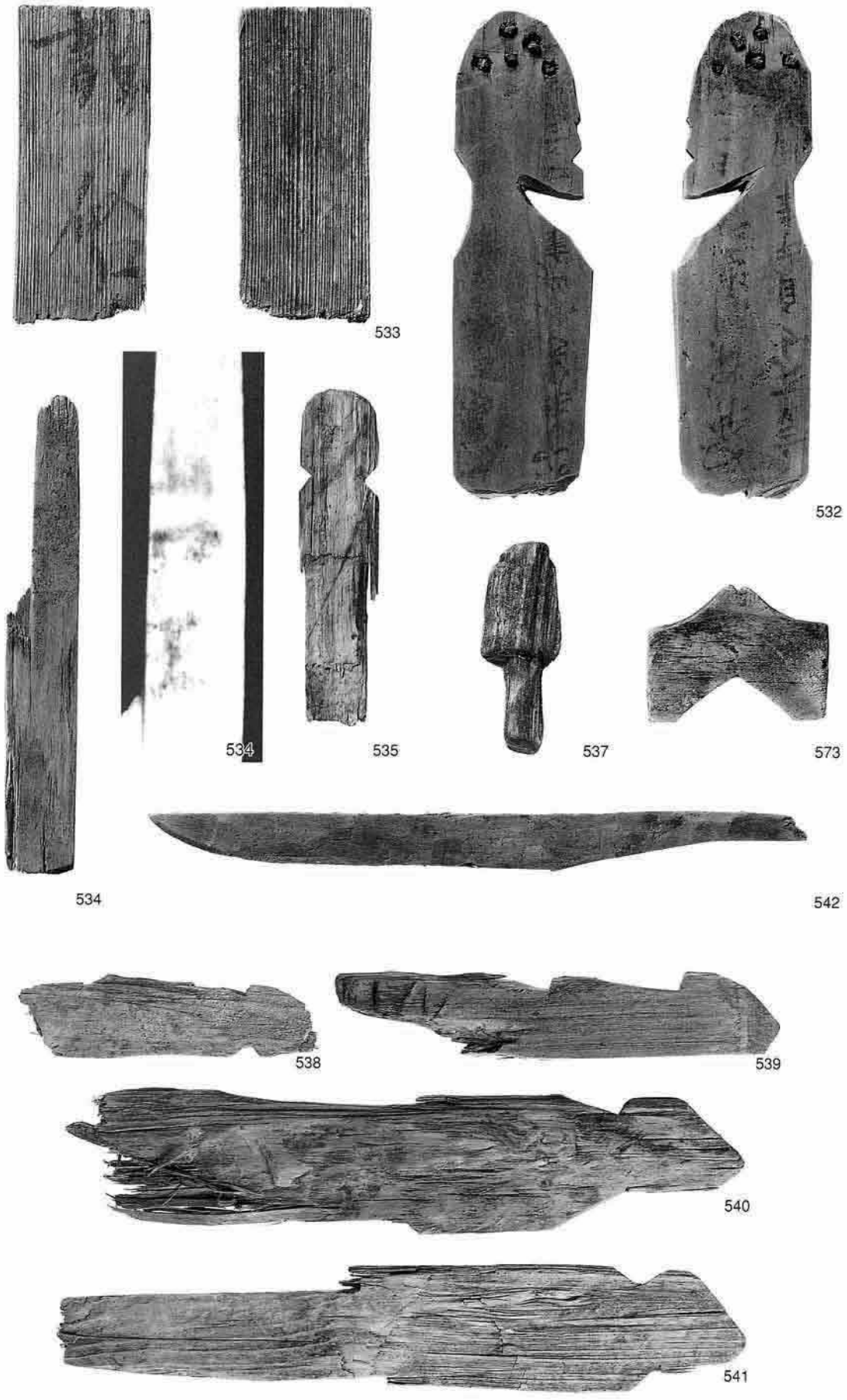

2028


2029


2030

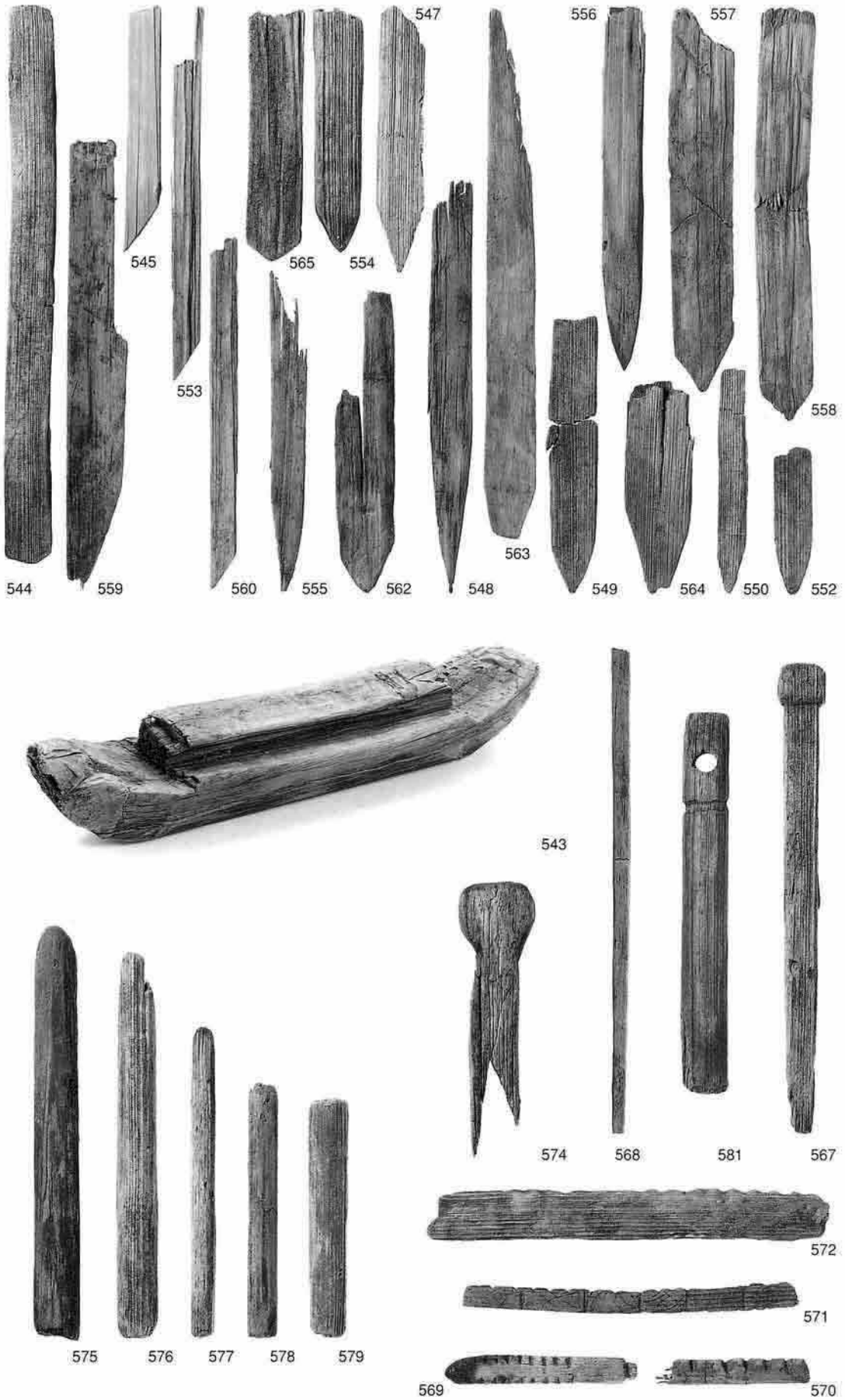
第8a層(182)　第7c層(621・2024・2029)　第7b層(620・2022)　第7a層(518・519・2025・2027・2028)　第6b層(2026)　第6a層(2020)　第5c層(2021・2023)　第5b層(619・2030)

図版五二　前期難波宮期の木製品　木簡・祭祀具他



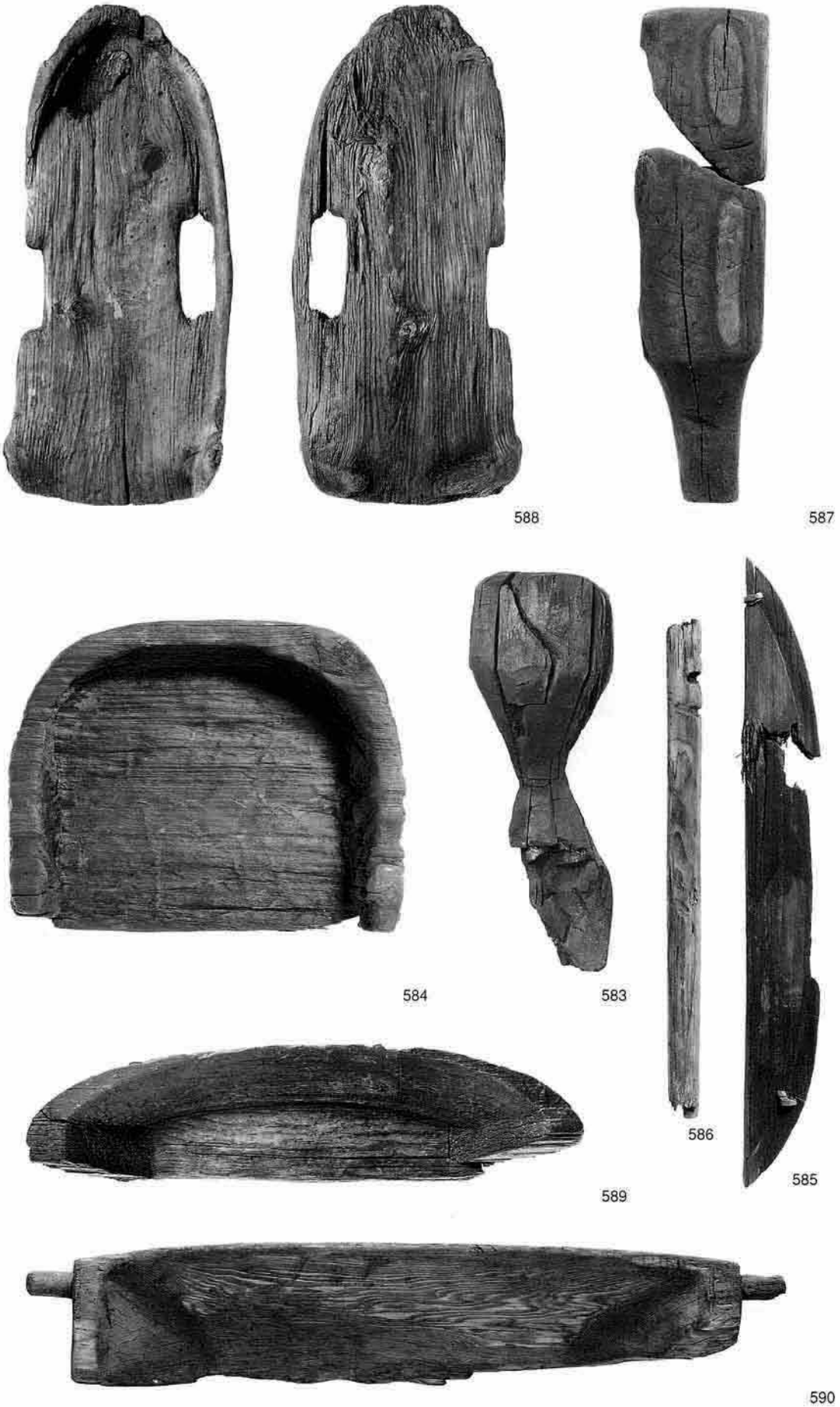
第7b層(532～534・542)　第6b層(535・537～541・573)

図版五三　前期難波宮期の木製品　祭祀具他



第7c層(547・569～571・575)　第7b層(567・577・581)　第6b層(543～545・548～550・552～560・562～565・568・572・574・576・578・579)

図版五四　前期難波宮期の木製品　履物・容器他



第7c層(583・584)　第7b層(585～587・589・590)　第7a層(588)

図版五五　前期難波宮期の木製品　杭・部材


591


592


594


595


596


597


613


614

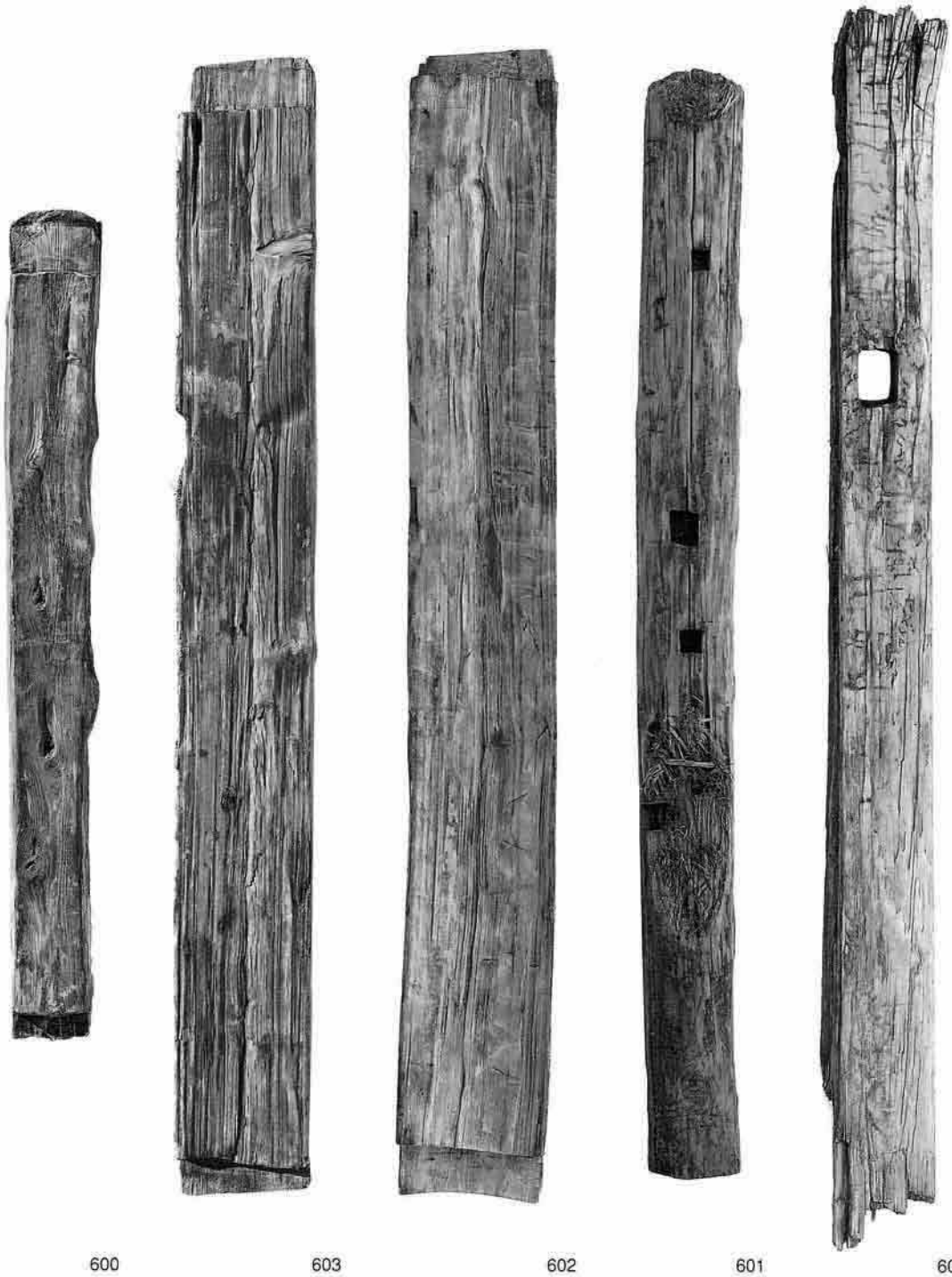

593

木枠2（613・614）　木枠3（596）　第7c層（591）　第7b層（592～595・597）

図版五六　前期難波宮期の木製品　部材



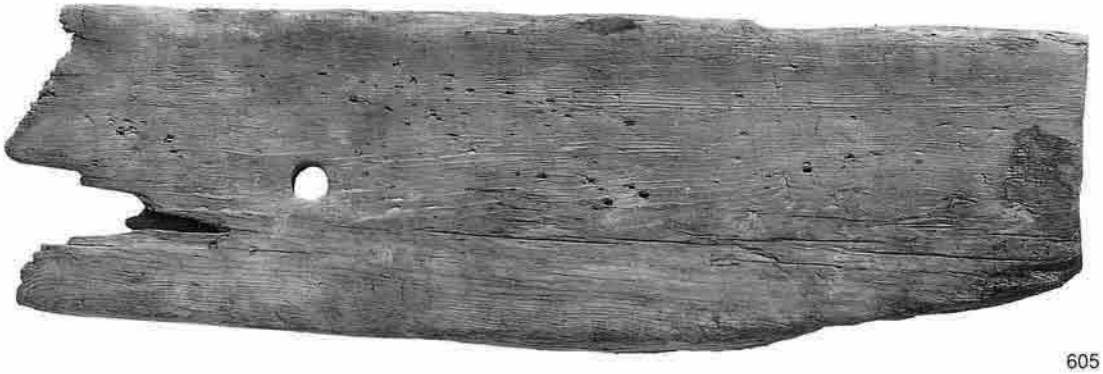
610



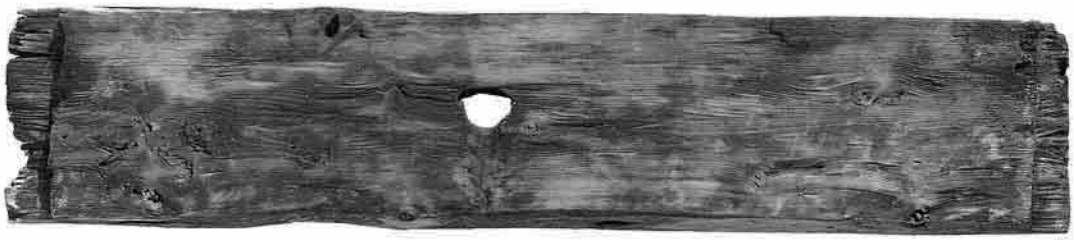
600　603　602　601　604

木枠1（602・603）　木枠2（601・610）　木枠4（600）　第7b層（604）

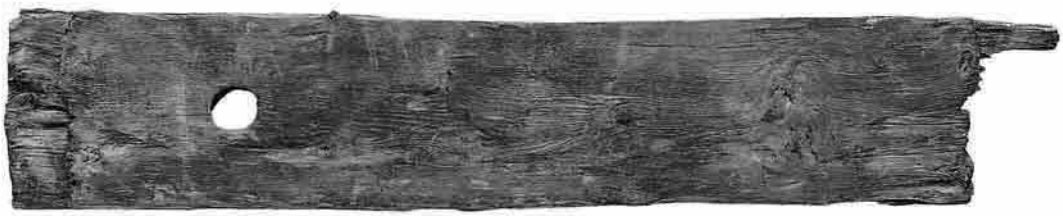
図版五七　前期難波宮期の木製品　部材



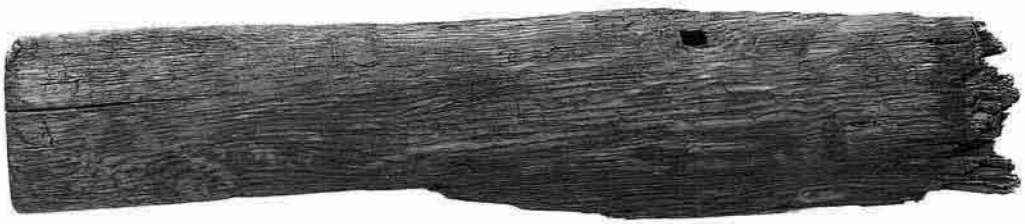
605



606



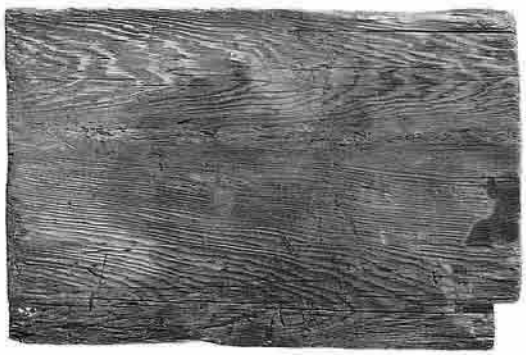
607



608



609



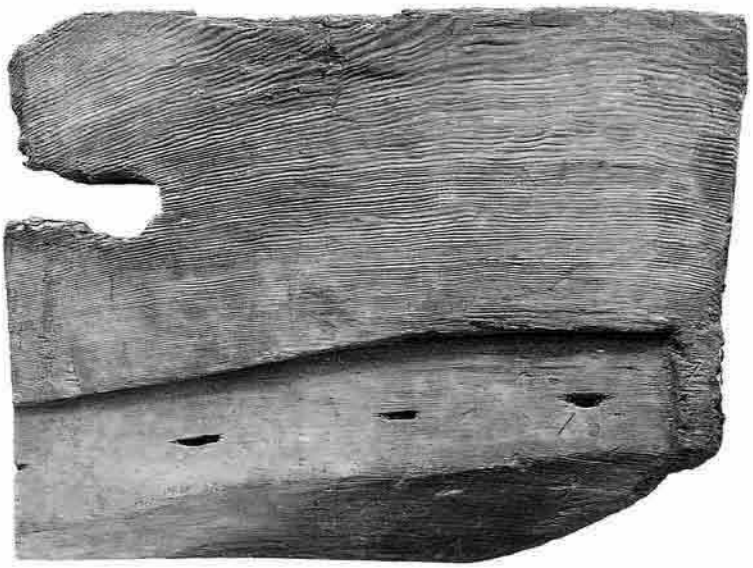
611



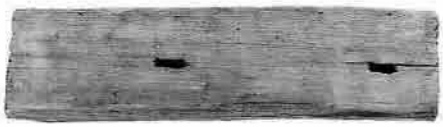
612

木枠1（611）　木枠2（606・607）　木枠4（609）　第7b層（605・608・612）

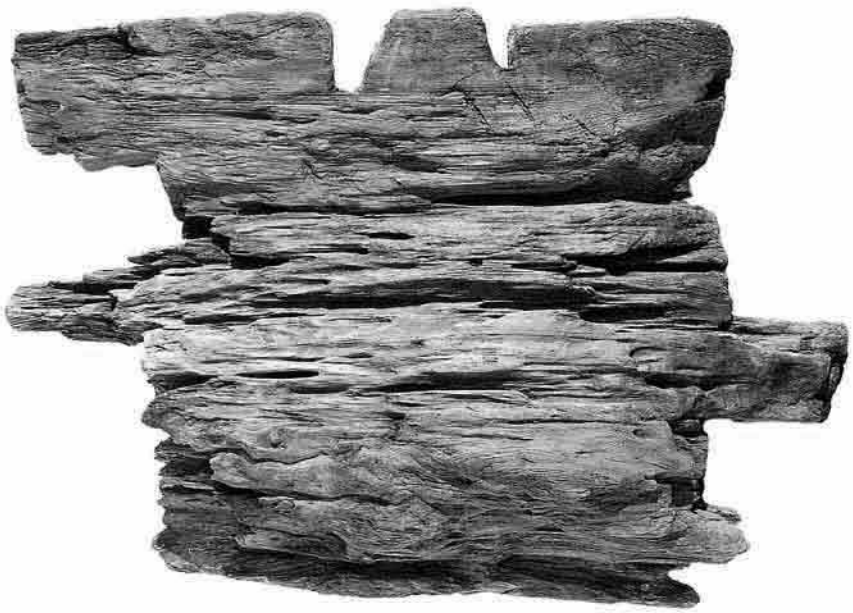
図版五八　前期難波宮期の木製品　部材



615



616



617



618

木枠1（615）　木枠4（616）　第7b層（617・618）

図版五九　後期難波宮期の軒瓦


657


657


658


658




654


653


663


665


667


664


666

第5c層(654・657・665・667)　第5b層(658・664)　第5a層(653・663)　その他(666)

図版六〇　後期難波宮期の軒瓦・鴟尾

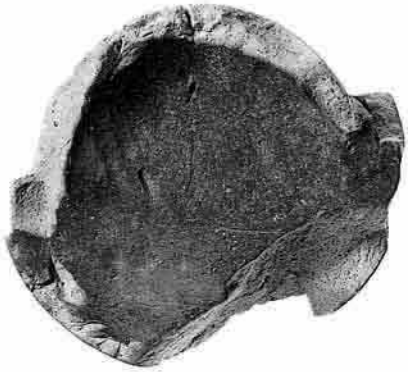


661





662

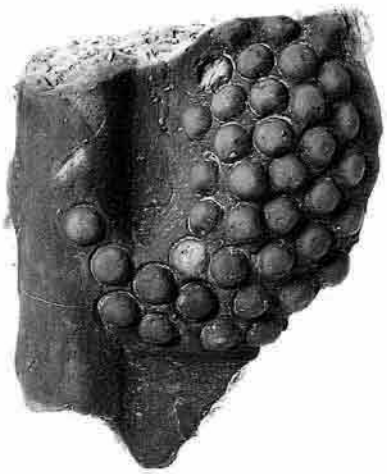


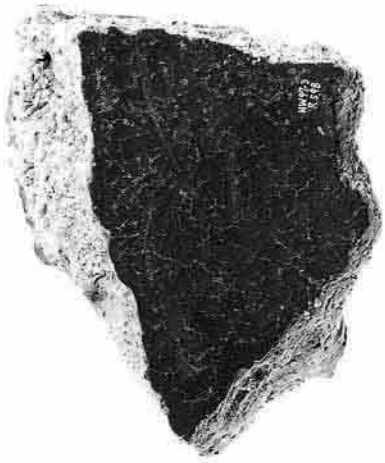


669



670

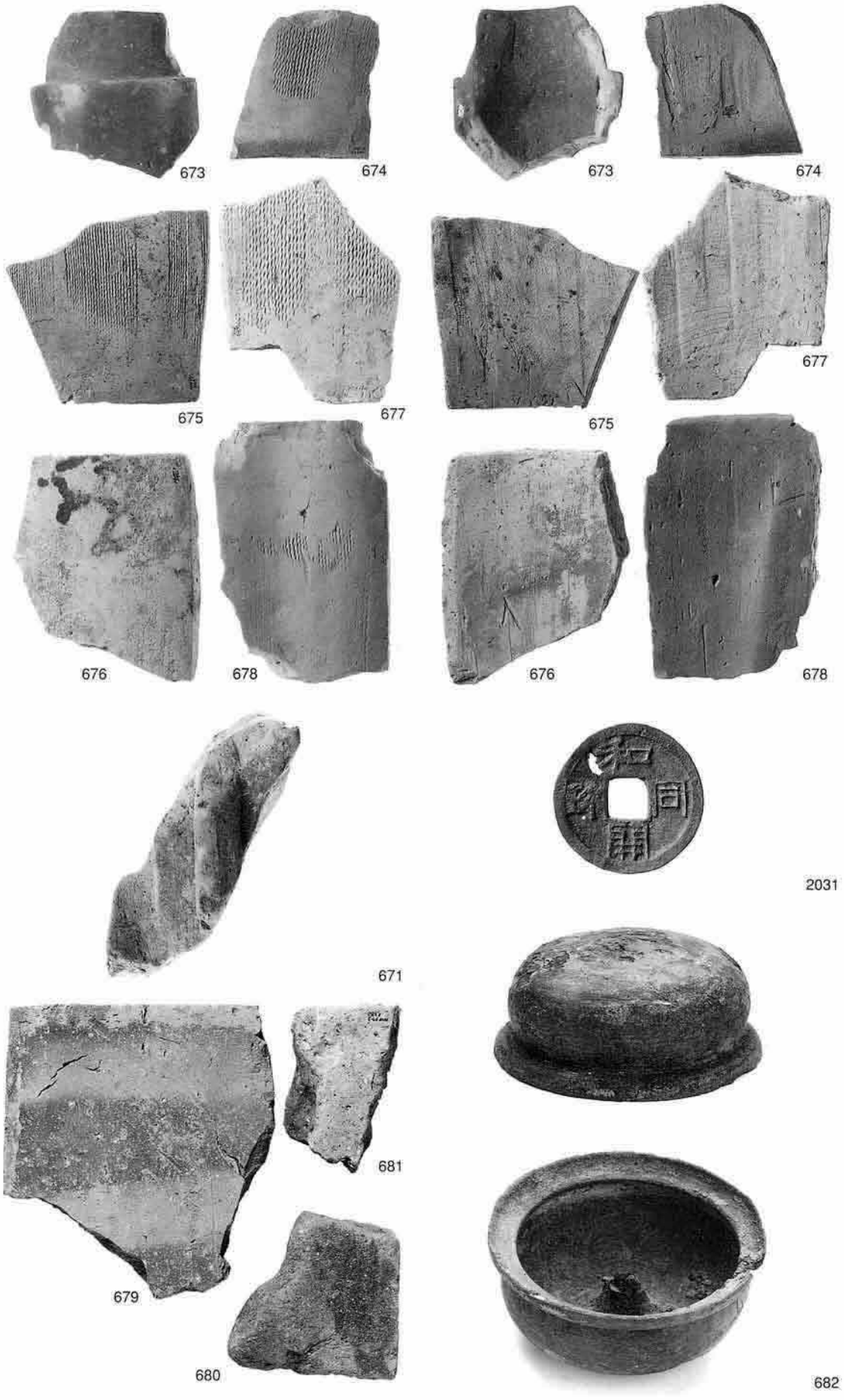




672

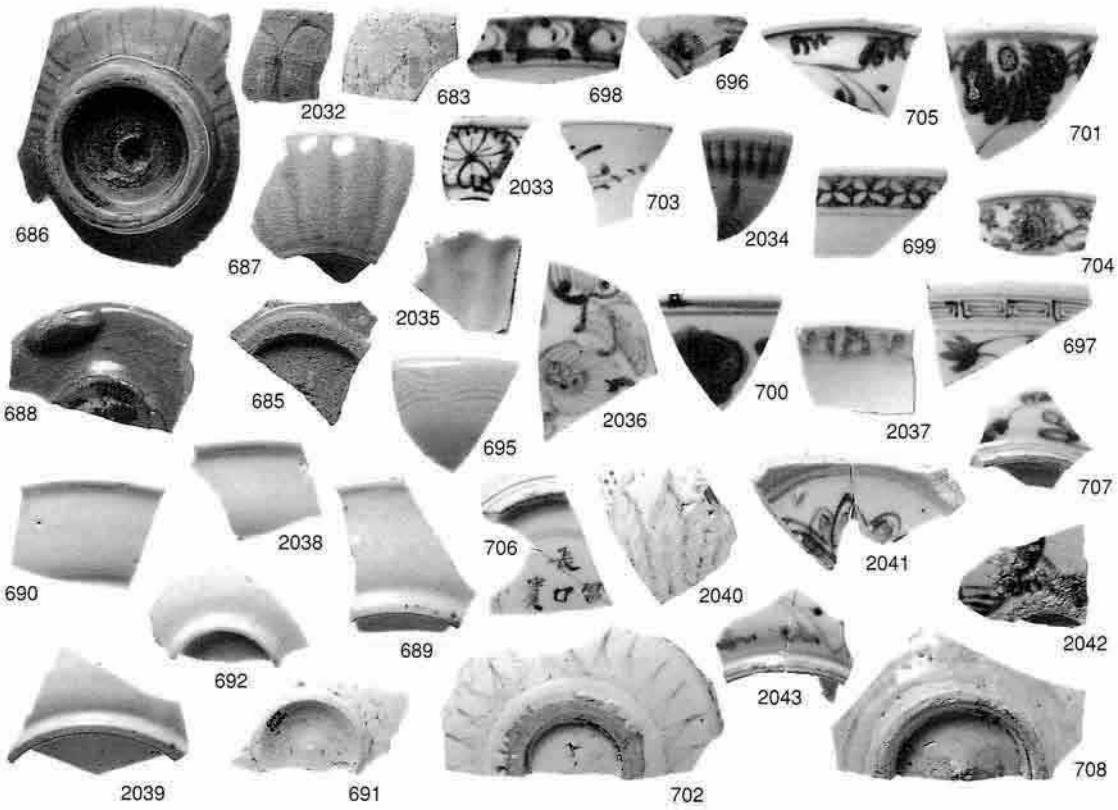
第5b層(662・672)　その他(661・669・670)

図版六一　後期難波宮期の瓦・塼・金属製品

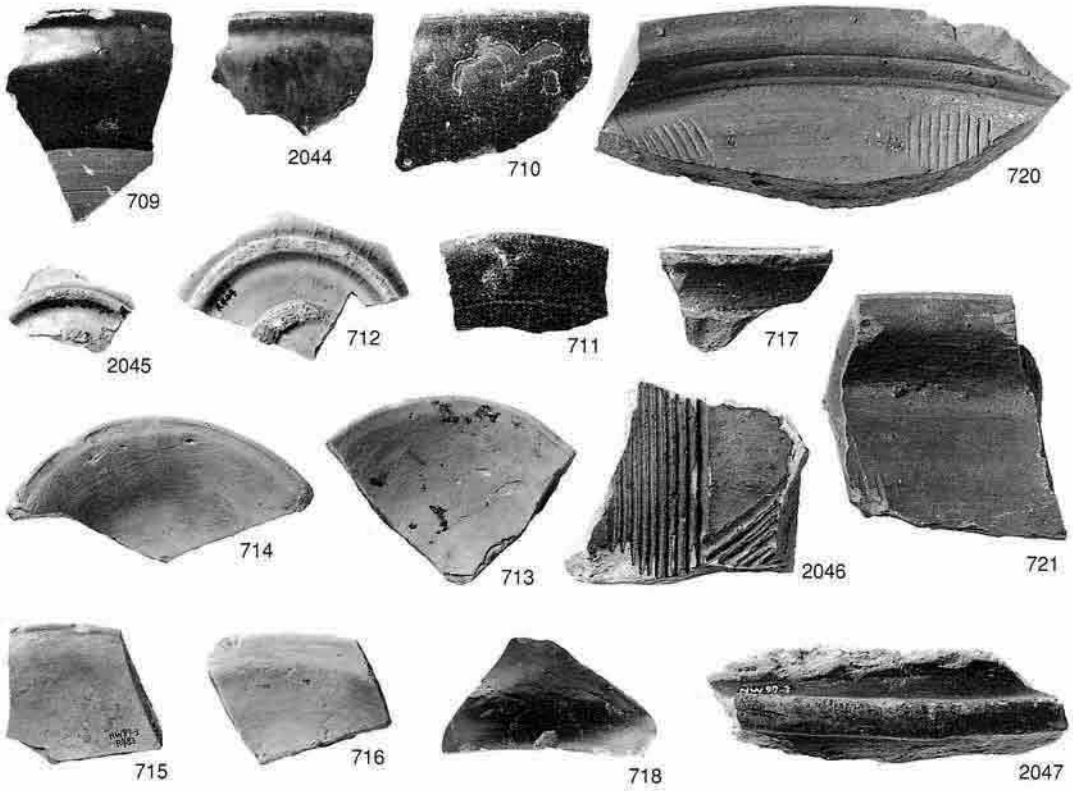


SK421(675)　第5c層(674・676・678～681・2031)　第5b層(673・677・682)　その他(671)

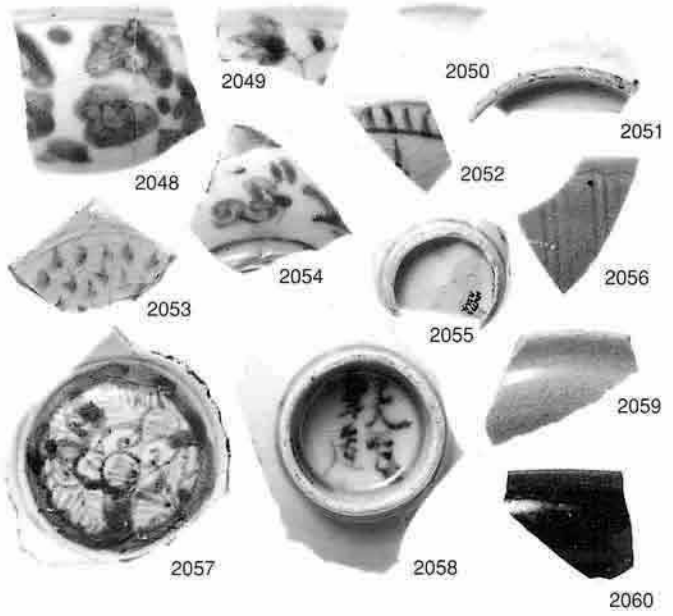
図版六二　室町時代の陶磁器・土器　SD530

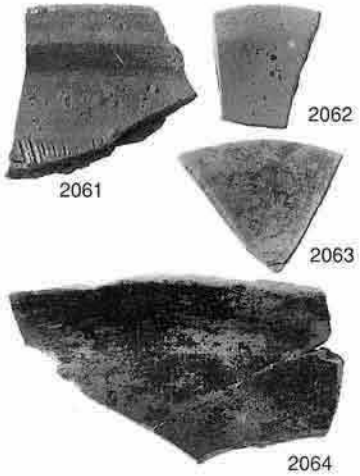


中国製磁器　SD530(683・685～692・695～708・2032～2043)



陶器・土器　SD530(709～718・720・721・2044～2047)









SD530(725～730・732)　第4b層(2048～2064)　SE541(722)　その他(723・724)


735


744


739


743


756


745


770


768


769


755


772


771

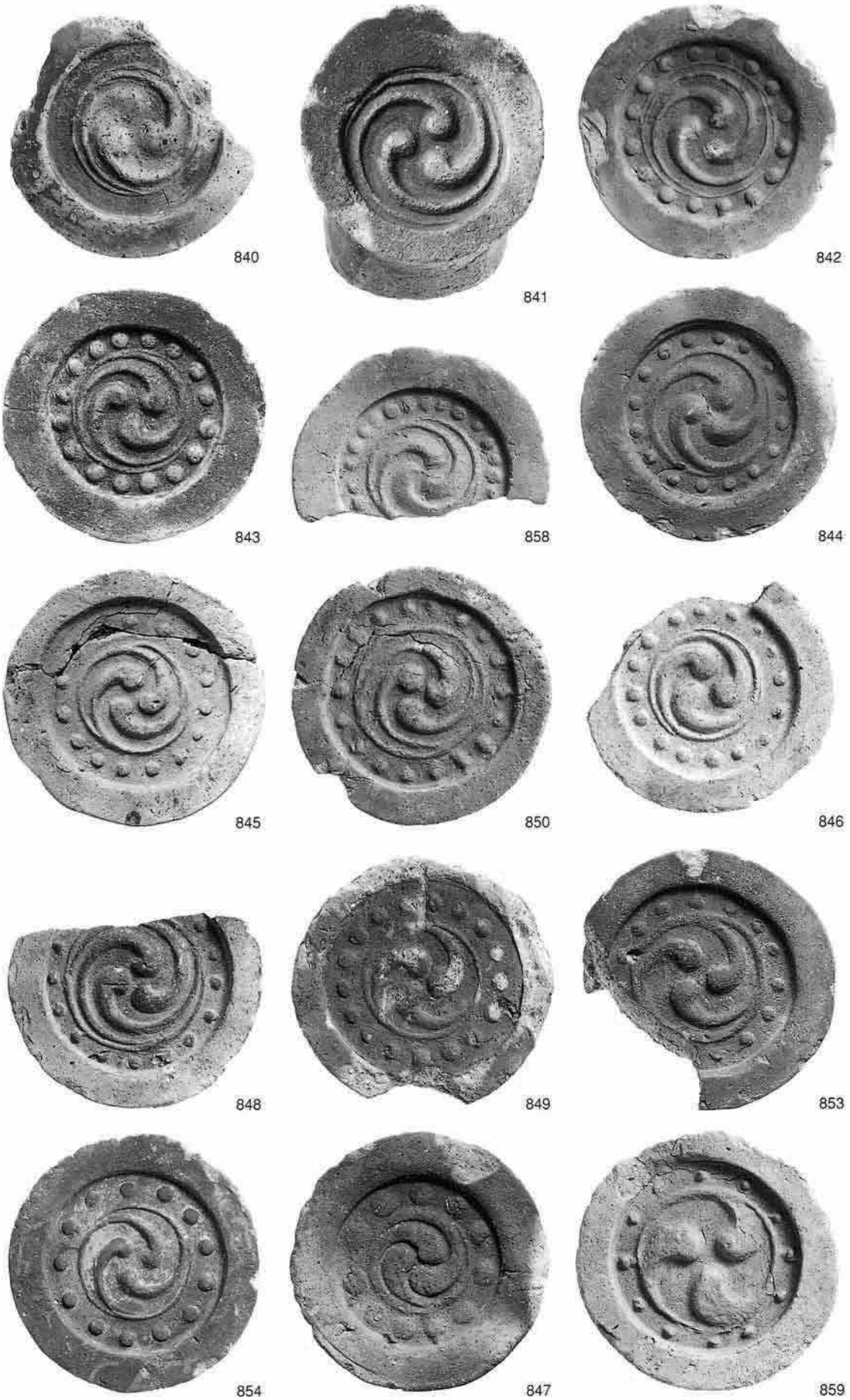
SK569(735・739・743～745・755・756・768～772)

図版六五　豊臣期の陶磁器・土器　SK569



SK569(750・752・753・758・759・761～763・766・777・781・786・787・797～799・801～803・805・806・808)

図版六六　豊臣期の軒丸瓦・鳥衾瓦



SK652(842～845・847・848・854)　SK653(858)　他の土壙(840・841・849)　第3a層(846・850・859)　その他(853)

図版六七　豊臣期の軒丸瓦


860


862


863


861


864


867


874


868


869


870


871


876


877


878


879


872

SK650(870)　SK652(860・863・869・871・874・876・877・879)　他の土壙(861・864)　SD542(878)　第3b層(867・868・872)　第3a層(862)

図版六八　豊臣期の軒平瓦



SK650(883・886)　SK652(880～882・885・887・891・895・900・901・905・906)　SE541(888)
第3a層(908)　その他(884・893・897・903・909)

図版六九　豊臣期の軒平瓦・棟込瓦・飾瓦・鯱瓦


917


920


925 926


921 922


923 924

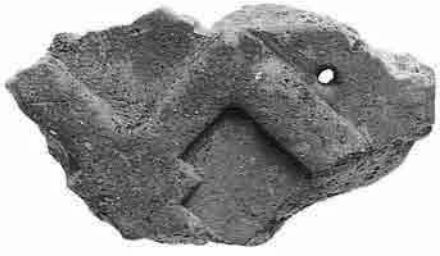

927


928


929


932


934


931


933


935

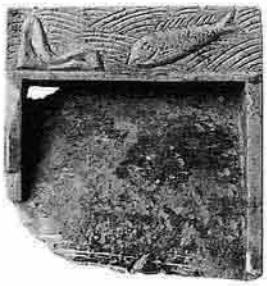

930


2065

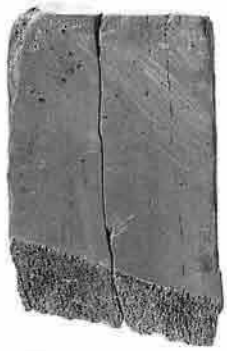
SK569(930)　SK652(920・928)　SK653(922)　SD542(925・926)　第3b層(929)　他の土壙(927)
その他(917・921・923・924・931～935・2065)

図版七〇　室町時代～豊臣期の銭貨・石製品

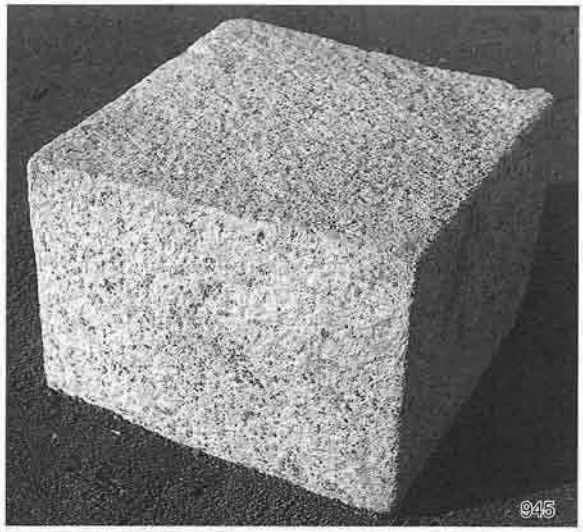

2066

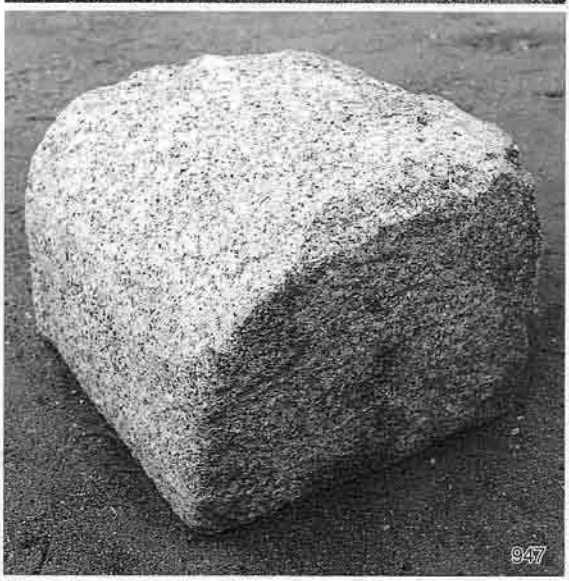

937

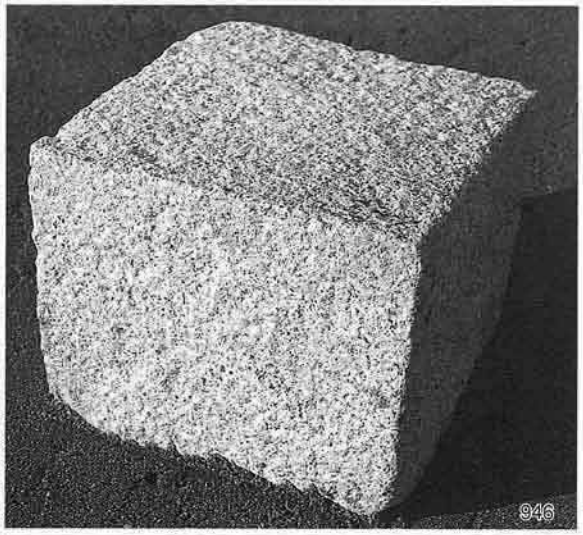

936

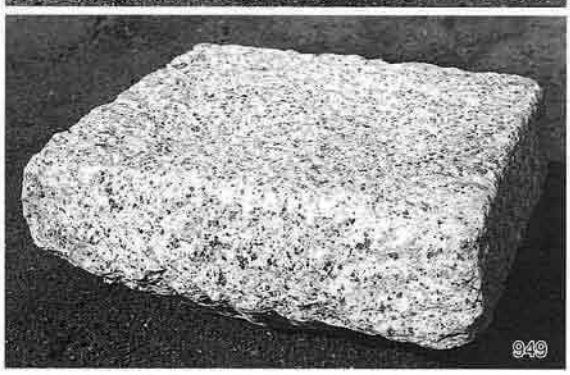

938

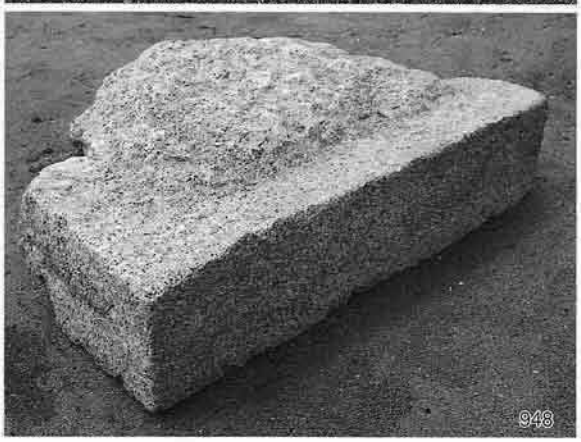

944


945


947

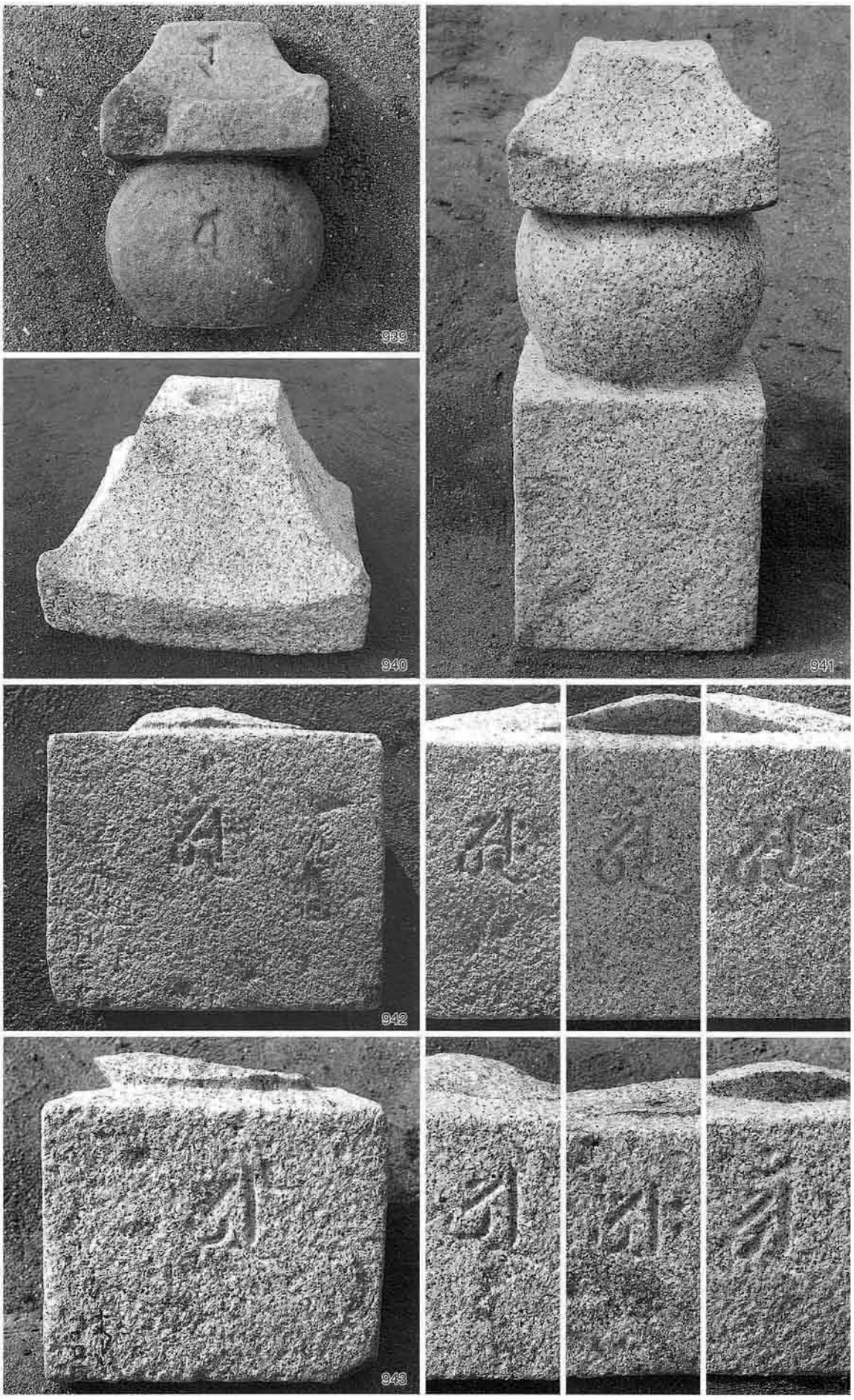

946


949


948

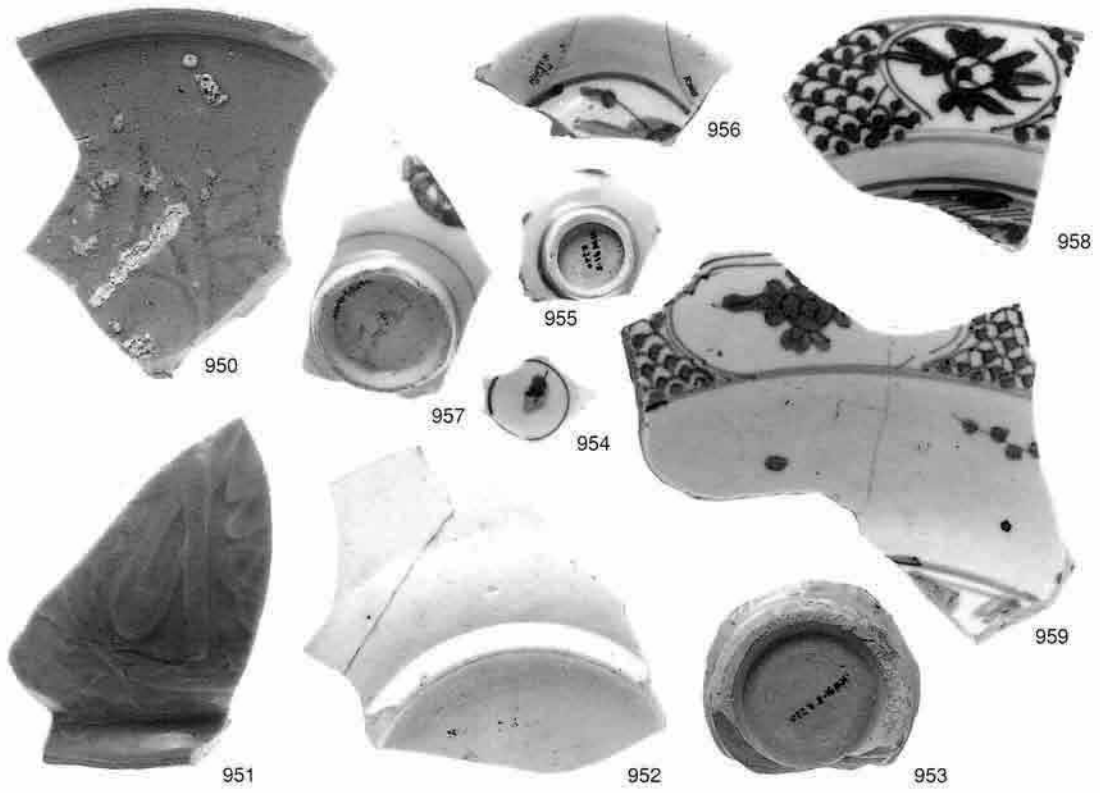
第4a層(2066)　石列1(944～947・949)　石列2(948)　第3b層(937)　第3a層(936・938)

図版七一　室町時代～豊臣期の石製品

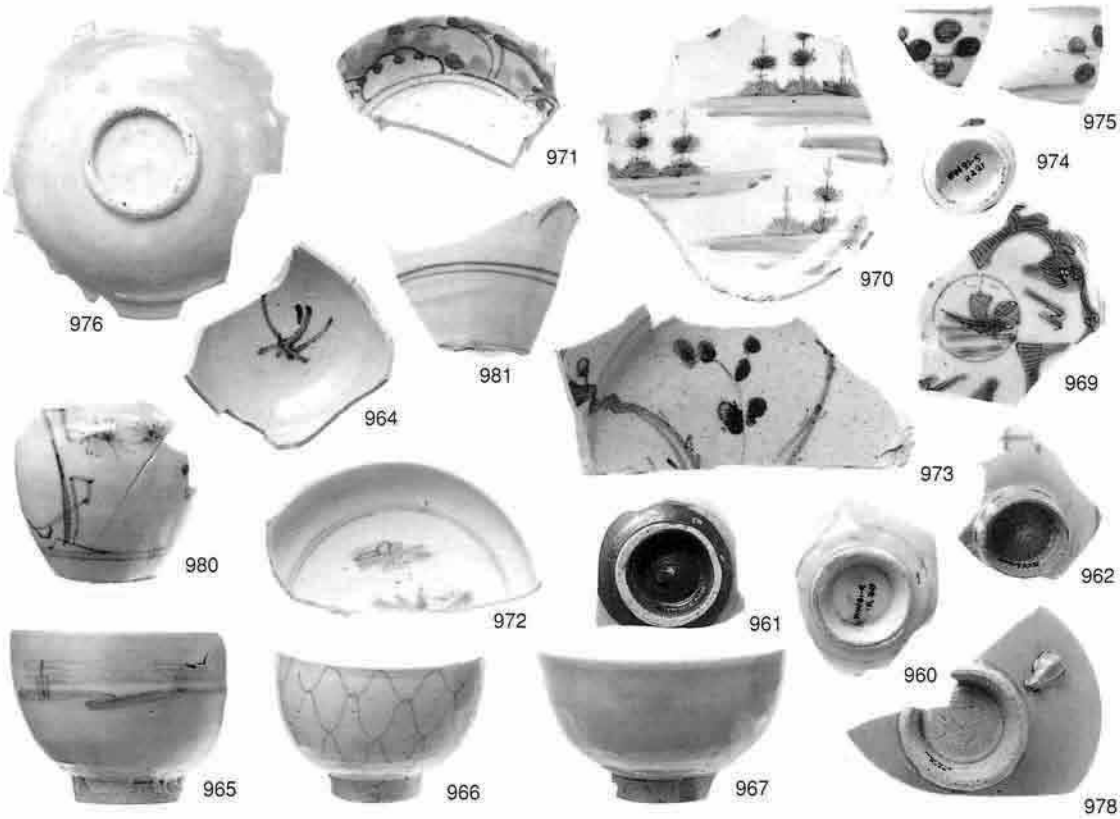


石列1（939・940・942・943）　石列2（941）

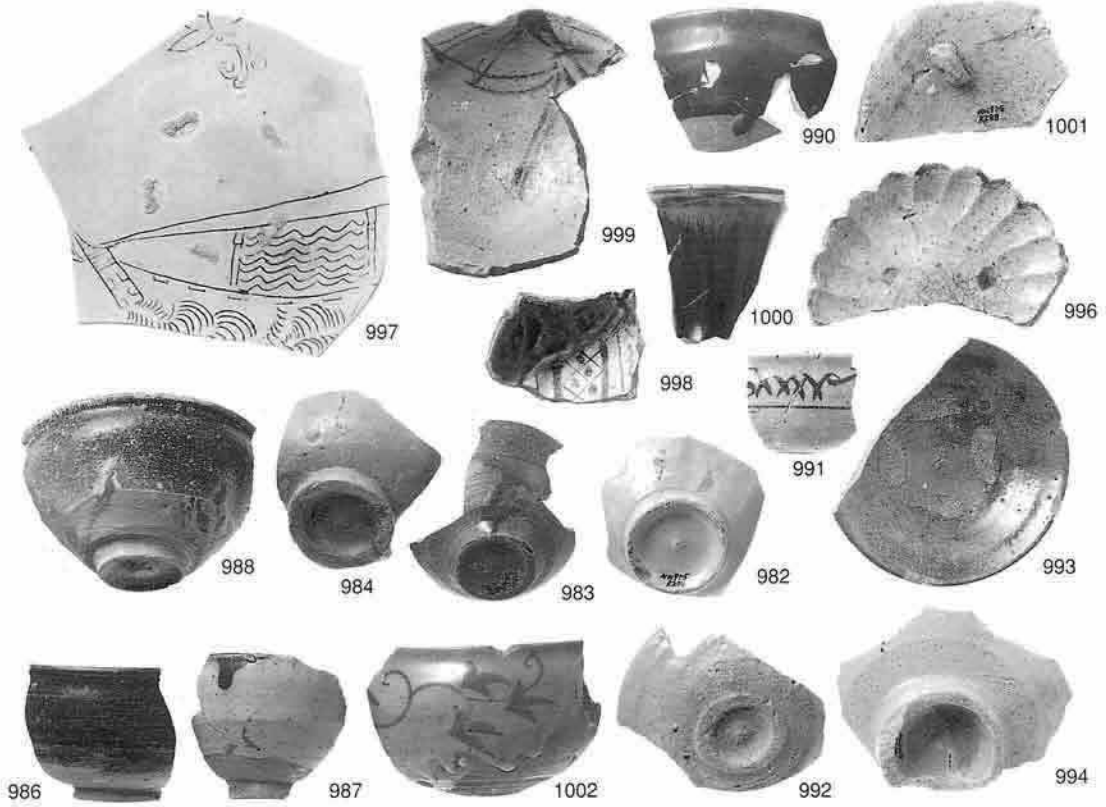
図版七二　江戸時代の陶磁器・土器　SK797



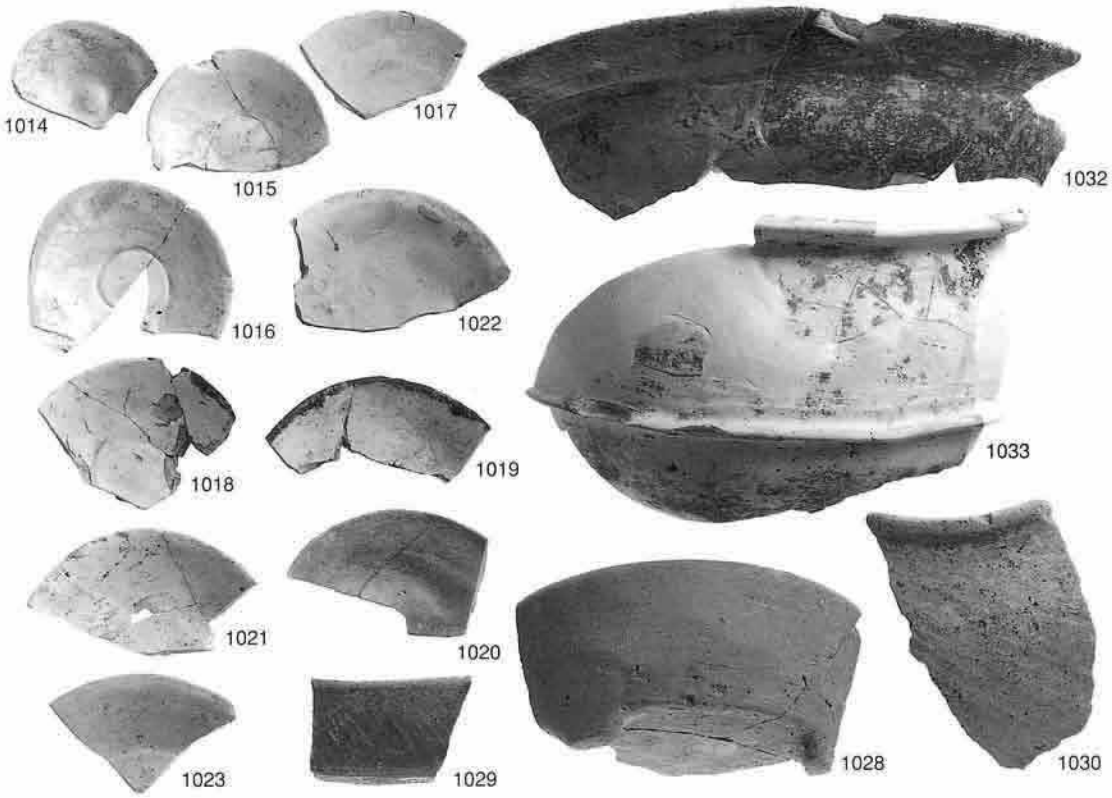
中国製磁器　SK797(950～959)



肥前磁器　SK797(960～962・964～967・969～976・978・980・981)



陶器　SK797(982～984・986～988・990～994・996～1002)

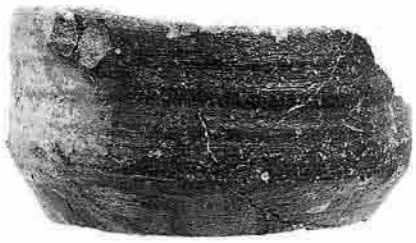


土器　SK797(1014～1023・1028～1030・1032・1033)

図版七四　江戸時代の陶磁器・土器　SK797

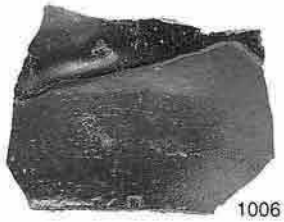

1008


1004


1003


1009


1005

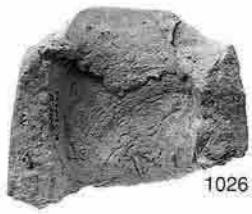

1006


1011


1007

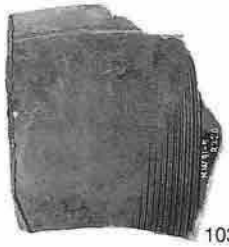

1010


1025

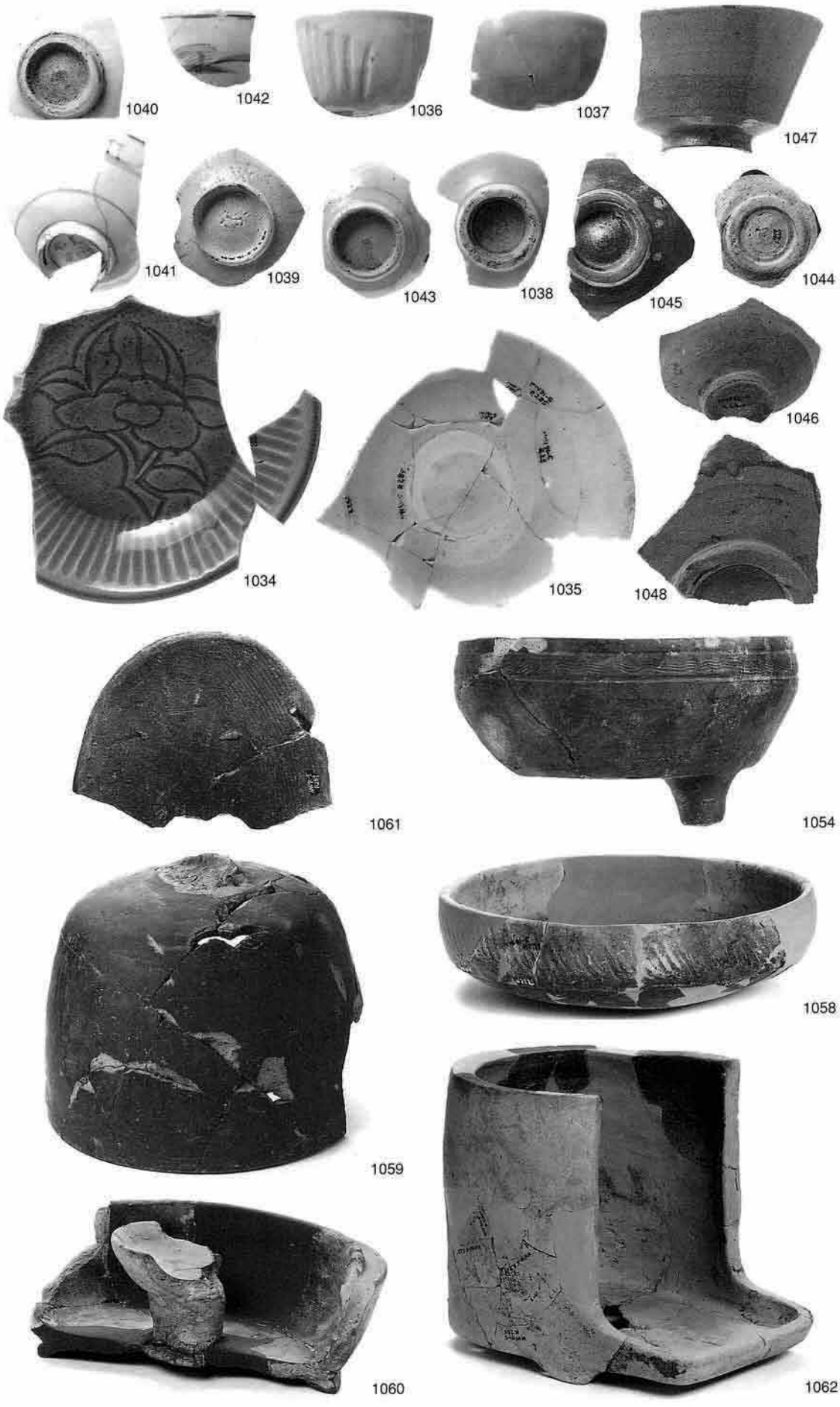

1026


1012


1027

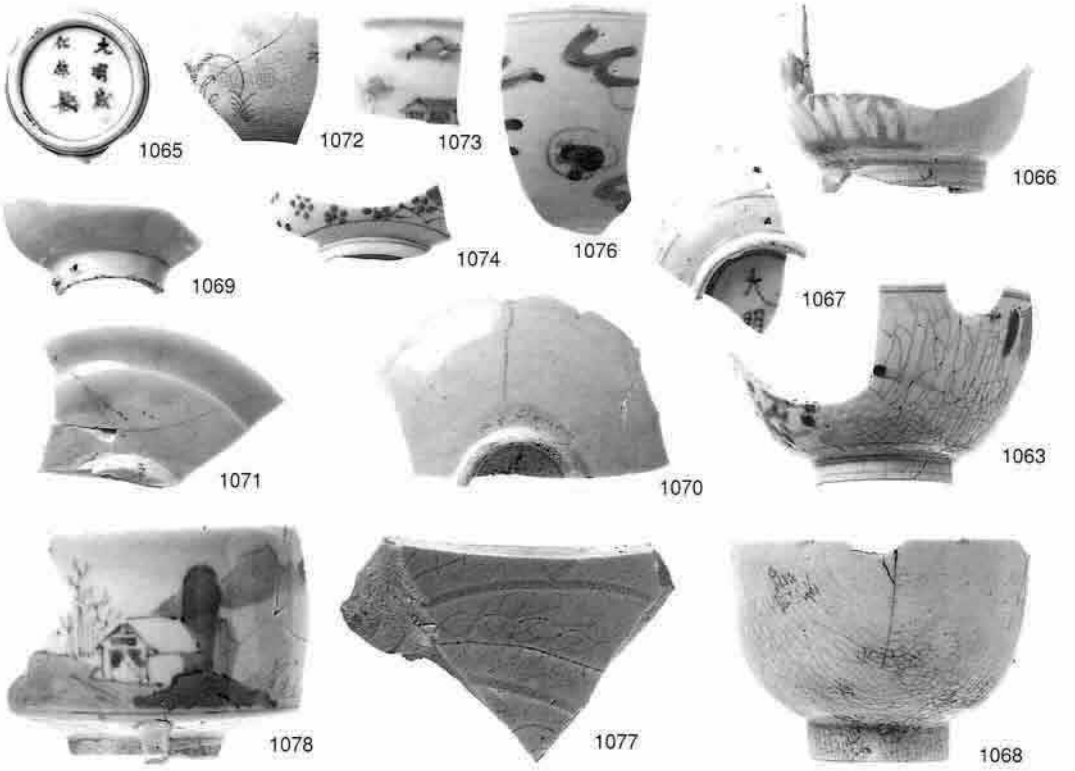

1031

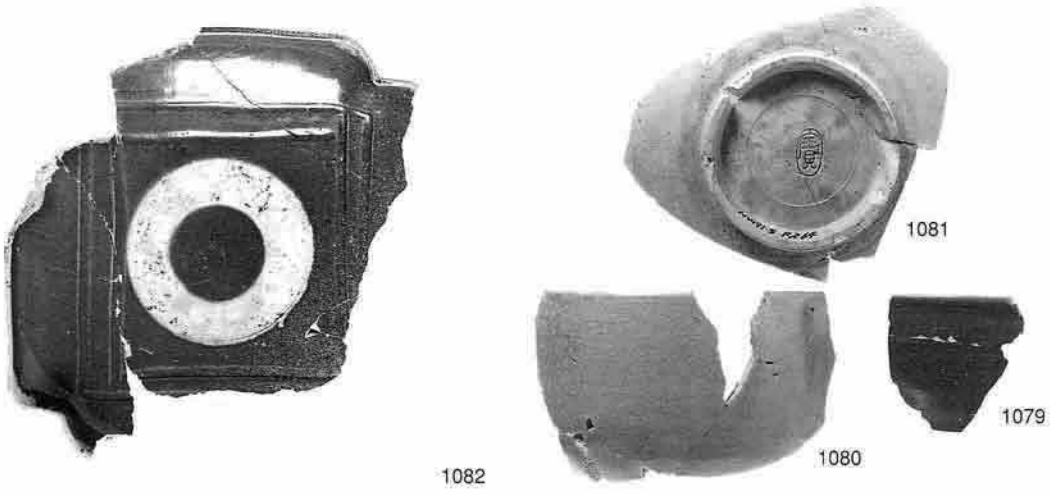
SK797(1003～1012・1025～1027・1031)



SK794(1034～1048・1054・1058～1062)

図版七六　江戸時代の陶磁器・土器　SK799







SK799(1063・1065～1074・1076～1082・1086・1088)



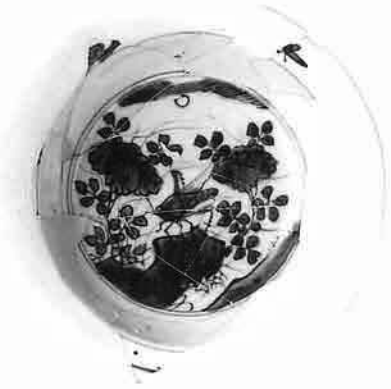
SK802(1090・1094・1097・1101・1104・1108・1110～1114・1116・1118～1120・1121・1123～1125・1128～1131・1134・1140・1143)



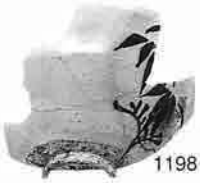
磁器・陶胎染付　SK798(1149～1152・1155・1160・1162～1165・1177・1179・1180・1182・1184・1187～1190)



陶器　SK798(1191～1193・1195・1199・1200・1212～1214・1218)


1149


1207　1208


1198


1203


1231


1229


1230


1202

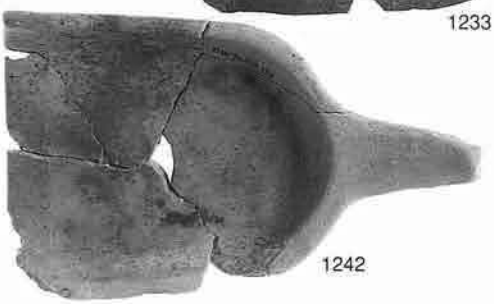

1204


1232


1226


1228


1233


1242


1224


1241


1225


1234

SK798(1149・1198・1202～1204・1207・1208・1224～1226・1228～1234・1241・1242)

図版八〇　江戸時代の陶磁器・土器　SK801



SK801(1250・1254・1259・1260・1265・1271・1274・1285・1293・1294・2067～2070)

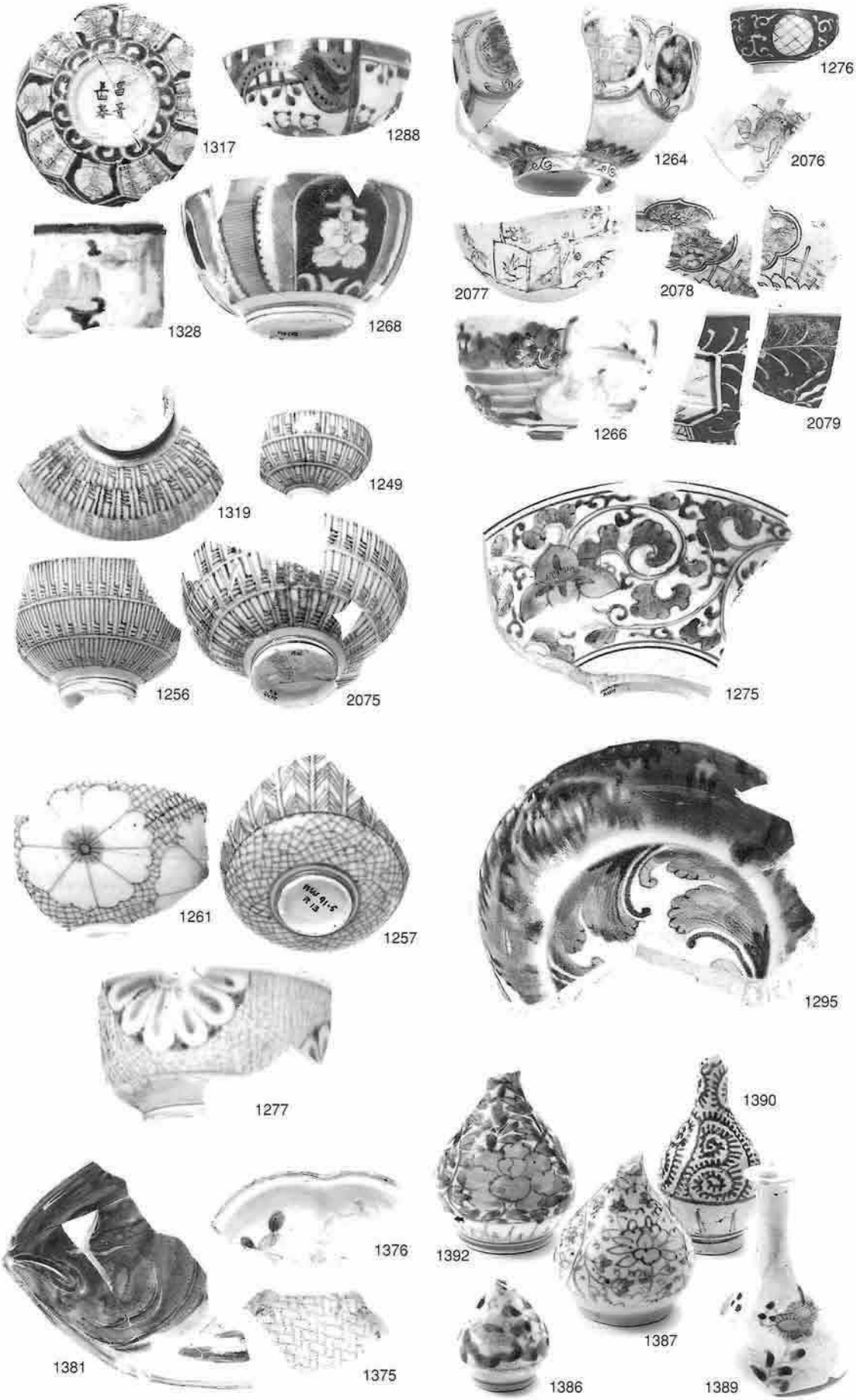


SK801(1320・1323・1325・1331・1332・1334・1337～1339・1363・1377・1382)

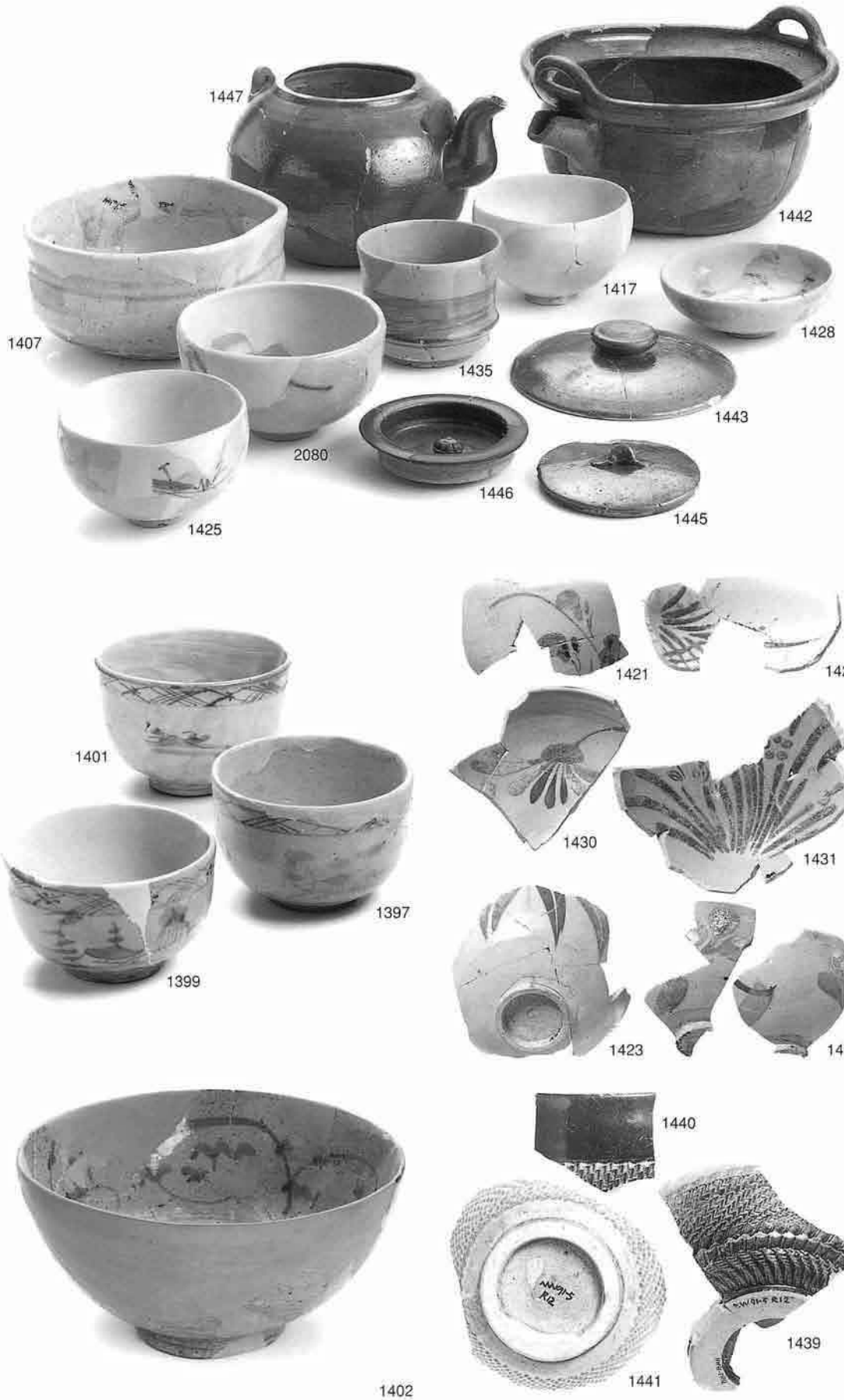


SK801(1244～1248・1258・1262・1270・1278・1290・1291・1296・1297・1307・1308・1315・1321・1327・1348・1350・1352・1353・1356・1360・2071～2074)

図版八二　江戸時代の陶磁器・土器　SK801

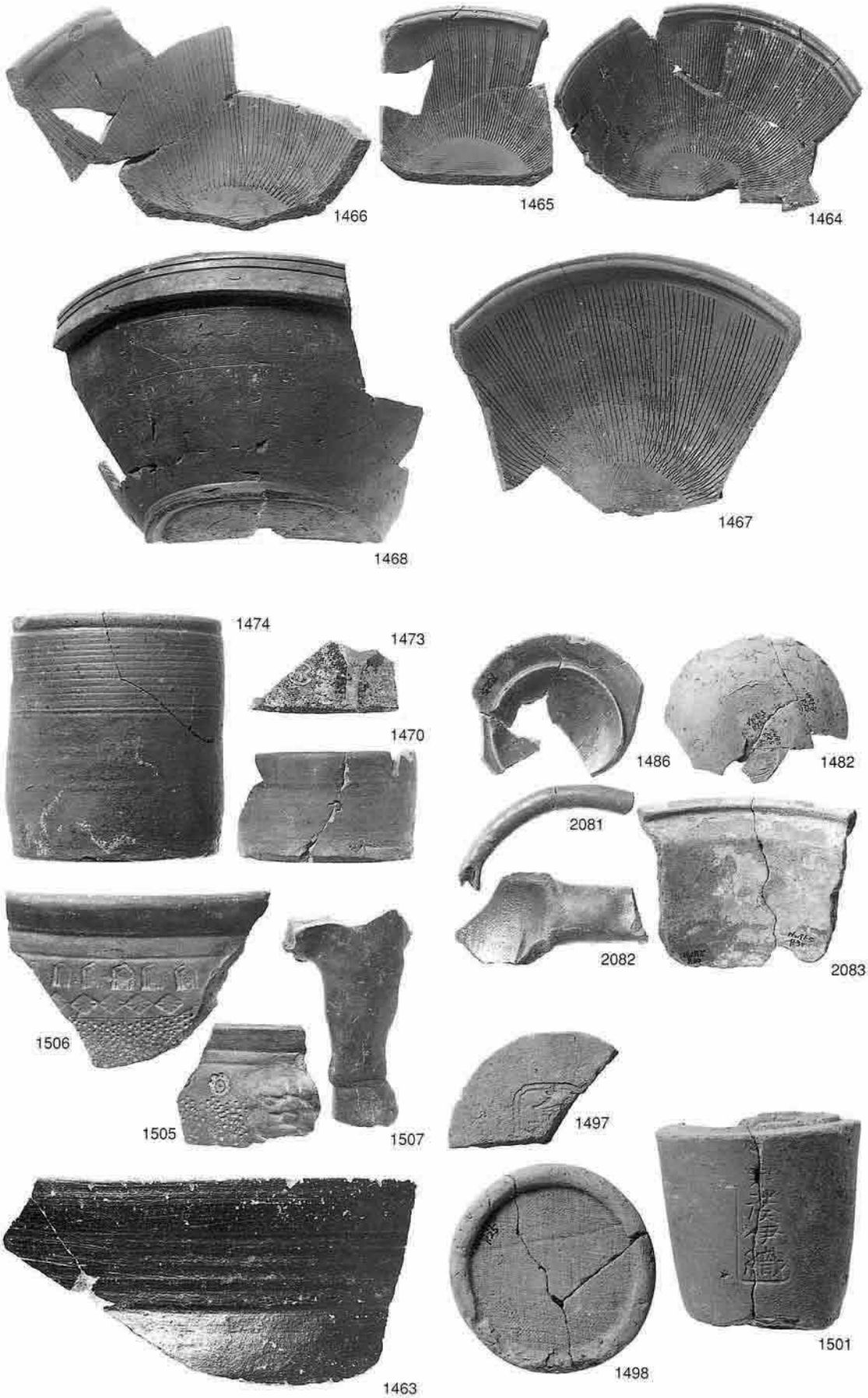


SK801(1249・1256・1257・1261・1264・1266・1268・1275～1277・1288・1295・1317・1319・1328・1375・1376・1381・1386・1387・1389・1390・1392・2075～2079)



SK801(1397・1399・1401・1402・1407・1416・1417・1421・1423・1425・1428～1431・1435・1439～1443・1445～1447・2080)

図版八四　江戸時代の陶磁器・土器　SK801



SK801(1463～1468・1470・1473・1474・1482・1486・1497・1498・1501・1505～1507・2081～2083)

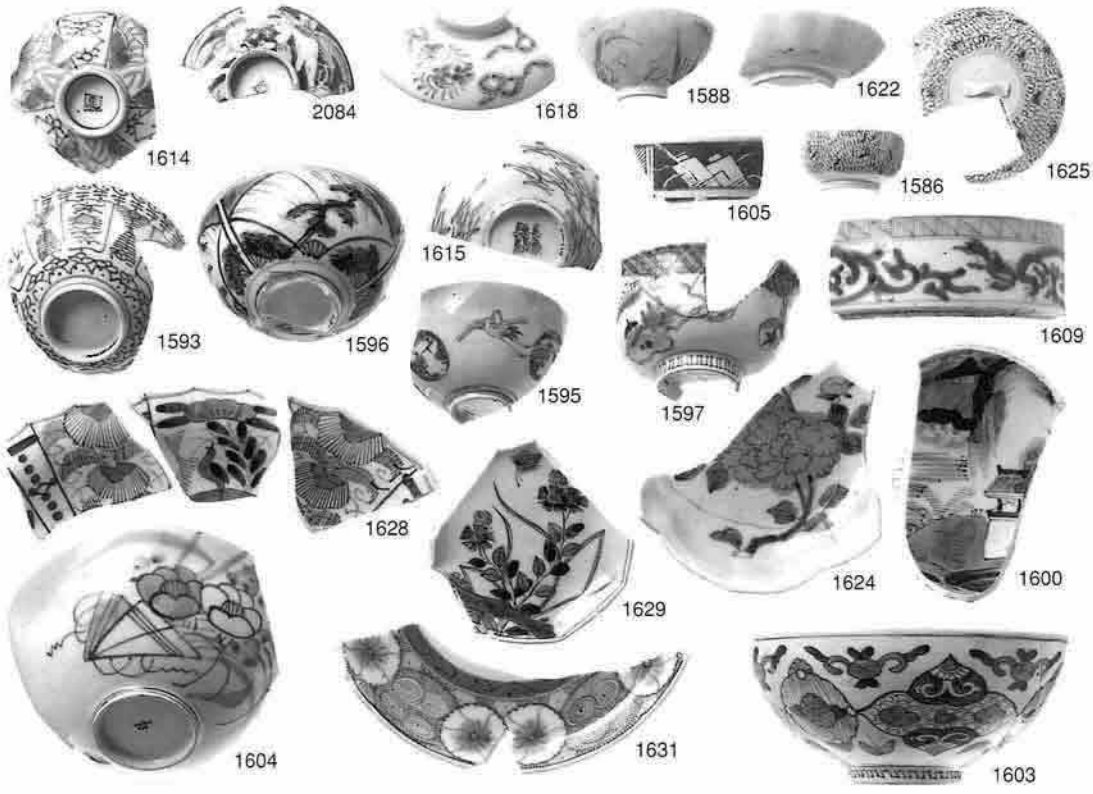


SK809(1523～1526・1530・1534・1535・1537・1538・1547・1549・1550・1552・1554・1558～1561・1563～1565・1569・1570・1572・1578)

図版八六　江戸時代の陶磁器・土器　SK790



SK790(1587・1589～1591・1598・1601・1602・1607・1608・1610・1612・1617・1620・1621・1626)



SK790(1586・1588・1593・1595～1597・1600・1603～1605・1609・1614・1615・1618・1622・1624・1625・1628・1629・1631・2084)

図版八七　江戸時代の陶磁器・土器　SK790



SK790(1634・1636～1638・1641～1647・1650～1652・1654～1661・1663～1671・1673・1676・1678・1679・1681～1683・1685・1686)



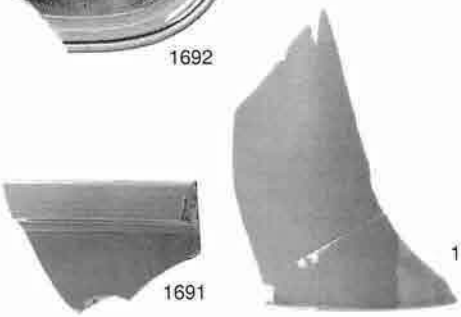
SK790(1727・1736・1739～1743・1745～1747・1750・1752・1762)

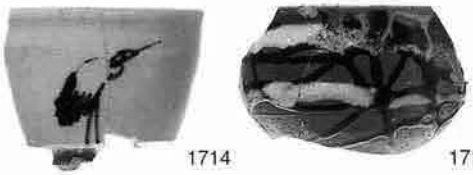


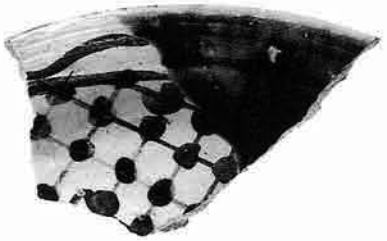
SK790(1697・1699・1700・1704～1706・1708～1713・1719・1722～1725・1728・1729・1731・1732)


1584　1585


1690　1692

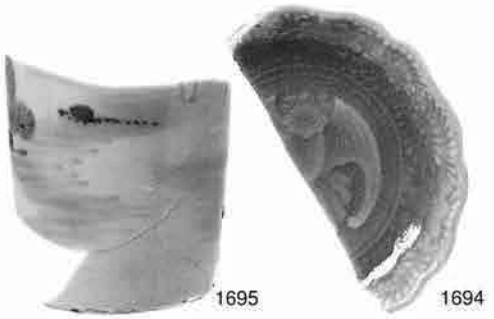

1691　1693


1714　1715


1720


1688　1696


1689　1687


1695　1694


1764


1768


1776

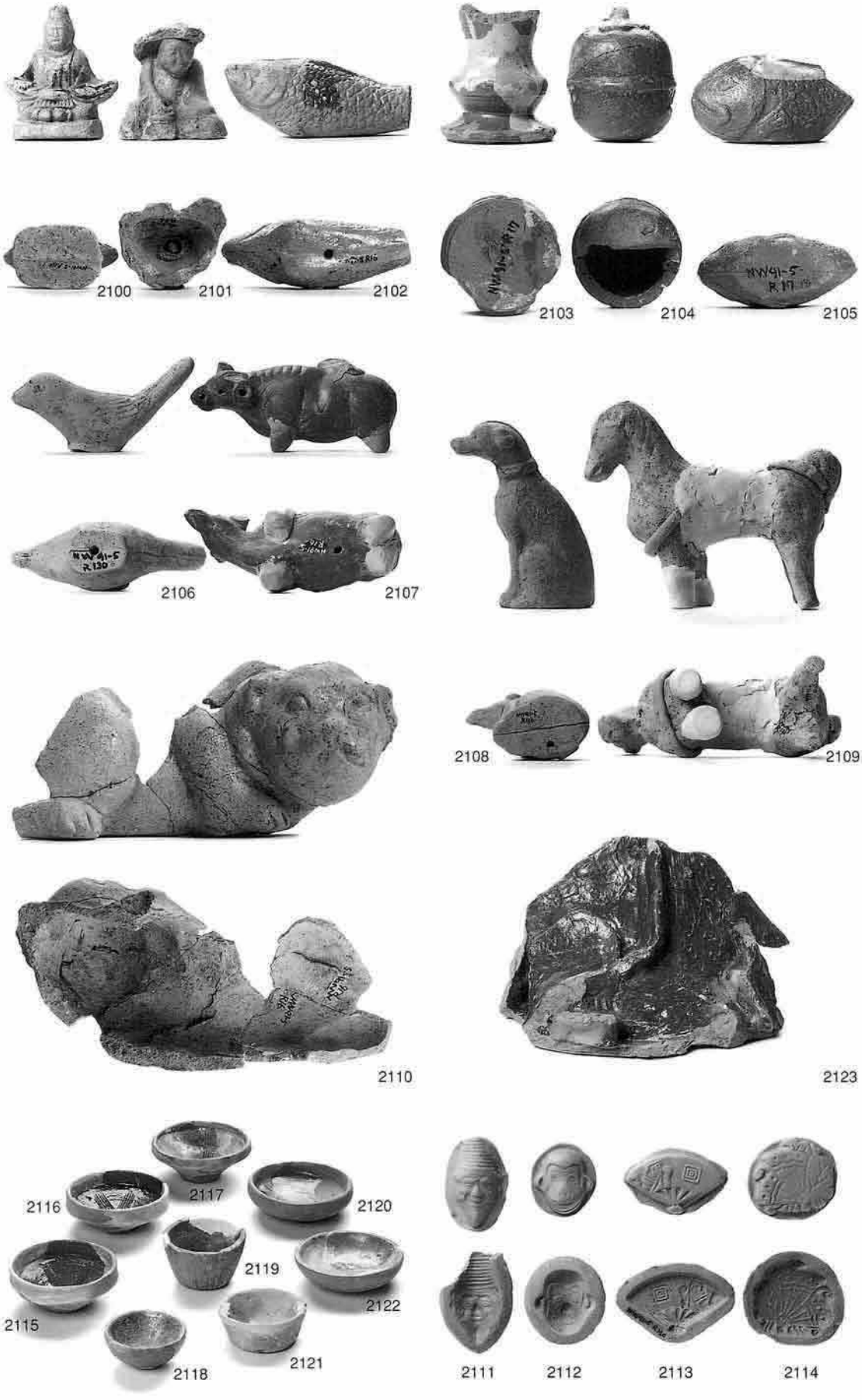

1780

SK790(1584・1585・1687～1696・1714・1715・1720・1764・1768・1776・1780)

図版九〇　江戸時代の土製玩具

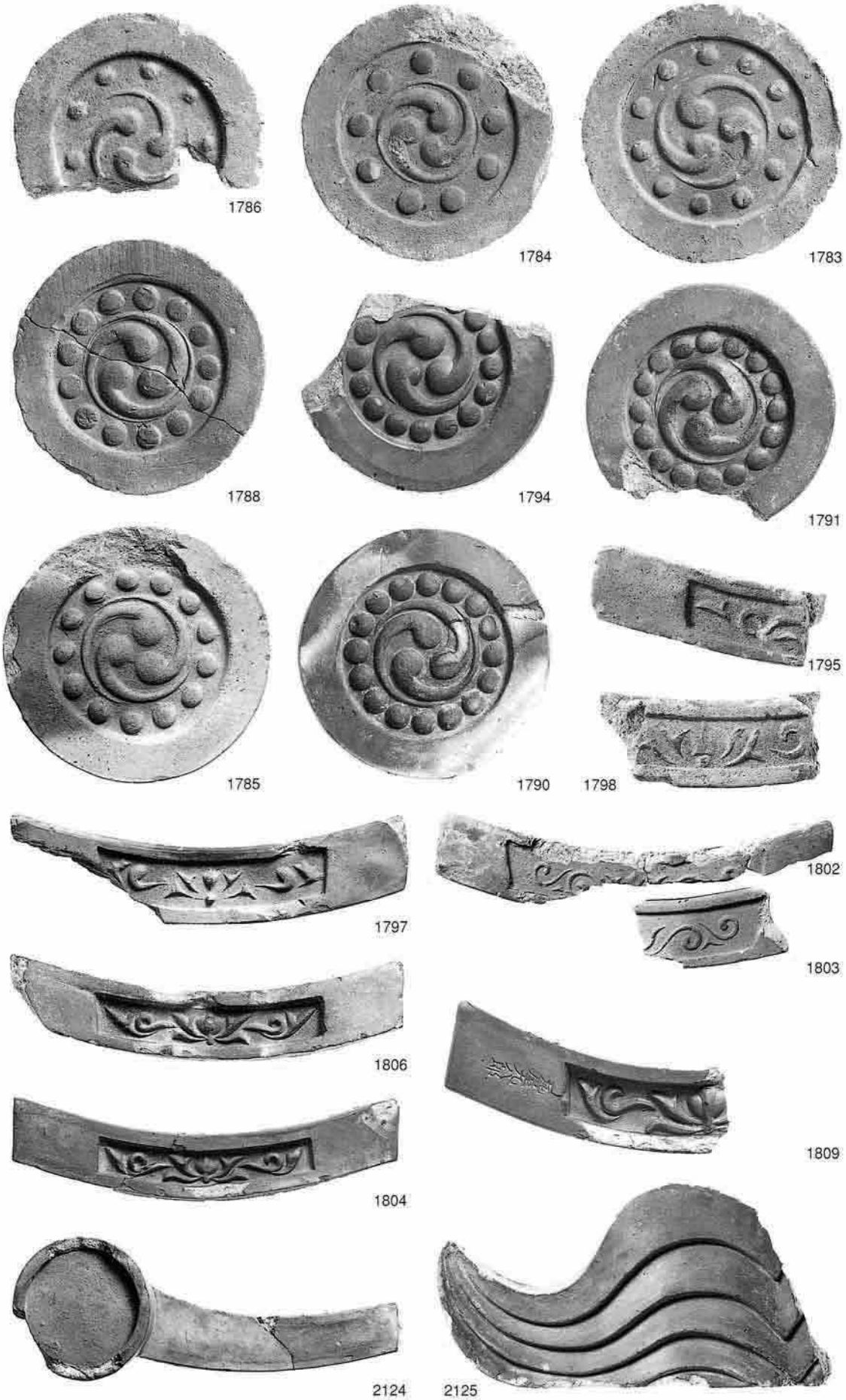


SK801(2085～2099)



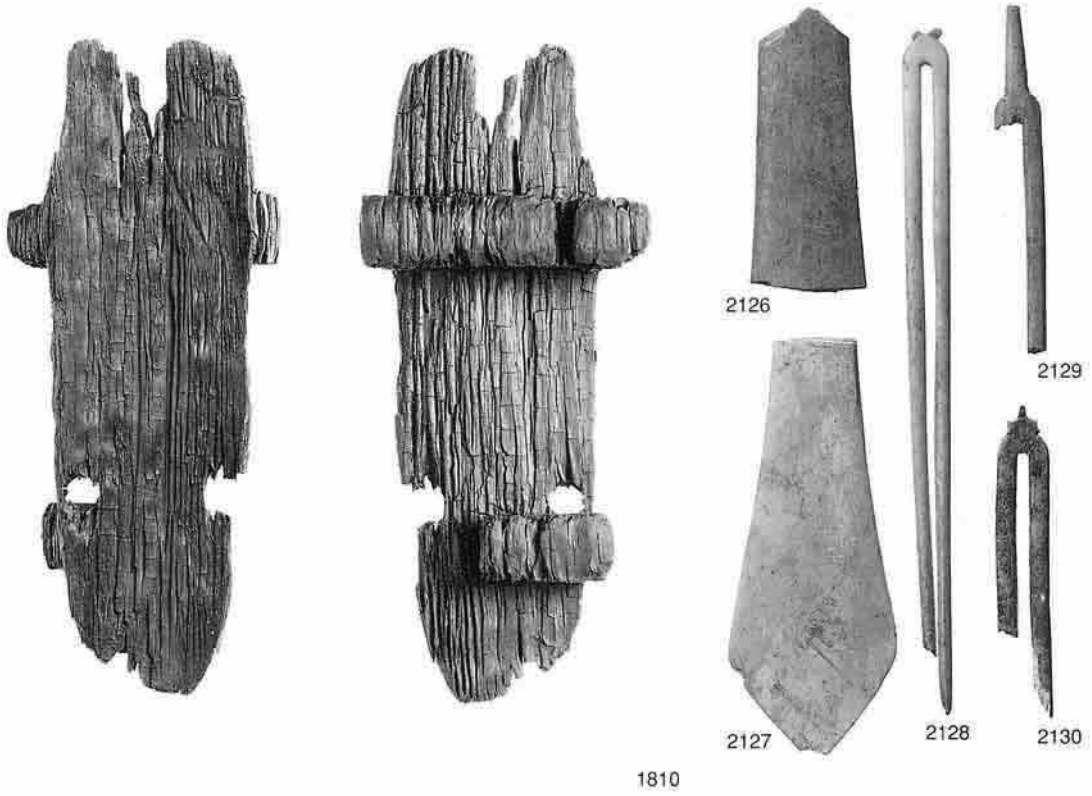
SK801(2100～2122)　他の土壙(2123)

図版九二　江戸時代の瓦

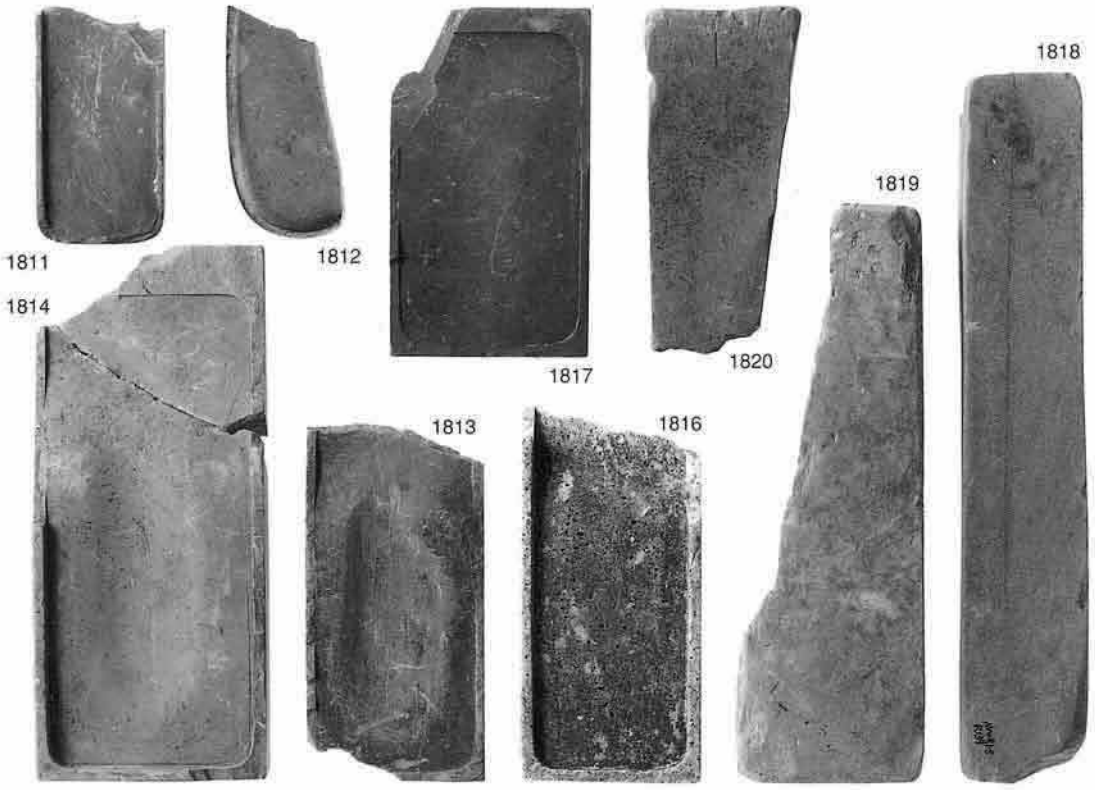


SK798(1795・1798)　SK801(1783・1803・2125)　SK804(1797・1804)　SK807(1806)　SK790(1794)　他の土壙(1784～1786・1788・1802)　第2b層(1790・1791・2124)　第2a層(1809)

図版九三　江戸時代の木製品・骨製品・石製品

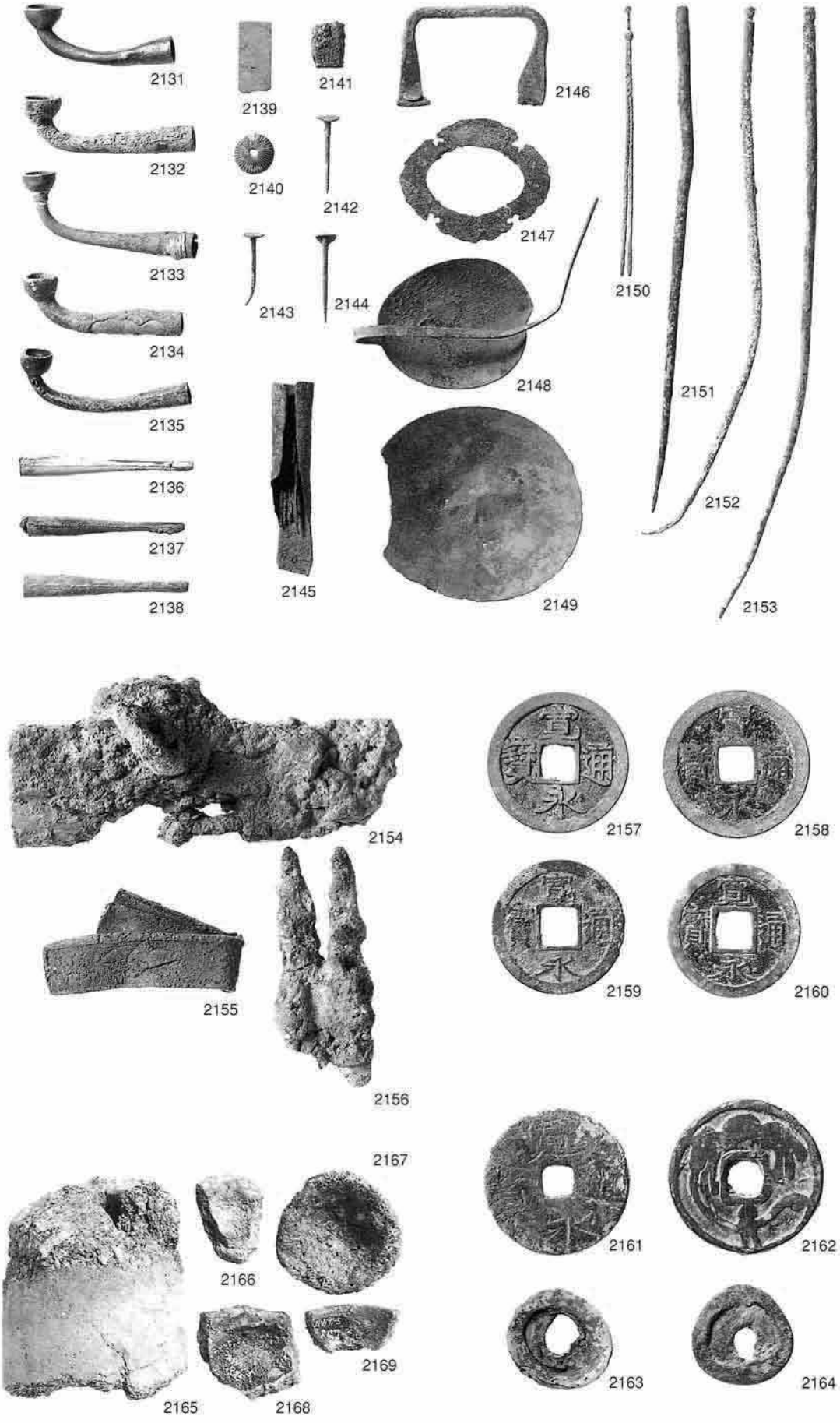


木製品　他の土壙(1810)　骨製品　SK801(2126～2129)　他の土壙(2130)

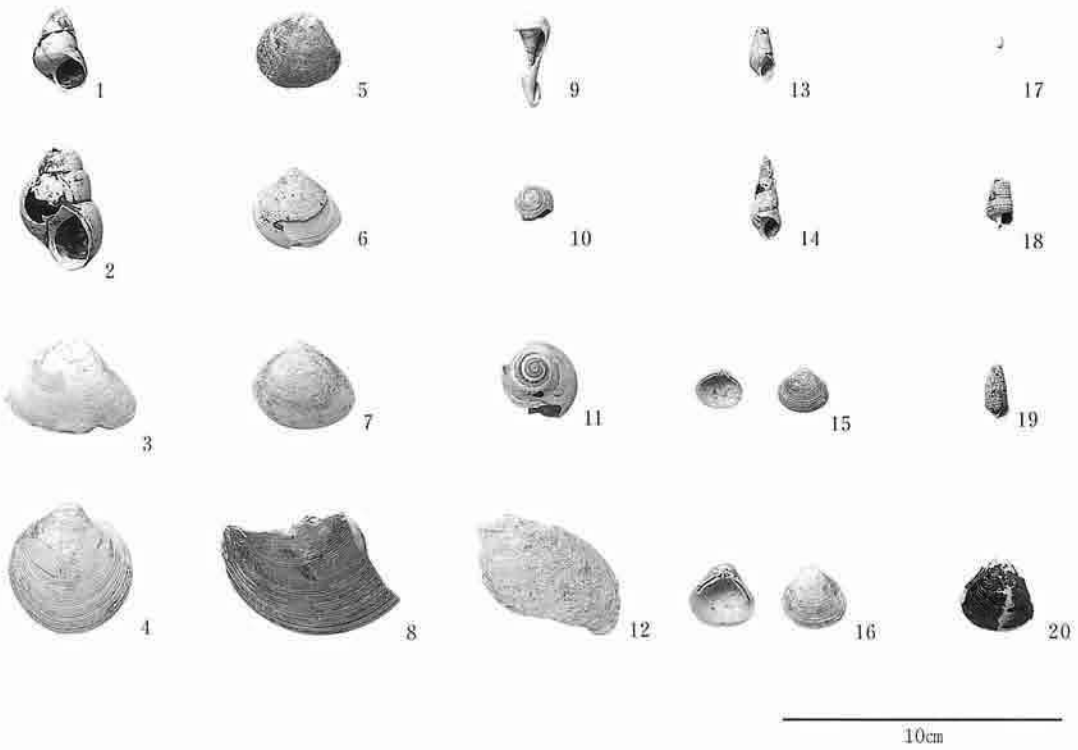


石製品　SK794(1817)　SK798(1819・1820)　他の土壙(1811～1814・1816・1818)

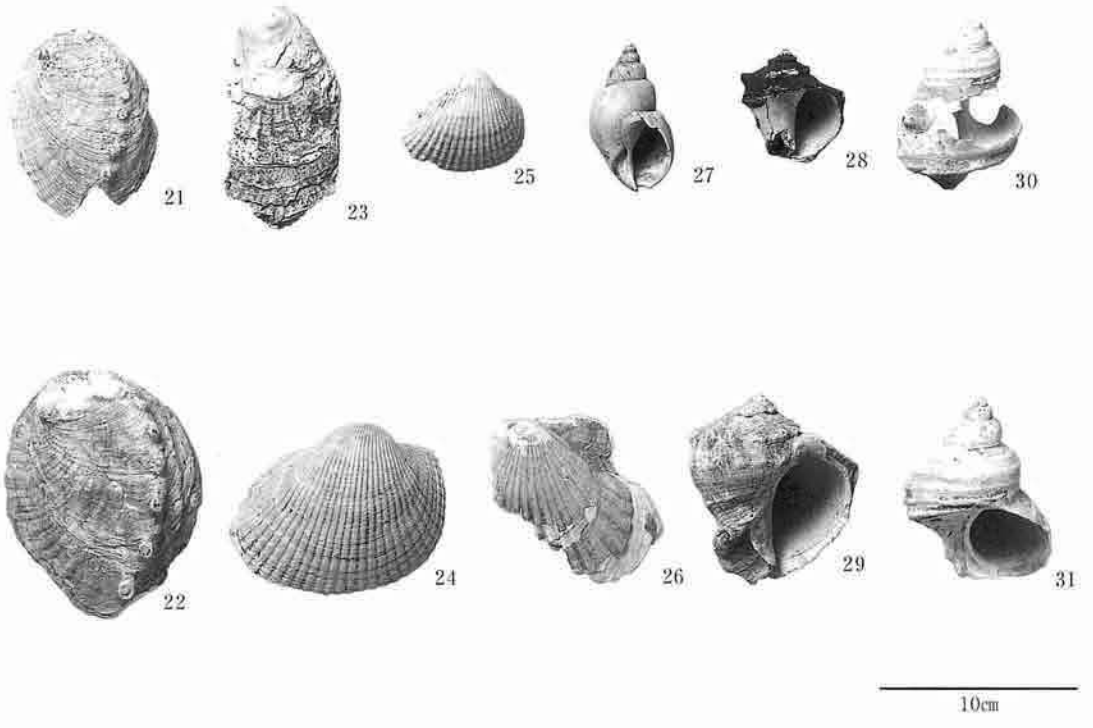
図版九四　江戸時代の金属製品・鋳造関係遺物



SK793(2141)　SK797(2134·2138·2146)　SK798(2139)　SK801(2145·2165～2169)　SK805(2133)　SK807(2137·2140·2142·2144)　SK808(2164)　他の土壙(2131·2132·2135·2136·2143·2149·2151～2157·2160·2161·2163)　第2a層(2147·2159)　その他(2148·2150·2158·2162)

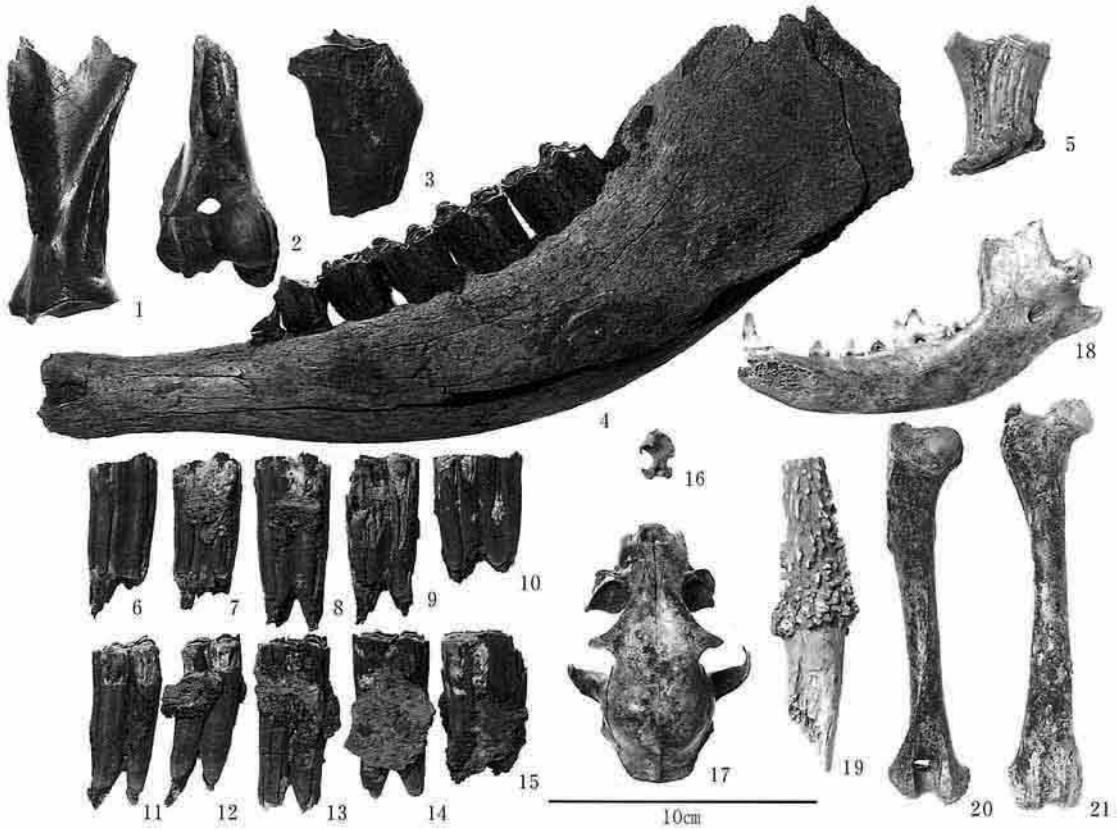


1:ヒメタニシ(第7c層)　2:オオタニシ(第7c層)　3:オキアサリ(SK801)　4:オキシジミ(SK801)　5:アサリ(SK801)　6:ハマグリ(第7c層)　7:ハマグリ(SK801)　8:カガミガイ(第7c層)　9:マガキガイ(SK800)　10:キサゴ(SK804)　11:ダンベイキサゴ(SK801)　12:オオノガイ(SK801)　13:カワニナ(SK804)　14:タケノコカワニナ(SK803)　15:マシジミ(SK804)　16:セタシジミ(SK804)　17:オカチョウジガイ(SK804)　18:ヘタナリ(第7c層)　19:カワアイ(第7c層)　20:セタシジミ(第7c層)

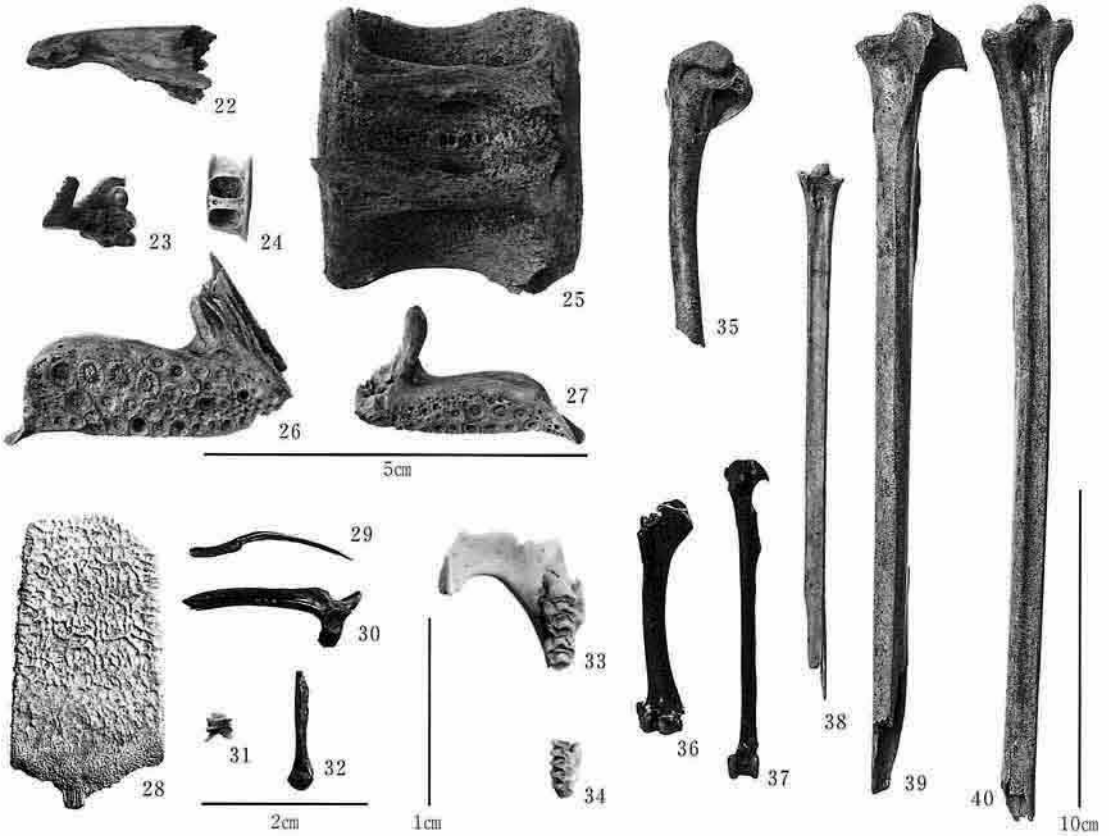


21:クロアワビ(SK801)　22:マダカアワビ(SK804)　23:マガキ(SK803)　24:アカガイ(SK805)　25:サルボウ(SK801)　26:ヒオウギ(第2a層)　27:バイ(SK801)　28:アカニシ(第7c層)　29:アカニシ(SK801)　30:棘有サザエ(SK801)　31:棘無サザエ(SK801)

図版九六　動物遺体　脊椎動物

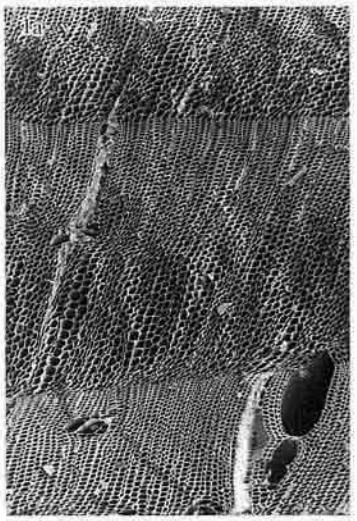


1:シカ左肩甲骨(第7a層)　2:イノシシ右上腕骨(第7c層)　3:イノシシ左腓骨(第7c層)　4:ウシ左下顎骨(第8a層)　5:シカ左落角(第7c層)　6:ウマ左下顎第2大臼歯(第7b層)　7:ウマ左下顎第1大臼歯(第7b層)　8:ウマ左下顎第4小臼歯(第7b層)　9:ウマ左下顎第3小臼歯(第7b層)　10:ウマ左下顎第2小臼歯(第7b層)　11:ウマ右下顎第2大臼歯(第7b層)　12:ウマ右下顎第1大臼歯(第7b層)　13:ウマ右下顎第4小臼歯(第7b層)　14:ウマ右下顎第3小臼歯(第7b層)　15:ウマ右下顎第2小臼歯(第7b層)　16:コウベモグラ右上腕骨(SK801)　17:ネコ頭骨(SK790)　18:イヌ右下顎骨(SK807)　19:シカ角(SK801)　20:イヌ左上腕骨(SK790)　21:イヌ右大腿骨(SK790)



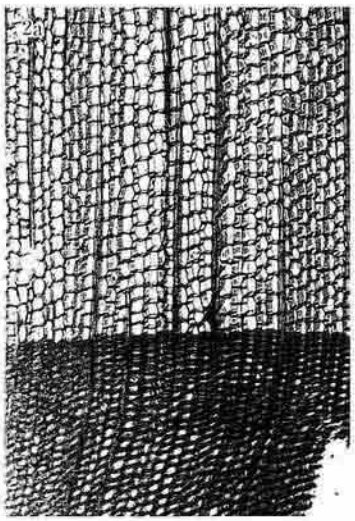
22:ハモ頭骨(SK800)　23:コイ咽頭骨(SK800)　24:サメ類脊椎骨(SK804)　25:サワラ脊椎骨(SK800)　26:クロダイ左前顎骨(SK790)　27:マダイ右前顎骨(SK801)　28:スッポン肋骨板(SK801)　29:カエル目左下顎骨(第7c層)　30:カエル目左鎖骨(第7c層)　31:ヘビ亜目脊椎骨(SK804)　32:カエル目右上腕骨(第7c層)　33:クマネズミ右上顎骨(第1第2大臼歯付　SK804)　34:ハタネズミ左下顎第1大臼歯(SK804)　35:ガンカモ科上腕骨(SK790)　36:ハシボソガラス右上腕骨(第7c層)　37:ハシボソガラス左脛骨(第7c層)　38:サギ科(小型の種類)中足骨(SK790)　39:タンチョウ属左脛骨(SK807)　40:タンチョウ属右中足骨(SK807)

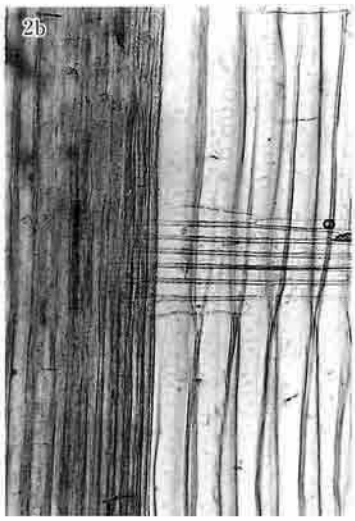
図版九七　木材の顕微鏡写真

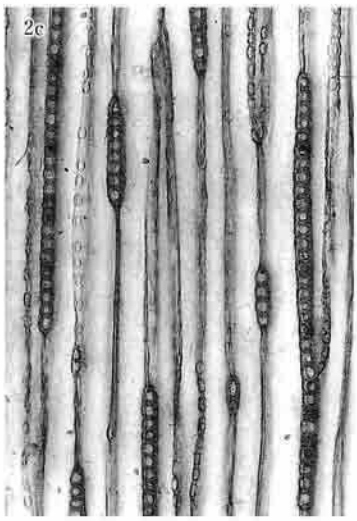


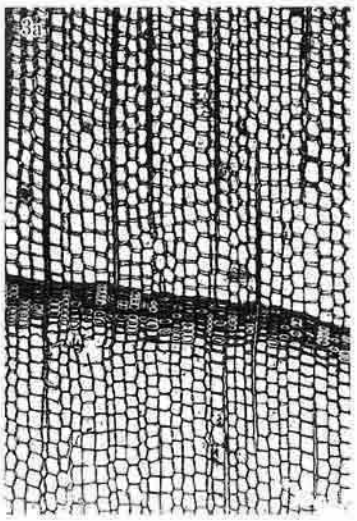


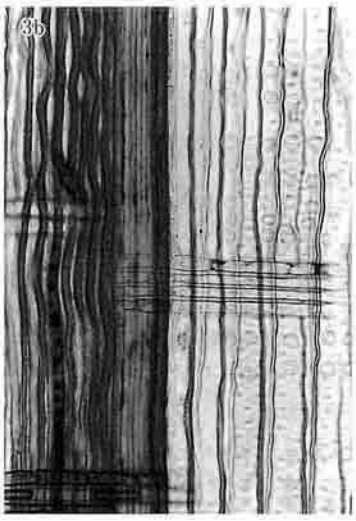


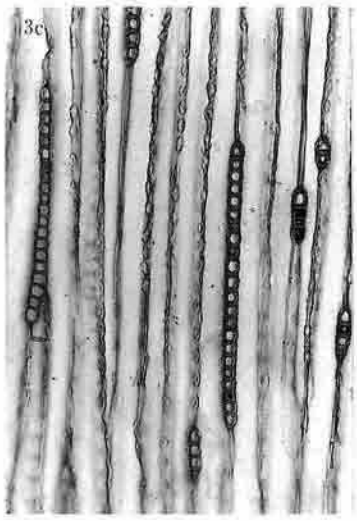






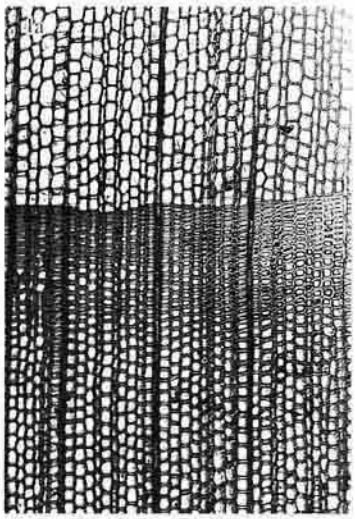




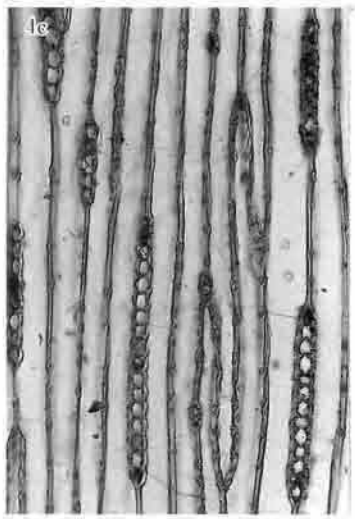


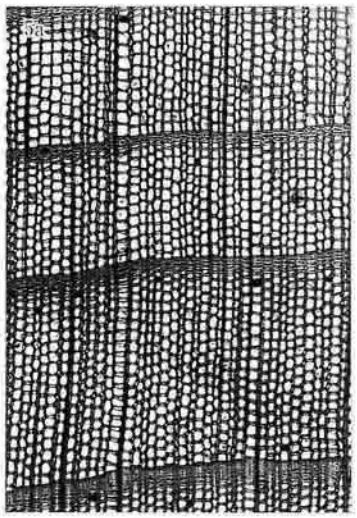
1.マツ属複維管束亜属の一種(135)
2.モミ属の一種(26)
3.スギ(8)
a:木口(×100)、b:柾目(×100)、c:板目(×100)
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右

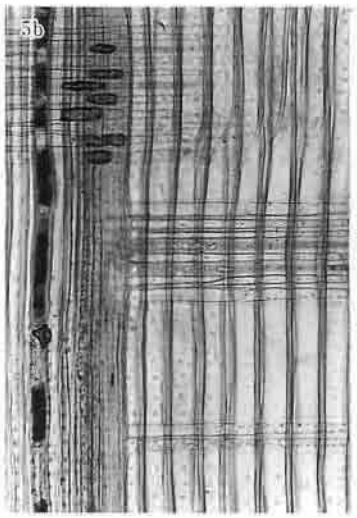
図版九八　木材の顕微鏡写真

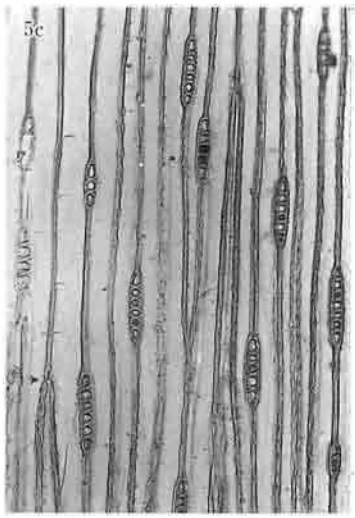


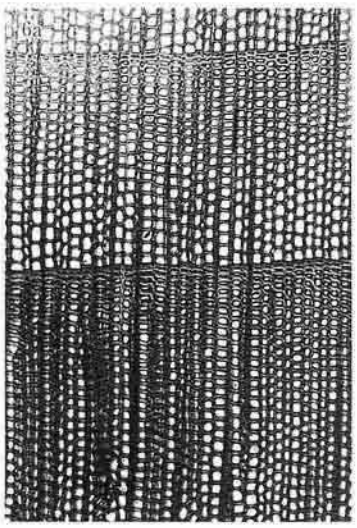


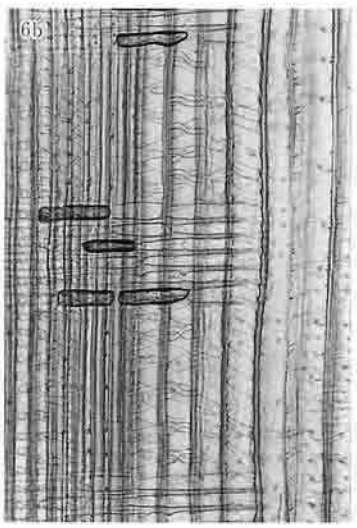


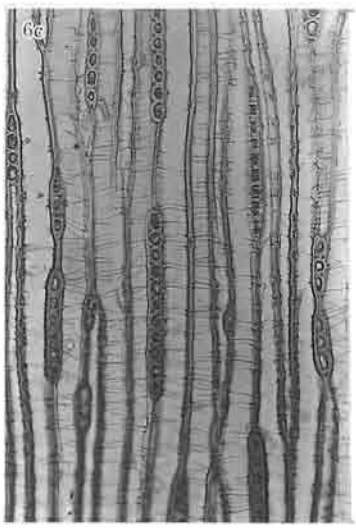






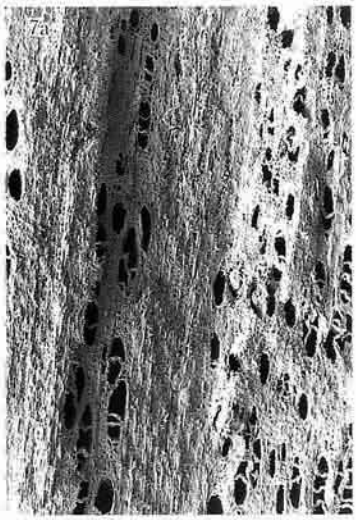




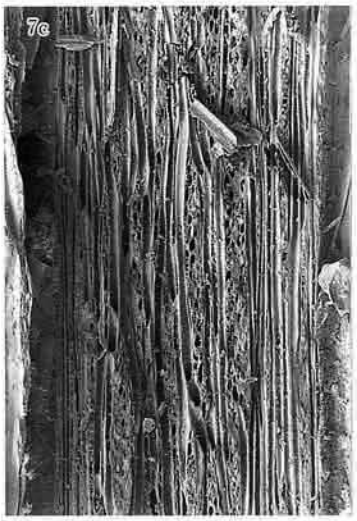


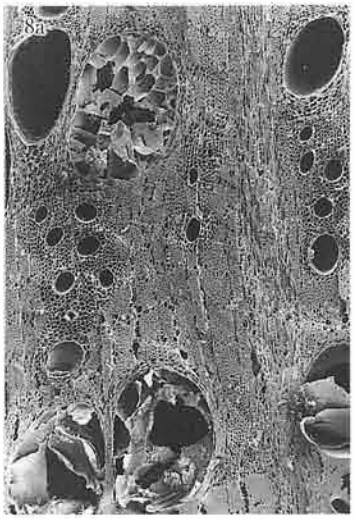
4.コウヤマキ(119)
5.ヒノキ属の一種(9)
6.カヤ(60)
a:木口(×100)、b:柾目(×100)、c:板目(×100)
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右

図版九九　木材の顕微鏡写真



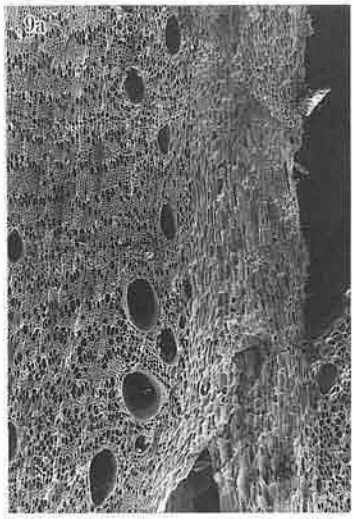










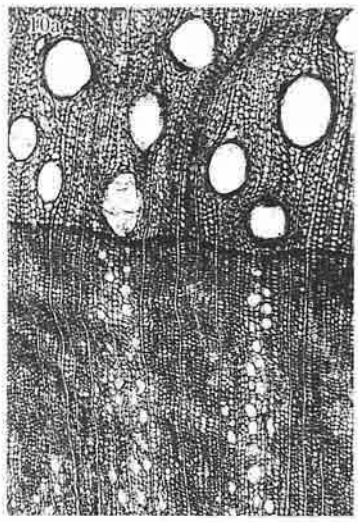


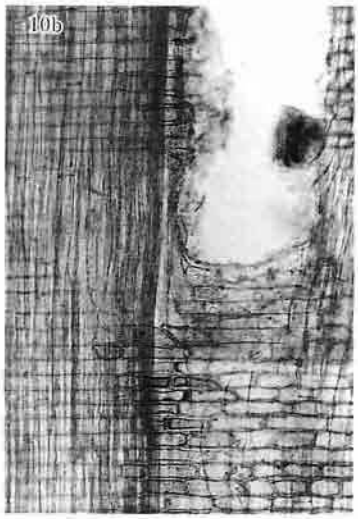


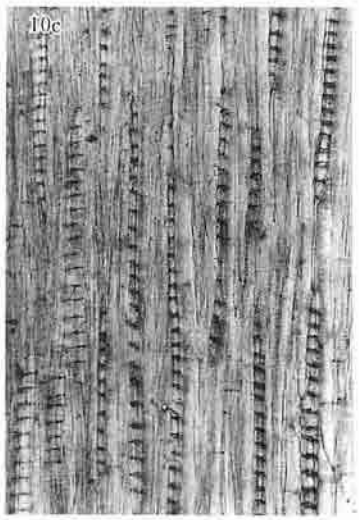


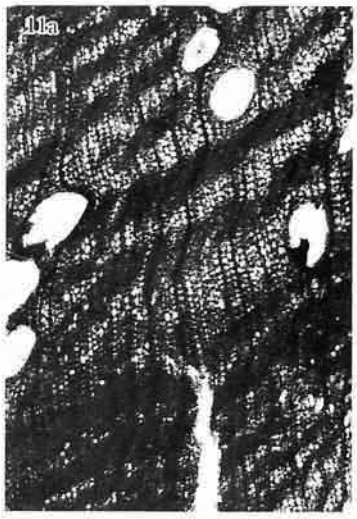
7.クマシデ属類似種(140)
8.コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種(138)
9.コナラ属アカガシ亜属の一種(133)
a:木口(×100)、b:柾目(×100)、c:板目(×100)
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右

図版一〇〇　木材の顕微鏡写真



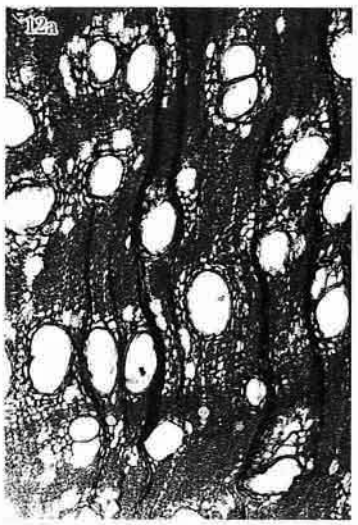


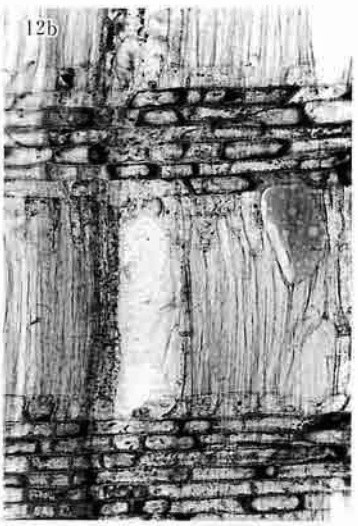


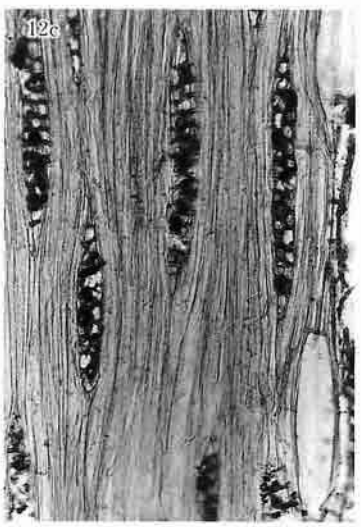




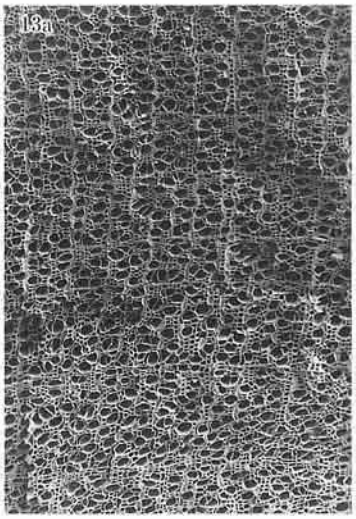






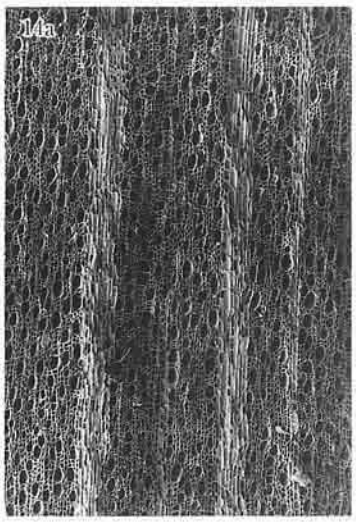


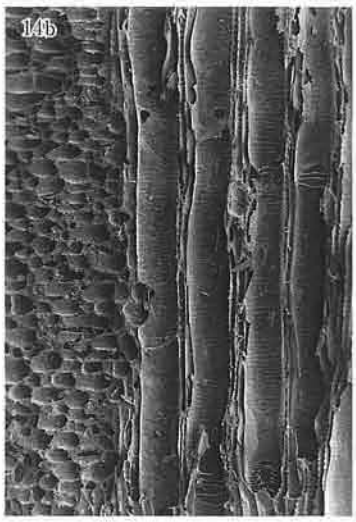
10.クリ(65)
11.シイ属の一種(50)
12.クスノキ(2)
a:木口(×100)、b:柾目(×100)、c:板目(×100)
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右

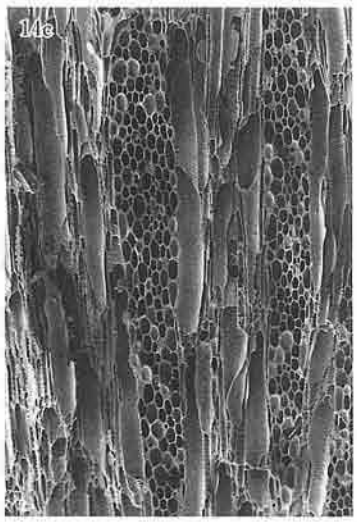


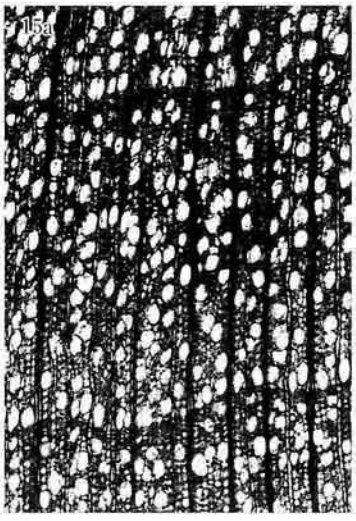


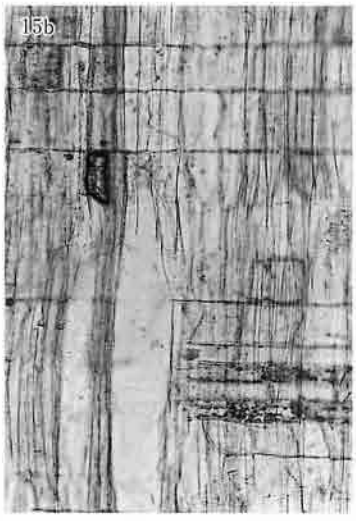






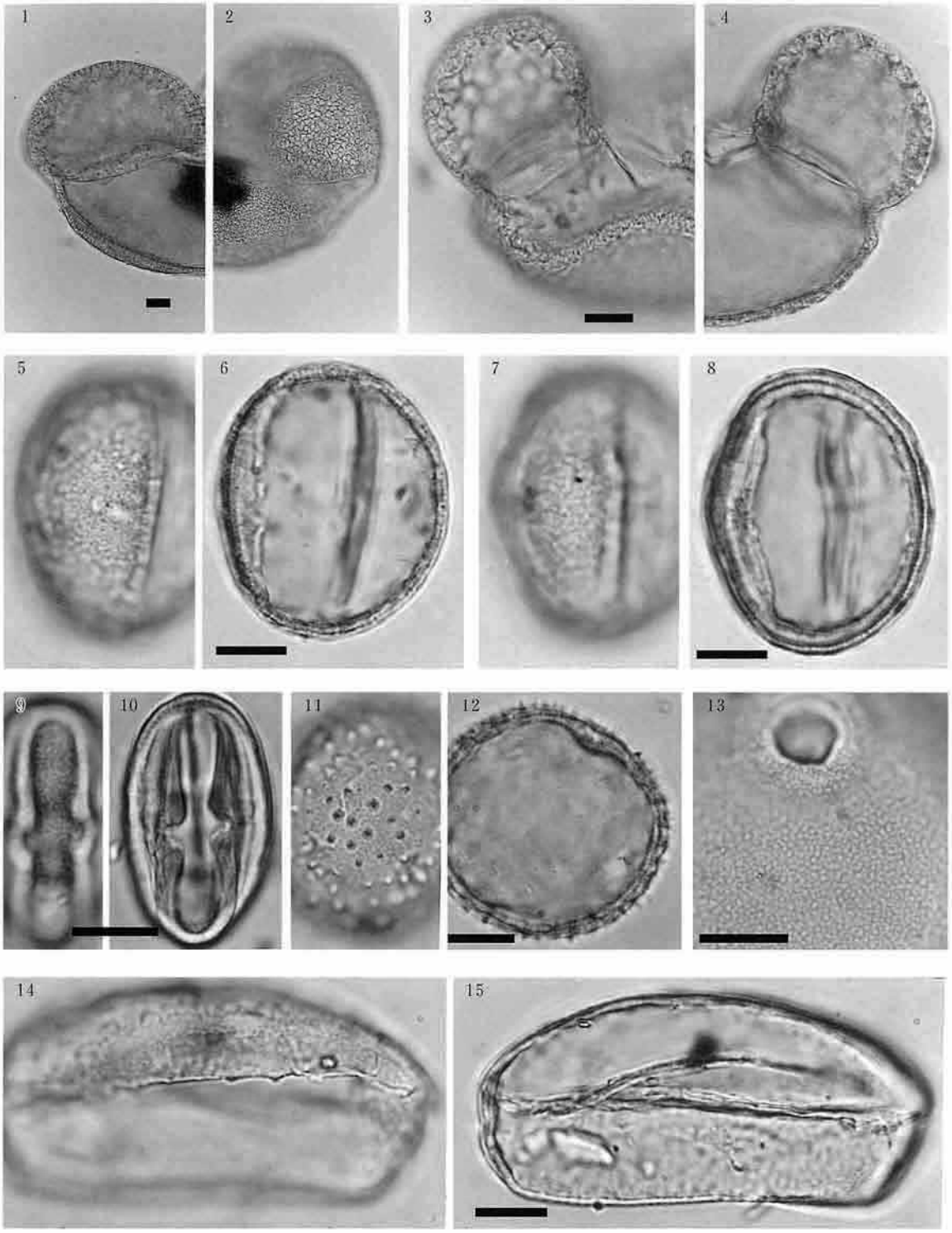




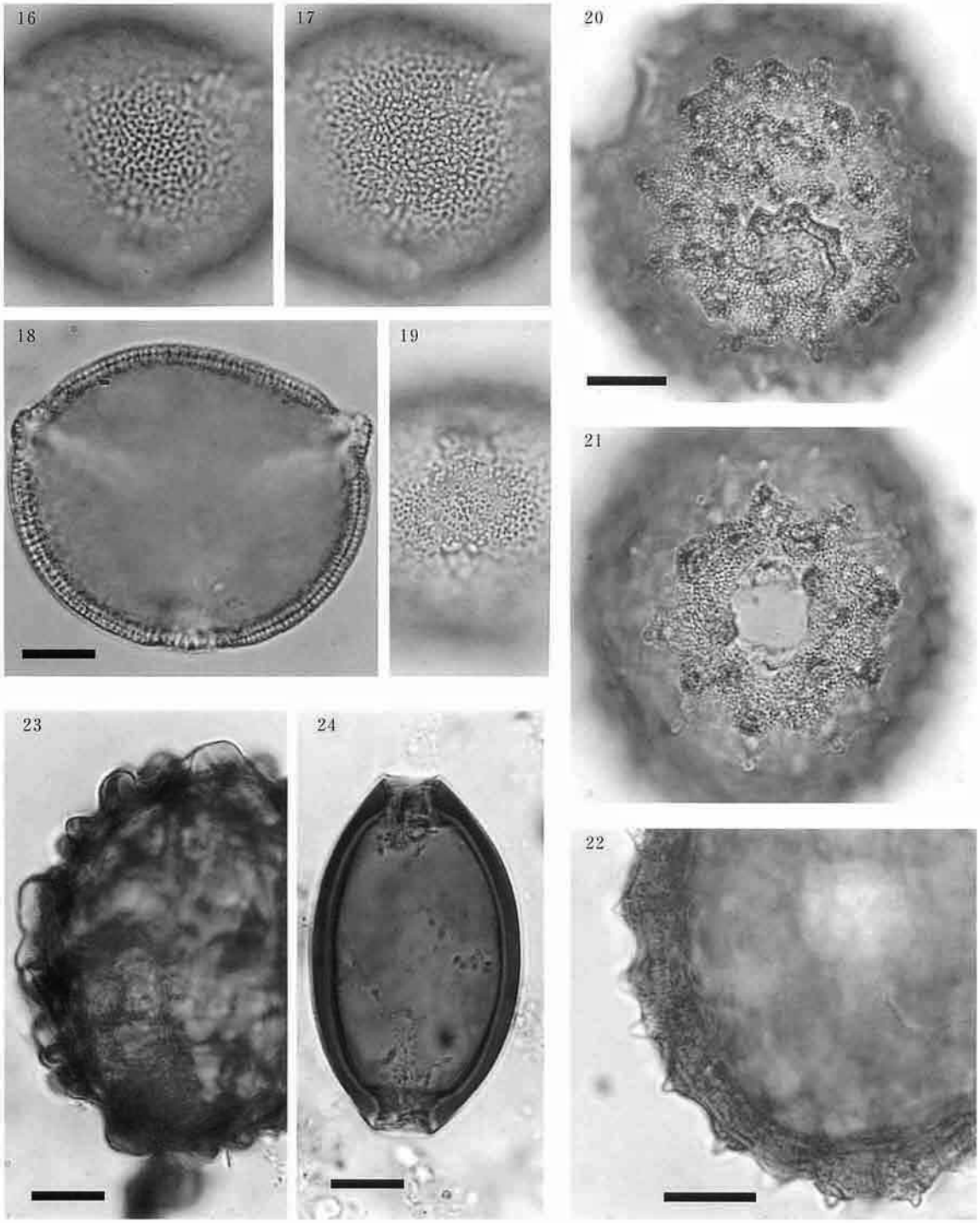




13.サカキ(127)
14.スノキ属類似種(126)
15.ハイノキ属の一種(46)
a:木口(×100)、b:柾目(×100)、c:板目(×100)
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右

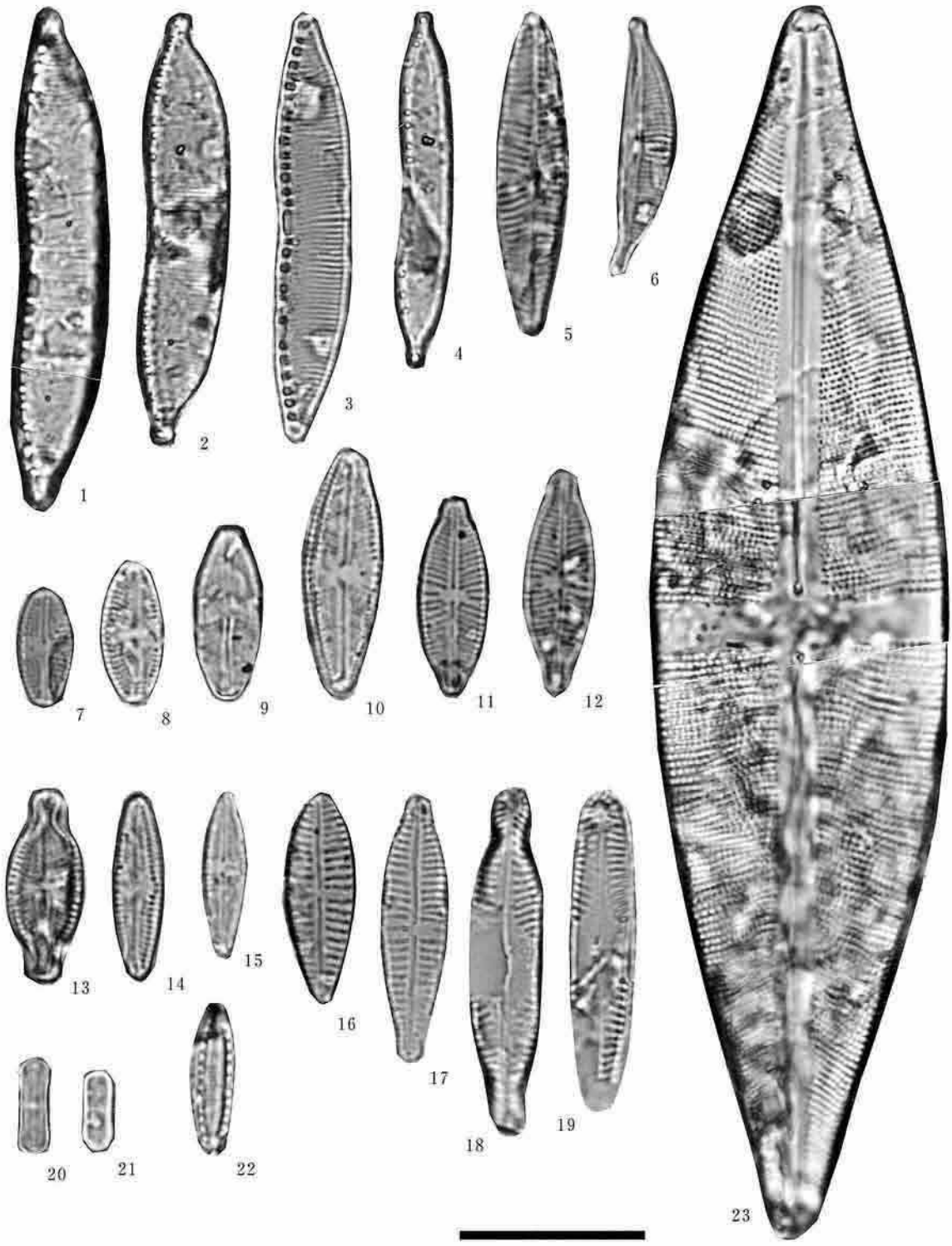


1・2：モミ属*Abies*（SG301 №06）AFR.MY1119　3・4：マツ属複維管束亜属*Pinus* subgen. *Diploxylon*（SG301 №06）AFR.MY1118　5・6：コナラ属コナラ亜属*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*（SD301 №06）AFR.MY1123　7・8：コナラ属アカガシ亜属*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*（SD301 №04）AFR.MY1120　9・10：シイノキ属*Castanopsis*（SG301 №09）AFR.MY1115　11・12：オモダカ属*Sagittaria*（SG301 №09）AFR.MY1117　13：イネ科（イネ属型）Gramine（*Oryza* type）（SG301 №09）AFR.MY1116　14・15：ミズアオイ属*Monochoria*（SG301 №09）AFR.MY1124　（スケールは10μm）

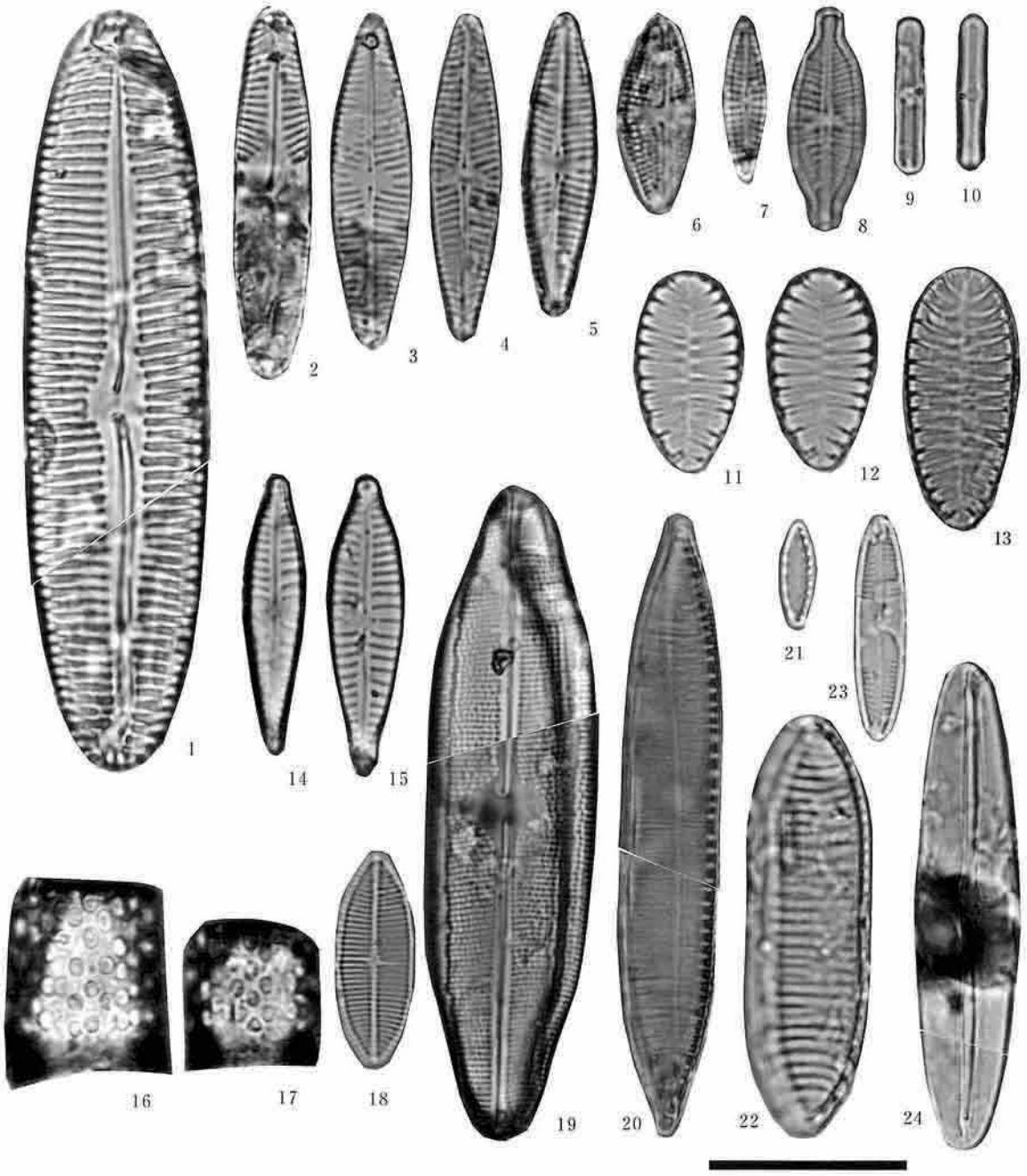


16～19:カタバミ属*Oxalis*(SD301 №05)AFR.MY1122　20～22:ベニバナ属*Carthamus*(SD301 №04)AFR.MY1121　23:回虫卵*Ascaris lumbricoides*(SG301 №08)　24:鞭虫卵*Trichuris*(SG301 №12)

(スケールは10μm)

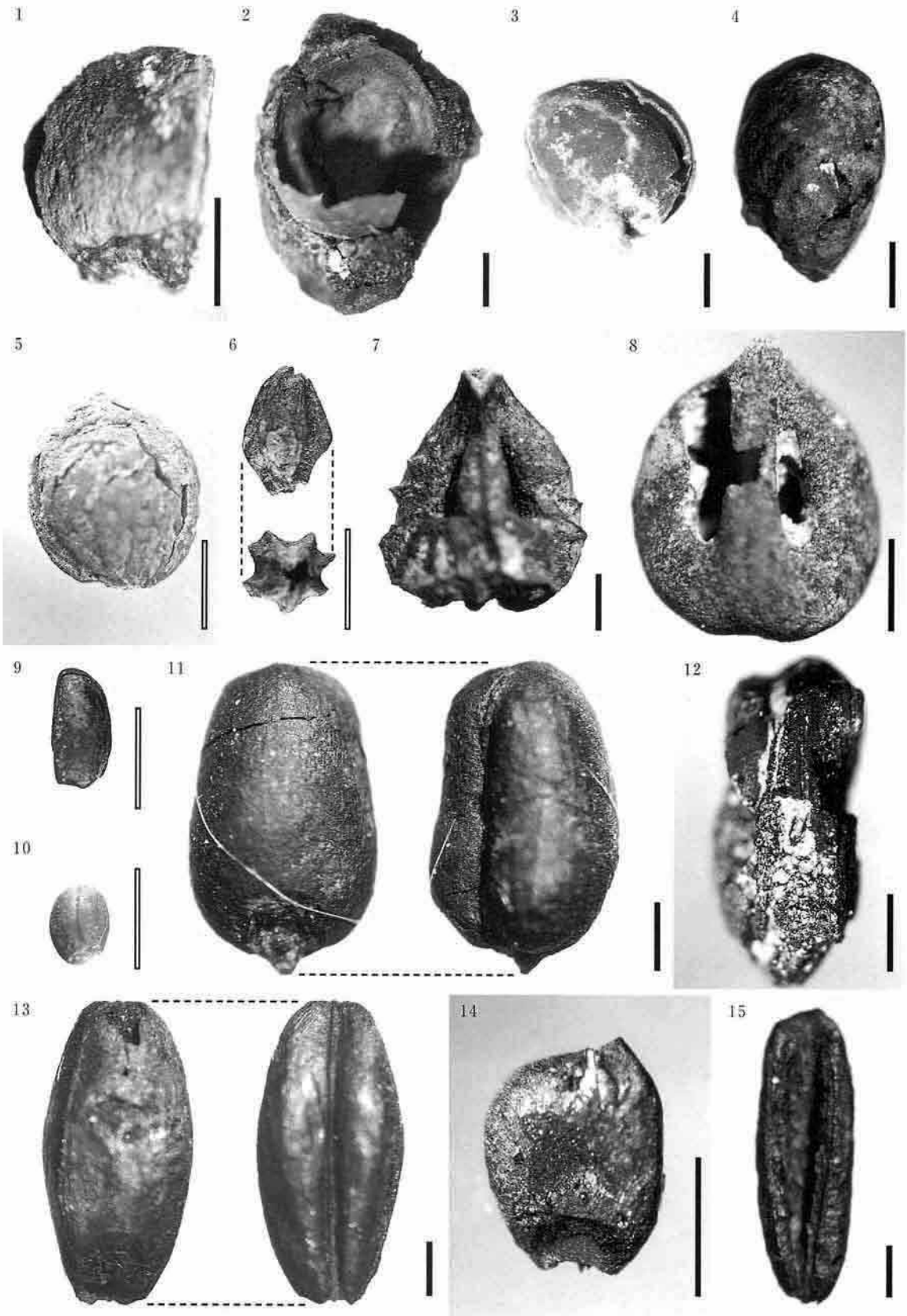


1～4：*Hantzchia amphioxys*（1・2：第7c層、3・4：SD301 No03）　5：*Achnanthes lanceorata*（SG301 No06）　6：*Amphora veneta*（SD301 No03）　7～9：*Navicula mutica* var. *mutica*（SD301；7：No05、8・9：No03）　10：*Navicula mutica* var.*ventricosa*（第7c層）　11・12：*Placoneis elginensis*（SG301；11：No07、12：No06）　13：*Navicula constans* var. *symmetrica*（SD301 No03）　14：*Diadesmis perpusilla*（第7c層）　15：*Caloneis* sp.（SG 301 No03）　16・17：*Gomphonema parvulum*（16：SG301 No07、17：SD301 No04）　18：*Pinnularia lundi*（SD 301 No04）　19：*Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata*（第7c層）　20・21：*Diadesmis contenta*（第7c層）　22：*Nitzschia microcehpala*（第7c層）　23：*Stauroneis phoenicenteron*（SG301 No06）　（スケールは10μm）

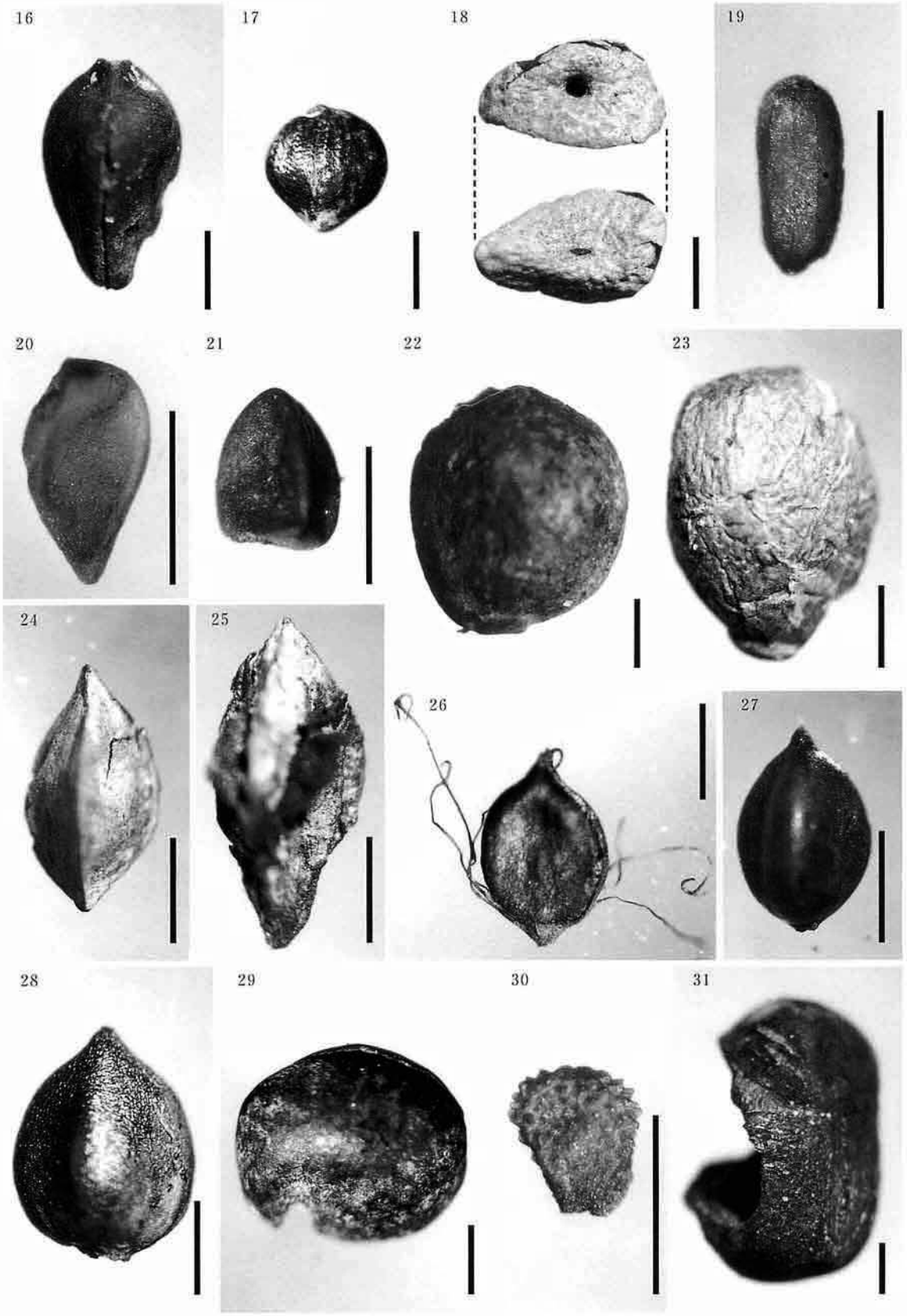


1：*Pinnularia viridis*（SG301 №07）　2：*Pinnularia obscura*（SG301 №06）　3：*Navicula libonensis*（SG301 №08）　4・5：*Navicula cari*（4：SG301 №06、5：SG301 №07）　6：*Navicula mutica* var.*mutica*（SG301 №08）　7：*Navicula cincta*（SG301 №06）　8：*Placoneis elginensis*（SG301 №06）　9・10：*Diadesmis contenta* fo.*biceps*（SG301 №06）　11・12：*Surirella angusta*（SG301 №06）　13：*Surirella minuta*（SG301 №07）　14：*Gomphonema angustum*（SG301 №08）　15：*Gomphonema parvulum*（SG301 №08）　16・17：*Aulacoseira pensacolae*（第９層泥炭層；16：PU、17：PL）　18：*Fragilariforma constricta* var.*quadrata*（SG301 №08）　19：*Neidium affine* var.*ceylonicum*（SG301 №08）　20：*Nitzschia normanii*（SG301 №08）　21：*Nitzschia ovalis*（SG301 №06）　22：*Tryblionella levidensis*（SG301 №07）　23：*Caloneis bacillum*（SG301 №06）　24：*Frustria rhomboides*（SG301 №06）　（スケールは10μm）

図版一〇六　大型植物化石

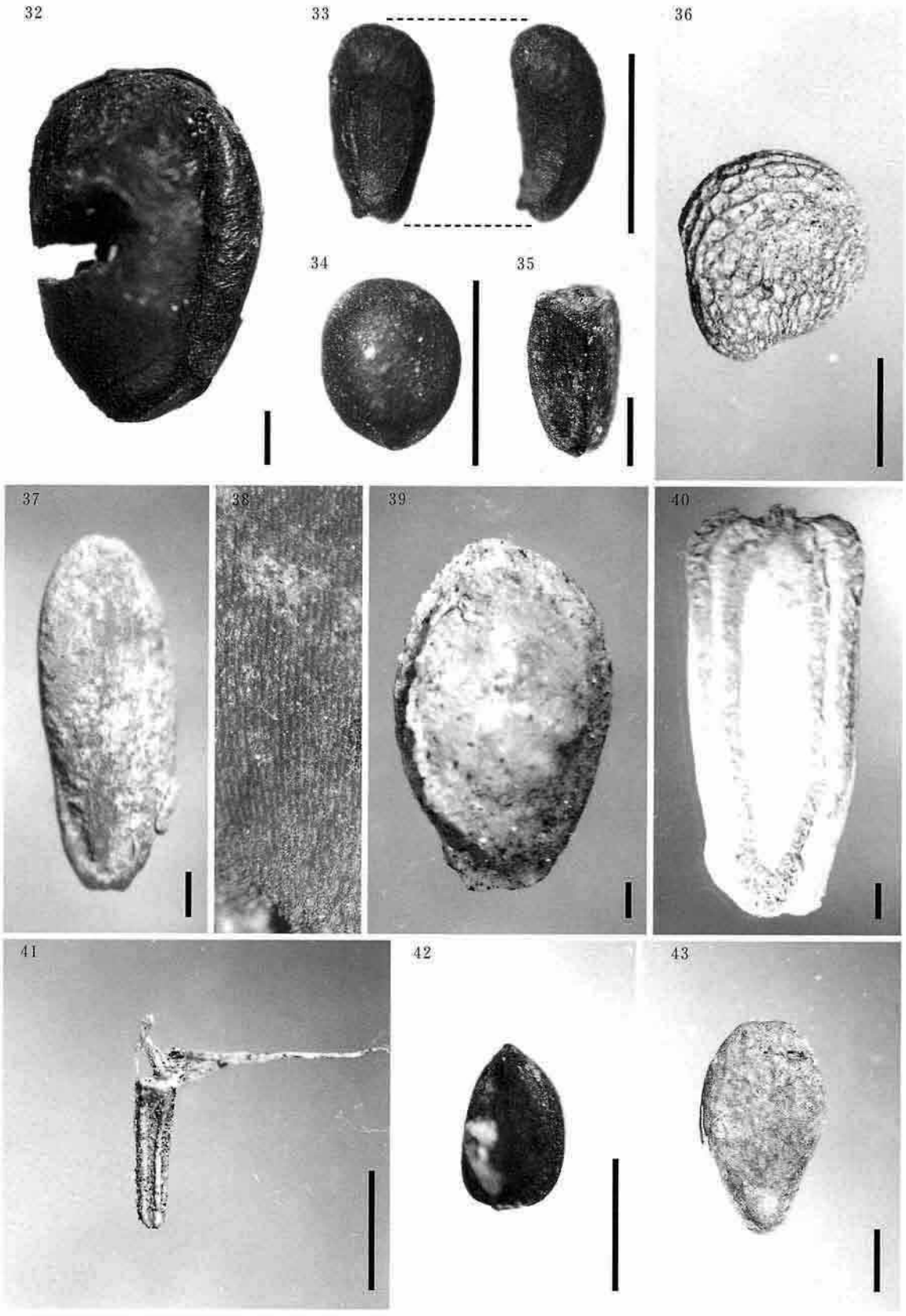


1:クリ、果皮破片(№17B)　2:エノキ、果実破片(№03)　3:エノキ、内果皮(№03)　4:サンショウ、果実(SK800)　5:モモ、核(№04)　6:センダン、内果皮(SK800)　7:ツタ、種子(SK800)　8:ブドウ属、種子(第7c層)　9:カキノキ、種子(SK804)　10:エゴノキ、内果皮(№04)　11:コムギ、炭化種子(SK801)　12:ムギ類、炭化種子(№17B)　13:オオムギ、炭化種子(SK807)　14:キビ、炭化種子(№08)　15:イネ科A、炭化種子(SK800)　　()内は産出試料、スケールは1㎜、二重線は1㎝



16:ウキヤガラ、果実(№17B)　17:ホタルイ属、果実(№17B)　18:ヤブミョウガ、種子(SK801)　19:コナギ、種子(№03)　20:ミズ属、種子(№03)　21:クワクサ、種子(SK800)　22:アサ、種子(第7c層)　23:アサ、種子(第7c層)　24:ギシギシ属、果実(№05)　25:ギシギシ属、花皮片付き果実(№05)　26:サナエタデ近似種、果実(№08)　27:ネバリタデ近似種、果実(№17B)　28:ヤナギタデ、果実(№08)　29:ヤマゴボウ、種子(SK801)　30:ノミノフスマ近似種、種子(№03)　31:アズキ、炭化種子(SK800)

( )内は産出試料、スケールは1㎜



32:アズキ、炭化種子(SK800)　33:キランソウ属、果実(第7c層)　34:トウバナ属、果実(№03)　35:オドリコソウ属、果実(SK800)　36:ハダカホオズキ属、種子(№05)　37:キュウリ属メロン仲間、種子(№05)　38:キュウリ属メロン仲間、種子表面拡大(№05)　39:カボチャ、種子(SK800)　40:ヒョウタン、種子(№04)　41:ムカシヨモギ属、果実(SK801)　42:不明K(SK800)　43:不明L(SK800)

( )内は産出試料、スケールは1㎜

難波宮址の研究　第十一

ISBN4-900687-45-6

2000年3月31日　発行©

編集・発行　財団法人　大阪市文化財協会

〒540-0006　大阪市中央区法円坂1-1-35

（TEL 06-6943-6833　FAX 06-6920-2272）

印刷・製本　岡村印刷工業株式会社

〒558-0004　大阪市住吉区長居東3-4-17

The Excavation Reports
of
the Naniwa Palace Site

(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume XI)

A Report of Excavations
undertaken at the Government Offices area
to the west of the Imperial Residence
in the Former Naniwa Palace
between 1991 and 1998
in Osaka, Japan

March 2000

Osaka City Cultural Properties Association

The Excavation Reports
of
the Naniwa Palace Site

(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume XI)

A Report of Excavations
undertaken at the Government Offices area
to the west of the Imperial Residence
in the Former Naniwa Palace
between 1991 and 1998
in Osaka, Japan

March 2000

Osaka City Cultural Properties Association